

Assault Lily～御使いの妹

ラッファ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

4月、都内にある神庭女子藝術高校に一人のリリイが入学する

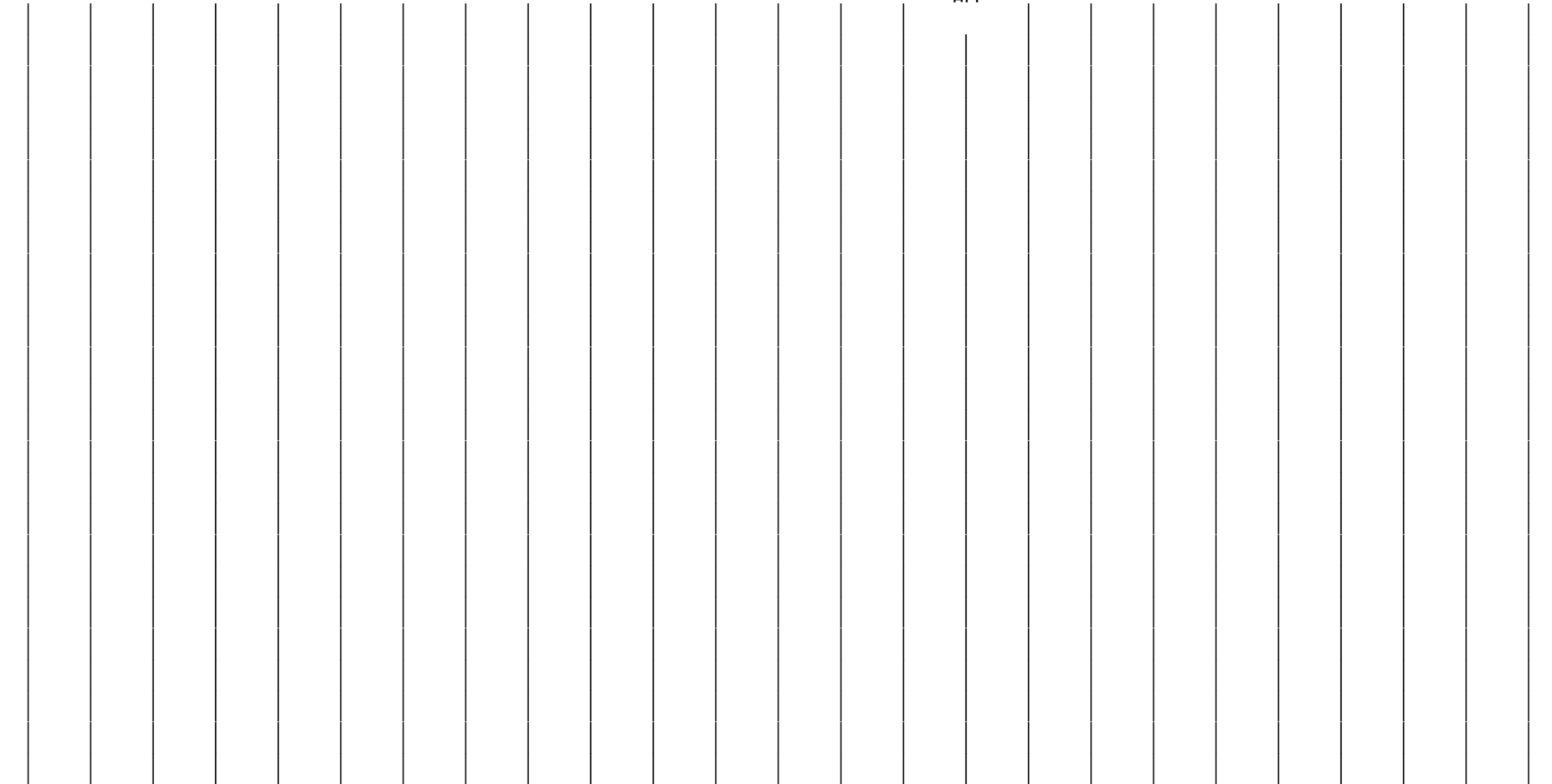
ある人曰く、彼女は世界最高峰リリイの妹

ある人曰く、場所が違えどトップレギオンに選ばれて当然のリリイ「皆は私をあの人の妹って言うけれど、私は私。レアスキルも誰もが憧れる花形じゃないけれど皆よろしくね☆」

目次

第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
120	109	102	96	91	84	78	73	70	65	58	53	49	45	39	35	30	25	20	16	12	7	4	1

第49話 第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話 第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話



292 286 280 272 265 254 246 238 227 219 212 207 203 195 188 183 178 172 166 161 157 151 144 139 127

第74話 第73話 第72話 第71話 第70話 第69話 第68話 第67話 第66話 第65話 第64話 第63話 第62話 第61話 第60話 第59話 第58話 第57話 第56話 第55話 第54話 第53話 第52話 第51話 第50話

498 491 484 478 469 462 455 444 433 426 418 412 403 395 386 378 371 360 353 343 335 326 318 312 304

第
80
話

第
79
話

第
78
話

第
77
話

第
76
話

第
75
話

557 549 541 528 519 508

第1話

「おお、あのヒュージいいフォルムだねー!!」

あーちゃん、定盛、スケッチするから足止めよろしく!」

「ヒュージをスケッチ!? まあ、私達絵画科だし気持ちはすっごい分かるし、足止めぐらいならなんとかなるからやっちゃうけど。あ、定盛ちゃん暇なら手伝ってー」

「いや、二人して何言ってるの!?! あと定盛じゃなくてひめひめ!」

彼女達が相対しているのは人類の敵であるヒュージ

ヒュージとの戦闘は常に命がけであり1つの判断のミスで命を落とす事もある。

のだがこの戦場に限っては本来聞こえてくる悲鳴、流れるリリイの血液などは一切無い

的確とは言えなくても攻撃を回避し反撃を叩き込む

場合によつては二人の上級生が確実に撃破しているからだ

「いいな、いいなー、あのヒュージもいいなー!」

あーちゃん、定盛、今度はあのヒュージもお願い」

「いや、だから定盛言わないで。私はひめひめ! これじゃ歌えないじゃない! 制服も泥で汚れちゃうし最悪よ!」

「…あれ? そういえば紅巴ちゃんは?」

あーちゃんと呼ばれた少女が先程から声が聞こえないもう一人の一年生の仲間を探すため方が一に備え”姿を消しつつ”付近を探索すると少し歩いたところで彼女よりも長い金髪の髪の毛の少女が、探していた女性を抱きかかえながら何処か困惑していた様子で立っていた

「あ、高嶺様、紅巴ちゃん抱きかかえてますけど何かあったんですか?? 負傷…つて感じには見えませんが」

「…、天野さん。私にも何がなんだか…ヒュージに囲まれてる所を助けたら突然気を失っちゃって攻撃は受けていないのだけけど…」

抱えられた紅巴をよーく観察してみる

ダメージを受けて、普通ならば呼吸が乱れたり苦しそうにしている

のが当たり前だが、抱きかかえられている彼女は満面の笑みを浮かべ、安らかに気を失っている

そして時折、「土岐は…土岐は…幸せです」などと呟いており怪我などの不安は一切感じさせないと共に1つの結論にたどり着く

「ああー…確かに高嶺様、綺麗だからなあ…そら感激して気失うわ…」

「天野さん？大丈夫??」

「あつ、はい。大丈夫ですよ。それよりもどうします??紅巴ちゃん抱きかかえての戦闘は流石に厳しいでしょうし、気持ちよく気を失って紅巴ちゃんには申し訳ないけれど私が代わりに抱えます??」

そう、提案すると首を軽く横に振りつつ大丈夫だと告げるのと同時に遠くの方で声がする

「あーちゃーん、どこー??もうすぐ倒しおわっちゃうよー」

「いーまいーくよー!!。と言う訳で高嶺様、また後で」

そう告げると彼女は来た時と同じように瞬きするまもなく突然姿を消す。

それを目の前で見た彼女は

「(なる程、あれが天野さんのレアスキル。本当に今年は個性的な子達が多いわね。)」

そしてそれらの出来事を少し離れた所で見ていたもう一人の少女は困惑と戸惑い、色々な感情がこめてこう吐き出す

「これは…だめね…ええ、本当に…」

これが神庭女子藝術高校のトップレギオン、グラン・エプレの初陣の日である

ちなみに、この日の戦闘記録は

負傷者なし

気絶者1名(戦闘以外の要因)

使用CHARMの損害なし

このように記されていたとかそうでないとか

第2話

2日前

「(ここが今日から私が過ごすガーデンかあ。私の知ってるガーデンとは雰囲気も何もかも全然違うなあ。とは言えあの御台場と共闘してるだけあって所属リリーの能力は高いって評判だし。リリーは見かけによらないってやつかな)」

そんな事を考えながら、入学式が行われる講堂に向かっていると、正面からこのガーデンの教導官であろう女性が声をかけてくる

「ごきげんよう。貴方が天野さん…で良いかな?」

「ごきげんよう。私が天野です」

「良かった。入学式が終わったら貴方は教室に行く前に、この講堂に行ってほしいの。詳しい話はそこでするわ。」

「わかりました」

そんなやりとりをした後、彼女は講堂で入学式を迎える

校長先生を始めとした教員の挨拶と生徒代表者の挨拶、等々どこにでもあるような内容の入学式を終えた後、彼女は事前に指定された講堂に向かう

向かう途中、窓の外を見ると広がるのは広大な自然とそれにうまく溶け合っているガーデンの建物

「(あそこは見てるこっちの立場から言うなら生徒の質もあって、お嬢様がすごす箱庭ってイメージの作りだけどこっちは皆が楽しく過ごす場所って感じのイメージあるなー。)」

校舎の敷地内には花壇やベンチなども多数存在し、授業が本格的に始まれば多くの生徒がここで過ごす事になる事は想像できる

「(このガーデンなら上手くやれそう。校風とか考えても私はこっち向きだわ)」

そんな事を考えながら歩いていると指示された講堂に到着し、ドアを開けて中に入る

すると、一人の少女がすでに着席していた

「あ、どうも。貴方も呼びだされた感じ??」

「あつ、…はい。えつと貴方は？」

「ああ、名乗って無かったわね。私は…」

自己紹介をしようとしたのも束の間、すぐにドアが力強く開かれる
「いっちばーん！…じゃない。ちえー。」

「ちよつと、灯莉！ドアをそんな強く開けないの！…つてあら？貴方
さっきの…もう一人は初めて見たけれど」

2つのお団子が特徴的な少女と髪を結んだ少女の二人が入室して
くる

ここにいる3人は先程の入学式の際、話してはいないが見かけた感
じがあるのでおそらく同学年で有る事は簡単に予想できる

しかも灯莉と呼ばれた少女に関して座席を確認する際、クラスの
名簿にもあつた記憶があるため、自身と同じ学科で有る事も予想され
る。一方、あとの二人は近くにいなかったため違う学科で有る事が予
想される。

「同じ学年が四人…私と同じく東京都外出身者あつめての基本的な
戦闘方法とかのレクチャーかな？。出身地によつちや戦闘方法や場
所がめちやくちや変わってくるし…でも少ないよね？いや、鎌倉のあ
そこら辺が出身地ごちやませになつてただけで大体こんな感じ??」

彼女の出身はここではなく横浜

東京都の戦い方というのも進学が決まった際に映像を交えて教え
られただけで、直接見てはいない。

入学が決まった際に今一度レクチャーされる、というのも間違つて
はいないと思うのだがそれにしても人数が少なすぎると思う。

このガーデン所属リリーの都内出身者の割合を把握しきれてはい
ないがガーデンの規模を考えても最低二桁人数はいてもおかしくは
無いというのが彼女の予想だ

「(もしくは沢山いたけれど根こそぎ”あそこ”に刈り取られた…か
な？勿論都内の他のガーデンにいった可能性もあるけど)」

そんな事を考えているといつの間にか上級生と思われる二人の生
徒が入室し、直後に校長先生も入ってくる

「あの…私達ここにいと邪魔じゃないです??一旦退出させていただ

いて…」

「(私もそう思う。新入生レクチャーの場所ブッキングしてるじゃん。)」

今日が入学式という特別な日であるが特別なのは新入生だけではない

上級生にしてみても新入生の指導方針や今年度の打ち合わせレギオンメンバーの確認などやるのがたくさんある

その中にはガーデン上層部との打ち合わせもあるし、講堂を使用することもあるであろう

ブッキング等も当然想定される出来事だ

所が目の前にいる人物は小さく笑みを浮かべると、彼女たちに向かって語りかける

「いえ、貴方達にはここにいても変わらないと困ります。

あまのかいり天野海濤さん、さだもりひめか定盛姫歌さん、たんばあかり丹羽灯莉さん、ときくれは土岐紅巴さん。」

ちなみに、彼女にしてみれば全員の名前を聞いたのはこれが初めてであったりする

「ひめか達を呼んだのは校長先生なの?」

「(ますます分からん。ってか土岐さんだっけ?あの子さつきから息荒くない?!?!? いや、私の名前聞いたらそうなるのもおかしくは無いけれど…)」

「(もしや、天野ってあの天野ですか?!いや、単に同姓の可能性も…はうう!気になりますう…!!)」

三人がそれぞれ別々な事を考えていると、お構いなしとばかりに話が進んでいく

「(んー?定盛もとつきーもどうしたんだろう。あーちゃんの事知ってるのかな??あ、あーちゃん呼び気になってくれるかなあ。きつと気に入ってくれるよね?)」

…一人だけ良く分かって無い生徒も居たりしたのはここだけの話

第3話

「まずはレギオンの任命式を行います。」

今叶^{こんかなほ}星さん、貴方には今年もグラン・エプレの隊長をお願いしますね。

トップレギオンとしての誇りを持ち、リリイとしての使命を果たしながら、神庭女子藝術高校の生徒たちの良き手本となる事を期待しますよ。」

「そして、宮川^{みやがわたかね}高嶺さん。貴方もグラン・エプレのメンバーとして叶星さんを支えてあげてください。」

去年以上にやる事が多くなるとは思いますが、貴方達なら出来る
と信じていますよ」

「はい。そのお言葉。しかと胸に刻みます。」

「かしこまりました。」

二人の少女にそう告げる

片方は先程の入学式で生徒代表挨拶を行っていた人物であり、優秀
なりリイで有る事は予想できる

そしてもう一人も実力者で有る事は立ち振る舞いから相当な実力
者で有る事は容易に想像できる。

「(なる程、これがトップレギオンの任命式ってやつか…二人とも只者
じゃないオーラまどつてるもんなあ…)」

「貴重な光景だとは思うけど、これ、ひめか達が立ち会う必要無くない
??私達、新入生よ?」

とは言え一年生達にとってみれば単にレギオンの任命式を見学し
ている…としか見えないのも事実

希望者は見れる制度なのかもしれないが彼女達は今日入学したば
かりで希望も何も無い。

むしろ先程の反応からするに全員教導官によって、ここに集められ
たのだ

むしろ入学式なら入学式の時に行えば新入生にとってこのガーデン
のトップレギオンを紹介できる絶好の機会を逃してまでここでや
る意味を理解できずにいると

「それは、貴方達もグラン・エプレのメンバーになるからよ。」
「…え??」

「やった♪今日から僕も叶星先輩達と同じレギオンだ☆」
「嘘でしょ??」

「え、本当に?」

一年生が全員、個性的なりアクションをしていると

「嘘ではないわ。…ですよね? 校長先生」

「はい。その通りです。」

貴方達4名をグラン・エプレのメンバーとして正式に任命します。」
「これからよろしくね。海濤ちゃん、姫歌ちゃん、灯莉ちゃん、紅巴ちゃん。」

彼女が一年生達に笑みを浮かべながら告げる

仮にもガーデンのトップレギオン

普通ならば上級生をメインとしたガーデン最高峰の実力者で固めるのがセオリーである集団に実績の無い一年生を4名入れる。

トップレギオンの常識とはかけ離れていると思われがちだが先の上級生の反応を見る限りこのガーデンに至っては普通なのであろう。

「あーちゃん。あーちゃん」

「ん? 私?」

「うん。天野だからあーちゃん。僕丹羽灯莉。これからよろしくね♪」

「あーちゃん…うん。かわいいあだ名をありがと☆こっちこそよろしくー」

そう言い二人でハイタッチを交わす

メンバーが指名された瞬間は周りが騒がしかったが、

「とりあえず私から最後に1つの言葉を皆さんに授けます。」

リリイの戦いは今日が最期かもしれない命を賭すに値するかはリリイ自身が決めるべき

我が神庭女子藝術高校の理想と理念を表す言葉です。

どのような状況でも、この言葉を忘れずに日々の生活とリリイとしての務めを果たしなさい。」

「結構難しい事要求してるわね…自分で判断って中々に難しいわよ)」

彼女は言葉を聞き、難しいことだと思う。

リリイとしての在り方だけでなく、何事にも当てはまると言うが言われた事、命令された事をやるのは比較的楽である。勿論リリイとしての技量は求められるが言われたことをただこなせば良い。

それとは逆に自身で判断するという事はどんな結果であれ言い訳は一切通用しないのだ。

その分、周りに流されず自分の考えで行動できるというメリットもあるのだが

その後レギオンメンバー全員で誓いを立て、その後は全員がそれぞれ教室に戻るだけなのだが、

「ちよつと待って（下さい）!!」

「ん? 私?」

「あつ、先に姫歌ちゃんから…」

「そう? それじゃあ、貴方アイドルリリイを目指さない? っていうか貴方のルックスを最大限に活かすためにも私達のアイドルリリイ部に入ってトップアイドルを目指すわよ!」

「アイドルリリイ? 何するか良く分からないけど良いわよ。何か面白そうだし」

「あーちゃん、ゲット☆良かったね定盛!」

「ええ、っていうか定盛じゃなくてひめひめよ!」

そう言いながら姫歌と灯莉が彼女に話かけてくる

どうやら彼女はレギオンの他に部活動を作成したいらしくそのためにレギオンメンバーに声をかけているといった所だろうと予想する

まさか同じレギオンメンバーとの最初の第一声が部活勧誘になるとは思ひもしなかったというのが本音だったりする

アイドルリリイが何をするのかよく分かっていないが、何となく面白そうだと直感したため了承する

何よりレギオンの仲間の頼みだし余程の無理難題でない限り断る

理由が彼女には無い

「本当に？・ありがとう♪詳しい事は後日話し合いますよ。」

「それで、紅巴ちゃんは？」

「あつ、はい。勘違いならごめんなさい。天野って…あの百合ヶ丘にいる天野天葉様あまのそらはと何か関係が…」

「ああ、うん。一応妹なの私。一応、ね。」

彼女の姉である天野天葉

リリイをやっている人間ならば誰もが聞いたことがあるであろうビッグネーム

実力を考えれば世界最高峰のリリイと呼ばれるのにふさわしい人物だ

その人物の妹に当たる人間が目の前にいる

なんの下心もない紅巴にしてみればとてつもない出来事であろう

現に息が荒い

「ああーやっぱり！…あれ？でもそんな話今まで…」

「まあ、ここ数年大きい戦いばかりだったじゃない？戦果を出してたならともかく大した戦果も出してない妹の事まで話題にはならなくて当然よ。しかも私、百合ヶ丘の中等部にいた訳じゃないから

向こうで他のガーデンの中等部に所属してたとはいえまだまだ未熟な1年生リリイよ。だからそんなビビらないで？同級生、同じレギオンなんだし」

嘘は言わずに対応する

ここ数年、大きな話題となるような戦闘が相次いで発生しているのだ

そしてそのたびに彼女の姉は結果を出し続けてきた

これで彼女も中等部から姉同様に結果を出してきたのならば名も知られているのだろうが生憎とそこまでの事をなし得てはいない。

「そうだったんですね。これからよろしくお願いします。」

「皆、そろそろ教室に戻った方がいいわよ。クラスメイトが待ってるわ」

その話を打ち切るように叶星が1年生に声をかける

この場呼び出されレギオンに任命された彼女達以外は普通
に式を終え今はホームルームを行っているはずだ

クラスメイトとの顔合わせの時間を考えるとこの辺で切り上げた
ほうが良いと判断したのであろう

その言葉と共に一年生はそれぞれの教室へと向かう

○月△日 天野海瀉の手帳より

神庭入学早々にトップレギオンに任命!

まさか地元でハズレ扱いされた私がこっちで早々にトップレギオ
ンに任命されるなんて、まさかの展開!

レギオンの皆もクラスの皆も良い人ばかり、変な比較もハズレ扱
いもされないだけで大当り

あの人と違って出来る事も限られてるけどレギオンの皆の力にな
れるように頑張らなきゃ

第4話

入学式が行われた日の放課後

入学式からレギオンの任命式を迎え、クラスメイトとの顔合わせという一日を終え、グランエプレの一年生は訓練場に集まっていた

翌日から本格的な訓練があるため今は自主練というよりも使用CHARMのお披露目と言う意味の強い集まりだ

他の一年生リリイもお披露目をするためかかなりの人数が集まっている

「グランギニョル製を使ってるひめかが言うのも何だけど皆個人的なチャームよね

つてか海瀉と紅巴は何処のメーカー？

あまり見ないデザインしてるけど」

「ちなみに僕も定盛と同じくグランギニョル製だよ♪この部分とかユニコーンの角っぽくていいよね」

姫歌と灯莉は自身のCHARMを持ちながらそう語る

二人の使うCHARMはデュランダルとマルテ共に世界有数のCHARMメーカーとして有名なグランギニョル社製の物だ

デザインを重視しつつも高性能高価格なCHARMを制作することで知られるメーカーであり、使用するリリイも自身のCHARMに誇りを持っていることでも知られる

そしてその姫歌を持ってして個人的と言われた二人はというと

「私はヒビイロカネインターナショナル社製の第3世代CHARMトリグラフ。アステリオンを制作してる所って言えばわかるかな？」

「私はアウニヤメンディ・システムス社製のシユガールです。新進気鋭のCHARMメーカーですね。」

そのように答える

海瀉が使うCHARMは親機と子機の2つに別れており本来ならばとあるレアスキルを覚醒していなければ不可能なCHARMの二刀流も可能となったという作りだ。

要求されるスキラー数値も50後半となっているが2機それぞれ

の操作や合体時の操作などやる事が多いためスキラー数値とは裏腹に使用者の技量が求められる機体だ。

そして紅巴の使うCHARMは彼女の性格に反して死神の鎌を想像させる見かけをしているがその見かけによらず、使用者の命を守る機能も多数搭載されていると言う話も聞くため、攻撃面は当然として防御面も保障されていると言えよう

ちなみにこの二人の使用するCHARMメーカーはそれぞれガーデンを経営しているのだが経営しているガーデンが色々な意味で話題になっているのだがこの場では割愛する

「詳しいフォーメーションとかは明日以降になりそうだし今日はCHARMのお披露目だけにして皆、寮に戻る？それとも軽く自主練していく??」

姫歌が他の三人に確認を取る

彼女が一年生のリーダーという訳ではないが本人の性格などもまあって自然とそのような流れになっている

「そうですね…私は慣らしておこうかと」

「同じく。あ、そうだ。紅巴ちゃん。軽く打ち合います？近接武器同士なわけだし。東京だとよくやるんでしょ?」

「ええっ?!いや、まあリライ同士でそういう訓練をするガーデンは確かにありますけど、入学早々は流石に…」

本来なら射撃訓練程度で済ませるであろうと予想していたのだが、海濱が物騒な事を言い出したあたりから流れがおかしくなる。

勿論彼女も悪気や悪意があるのではなく、鎌倉から東京に来る際にリライ同士でその手の訓練を取り入れているガーデンがあると言う事前情報があったので、ここでもやるのかという意味の提案だ。

驚くのは本人の性格や言動から真っ先に否定すると思われた紅巴が否定ではなく戸惑いであり今日が入学式でなければ乗っていたような反応だから余計に驚きだ。

そしてこうなると収集がつかなくなりかねないのは予想ができるであろう。

「あつ、ぼく、とつきーとあーちゃんがCHARM使つてるとこ見たい

「なー、ズバーンってやるんでしょ?」

「なんで入学早々にレギオンメンバー同士で戦うのよ!? 却下よ却下」

収集がつかなくなる前に姫歌が却下し強制的に寮に戻る事になる

各々が寮の部屋に戻り海瀛もまた寮に戻ると部屋内にはすでにルームメイトであろう一人の少女が椅子に座り本を読んでいた

「あつ、よろしく。美術科1年の天野海瀛よ。」

「どうも、造園科1年の二松にしよう薫かおり…名字が呼びにくいだろうから薫でいい。

学科が違うとはいえクラスで少し話題になってたけど貴方の名字ってやつぱり、あの?」

「そ、あの天野天葉の妹」

「そう」

二人は軽く会釈をすると海瀛は荷物を取り出し棚にしまう。

名字に関しての質問は彼女にとっては聞かれる事NO.1なのでいつも通り軽く応える

寡黙な少女なのか真相をしつても、かろく返事をするだけで再び本を読み始めたのは彼女にとっては意外な反応であった。

彼女が荷物を取り出し部屋で過ごす準備をしている時にもずっと本を読んでいる。

すると唐突に

「先ずはトップレギオン任命おめでと。」

「あら、ありがと。」

そうお礼を言うと唐突に海瀛の方を向きながらそう告げる、そして突然

「色々話したいこと…あるけどそれは明日以降。所でお姉さんからなんか連絡あった? ファンって訳じゃないけど天葉様って家族にどんな連絡するのか気になる」

「いや、全然。最後に話したのアイツが中1の冬とかだったしそれ以降きっかり。ご存知の通り色々忙しいんだろうし、仕方ないんじゃない? 妹を気にかけるほど暇じゃないんでしょ」

「あ、あの天野天葉様をアイツ呼ばわり…」

流石にこの発言に冷や汗を流す

この時も憎しみがあるような口調ではなく本当に友達と話す流れで発言をしている

サラツと言ってはいるが世界最高峰リリイに対しての発言と考えると非常に不味い

しかし、その発言をした張本人はまるで気にすることもなく告げる「別に良いでしょ？ルームメイトの前でなら、地元でも裏でアイツ呼びしてたし。流石に普段はしてないから安心して？」

「ま、まあ良いけど」

そんなやり取りをルームメイトとしつつその後は夕食等々を済ませ一日を終える

こうして天野海漓のガーデン生活の記念すべき一日目が終わるのだった。

第5話

入学式の2日後

この日は早朝訓練を行っており、本来なら訓練を終え各々が授業へと向かうのだが訓練最中にヒュージ出現のアラートが鳴り、グランエプレに出撃要請が出る

その情報を受けグランエプレのリリイは街外れの森林へと向かっていった

その途中、海瀛は

「東京の戦闘だしトップレギオンって言う事も考えたら住宅地や都市部のだ真ん中がメインだと思ってたけど…こういう所での戦闘もするんだ」

このように呟く

東京にあるガーデンのトップレギオンともなればこのような場所では無く住宅地や都市部での戦闘になると思っていた彼女にしてみれば森林部の戦闘になると聞かされたときは一瞬驚いたのだ。

「二昨日、結成した事を考えると早い段階で戦闘経験を積んで欲しいガーデン側の思惑かと思えます。校内には多くのリリイが残っていますし、万が一、ここを突破された時は第二陣として出てくるかといくらトップレギオンとは言え、いきなり住宅地や都市部での戦闘は厳しいですし」

「情報だとスモール級がチラホラって感じだし突破されるなよっていう発破とトップレギオンらしく対処してほしいっていう期待もある…か

トップレギオンの戦果って士気にも関わるからねえ」

紅巴が彼女の疑問に応える

出撃選択性を取り入れている神庭らしく今回の戦闘にはグランエプレ以外のレギオンは見受けられない

そうとは命令されてはいないが、グランエプレのレギオンとしての初実戦を早い段階から行って欲しいガーデン側の思惑もあるという

のが彼女の考えだ。

都市部に比べ森林での戦闘の方が民間人への被害を気にせずに戦闘を行える。

初実戦としては相応しい状況とも言える

とは言え今回出現したのは通常兵器でも通用するレベルのヒュー
ジ

結成したばかりとはいえトップレギオンらしく対処してみせろと
いうガーデン側からの期待の表れとも取れる

ガーデンのトップレギオンがスモール級すら撃破できないという
事になれば校内に残っている他のリリィの士気にも関わると彼女は
思っているためスモール級とは言え気が抜けない

そんな事を話していると

「見つけたわ、叶星、戦闘開始の合図を」

「ええ。」

今日がグランエプレのレギオンとしての初実戦よ

結成して間もないとは言え私達はトップレギオン。自信を持って
戦いに挑みなさい」

本来ならばここで活気のいい声上がるはずなのだが、今年は少し
違う

「よーし！ユニコーン型のヒュージ見つけるよ〜♪」

「見てなさい。今日からひめひめ伝説が始まるのよ!!」

「叶星様と高嶺様の戦いをこんな間近で見られるなんて最高です…！
カメラの用意をしないと」

「期待には応えなきゃね」

緊張や恐怖が無いと言う面では今年の一年生は非常にタフである
のはいい事なのだが、戦闘開始前と言う事を考えると少々不安の残る
状況だ

「だ、大丈夫かなー？」

叶星がそう思うのも無理はない

実際、戦闘になった時も負傷者は出なかったものの、戦闘を行えたか
と言われると非常に疑問が残る結果となってしまった。

そして戦闘を終え校舎に戻る道中では

「ひめひめのデビューとしてはほろ苦ね」

「そう?」

「当然じゃない。もっと華麗に戦わなくちゃアイドルリリイなんて名乗れないわ」

姫歌は自身の結果を評価する

デビュー戦と意気込んだ初実戦にしてはヒュージを余り倒すことも出来ず、殆どを海瀉と共に灯莉のフォローに回っていたのだ。

フォローを行ったのが不満ではなく彼女の理想とする闘いが出来ずに上級生について頼りきりになったのが不満なのであろう

「海瀉はどうなの?今日の戦闘の感想は?」

「私?んー殆どのヒュージを先輩達に任せる形になったのは反省かな。後は怪我人出なかつたし悪くはないと思う」

彼女はそう答える

対処が簡単なスモール級とは言え判断を間違えれば命を落とすことだつてある戦闘で誰一人として怪我人が出なかつたのだ

それで、十分だというのが彼女の思いだ

最もそのようになったのは上級生の働きが大きかったのもあるのだが

「さて校舎に戻って授業を受けましょうか。クラスメイトがひめひめの歌声に感極まる光景が目に見えなかつた」

「私達は外でデッサンだし道具取りに行かなきゃ」

ヒュージとの戦闘が有つたからと言つて授業が免除される訳ではない

むしろ彼女達の本分はこの後の授業に有ると言つても過言ではない

それはガーデンに通う全てのリリイに言えることでもある

そのため彼女達は校舎に戻つた後は各々が授業の用意を行うのである

グランエプレとしての初実戦は大きな課題を残した事に変わりはない

それは上級生も話していたのだがそれを彼女達を知る事は無いが上級生と下級生がそれぞれ課題を自覚できたというのも一つの収穫であると言うことが出来るであろう。

彼女達のリリイとしての生活は始まったばかりなのだから

第6話

海瀉や灯莉が所属する美術科の授業は造園科の上級生が育てた植物のデッサンなのだが授業開始前から灯莉の様子がおかしい

「灯莉ちゃん、どうしたの？何か急いでない？」

「べ、別に急いで無いよ。うん。」

そうは言うが先程から周りを伺い、誰かを待っている風にも見えるとは言え上級生二人は造園科とはいえ今は校内で授業を受けているはずだし仲の良い姫歌は声楽科の授業があるからこの場には居ない

特別講師が来るとも聞いていないので誰を待っているのか想像もつかない

そうしていると担当の美術教員が現れて生徒に対し

「皆さん。本日の授業は上級生が育てた植物のスケッチです。好きな物を選んでくださいね」

そう告げ、皆が絵を書き始めるのだが、数分後に灯莉が動く

「はーい！できた☆」

って言う訳で1抜け、あーちゃんお先く」

言い終わったとほぼ同時に彼女は担当教員に絵を提出し、すぐさま校内へと戻る

これには全員が啞然とするが、海瀉と担当教員は

「早っ!?え?…本当に??おーい、灯莉ちゃん!?!」

「丹波さん!…描けて…ますね。」

ええ、とても上手なのですが…

神庭の校内にはサボテンやヤシの木は生えていませんよ!」

そう言い担当教員は絵を手に持ち灯莉を呼び戻そうとするが一人の生徒があることに気づく

「先生、それ裏に一枚くっついてます」

「え?あら本当ですね…こっちは…上級生が育てたネモフィラですね。上手に描けてます」

そうサボテンやヤシの木が描かれた紙とは別にもう一枚、上級生が

育てたネモフィラが描かれた物を提出していたのだ

条件を満たしているため担当教員は何も言えなくなるのも当然である

そしてそれを見た海瀉は

「なるほどサボテンやヤシの木はこれのブラフか：多分ネモフィラは事前に描いてたな：）」

そう担当教員は上級生が描いた植物をスケッチしろと入ったが事前に描いてはダメと言っではない

そして、2枚とも適当に描いているのであれば問題なのだがどちらも丁寧に描かれており文句を言えないレベルで仕上げているのだ

とはいえ性格を考えれば灯莉が大人しく教室に戻るとも思えないが、他人に迷惑をかけるような事をする人物でもないと言うのも日が浅いのが分かっていたため皆は己の課題に集中する

とはいえこの授業の課題に苦戦する生徒はあまりいないのも事実

灯莉が特別早すぎただけで、その数分後には仕上げる生徒が出てくる

ちなみに海瀉も比較的早かった部類だ

描いた植物はというと

「えーっと、天野さん、これは：ネペンテスですか？」

「はい。そのこのハウスの中にありました。三年生の方が育てているので条件的にセーフだと思ったんですが」

神庭の造園科は様々な植物を育てており、少し離れたハウスの中の一部が食虫植物専門エリアとなっていたため彼女はその中の一つ、ネペンテスを描いたのだ

食虫植物があるのだから真面目に探せばサボテンやヤシの木もあるんじゃないかと思っただけの話

ちなみに彼女の絵を見た教員は

「条件も満たしていますし、丁寧に描かれていますね。教室に戻っても良いですよ。」

「わかりました〜」

そう言い彼女も教室へと戻る

すると中には先に課題を仕上げたクラスメイトが机に座り

自主的に絵を描いたり教本を読んだり机に付して寝ていたりとそれぞれが好きなように過ごしていた

が、肝心の生徒がいない事にこの時初めて気がつく

「…あれ!?皆、灯莉ちゃんは?」

「さあ?私が来た時にはもう居なかったけど、あの音楽科の子の所かな?」

「いや、音楽科も今は授業中だし教室違うじゃん。自主練しにいった??」

「CHARM持ってたしそれはないでしょ。」

彼女の間にクラスメイトがそれぞれ答えるが共通しているのはこの場にはおらず行き先も分からないとの回答である

とはいえ実質自習時間の行動を他の生徒が止める理由も無いため見逃しているというのが本音であろう

「(んー、校内に入ってる所はみんな見てたしなー、早めに仕上げなかった私のミスかなこりや)」

こうなる事も予想できなかった訳ではないが次の授業は一年生合同の体育と言う事を考えれば確実に戻ってくるという確信があったため気を切り替えて席に付き、学園から希望者に支給された端末でインターネットを眺め情報収集を行う

集める情報もリリイ絡みというよりは近年開催された絵画コンクールの入賞作品のチェックが多い

「(やっぱイルマの作品は凄いな…まあ、神庭も負けてはいないけど)」
開催されたコンクールは応募は自由で、リリイに限らず様々な人が応募してきているが上位入賞者はイルマ女子美術高校という都内御三家のガーデン所属のリリイで占められていた。

イルマ女子美術高校というのはガーデンとしては発展途上と言われているが美術分野では世界屈指の名門と言われている高校である。

発展途上とはいえ東京の御三家とも言われているので実力派が揃っている事も付け足しておく。

世界屈指の名門との評判通り作品それぞれが素晴らしい出来と

なっており上位入賞にふさわしいとも言えよう

とはいえ、神庭も芸術を学ぶ所であり美術科としてもコンクールでは常にイルマが上位を独占する現状を崩したいと考えているのかここ近年、美術科も造園、音楽に負けないぐらい力を入れ始めてきている

そのおかげかここ数年はコンクールでも神庭勢が上位に食い込む事も増えてきているが中々イルマの厚い壁を壊しきれないというのが現実である

そもそも、力を入れると言っても芸術高校の面があるため単にリイとしての実力だけで評価するのではなく芸術分野も評価しなくては行けないためまだまだ及ばないというのが実情だ

評価と言っても上手さだけでなく芸術を学ぶ意欲や実際に作品を作った際の独創性なども考慮している

そうしていると、後ろからクラスメイトが語りかけてくる

「何？コンクールの作品チェック？」

「まあね、展示されてる作品と制作者は知っておかないと、まあイルマがヤバいってのは理解できた」

「イルマの作品はね、あれは本当に凄いよ。御三家だけあってリイとしての実力も確かだし…とはいえうちも芸術高校、造園、音楽には負けてられないっしょ」

芸術を学ぶ高校に通っている彼女達にとってもイルマの作品というのは意識せざるを得ない

が、それ以上に他の2つの学科に負けてもいられないのだ

その後もインターネットで様々な情報を入力している間にもクラスメイトが続々と教室に戻ってくるが灯莉は授業が終わるまで教室に戻ってくる事は無かった

授業が終わる頃には戻ってくるだろうと考えていた海瀛にしては全くの予想外であり、学科が違うとはいえ同じ一年の姫歌や紅巴に連絡を取って探しに行こうかと考えていたのだが

「たっだいま〜」

そんな声と共に灯莉が戻ってくる

「灯莉ちゃん、心配したよ。今までどこに行ってたの??」

「たかじゃん先輩達の所で授業を聞いてたんだ♪色んなお話聞けて楽しかった」

「先輩達の所は予想できなかったな…」

彼女の行動には驚かされたがいつまでも驚いている訳には行かない

い この後も授業は続くため改めて気を引き締めて行こうと考える

ちなみにこの後の授業はこれと言って問題が起きるわけでもなく、再びヒュージも現れる事も無かったため、学生としての1日を終える事が出来たのだった。

第7話

「はあく今日は疲れたわ」

「訓練の最中に出撃してそこからの授業ですからね。とは言え被害がなくて良かったです」

その日の放課後、全ての授業を終えた生徒は寮に戻ったり自主練をおこなったりと皆が自由に過ごす

「あーちゃん、さっきのヒュージ大ききさどのくらいだったっけ10定盛位？」

「10だと大きい、5定盛位じゃない？」

「あー、5定盛位か、そうだよね」

灯莉は今朝戦闘したヒュージを描いているが大きさが思い出せないのか、海瀉に聞く。同じ美術科同士通じるものがあるのか、大きさを正確に伝える。

もつともその会話にツツコミが入るのであるが

「ちよつと！待ちなさいよ、何よ5定盛って!?!海瀉も悪乗りしないで！」

「定盛は定盛だよ☆何言ってるの？」

「あー、もう!!」

自身を定盛と呼ばれるのであれば何時もの切り返しができるが訳の分からない単位として使うのだからそれも出来ない、非常にツツコミを入れたいのにはツツコミ切れないジレンマ

そんな風に賑やかに過ごしていると上級生の叶星と高嶺が寮に戻ってくる

その後、高嶺がお茶会を提案し皆が賛同した為お茶菓子等を準備してお茶会が始まる

用意された紅茶はとても美味であり灯莉はかなりのペースで飲んでいく

紅茶を飲みながら雑談をしていると唐突に姫歌が

「そういえばさ、海瀉ずっと気になってたんだけどさ」

「ん?どうしたの?」

「何で鎌倉のガーデンに行かずにこっち来た訳？」

姫歌はそう問う

実はこれは一年生だけでなく上級生でも隠れて話題になっていた事である

彼女の姉の知名度を考えれば鎌倉のガーデンに行くのが当然と思われており一種の謎と言われていたのだ

すると海瀧はなんの気にもせずに

「んー、ちよつと鎌倉にいるのが窮屈になってきて…ね。鎌倉内で進学つてのも考えたけど特別ここだつていう魅力も感じられなくてね」

その発言に5人が驚く

鎌倉と言えば激戦区とも言われており世界的名門と言われる百合ヶ丘女学院を筆頭とした5大ガーデンがあり、中等部卒業と同時にガーデンを変えるパターンは珍しくないが、府内のガーデンには魅力が無いと言いつつ切ったのは意外だったのだ

ましてや彼女の姉を考えれば百合ヶ丘を目指していてもおかしくは無いと思われるのかもしれないが

すると高嶺が

「そうなると中等部卒業と同時に鎌倉外のガーデンに進学する事を初めから希望してたつてこと？」

「そうですね。年々鎌倉で過ごすのは私にとっては窮屈だったので。色々あつてここに決めました」

「多くのガーデンからここを選んでくれて私達と出会えたんだもの、その縁に感謝しなくちゃいけないわね」

高嶺はそう言いながら微笑む

鎌倉だけでなく多くのガーデンから神庭を選びそしてグランエプレに入る確率など相当に低い

人の縁や繋がりを感じる瞬間でもあつた

「あ、後私からも良いですか？」

「良いよー何でも聞いて」

「その、天葉様とは仲が良くないんですか？その…呼び方が…悪いと
言うか…」

そしてもう一つ地雷になるかもしれない話題を紅巴が踏抜く。彼女は自らの姉を呼ぶときにあの人や下手すればアイツと言っており仲が悪い、もしくは敵視していると思われるのであろう。すると海瀉は何をおかしな事を聞いているのかというふうに告げる。

「他人が言うならともかく妹が姉を雑に呼んだらおかしいのかな？口が悪いって言うならわかるけど…」
「えっ」

その声色に怒りや憎しみ等はない

単順な興味なのだ。口が悪くなるのは自覚しているがそれでもこの質問をされる事が彼女に取っては本当に分からないのだ

「人によつては『お姉ちゃん』『姉さん』『お姉様』『姉様』って呼ぶ人がいるかも知れないけど別に決まりがある訳じゃないでしょ？そりゃ公でアイツ呼びしたら流石に不味いけど…何で皆は私達が仲悪いって聞くのかな？まあ二人でいる所を見てないからそう言われても仕方がないのかな？」

そう言いながら腕を組み首を傾げる

たまにでてしまう口の悪さを指摘されるならばまだ分かるのだが呼び方そのものでマイナスな感情を想像される理由が本当にわからないのだ

ニュアンスも憎しみなどを込めずサラツと言っているつもりなのに想像されるのだから本気で悩む

すると灯莉と姫歌も

「僕もそう思ってたんだーあーちゃんがどう呼ぼうがあーちゃん次第なのになんで皆は悪い風にとるんだろう？」

「確かに言われてみればそうよね。姉妹なんだもの呼び方なんて自由よね。公に言ったら流石に怒られそうだけど普段は問題無いわ。そういう呼び方してる子確かにいるし。」

逆にその言葉を聞いた叶星、高嶺、紅巴は気付かされる

これもまた姉妹の形の一つなのだ

特に叶星や高嶺が思い浮かべるのは自身が中等部まで通っていた、

御台場女学校に所属している一組の姉妹

他人への接し方や中等部時代の出来事を考慮しても妹が姉をアイツ呼ばわりした所は覚えてる限りでは1度たりとも見てないない姉妹仲はとて良かったと言うのは共通の認識である

そんな姉妹を見ているからこそ海瀛が姉をアイツ呼びしているのだから不仲だと思っても仕方のない事だ

「それじゃあ海瀛ちゃんは天葉さんにマイナス感情は無いのね？」

叶星は彼女にそう尋ねる

「勿論。とは言え私が中等部入ってから声すら祿に聞けてないですし近況を知る手段は皆と同じ様にニュースや百合ヶ丘の広報ですけどね。」

何なら百合ヶ丘にある疑似姉妹制度って言うんでしたっけ？

アイツから見たお姉さん？と今年契約結んだ妹？の方が私よりも過ごした時間も知ってる事も多いと思いますね。

あ、近年ではって意味ですよ

ちなみに、お二人は会った事は？」

「私も高嶺ちゃんも会った事は無いわ。」

「凄いリリイってのは聞いてるんだけどね。お姉さんとはご縁が無かったみたい」

二人はそう言いながら微笑む

一年生の時には何度が大きな戦闘に参加しその戦場に百合ヶ丘の生徒もいたのが居たのは上級生のリリイ

同学年のリリイとは出会えていないのだ

そして話を聞いていた紅巴はというと

「(このネタは何というか深入りしては駄目な気がしてきました…触れるのもうやめましょう)」

実は彼女、リリイ同士のゴシップネタに特化したリリイオタクであり、特にリリイ同士の関係性などに強く関心があるのだが、その彼女をもってしても百合ヶ丘にいる海瀛の姉である天野天葉関連のネタは深入りするのをやめようと決心させる

身の危険というより仲間である海瀛への配慮と言う面の方が強い

その後は普通に雑談を行い、時間も過ぎて行くのだが、せっかくなので夕食とお泊り会もしてはどうかと高嶺が提案し、夕食とお泊り会が行われ、夜は夜で様々な事があったのがそれはまた後の話。

第8話

お茶会やお泊り会など一般の学生と変わらない日常を過ごしているため忘れられがちだが彼女達はヒューズと戦うリリイ

ましてや彼女達は神庭女子のトップレギオンなのだ。

当然戦闘訓練も行うし、内容もハードである

この日の訓練は個人の基礎練習ではなく、レギオンとしての訓練つまり連携やフォーメーションの訓練になる

「まずは海瀛ちゃん、姫歌ちゃん、灯莉ちゃん、紅巴ちゃん。4人でフォーメーションを組んでみてくれる?」

そのためにもまずは一年生4名でのフォーメーションを組んでの訓練

叶星が一年生にフォーメーションを組むように指示を出す

「オツケー任せてください。行くわよ海瀛、灯莉、紅巴!!」

姫歌が気合を入れてそう呼びかけると一年生がフォーメーションを組む

配置を指示するのは出すのが姫歌の役目だ

「海瀛はそのまま前よ、灯莉は海瀛の左側のカバーできる位置。紅巴は私の右後ろよ」

指示を受け配置についていくが中々うまく纏まらない
すると紅巴が姫歌に

「えっと、つまり少し歪な形の四角形になれば良いって事ですか?」

「そう、それよ、それ。」

紅巴がイメージを伝えることでようやくどのようなように配置したら良いのかが伝わった為、その後はスムーズに配置される

すると姫歌が海瀛に

「ある程度距離を離れたんだから誤射を気にせずに思いっきりやりなさい。右側はひめかがやるわ」

「そりゃあ有り難い。」

このフォーメーションを組む際に姫歌が各々の戦闘スタイルなのだ
だが2丁拳銃をモチーフにしたトリグラフを使用し一人対複数の戦

闘に持ち込む海瀉の戦闘スタイルは個性という意味では群を抜いており下手に彼女を中盤や後方に配置してしまつては流れ弾が飛んでくる可能性を考慮した上でのフォーメーションだ

陣形が完成したのを確認した叶星は

「今回は戦闘と連携の訓練だからレアスキルは使っちゃだめよ。それ以外は実戦と同じ緊張感をもつて取り組んで頂戴」

そう言い終わると同時に模擬ヒュージが出現する

模擬とはいえ姿はヒュージそのものであり違いがあるとしたら放たれる攻撃に殺傷力の有無だけである

ここでの被弾＝実戦での負傷となるので手は抜けない

訓練が始まる

まず戦闘を切つたのは海瀉

親機子機ともにガンモードのまま前に出る

模擬ヒュージも最初の獲物を見定めたのかそのまま大きな爪を彼女に振りかざすがそれをフェイントで交わし横に抜けていく

そのままあえて敵の密集地帯に入ると2丁拳銃を器用に操り弾丸をヒュージに撃ちこんでいく

勿論ヒュージも反撃を行うが時に回避、時にヒュージの同士討ちになるように誘導し姫歌達の方に向かうヒュージの視線を極力自分の方に向けさせる

「私達も行くわよー突撃ー」

最初は一步下がって様子を見ていた他のメンバーもヒュージの意識が切り込んでいった海瀉に向きつつあるのを確認、タイミングを伺り姫歌が突撃の指示を出す

海瀉が敵の集団に入り攪乱しているところを姫歌を筆頭としたメンバーが後ろから上がってくることで一気に勝負をかけるのが狙いだ

場合によっては姫歌が単体で上がっていき海瀉の攪乱によって出来た道を利用し前に出て行く事もあるのだが今回は室内という事も考慮し前者の作戦を実行しようと考えてるのだが、そうは上手く行かな

い

実はこの時一年生は気がついていないのだが海瀉の位置が事前に想定していたよりも前に向かってしまっており後方と距離が開いてしまっていたのだ

とは言えこの時点ではまだ連携としては機能している

問題なのはこの後の動きであった

「よーしいつくぞー☆」

灯莉は姫歌が事前に指示した方向とは逆の方向に向ってしまう

この時点でフォーメーションも立てた作戦も崩壊してしまう

「灯莉ちゃん！方向が逆です」

「ちよつと灯莉!?!そつちじゃない!」

「嘘お!?!」

紅巴と姫歌は当然灯莉を止めようとし、この後フォロワーが入るつもりで戦っていた海瀉もまさかの事態に頭を抱えなくなる

この状況を立て直そうと姫歌は素早く指示を出す

「海瀉はこつちまで下がって、3人で新しくフォーメーションを組むわよ!。紅巴は動きを止めない!ヒュージに狙い撃ちされるわよ」

「そうは言ってるけど定盛、後ろ!後ろ!」

「えっ!?!」

彼女なりにこの状況を打破するために指示を出す、そのために後方の注意が疎かになってしまう

後方に下がってしまった灯莉が直ぐに警告するが反応する前に攻撃を受けリタイアしてしまう

ちなみに灯莉も逆方向に向かった直後に攻撃を受けリタイアしてしまっている

「ああつ、私はどうすれば!?!」

「ゴメン遅くなった!?!」

姫歌がリタイアした直後に海瀉が戻ってくるが残っているのは彼女と紅巴だけ

CHARMを構えつつお互いが背中合わせで背後をカバーし合うがヒュージに包囲されている状況は変わらない

すると海瀉は彼女に

「なんかこの状況を打破する画期的な戦術とか無い？二人で倒すぐらいしか私は思い浮かばないけど」

「レアスキルが使えるなら手が有りますけど使えないとなると、厳しいですね。個々で撃破するといつても最終的に数で押し切られますし、今回は一年生でのフォーメーションを組んで行う戦闘訓練と考えるともう終わりかと」

「そっかー、ならギブアップだね悔しいけど」

「はい…」

そう言い二人はキブアップを宣言し訓練は終了する

そうして一年生が集まった所で上級生による講評が始まる

「最初に海瀉ちゃんね。」

指示を受けて正確に行動するのは良かったけれど、先行する分、後続の状況によっては立ち位置を変えたほうがいいわね。実際組み直しのとき前に出過ぎてて合流が遅れたでしよう？」

「トリグラフの性能と貴方のレアスキル、得意な戦闘スタイルを考えると、どうしても攪乱しつつ一人対複数の戦闘に持ち込む事が多くなるだろうし連携を意識するためにも立ち位置の確認は重要よ」

次に姫歌

「姫歌ちゃん。声は良く出ていたし一度崩れたフォーメーションを立て直そうと直ぐに指示を出した所は良かったわ。けれど指示を出すことに気を取られて後方の注意が薄くなってしまったては駄目よ」

「前衛から後も後衛からも距離が開きすぎていたわね。援護を受けにくいような中途半端な位置に立ったら真っ先に狙われるから気をつけなさい」

そして灯莉

「そして灯莉ちゃんは隊の動きと連携を意識してね。判断の速さは武器となるけれど」

「判断の速さと感の鋭さで動きが直感的ね。あの動きもおそらく海瀉さんの援護と孤立しかけてた姫歌さんのフォローを同時にするため配置を変えたかったんだらうけど気になったことがあるのなら皆

と共有していきなさい」

最後に紅巴

「紅巴ちゃんは他の3人とは逆に周囲に気を配りすぎね。戦局を把握するには必要な事だけれど、動きを止めるのは良くないわ。」

戦闘は常にリアルタイムで動いていることを忘れては駄目よ」

「戦術理解度の高いリリイがフォーメーションの軸になるのだから、その意識を広げられるように…ね？」

これが叶星と高嶺が行っている指導である

単に悪い部分だけを指摘するのでは無く、良い部分と悪い部分を伝えることでリリイ個人の課題を明確にし、今後の訓練に活かせるようにする。

これはグラン・エプレが結成された時から続いているトレーニング方法である

いつもならこの後に個別の訓練になるのだが、今日はこれで終わりではない。

むしろグラン・エプレの訓練の目的はこの後にあるのだ

第9話

反省会が終わり、本日のメインであるレギオンとしてのフォーメーションの話題となる

「さて、講評はこのぐらいにして本題に入りましょうか。」

今のグラン・エプレの要は海瀛ちゃんと紅巴ちゃん。貴方達よ」

「…えっ」

「はい？」

叶星より突然の指名を受けた二人は気の抜けたような返事をするしかない

そしてそれを聞いていた姫歌も

「海瀛と紅巴が：ですか？ひめかがレギオンの中心とは言いませんし、呼ばれた二人を悪く言うつもりもないですけど一年生の戦闘力なら海瀛が頭一つ抜けてます。」

それでも先輩達には劣りますし、やはりグラン・エプレとして見るなら叶星様と高嶺様のWエースが要だと思っただけです」

先の模擬戦での立ち回りを見ても戦闘力ならば海瀛が一年生の中ではトップだがそれでも先輩達には及ばず

そんな現状で紅巴が名を連ねることに疑問を感じたのだ

一年生の二人を悪く言う、と言うよりも要を戦闘力と解釈するならば叶星、高嶺こそが鍵だと感じているためだ

そしてその意図を読み取った高嶺が彼女に

「叶星が言った要っていうのはフォーメーションつまり陣形の要という意味よ。リリーの戦闘力とは全く別な問題」

「陣形：あつ、なるほど」

「フォーメーションの要：要？」

「どしたの？あーちゃんとはつきー、封印されし力に覚醒して最強になっちゃうの？」

高嶺の言葉を理解出来た紅巴といまいち理解出来ていない海瀛、そして今の会話から二人に秘密があるのかと期待している灯莉

理解出来た紅巴は正解を言う

「恐らく私達の方…と言うよりレアスキルですね」

「そう。紅巴ちゃんのレアスキルはテストメント海瀉ちゃんはユーバーザインね」

叶星がそう告げる

紅巴の持つテストメントは覚醒者が極端に少ないレアスキルであり、効果は

味方のレアスキルのゆう広範囲を広げるという非常に強力な効果を持つ反面、大量のマジを消費するため負傷する確率が高くなってしまふというデメリットを持つレアスキル

一方のユーバーザインは自己の気配を消したり飛ばす事が可能であり、それどころか気配をものに移す事も可能な為、陽動や攪乱を行う事が出来る為レギオンでは重宝される

これだけだと非常に便利なスキルに聞こえるが、ユーバーザインに覚醒してしまうと他のレアスキルに比べ戦闘向きでは無く戦術に落とし込む事やリリーの育成と言う観点からガーデンによってはユーバーザイン持ちが極端に少ない所もある

「ユーバーザインは戦術に落とし込むのが難しい…なんて言われるけどそつちは問題無いわ、むしろ必要なピースと言っても過言では無いわね」

「陽動、攪乱は任せてもらえれば。戦闘含め、色々出来ませけどそれは戦闘時のお楽しみみて事で」

高嶺はそう告げる

テストメント使いのデメリットをフォローするために様々な手段が確立されているがグラン・エプレにはグラン・エプレにしかできない方法がある

それを可能にするフォーメーションをこれから作り上げようというのだ

その後は叶星よりフォーメーションの説明と配置が説明された後、模擬ヒュージを使つての練習を行う

初めてのフォーメーションを組んでの訓練の割に一年生は上手く動いている

先程指摘された事を忘れずに動いている証拠でもある

「あー、今のだと外れた時に弾が行っちゃうかー。ゴメン」

「飛んできてでも避けるから大丈夫ー。シュツと来てドーンの前に避けるから」

「本番だとその間が短くなるから気をつけてねー」

「いや、それで話通じるのおかしいわよ!? シュツと来てドーンって何!?」

「というかノールックで構えただけで弾の当たり外れの判断まで持つていけるんですね…」

海漓と灯莉が配置から流れ弾の可能性の見つけ指摘、対策を考える二人の間では相互理解が出来ているが第三者の姫歌は全く理解が出来ずに突っ込む

そして紅巴は時折見せる海漓の技量に素直に関心をする

「海漓ちゃん。判断が出来るならノールックでも良いけれど基本はちゃんとヒュージを追うのよ。」

ユーバーザインで気配を消しながらの場合には特にね」

「紅巴さんはレアスキルを発動した時は維持に集中するのが大切ね。途中で切れちゃったらその後が大変よ」

上級生二人も訓練に参加しつつ適宜アドバイスを送る

途中脱線する事も何度かあったが、連携が大幅に崩れるという事はなく初日としては中々の出来ではないかと叶星が内心で思っていたのはここだけの話

とは言え叶星だけでなく数人が思っているのは訓練と本番では緊張感や状況が大きく変わる事も珍しくはない

本番で活かさせてこそその訓練だが、ヒュージが都合よく出てくるわけもなく次回の出撃がフォーメーションを組んでの初陣になる為、気は抜けない

そうして、訓練を終えるのだが、この日の訓練はフォーメーション

の連携の確認と実践で終えた。

第10話

フォーメーションを組んでから数日後、ついに訓練の成果を出す日が来た

出撃要請を受けたグランエプレが現場に到着すると、そこにはヒュージの群れが出現している

「あつ見て見て、あのヒュージ！見たことないやつがいるよ☆」

その中に一体だけ見慣れない形をしたヒュージがいる

体格は普段戦っているヒュージに比べ大きく実力も未知数

とはいえ姫歌は

「大丈夫ですよ。ヒュージとの距離と相手の編成はいつも訓練でやっています。

という訳で紅巴、いつも通りにアレ、お願い！」

「は、はい…テストAMENTですね…」

彼女の呼びかけに応えるようにテストAMENTを発動する

ヒュージというのは個体によって移動法や攻撃手段が異なっており、現状では睨み合い

先手をヒュージに打たれてしまっってはこちらは後手にまわるしか無く不要な負傷者を出すリスクがある

ならば妙な事をされる前に先手必勝で強力な攻撃を行うべきだし、訓練でもそのような立ち回りを行ってきた

「待って！少し相手の出方を…」

「(定盛ちゃん、それは通常の対処の仕方!!…まあ訓練でやらなかったし責めるのは酷か。)」

それを聞いた叶星は静止しようとし、海漓は内心ミスを指摘しようとするが今下手に指示を出して混乱を招く事を考えフォローの策を練る

そう、姫歌の対処が有効なのはあくまでも今まで出現した場合の話
勿論、未知の個体でも行動パターンが従来出現しているヒュージと同じという事もあるがそれも戦って初めて分かる話

データも何も無い中でこちらの手の内を晒すのはリスクが高い
とはいえコチラが先に動いた以上、ヒュージも動きを見せるのは当たり前前

紅巴のテストメント発動と同時に先のヒュージはその大きな体に見合わない速さで、レアスキルを発動した紅巴に狙いを定め突撃してくる

「(レアスキル：もしくは発動者のマギに反応するパターン？なら)」

発動者のマギに反応するのであれば自身のユーザーザインは通用しないどころか相性が悪い可能性すらある

とはいえ相手に先手を打たれてしまった現状でユーザーザインを使うのは悪手

そこで、自身のCHARMであるトリグラフをすぐに両手に構え即攻撃

高速で移動してくるとはいえ直線的な軌道なので相手の起動を予測する必要は無い

紅巴の正面に弾丸が向かえば自動的に弾は当たるのだ

とは言え方が一回避され、自分に向かってくる可能性も考慮に初手に放つのは右手側のCHARMのみ

左手はこちらに向かってきたとき用の保険として弾を温存

放たれた弾丸は予測どおりヒュージの側面に当たり動きが一瞬止まるが再び直進する

本来ならば攻撃してきた海瀛を狙いに行くのが普通なのでであろうが起動を変えない事からレアスキル発動時のマギに反応するか本能がテストメント持ちの欠点を理解しているかの二択であろう

これだけならば大したダメージとは言えずただの時間稼ぎにしかならないが、その一瞬を逃すほどこちらも甘くはない

「海瀛さん良くやったわ」

一部始終を見ていた高嶺もすぐに己の使用CHARMであるリサナウトを展開、ヒュージに鋭い斬撃をお見舞いし、弾き飛ばす

「たかにゃん先輩すごい、アレを弾き飛ばしちゃった」

「海瀛の射撃も流石ね、ヒュージの軌道を読んでなきやあんなピンポイントで行かないわよ」

灯莉、姫歌が関心をしながらも紅巴をカバーするように配置につくテスタメントを使用している紅巴は防御力が低下しておりそれを残りのメンバーでカバーする形だ

とはいえ大型のヒュージは叶星が対処しております1年生3人は付近の小型を対処している

とはいえ小型の対処とはいえっても連携して紅巴を狙ってくるわけではないので対処は楽であり

上級生二人の戦いを見学する事に意識を割いている

叶星と高嶺の連携は見事という言葉で簡単に言い表せるものではないのかもしれない

「高嶺ちゃん、そっちに行ったわ」

「ええ、任せて頂戴」

的確な攻撃でヒュージを追い込みルート上で高嶺が待ち構え斬撃を浴びせる

勿論ヒュージも馬鹿ではない

軌道や攻撃パターンを変え何度も紅巴への攻撃を試みるがその全てを叶星と高嶺の連携により防ぎカウンターを叩き込む

この光景に1年生3名はそれぞれ感激し、いつか自分達も、と意気込むが海瀛だけは見方が違っていた

「(いつか、か。それが来るとは思えないけど…特に上級生との連携は)」

一つ誤解を与えないように解釈するならば彼女が他のメンバーを見下しているという訳ではない

だが、ここ最近の訓練を行い感じた事

それは上級生が1年生を戦力としてそこまで計算していないのは無いのかという事だ

訓練や指導、フォーメーションなど高いレベルで行うためこの事に關しては彼女は何も不満は持っていない

自分達に必要な事を教えてくれているのだ

だが、その内容というのはいつも上級生と下級生を分けて行っており、一度も上級生下級生を混ぜて一つの敵に対処するという連携を行っていない

特にこのレギオンは6人編成にも関わらず前衛を務めるのは常に上級生

大型も上級生が対処し自分たちは常に小型

勿論1年生だけで無茶な戦いを強要されても対処など出来る訳もないがこうも露骨に学年を分けて連携を行うのならばグランエプレは6人である必要がない

「(ガーデンの方針：もしくは二人に何か考えがあるのか：)」

とはいえ彼女は鎌倉から東京にやってきた身

地域やガーデンによってヒュージとの戦闘方法やリリーの育成方針に違いがあつて当然であり、そのやり方を一方的に責めたり否定するのは間違っているというのが彼女の思想であり、今の彼女に出来るのは自身の実力を付けその時が来るまで信じて待つ事

そう考えているがまだ戦闘は終わっていない

叶星の指示でフォーメーションを組みなおし残りのヒュージを片付けようとした所に通信が入る

「たった今、通信が入りました：付近に要救助者有りとの事です」

「(戦闘があつたのはここだけでは無いか：とはいえ、近くには出動してるレギオンもいるはずだしガーデンに待機してるリリーも居る。)」
表示された場所を確認するがここからは離れておりグランエプレが向かうよりも早くに到着するレギオンも想定される

到着する時間を考えたらグランエプレよりも適任なレギオンはあるだろう

しかし、上級生は

「…叶星…」

「…ええ！グラン・エプレは戦闘地域から撤退、これより要救助者の元へと向かいます」

そう判断するが一年生達は

「ええっ?!いや、でも叶星様あのすばしっこい奴まだ動けますよね？」

このチャンスを逃したら…」

「動きは止めたしまだ動く気配は無いわ。」

攻めてこない以上手出しは無用。要救助者の元へと向かうのが最優先よ」

「ですが、場所はここからかなり離れています。ガーデンで待機して他のレギオンにも出動要請がかかっていますし付近に展開しているレギオンもあると思いますが…」

「でもそのレギオンが移動中や救助作業中に別なヒュージの群れに襲われたらどうするの？」

それに要救助者の中に重症を負った人がいたら？」

姫歌と紅巴はその判断に疑問を持つが上級生は人命を重視する考えをしめし、その根拠を言う

「確かにヒュージを倒すことがリリーの使命である事には変わりはないしそういう方針のガーデンもレギオンもあるわ。けれどそれが全てではないと私は考えるし、グラン・エプレはヒュージを倒すことだけを重視するレギオンでは無いわ」

叶星の言葉を聞き納得したのか姫歌は

「分かりました…海瀉、灯莉、紅巴ヒュージを牽制しつつ撤退するわよ。」

姫歌は一年生3人に指示を出し自身も援護に回ろうとするがヒュージを観察していた灯莉と紅巴はすぐに異変に気がつく

「まってヒュージ達どっか行っちゃうよ？」

「向こうから撤退してくれるなんてラッキーですね。これで要救助者の元へ行けます！」

ヒュージが撤退したのを確認した彼女達は速やかに要救助者の元へと向かう

とはいえ方が一に備え叶星、高嶺は先頭を走り灯莉と紅巴を中央に、海瀉と姫歌は後方につき背後からの襲撃に備えつつ移動する

すると姫歌は小声で彼女に

「さっきはありがと、今思えばあの判断は私のミスなのに咄嗟のフオーまでしてくれて」

「初見の対応なんてやってなかったし仕方ないでしょ。まあ妙な事される前に仕掛けるっていう判断自体は間違っていないと私は思うし謝らなくていいよ」

「まあ、いいわ。帰った時にまた話しましょ。色々話したい事あるし」

「ん？まあいいけれど…」

姫歌の雰囲気がいつもと違った為、海瀉も少し心配するが今は救助活動に専念すべきだと彼女は考える

しばらく移動した後、付近にいたレギオンや神庭から応援に駆けつけたレギオンと協力し救助活動を行う

道中で襲撃されたり重症者がいなかった事は幸いであろう

こうしてこの日の任務は幕を終えるのである

第11話

戦闘を行なった後、移動してからの救助作業

ハードな流れをこなしたため全員疲労困憊でガーデンへと帰還する

灯莉は姫歌にのしかかり眠ってしまっているし

紅巴と姫歌も椅子に座ったつきり動けない

海瀉も椅子に座りようやく一息をつく

「あー、早くお風呂入りたい」

「流石にハードだったわ…」

一年生はそんな風につぶやいていると叶星が

「皆、疲れてる所申し訳ないんだけど少し時間を貰ってミーティングをするわ」

彼女が発言すると一年生はそれぞれ反省点や戦闘の振り返りを言う

まあ彼女は反省会をすると一言も言ってはいないのだが、全員が反省点を言う辺り、それぞれ先程の戦闘に思う所があったのだろう

「ミーティングと言うのは今日の出撃の事でしょうか…？私、訓練通りに動く事が出来なかったです」

「それを言うならひめか達も同じよ

訓練と実戦がこんなに違うなんて…まあ、海瀉は訓練通りどころか咄嗟の対応までしてたけど

練習通りにやるのがこんなに難しいなんてね」

「反応してドーンだもんね

かなほ先輩とたかにゃん先輩の戦闘も凄かったし僕達もあんな風に戦えるようになりたいなく」

「初手はマグレよマグレ

あの大型は先輩達に任せつきりだったし」

各々が反省点を言うが、叶星はミーティングをすることは言ったが反省会をするとは一言も言っていない

「あら、このミーティングは反省会なの？」

「違うわ。」

それに一年生の皆は良くやってくれたわ」

高嶺がミーティグの目的を問うが叶星は否定する

まあ反省会を行うなら反省会と事前に言うであらうし、今回ばかりは一年生の早とちりである

とはいえこれで良かった。と安心出来るメンバーは少ないであらう

その中の一人である姫歌は彼女達に

「そんな、私達を甘やかさないで下さい。」

アイドルリリイであるひめかは当然として他の三人も甘やかしたくなるぐらい可愛さがあるのは否定しないですけど……!

でもそれじゃあ私達の為にはなりません」

「姫歌ちゃんは可愛さの自信はあるんですね……私はとて……」

「自信のある事には堂々とする。」

大切よね、とても」

「いつから定盛は自分が可愛いと錯覚していたんだろうね??」

姫歌的には駄目な所は駄目と言ってほしいようで叶星の対応には不満を見せる

とはいえ甘やかされる原因も本人の中では分かっているのではあるうが的がズレている気がしないでもない

そのせいなのか灯莉に関してには彼女を煽っていると捉えかねない返しをしている

まあ、自信を無くすよりは堂々としてほしいと思っているのはあるのだが

すると叶星が

「と、とにかく。今日のミーティグは反省会じゃないわ

サブリーダーを決めようと思ったの」

その発言に一年生は驚く

今の今までサブリーダーは高嶺だとばかり思っていたのだ

レギオン内での実力や立ち振る舞いを考えれば当然なのだが当の本人はというと

「ふふっ、いつから私がサブリーダーだと錯覚していたのかしら？」

と、こんな感じであり今まで空白であつた事が判明する

すると灯莉と姫歌は

「それじゃあ僕達の誰かがサブリーダーになれちゃうって事だ☆」

「そんな訳ないでしょう、馬鹿ねえ」

そんな事を言う

この場で改めて高嶺に就任を依頼するのだと思っていたのだが、叶星は

「いいえ、灯莉ちゃんの言うとおりよ

サブリーダーは定盛姫歌さん、貴方に任せたいと思っているわ」

「へっ…？」

「わっ…！」

「まあ、妥当な所よね。…と言う事は姫歌ちゃん、もしかして…」

「わわー、すっごーい♪」

定盛、サブリーダーなんて大出世じゃん☆」

その提案に任された本人を含め驚きを見せるが海漓は違う

今までも一年生のフォーメーションは彼女が指示を出しており、一年生が多いこのレギオンのサブリーダーとしては彼女ほど妥当な人選はいないであろう

上級生と下級生に一人づつ権限を持たせておけば非常時の対応にも問題は無いし、先の救助活動のように他のレギオンと協力することが今後もあるのならば本人の性格も考えれば彼女程適している人物はいないであろう

そして、サブリーダーに任命するということはリリイとして見るならばもう一つ別な可能性もある事の判断なのかもしれないがこれは海漓の憶測の為、言うのは野暮と思いいこの場では発言しない。

その後はサブリーダーとしての心得をかんたんに説明され記念の胴上げを行いこの日のミーティングは終わり各々は部屋へと戻っていく

その後夕食と入浴を済ませ部屋でゆっくりしようとしていたのだが、唐突にドアがノックされる

部屋には海瀉が一人でいたため対応するとそこには姫歌が立っていた

「海瀉、ちよつといい?」

「あー、話ってやつね。良いよ」

そうして部屋を出て暫く歩く

途中姫歌は

「そういえば同室の子は?」

「所属してるレギオンのミーティグと今日の反省会

出撃の後より夜の方がゆっくり出来るって言ってリーダーの人の部屋に集まってミーティグだつて

そつちこそ、灯莉ちゃんは?」

「もう寝たわよ、流星に疲れたみたいね」

時刻は夜の9時を過ぎた辺りで就寝にはまだ早いとも思うが、今日の活動でかなり疲れていたのか、早めに寝たようである

普段なら昼間ミーティグを行なった所で話すのだが姫歌はあえて外にでる

敷地内ならば消灯時間までは寮の外に出ているも許されているので二人は近くにあるベンチに腰掛ける

二人にとっての夜はまだ終わりそうにはない

第12話

二人はベンチ腰掛け一息つく
そうすると姫歌は唐突に

「鎌倉から来た海瀧にしか聞けないけれど、正直どうなの？」

「どうなの？ってどういう事？」

「今の私達の実力よ。あの戦闘で真っ先に対処できたのは海瀧だけでしょ？鎌倉じゃあれが普通なの？」

姫歌としたら単純な興味

後は自分達の力を鼻屑目無しで知りたいといったところであろうか

先のミーティングでも褒めるよりも反省点を上げ、甘やかさないで欲しいと意思を示すあたり向上心は強いタイプと言えるであろう

ならばここは嘘を言わず正直答えるのが正解と海瀧は考える

「リリイも振れ幅は大きいから一概にあの対処が当たり前と思われても困るかな

私はそう言うのがたまたま出来た……と言うか得意な部類だと思ってるけど出来ないリリイも多くいるわ。

流石に百合ヶ丘の怪物共と比較するのは駄目よ。アレはもうリリイとしての出来が違うからね？」

「姫歌達はどうなの？」

「鼻屑目無しに見ても優秀よ。」

ただ……

そう、百合ヶ丘のような世界的名門のリリイと比べてしまえば実力は格段に落ちるが、グランエプレの一年生は全員がレアスキルに覚醒している

百合ヶ丘などの名門は中等部の時点で覚醒しているがコレは特別な部類であり平均的に入学直後にレアスキルに覚醒していれば大変優秀な部類で大体は夏から秋口にかけて覚醒する事を考えれば非常に優秀である

「ただ？」

「レギオンとして…って考えるとちょっと微妙かな…ってのが私的に思う所かな」

「今のグランエプレは良くも悪くも叶星さんと高嶺さんのレギオンよあの二人が絶対的な軸として機能する事が前提な所もあるし、それは訓練や戦闘でも感じたでしょ」

リリイが優秀だから所属するレギオンも優秀とは限らないとはよく言ったもの

優秀なリリイを指定された人数揃えれば後はどうにでもなる…という事も不可能ではないが、それでも出来る事は限られてくる

グランエプレはこれに該当する…と彼女は考える

叶星と高嶺の二人は間違いなくトップクラスのリリイであると彼女は思うし何ならもっと知名度があってもおかしくは無いとも考えている

この二人が機能しているからこそグランエプレはトップレギオンと言われているのだろうし逆に現状ではそれこそが最大の欠点であるとも彼女は考える

「軸が機能すれば問題ないけど機能しなければレギオンとしての戦力が格段に落ちる…これは相当に問題よ」

勿論常に6人で行動し戦闘を行うのであれば戦力差と言う不安はあるものの上手く行くであろう

しかし、常に6人で戦えるとも限らない

戦力の分断や上級生が何らかの事情で戦闘に参加できないとなった時に現状だと非常に危うい

実力は当然の事、戦闘経験の不足というのはリリイ個人の生存確率に直結する

小型だけならまだしも昼間のように見慣れないタイプのヒュージが現れないとも限らない

その時に一年生が何も出来ないとなると全滅するのは目に見えている

そしてそれは姫歌も分かっているようである

「でしようね。…やっぱひめか達がもっと強くなるしか無いわね

足手まといになる訳にはいかないもの」

「まあ、それが一番よね。」

そうすればやる事増やしてくれるかもしれないし：ね？（叶星さ
んってあの人みたいに黙って言う事に従えば勝たせてやる：つてい
うタイプじゃないしね）」

様々な特色を持つガーデンがあるように、レギオンを率いる隊長に
も様々なタイプがいる

そんな中で海瀆が思い浮かべるのは一人のリリイ

自身が中等部時代に所属するガーデンの高等部の戦いを何度か戦
いを見学させてもらう機会があったのだがリリイ個人の戦闘力以上
に彼女の指揮能力には驚かされた記憶がある

直接言葉を交える機会は多くはなかったのだが噂や戦闘を見て
思ったのは指示に従って動いたリリイは何が起きているのか理解す
る前に戦闘に勝利していたという点だ

指示に従えば確実に勝てる：を体現した存在であろう

勿論、所属リリイのスペックの高さもあつての事だろうと言う感想
ではあるが。

とはいえ叶星は彼女のようなタイプでは無い事は明らかであり、ど
ちらかと言うとメンバーの戦力を判断し役割を与えていくタイプだ
一年生を戦力として当てにされていけないからこそ二人で対処する
ことが主となっている現状

その中で戦力として認められるには自分達が力を付けることが最
短ルートで有る事は簡単に想像できる

勿論実力以上に連携も大切なのであろうが、そちらは慣れるしか無
い

全員が古くからの顔見知りで組んだレギオンなら連携など数時間
もアレば完璧にこなせるのであるのが生憎とグランエプレは一年生
全員が初対面

古くからの付き合いと言うと上級生二人が該当するだけである

連携に関しては合わせていくしかないのだが上級生から宛にされ

てない以上自分達は一年生での連携を合わせていく必要もある

もしかしたらそれ以外に一年生を後方に下げる理由が何かあるのかも知れないが、予測を建てるには根拠が少なすぎる

その後は何気ない雑談を行い消灯時間も迫って来た為各々、寮の自室に戻る

それから数日は訓練と簡単な戦闘があつたのだが中々訓練通り上手く行かない日々が続いて行く日々が過ぎていくのだが、

数日後グランエプレに取って一つの転機となる出来事が訪れるのである

第13話

この日も授業を終えグランエプレの一年生は集まって雑談を行っていたのだが、紅巴の元気がない

本来ならば体調不良を疑うのであるが彼女が元気を失う理由など一つしかない

「今日は叶星様と高嶺様が居ないのが紅巴の元気がない理由でしょう？」

同じ学科で紅巴を間近で見ている姫歌は簡単に原因を言い当てる

まあ、彼女が元気を失う理由などそれぐらいしか無いのもまた事実ではあるのだが

「えっ、今日って先輩達居ないの？」

「昨日ミーティングで言ってたでしょう？お二人は今日、都の防衛構想会議で不在よ」

「灯莉ちゃん、その話のとき半分寝てたからね…」

灯莉は初めて聞いたようなリアクションをするが昨日のミーティングの終わりに説明されたことを告げる

二人が参加している防衛構想会議とは複数のガーデンとレギオンが定期的に集まりヒューズの出現状況や分布を主に話し合う

勿論これが全てではなく会合の規模によって話し合う内容も変わってくるのだが、今回はそこまで大きな規模ではないと思うので夕方には帰ってくるであろうと紅巴は説明する

「かなほ先輩達が居ないってことは今は定盛がリーダーだ」

「そうよ、今はひめかがリーダーなの

そしてグラン・エプレは神庭のトップレギオン!!

…つまりひめかはトップアイドルリイと呼んでも過言ではないわ」

「あれ？もしかして今神庭に残ってるリイって殆ど一年生??」

灯莉と姫歌はいつものやり取りを行っているがふと海瀧は気がついたことを尋ねる

グランエプレの上級生がいないのは知っているが今日は上級生の大半を見かけていないのだ

残っているのはレギオンに所属していない三年生が数名と負傷などの理由で校内に残っている二年生がいる程度

大きな戦闘が行われていないのにこの少なさは不自然すぎる

「そうなりますね…課外授業なども重なってますし戦えるリリーのほぼ全員が一年生ですね」

「んー、そっか、んー…」

不味い状況だと海瀉は判断する

戦力に恵まれているガーデンならば上級生が不在でも何の問題も無いのだが神庭の場合戦力に特別恵まれているとは言い難い

グランエプレ以外の一年生リリーにも実力者はいるが数が少なすぎるのだ

しかもグランエプレを筆頭に上級生がレギオンの軸を担っているレギオンが多い神庭で上級生が不在のこの状況で機能するレギオンがどのくらいあるのか

万が一機能しなかった場合、フォローの役目を誰が担う事になるのかはもう分かりきっている

だからこそ今日に限ってはヒュージが出てこないで欲しいと強く祈るのだが、世の中は甘く無い

起きてほしくない事が起きるのが現実だ

「…ッ！ヒュージの出現のサイレン!?!」

「よーし、出撃だ☆」

よりによって来てほしくない相手がピンポイントで来る

舌打ちの一つもしたくなるがよく我慢したほうだと海瀉は自分を褒める

上級生がいない状況とはいえ自分達はリリー

姫歌は出撃を決めた為グランエプレのメンバーは全員が準備をする

そうして神庭から出撃可能なりリイが現場へと急行したのだが、いざ現場に到着すると想像を上回る酷さだった

ヒュージとの戦闘はまだ行われていないため人的な被害は出ていないが、そもそも戦う心構えが出来ていないリリイが多すぎたのである

勿論トップレギオンである自分達よりも言い方を悪くすれば実力が劣るため仕方の無い所も勿論ある

だが、それを抜きにしても出撃したのに方針を決めておらず挙げ句の果に、ヒュージとの戦闘経験も少ないからこの後どうすれば分からない為、こちらに指示を出して欲しいと言い出す始末である

神庭の掟ともいえる

『リリイの戦いは今日が最後かもしれない、命を賭すに値するかどうかはリリイ自身が決めるべき』

その覚悟があるならば指示を依頼するにしても最低限やっていなければならぬ事が多くある

勿論上級生が居ない事や戦闘経験が薄い等同情の余地はあるのだが海瀉にしてみれば思う所はある

すると灯莉は

「そんなの真正面からドーン☆で行けば大丈夫!!」

いつものノリでそんな事を言い放つ

当然その言葉を聞き、戸惑いや姫歌も止めに入るが

「んー、その案、結構良いと思うな

灯莉ちゃんの言うことだからって何でもかんでも頭ごなしに否定するのは良くないわ

「ここは、私達が先頭になって正面から行きましょう」

「ちよつと!?!」

「海瀉ちゃん!?!」

まさか灯莉に同調する形になると思わなかったのか姫歌と紅巴は動揺する

普段は常識的だと思われてる海瀉が突拍子もない事を言う灯莉に同調したのだ

無理もない

が、海瀉にも根拠はある

サブリーダーでも何でもないがサブリーダーに一つの意見を出すぐらいは許されるであろう

レギオンの仲間が普段以上の負荷を与えられ困っているのならば一つの手を示し支えるのもまた仲間だ

「私達じゃまだ出来もしない事を無理にやろうとした結果ミスを連発して損害多数なんて馬鹿のやることよ

なら多少のリスクはあるけど私達が先頭になってヒュージとやった方がまだ損害を抑えられるわ」

「で、でもそれじゃ他のレギオンが…!」

「他も何も無いでしょ

戦闘経験も不足してるし事前の指示も何も無いし準備も不完全、そんな中で下手に連携しようものなら味方の流れ弾にも当たるし、お互いに邪魔になるだけ

なら下手に連携するぐらいなら私達が前に出て他は後方で私達が仕留めそこねたヒュージを頼む

これがベストだと思うけど、姫歌ちゃん、どう?」

これは命令では無くあくまでも提案

姫歌がこれを採用するのか、はたまた別な案を出すのか
彼女の引き出しを増やしたに過ぎない

すると姫歌は

「そうよね…アイドルリリイならこんな所で迷ってはられないわ
私達はトップレギオン、なら先陣を切って目立つわよ!」

他のレギオンの皆は後方で待機しつつ打ち漏らしたヒュージの相手をお願い

そつちにレジスタ持ちは…いるわね。

よし!行くわよ皆!」

姫歌も気合を入れ直したのか透き通る声で指示を出した後それぞれ配置につく

そしてグランエプレも先陣を切って行くのだがその途中

「海漓ちゃん、本当に良かったんですか?」

「ん?何が?」

「さっきの言い方です。あれじゃ暗にあの方達に対する戦力外通告ですよっ。」

「実際そうでしょ？」

出撃命令が出たから出撃したけど何も出来ません、だから指示お願いします。

挙げ句の果に経験少ないのけどヒュージと戦っていいか？って聞くとか戦場を舐めてるでしょあの子達」

紅巴からの言葉に海瀉はそう言い放つ

すると紅巴は

「ま、まあそうですね…」

苦笑いしつつも否定しないという事は彼女も内心想う所があったのであろう

そんなこんなで全身していくと早速ヒュージのお出迎えである

「来たわね…！訓練通りに行くわよ

海瀉は前に出てヒュージを迎撃しつつ攪乱

囲まれないように姫歌をサポートするわ

灯莉と紅巴は後方から支援

全員マギの無駄遣いはしないでよ！」

上手く行かない事も多かったとはいえ姫歌の指示も大分様になってきたようにも見える

そうしてグラン・エプレにとって長くなる戦闘の幕が開けたのだ

第14話

敵を倒しながら進軍するグランエプレの一年生

道中に現れるヒュージを撃退しながら進んでいくのだが、ヒュージの数が予想していたよりも多い

それは一年生全員が感じていた

「ねえ、ヒュージ多くない？」

大量発生って言われてたっけ??」

「いえ、そのような報告は…」

大量発生ならば事前にそういう状況だと説明されるし、神庭の現在の状態を考えるなら他所のガーデンに応援を頼むはずだと、なるとこの状況は想定外

イレギュラーが発生した事だと言うのは想像がつく

ヒュージが出現した座標まで到着するとそこには異様な光景が広がっていた

「いや、向かっているとときから薄々分かってたとはいえ多すぎるでしょう
こんなに居るなら居るって言ってよね」

海漓は思わず悪態をつく

大量発生してるならそう言ってくれば良いし、何より上級生が居ない今日に限って言えば出てくるなとも言いたくなる

「私達が向かい始めた直後にケイブが発生したようですね…」

足並みも揃って無い事がヒュージの増援を防げなかった原因かと
そう言いながらも今度は後方にケイブの反応が

「とにかくこれ以上好きにさせるわけには行かないわ

後方に待機させてるレギオンに声をかけてー!」

「そんな事言おうにもここからじゃ声が届かないよ」

通信入れようにも繋がらないし」

う
姫歌はすぐさま案を出すすがそれを伝える事ができないと灯莉は言う
紅巴も持ち場を維持しつつ後方のレギオンに通信を入れようとする
るが一向に反応がない

戦闘音は継続して聞こえてくることから後方に待機させたりイ
はヒュージに倒された…というより通信機の破損、もしくは通信機能
が使えない状態になっておりそれに誰も気がついて居ないと予想で
きる

「えっと、こういう時どうすれば良いんだっけ…誰かを向かわせる？
いや、でも…」

姫歌も叶星から教わった事をどうにか活かそうと考えるが、相次ぐ
イレギュラーと不足する自軍の戦力、増え続けるヒュージと彼女へ膨
大なプレッシャーがかかる

「灯莉ちゃん、左から来てる!!」

「オツケー!」

そして彼女、いや一年生全員がこの状況を打破するための経験が不
足している

全員持ち場を維持するので精一杯

ガーデン側からの増援が来てくれれば御の字

かなり厳しい状況であるのに、さらに追い打ちがかけられる

「あれは…この間出現した高機動タイプのヒュージ!」

紅巴が発見したのは彼女達が取り逃がしたタイプ…もしくは全く
の別個体なのかそれは分からないが、とにかくこの状況で間違いなく
現れてほしくなかった個体がこの場に現れる

「紅巴ちゃん、テストメント!」

「はっ、はい!」

海瀛は紅巴にレアスキルを発動するように促すが、レアスキルの発
動よりも先に個体は混乱している姫歌へと狙いを定める

「…っ!」

「定盛…!」

姫歌の対応が遅くなったことに灯莉は気がついたのか自身を盾に
しようと彼女の前に立ち攻撃を受けようとするが

受けたのは攻撃の衝撃ではなく自身の横を通り過ぎた際に感じる
風

そして聞こえるなにかにぶつかる音

「…ユーバーザイン。結構便利よね、コレ」

聞こえるのは海瀉の声

その声はこの状況にも関わらず不気味な程に落ち着いていた

「私のテストメントと海瀉ちゃんのエーバーザインを組み合わせて二人の気配を？」

「そっ

ネタバラシするなら二人の気配をそこの崖にズラしただけ

勿論ヒュージからは二人を見えないようにして、ね？」

ユーバーザインとは本来自己の気配を操作するレアスキルなのが紅巴のテストメントで範囲を広げればユーバーザインの適応範囲も広がる

それで二人の気配を操作したというカラクリだ

ユーバーザインとテストメント持ちがいれば誰でも簡単に出来るというのが彼女の考えなのだがこれは海瀉にしか出来ていない

鎌倉時代にこれをやっている、もしくは成功したりリイを少なくとも彼女は知らない

彼女にしか出来ないからなのか、それとも他に試すリイがいないからなのかは不明

そして激突されたヒュージはというとすぐに復活しこちらの様子を伺う

心なしか殺気も2割増位で増えているかもしれない

「崖に突っ込ませて倒れるほど雑魚じゃないか、まあ、そりやそうよね？」

ヒュージだし」

そう言いながら海瀉は両手に持つCHARMを合体させ長刀へと変形させる

トリグラフの機能の一つであるパルチザンモードの姿だ

「いくら最期かもしれずとはいえこんな所で死にたく無いし、本気で行くかー」

そう言いながら彼女は高機動型から目をそらさない

崖に突っ込まただけではダメージを与えたとさえすぐさま体制を立て直す

その様子を見た紅巴は

「どうするんですか？」

「どうするって、そりや仕留めに行くに決まってるでしょ。アレ、多分あの時仕留めそこねた個体よ

仕留めそこねた個体は自分達で倒す…その位の責任感を持つてるわよ、私」

以前の撤退を間違いとは言わない

あの時はアレが最善策だという判断を下したし、取り逃した個体が短期間で再び自分達の前に現れるなど予想は出来ない。

同じ個体なのか、はたまた別個体なのかは分からないがこうして目の前に現れたのだ

今度こそ仕留めると考えるのは彼女の中では当然である

「…リリイは結果が全て…あながち間違いじゃないのよね。こんな状況だと特に」

「海漓ちゃん？」

「何でもない、とにかくあの特型はここで仕留める!!紅巴ちゃん、小型任せた!」

「はっ、はい!」

海漓の普段とは違う気迫に押されたのか紅巴はすぐさま姫歌達の間とところまで交代する

彼女がこうするには理由がある

少なくともこの状況でグランエプレが目立った戦果を残せなかった場合に起こりかねないある可能性を考慮したのだ

勿論、神庭の校風を考えたら起こる確率は限りなく0に近いが、その可能性を少しでも少なくしておきたい

それにこの場で体制を立て直せば増援は必ず来るという確信も彼女にはある為、時間稼ぎという目的もある

ヒュージからすれば動きを止めたりリリイを仕留めるチャンス

まっすぐこちらに向かつて突進してくる

このタイプの対処としては以前叶星達がやったように自身も高速で移動し先手を取る、もしくはフォーメーションを組み動きを封じた所を近接戦で仕留めるのがセオリーである

が、あの時とは状況が違い今は小型のヒュージも大量にいる以上、特型一体に意識を向けるわけにも行かない

と、ここで海濱はパルチザンモードを一旦解除

左右にCHARMを構えると右手にあるCHARMから二本のワイヤーを射出する

「使える物は使わせてもらおう！」

近くに居た小型ヒュージに先端が突き刺さるのを確認するとそのまま突進してくる特型ヒュージに叩きつける

衝撃は凄まじく小型のヒュージは絶命

特型には致命打にならないが左側にへこみが見られる

小型に突き刺したワイヤーを戻しつつ左手に持ったCHARMで特型に追撃を叩き込む

ヒュージが体制を立て直す前に今度はレアスキルユーパーザインを発動し姿と自身の気配を消す

気配が消えた事でヒュージは姫歌達に攻撃を仕掛けようとするが、そうはならない

「こつちよこつちー！」

姿も気配も感じられないのに攻撃が当たる

攻撃が来た方に体の向きを変えるがそこには誰もいない

向きを変えた反対方向から攻撃が飛んでくる

「こつちだつて、こつち」

再度声が聞こえ今度は姿も見える

ヒュージはすぐさま反転し高速移動で突進する

そんな中でも彼女は微動だにしない

ヒュージの体当たりが直撃する寸前で彼女の姿が消える

ヒュージはかなりの速度が出ており急に止まったり軌道を変えることができず先程と同様に崖に突撃してしまう

流石にこれには堪えたのかヒュージは一回り大きな姿になる

それを確認した海瀉は正面からヒュージに向かって突撃

小型ヒュージも付近から現れ特型ヒュージもタイミングを合わせるように突進

「まーずは、っとー！」

本来ならば射撃で小型を倒すのがセオリーであるが彼女は倒すのではなくヒュージに突撃

そのまま攻撃を当てるのでなく横に回り込むと反撃される前にヒュージに足を乗せ、マギを足元に集中

タイミングを測り力強く跳躍すると突進してきたヒュージの金属部分に飛び乗る

飛び乗ったと同時にCHARMをパルチザンモードに変形

「捕まえた!!」

ブレードを頭部の付け根部分に狙いを定め何度も突き刺す

胴体には黒い触手のようなものもあるのだが長さに限度があるのか海瀉に向かって攻撃を仕掛けてこない

ならばとヒュージも高速で移動し振り落としにかかる

「私、バランス感覚は良い方だね…根比べと行きましようか！」

足元でバランスを取りつつ何度も何度も執拗に突き刺す

その際、ヒュージの悲鳴と返り血が自身に飛ぶがそんなものはお構いなし

先程より強固に振り落としかかっていることからダメージが入っているのは確実

あとはこのまま装甲を貫き止めを差すだけ

とはいえその止めに中々持っていけない

「硬い…いやこれじゃCHARMが持たないかも…」

そう思いながらも突き刺し続けると突き刺していた子機側の剣が碎け散る

その際一瞬だが海瀉は体制を崩してしまう

そうなってしまうえばヒュージが有利になるのは当然である

高速で移動しながら体を揺らせば海瀉は簡単に転落

後はそこに追撃として突進をお見舞いすればいいだけの事

そうしてヒュージは海濱に突進をしかけるが海濱がCHARMでは無くマギで生み出したバリアを展開し攻撃を受け止めるが直ぐに碎け散り、池の水面へと叩きつけられる

攻撃によるダメージはうち消せたおかげか直ぐに体制を立て直すことが出来たが子機側のCHARMをよくよく見ると剣だけでは無くCHARM全体がひび割れておりこれ以上の使用は不可となってしまう

付近に小型のヒュージも集まっており状況は不利なのだが海濱は動揺しない

むしろ悔しがっているようにすら見える

「タイムアップ…か。仕留めたかったけど仕方ない

まあ最低限の事は出来た…かな？」

そう呟いた直後、大きな爆発音が響くのであった。

第15話

爆発音の後、海瀉達の目の前に現れたのは2つの人影

それは最も待ちわびた増援とも言える

「皆、大丈夫？」

「随分と派手な戦闘ね」

叶星と高嶺、二人がこの場に現れた事に戸惑いや驚きの反応があるが海瀉は違う

これだけの数のヒュージが出たのだ

会議が終わってから知ったのか、会議を抜け出して来たのかは定かでは無いがとにかく神庭の上級生が慌てて駆け付けてきたのであろうことは予想できる

海瀉が想定していたよりも早かったのは嬉しい誤算でもあるが

二人が来たとはいえ状況は悪いまま

更に言うなら先程まで海瀉が相手をしていた特型ヒュージは不利と悟ったのか撤退し、それを守るかのように小型が集まってきた

そしてこれらを見ていた叶星は一年生に対して

「皆は下ってて。残りは私が片付けるわ」

「そんな・ひめか、まだ戦えます」

「わ、私もです！」

「僕もいけるよ☆」

後退するように指示を出す、ニユアンスは違えど全員が戦えると答える

勿論マギの残量や体力的に限界に近いのは気がついてはいるが、自分達はトップレギオン

下がれといわれてハイそうですかと素直に納得するほど情なくなっていく意志であろう

しかし、叶星は許可を出さず下がるように指示する

全員のマギと体力の低下を考慮しての判断だろう

高嶺は反対しているがこれに關しては叶星も引く気がないらしい

海瀉にしてみれば特型は仕留めきりたいたのだが自身のマギやCH

ARMの状態を考えるとかなり厳しい

「(意気込んだは良いけどペース配分ミスってリリースに任せた投手の気分だなこりゃ)」

内心そんな事を考えつつ親機で小型ヒュージを牽制しつつ一年生達と合流

すると姫歌は

「海瀉！大丈夫なの!？」

「んー、まあ何とか。悔しいけどここは先輩たちに締めてもらいましょ」

そう語りかけて来たため何でもないと告げる

そうしている間にも叶星はヒュージに追撃をしかけるが海瀉の目には何かがおかしく映る

「確かに逃したくはないけど何を焦ってるんだろう？もしかして二人もマジがキツイ？」

動きは切れているしヒュージを圧倒するのだがどこか無茶をしているようにも見えるし、判断も良くないように映る

そうしている間にも叶星を取り囲むように小型ヒュージが集まってくるが、それを見た高嶺が自身のレアスキル、ゼノンパラドキサによる高速移動からの強力な攻撃で一層する

「凄いやい☆」

「高嶺様…流石ですー!」

二人は驚愕と感激しているが、どうにも喜べる状況では無い

小型を一層出来たものの肝心のダメージを与えた特型は取り逃がしてしまう

レアスキルを考えたら高嶺が引き継いでもいいのだろうが肝心の高嶺も小型を一層した後、突如地面に膝を着いてしまう

それに気づいた叶星も追撃をやめ、高嶺の元に向かう

何を話しているか、までは聞き取れないが叶星は相当焦っているようにも見えた

とはいえこの結果には不満しか残っていないのも事実

この光景を見ていた海瀉は

「マジか…こんなのブラウンセーブじゃん…厳しい状況で投入する事になっちゃった私達にも責任はあるけど…」

「海瀉…？」

「いや、何でもない。」

眩きを姫歌に聞かれたのかと思ったがそうではないみたいだ
良かったと内心ホツとする

そうしていると

叶星がこちらに向かって歩いてくる

「皆、お疲れ様

今日は大変だったでしょう。」

そう言つて一年生全員を労う

灯莉は高嶺を心配するがこちらも大丈夫だと安心をさせる

その後、姫歌と海瀉に対し

「二人もありがとう。」

他のレギオンに声をかけてくれてたんでしよう？」

「でも負傷者が…」

「全員軽傷よ、心配しないで。」

「そうですか、なら良かったです」

姫歌はそれを聞き安心する

後方待機を命じていたとはいえ通信に出れない程の戦闘になった
のだ

心配するな、と言う方が無理である

「海瀉ちゃんも大丈夫…？」

「ええ、まあ、無傷…とは行かないですけど」

「返り血もかなり浴びてるし念の為ガーデンで検査を受けて貰うわ。
皆の所に戻るのももう少し待つてもらえるかしら？」

これに関しては仕方がないというのは理解している

ヒュージの返り血を全身に浴びたのだ

返り血を飲みこんではいけないから直接体内に取り込んではいない
が肌には付着しているし傷口から入ってしまったている可能性もある

黙ってガーデンに帰る…と言う訳には行かないであろう

「仕方ないですね…こればかりは」

そのせいもあるのか、姫歌達3人は先にガーデンへと戻り高嶺と海瀧は救助待ち

叶星は現場での事後処理に追われている

そんな彼女を見ながら今日の反省を一人でする

特型相手に挑み結果的に取り逃した事もそうだが始まりからしてイレギュラーが多かったこの戦闘で重症者、犠牲者無しは十分である
「(気になるのは最後の叶星さんと高嶺さんの動き…まさかとは思うけど高嶺さん、もしかして…?)」

そして気になるのは最後の動き

マジや体力の減少を考慮したとしてもやる事が不自然すぎる

上級生二人もヒューズを倒しながら来たとはいえ高嶺に関してはバテるのが早すぎる

道中でラージ級やギガント級を撃破してきたのならば話は変わるが数にもよるが小型を一掃しただけであそこまで消耗するだろうか？

そして極めつけは最後、高嶺が膝をついたときの叶星の心配の仕方
遠目から見ても被弾などは確認できていないし圧倒的な展開からの出来事なら普通はマジの減少か疲労を疑うが叶星の動きはそんなレベルの状態ではないような心配の仕方

「(上級生のやる事に口なんて出せないしなあ…どーしたものか…)」

彼女がそう考えている中、実は叶星も問題に気がついていた

「(ここに来た時のあのヒューズの消耗の仕方と異常な返り血…海瀧ちゃん貴方…もしかして…?)」

戦闘音を頼りに現場に駆けつけたときの光景は衝撃であった

彼女や高嶺にしてみれば海瀧はどこか力を隠している…という予想は自らの経験値を素に立てれたが

現場の光景を見て、そして叶星は事後処理をしていく途中、一年生達の詳細な行動を把握する中でそれは確信に変わる

叶星が気づくということとは恐らく高嶺も状況を見れば気がつくことが出来たであろう

そして、それは戦闘を見ていた海瀆にとっても同じ

彼女の實力があれば今日の戦闘を見てこちらの”秘密”に気が付かれた可能性もある

「(これは…どうすればいいかしら…)」

仲間を疑う、なんて事はしたくないがこればかりはまだバラされるわけには行かない。

下手に深入りして墓穴を掘るわけにも行かないし、かと言って見過ごして方が一の事が起きてからでは遅い

この日の戦闘は上級生、下級生ともに多くの反省や後悔、課題等が残ることになった

唯一の救いは戦闘に出撃したりリイに重症者が出なかった事であろう

第16話

戦闘終了後、海瀛を筆頭とした負傷者はガーデンの治療室で検査と治療を行っていた

検査の結果、以上は何も無かったが経過観察も兼ねて数日はこの部屋で過ごしてもらおうと教官より伝えられる

ちなみに他のメンバーだが

一年生3名はこことは別室で検査と治療の後、部屋で療養

高嶺は海瀛と同じく治療室で数日の療養

叶星は事後処理とガーデン主催の反省会に出席することも伝えられた

部屋に一人でいてもやる事が特にないため、携帯端末で情勢を把握する

そして目に入るのは一つの記事

「アールヴヘイム、新潟外征決定！……ねえ……」

自身の姉が主将を務める世界最強とも名高いレギオン、アールヴヘイム

その外征が決まったというのだ

行き先は昨今、世界7大アルトラの内の一体であるファブーニルがネストを構えた結果、ヒュージの襲来が激しく陥落間近とも言われている新潟

紆余曲折が有りながらも外征が決まり、現在は任務に向けての調整を行っているという

構成員全員が世界トップクラスの實力を誇り今回の作戦のためには全員にユニークCHARMが用意されるという事からも作戦の難易度の高さが伺える

海瀛にとって見れば百合ヶ丘など文字通り住んでいる世界もリイとしての出来も違うため例え身内がしようとも他人事である

あのガーデンでは叶星と高嶺の上級生が通用するというレベルである

まあ、敢えて言うなら命を落とせば多分悲しむし、生還すれば安心

するかもというレベル

出来損ないである自身にはもう連絡などしてくる必要など無いが、せめて両親には連絡の一つでもしている事を祈る

世間は比較するが姉は姉、自分は自分

今の自分は神庭のリリイなのだからそのように振る舞う

それだけである

それを考慮しても今日の戦闘に関しては反省する事が多い

イレギュラーな事が続いたとは言え、やはり例のヒュージを仕留め切れなかったことが最大の失敗である

あの中ではボスの様な立ち位置であることは明確であり仕留めきればヒュージを押し返す事が出来たかもしれない

自身の見通しみの甘さを痛感する

とはいえマイナス要素だけではない

途中テストメント持ちである紅巴の力を借りたユーバーザインの応用

ぶつつけ本番にしては中々上手く行ったと思うが欠点も多くあるため使えるかどうかは今後次第になるとはいえユーバーザインの使い方の一つになるかもしれない

そんな手応えを感じれたのは大きな収穫

今日の戦闘を反省して知る中で、教導官が部屋に入ってくる

「天野さん、伝え忘れてた事がありました」

「なんですか？」

そう聞くと教導官は

「貴方のCHARMなんですけど、メーカーからの要請でアップデートに出す事になってしまいました…」

困ったようにそう告げる

アップデート自体はよくある事なのだが、問題は彼女が使用するC

CHARM

教導官曰く神庭には予備のトリグラフが配備されていないという

「あー、つまり他の機体を使う事になるってことですね…ヒヒイロカネ繋がりだと…アステリオン有ります?」

「アステリオンですか?それなら配備されていますけど、トリグラフを使う貴方の戦闘スタイルと合わないのでは?」

「あー、それは、問題ないです。」

トリグラフの前はアステリオン使ってたんで」

「分かりました。ではそのように申請を通しておきますね。」

そう答えると教導官は部屋を出る

数日以内には代機を渡す事ができるという事もその時に告げられる

海漓にしてみれば数年ぶりのアステリオンの使用

懐かしさもある

とは言え気になるのはアップデートの内容

定期的にアップデートは行っているがこうも早いタイミングなのは予想外

「まあ、使えないアップデートをする訳が無いからそこは心配してないけど…どんな風に仕上がってくるのか」

自身の愛機がどのような仕上がりになるか、期待と不安を抱えこの日は眠りにつく

ちなみに海漓は数日後にガーデンに復帰

高嶺もその後無事に復帰出来た事を付け加えておく

第17話

グランエプレのメンバーが全員揃ってから数日後

この日の放課後もいつも通り雑談を行っていたのだが、不意に灯莉が

「あつ、そうそう☆

みんな揃ってるし見せたいものがあるんだ」

そう言いメンバーに見せたのはガーデンからのボランティア実施要項

神庭と言うガーデンはリリイとしての育成以外にもリリイと言えどまだ10代、戦うだけでは駄目と言う理由からボランティアなど地域貢献活動にも力を入れている

「ボランティアね…確かにガーデンとして力を入れてるけど姫歌達はトップレギオンなんだしそんな事にかまけている暇なんて…」

「まあまあ、こう言うのも必要だよ

戦うだけがリリイじゃないってのがウチの方針でしょ?」

海漓はそう言い返す

姫歌の言う事も間違っていないのであるが、神庭の方針、そして以前叶星が掲げたグランエプレのレギオンとしての方針

その方針を掲げた以上、それに沿うことをするのもまた必要なのだ
姫歌がこう言い出したのも恐らくこの間の反省を活かすためなのだろうが、それでガーデンやレギオンの方針に反してしまっただけは意味がない

「へえ、ボランティア先は幼稚園なのね」

「よ、幼稚園!?!」

高嶺はプリントを読み終えたのか行き先を見て一息つく

灯莉がよくボランティアで訪れる幼稚園で働く先生がこの間のヒュージの襲撃で避難する際足を痛めてしまったそうで、子供達の相手をするには少々大変であり神庭に改めて救援…というほどではないが子供達の面倒を見るのを手伝ってほしいという依頼が来たわけだ

最終的にはリーダーの叶星が了承し今回はグラン・エプレとして幼稚園でのボランティア活動を行う事になる

そして、ボランティア当日

グラン・エプレが幼稚園に到着し大人達に挨拶を行い、初日なのでまずは子供達とのコミュニケーションを兼ねて遊び相手を務めるのだが、早々に試練が訪れる

訪れてるのは主に姫歌なのだが

「さだもりー、ぴよんぴよん」

「ぴよんぴよんさだもりー」

「あああ〜これ無理〜誰かー!!」

アイドルはお触り厳禁なのよ〜!!」

試練というか本人の性格もあり子供達に懐かれているだけなので問題はない。

ちなみに子供達はツイントールを執拗に触りに来ているが何も問題は無い

問題はないのである。

で、海漓はというと

「お姉ちゃんは何作ってるの〜」

「見せて見せて〜」

「いいよー、丁度完成したところ。はいどうぞ」

そう言っ手渡したのは紙で作った紙飛行機とブーメラン

「投げてみて、驚くわよ」

そう言い子供達がブーメランと紙飛行機を投げると

両方とも手元に戻ってきたのだ

「すっごーい!!戻って来た〜」

「私もやりたーい」

「楽しいけどそれ、蜂の巣の近くで投げたら駄目よー蜂さんが怒っちゃうからねー」

海瀉が豆知識とばかりに子供達に注意する

ちなみにこの幼稚園の敷地内には蜂の巣が無いことを確認しているため、真似させる危険性が無いことは確認済みだ

「いや、いくら子供とはいえ蜂の巣の近くで紙飛行機投げてあそぶなんて事しないでしょ

刺されるの分かりきってるじゃない」

「でもあーちゃんの言葉やけに真剣だったよ?」

「両親から言われてたんでしょ」

彼女の言葉を遠くで聞いていた姫歌の灯莉はそんなふうにより取りをする

そう、聞く人によっては只の注意にしか聞こえないのだが、海瀉にとつてみれば蜂絡みの件はある意味で笑い話に出来るという真相を知るか知らないかで意味が変わる話題であつたりする

なんやかんやで子供達との顔合わせが終わった後、レギオンメンバーで集まり今後の打ち合わせへと移る

子供達と遊ぶのはあくまでもコミュニケーションの為、本題はこの幼稚園で行われるお遊戯会でやる演劇の手伝いである

先のヒュージの襲撃で先生が軽い怪我をしましてまい作業が大幅に遅れているのだという

「さつき確認したんだけど配役と台本は決まっているけれど他は殆ど手がついていないらしいわ」

「となると残りは大道具小道具の作成と衣装作りがメインになるわね」

叶星、高嶺は状況の確認

配役はともかく台本が既に決まっているというのは不幸中の幸いだろう

「ぼく、衣装作りやるよ」

後は背景と看板も」

「背景というか書き割ね。」

私もそつち入ろうかな

美術科の腕の見せ所ってやつ」

「あーちゃん頑張ろう☆」

灯莉と海瀧は美術関連

姫歌と紅巴は音楽関連を担当し叶星、高嶺は子供達の面倒と一年生のフォローを行う事になる

「で、灯莉ちゃん衣装はどうするの?」

「1から作るとなると流石に時間が足りないと思うけど」

「衣装は去年のをベースにしてリメイクをしていけば大丈夫かなーって」

「オツケー」

後気になったんだけどね小道具と大道具は?そっちも何か再利用する感じ?」

「…あつ!」

「忘れてたわね…ならそっちは任せて」

そう言い二人は作業に入る

灯莉は衣装よりも先には背景などの下書きを始め海瀧は小道具、大道具の作成を行う

「幼稚園児が使うなら木材よりも紙の方が安全だし…劇までの日数も限られるからクオリティに時間はかけられないか…とは言え最後はサプライズ仕掛けたいしそっちは時間かかるしなあ…寮で作るか?」

「うーんと、ここをこうして…こう☆」

二人はイメージを頭の中に浮かべながら作業を行っていく

とは言え流石に二人では人手が足りないのも事実

なので小道具や大道具に関しては簡単な物は園児達や先生達にも協力して貰う

ちなみに灯莉の方も複雑でない所は園児達に協力してもらってた

すると途中、幼稚園の先生の一人が

「あのお間違ってたらごめんなさい

さつき名前を聞いてもしかしてと思ったのだけれど貴方、もしかし

て…天野さんの娘さん？」

「ええ、そうですよ

えっと…両親の作品か何かをご覧になった事が？それとも実家に？」

そう尋ねる

ちなみに彼女の実家は花屋をやっております

父は作庭、母はフラワーアレンジメントとして非常に有名であり海濱も娘なのだからまあ尋ねられて当然だろう

とは言え今は両親以上に世界的に名のしれた姉よりも先に両親の名を出すのは職業柄なのであろう

「貴方のお母様の作品を何度か見に行く機会があったの

どれもこれも素晴らしい作品だったわ」

「そのように言っていただけでとても嬉しいですし、母もきつと喜ぶと思います」

そう言うとき先生が子供達に呼ばれた為その場を後にする

本当に簡単な世間話をしに來ただけのようである

「(そう言えば最近連絡してないな」

これじゃ人の事言えないな、うん。)」

幼稚園の先生がきつかけ…になったのであろう
落ち着いたら両親に連絡を取ろうと心に決める

そうしてこの日は作業を終え解散となる

準備の出来は順調でありこれならお遊戯会に間に合いそうだと
言う手応えも掴みながら一日を終えるのであった。

第18話

ボランティアを行った翌日

1年生4名は朝から街で買い出しを行っていた。

ちなみに2年生の二人は先に幼稚園へと向かっている

「えーっと…画用紙、ペン、ボンド…ダンボールもついでに確保しておきたいし…」

「この後文房具屋さんに行くのでそこで纏めて買えそうですね

ダンボールは…お店の方に頼めば貰えそうですし…他に必要な物はありますか？」

「次文房具屋か、なら纏めていけるし

他は…んー、幼稚園にある物で何とか出来るかな」

海瀧と紅巴は買う物の確認を行っている中、灯莉は

「皆見て見て…これ買おうよ☆」

そう言いながら持ってきたのはよく見かける子供向けのなりきりセツト

「あつ、良いわねコレ…」

何て言うわけ無いでしょ！戻してきなさい!!」

当然買う訳もなく姫歌に戻すと言われる

すると紅巴が衣装を持ってきたお店に目を向ける

「灯莉ちゃんが服を持ってきたお店なんですけど…何でしょうか？」

キレイな衣装が沢山展示されているんですが…」

「あのお店？」

あそこはコスプレ衣装のお店だよ

持ってきた衣装もあそこから持ってきたんだ〜」

そう言いながら灯莉が示したコスプレ専門店店頭にも様々な衣装が展示されており多くの人が訪れている

「あー、アレ、確か有名ゲームのキャラクターの衣装じゃん。

はえー良く出来てるなー」

海瀧も展示されている衣装の1つに目を奪われる

専門店に取り扱っている事もあってクオリティは高い

「あの衣装、もしかしてミニヨンⅡシフオンの衣装じゃない?!

こんなのもあるのね…」

姫歌は展示されている衣装の一つを見つけ興奮気味に話すがイマ
イチピンと来ない

「ミニヨンⅡシフオン…聞いた事ある…?」

「いえ…何かのキャラクターでしょうか?可愛らしい衣装ですよね」

「あーっ、それ僕知ってる!!」

「この間定盛に無理やりPVを見せられたアイドルグループだよ!」

「無理やり?」

「うん☆」

朝まで見させられたんだ

次の日訓練がお休みだったから良かったけど流石に疲れたよ」

灯莉が少々物騒な事を言ったので海瀛が確認

そう言えばとある休日、灯莉と姫歌が昼過ぎまで起きてこなかった
日があったなと思り返す

まあその日はオフの日だった為特に問題はなかったのだが

「人聞きの悪い事言わないで!」

アレはアイドルリリイ活動のための衣装の参考として見せたのよ

まあ朝までぶっ通しで見せたのは悪かったけど」

「ぶっ通し…ですか?」

「ええ、ざっと8時間ぶっ通しの鑑賞会よ!」

「ヒエツ」

明かされる内容にドン引きする紅巴

数日に分けるならともかくDVDを朝まで通しで見るのはリリイ
の体力といえど厳しいものがある

灯莉はその事を思い出したくないのか衣装の細部を細かく観察し
て話を聞かないようにしている

買い物を終え幼稚園に向かおうとしたその時、街全体にサイレンが
鳴り響く

「ヒュージ警報!」

「えっ、ヒュージ出たの?」

音に反応する姫歌と灯莉

海瀛と紅巴は端末を開き情報を確認する

そこにはある意味、予想できた情報が届けられる

「現れたのは大型で機動力の高い個体ですね」

「それって…まさか!？」

「ガーデンからのデータを見る限り以前私達が交戦したヒュージの可能性が高いです」

その言葉に全員に緊張が走る

ポジティブに捉えるなら今度こそリベンジの機会が来た事になる

ネガティブに捉えるならあの個体と再び戦わなきゃいけない

「まあ、そういう事じゃない？」

どっかのレギオンが仕留めた…なんて話も聞いてないしそりやアチラさん好き勝手やるわよねえ?」

「なら今度こそ倒すだけよ

パワーアップした姫歌たちの力見せてあげるわ!

で、どこに出てきた訳?」

姫歌がそう言い終わると同時に紅巴は端末で出現した場所を確認する

そして、衝撃の事実が判明する

「ここからは離れています…えっ、この進行方向は…!」

「何?どうしたの?」

「神庭の住宅街…近くにはあの幼稚園があります!!」

それからの行動は早かった

本来の予定を変更し全員がガーデンに集まり緊急のミーティングを開く

「皆、集まったわね」

叶星が全員集まったのを確認し高嶺が状況を説明する

「続報が入って今、他の学園のレギオンが遭遇、交戦しているという情報が入ったわ…苦戦しているそうよ」

高嶺の言葉に姫歌は改めて状況の確認をする

例のヒュージは今回は2体出現し更に小型のヒュージも大量に出現しております今回は相当な激戦になると言う事が告げられる

『リリーの戦いは今日が最期かもしれないれず命を賭すに値するかどうかはリリー自身が決めるべき』

それは今回も例外ではないわ。

皆、よく考えて…」

叶星は1年生にに覚悟を問うが全員答えは決まっていた。

「出るに決まっています」

私達はリリーです。どんなヒュージだろうと臆する訳には行きません」

姫歌の言葉に残りの3名も続く

「そうそう。僕達があの子達の笑顔を守らないと♪」

「ヒュージによって悲しむ人がいるんです

戦わない訳には行きません」

「ヒュージとの戦いは常に命がけ…覚悟はとづくに出来ています」

彼女達の言葉を聞き、叶星も了承する

のだが、叶星は海瀉に再度確認を取る

「海瀉ちゃんはトリグラフィじゃなくてガーデンに配備された予備のアステリオンで行くわけだけど、本当に良いのね？」

「ここまで長くかかるのは予想外でしたけど問題無いです

予備って言ってもヒビロカネのCHARMは優秀ですからね。

元々使ってましたしその辺りの心配は無用ですよ」

「分かったわ…さて、それじゃあ紅巴ちゃんそこにある箱を開けてもらっていいかしら？」

海瀉の言葉を聞いた後、紅巴に置くにある箱を開けるように指示をする

中に入っていたのは、初めて見る衣服であった

「こ、これってもしかして！」

「ええ、グラン・エプレの新しいレギオン服よ」

「このメンバーになった時にガーデン側に制作依頼をしておいたの

皆の性格や戦闘スタイルが反映されているからきつと気になると

思うわ」

その言葉を聞きながら一年生はそれぞれ自分用を取り出す

「おおー良いデザインだね〜」

「可愛デザインじゃない。姫歌にぴったりだわ!」

「素敵なデザインです!」

「色合いも悪くないし個性もある

いい制服ね」

好評な事に安堵しつつ叶星は着替えるように指示をだす

着替えたらいよいよ出撃である

全員が着替えている時

「こうして見ると全員微妙に違うけど灯莉と海瀉は特に目立つわね」
「ですね」

姫歌と紅巴は二人のレギオン服に感心する

全員違いがあれど灯莉と海瀉は其中でも目を引くデザインである

灯莉はピンクのシャツにその色と合うようにデザインされたパーカー

海瀉は上級者のデザインを参考にしつつ、トリグラフ用にカスタマイズされた専用ホルスターが左右に一つづつ

シャツの色も白ではなく紺色である

「あーちゃんは何ていうかガンマンって感じ。」

「あー、分かるわ、それ」

灯莉と姫歌は率直な感想を言う

そんな二人をよそに海瀉は紅巴と小声で話す

「さっき話してた他校のレギオン…この辺だと一番近くてルドビコ…
だけどあそこって今ガーデンとして機能してる?」

「崩壊したと言われていますが所属しているリリイが全滅したわけではないので最低限の機能はしているかと

ただ私達との合同作戦を行えるほどの余裕は無いと思いますね…

良く組む御台場も噂では北伐の準備の為こちらへの増援は期待できませんし：イルマは遠すぎます

後はエレンスゲ：ですが…」

「ヘルヴォルもしくはバシヤンドレが来てくれるならまだしもクエレブレみたいなのが来たらこの辺破壊されるの目に見えてるよねえ…」
「はい…」

最悪の場合に備えて増援の有無を紅巴と予想するが厳しい状況だと言う認識に至る

確かに戦う覚悟は決まっているが、それと増援の有無は全く別な話
神庭からもグラン・エプレを始め多くのリリイが出撃するがそれでも人手が足りない時は他所のガーデンからの増援というのがどうしても必要になる

ルドビコ、イルマ、御台場の東京御三家はそれぞれ異なる事情があり参戦不可

その他も距離的な問題や普段の戦場での行いを考えると来てほしいとも思にくい

期待できそうなヘルヴォルもエレンスゲのトップレギオンと言う立場を考えると中々に厳しいであろう

そんな事を話している内に全員の準備が終わった為、出撃する
こうして彼女達にとって長い戦闘の幕が開く

第19話

出撃直後、最初に行ったのは近隣住民の避難でありメンバーが分担して避難を行う

避難に関しては神庭から他のリリイや教導官も手伝ってくれた為大きな混乱もなく円滑に進んだ

そうしてグラン・エプレの6名はヒュージの出現場所へと集合する
「うっへえ、すっごい数。雑魚も束で来られたら厄介よねえ」

「こうしてみると本当にすごい数ね…でも姫歌達なら…！」

海瀧と姫歌はそう言いながら辺りを見渡す

そこにはかなりの数のヒュージが現れており激戦になる事が予想される

余談ではあるが神庭の他のリリイも多く出撃しておりこことは別の場所に展開、ヒュージを迎え撃つ体制を敷いている

そしてそこには目を引く個体が”一つ”

何度も遭遇した例の特型ヒュージが

「あれですね…例のヒュージ」

「お遊戯会のじゃましたらだめだよ」

紅巴と灯莉も今度こそはと意気込んでいる

しかし見落としがあるのも事実

目の前に居るのは”一体”

しかし、報告では今回は”二体”、目撃されたと言われていたはずだ
ではもう一体はどこにいるのか

「…そこっ！」

海瀧はいち早く気づきアステリオンを變形させ高速で迫りつつあるヒュージを迎え撃つ

「アステリオンで迎え撃つこの感覚久しぶり…そーらよつと!!」

正面でヒュージを受け止めた後、横に振り払う

改めて退治すると修復された後が見受けられ頭部にそれが近著に見られることから以前海瀧が仕留め残った個体である事が判明する

「海瀧ちゃん、ありがとう。」

後はこつちでやるわ。…高嶺ちゃん」

「ええ、分かってるわ」

叶星は海瀛にお礼を言うのと下がるように指示を出す

以前と同様に上級生二人であの二体を相手にするのであろう

「まあ、間違つてはいないけどさ…それ、過去に失敗してなければ…の話ですよ」

ボスクラスを抑えてそれ以外を一年生で倒す

上級生二人の実力を考えればそれも一つの手では有るのだが過去2回いろいろな事情が重なったとはいえ一体でも仕留めきれない戦法を今回も行うのは流石に判断ミスなのでは無いのではないかと思わなくもない

二人には何か狙いがあるにしてもその意図を読み取れない現状では指示に従うしかないのも事実

「分かりました…他のヒュージは私達にまかせてください。叶星様達の邪魔はさせません

行くわよ皆!!」

姫歌はいち早く一年に指示を出す

そうして学年で分担して戦闘に入る

「今回は突撃は無し!」

叶星様たちにの所に小型を向かわせないようにしつつ住宅街への侵入を抑えるわよ!」

「はいはい♪」

姫歌の指示を受け、灯莉と海瀛は同意し射撃メインでヒュージを迎撃

姫歌と紅巴も射撃と近接戦を行いながら迎撃

その途中、上級生の戦闘が目に入るが苦戦しているように映る

すると紅巴は海瀛に

「ユーバーザインでお二人の援護は無理そうですね?」

「あー、前にやったアレとか?出来なくは無いけど…二人がどう言うプランを立てて立ち回ってるのかが分からない以上、下手に手を出したら邪魔になるだけ。誤射の危険性も高まるし」

そう言いながら戦闘に目を向ける

二人はお互いに動きをカバーしつつヒュージの動きに対応し攻撃を与えているが、相手は高機動型、そう簡単に攻撃は当たらない

とは言え相手は上級生二人が相手をしているヒュージだけではない

「…つと、紅巴ちゃん後ろから来てるよ！」

「あ、はい!!」

「灯莉、そっち行つたわよ!!」

「オツケー♪」

二人の戦闘に目を向けがちだがこちらも小型のヒュージを相手にしている

余所見は禁物である…のだが

「ああつ、叶星先輩！」

「1体だけでも厄介なのに2体同時なんて」

どうしても気になってしまうのもまた事実

圧倒しているならともかく苦戦しているのだから自分達の戦闘に集中もしきれしていない

このままでは二人の体力とマジが消耗し、1年生にも悪影響がその内に出るだろう

「うーん…キツツイ

最悪”奥の手”を使わざるを得ないかなこりや」

今のまま、もしくは好転するならばやる必要は全くないが悪化すれば奥の手の使用を海瀧は考える

今の状況が良くない事

それは一年生全員が気づいている事

どうにかしようにもその手が思いつかない…訳ではなかった

「ねえ、海瀧。

さつき出来なくは無。って言ってたけどさ、それってお二人の邪魔にさえならないって分かれば援護出来るって事？」

「勿論。まあユーバーザイン自体に攻撃力は無いからそこは考慮してもらおうけど」

ここで姫歌に唐突に聞かれる

海瀉としても特に否定する理由はない

そもそもユーバーザイン自体が援護に向いている面もある

それを聞くと姫歌はまた考えた後

「分かったわ…なら姫歌が合図を出すから海瀉はそれに合わせてレアスキルを発動して頂戴…狙うのはあの高嶺様がマークしてる方よ！」

紅巴、灯莉、準備して」

「りようかい」

指示を出した後、姫歌はタイミングを伺う

「大丈夫、行ける…！」

アイデアはある

後はそれを上手く実行出来るかどうか

動きを追う

だが追うのはヒュージでは無い

叶星、高嶺の二人だ

高嶺は言った

叶星の動きについてこれるのは自分だけだと

それは見方を変えると叶星の動きに注意すれば高嶺は彼女のフォローにまわるということ

ヒュージは2体いる

それに対し高嶺も叶星のフォローに回るに当たりヒュージのマークが甘くなると言う事だ。

そして、その機会は来た

叶星の過剰な先行を静止するためのたのか高嶺がマークしていたヒュージから距離を取り彼女のフォローに回る

「今よ海瀉!!」

後少しだけ足止めも頼むわ！」

その言葉に頷くとすぐさまユーバーザインを発動

ヒュージの視線がこちらに向くように気配を操作する

動きが止まったところを海瀉が射撃を叩き込む

高機動で動いているならば厳しいが動きを止めてしまえばチャンスはある

「叶星様!!」

「えっ…」

チャンスが来たとはいえないきなり一年生総出で攻撃しては上級生が混乱してしまうかもしれないという気遣いを見せ、声をかける

「こ、こちらのヒュージは私達にお任せを」

機動力には対応出来ませんが四人係で足止めぐらいなら…!」

「僕達に任せて♪」

紅巴、灯莉は心配しないように伝える

海漓も何か言いたいのだが

「で、この後は?」

足止め言っても時間限られてるし更にアレとタイマンすんの??」

いかんせん小型にも注意をしつつ特型への足止めもしているからそんな余裕は無い

一刻も早く次の手を打ってほしいのが本音である

「もう十分よ、後は姫歌のレアスキルでヒュージの軌道を読むわ」

「任せるよ」

海漓はそう言い攻撃を中断、交代する

それを受けヒュージは叶星達ではなく先程から攻撃を与えたりリイへと狙いを定める

それと同時に姫歌はレアスキル、この世の理を発動

目視できる範囲ではあるが力の方向性を感じ、状況を予見できるスキルである

「そうきて、こう…、うん…紅巴、来るわよ!…っ、小型も来てる、しかもこの数!?!」

特型に狙いを付けていたのだが、途中視界に入った小型のヒュージもこちらに向かってきていたのだ

このままでは乱戦になるのは必須

しかし、そうはさせない

「小型は任せて、特型はそっちに任せた！」

「はっ、はい!!」

海漓はそう言うのとアステリオンをアックスモードに変形させ滑るように移動し小型ヒュージへと向かう

「余り離れないでよ!!」

「定盛!とつきー、動き止めたよ」

「分かったわ、灯莉、今の内に左右に別れて一斉射撃を叩き込むわ!

小型しかいないとはいえ海漓も心配だしモタモタしてられないわよ」

「オツケー♪」

そうして三人は簡易的なフォーメーションを組み特型を相手取る

本来ならば紅巴と海漓で足止めし、状況を見て役割をローテーションしながら抑える予定だったのだが小型の対応に海漓が向かった為、このような形に変更したのだ

「(あー、くっそ本当の事言うとおのレストア、私の獲物なんだけどなー!!)」

海漓は内心悪態を付きながら小型をなぎ払っていく

アステリオンのアックスモード

乱舞システムという魔力を注入するタイミングを間違えなければ連続してヒュージを斬ることが出来るシステムが内包されており海漓はそれを使用し小型を凄まじい速さで叩ききっていく

自身の得意とするマジを利用した滑るような高速移動と乱舞シシステムの組み合わせによる攻撃

これにより効率よくヒュージを倒していく

その途中、3人の様子を見る事も忘れない

「(紅巴ちゃんを一種の囷にして定盛ちゃん、灯莉ちゃんて集中砲火：なるほど

戦闘スタイル考えたらこれがベストよね)」

コレだと抑え込みをする紅巴が大変ではあるうがそこは二人の射撃で負担を減らしているであろう

「さて、こつちも早く…ん？」

海瀉も小型のヒューズの対処を再開しようとした瞬間

1人のリリイが彼女の元に駆けつけてくる

「海瀉さん、手伝うわ」

「高嶺さん…そつちは大丈夫なんです？」

「ええ、大丈夫よ、向こうは叶星達に任せようと思って。この後を考えたらこれ以上貴方に負担をかけるわけにはいかないもの

叶星も賛成してくれたし」

そう言い笑みを浮かべると彼女も自身の愛機であるリサナウトを構える

「私が合わせるわ、海瀉さんはさつきみたく自由に動いてくれて構わないわ

」

「助かります！ではお先に！」

そう言い二人は小型の群れに再度向かっていった

この日、この瞬間、グラン・エプレの中で何かが変わった時でもあった

第20話

高嶺達が一年生の元へと駆けつけ、共に戦闘を行う

叶星は灯莉、姫歌、紅巴と共に例の特型ヒュージの足止め

高嶺は海瀧と共に小型ヒュージの掃討

これには理由がある

特型ヒュージを仕留めるためにはレギオン6人の力が必要であるし、そうしなければならぬと言う事に叶星は気づいたのだ

「皆はあの特型を中心にマークして

他は高嶺ちゃんと海瀧ちゃんに任せましょう」

「あれだけの数を二人で…ですか？」

「ええ、特に海瀧ちゃんはそっちの方が得意に見えるから。高嶺ちゃんの方が有れば時間はそんなにかからないと思うわ」

叶星がそう言い二人がいる方を向くと

凄まじい速さで小型を倒していくのが目に入る

とは言え叶星の言う通り倒しているのは海瀧がメイン

高嶺はあくまでも彼女のフォローに回っている

「二人がこっちに合流するまで時間を稼ぐわ

フォーマーシヨンは姫歌ちゃん達がやったのをそのままに。

私と紅巴ちゃんが前に出て動きを止めるから、灯莉ちゃん、姫歌ちゃんは射撃で援護して頂戴」

「分かりました」

「はーん。」

「頑張ります…!」

叶星の掛け声と共に再度フォーマーシヨンを展開
戦闘となる

「(叶星、上手くやれているわね…それで良いのよ)」

その光景を見ていた高嶺は安堵する

これならばもうあの時の様な事にはならないだろう

後はこちら…というより海瀧のフォローだ

「これで100!!まだ居る!?!」

その海瀧はと言うとアステリオンのモードをアクスからブレイドへと変形させ乱舞システムから広範囲攻撃へと手段を変える

あまり乱暴に扱うと壊れてしまうのだがマギの入れ方斬る角度をうまく調節し負担を軽減させている

「海瀧さん、アステリオンはまだ持ちそう??貴方のマギもよ」

そう言いながら高嶺は海瀧の側に立つ

息は上がっているが目は死んでおらずむしろまだまだヤル気がする

CHARMも多少の損傷は見受けられるがアレだけの数を削ったにしてはダメージが抑えられているというのが高嶺のみ感想だ

「モード変えたんでまだ行けます

特型ビューッ

…とはいえこの後にアレ仕留める事考えるとちよーつと厳しいっすね

マギは…ちよつと温存考えないと厳しいです。ここで使い切つていいなら全然いけるんですが…」

「あの数を削つてそのコンディションなら上出来よ

とはいえここで海瀧さんのマギを使い潰しちやったら私共々叶星に叱られちゃうわ…困ったわね…」

高嶺はそう言うがどこか余裕すら感じられる

それは海瀧にも感じる事は出来た

その根拠も何となくではあるが予想も出来ていた

「グランエプレの皆さん!残りのスマールは私達に任せて貴方達はあの特型を!」

「皆、行くわよ!!」

そう言い駆けつけてきたのは神庭のリリイ達であった

神庭のリリイはこことは別の場所を担当していたはずだが、そちらはどうなったのであろうか

近くにクラスメイトのリリイが来たため事情を聞くと驚きの事実が

「ちよつと前かな、イルマのリリイが私達の担当地区の増援に来てくれてね

お陰で戦力が余り気味につてきたから、お姉様達を筆頭にウチの数人のリリイをグランエプレがいる所に回そうって話になったんだ

担当地区の方はイルマの子達と残して来たメンバーでなんとかなるって

「

「イルマ!?かなり距離あるしよく来たわね」

「数人は外征帰りだったけど萩窪の事聞いてこつち来たらしいよ」

東京北域の守りがメイン、かつ外征帰りと言うのイルマが率先して来てくれた事に海瀉と話を聞いていた高嶺は感謝する

「さて、後は彼女達に任せて叶星達に合流しましょうか」

「そうですね…じゃ、気をつけて」

そう言い二人は叶星達の方へと向かう

グランエプレとは別の方面での戦闘は佳境を迎えようとしていた
主にリリイ側の圧勝と言う形で

「神庭の子、いったよそつち!!」

「そこ、イルマの子達ばかりに頼らないの!!」

御三家であるイルマのリリイが到着したと同時に士気が上がり一気に勝負を決めに来たのだ

ここにいるリリイは比較的戦闘に慣れていると言う事も有りお互いに足を引つ張ることも無く連携もスムーズだ

すると一人のイルマのリリイが

「んー、ここには居ないね、噂の子」

「そりやそうでしょ、彼女トップレギオンだし例の高速移動するヒューズがいる場所にいるんだから」

そんな雑談をしながらもヒュージを確実に倒していく
むしろこの程度の事など朝飯前とすら言えた感じにも見える

「いやー、神庭の子達と組むのは良いわー」

エレンスゲと違って無茶しないし士気も高い！御台場と組めるの
も納得だよ」

「御三家のイルマにそう言ってもらえると嬉しいなー」

こちらは一年生同士なのであろう

同じ芸術高校という事もありすぐに打ち解ける

とはいえイルマのリリイ

一部は外征帰りという状況にも関わらず駆けつけたのは何も雑談
と交流の為だけではない

とあるリリイを一目見たかったからだ

そんな理由で外征帰りの自分達も同行する事に許可をだしたガ
デン側に疑問が無い訳ではないが、それはそれ

今は目の前のヒュージに集中するべき

増援が無いとも限らない

「羽来はその噂の子、興味あるし会ってみたいな。ここ抜け出しちや
おうか？」

「ダメ、あくまでも私達は神庭の増援。これが終わったらすぐ帰る
よ」

「ちえー、恋町のケチ」

羽来、恋町とそれぞれ呼びあったイルマの中でも群を抜いた動きを
する二人は戦線に復帰

ヒュージを手早く倒していく

彼女達の活躍、神庭のリリイとの連携もありこの地区の戦闘は想定
よりも少ない被害で戦闘が終わり、その後続々とヒュージの撃退完了
の連絡が流れてくる

残りはグランエプレが対峙している特型2体だけ

彼女達の勝利を信じつつ神庭のリリイは防衛軍と協力し再度住宅
街の警戒を行い戦闘終了後の準備に入る

イルマのリリイも後は神庭と防衛軍に任せられると判断したのだ

ろう

迎えの車両を手配し自分達のガーデンへと戻るのであった。

第21話

小型を増援に任せ、二人は叶星達に合流する

足止めは出来たものの致命打を与える事が出来ず膠着状態に入っていたようだ

「…やっぱり戦力を分けて勝てる相手じゃないわね

フォーメーションを組みましょう」

今までの状況を踏まえて叶星はメンバーにそう告げる

さらに

「作戦を説明するわ

但し戦況に応じてフレキシブルに動く事」

「(配置を固定しないって事か…)」

叶星の説明に海瀧はそんな感想を持つ

レギオンで行う戦闘ではいくつかの手段があるがその中でも大事なのはフォーメーションである

今回のような強いヒュージとやる場合にはどのようなフォーメーションを組んで戦うのかによって勝敗が決まる

大雑把になつてしまいが、フォーメーションを固定しながら戦うのか叶星のように戦況に応じて臨機応変に対応する可変フォーメーションに分かれる

特に後者の場合強豪ガーデンの中でもトップレギオンクラスが導入している事もあり言い方が悪いかもしれないが神庭がこれを導入しているのは意外な事である。

ちなみに海瀧が鎌倉時代経験しているのはフォーメーションを固定する前者のパターン

可変式は東京に来て初めて経験することになる

「配置を説明するわね

中央に紅巴ちゃんを配置するわ

全員のサポートをお願い

高嶺ちゃんと灯莉ちゃん、紅巴ちゃん、両端をお願い

姫歌ちゃんは前線でヒュージの動きを捉えて頂戴

最後は海漓ちゃんだけど、一旦紅巴ちゃんの背後で皆の援護をお願いするわ」

「えっ!?!」

「海漓ちゃんを後方配置ですか?」

叶星の一言に姫歌と紅巴が驚く

無理も無い彼女達から見れば海漓はどう見ても最前線で戦うタイプ

それにも関わらず後方に置くなど実質的な戦力外ではないか?

口には出さないがそう思ったのだろう

しかしそこに待ったをかけたのは高嶺であった

「海漓さんは戦力外なんかじゃないわ。むしろとても難しいポジションを任せる…そうでしょう、叶星?」

「ええ。基本は後方で皆の援護をお願い

但し、私達の死角を次いで背後に回られた時は海漓ちゃんにはそのまま前線で対応してもらおうわ。」

「後衛をやりながら状況によっては前衛として立ち回れって事か…わかりました。」

状況に応じてフレキシブルに動く

それを最も求められているのは海漓で有るのかもしれない

口には出さずとも高嶺や灯莉が動いた時にはその穴埋めもやらなくてはならないのだから

全員配置についたのとほぼ同時にヒュージが動き出す

アステリオンを射撃モードに変形させ

全体の支援に入る

「(片方は灯莉ちゃんの真上…あつちは高嶺さんもいるし対応出来るからもう片方を牽制

連射した結果誤射の可能性…無い!なら撃つ!)」

狙撃…というよりも得意な早撃ちで相手の動きを封じ前衛の攻撃を支援する

のだが、他のメンバーにはその攻撃が異様に映っているのだ

「海漓、あのヒュージの動きを完璧に捉えてる!？」

「つていうかヒュージの方から弾丸に当たりに行ってるよ」

彼女の放つ弾丸は一切の狂い無くヒュージに向かって飛んでいき動きを妨害、もしくは直撃している

単発だけならば射撃の腕が良い…と言う風に説明がつくが彼女が行っているのは連射。

数撃ちや当たるでは無く撃った分だけ当たる現状は見るリリイに取ってみれば異様にも映る

しかしそんな事を言われている海漓だがそんな事は気にせず…というより気にする余裕も無い為援護を継続

「(これ以上は叶星様の邪魔に…なる?なるよね…なら)」

こうしている間にも叶星はヒュージに近接戦闘を仕掛けているためタイミングを誤ると誤射につながってしまう

誤射と援護の境界ギリギリを攻めた射撃を行っているのだ

すると途中、姫歌が

「叶星様、高嶺様達が抑えてた奴戻って来ます！」

高嶺達が抑えていたヒュージが叶星に向かって来ていることを姫歌がレアスキルを使い察知

対応に当たるのが

再びベストなタイミングで海漓からの援護攻撃

味方への誤射を避けるため直撃ではなく牽制目的の弾丸が飛んでくる

「どんな反応速度よ!?つていうか姫歌の指示よりも前に狙いつけてるでしょ!？」

「いくら海漓ちゃんが早撃ち得意とは言えアステリオンで出来る速度じゃないです…！」

海漓が早撃ちが得意な事は全員が把握しているがそれは本来の使用機体であるトリグラフでの話

あれならば可能ではあるが今使っているのはアステリオン
いくら連射性能を高めたとは言え限度がある

にも関わらずこの一切の狂いが無い正確な援護射撃

CHARMの性能とかけ離れた行動に一年生全員は戸惑う

が、二年生には心当たりがある

「(ユーバーザインが発現しているにも関わらず未来予知にも見えるあの行動：海瀉ちゃん、貴方まさか!?)」

「(この時期にこの現象：まだまだ底が見えないわね：もしかして、まだ実力を隠してる?)」

海瀉のレアスキルはユーバーザイン

これはガーデンでも正式に確認されており叶星達にも共有されており、揺るぎない事実である

だがリリイが持てるのはレアスキルだけでは無い

上級生二人はその続きの話をするのはもつと後と計算していたがこのタイミングでの出来事は想定外

これが御台場や百合ヶ丘、メルクリウスなど強豪ガーデンなら話は変わるがここは神庭

もしかしたら縁のない話とも考えていた可能性なのだ

ましてやそれが、ここでは見られる事の無いと思っていた能力ならば驚きも倍となる

だがここで驚いている場合ではない

叶星は次の手を打つ

「紅巴ちゃん、テストメントで私のサポートをお願い

後、海瀉ちゃん貴方に見えてる景色を私にも伝える事はできる?」

「そんな鮮明には伝わりませんよ?」

「十分よ」

その言葉と同時に紅巴はテストメントを発動

それに合わせ叶星は自身のレアスキルであるレジスタを発動

テストメントのおかげで効果範囲が広がっているためこの場の全員が恩恵を受けることが出来る

「(こう、分かりやすくイメージを伝言ゲームみたく伝える感じで：んーと、こう?) 叶星様、どうです!?!」

感覚にすると何とも言い表す事が出来ないがとにかく簡潔に、分か

りやすく叶星に伝わるように考え意識を集中

「…ツ！ありがとう海漓ちゃん、よく見えてるわ。」

高嶺ちゃん！」

「ええ、分かってるわ!!」

叶星と高嶺の二人は仕上げとばかりに2体のヒュージ目掛けて突撃する

従来ならば息のあったコンビネーションで仕留めに行くか今日は違う

叶星が先行し、高嶺が追従する形

だが少し前とは違い無茶な行動では無い

ヒュージも彼女達を迎え撃つが叶星はそこに攻撃が来る事を予測していたかのように回避

高嶺も続く

「(このタイミングなら同時に行けるのね…分かったわ) 高嶺ちゃん、私に合わせて！」

「勿論よ」

その言葉と同時に2体のヒュージを同時に撃破する

2体とも粉々に砕け散っており、今度こそ倒せた事を確信する

「(まだ止^{フィニッシュ}めは任せては貰えない…か。まっ、レギオンとして対ヒュージ戦闘を出来たのは収穫かな?)」

他の一年生はヒュージを倒せた事を喜んでいるが海漓は冷静に振り返る

技量に差がある為一概に言えないが一年生が倒しているのは小型のみ

今後を考えるなら上級生がアシストを行い下級生に今回のようなボスクラスを倒したという経験と自信を与えるのも手ではあるが、今回はまだそこまでは考えていなかったであろう

だがレギオンでフォーメーションを組み対ヒュージ戦闘を行えたのは大きな進歩

時期と自分達の立場^{グラン・エブレ}を考えると遅すぎる気もするがそれでもやらないよりはマシとも思える

「あーちゃん?」

「海瀧ちゃん、どうかしました?」

そんな事を海瀧は考えていたのだが紅巴達にはどこかおかしく見えていたのかも知れない

まあ、一言も話さずに立っていたら不審に見えるのも当然である
「へっ?あ、ゴメン。ぼーっとしてた

」

「結構マジ使ってたし疲れたんじゃないの?少し休んでたら??」

「大丈夫、大丈夫

やることやって、サクッとお遊戯会の準備終わらせないと」

そう言いメンバー全員で戦闘の事後処理を行う

ちなみに戦闘のあった翌日には幼稚園で無事にお遊戯会が行われた事を追記しておく

第22話

幼稚園のボランテニア活動を終え数日たったとある日、海瀧は叶星に連れられて校内を歩いていた

まあ、こうなる原因に心当たりが無いわけでは無いので特に不安にも思っていないのだが、それでもレギオンの隊長である叶星と二人で行動と言うのは慣れないものである

すると叶星は

「多分こうなった原因に心当たりはあると思うけれど…特に不安になる必要は無いわ

会場には専門の教導官や校長先生。

私も立ち会おうし、最大限の配慮はするから安心してね」

「ええ、まあ。にしても随分と人手を割くんですね

医務室かどっかで測定員一人がサクツとやるとばかり思ってたよ

心当たりがあるとは言えここまで大掛かりにやるとは思ってたよ
かったのも事実

空いた時間にガーデンで調べるだけだと思っていたのだがガーデンの教導官とレギオンの隊長が立ち会うとは思わなかったのだ

それを叶星も察したのであろう苦笑いしつつ彼女に告げる

「該当する原因が原因だけにガーデン側も正しく把握しておきたいって判断なんだと思うわ

将来的な事も考えると…ね？」

「まあその手の才能ある子は入学してから目覚めても百合ヶ丘に速攻で強奪されるのが目に見えてると思いますけどね。金と権力に物言わせて才能ある子を見つけるのもぶち抜くのも得意ですから

私達みたいに他所からの転校生って見ても余程のことがない限り手放さないと思いますし…

あ、神庭が悪いとかじゃなくて相手が悪すぎるって意味ですからね？」

海瀧は冷静にそう答える

彼女をきっかけに今後ガーデン側の教育カリキュラムが発展し新入生の覚醒や転入生を受け入れる体制を作る事自体何も問題が無いのだが、鎌倉にある百合ヶ丘のように才能あるリリイが世界中から集まっているガーデンも所有者の把握と勧誘に力を入れており神庭に入ってくる可能性の低さを指摘する

まあ、彼女の古巣にはその手放された例外もいる事を追記しておく
「まあ、言いたい事は分かるわ」

叶星も心当たりがあるのであろう

苦笑いしながらではあるが言ってる事を受け入れる

そんな雑談を行いながら歩いていると目的地である訓練場へと到着する

そこには複数の教導官とガーデンの校長が設備の前で待っていた
「急に呼び出して申し訳ない」

早速だけれどまずはスキラー数値の測定から行ってもらおうわ」

ガーデンの教導官がそう言うと同時に海瀉は専門の機材を身につけていく

スキラー数値とはマジをどれぐらい扱う事が出来るかを数値化したもの

リリイになるにはこれが50以上が必要でありここがリリイになれるかのボーダーラインである

ちなみにこの数値、本人の成長で上昇する事も確認されており健康診断の時に測定されていたりする

「…これ暇なんだよなー。レアスキルならともなく…」

不快感よりも暇という理由で早く終わってほしいと考えていると
「入学前の数値よりも若干伸びて…ますよね??」

「ええ。」

教導官と校長が画面に現れた数値を見て素直な感想を言う

現れた数値は89

世間一般ではスキラー数値が85を超えると優秀なりリイで有ると言われており彼女の力の高さが伺える

「天野さん、次はいよいよ本題です」

「準備は良いですか？」

「いつでもいいや、ちよつと待ってもらえますか？」

教導官の言葉に海瀉が驚く

海瀉の正面には叶星が笑顔で立っているのだ

なぜか使用CHARMであるクラウ・ソラスを構えて

「どうしたの？」

「いや、こういうのって普通は模擬ヒュージで検証するもんじゃないです？」

「海瀉ちゃん模擬ヒュージだとスキルかどうか調べる前に終わっちゃうじゃない。」

後輩の成長の確認とこれからのメニュー考えるためにもここは私が…ね？」

そう話しているうちに訓練室には海瀉と叶星の二人だけ

付近には測定の為の機材が設置されているのが分かる

教導官達は別室でモニタリングをするようだ

手際の良さを考えると既定路線だったのだろう

古巣では時折こういうのもあったし初めてでは無い

海瀉もトリグラフを構える

「神庭でもやるとは思いませんでしたよ。」

「基本はしない方針だけど今回は例外よ

ルールとしてはレアスキルのユーザーサインの使用は無し。今回

の目的を意識して戦う事

後は、特に何も無いわ。…本気を出して頂戴」

そう言うのと叶星の纏う雰囲気が変わる

普段の隊長としての面というよりは一人の戦士としての風貌にも見える

「(先輩とやるこの手の訓練はいつやつても手を抜けないよな…抜いたらヤラれる)…じゃあ、行きますよ!!」

「…!!」

海瀉の発言とともに銃口から模擬弾が叶星に目掛けて放たれる

こうして測定を兼ねた模擬戦が幕を開ける

「(相変わらず速い!)」

開幕と同時に迫りくる弾丸

間近で見ているが相対してみても改めて彼女の射撃能力には驚かされる

少しでも気を抜けば開幕直後に被弾し終わっていたレベルだ。

迫り来る弾丸を叶星はすぐに回避し海漓に切りかかる

本来ならばオーバーザインを使い気配を消すのだが今回は無し

意識を集中し、あの時と同じ現象を起こそうとする

のだが、それを待つ程、叶星は甘くはない

「あつぷ…な…」

斬撃を海漓は後方に下がりつつ回避、切り返しに弾丸を放つ

今度の狙いも届かないばかりか叶星はCHARMで弾丸を弾き、そのまま突進

「同じ手で来るつもり?」

「まさか」

その発言とともに叶星は接近戦を仕掛けに行くが海漓は左手の子機のみブレードモードに変形させ迎え撃つ

「(あの時と同じ…動きを予測するように、そして私がどうすればいいのか)」

意識を向ける

彼女の動きだけでなくこれからの自身の立ち回り

浮かび上がるのはいくつかの光景とその為の条件

その結果どうなり、更にその次はどうするのか…までは当然見えるはずがないが、選択肢が見えるのならば手はある

「この後は…どうするの?片手じゃ私は止められないわよ?」

「止めるつもりなんてありませんよ」

そう言うとき海漓は右手の親機を射撃モードで構え叶星に向けて放つ

「この距離で射撃!?!」

「射撃を近距离でやったら駄目なんて決まりは…無いですよ?」
そう言い弾丸を放つ

狙うのは左の脇腹、流石にこの状況で顔面や腹部の中心を狙うのは危険なのだから当然といえば当然である

この至近距離である、並のリリイならば脇腹といえど直撃するのだが、叶星はそうは行かない

とつきの判断で彼女の左側へ飛び被弾を避ける

しかし、これは海瀉には視えていた

「まだまだ!!」

「…ッ!」

だが、このタイミングを逃す海瀉では無い

飛んだ直後に今度は左の子機側から弾丸が飛んでくるが叶星は素早く体制を低くすると足払いで彼女の体制を崩しにかかる

「そう来ますか!」

しかし海瀉をこれを余裕を持ち回避

低い体制の叶星に対し本来ならばトリグラフをパルチザンモードへと変形させ一気に決めに行くのだが

「(あ、ここで決めるのは無理っぽい)」

先の容量で足払いまでは予測出来た

が、その後までは予測は無理

ここからは海瀉の判断になるがこれは彼女の経験から無理と判断

叶星程のリリイがこのような分かりやすい隙になるような動きをするはずが無いのだ

その予想は的中するパルチザンモードに変形させたのと同時に低い体制から先のお返しとばかりにクラウドソラスを射撃モードへと移行させ待ち構えていたのだ

「ヒヒイロカネの最新鋭機のトリグラフ。その性能は把握してるわ。

そのモードになるとどうしても子機側と違って親機側には変形の時間にロスがある事も…ね?

変形の時間で言うなら…私のクラウドソラスの方が速いわ」

「流石です。勝ち急いで安易に行かなくてよかったです…」

これはヒヒイロカネに要望出しておくかなあもうちよつと変形のロスタイム減らしてくれて…でもこれ以上は無理そうだし…なら

ビームサーベル的なのに…」

こればかりはお互いに自身の経験と技量により起きた結果
どちらかの経験と技量が劣っていればここで勝敗がついていたの
は事実

仮に海瀉が射撃を続行していても叶星ならば体制を立て直し距離
を取った状態で仕切り直しになるだけである

そして今回の目的は勝敗を付けることではない

この短い間でも十分成果は得られている

「とは言えさつきまでのあの動き…これは測定次第だけどほぼ確定：
かな」

「もう少しやれば更に詳細なデータ取れましたかね？」

「流石にあれ以上は駄目よ。」

明日以降に影響がでるわ」

そうして二人が話し終わると同時に測定が終わったのか教導官が
二人を呼び出す

「戦闘時の海瀉さんの動きとその際のその他諸々をこちらで用意した
データと照らし合わせた結果…サブスキルの発現を確認しました

間違いなく虹の軌跡ですね」

サブスキル、それはレアスキルを100とするはらばその出力は7
0%程になってしまいがレアスキルと違い複数保有する事のできる
能力だ

レアスキルに対応するようにサブスキルは存在しているが海瀉が
目覚めたサブスキルはその中でも特に希少なレアスキルであるフア
ンタズムに対応するサブスキルである

「サブスキルの充実は私にとっての最大の課題だったけど…初手で虹
の軌跡引けるのって中々に幸先いいですよ、コレ」

そう言い海瀉は喜ぶ

レアスキルには様々効果を持つものが存在するが、ユーバーザイン
は有効なスキル…ではあるのだが海瀉の戦闘スタイルとはミスマツ
チ気味であり、戦闘技能の補助という意味を含めてもサブスキルの充
実が最重要課題であったのだ

その後は簡単な話をして解散となる

退出した後には叶星と海瀉は

「今後はユーバーザインと虹の軌跡を安定化させつつ、新たなサブスキルの獲得を目指すって感じかな？」

「そうですねー。」

機動力と火力の底上げは狙っていきたいです…支援や防御は…後回しにしても…？」

「そう言い海瀉は思い悩む

すると叶星は

「そうなるってインビジブルワンやAwakeningが次の狙い目かしら？」

「

「それは確実に欲しいですね」

「それじゃあ今後はその2つの獲得を視野にいれた訓練も取り入れていきましようか」

叶星は海瀉にそう言う

その後はレギオン全員でのミーティングを行いその日を終える

その後も様々な出来事で多くの経験を積むのはまた別な話

そして数カ月が立った後、レギオンにとって最大の出来事が発生するのである。

第23話

グラン・エプレのメンバーはこの日、ミーティングルームに集まっていた

「皆、集まったわね」

そう言ったのはレギオンの隊長である叶星
すると全員に資料を手渡しながら

「実は今回、鎌倉にあるガーデン。

百合ヶ丘女学院からヒュージ討伐の応援要請と合同訓練の誘いが来たの」

その言葉に一年生全員が驚く

百合ヶ丘と言えば世界的な教育を行なっている名門校

そこからの誘いと言う事なのだから驚かない方がおかしい

「ついに姫歌達の実力が百合ヶ丘にも知られたのね!!」

「百合ヶ丘との合同訓練なんて…光栄です…!」

その中でも特に興奮しているのが姫歌と紅巴

姫歌はライバル視しているリリィと会えるから、紅巴は彼女の趣味
思考の面が強い

が、海濱だけはある意味で納得と警戒感を強めた

「(そうか…もうそろそろ、そう言う時期だもんな…)」
するとその様子に灯莉が気がつく

「あーちゃん、どうしたの？」

マジの色が変だよ?」

学科が同じ事もありいつも一緒にいる姫歌程では無いがお互い気が合う部分もある二人、特に灯莉はマジの色が見えると言う事もありそれを応用して親しい人間の感情であればある程度は読めてしまうのであろう

「叶星さん、その誘いは…私達だけですか？」

鎌倉府や東京側から他のガーデンやレギオンは来ないんです??」

ここで嘘をつくメリットなど何も無い

何よりこの部分は確認しておかなければならない事だ

すると叶星は

「百合ヶ丘からの要請だから鎌倉府としての増援は無いわ
東京だと…エレンスゲ女学園のトップレギオン、ヘルヴォルが要請
を受けているわ」

「そ、そう…ですか…エレンスゲに…」

「そもそも百合ヶ丘がどうして…？」

それを聞き妙だと思う

鎌倉は東京と比べて激減区でありヒュージのレベルも高い

なおかつ百合ヶ丘からの増援要請と言う事は百合ヶ丘のレギオン
単独での討伐が難しいという事だ

そんな所に百合ヶ丘から見れば格下に扱いになるレギオンを呼ん
でどうするつもりなのだろう

さらにこの合宿は百合ヶ丘に泊まり込んで数日間に渡って行われ
るそうだ。

鎌倉の事情を知っている海漓からしてみれば怪しきしか無い

とは言えそこまで深く把握しているのは海漓と上級生位であろう

今の説明で他の一年生はこの不自然さに気がついていない

「百合ヶ丘がエレンスゲに応援要請を出す事の何がおかしいの？」

ヘルヴォルだって何回かあった事あるけれど皆良い人達じゃない」

その対応に姫歌が疑問の声を上げる

紅巴はそれを聞き微妙な反応

灯莉も分かっただけはいなさそうだ

「いや、今のヘルヴォルは良いレギオンだけど何と言うか…」

海漓はこの件、間違いなく裏が有ると確信したがそれをこの場で言
う程空気の読めない人間では無いし、知らなくて良いことも有る。

それに百合ヶ丘との共同作戦や合同訓練というのは非常に魅力的
な話で有ることも事実

泊まりこむことで百合ヶ丘との交流も持てる。これだけ美味しい
話なのだ、彼女一人の個人的な理由でレギオンとして強くなれるチャ
ンスを奪う訳には行かない

すると叶星が

「今回も方針はいつもと同じ。」

『リリーの戦いは今日が最期かもしれない。命を賭けるに値するかはリリー自身が判断すべき』ガーデンのこの方針に基づいて判断してほしいの」

叶星の言葉を聞きつつ改めて資料に目を通す

百合ヶ丘から参加するレギオンは一柳隊と言う今年設立されたレギオンであり主力の大半を一年生が占めている。

学年比でいうならコチラと同じだ。

「メンバーは百合ヶ丘にしては珍しい控え無しの9人ギリギリ…しかもこの隊って確か…」

海瀛が思い出すのは数カ月前の出来事

こちらには後日、命令系統の手違いと言う報告があったもののレギオンの隊長と隊員に逮捕命令が出た経歴があるレギオンでありあの時は東京にも多少の混乱があったりした。

「手違いだったとはいえ逮捕命令が出たっていう過去は消せない…消すにはそれを上回る何かを成し遂げればいい」

それが、レギオンとして隊長として実績に残る活躍であればある程いい…」

戦場の汚名は戦場で晴らす…とまでは行かないだろうが失敗を取り戻すには失敗を上回る成功をすればいいだけ。

この隊が今後どうなるか、など知ったことでは無いが時期と人数を考えると裏の目的も見えて来たりする

「さて、どうしたものか…」

彼女は悩む

正直言つて経験を積めるといふメリットがあるとは言えそれを上回るリスクとデメリットがある可能性を考える以上、参加しますとは簡単に言えない

ガーデン側や叶星と高嶺の上級生は恐らくこれを正しく把握しているであろう

そしてそれを踏まえ了承した上でこの話が議題になるのだ。

後はいつも通りリリーの意味を尊重するだけ

「…海瀉さん?どうしたの?」

「あーちゃん?」

聞こえるのは高嶺と灯莉の声

「…へっ!?あ、もしかして後私だけ?」

色々考え込んでいるうちに参加の有無を海瀉以外全員が決定していたようだ

「まあ、参加…です…ね。はい」

そう告げる

政治的背景など海瀉には予想する事しか出来ない

ここで複雑な事を考えても時間の無駄、ならばこちらから百合ヶ丘に行くのもまた手であろう

それ以外にも不安は尽きないが後はその場での対応で何とか乗り切るしか無いのだ

ミーティングを終え各々が自室へと戻る

すると部屋にはルームメイトの二松薫がベッドでくつろいでいた
彼女は必要な事しか話さない性格であり、普段から言葉数は少ない
戦闘面でもそれは近著で黙々とヒュージを倒す仕事人のようなイメージだ

「聞いたよ。百合ヶ丘、エレンスゲと合宿するんでしょ?」

「どこで聞いたのさ、その話?」

海瀉がそう言うとき薫は携帯端末を見せる

そこには百合ヶ丘の公式サイトが表示されていた

「ついさっき公表された」

エレンスゲのヘルヴォル、神庭のグラン・エプレと合同作戦って」

「公表はやつ!」

「留守の間の神庭は、任せて」

薫はそう告げる

彼女はグランエプレのメンバーでは無いが実力は高い方であり、主に神庭の住宅地付近にヒュージが出現した場合出撃する傾向が有るのだ

「天野さんとしては…どう?」

グランエプレと比べて」

「どうも何もまだ見てないもん

見てないのに評価はしないよ私」

「へえ、」

その言葉に薫は感心する

大体のリリイならば百合ヶ丘と聞いただけで差はあれど格上だと身構えるが海濤はその評価すらしないと切り切ったのだ

「敵は己の中にあるってやつ

百合ヶ丘の看板にビビって普段の力を出せずに終わりましたってなったら駄目でしょ

そりゃ向こうは上なんだろうけど私達が無力だとは思わないわよ」

更に続けて言う

百合ヶ丘のリリイは確かに強い

これは紛れも無い事実である。

しかしその看板に此方が萎縮し普段の力を出し切れないなど論外なのもまた事実

グランエプレとてトップレギオン、百合ヶ丘から見れば格下なのは事実であるが全くの無力では無いとグランエプレと過ごしてきた海濤は判断する

ただ、メンバーの個性が強い為それが悪い方向に働かないのを祈っているのだが

「帰ってきたら思い出話聞かせて頂戴」

「思い出の一つは持って帰ってくるから安心して」

そんな風に雑談していると不意に部屋のドアがノックされる

「誰?」

「さあ?…ちよつと見てくる」

そう言う薫は入口へと向かう

灯莉と姫歌はアイドルリリイの研究で来ないだろうし紅巴も来るとは思えない

教導官辺りであろうか?

そんな風に考えていると

「天野さん、叶星様と高嶺様が来てる」

「…ほえ？」

「海瀉ちゃん、ちよつと良い？」

そこに居たのは叶星と高嶺

部屋に来た理由には何となく心当たりがあるがこのタイミングになる事は読めなかった

すると高嶺は

「心当たりは有ると思うけど立ち話も何だし…場所を変えましょう？」

「変えるって…どこです？」

外は寒いですし…校舎に忍び込みます？」

どこかの教室、もしくは外で話すのだろうかと考えていると予想外な言葉が返ってくる

すると高嶺は笑いながら

「夜の校舎も魅力的だけど、もつと適切な空間があるじゃない…ねえ？」

「ええ。」

叶星も笑みを浮かべながら答える

この反応を見るに二人で提案した作戦なのだろう

「とりあえず行きましようか」

私達の部屋に」

「…はあ!？」

しれつと言われたがまさかの先輩達の自室に招待である

神庭において聖域中の聖域と言われる叶星と高嶺が過ごす部屋

まさかの招待である

紅巴が聞いたなら昇天する事間違い無しの提案

しかし先輩からの誘いを断るほど海瀉は無礼な人間ではない

知られたら後が怖いがここは付いていくしかない

暫く歩いた後叶星と高嶺の過ごす部屋へと到着し中へと通される近くの椅子に座るように伝えられると高嶺はキッチンへと向かう

「海瀉さん、飲み物は紅茶で良いかしら？」

「えっ、あ、はい」

椅子に座り暫くすると高嶺が人数分の紅茶を用意してくる
口をつけないのも失礼なので一口飲む

噂通り、高嶺の入れた紅茶はとても美味しい

自分でやると：味が大惨事になるのは目に見えている：というか
やらかした前科がある

すると叶星が

「ミーティングの時から様子がおかしかったけど：やっぱり海瀉ちゃんは今回の合宿：嫌だった？」

いきなり本題に入ってくる

まあ隠す程でもないし叶星の目はごまかせない

海瀉としても聞いてきてくれるのは有り難かった

「嫌かどうかと聞かれたら嫌ですよ。そりゃ

色々と思う所もあるんで：」

ここで嘘や建前を言っても話が進まない為本音で答える

「そう：でもどうしてそれをミーティングで言ってくれなかったの？」

あの時も言っただけど出撃拒否だって出来るのよ？」

「個人としてなら間違いなく拒否してましたよ

ただ今回はガーデンを介しての正式な要請です

「私一人辞退して迷惑をかけるわけには行きませんし。」

「確かにそうね

：でも、嫌なのは確かなのね：」

「そりゃ嫌っすよ。

私には喜んで行く理由がないですもん」

海瀉は素直にそう答える

その答えを聞き叶星も一先ずは納得する、のだがどこか空気が重い
と言うより何かを躊躇っている形だ

すると高嶺が

「叶星、どうしたの？」

今日はこの話の為に海瀉さんと呼んだんでしょう？」

「そ、そうよね」

高嶺に諭され叶星は決心する

一息吐くと

「その、高嶺ちゃんの…いや、私達の事なんだけれどね」

その言葉に海瀧はまさか、と思う

高嶺がどこか故障しているのではないか？

春先の時点で気になっていたがそれはあくまでも海瀧の予想ではない

が、ほぼ正解に近いのであろう

「海瀧さん、貴方気づいていたでしょう。」

それもかなり早く…春先には」

高嶺はそう告げる

問い詰めると言うより答え合わせをしているような形だ。

「あくまでも予想ですよ予想」

「それでも十分よ。流星は現鎌倉5大ガーデンの中等部出身って所かしら？」

「そつちもちやつかり調べてるんですね」

「ちやつかりも何もトリグラフを使いこなしたり、複数のサブスキル覚醒するリリイなんてそうは居ないわよ

私達から言わせれば貴方も十分怪物なの」

高嶺が呆れた様にそう言う

春先から指導して来たからこそ海瀧の素質の高さには驚かされているのだ

それにも関わらず注目度が低いのは姉がそれを遥かに上回る怪物だからであろう

「で、海瀧ちゃんを呼んだのは答え合わせの為なの

後は…海瀧ちゃんから見た百合ヶ丘の話も聞きたくて…ね？」

叶星がそう付け足す

海瀧としても高嶺の件は気になっていたが話さないのには何か理由が有るからと考えていたのだが、どうやらそれで上級生にここまで不安を与えてしまったのは内心申し訳なく思う

後者はやはり上級生から見ても今回の合宿は気になる所があったのだろう

百合ヶ丘からの誘いに浮かれることなく裏を考える
リーダーとしては当然であろう

欲を言うならば姫歌達も最低限の警戒をして欲しかったのが本心なのだが

「あくまでも私視点ですからね

御台場卒の叶星さんたちはまた別な見方かもしれないですよ？」

で、何を聞きたいです？」

「そうね…」

その後は3人での話し合いになる

答え合わせと事情の説明であるためそんなに時間はかからなかった

もう少し長く話したかったのもあるがこれ以上話し込むと時間的に怪しまれる可能性も出てくる為仕方がないであろう

「部屋で休んでたのにゴメンね？」

それとこの事は…」

「分かっていますよ。」

私、口、硬いんで」

念をいれるがそこは海瀧も分かっている

まあここで言いふらす性格ならばこの話をされてはいないだろうし最後の確認という意味が強い

「じゃあ私、もう部屋戻りますね

明日の準備やら色々あるので」

「ええ、また明日」

そう言い残し部屋を後にする

この日を堺に神庭は少々忙しい日々を迎える事になる
ちなみに部屋に戻った後は

「どうしたの？」

何かやらかした？」

「いや、別に

私、鎌倉上がりだし向こうのヒュージの事とか聞いておきたかった
みたい」

「ふうん」

こんなやり取りがあったとか

この日から数日後に叶星は百合ヶ丘へ合宿の挨拶に向かい

さらに数日後には百合ヶ丘グリーンフェアに参加し海濱以外の
面々は一柳隊との顔合わせを終える

「…ん？電話？」

ひっさしぶり！そう！合宿で。うん

…え？そりゃ私も使えるなら欲しいけどアレって遊撃隊に配備：
はあ!?作った!?

それを？うん、あー、うん。

百合ヶ丘で会うわけにも行かないし…え？合宿終わりに用あるからコツチ来る、あー、分かった。うん待ってる」

実は合宿直前に海漓が電話でこのような話をしていた事は誰も知らない

電話の相手が分かるのはもう少し先の話

第24話

百合ヶ丘グリーンフェアから数日後、グランエプレのメンバーは合同合宿の為百合ヶ丘女学院へとやってきていた

荷物の受け取り等々を済ませ校門前で合宿相手である一柳隊と顔合わせ

一柳隊とは隊長に一年生の一柳梨璃（ひとつやなぎ りり）、副隊長に二年生、白井夢結（しらい ゆゆ）を据えた今年設立されたレギオンであり

楓・J・ヌーベル、二川（ふたがわ）ニ水（ふみ）、郭神林（クオシエンリン）、王雨嘉（ワン ユージア）、安藤鶴紗、ミリ
アム・ヒルデガルド・V・グロピウス、吉村・Thi・梅の9人で構成されている

二年生は夢結と梅の二人で残りは一年生

下級生が多いという部分だけを考えると神庭と同じような構成である

そんな彼女達と自己紹介…と言っても百合ヶ丘グリーンフェアに参加してなかった海漓だけなのだが

その名を聞いた一柳隊メンバーの反応に差はあれど共通するのは初めて聞いたという事実

詳しい話は合宿場所である海岸線に向かいながらする事にする

「それにしても驚きました…天葉様に妹がいたなんて…お姉様はご存知でした?」

「いえ…私も初めて聞いたわ」

そう言ったのは梨璃と夢結

彼女達もまた姉妹契約を結んでいる

それを聞いた海漓は

「(ガチで私を居ない扱いしてやがったのか…いや分かってたけど実際に聞くとなあ…)」

想定していたとは言え実際に聞くと心に來るものがあるのも事実

リリイで有るかどうかはともかく海漓の存在そのものを姉が隠していた事を知って無反応で居ろというのが酷である

するとそれを聞いていた少女、ニ水は意外な反応を示す

「海瀉さんが天葉様の妹だって知ったのは私も初めてですが

私、海瀉さんの事自体は知っていましたよ？」

「え、何で？」

二水は当たり前のように言うが海瀉は当然疑問に感じる

海瀉が中等部時代を過ごしたガーデンと言うのは当時は弱小扱いであり鎌倉内で観た場合だとメルクリウスや百合ヶ丘には多くの怪物リリイがいる

その中で海瀉を知っている理由は何なのか

そんな彼女の疑問など把握せず二水はスラスラと話す

「私、リリイオタクなので

中等部から活躍していた海瀉さんの事も当然チェックしていました！」

「そりやどうも。」

海瀉は呆れながらそう言う

百合ヶ丘所属ともなれば大体は同格のガーデンのリリイにしか目を向けないものだと思っっているので彼女のようにガーデンの規模問わず把握しているなど珍しいと考えていたのだ

そんなやり取りをしている後に海岸線に到着

楓の号令と共に合同合宿が開始される

一年生がやるのは基礎的な事を中心に、上級生は戦術理解を深めるためのシミュレーション：なのだが

「いや、それはうちだと司令塔の定盛ちゃんがやらなきゃダメなやつでは？」

上級生と下級生に別れて行っているのだが下級生のやるメニューは体力メニューを中心とした基礎的な事を中心に組まれており、メニューに差は有れど神庭でも行っている事だ

叶星と高嶺が司令塔を努めているのであればこれでも問題は無いがグランエプレの司令塔は姫歌である

ならば彼女こそ、そのシミュレーションを受けるべきだと海瀉は考えているし、それを本来ならば叶星達が伝える必要があるのだ

さらに言うとこれが合同訓練だけならまだ分かるがヒュージの対処と言う目的が有り、出現した時の事を考えると基礎も大事だがシユミレーションやお互いの連携の確認等やる事が山ほどある

勿論、これが百合ヶ丘流の訓練前のウォーミングアップと言う可能性もある

百合ヶ丘ではウォーミングアップをやるのは一年生だけで上級生はアップをせずに即訓練を行うのが常識なのであろうか？

「(その打ち合わせをするために叶星さん達が…あれ?)」

と、ここで違和感

来校時、叶星と高嶺は先に百合ヶ丘内へと入っていった

目的は百合ヶ丘への挨拶の他に隊長と練習時の打ち合わせだと思っていたが隊長の梨璃はまさきに自分達を出迎え

二人と出てきたのは副隊長の夢結と楓では無かったか？

「(…いや、まさかコイツ…メニューノータッチ? いや、まさか…隊長だぞ?)」

グランエプレの訓練メニューは上級生が組みつつメンバーの意見を纏めながら組み上げる形

一柳隊がどのような方式を取っているかは分からないが隊長がメニューに関わっていないなどあり得るだろうか？

海漓の中等部時代を思い返してもなんらかの段階で隊長の耳には入っていた

事前に伝えていたから梨璃は迎えに来た…という可能性もあるが先程の反応からして初めて聞いたようなニュアンスだ

海漓は丁度近くにいた梨璃に聞く

「…このメニューって一柳隊が普段アップでやってるやつ?」

「普段とは違いますね

今やってるのは、お姉様と楓さんが新しく組んでるメニューだと思います

…私このあたりは良く分からないので…後でお姉様に聞いてみますか?」

「ん、んー、後で直接聞くから大丈夫」

まさかの予感的中である

楓の実績と実力を考えるとリリイに合ったメニューの作成など簡単にできるだろう

しかしそれを隊長が把握していないのはないのだろうか？

彼女を圧倒的に信頼しているからこそ全てを任せている可能性もあるので一概にどう、と言うことも出来ないのだが

合宿に来る前に姫歌達は同い年が百合ヶ丘で隊長を努めているのだから負けられない…と意気込んでいたがあつて間もないが彼女達は負けているのであろうか？とも思う

勿論、百合ヶ丘レギオンで隊長を務めるのだ

実力を隠している…もしくは何か特別な才能を秘めている可能性は大いにある為油断は出来ない

そんな考えを持ちながらも時間は進み、ノインヴェルト戦術の講義を行う…のだが

その途中で金切り音のような声が響く

「ヒュージ出現…」

練習は一時中断ね」

叶星がそう言う

スモール級かつ数もそんなに居ないが油断できる相手ではない

「皆、準備は良い？」

グランエプレ、出撃！」

「一柳隊も出撃です!!」

叶星、梨璃の二人も出撃の号令をかける

その瞬間、両レギオンともにフォーメーションを組む！

そして先制攻撃と言わんばかりの攻撃を行ったのは一柳隊ではなく海濱である

「スモールとは言え先手必勝!!」

そう言いトリグラフを抜き素早く射撃を叩き込む

この流れ、グランエプレではお決まりの光景ではある…のだが
「見慣れてる私達ならともかく初めて見たらそんな反応よね…分かる
わ」

「なんかあーちゃん、また速くなってるない?」

姫歌と灯莉の言うとおり、一柳隊は全員があっけに取られている
向こうも先制攻撃を行う事を考えていたと思うがその彼女達が攻
撃を行うよりも速くに攻撃が開始されたのだ

驚くのも無理は無いだろう

「…って感心してる場合じゃないわ

私達も行くわよ!!」

そういつまでも感心しても居られない

ヒュージはまだいるのだ

一柳隊は既に戦闘を開始している

出遅れる訳には行かない

グランエプレもそれぞれ配置に付き、戦闘を始める…のだが

「海漓ちゃん、スキル…使わないんですか?」

紅巴はそう尋ねる

いつもならこの後は海漓がレアスキルを使いヒュージを攪乱する
かレアスキルとサブスキルを併用し自身も前に出るのだが今回は前
に出ずあくまでも支援を行っているのだ

「あー、スキル?」

今回はやめとくよ数もないし何より…」

「?」

「百合ヶ丘の目の前で使ったら不味いでしょ

下手しなくても私、撃たれる」

「あつ、そ、そうですね…」

海漓の答えに紅巴は心当たりがあるのであろう

納得したような表情を浮かべる

グランエプレで当たり前に使っている海漓のレアスキルだが百
合ヶ丘のリリイが居る前では発動する訳には行かない

文字通り初見で海漓のレアスキルに対応するのはほぼ不可能なの

である

戦闘が終わり、一旦休憩となる

その途中、楓は

「(一年生3名の実力は把握出来ましたが…海瀉さんだけはまだ把握出来ませんわね…この後の訓練で…)」

この後の訓練の事を頭に思い浮かべる。

以前と今回でグランエプレの実力はほぼ把握しているのだが海瀉の戦闘を見るのは今回が初めて

実力を把握しておきたかったのだが、その戦闘で力を抑えられてしまつてはこの後の訓練に不安を残す

少々手荒にやる必要が出てきたかもしれない

「楓、この後なんだけど…」

ちよーつと揉んであげようと思うんだけど…良いか?」

声をかけてきたのは梅

先の戦闘を見て思うところがあるのだろう

それは海瀉ではなくグランエプレ全体を差しているのを付け足し

しておく

「はい。お願いしようと思つていたところです。」

楓もそれに同意する

この後の訓練は彼女が適任なのは明白

梅が相手なら海瀉も本気を出すであろう

一柳隊のメンバーには伝えていないが彼女が本気を出していた時のデータはとある人物に頼んで入手済み

勿論、鎌倉を離れ、神庭に進学し力をつけているが何も知らないよりはマシなのも事実

楓がこの後の予定を考えていると丁度休憩が終わる

それと同時に始まるのは次の訓練だ

「さて、ここからは梅様がヒューズ役です」

そう言い梅がCHARMを構えて横に立つ

疑問に思う者、内容を察知する者様々である

すると叶星が

「なるほど。皆、配置に付いて

気を引き締めてね」

数名混乱しているが、叶星に言われ配置につく

勿論、海漓もその一人だが

「(どうすつかなあ…ノインヴェルトって言うならレアスキル…使うか?)」

この後どう立ち回るかを頭の中で考える

普段どおりやるか…ある程度は隠すか

そう考えていると高嶺が海漓のそばまでやってくると耳元で

「…折角の機会だし、試してみたら?」

サブスキルの精度を測るには丁度いい相手よ

レアスキルは…状況をみて発動すれば良いわ」

「…なるほど、良いですね、ソレ」

海漓も小さく笑みを浮かべる

開始寸前に話しているのだが、幸いな事に二人の会話は聞かれてはいない

「おーい、どうしたー?」

「何でもないわ

ただの打ち合わせよ。」

梅が気になり高嶺に声をかけるが高嶺は何ともないように告げる

お互いの思惑が交差しながらも合宿はスタートする

第25話

梅をヒュージに見立てた模擬戦

彼女を相手にノインヴェルト戦術を成功させる事がこの訓練の目的である

そもそもノインヴェルト戦術とはいくつか例外はあるが9人で行う集団戦術の事を指す

CHARMを世界と位置づけ、それを特殊弾により生み出されたマギスフィアで繋ぎ、成長させヒュージに放つリイの必殺技とも言える攻撃である

これが5人だとフンフェルト、6人だとゼクスベルトとよばれる事も有るが総じてノインヴェルトと呼ばれるのが一般的である

全くの余談であるが似たような集団戦術に片神明封神術式や魔弾の射手等があったりする

このノインヴェルト戦術の教育において百合ヶ丘は世界的な名門校でもある

勿論神庭でもカリキュラムは組まれているのだが百合ヶ丘と比べると劣ってしまうのもまた事実

グランエプレで特殊弾を持つのは姫歌であり彼女は弾を装填、マギスフィアを生み出す…のだが

「いくら百合ヶ丘のお姉様と言えど一人じゃ…!」

「定盛ちゃん早くシヨットする!」

来るよ!!」

姫歌の油断に気づき海漓はマギスフィアを放つ様に言うが少し遅かった

「一人じゃ、どうした?」

「えっ!」

梅はすぐさま移動し姫歌のパスを妨害する位置に立つ

「あつ、詰んだわ、これ。」

「お疲れっした、かいさーん」

「こら、諦めないの」

「ですすよねー」

まあ、よくよく考えたら仕方ないか…」

回した段階で妨害が入るのであればフォローも出来るが流石にパスを回す前に潰されてしまったては普通ならどうしようもない

海漓もそれをわかっていたから一度諦め泣きのもう一回を頼むのも有りと思っていたが流石にこれは叶星に静止される

こればかりは姫歌のミス

勿論数が多い方が有利なのは事実だが相手は百合ヶ丘かつ実力は当然としてノインヴェルトに關しても向こうがプロフェッショナル

この手の対処は手慣れているのだ

ましてや自分達は百合ヶ丘から見たら格下だし百合ヶ丘のとある技術は習得していない。

そんな状況で油断してしまえば、このような事態を招くのは当然とも言える

海漓からしてみれば技術面の他に一柳隊には楓がいるのだから、あるレアスキル持ちが一人は確実にいると判断する

仮に姫歌が油断してなくても詰んでいた可能性がある為、彼女一人を責めるのも酷な話になってしまいうのも事実

総合的に考えるとこの試合は一度捨てても良いのだが本番だここから建て直さないと行けない

余り下手な事をしてこれ以上自分達を甘く見られるのも腹が立つ
少しばかりやる気を出しておいたほうが良いかもしれない

「おわっ、はやーい☆」

「あれは…梅様のレアスキル縮地…ですね

空気抵抗のベクトルを操作して高速移動するレアスキル」

「縮地…それって確か海漓の…」

彼女のレアスキルを用いた移動を見たメンバーが各々感想を漏らす

百合ヶ丘の縮地使用…ましてやかつてのトップレギオン候補のメンバーならばこの位の速度は当然なのだが実際に目にしてその凄さを実感する

「梅と同じ縮地使用がいるのかー?」

「さあ?どうでしょう?」

「うおっ!」

彼女がそう話した瞬間、背後から強い気配

すぐさま振り向きCHARMで迎撃

模擬戦なのだ、多少の接触は認められる

海瀉もトリグラフをパルチザンモードへと変形させており拮抗状態となる

「時間は稼ぐからパスよろしく!」

「分かったわ!!皆、パス回し行くわよ!」

海瀉は姫歌にそう告げるとすぐさま梅を抑え込みにかかる

真正面から打ちあえば海瀉に勝ち目などないのは明白

「距離があったのにいつの間にか詰められた:梅と同等:なのか?」

「(定盛りちゃんの言葉:使わせてもらおうよ!)」

普通ならどうしようもないが、海瀉は普通では無いし、真っ向からやって勝てないなら裏技を使ってでも勝てばいい。

仮に海瀉が勝てなくても最終的にノインヴェルトが決まればこちらの勝ちなのだ

それに先の姫歌の発言

海瀉にしてみれば援護にも等しい

「灯莉、パス!!」

「まっかせて☆」

姫歌もすぐに切り替えて灯莉へとパスを回すのだが

「そうは行かないぞ」

「速いッ:でも:」

梅も海瀉を振り切り灯莉のパスカットに入る

移動速度もさる事ながらこちらのパスコースを尽く予想したかのような動き

「…技術か居るであろうあのスキル所有者がテレパス飛ばして援護してるのか…どっちだ!？」

少し揺さぶってみるか」

彼女の個人の技量は当然としてその他+αの要因にも目を向けなければ行けない

「ふつたりともはやーい♪」

「灯莉ー！感心してないでマギスファイアを確保しなさいよ!!」

「あつ、忘れてた」

灯莉、梅と海瀉のスピードに感心してまさかのマギスファイアを見失う

梅もこれを予測しマギスファイアに近づいていた海瀉の元へと向かう

「と、カットだぞ」

「そう来ると思ってきましたよ」

「何？」

梅も当然海瀉の元へと駆けつけ睨み合いとなる

これでは海瀉はマギスファイアを取りに行けない

彼女の移動速度と自力では梅を出し抜く事など不可能である

そう、海瀉、一人でなら、不可能な事だ

「か、確保しました!!」

「…!？」

マギスファイアの回収に向かったのは海瀉ではなく紅巴

海瀉はあくまでもこの為の囷なのだ

「(い、いつの間に…確かに全員マークしてたはず)」

梅は背筋が凍るだろう

全員マークをしていた…にもかかわらず海瀉に背後を取られ、今度

はマークしていた筈の紅巴が突然マギスファイアを確保し始めたのだ

「ステルス使いがもう一人居たのか…!」

勿論これで取り乱す梅では無い

冷静に状況を分析する。

姿を消すならサブスキル、ステルスを用いればいいだけの話

紅巴がステルスを持っていたとしたら何もおかしくは無いが、ならば始めから姿を消しそれこそ梅が灯莉のカットに入る前に自身が取ればいいだけの話

確保した時に喜ぶ必要は無い

紅巴がマジスファイアを確保している事を考えると次にパスを受けるのは海漓

その後には上級生なのは明白

そして当の海漓は梅に張り付いているのだ

パスの成功率は更に低くなる

「(スキルじゃないな…となると技術の応用か)」

海漓の揺さぶりに対する梅の反応

レアスキル所有者援護や自身のサブスキルを使っていない事が分かる

スキルが使われたら紅巴の方に向っていたのだから

トリックが分かればこつちにも機会は有る

技術を使っているからこそその欠点であり海漓のようなりイが避けられる理由でもあるのだなら

「…紅巴ちゃん、こつち!!」

「動いた…!」

先に仕掛けたのは海漓

声と共に海漓が移動する瞬間、梅も移動し海漓を追い抜くとすぐさまパスコースに割り込む…と思われたのだが

「…あ、あれ?」

「何してるんです?」

コースにいつまで立っても海漓が現れないし、到着する気配すらない

梅は付近を見渡すと、先程いた場所に海漓いる、しかもマジスファイアを受け取った状態で、だ。

海漓はその場を一切動いていなかったのだ

そしてマークが外れてしまえばパスは簡単に通る

「今…確かに動いただろ…戻った…?」

「何を言ってるんです？ 私は始めからここにいましたよ？」
梅さんが勝手に動いたんじゃないですか」

あくまでも悟られぬよう、海瀉は何事も無く告げる
グランエプレのメンバーは驚きもなく次の手に備えているが一柳
隊からしたらこの光景は異様でしかない
そんな事はさておき、この方法も連打しすぎるとすぐにトリックが
バレる

手を変えるのが妥当だ

マギスファイアを確保したのだから後は高嶺にパスを回せば海瀉の
役目は終わり…だがそう簡単に事は進まないのは明白

「悪いな、少し手荒に抑え込ませてもらうぞ…！」

「上等!!」

梅もトップスピードで海瀉まで切り込むとそのままパスコースの
ブロックに入る

「梅様が…消えた!?!」

今までとは違う速さ

本気で来たと見て間違い無いだろう

海瀉も高速移動で一応の対抗を試してみせるが実力の差は明確に出
る

そもそも真っ向勝負で海瀉が勝てる要素など何もないのだ

「(こつち、次は…これもアウト…ハイハイ

保持は…イケるか)」

「(安易に攻めて来ないな…

梅の動きを読んで…このスピードだぞ?)」

このトップスピードだ。

安易にパスを出せば簡単に潰される未来しか海瀉には見えない

今は梅の妨害を避けつつマギスファイアを保持するしかない

そもそも梅のトップスピードに見失う事無く反応している時点で

異常ではあるのだが先の出来事に比べたらマシではある

それを見ていた高嶺と叶星は

「…リリイを相手にしているわけだしヒューズよりも抑え気味とはいえあの精度

レアスキルは封印させた方が良かったかしら？」

「海瀉ちゃんが目指すリリイ像を考えたら正解かもしれないけれど…今回は封印させても良かったかも

…さつきはその確認だったのね」

二人はこの光景を見て苦笑い

確かに状況を見てレアスキルを使つていいとは言ったが、数回の発動でここまで立て直せたのだ

精度の高さに素直に感心すると同時に最初から封印させるべきだったかもしれないと思う

…が、それをやってしまうとこの合宿中も封印する事になってしまう為判断が難しくなる

サブスキルに関しては上手く扱えている

とはいえあくまでもサブ、レアスキルと比べると威力は落ちるしトップリリイのレアスキルとやりあつてしまえば押されるのは明白

こうなつてしまうのは分かつていたこと

海瀉がレアスキルを本気で発動し紅巴のテストメントと組み合わせれば梅を出し抜く事も可能だがそれをやってしまうとこの訓練の目的から外れてしまう

目的を考えると彼女達のやる事は一つだけ

わかつているからこそ二人は改めてCHARMを構える

「さて、そろそろ私も行くかしら

後輩がここまで意地を見せたんだもの、私も少しは先輩らしい所を一柳隊の皆さんに見せておかないとね」

高嶺はそう言うといつになく真剣な眼差しになる

いつも真面目だが模擬戦でここまで真剣になるのはいつ以来だろう、御台場以来ではないか

叶星はそう想い返す

「高嶺ちゃん、今日は一段と真剣ね

何かあったの？」

「久しぶりの外征で気分が良いから…かしらね」

そう言う和高嶺は海瀉の援護へと向かう

外征で気分が良いと言うのも嘘ではないが、それ以上に高嶺にもどこか思う所があるのだろう

「(こっちも駄目、こっちも!?)

ヤバいな、詰んでる、

レアスキルを本気で打つか?でもそれやるとなあ…)」

「(強めのプレッシャーかけたらピタリとやんだ

縮地の維持で精一杯でステルスの発動まで持っていけないか)」

梅が本気で海瀉を抑えにかかったと同時にあの現象が収まったのだ

レアスキルの維持に力を持っていかれサブスキルの発動までは行けないと梅は思う

先程は他のメンバーに注意を向ける必要があったが今は違う

他の一年生は様子見しており、高嶺と叶星もまだ動かない

動くとしたら海瀉がマギスフィアをロストする時と考え相当強くプレッシャーを海瀉にかけてきたのだ

「(ヤバイ、ヤバイ

…もう切るしか…!)」

「そろそろ限界か?」

このまま行けばペースを取り戻せる

そう、思ったのだが

「強引に行かせてもらうわね」

その言葉と同時に梅に対し猛スピードで突撃してくるリリイが現れる

高嶺だ

「(ここに来るのか!!)」

「それっ!」

その言葉と同時に高嶺は自身の愛機であるリサナウトを振り下ろし梅も回避の為後退する

与えられたチャンスは逃さない

「ハイどうぞ」

「受け取ったわ」

二人はCHARMを接触させる形でマギスファイアをパスする
投げられないなら取りに行けばいい

それだけの事である

「後は任せます」

「任されたわ」

高嶺がその言葉を聞くと同時に海滴は後退

現状における最高戦力に繋いだのだ

後は二人次第

援護も可能だが上級生同士、水入らずの訓練も良いであろう

「ほう、ゼノンパラドキサ使いか

縮地に加えて複数対象の行動ベクトルを把握出来るレアスキルだ
な」

先の出来事に加えれば高嶺の現象は説明しやすい

彼女のレアスキルは百合ヶ丘でも多く所有者がいるためだ

それは高嶺も十分に把握している

「梅さんや…百合ヶ丘のゼノンパラドキサ使いに比べたら大した事は
有りませんがこの程度ならば」

落ち着いて、あくまでも冷静に告げる

すると梅は

「第2ラウンドと行くか？」

梅はまだまだ行けるゾ

やってみるか、ドッグファイト？」

「ええ、胸をお借り…」

いいえ、望む所と言わせてもらいましょう」

二人はそう言い目線を合わせると同時にレアスキルを発動

高速戦闘へと入る

「皆、見て

あれだけ高速でのマッチアップ…そう見られるものではないわ」

叶星も改めてそう告げる

先の戦闘も早かったが海瀉と違いレアスキル同士での激突文字通りハイレベルの戦闘だ

勿論、海瀉が弱かった…と言う事ではなく海瀉は十分以上の働きをしたのだ

高速移動を行えるレアスキル同士の衝突と言う意味なのは言うまでもない

「(尽くパスコースを潰して…流石だわ)」

「(また動きについて来られた…」

さつきは耐える事に意識を向けて今回は攻めるための動き…)」

二人はぶつかりながらも状況を分析

先程と違い実力差は無いがその分、次の動きが肝心となる

順番的に最後は叶星

どう繋ぐか、が非常に鍵となる

梅とて馬鹿ではない

先の出来事は頭に残っているだろう

ならばそれを利用するだけである

「灯莉さん、行くわよ!!」

「バッチコーイ!!」

「同じ手には引つかからないぞ!」

高嶺は灯莉にパスを回すことを告げるがこれは相手が違えど状況は先と同じ

灯莉もステルス所有者と思うかもしれないが彼女はもう受け止める準備を整え姫歌と紅巴は梅の妨害に備える

海瀉はいつの間にか彼女達の背後まで下がっており万全の体制を取る

梅の妨害よりも灯莉のロストの為にバックアップの面が強かったりするのがそれを知る者は一柳隊にはいない

そして高嶺も灯莉にパスを出す素振りを見せる為、梅も灯莉の方向かう…のだがいつまでたってもパスは来ない

「…!?!」

「バ、バックパス！」

叶星様!!」

そう彼女はパスを放る瞬間に向きを灯莉のいる方向とは逆にパスを放つ

そこには本来ならば誰も居ない…のだが叶星は来ることが分かっていたかのような完璧なタイミングでマギスフィアを確保

「受け取ったわ、高嶺ちゃん

これで…フィニッシュよ!!」

そのままフィニッシュショットを何も無い海面に向けて放つ

「や、やったあああ!」

それを見て最初に歓喜の声を上げたのは灯莉

「す、すごいです

フェイントからのフィニッシュショットがこんなにも鮮やかに」

そして二水もこの光景に感激する

訓練終わりに聞こえてくるのはやはり高嶺と叶星の連携の高さを称賛する声

一年生と比べると洗練された動きだったのだ

そうなるのも無理はない

「まあそうなるよなあ…

ノインヴェルトの連携って考えたらやっぱり叶星さんと高嶺さんがずば抜けてるし)」

海瀉とてそれは分かっていた

自分がやったのはあくまでも時間稼ぎ

百合ヶ丘なら誰でも出来る事なのだ

時間稼ぎと連携技なら後者が称賛されるのも仕方なし

とはいえ海瀉もやりたかった事はやれたので収穫はあった
すると楓が

「さて、今ので皆さんの課題なども見えてきましたし皆さん向けにメニューを作成いたします

少々お待ちくださいな」

そう告げると紙とペンをどこからか取り出し作業を始める

合宿は始まったばかりである

第26話

楓から手渡されたメニューを受け取り訓練を行う

詳細は割愛するがそれぞれに合ったメニューだった…と記しておく

そうして訓練を終えたのが昼過ぎ

すると梨璃が

「あれ？そろそろヘルヴォルの皆さんが到着する時間じゃないですか？」

そう言い数名も時計をみると確かにそんな時間である

改ためて顔合わせをするため全員で駅まで迎えに行くことになる

その途中も一柳隊とグランエプレは交流も兼ねて話ながらの移動になる

海瀉は楓に誘われ二人で話すことになった

これは海瀉にとっても好都合

「で？」

「で、とは？」

「ヘルヴォルだよヘルヴォル

百合ヶ丘に泊まるとか書いてあったけどガチなの？」

「ガチですわよ」

その言葉に海瀉は驚く

様々な事情があり百合ヶ丘とヘルヴォルのメンバーが所属するエレンスゲは仲が良くない

と言うより目の敵にしている

まあそうなる理由も分からなくは無いし海瀉も中等部時代にエレンスゲのとある行いには迷惑していたのだ

問題はなぜそんな対立構造に有るガーデンを誘ったのか…だ。

ヘルヴォルが来たは良いが生徒達からの視線、何らかの形での監視、軟禁とも言える措置

考えられる事はいくらかでも有る

「良く許可だしたね、百合ヶ丘の生徒会長のあの発言、知らないわけ

じゃないでしょ？

あれ私ですら知ってるんだからね？」

”戦の作法も知らない野蛮人”それが百合ヶ丘の生徒会長がエレンスゲに対して行つた発言である

守るべき法を守らないのは問題なのは分からなくもないがそれを抜きにしても命がけの戦に作法も何も無いのだから…と海瀉や古巣の面々はツツコミを入れていたのだがそれは別な話

海瀉のその発言に楓は

私も詳しくは把握していない、と前置きをした上で

「生徒会での会議の前に編成部やアールヴ Heim の方々の強い推薦が有つたようですわ

ヘルヴォルの芹沢千香瑠様が百合ヶ丘と少々御縁の有る方なのでそのツテですわね

この後も海瀉さんが想定しているような扱いにならないのは断言できます」

「百合ヶ丘と縁のあるリリイに不快な思いはさせないって訳か

運が良けりや学園内部でその手の話を持つていける…と」

海瀉は納得する

海瀉もヘルヴォルのメンバーと会つた事は有るが実は全員と会うのは今回が初めて

会つたことが有るのは隊長と上級生2名のみ

グランエプレの他のメンバーも各々面識は有るがフルメンバーで会つたことはまだ無い

今話題にしたリリイと海瀉はまだ面識が無い

巧妙な手段だと海瀉は思う

彼女はヘルヴォルが百合ヶ丘で宿泊するならば何らかの形で強い監視が入る事は想定していたし

その他諸々の面で神庭ほど自由に動けるとは想定していなかった
時期も時期だ、百合ヶ丘の校風を考えると他校の有望株のリリイに

声をボチボチかけていてもおかしくは無い

合宿の裏の目的の一つと考えてもいい

神庭からは誰が欲しいのだろうか？

海漓は論外、姫歌も百合ヶ丘的には不要として最有力なのは上級生の二人、次点でマギが見えるという灯莉、レアスキルの希少性を考えたら紅巴もあり得る

話を戻し、ヘルヴォルに対して監視などを行ってしまうと、とある行動をする時に不利になる

ならば暖かく迎え入れその上で学園内でアクションを起こすのが一番だと考えたのであろう

生徒としても百合ヶ丘内で絶大な人気と実績を兼ね備えたレギオンのメンバーのお気に入りならば、と納得する筈だ、あくまでも想像の域を出ないが

「この作戦に辺り夢結様と百由様が動いてくれていましたし祀様も生徒会の会議で賛成の立場を取ったとおっしゃっていましたので：悪いようにはならないでしょう」

楓はそう言う

数名聞き慣れない名前があったがどうやらこの作戦と合宿には色々な思惑がありそうだ

相変わらず梨璃の名前が出て来ないのは気になるが先の件からも分かるように間違いなく政治的な事は全て任せているのだろう

就任直後ならともかくある程度の時期が来ているのだからそういう交渉の場にも立てと言いたくなるが、一柳隊の運用に口を出す権利も無いので黙っておく

「後はヘルヴォル次第…:か」

「そういう事ですわ」

まあ、こちら奥の手を持っていますのでご安心を」

そんな話をしつつ後は雑談

そうしている内に待ち合わせの駅へと到着する

到着まで時間があつたため暫くは待っている…:予定だったのだが

案の定と言うべきか灯莉が居なくなる

姫歌達は捜索に向かい叶星は梨璃と共にヘルヴォル隊長を迎えに行く

それと入れ替わりと言っているいいタイミングで

「おっ、海瀉ちゃんじゃーん!!」

「久しぶり、元気だった?」

そう言いながらこちらに近づいてきた2名のリリイ

飯島恋花と初鹿野瑤だ

エレンスゲ女学園、ヘルヴォルのメンバーである

すると瑤は

「参加メンバー見たときは驚いた

私達が言える事じゃないけど…その、大丈夫?色々と

「いやー、不安しかありませんよ」

「だよね…」

彼女達もまた海瀉の事情をある程度は把握している側

二人共ため息を吐く

しかし疑っていてもキリがない

なるようにしかならないのだ

付近を見渡すと各々挨拶を済ませており、そうして間もなく叶星達

がヘルヴォルの隊長である相澤一葉を連れてこちらに向かってくる

すると一葉は海瀉を見かけるとこちらに向かってくる

「一葉、久しぶり!!」

「海瀉こそ!」

色々大変だったらしいけど大丈夫?」

「まあ、何とか…ね」

二人がそう話しているがここは駅前

3レギオンフルメンバーとなると相当な人数

立ち話をしていては通行人の迷惑となる

梨璃がヘルヴォルを百合ヶ丘へと案内する、そう伝えると案の定へ

ルヴォルの表情は暗くなる

「まあ、そりやそうだよな」

海瀧からしたらこれが当然の反応

梨璃がなんの疑いもなくヘルヴォルに告げる事がおかしいのだ

何らかの必勝の策がある…もしくは楓が把握していないだけで梨璃が独自に動き上層部を説得したのだろうか？

「(余り考えすぎるのも良くないんだけど…常に最悪の事を考えておけて教わってきたからなあ)」

悲しいかな、海瀧は百合ヶ丘のリリィほど気楽に構えられる性格ではない

中等部3年間でのそのように育てられたのだから仕方がないのかもしれないが

波乱の合宿は始まったばかりである

第27話

一柳隊に案内され百合ヶ丘女学院の校門へと再びやってくる

「久しぶりに訪れましたが、何度見ても趣のある素敵な校舎ですね」

「そう言えば千香嬢様は百合ヶ丘へといらっしやった事が有るんですよね」

感想を言ったのは千香嬢、その理由を二水が話す

先程楓が言っていたように彼女は百合ヶ丘と縁が有るのだから当然かもしれない。

彼女からしたや久しぶりの来校

挨拶等もしたいという

「(ヘルヴォルを呼んだ理由は間違い無くソレ…さて、どう仕掛けてくる?)」

海瀧は冷静に状況を見る

「では、皆さんをご案内しますね」

梨璃はなんの疑いも無くそう告げる

だが、一葉は

「その事なんです…私達はこつから先に進むわけには行きません」

「えっ、どうして…ですか?」

エレンスゲと百合ヶ丘の関係を考えれば至極当然な事なのだろうやら約一名はそれを全く知らないらしい

「…ッ(やつぱり、把握してないか…このゲヘナへの姿勢はガツチガチなの)」

今までの対応からして、まさか…とは思っていたがその予想が当たってしまう

そもそもなぜ一葉がこの様な事を言い出したのか

それはガーデンへのとある企業に対する姿勢にある

多国籍企業 G・E・H・E・N・A

ここはヒュージ研究で有名な機関であり元は民間企業の研究機関であったのだが次第に力をつけヒュージとの戦いを科学的な面で

引つ張るまでになった

これだけを聞くと問題はない：のだが

そのやり方というのに手段を選ばなくなり特殊な手術でリリイを過剰なまでに強化する等々裏での悪名も非常に高い

勿論そのような過剰な強化をするべきでは無いというスタンスを取る派閥もあり、一筋縄で行かない組織なのだ

そしてそのゲヘナに対し様々な分野で協力的なガーデンを親GEHENNA、逆に反対するガーデンを反GEHENNAと表せる

ここではエレンスゲは親ゲヘナ派、百合ヶ丘は反ゲヘナ派であり、百合ヶ丘は特に厳しくゲヘナ関連への接触及び研究関連の資料の閲覧も厳しく規制するレベルなのだ

補足すると叶星達の出身である御台場女学校は反ゲヘナ

海滴の出身は中立派だ

中立派と言うのはどちらにも肩入れはせず、ゲヘナの研究でも行きずた物は使わないと言う信条である

ちなみに神庭も中立の姿勢だ

そのような対立構造にあるガーデン、トラブル等々を回避する為にもいくら合宿とはいえ安易にヘルヴォルの面々が入る訳にはいかないのだ

ゲヘナ関連は海滴の場合、中等部入学直後に説明されており、どこも同じだと思っていたのだが実は違うのだろうか？

「ご存知の通り私達はエレンスゲ女学園に通う身、百合ヶ丘とは政治的にも、校風的にも微妙：というより敵対関係にあります」

「敵対って…」

私達は結束してヒュージと戦うって話をしたじゃありませんか」

一葉も分かりやすく説明する、が

梨璃はその発言にショックを受ける

結束するはずのガーデンから敵対と言われれば無理もないがそもそもそれを覚悟して呼んだのでは無いかと思う者もいたがあえて口

は出さないようだ

「結束して戦う…嘘ではありません。」

ですが…」

「確かに今回の話を持ちかけてきたのは百合ヶ丘側だよ…」

でも、そこから先はヘルヴォルが強引に進めた事だからね

エレンスゲも許可は出したけど…良しとしない人は大勢いるの」

一葉の言葉に恋花が付け足す

この辺はヘルヴォル側の打ち合わせ通りかもしれない

恋花の最後の言葉は彼女なりの優しさで有ろう

百合ヶ丘のリイがエレンスゲに肩入れする

そのリスクを暗に教えたのだ

一葉曰く、以前彼女と叶星は事前の挨拶の為に来校したがその際もかなりの配慮があつたという

「今回も私と百由とで理事長代行には直接許可を取っているわよ」

夢結はそう伝える

この場に百由というリイはいないが先程楓の話にも出てきたリ

イ

生徒会かもしくはガーデンの運用に意見できる人物だろう

「許可が出てる事は聞いてるよ…」

でもこの人数で百合ヶ丘の敷地に入るのは…ちよつとね」

「ですが、ヘルヴォルは一柳隊、グランエプレと共に戦う

この言葉に嘘偽りはございません！」

恋花は夢結の言葉にそう答える

許可が出てるから100%安心とは言えない

それを分かっているのだ

しかし共に戦う事自体は嘘ではない

余計な誤解を生まないためにも一葉は力強くそう答える

この状況、実はとあるリイとしても予想は出来ていた、楓である

「つべこべ言わず大人しく同じ竈の飯を食べればいいんです！」

…と、本当なら言い切りたい所ですが…」

「楓さん？」

楓にしては珍しく言葉を濁す

夢結もそれを不審に思う

「そちらにも譲れない事情があるのもまた事実。さて、どうしましょう?」

困りましたわ、とわざとらしく告げる

手が無いわけではない

が、それを提案するのは楓の役目ではない

しかし楓には確信があった、隊長の梨璃の事を知り尽くしているからこそわざとらしく言ったのだ

ここに必要なのは時間稼ぎである

「だ、だったら

私達が一葉さん達の泊まる所にお邪魔しましょう!!」

そしてその状況を見かねた梨璃はそう提案する

「えっ?」

一葉もその提案には驚く

何ならグランエプレのメンバーも連れていけばいいとの事

が、これがトラブルにならない唯一の策だろう

考えて言ったのか、単なる思いつきなのかは分からないが最善の案に近い

すると一葉は海瀉に唐突に話を降る

「この辺りにそんな大勢の泊まれるホテルある?」

私達だけなら何とかなると思うけど」

「いきなり話を振って来たね…」

海瀉は呆れる

色々と思う所も言いたい事もあるが今の海瀉は神庭に所属する身

下手に首を突っ込む訳には行かないため静観していたのだ

「だって海瀉は鎌倉府の出身だし、そう言う手続きに関しては私より詳しいでしょ?」

「中等部でやってきたからね…とりあえず、ヒュージぶっ倒すための外征って言えば空いてるところ紹介してくれると思うよ

外征の申請書とリリースって事を証明出来る物、ヘルヴォルなら隊長の一葉のサインで行ける」

そう教える

リリースの外征となると普通はガーデン内に宿泊するのだが、今回の様な場合や何らかの事情で急に街で宿を取らなくなった場合の非情手段と言うのもいくつか用意されており、海漓が言ったのもその一つかなり簡単に説明するとホテル側に外征である事と緊急である事を伝え、空き部屋があるならば宿泊させてもらえるシステム

なくても近隣のホテルを紹介してもらえ

まあ大体の場合は宿を取っていたりガーデン側が抑えている事が大半なのでそのような事は起こらないのだが

勿論、リリースである以上ありとあらゆる状況に備えている為、屋外での宿泊という手もある事を追記しておく

ちなみに、ホテル等に宿泊する場合費用はガーデンが全額負担するのが基本

ただ、金額が余りにも不自然に高額であったりしたらリリースに一部負担させる場合もある

俗にいう常識的に判断しろと言うやつだ

すると海漓は携帯端末を操作しつつ

「合流した駅辺りに目ぼしいのが何件か…この辺とかどうさ？」

そう言い一葉に何件か提案していると姫歌が

「海漓、ホテルは可愛い部屋のある所で頼むわよ！

ビジネスとかカプセルは駄目だからね」

そう要求する

その後、楓が

「その、お金の方は問題ありませんの？」

外征の為とはいえ何泊もするならかなりのお値段になりますわよ？

特に私はロイヤルスイートを希望いたしますので！

ですよね、梨璃さん！」

心配と同時に謎のアピール

楓クラスならばこつちに頼らずとも自腹で抑えられるだろうと言いたくなるのをぐつと我慢

というかその手のホテルは泊まったら百合ヶ丘はともかく、ヘルヴォルとグランエプレは間違いなく費用の一部はこつち持ちだと言う事をわかっていないのだろうか？

流石に合宿相手に金を集めるような事はしたくはない

まあ海濱の中には金を集める先輩に一人だけ心あたりはあるが、流石にああはなりたくない

「申し訳無いです…」

あくまでもヘルヴォルの都合にみなさんを巻き込んでしまい」

一葉はそう言い謝ると高嶺は

「あら、私達はこれから共に戦う身

巻き込む…なんて事は無いわ」

そのように伝える

先のトラブルでは口を挟まなかったが今回は違う

伝えるべき事はこちらも伝えたのだ

それを見ていた他のヘルヴォルはというと

「ここまで言われたら仕方ないよね

私達の負けだよ」

恋花は笑いながらそういう

そして

「後は…一葉の珍しい面も見れたしね」

「珍しい、ですか？」

「タメ口で話すなんて珍しいじゃん

タメ口で話すのは藍だけで基本敬語だし」

そう。

一葉は基本的に敬語で話す

それは同級生でも変わらない

タメ口なのはヘルヴォルの藍だけだと誰もが思っていた
すると一葉は懐かしむように

「ああ…初めて会った時は敬語でしたよ

ただ直ぐに敬語止めろと言われたので」

「そうなの？」

「はい。」

「私等そんな普段から敬語必須のお上品なガーデンじゃないし同期なんだからタメで良い」と言われたので」

実は一葉も始めは敬語だったのだ

しかし海漓の古巣もエレンスゲもそんな普段から敬語必須のガーデンでは無い

そんな所で同級生から敬語など海漓からしたら非常に嫌だったので即止めるように言ったのだ

一葉も同級生からの頼みならばと無下にせずそのまま今の流れへとなる

まあタメ口で話せる分、気が楽になるというのもあるが

そうして宿泊場所を決めていると二水がふいに

「あ、あの…宿泊場所なんですけど

…私にいい考えがあります!!」

そのように告げついてくるように言う

はたして何があるのか…それを知るのはもう少し後の話

第28話

二水の提案を受け、切通しを進んで行く
目的の場所までは少々距離があるようだ

交流も兼ねて各々が会話を重ねている光景も所々で見られる
どの位の距離を進んだだろうか

歩みを進めた先に見えたのは一件の大きなロッジ

「(これを商店街として保有?)」

こりや只のロッジじゃないぞ…まさか皆気づいてない?」

海瀉はそう思う

二水が言うにはこのロッジは百合ヶ丘商店街の保有しているロッジであり、普段は自治体が定期的にキャンプを行う際に使用しているのだとか

そして以前参加したグリーンフェアのお礼を兼ねて無料で使用する許可をくれたのだとか

たかがロッジと思うかもしれないがこれだけの大人数が宿泊しても問題無く外見もそこまで古びてはいない

激戦区である鎌倉で民間人が呑気にキャンプなど簡単にやれるはずがない

これはあくまでも海瀉の予想に過ぎないがこのロッジは非常時の際の避難場所、もしくはは臨時の作戦本部としての役割も兼ねている施設であり貸出主も実は正体を明かしていないが、百合ヶ丘の生徒の保護者もしくは防衛軍の関係者と言う可能性だ

恐らくだが百合ヶ丘のリリイも定期的にここを使っているのかもしれない

「(流石百合ヶ丘、こういう支援はされて当たり前…か羨ましいね)」
百合ヶ丘だからこそある支援だろう

海瀉の古巣など該当地域の治安も決して良いとは言えない

海瀉達も中等部時代は言葉を悪くすれば用心棒紛いの事を良くやらされたものだ

周りの支援も勿論あったが百合ヶ丘程ではない

「皆、待ってたわよ〜」

そう言いロツジの前に居たのはメガネをかけた一人のリリイ

「百由様！いらっしやってたんですか〜！」

「ええ、今回の作戦本部長も兼ねているからね」

梨璃が驚いたように言う

先程も楓の話で名前の出ていた人物

作戦本部長と言っていたが彼女は一柳隊のメンバーでは無いのだろうか？

するとミリアムが

「グリーンフェアの時にお主はおらんかったな

二年の真島^{ましま} 百由^{もゆ}様、優秀なアーセナルじゃ

作戦本部長等と偉そうな事を言っておるが自称だから気にせんで良いぞ」

そんな事を言う

一柳隊では無いということも追加していた

ガーデン側からの増援もしくはサポート的な立ち位置だそうだ。

「とにかく作戦本部長からのミッションを発令するわ」

そう言い言葉を続ける

「皆で美味しい食事を用意する事

これが最初のミッションよ」

そう説明する

ミッションと言っではいるが交流を深める目的もあるのだろう

班もリリイ全員の性格等を分析しガーデンを問わず配置、各々がそ

の役割をこなすというものだ

ちなみに海濱はベッドメイキング等ロツジ内での準備を行う班だ

これだけの人数が居れば準備の他に設備の確認等も出来る…のだが

「おーい、定盛ちゃ…あれ、居ない？

灯莉ちゃんも…居ない…何で？」

こういう所ではまっさきに散策を行うであろう灯莉の声が一切聞

こえない

不思議に思い海瀛は探すが姫歌共々どこにも居ない

ロτζジには海瀛一人だけ

ベッドメイキングだけなら一人でも十分に可能な為黙々と作業を行う

暫くすると瑤がロτζジに入ってくる

「調理班の所にベッドメイキングのメンバーが来てたからもしかして、って思ったけど…一人でやってるの?」

「ええ、まあ。

一人でも十分やれるので」

そう答えながらも黙々と作業を行う

調理班の所に行ったと言うがそもそも、姫歌が先に外に出たのか、灯莉を止めるために出ていったのかは分からない

先程性格等を分析、と言っていたがその分析間違っていないか?と言いたくなる

それとも脱走を想定した布陣を組んだ…のどちらかである
すると瑤は

「手伝おうか?」

こっちは火起こし終わって暇なんだ」

「うーん、ならお願いしますね」

暇ならば手伝ってもらおう

そう考え二人で作業を行う

「神庭はどう?楽しい?」

「ええ。楽しく過ごしてますよ」

「なら良かった。」

その言葉に瑤はどこか安堵する

海瀛の事を知っているからこそ気にかけていたのだろう

「所で…天野天葉からは何か連絡あった?」

本題、と言わんばかりに彼女はとある話題を出す

まあ瑤としてもここからが本題だろう

「いえ、特に何も」

中等部の頃すらまともに連絡取れなかったんです

さらにこうなっただんです…ガーデン卒業まで無理だと思いますよ」
海漓はそう答える

ここ数年まともに顔を見ていないし話すらしていない

お互い携帯電話を持っているが連絡先すら知らないのだ

まあ中等部ならいざ知らず今の天葉には姉も妹もいる

そんな状況で海漓がまともに会えるわけもないと思っっている

下手したらこの先ずっとそうなる事も海漓は覚悟しているのはこ
こだけの話

「この時期の唐突な合宿

となるとやっぱり狙いは千香瑠…？」

その言葉を聞き瑤はこの後起こるであろう展開を予測できたのだ
ろう

彼女を気に入っているのは天葉と同じアールヴヘイムのリリイ

更にその扱いについてアールヴヘイムのリリイがネットでエレン
スゲに対し異議を称えているのだ

行動を起こさない訳がない

瑤としては本命は海漓、千香瑠はその次であってほしいと願っ
たのである

お互いリリイをやっつけていつ命を落とすか分からない

ならばせめてレギオンは違えど同じガーデンで仲良く過ごしてほ
しいと彼女は強く願っていた

瑤の願いは分からずとも百合ヶ丘がエレンスゲに声をかけた理由
なら海漓も何となくだが予想出来ていた

政治的に対立しているガーデンのリリイを百合ヶ丘が招き入れる
理由などそれしかないだから

「タイミングは分からないですけどこの合宿が一段落したらアプロー
チ、来ると思いますよ

何なら千香瑠さんの様子は一柳隊を通して百合ヶ丘上層部やそれ

こそアールヴヘイムに報告されてもおかしくないかと」

「だよね…」

でも今回の合宿でそれこそ貴方の事も百合ヶ丘の耳に入るんじゃない
「それなんですよね…」

瑤や恋花は一葉から聞いた話ではあるが海瀉が神庭に来た本当の理由を知っている

だからこそこの後海瀉の身に起きるかもしれない事を危惧しているのだ

「アイツの妹ってメンタルかなりヤバイって話だし私きっかけでまたメンタルぶっ壊れたとかなったら大問題っすよ…仮にそうだったらアールヴヘイムから報復とかされますかね？」

海瀉はそう話す

世間から認識されている百合ヶ丘においての天野天葉の妹は精神面が不安定であり天葉に依存しきつていっていると言う話もある

そんな中で海瀉と天葉が会おうものなら精神的な不調に陥るかもしれない

たかが精神と言われるかもしれないがリリイと言えど10代の少女

精神面でのダメージは周りが思う以上に深刻でありそれはそのままリリイとしての能力にすら関わる部分でもある

故意ではなくともそのような事になってしまえば原因を作った海瀉に対し報復とも言える措置が来てもおかしくは無いと思っている

「今回の合宿に誘った以上百合ヶ丘からのフォロー位は期待しても良いと…思う」

仮に貴方がそうなった時に天野天葉が貴方を庇わなかったら少なくとも私は軽蔑する」

その可能性を瑤も考えていない訳ではない
だがそうなったとしても姉ならば海瀉を守れと考えている

「リリイならば常に最悪の事態を考えて行動すべし…とは言え今は対ヒュージの事に専念です

その後の事は終わってから考えましょう」

「そのとおり…かもね」

そんなふうには話をしていると紅巴が準備が全て終わった事を告げにやってくる

こちらでも作業が終わったので丁度良いタイミング

二人が外に出ると夕食の準備を終えこちらを待っていた

夕食はカレーとバーベキューと言うこれまた定番のメニュー

味も問題なく非常に楽しい時間になった

合宿の夜はこれからである

第29話

夕食を終え、後片付けや入浴を終えた者から自由時間になる

明日の作戦に向け準備をする者、折角の合宿なのだから、と雑談を
行うもの様々だ

そんな中、海瀉は一葉とロツジの外で話をしていた

「で、どう？上手くやれてんの？」

「少しづつ理解してくれてるけど…まだまだ、だね

もつと頑張らないと」

海瀉の問に一葉は答える

一葉の目標は簡単に言ってしまうえばヘルヴォルの隊長となりエレンスゲのやり方を変える事

ガーデンのやり方を変えるなど生半可な事ではないし無謀な事だ。

海瀉も当初は止めていた

そもそも海瀉の古巣と一葉の通うエレンスゲはゲヘナへの立ち位置こそ違っているが似たような校風であり、その教育方針を否定できるわけが無い

海瀉はそんな校風のガーデンだからこそリイになる事が出来たし力を付けることが出来たのだ

自身を周りは哀れみの目で見ていたがそんなのは大きなお世話

確かに何度も死にかけたし、名門と比べれば良い環境とは言えないかもしれないがそれでもその分の見返りはあった

背後にゲヘナがいる分エレンスゲの方が危険ではあるし最悪、命を狙われる可能性があることを一葉に当時から告げてきた

それでも一葉の意思は変わらない

ならばやってみろ、と海瀉は一葉に伝えていた

詳しくは把握していないがここまで活動していた事を考えるとそれなりにやれてるのであろう

「(成果を出してるならガーデンも強くは言えない、もしくはあえて泳がせている…のどっちかかな)」

だが海瀉としてはヘルヴォルの現状に不安を覚える

確かに成果を出しているのは喜ばしい事だがガーデンのやり方を否定するレギオンをエレンスゲ上層部やゲヘナ関係者は放っておくだろうか？

トップレギオンとしての有効性を考慮し、あえて好きにさせている可能性もある

だがそれが今後も続くとも限らない、エレンスゲは年々危険な思想に取り憑かれている…というのは海瀉の古巣の間では有名な話になっていたし付き合い方を見直すべきか否かと言う話題も出る程だ

そんなエレンスゲのトップレスであるヘルヴォルがガーデンのやり方を否定しているのだ、近いうちに何らかの形で妨害や干渉が入る事は明白、その時にヘルヴォルはどうなるのか

そして、その時に自分達は動くべきなのか、考えておく必要があると海瀉思う

「レギオンとして一つの目的の為に行動出来てるなら…良いのかな…多分」

とは言えヘルヴォルの面々は一葉のやり方に共感し、今までついてきている

ヘルヴォルのメンバーの大半は上級生が占めている事を考えると一葉は上手くやれているのだろう

そして、皆が同じ方向を向いているのならば簡単に崩壊はしない筈だ

「多分って…そこは言い切ってほしかったな

海瀉こそ、どうなの？トラブル、起してない？」

海瀉が言い切らなかつたことに若干の不満は残るが、この当たりの考えが合わないのは今日に始まったことではない

だからこそ一葉は海瀉を心配する

神庭と彼女の過ごした古巣は校風が真逆のガーデン

性格面では対応出来ても彼女の思考と相容れない部分も多々ある筈だ

そうなった時に海瀉はトラブルを起こしていないか、一葉は気になっっていた

特に対ヒュージに関して海瀛は時折過激思考になる、そうなった時トラブルになるのは目に見えている

「大丈夫だよ、一葉が心配するようなボロを出すほど私は馬鹿じゃない
い

出しかけた事はあるけど、堪えてる」

「あ、有るんだ…」

「まあね。」

一葉は頭を抱えなくなるが海瀛は堪えたと言うのだから、トラブルには至っていないのだろう

過激思考になった背景も知っているため彼女は海瀛にだけは強く
言えない

その後は二人で他愛もない雑談を行い、適度な所で話を切り上げ
ロτζジの中へと入り、その後就寝するのである

「さて、これで申請は終わりつと、後は…」

ここは鎌倉のとある地域に存在するガーデンの控室

ここで一人の少女はとある書類を用意していた

「私と葵、後は…」

「先輩、どうしたんですか？」

そんな中、入ってきた葵と呼ばれた人物に対し

「葵、この日開けておきなさい

…後は曾根にも開けておけて伝えておいて」

開けておけと指示、そして曾根という人物名

呼び捨てをしているということとは葵と呼ばれる人物と同学年なの
だろう

「この日って会議の日じゃないですか…私達まで留守にしていいいん
です？」

「変わってもらったのよ

東京には近いうち行つて合わなきやいけない奴がいるし丁度良かつたのよ」

だが指定された日は何か会議があり、自分達まで留守には出来ないのではないか、というがそれも心配はない

本来向かうべき人物と交代してもらったのだ

この当たりは抜け目が無い

万全の策を取る

「合わなきやいけないって…まさか!」

そしてそこまでして会いたい人物に心当たりが有るのだろうか

「そう、そのまさかよ

あつて確かめたい事もあるし：そういう訳だから、準備だけはしておきなさいよ」

会つて確かめたい事…というのは分からないが、葵自身その人物には会いたいと思つていたので

「(天野海濤さん…どんなリリイなんだろう…楓には私が聞いた事を話したけど)」

彼女はそう思いながら控室を出る

合宿の裏でこのような動きがあつた事を知るのはもう少し先の話

第30話

夜が明けると今回の合同作戦の本命である特型ヒュージ討伐が控えている

少し前に各レギオン隊長陣と司令塔を務めるリリイが呼び出され今回の作戦の説明、今はそれぞれのレギオンにその内容を持ち帰り説明が行われた

今回の特型ヒュージを討伐する為に建てた作戦

それは3レギオンを3班に分けての波状攻撃を行うという

索敵と周辺のヒュージを掃討することが主な役割のサポートチーム、特型に対して直接ダメージを与えていくアタックチーム、そして止めとなるノインヴェルト戦術を行うノインヴェルトチームの合計3班

サポートにはグランエプレ1年の4名の他ヘルヴォルから恋花、瑤、千香、瑠

一柳隊からは神琳、雨嘉、二水

アタックはグランエプレ2年生二人に加えヘルヴォルから一葉の他に同学年の佐々木藍が担当

残りの一柳隊はノインヴェルトと2チームのサポート

2班に関しては普段から連携して攻撃いるかどうかで班を分けたのだろうかと思っ

ヘルヴォルがどのようなフォーメーションを組んでいるのか、まだは分からない。

グランエプレに関しては戦闘は基本学年で分けて戦っているし現状では誰も二年生とコンビを組んで戦っていないのだからこうするしかない

現在はサポートチームが第一陣として出発

目的地に到着するとまず始めに、灯莉、雨嘉、千香瑠の狙撃手三名と二水はヒュージの索敵と先制攻撃のための配置につく

「ヒュージ、き、来ました!!」

狙撃班の配置が終わると同時にヒュージが出現
こちらへと向かってくる

残っているメンバーも陣形を組み戦闘を開始する

「皆、攻撃開始!!」

恋花の合図で各々攻撃を開始する

狙撃班からの援護もあるがこの場合は狭く見通しも悪い

慣れていれば問題ないがこういう戦闘に不慣れな者もいる

そうなってしまうえば徐々に陣形が崩れてきてしまう

自分達の役割はあくまでもヒュージの索敵だがこのままでは
ヒュージに押し込まれるのは明白

狙撃手の支援があるとは現状こちらが不利

「…前に出ます!!」

援護頼みますよ!!」

「ちよ、ちよつと?」

「海瀛、前に出てもいいけど油断するんじゃないわよ!!」

海瀛はそう言うのと恋花達の横を通り過ぎ一直線に走り抜ける

姫歌はいつもの事などで気にはしないが油断だけはしないように

警告

二人の声を背にそのまま敵陣のど真ん中に飛び込む

恋花は静止しようとするがそれよりも早く海瀛は前に出る

「それじゃ一葉と同じ…じゃ、ない?」

恋花や瑤は海瀛が一葉と同じように捨て身の攻撃を行うと思いい、す
ぐに呼び戻しに行こうとするが、その予想は大きく外れる

「まず2体…!」

その言葉と同時に海瀛はヒュージ2体を撃破

「ついでにまわりの雑魚も一掃!」

そのまま流れるような動きで付近のヒュージにも弾丸を打ち込む

トリグラフ最大の特長である2丁拳銃の強みを十二分に活かした

近のヒュージを一気に殲滅しにかかる

とは言え敵陣のど真ん中に飛びこんだのだ

ヒュージからの反撃も当然あるがそれを海瀉は全て回避、それと同時に射撃を行う

「早く、確実に……一体でも多くのヒュージを」

海瀉はそう呟きながら戦闘を行う

このスタイルをやるに辺り中等部時代に教導官から叩き込まれたことを何度も復唱しながら

『目線を逸らすな、ヒュージを視界に入れ続けろ!!』

『常に自身が有利になれるように立ち回れ』

無駄な弾薬とマガジは使わない素早く、正確に仕留める』

『感覚を研ぎ澄ませ！死角から現れるヒュージはそれで対処だ！』

それって感任せ？戦闘の2割は自分の直感だよ、直感が鈍いリリイは死ぬだけ

お前の場合、鍛えればいずれ大きな武器になるかもしれないしな

それこそ私の感だよ、ホラ、さっさとやる！』

他にも色々叩き込まれたが常にこの言葉は頭によぎる

指導と言いながら直感に任せると言うのはどうなのだろうと思つた事もあるが今となっては正解だと思つている

こう言う状況を切り抜けられたのは教えがあったからこそ、そして今もなお安定してできるのだから

背後からは狙撃班の援護射撃も飛んでくる

海瀉の動きにすばやく反応し的確に援護を行うリリイなど灯莉ぐらいであろう

雨嘉と千香瑠も海瀉の動きに慣れ次第援護に加わると海瀉は予測する

二人が下手、という訳ではなくこちらがどんな動きをするのか、そしてどのタイミングで援護をすればいいかを判断する時間を考えての判断だ

援護を灯莉に任せた二人は二水と共に特型ヒュージの索敵を行う可能性もあるがそこまで海瀉には分からない

「灯莉ちゃんかな？…有り難い！」

向こうもこちらに当てないようになっているのが分かれば海
漓もやりやすい

邪魔にならないように立ち回りヒュージを殲滅していけばいい
仮に撃ち漏らしても灯莉や姫歌達が何とかしてくれる

「海漓ちゃん、そういうスタイルかあ…そりゃヒュージの群れに突撃
しても安定して戦えるよね…これはむしろ」

「うん。一葉が悪い意味で影響受けてる」

そしてそれを見ていた恋花と瑤はある結論に至る

それは一葉の一部の無謀な行動は海漓の影響を受けているのでは
ないかと言う事だ

一葉と海漓は多数のヒュージが現れたときよく自身が出ると出る傾
向がある

だがその行動理由は大きく異なる

一葉の場合は無謀で死にたがりとも評される場合があるが海漓は
違う

技術と経験を基に行う立派な戦法として確立されている

暫くすると海漓が恋花達の所まで戻ってくる

ヒュージからの攻撃は続いているが海漓のおかげで数はだいぶ減
らす事が出来た

「こんな感じでいいです？」

「マジと弾薬を使い切つていいならもう少し減らせますけど」

「十分だよ、ありがと」

これならもう少し持ちこたえられそうかな」

恋花は海漓を労い今度は自身と姫歌で前が出る

「マジを使い切らせるとこの後に支障が出る可能性は考慮しなけれ
ばならない」

「海漓は少し休むこと！」

姫歌は海漓にそう告げると恋花と共に前が出る

二人の連携は初めてだが恋花ならば姫歌をフォローしつつ戦える

だろう

姫歌も弱くないし、所持しているレアスキルを考えればこの状況でも十分戦える

「特型はまだ見つからず

アタックチームの到着も遅い。

私が削ったとは言え良くない状況なのは変わらない…か」

海漓はそう呟く

二水達からの連絡が無いという事はまだ出て来ていないと言うことだろう

それにアタックチームの到着も遅い

ヒュージを削りはしたがそれでもこちらが不利なのは変わらない

次の手を考えている中、神琳が

「皆さん、特型ヒュージを発見したと連絡がありました」

そう告げる

こっからは第二段階、作戦は山場を迎える

第31話

神琳から告げられた特型ヒュージ出現の報告

その報告をと共に作戦は次の段階へと移行する

それはこの場から開けた場所へとヒュージを誘導しながら一柳隊とアタックチームへと合流する事

戦いも中盤へと移行しここからが本番…なのだが

「(定盛ちゃんと紅巴ちゃんの動きが悪い…思った以上に消耗してる?)」

姫歌と紅巴の動きが悪くなってきた

マギの消耗よりも体力と精神面での消耗が激しいのかもしれない

普段から訓練しているとはいえ今回は慣れない環境、普段とは違う状況に加え、実力だけでなくレギオンの精神的支柱である叶星と高嶺の不在という状況が思った以上のストレスになっているようだ

特に姫歌は一柳隊の神琳をライバル視しているし、紅巴は百合ヶ丘に強い憧れを持っている

余計な力みがあってもおかしくはない

そしてそれは恋花達も感じているようで

「ほらすっかりするー動き遅くなってるよ」

「は、はいー」

恋花も状況を見て喝を入れているが効果は薄い

姫歌は恋花がフォローし、瑤と海瀛は前に出て共にヒュージを引き付ける

本来ならば恋花が前に出て瑤はサポート、なのだが今回は瑤が前に出てきた

二人のレアスキル等々を考慮したのだろう

紅巴は神琳が上手くフォローしてくれているようだ

肩を並べ戦いつつ海瀛は

「この場に居ないリリイを頼ったって仕方が無いのに…」
眩きながらもヒュージを狩る

実を言うと二人がこうなる事、予想できていた。

灯莉の行動は海漓でも把握できない所があるため出たところ勝負ではあつたのだが、今回はいい方向に働いているようだ

海漓はともかく、他の三人からしたら叶星と高嶺は頼りなる先輩だし居ないと不安になってしまう

それにグランエプレでこういう場面に遭遇したら良くも悪くも二人が全て対処してくれるからここまで荒れた状況にはまずならない

更にならグランエプレは基本学年別にチームを組んで戦うから上級生と肩を並べるなんて機会も無い

海漓ですら時折フォローに入ってもらうぐらいで二人と息を合わせて戦ったことなど無い

上級生が下級生を本当の意味で引つ張る姿というの見ていないのだ

そんな状況が結成から続き、いざ合同で他校のリリイ、ましてや上級生と肩を並べるなんて言われても無理な話である

東京の特徴として他校との共闘も無くは無いのだが運悪く他校の上級生と共闘するという機会が全く無かったのも大きい

「もう少ししたら目的地だよ」
「分かりました」

瑤も走りながらそう告げる
こちらの消耗はうまく抑えられておりますまだまだ戦えるといった感じだろう

ヒュージとの距離も開いてきた為物陰に隠れ、一度呼吸を整える

「マギと体力は大丈夫？」
「体力は問題ないですがマギはちよつと厳しいですね…ガス欠は起こさないように気をつけてますが…ノインヴェルト戦術への参加は無

理かと
レアスキル使つてのサポートなら問題は無いですが」

海漓はそこに関して嘘偽りなく告げる

中等部の時に戦闘に関する部分で隠し事はするなど教導官や上級生から教育されてきているし、隠す理由もない

まあ中にはコン・デ・イ・シ・ョ・ン不調を隠すリ・リ・イもいるがそれで何かあれば自己責任というのが海漓の考え方

話を戻し、彼女のマギ保有量は平均的か、やや少ないぐらい

通常戦闘や先のような突撃をやる分には何ら問題はないし、長期戦も問題なく行えるが、そのような行動の最中にマギを大量に使用するノインヴェルト戦術を行える程のマギを彼女は保持していない

故に彼女は普段から敵を殲滅するのか、ノインヴェルトに参加するのかを上手く見極めながら臨機応変な対応を求められる

体力は中等部時代に嫌というほど鍛えられた為、問題が無いのが救いではある

これで体力も無かったらと考えると背筋が凍る話である

「アイツみたいにはほぼ無尽蔵なマギ保有量だったらこんな事に頭悩ませなくてもいいんですけどね

年々スキラー数値は上がってますけどマギ保有量は一向に変わらないんですから」

「スキラー数値はマギをどの位出力する事が出来るか、だから保有量とは別」

この場には瑤しか居ないからか、普段では言わないような事を言うてしまう

雑談をしつつ呼吸を整えるとヒューズも丁度いい距離まで迫ってきていた

この距離ならば引きつつつつ目的地まで辿り着けるだろう

「さて、じゃあ行きますか」

「うん。もうひと頑張りだよ」

海漓は腰を上げ瑤もそれに続く

一息ついたおかげか特に手間取ることもなく目的地に到着するするとそこには

黒い羽のような物を生やした大型のヒューズが一体

「あれが、例の特型ヒュージです」

「そう。」

海瀉の間に瑤はそう答える

映像では見たものの実物を見るのは今回が初めて

瑤達ヘルヴォルは一度交戦しているからこれで二度目と言う事になる

「大きさにラージですかね？」

「うん」

瑤は問にそう答える

ヒュージはいくつかのクラスに別れており

リリイならばスモール、ミドルなど当たり前に対処出来なければならずラージ級となるとボスクラス

ここまでなら実力のあるリリイならば単身で対処出来なくは無レベルと言われている

海瀉もラージ級までなら単身で対処出来るしレアスキルを上手く使えばラージ級を複数相手しても余裕で立ち回れる

サブスキルも所持している今ならばかなり楽に立ち回れもする

ちなみに、その上にギガント級にアルトラ級がおりここからは単身での対処はほぼ不可能

ギガント級は百合ヶ丘や御台場クラスのガーデンのトップリリイであれば単身でも対処できるらしいが普通はレギオン単位でどうにかなるレベルだし、アルトラ級など海瀉から言わせれば人間を辞めてるレベルのリリイと現時点での最先端の技術を全て注ぎ込んだ一点物の規格外のCHARMを使用しなければまず勝負にすらならない

姉の天葉はこのクラスを相手に闘えるのだからどれだけ規格外なのか分かる

「定盛ちゃんたちまだ来てないですね

一柳隊やアタックチームも」

「恋花達はもう少ししたら来ると思うけど…」

そう言い瑤は特型ヒュージを見る

今現在動きはないがそれは特型ヒュージのみ
付近のヒュージはすでに臨戦態勢だ

ヒュージがお行儀よくこちらの作戦が始まるまで待つてくれる訳
がない

のんびりしていたらあつと言う間にこの場が制圧されてしまうの
は明白

ヒュージの数が増えすぎればそれだけこちらの負担が増すという
事になる

「まあ、待つ気は…無いですよね

どうします？これ以上増えてもダルイですし雑魚だけでも潰せる
だけ潰します？」

そう言う海漓はもう戦闘態勢を取っている

瑤はそれを見て苦笑い

海漓が中等部に所属したガーデンを考えたらかなり抑えている方
だ

自身の通うエレンスゲと似た校風のあのガーデンならばこちらの
返答を待たずに仕掛けても何ら不思議ではない

単体ならば無謀、とも取られるが隣には自身もいるしこの後に仲間
も来る

ならば先に始めても問題はないし少しでも有利に作戦を進めたい
と考えているのかもしれない

それに自分達の役割は付近のヒュージの掃討

本命は自分達サポートチームではなくこの後にくる一柳隊とア
タックチームが対処をする

ここを勝負所と捉えるのは間違いではない

犠牲になるつもりは無さそうだがマギはここで使い切る覚悟を決
めているのかもしれない

自身のマギはまだ持つし体力とCHARMも消耗していない

一つため息を吐くと

「無理しない程度にやろうか

マギ、使い切ったら駄目だよ」

「分かりました…となると、一旦こっちかな」

海瀉はそう言うのとトリグラフを射撃モードから格闘モードのバルチザンモードへと切り替える

格闘ならば射撃よりはマガジの使用量を抑えられるはず

これだけの数を射撃で、となると弾薬とマガジを凄まじい勢いで消費してしまう

「瑤さん、もう少しだけお付き合ひ、お願いしますね。」

「任せて」

二人はそう言いヒュージへと向かっていく

この戦闘は中盤へと突入する

第32話

海瀛と瑤の二人は残りの面々の到着を待ちつつ付近のヒュージを片付けて行く

が、海瀛はその中で一つ気になる事がある

「(特型ヒュージ、一向に仕掛けてこない…:どういう事?)」

付近に現れたヒュージはこちらに攻撃を仕掛けてきているが特型は動く気配すら見せない

まるでこちらの動きを伺っているかのよう

その分付近のヒュージが仕掛けてきているが見方を変えればこちらを消耗させるために動いているとも取れる

個体差によつて違いはあるもの…ここまで大人しいタイプを海瀛は今まで見た事がない

特にここは激戦区である鎌倉、凶暴なヒュージも多く出現する地域という事を考えれば異常な光景だ

仕掛けるタイミングを伺っているのか、それとも何か大技を放つつもりなのか

ヒュージの狙いが分からないのが非常に不気味である

そうしていると

「瑤・海瀛ちゃん、無事!?!」

「やっど、追いついた…:つてもう始まつてる!?!」

そう言いながら恋花と姫歌

少し遅れて神琳と紅巴もやってくる

当初の予定よりも早く戦闘が始まつてしまっているがこれは間違はなく二人の進軍が早かつた影響だ

その分想定している以上のヒュージを撃退しているので文句を言えないのも事実

むしろサポートチームとしての仕事を全うしているとも言える

「お二人は一度安全圏まで後退し下さい」

神琳は瑤と海瀛の二人にそう告げる

遠目でしか見ていないが二人共マジと体力をかなり消耗している事が伺える

自分達の役割は特型ではなく周囲のヒューズの掃討
こちらが有利なこのタイミングで一度二人を休ませる事を彼女は選択する

二人抜けることにはなってしまうがそれでもまだ十分に戦うだけの戦力は残っている

それを理解したからこそ海瀧と瑤は一度後退する

途中、海瀧は瑤に

「すみませんね、付き合ってもらっちゃって。」

マジ、大丈夫ですか？」

一言謝る

自身は得意分野とはいえそれに瑤を付き合わせてしまったのだ
お互いに負傷してないが無理をさせてしまったのだ
心配して当然だ

「うん、平気

さつきといい、今といい、そういう立ち回りが凄い上手……」

「まあ中等部の時に散々鍛えられましたからね……」

しかし瑤は大丈夫だという

むしろ間近で見て海瀧の上手さに感心している

このやり方に関しては海瀧が中等部の時からそうできるように鍛えられて来た事なので本人は当然の様にこなしている

まあ中等部時代の教導官や先輩達の有り難い指導のおかげとも言えるのだが……

物陰に隠れつつ一休みしている内に一柳隊とアタックチームが到着するのが見える

予定よりも少し遅いが作戦に影響はなさそうだ

「あ、来ましたね

これだと特型の討伐は向こうの手柄かあ……残念」

「うん……えっ？」

もしかして特型も倒すつもりだった？」

「はい。いつまでも来ないメンバーを待つて戦鬪を無駄に長引かせるぐらいならこのメンバーで仕留めたほうが早いでしょうし、サポートって言ってますけど人数はここが多いですからね、出来なくは無いですよ」

それで文句言ってきたって早く来なかったそつちが悪いで押し通せませすよ」

海瀛はそう告げる

自分達が特型を倒す事は作戦に含まれていないが戦況というのは常に変化するし想定外な出来事も発生して当たり前

こちらの動きも早かったのかもしれないがそれを考えた行動というのもして欲しいし逆を言えばサポートチームの戦力、特に神庭とエレンスゲのリリイを過少評価しているのではないかとも思う

エレンスゲは分からないがこちらは叶星と高嶺はともかく一年生を不安要素扱いされていても不思議ではない

百合ヶ丘の面々がどう考えているか、は海瀛には分からないが少なくとも彼女ならばそう言う選択肢を取るというだけの話

その間にもサポートチームは一柳隊、アタックチームと合流しヒュージに対し攻撃を仕掛ける

アタックチームの連携も上手く行っているようだ

「私は戻るけど海瀛ちゃんはどうする？」

まだ休んでる？」

「私も合流しますよ」

まあほぼ戦力外だと思えますけど」

瑤と海瀛はそんなやり取りをしながら

戦線へと復帰する

走りながら戦況を見ていた二人はある事に気がつく

「グランエプレがノインヴェルト戦術を？」

ノインヴェルトをやるのは一柳隊の筈…なにか聞いてた？」

「いえ、何も」

朝の作戦でも何も言われてないですし、一柳隊にトラブルでもあつ

たんすかね？」

二人の視線の先では姫歌が丁度ノインヴェルト戦術の為の特殊弾を発射したのが見える

事前の会議ではノインヴェルト戦術で特型ヒュージを仕留めるのは一柳隊の作戦と聞かされていたにも関わらず、だ

海瀉はノインヴェルト戦術をしないつもりでここまで来たのに突然このような事をされては驚くのも無理はない

考えたくはないが海瀉以外の面々にはこれが事前に通達されていたのだろうか？

グランエプレがイレギュラーなだけで東京では御三家以外のガーデンはノインヴェルト戦術は5人で行う方針の為、海瀉がいなくても成立はする

今は高嶺がマギスファイアを保持し叶星へパスをするタイミングを伺っているようだ

特型ヒュージもそれを警戒しており、パスを通すのは簡単な事ではない

が、近くにいた一葉達がパスを通せるように援護を行い、高嶺は叶星へパスを行う

そのままヒュージへファイニッシュショットを放つ

本来ならば間違いなく成功、の筈なのだが

「や、やったわ……！」

「(あ、駄目だコレ)」

姫歌は成功を確信するが海瀉は逆に失敗を確信する

理由を説明するのも難しいが俗に言うフラグを立ててしまった気がするのだ

そして、悪い事にその予感ハ的中

特型ヒュージには傷一つついていない

他の面々は動揺しているしが海瀉にはそれ以上に気になってしまいう事があったし

「(紅巴ちゃん、その位置は……！)」

自身のスキルでもその予測が視えてしまえばほぼ事実なのだろう

その数秒後、特型はヒュージへと攻撃を仕掛ける
一部のリリイはそれに気がついており、高嶺がフォローに回ろうと
している

「くっそ、間に合え……」

海漓もトリグラフの子機側から弾丸をヒュージに向けて発射

その弾丸はヒュージに当たり、僅かに攻撃が逸れる

後は高嶺が紅巴を抱える等の方法で離脱すれば良いだけ……なのだ
が

「…嘘、被弾した!?…直撃は避けてるけど」

海漓の弾丸は狙い通りヒュージの攻撃を僅かにだが逸らすことに
成功した

高嶺のレアスキルや本人の技量ならば紅巴を抱えながら回避、もし
くは自身のCHARMで攻撃を切り払いし、防御する事が出来るはず
高嶺の事情を考慮しても被弾する理由が分からない

彼女の事情はあくまでも戦闘継続時間に関する事であって技量で
はない

そうしている間にも高嶺をフォローかたちで楓と夢結が間に入る

叶星と紅巴は高嶺を心配している様子も見て取れる

灯莉、姫歌も同じく、ヘルヴォルや一柳隊も程度に差こそあれ高嶺
の被弾にショックを受けている

冷静に状況を見ているのは海漓だけであろう

「この場で動揺していないのは私だけ、か…仲間の被弾とか見慣れた
から…だろうけど」

他の面々は分からないが海漓は中等部時代に味方の被弾など嫌と
いうほどみさせられてきたし、どの位のダメージになっているかも判
断できてしまう程だ

その影響なのか味方の被弾に関してはそこまで動揺しないし、動揺
するなと教え込まれてきた

その感覚がおかしいと言う事も本人は理解しているが、こればかり
は経験してきたものだから仕方がない

海漓は叶星達のもとへと合流する

戦いもいよいよ終盤戦へと向かう

第33話

叶星の元に集まるグランエプレとヘルヴォルの面々

これから特型ヒュージに総攻撃を仕掛ける

とは言え敵の攻撃も激しくなっているのも事実、簡単な事ではない。

「(そりや厳しいけどこれだけの人数がいるし配置をミスらなきゃ普通に出来るよね…)」

しかし、そんな状況でも海漓はわりかし落ち着いていた

ここには神庭とエレンスゲのトップレギオンが揃っており実力もある

アタックとサポートで役割は違っているがここで編成を組み直しアプローチを仕掛ける事も可能だと考えている

求められるのは特型ヒュージに対しどのようアプローチを仕掛けるのか、だ。

海漓も作戦の提案をしたい…が彼女は司令塔でも無ければサブリーダーでもない

ここでは只の前衛を務めるリリイ

話を聞く事しか出来ない

そうしている間にも作戦は決まる…が

「(そうなりますか…)」

海漓にしてみれば当たり前過ぎというよりもう呆れるしか無い

アタックチームの一葉、藍、叶星、高嶺が近接するからそれ以外の面々は支援するという案

付いて来て、とは言ったもののやる事は従来の作戦を引き継ぐだけ

アタック側は良いかもしれないがサポート側は一柳隊のメンバーが抜けているため本来ならばフォーメーションを組み直して攻撃、ぐらいの事はやってほしかったりする

更に海漓は一つの事に気がつく

「(一葉はそっち側、なる程なる程

：つまり一葉レベルが信用するためのボーダーラインって言う事かな？」

チーム分けだから、と言うわけではない

少なくとも戦闘面に関しては自分達よりも一葉を信頼しているような仕草を見せる事がよくある

隊長同士通じるものがあるのか、それとも自分達よりも一葉を信用しているのか

今回に限らず隊長が自分のレギオンを放っておいて他所のリリイを信用する事やチームとしての連携を放置気味な事に関しては思う所があるが海瀉は口を出す権限もないので静観するしかないのも事実

「(叶星さん達、弱い奴と組んだり実力を合わせたら私まで弱くなるっていう思考だったりする…？まあ御台場出身だしあり得そうだけど：)」

このレギオンの秘密を未だに打ち明けなかったり非常時を除き、学年の垣根を超えた連携を避けながら一葉や一柳隊との連携は受け入れる彼女達の行動に海瀉は一つの疑念を抱く

御台場に限らず才能あるリリイが多く集まり戦力が豊富なガーデンのリリイが持ちがちな思考とも言える

百合ヶ丘にも程度の差こそあれ似たような思考を持つリリイは多くいるし海瀉の古巣にも似たような思考を持つリリイはいた

この作戦にしても信頼できるのがアタックチームでサポートチームのメンバーは実力が劣る不安要素

だからフォーメーションを変更するという対応が出来ない、という解釈も出来る

とはいえ、考え事をし続けるわけにもいかない

こうしている間にも特型ヒュージとの戦闘は行われている

サポートチームは的確にアタックチームの支援を行っていく

そのおかげもあつてか、特型ヒュージから生えていた4本の羽のよ
うな物を叶星達が破壊、その後は一柳隊がノインヴェルト戦術を行い
無事に特型ヒュージに向けて放とうとする、が特型ヒュージも一柳隊
の保持するマギスファイアの危険性に勘づいたのだろう、動き出し妨害
を仕掛けようとする…のだが

「あ、パスコースが…！」

「(仕方ないな…ユーバーザイン、発動!)」

ここで海瀛は余計なお世話と言われるかもしれないが自身のレア
スキルを発動する

ユーバーザイン、超感覚とも言われるレアスキルで自身の気配を隠
したり操るレアスキルなのだがそれ以外にも幻覚を生み出したりす
る事も出来る

それを応用すると、だ

特型ヒュージは突然動きを止め何もなかったかのようにその場に
棒立ちになる

「い、一体何が…?」

「二水、今の内にパスを回すのじゃ!」

一柳隊は海瀛がユーバーザインを発動した事に気が付かないが
ヒュージの生み出した隙を逃す訳がない

「(ヒュージからは何も無い更地と仲間にも幻覚を生み出している
からね)」

海瀛が行ったのはヒュージのみを対象に強力な幻覚を見せる事

対象を固定するとコントロールが大変になるのだがそこは腕の見
せどころ

特型ヒュージからは先程までの光景は全て見間違いで周囲には小
型ヒュージを筆頭としたヒュージしか見えていない

いや、そのような幻覚を見せている

本当ならば紅巴の力も借りて逆に一柳隊だけでなくヘルヴォル、グ
ランエプレの全員の姿と気配を消したり、強力な幻覚を作り出し攪乱
したかった…のだがこれを行ってしまうと一柳隊がユーバーザイン
の幻覚に騙されパスを失敗する可能性があるためこちらは行わな

かった

後は紅巴の消耗も考慮して、だ
ちなみに楽なのは後者だったりする

何が起きているのか分からずともこの機を逃す一柳隊出はない

徐々にパスを回していき、最後は夢結と梨璃の二人でフィニッシュ
ショットを放ち、今度こそ特型ヒューズの撃破に成功する

特型の撃破に喜ぶレギオンの面々

マギや体力の消耗も激しくその場に座り込む者も多い

「海瀉ちゃん、お疲れ！」

「いやー、大立ち回りだったね」

そう言いながら声をかけてきたのは恋花

「ボスは向こうが持っていくんです。

雑魚位は狩っておかないと私達来た意味ないですから」

そう答える

すると恋花は

「あれだけ突撃して被弾なし

一葉にも見習ってほしいよ」

「一葉、使用CHARMや戦法考えたら前出たら駄目なタイプですよ

…

ヘルヴォルになって戦法変えました？」

彼女の言い分に海瀉は状況を察する

一葉のレアスキル、使用CHARM、戦法を考えたら海瀉のように
前に出て複数相手に有利に立ち回るなどほぼ不可能

どちらかと言うと彼女はヒューズ相手に1対1の格闘で押し切る
方が向いている

「多分中等部のままだよ

なのに無謀な突撃しちゃってさ…」

恋花は呆れながらそういう

その表情からヘルヴォルも色々あった事が分かる

「中等部の時に共闘した時は私を筆頭に前出るの多くてエレンスゲ組の一葉は突撃してなかったからなあ…突撃したいなら言ってくれば良かったのに」

海漓はそう言いながら昔を思い出す

すると恋花は

「海漓ちゃん達の代は良く分からないけど、私達の同期や今の3年にヤバイの多くいるしあそこに一葉というかエレンスゲは混ざれないでしょ

”雷帝”についてこられるリリイがエレンスゲにいるとは思えないよ」

そんな事を言う

「死ぬ気で食らいつけていけば大丈夫ですって

私はそうしました」

海漓はそれに対し簡単に言い放つ

「中等部の時に付いてった海漓ちゃん達の代も中々にバグってるの！」

そんな事を言う

その後は一柳隊に合理し、キャンプを行っている場所に戻るの
あった

第34話

特型ヒューズの討伐を終え、今は宿泊を行っていたロッジで簡単な打ち上げを行っている

その途中で百由は

「そうだ。皆に一つ言わなきゃいけないことがあるんだった

西東京の防衛構想って知ってる？」

そんなふう我问う

これは東京のガーデンに通うリリイならば誰もが知ってなければおかしい話…なのだが

「知らない」

「藍も知らない」

「(えええ…授業でも言われて…灯莉ちゃん話聞いてなかったね)」

…知らないリリイがいるのである

ガーデンの授業でも取り扱う話、なのだが灯莉はその手の話の時は大体寝ているか隠れて絵を書いているのだ
すると姫歌が

「文字通り東京の防衛についての会議ですよ

最近西側を担当するルドビコ女学院が春先の事件で機能しなくなっちゃって関東のガーデンが穴埋めに来てるんでその割り振りとかが主な議題になっちゃってますけど」

「はい。その事件の影響を受け、百合ヶ丘からもいくつかのレギオンが外征しています」

二水がそれに付け足す

春先、グランエプレが結成され少しした位だろう

東京御三家の一角であるルドビコ女学院が突如崩壊

その影響は今なお続いており、神庭も影響を受けているのは言うまでもない

ガーデンの主力となるリリイが全滅した、という話は聞かないが指揮系統が機能していないという

「外征の多いエレンスゲですがこれには積極的に参加していますね
私達も何度か赴いた事があります」

外征の多さかつ、ルドビコとエレンスゲは同じ派閥だ
支援などを考えても当然だ

百合ヶ丘も支援としてレギオンを外征させているというのは知る
所

一柳隊が事件当時東京に来たのか、それとも鎌倉に待機していたの
かは海瀉は分からない

「ルドビコの事件の日は現地に向かったのはグランエプレだと叶星様
だけですな。

ひめか達はガーデンで待機。

まあ海瀉は臨時メンバーとして生徒会防衛隊に駆り出されてまし
たけど」

姫歌は当時の神庭の状況を説明する

「そうなんですか？」

「はい。」

中等部時代の事考えたら新宿行かせるよりも萩窪でヒュージの迎
撃したほうが良いって言う生徒会や教導官の判断です

状況は違えど似たような事やったことがあるらしくて」

一葉の問に姫歌は答える

事件のあった日、本当ならば海瀉も新宿で戦いたかったのだが当時
のグランエプレではレギオンとして外征の許可が出せるほどの実力
があると判断されず出撃許可が出たのは叶星のみ

高嶺は一年生三名が無断で出撃しない為の御目付け役

海瀉は過去の戦績を考慮され新宿に派遣するよりも萩窪に残り、な
だれ込んでくるであろうヒュージを討伐するために生徒会防衛隊の
臨時メンバーとして活動していた

生徒会防衛隊も本来ならばグランエプレが不在の時に活動するの
だが非常時かつ当時の練度も考慮されての出撃であった

「だからあの時新宿に来たの叶星様だけだったんですね…なだれ込み対策なら、海瀉は最適ですし

萩窪は大丈夫でした?」

「不幸中の幸いなのか萩窪にはそんなヤバイの来なかったらしいんでなんとかなつたつて言っていました

出てきてもラージ級までだったとか」

「特型のスマールとか面倒くさいのはボチボチ来たけどね

まああの程度なら余裕」

姫歌の問に海瀉は一応の補足をする

一葉はその答えに安心した

本当ならばその時に新宿で再会し共闘出来ると思っていたので隊長の叶星しか来なかった時は驚いていたりする

「話を戻すけど

そんな状況が長続きするのって良くないのよ

それで、問題解決の為の会議が今回行われるの

俗に言う東京圏防衛構想会議ね」

「それと私達になんの関係が?」

「分かっているくせに

今回の特型ヒュージ討伐の功績が認められて一柳隊に参加の要請が来たのよ」

「(ん?おかしくない?ヒュージ討伐と防衛構想会議になんの関係が?)」

皆は情報の広がり早さに驚いているが海瀉はむしろ一柳隊の参加に対し疑念を持つ

当たり前の事だが防衛構想会議は先の話の通り内容は今後の東京の防衛についてであり特型ヒュージ対策ではない

勿論、今回倒したヒュージが今後現れる可能性は当然考慮しなければならぬが功績と言われると微妙な所だし、日程というのは事前に決まっている

開かれるまでにまだ日はあるが、それでも戦果を上げたから呼ぶ、というのは少々無理がある

「ついさつき倒したばかりなのに…いくらなんでも情報の広がりがある早くありませんか？」

会議の開催自体は日程通りですけど…」

「それだけこの戦いが各ガーデンから注目されてたということじゃ

大金星というところじゃろうな」

それには紅巴も気がついたようだがミリアムを筆頭に一柳隊の面々は違和感を覚えていない

さらにその会議に一葉や叶星、そして一柳隊からは梨璃と夢結の参加が決まる、という事だが

「隊長陣はともかくどうして一柳隊は副隊長の私まで参加を？」

「いや、一人で会議に出だしたら何やらかされるかわからないし、盾兼保険要因だろ

ここは百合ヶ丘側からの提案だろうけど…その位分かってくれない」

夢結はどうして自分まで参加するのか分かっていないが海瀉はそうではない

この話を聞いているときも梨璃は事の重大性を理解できずに舞い上がっているし、本番で何かやらかす可能性は十分にある

そうなった時の盾兼保険要因だろう

百合ヶ丘のトップリイ相手に悪態をつくりリイなど先ずいらない方がいいのはそう言うトラブルにならない事だが、一柳隊は指名手

配の件で悪い意味でも名前が残ってしまったている

その中で明らかに知識が足りない梨璃が単独で来た時のリスクを考慮し、百合ヶ丘側から何らかの提案を持ちかけたのだろう

まあ、そもそもそんな人物を参加させるなど言いたいのがそれを言う問題になる為、海瀉は黙る

実力など訓練すれば伸びるから気にならないがガーデン間の政治的事情など最低限の知るべき事を知ってから参加して欲しいというものである

「(一葉や叶星さんは手柄を横取りするっていうタイプじゃないし特型の報告なら一柳隊要らないんだよな)」

防衛構想会議の議題が特型ヒュージについてだったとしても、エレンスゲ、神庭で十分に説明出来る

海瀛がそんな事を考えているとも知らずに話は進んでいく

どうやら二週間に一柳隊が外征活動という名目でエレンスゲ、神庭に班を分け訪れるらしい

来校する事に関してはガーデン間交流と一柳隊の東京への外征活動を名目にする^と楓は言う

百合ヶ丘が他校に行く^と言う^と余計な疑いを持たれないための理由づくりだ

その後も打ち上げは続く…のだが

戦闘の疲れもあり早めに切り上げる

翌日は早朝から片付けを行い、終わったら東京組はガーデンへと戻る

その後は二週間後に向けて各自準備などをするのだった

第35話

合宿を終え神庭に帰ってきたグランエプレの面々

2週間後に一柳隊の来校と防衛構想会議が控えているが、その間にも授業や訓練、ヒュージが現れれば出撃しなければならないのでやる事は多い

この日も授業が行われ、今はお昼休み

レギオンで食事をする者、仲のいいリリイ同士で食事をする者様々だ

灯莉は授業が終わると同時に教室を飛び出す

間違はなく姫歌や紅巴達の元へと向かっている

海漓も普段ならば彼女達と合流する…のだが

「天野さーん、この後暇？」

「良かったら一緒に昼どう？」

クラスメイトに誘われる

海漓としても断る理由も無いので彼女達と合流し学食へと向かう

各自注文を終え、席につく

すると一人が唐突に

「そういえば知ってる？」

二週間後のイルマとの定期交流会、延期になったって」

彼女の言うイルマとは東京御三家の一角を担うイルマ女子美術高校の事でありガーデンとして実力は勿論、美術分野の名門校

同じ芸術系のガーデンである神庭とも定期的な交流を行っている

派閥としては親G E H E N A派ではあるが穏健派として知られておりマギの回復などの研究を行っていると言われている

「延期？なんだってまた」

「なんでもガーデンの主力レギオンが外征するかもしれないって話が出てきて、その間ガーデンの守りが薄くなるからだって。

そんな時にヒュージの襲来で他校のリリイに万が一の事があったらいけないからって」

「二週間後って…確か定期的な会議がなかった？」

ほら、グランエプレが参加するやつ」

「う、うん。」

イルマとの交流会の延期の理由を話すがその理由が理由なだけに疑問に思う

勿論ガーデンの状況により交流会が延期になる事は珍しくないが、時期と理由を考えると不思議に思う

二週間後は東京都防衛構想会議の開催日

その日に合わせて主力レギオンを外征させるなどあり得るのだろうか

勿論、一刻を争う状況で会議など気にしてられないという場合もある為一概におかしいとは言いい切れない

「私は頭良くないし、名門ガーデンの考えなんて分からないけど都の今後を決める大事な会議なのに御三家が揃わないで大丈夫なのかな？」

ただでさえルドビコが駄目になってるのに……」

「御三家なんて言うぐらいだから基本は足並み揃えなきや駄目なんだけどね」

クラスメイトの間に海瀉はそう言い放つ

海瀉は御三家のリリイとは個人的な繋がりを持つてはいない

中等部時の過ごしたガーデンも当時は名門とはかけ離れていたガーデン間の事情など知る事は出来ない

そんな事を考えながらも雑談は続く

話題は課題の進み具合や休みの予定

気楽そうに見えるが、ヒュージとの戦いは命がけ

明日には誰かが命を落としているかもしれない状況だからこそ、あえて予定を立てるリリイも多いという

そうしている間に昼休みが終わり午後の授業を終え放課後になる

放課後はレギオンでの行動……なのだがその前にグランエプレの担当教導官から海瀉だけ呼び出される

そうして別室に案内される

教導官と海瀧の二人だけだ

何かやらかしただろうか…？

そんな風に考えていると

「あ、そんなに力まないで

別に悪い話じゃないの

座って座って」

そう言い椅子に座る

すると彼女は

「実は貴方に質問があつてね

貴方、後輩指導とかやってみるつもりはない？」

そんな風に彼女はいう

説明はさらに続く

「実はある中等部のリリイを一人グランエプレで短期的でもいいから見て欲しいっていう話が中等部から上がってきてね」

毎年この時期には中等部のリリイを高等部で指導して欲しいという話が出てくるという

そういう推薦を受けたリリイを生徒会やグランエプレ、他にも指導に適していると判断した生徒で分担して面倒を見るのだという

目的は高等部の雰囲気慣れてもらうということと、指導をきつかけにもう1・2段階レベルアップをしてもらうためだと言う

「なる程、グランエプレからは私を推薦したいと…そりや嬉しいですけど良いんですか、私で？」

他にやりたいリリイ居ると思いますけど？」

海瀧はそう聞く

ガーデンのやりたい事や目的は理解できるし断る理由はない

だが海瀧はグランエプレでなんの役職にもついていない

サブリーダーの姫歌を送り込んだほうが良いのではないか？

そう考えているのだが

「他の教導官とも協議した結果よ

やりたい…ではなくやれるリリイは貴方しかないという結論に

至ったわ

一年生の3名は精神的に幼い部分が見られるしそんな子達に中部のリリイは任せられない

そうなると色々な経験を積んで今に至る天野さんこそグランエプレの代表に相応しいっていうね」

そう告げる言葉に海漓は驚く

協議ということは彼女達の日常生活をこちらが考える以上に教導官は観察していたという事になる

自主性という一見すると緩い校風のガーデンのリリイのスペックや意識の高さには神庭に入学した時から海漓は驚いていたが、常に見られているということのを他の上級生は優しく教えていたのかもしれない

でなければ緩い校風のガーデンで今まで生き残れるはずもないし犠牲者の数は多くなっているからだ

姫歌達三人は才能はあるし実力だって低くないのは海漓も分かっている：が教導官の言うとおり精神的に幼い部分はかなり目立つ

こればかりは本人達よりも綺麗な事しか周りで起こらず最終的にハッピーエンドで終わる事が続いていたのが大きい

だが、今後どうなるか分からないし綺麗で美しい光景しかしらない彼女達が中部のリリイを指導するのは危険と判断されても不思議ではない

上級生二人の名が出ないのは負担の大きさと後はガーデン内での影響力の高さを考えてそもそもやらせるつもりは無かったのだろうと海漓は判断する

「そこまで言われて断る理由は無いですけど：：どんな子なんです」

海漓がそう尋ねると彼女は書類を見せる

そこにはプロフィールと公開できる範囲での成績が記されていた「ふむふむ、中部部からココでリリイになった子、成績は優秀ですね素行面も悪くない、」

資料を見終わると海漓は一つ大きくいきを吐くと

「結構優秀な子ですね。」

エリートを見るのは中々に大変なんですが良いでしょう
で、いつからですか?」

彼女はそう尋ねる

二週間後には会議もあるし、自分の訓練もある事を考えると余り時間がない

やるならば早い方がいいため確認をすると教導官は何処かと連絡を取っている

「あ、今生徒会室からこっちに来るそうよ」

「今!? え? 来てたんです?」

「ええ。貴方なら話を持っていけば断らないだろうし、二週間後の防衛構想会議や普段の自分の訓練もあるから始めるなら早い方がいいだろうって生徒会の皆が」

「んなっ!」

ルドビコの時や文化祭での手伝い等々でこちらの性格を把握されていたらしい

そうするとドアをノックする音が聞こえる

「良いわよ、入ってらっしゃい」

「は、はい! 失礼します!!」

元気のいい声が聞こえる

まあ多少の緊張もあるのかもしれない

「神庭女子中等部3年、須和^{すわ} 久瑠美^{くろみ}です

短い間ですがよろしくお願いします!!」

「よろしく」

そう言い二人は握手

すると教導官は席を外す

暫く雑談してもよし、この後訓練してもよしと言うことだけ告げる
二人は席に付き、暫く沈黙する時間が流れるが、先に海濤が口を開く

「久瑠美ちゃんが良いか

とりあえず時間も勿体無いし訓練場行こうか

話は歩きながらでも」

「はい！分かりました海瀉様！」

それを聞き彼女は元気よく笑顔で告げる
会議室を後にし訓練場に向かいながら二人は話をする

「中等部側や先に会った生徒会の連中からこれを重点的にやって来てほしいとか、久留美ちゃんがこの機会にやりたい事って何かあるの？」

「あ、いえ特にそういう話は無かったです

やりたい事は色々ありすぎて何からお願ひしていいのか分からない
くて…」

「オツケ」

事情は大体把握した

こちらがこの子を潰すような事さえしなければ本当に何をしても構わないし全て海瀉に任せるということだろう

「生徒会から聞いてると思うけど

中等部からリリイやつてるとはいえ私も今年から編入してるから神庭の高等部が中等部にどんな事やるかは分からないから多分古巣のやり方をベースに神庭や君に合った風にアレンジしながらもやっていくと思う、それでも良い？」

任せるとはいえ確認しなければならぬ事もある

彼女は神庭しか知らないリリイ

海瀉のやり方に疑問や反発を抱くかもしれない

それを分かっているからこそ事前に確認をする

無理ならば断れば良いのだ

しかし、彼女は

「それも分かっています

でも中等部の先生も秋日会長や防衛隊の皆さんも刺激を受けてこいって言ってました

過激な方法でも私ついていくんで!!」

「流石に前いた所のノリをここではやらないよ…」

自分を鬼教官か何かと勘違いしているのだろうか

古巣ならやったかもしれないがここではそれは通じない、それは海
滴がよく分かつている

どうすれば良いのかは試行錯誤しながらやっていく事になる

こうして中等部のリリィとの指導と四苦八苦する日々が始まった
のである

第36話

唐突に始まった中等部生の指導

まずは久瑠美の実力を知る必要がある

資料を見ているとはいえ実際に見てみないと分からない部分もある

「とりあえず何回か模擬ヒュージと戦ってもらおうかな

とりあえず普段どおりにお願い」

「はい！」

彼女がどんな戦い方をするのか

それを知るためにも模擬ヒュージ相手の戦闘を行ってもらおう事にする

「じゃあ行くよー」

そう言うと共に戦闘が始まる

「(近接向きだね…レアスキルがないからやれる事は限られてるけど、油断せずに立ち回れる…まあちよつと気になるところもあるけど)」

レアスキルは未覚醒と言う事でやれる事は限られているものの、その中で自分の出来る事を最大限行っているという印象を持つ

中等部で3年間過ごしているという事もあり、自分の型が出来つつあるのも大きい

後は覚醒したレアスキルに合わせて発展させていけばいいということだろうか

とはいえ気になるところもいくつか見られる、本人が気づいているのかどうか、はこの後に聞くとしよう

そうしている内に模擬戦が終わり、反省会となる

久瑠美としては高等部のリリィとの反省会と言う事で緊張してるようにも見える

「反省会、まあこの後の指導にも関わることだし始めに聞いておきたいんだけどさ…久瑠美ちゃん、射撃苦手でしょ？」

しかもそれずっと放置してきてない？」

そう、先の模擬戦、確かに彼女は近接戦が得意であるというのは分かったがそれともう一つ、射撃の精度が悪いというのもすぐに判明した

はつきり言って射撃は素人同然とも言える酷さだ

牽制で行っているつもりなのだろうが明後日の方向に弾丸が向かう事が多く、海瀉から言わせてみれば無駄な行動とも取れる

彼女程の能力があれば苦手分野の改善も並行して出来たはず、中部のこの時期にあの酷さでははつきり言って改善する努力をしていないと言われても仕方がない。

すると、彼女は

「えっと、苦手な事を克服するよりも得意な近接を伸ばしたほうが強くなれるって思ってた……」

そう言う

本人も自覚はしているのだろう。

しかし、それでも苦手の克服を捨て、近接に特化したからこそ、ここまでの成績を残せたと考えているのだ

彼女の気持ちは分かる

そういう風に考え特化するリリイもない訳ではない

だがあえて海瀉は言う

「まあ近接特化、良いと思うよ

それで、今まで上手く行ってるわけだし

でもさ、今後の戦闘で射撃が必要になったらどうするの？

あんな素人レベルの射撃なんて実戦じゃ使えないよ

後方に狙撃手を配置するって言っても出来る事に限りあるし、近くに來たら誰かに撃ってもらうの？

近接だけで乗り切れる程高等部のヒューズ戦は甘くないよ」

少し厳しいかもしれないが、海瀉はあえていう

ここで甘やかしても彼女の為にならない

さらに続ける

「一芸特化のリリイが許されるのはそれこそ百合ヶ丘レベルの層があ

るガーデンだけ

一人二人そんなのがいても他でカバーしきれから問題ないんだ

私は今年からココに来たからあんまり大きな事は言えないけど…
そういうリリイ好まれないと思うんだよね」

これもまた事実

百合ヶ丘レベルであれば一芸特化、他はダメダメなんてリリイがいた所で何ら問題は無い

それこそオールヴヘイムのような超強豪レギオンならば話は違うだろうが普通のレギオンならば一人二人そんなリリイがいた所で残りのメンバーで全てカバーして問題なく運用出来るからだ

しかし、神庭は違う

実力者も多いが一芸特化型のリリイをカバーできる程の技量を持つているリリイは限られている

ましてや、彼女は中等部からの進学を控えている身

高等部になれば中等部経験者は高等部からリリイなった俗に言う初心者のフォローも任される事が多くなる

そんな時に一芸特化リリイのカバーもしなければならぬのは相応な負担であるし下手をすれば全滅にも繋がりがかねない

これは海漓が感じている事であり、もしかしたら余計なお世話になるかも知れないという不安があつたりするのだが…

勿論、全てを否定して終わりではないのも事実

ちゃんと、案も考えている、というか先の模擬戦を見たときにすぐに取り組むべきと考えた事だ

「だから、今回の交流で、私は射撃を教える

近接戦は強くなるコツを掴んでいるだろうし今後とも今まで通り継続してやりな。

今の久瑠美ちゃんは近接90点、射撃0点

これじゃあだめ

せめて50点にしよう」

それに疑問を覚えたのは久瑠美

今話を聞く限り射撃も完璧にやるように命じられると思っていた

のかもしれない

「50点…?100点じゃなくて?」

「うん。基本的な動作、狙って当てる

もしくは牽制する。これをしっかりやる事

得意な近接は完璧に、射撃は今のスタイルの上で足を引っ張らないレベルに先ずは持つていこう」

海瀉が要求したのは最低限の事を出来るようにする事

いきなり高いハードルを要求しても途中で出来なくて訓練そのものを投げ出される可能性を考慮しての事だ

「分かりました!指導、よろしくお願いします!!」

その後は本当に基礎的な所から射撃の指導を行う

苦手な事を放置していたとはいえ授業をサボっていた訳ではない

更にいうと海瀉は射撃型だ

自身の経験や技術を彼女にあつたように伝えれば良い

試行錯誤しながらこの日の訓練を終える

「今日はこれで終わろうか」

「はい!ありがとうございます!」

そうして訓練を終え、久瑠美は寮へと戻る

本来ならば海瀉も戻る…のだが時間はまだある

そのため海瀉は一人残って自主練を…と考えていたのだが

帰る途中、一人のリリイが目の前に現れる

「お疲れ様、どうだったかしら、神庭の中等部は?」

「秋日会長?」

そう言いながら現れたのは本間秋ほんまあけひ日

神庭女子の生徒会長を務めるリリイであり、生徒会防衛隊の隊長でもある

春先のルドビコの件で海瀉は生徒会防衛隊の臨時メンバーとして共闘しその後もグランエプレの活動をしながら時折生徒会の手伝いもしており、親交も深い

直近だと文化祭での運営委員の補助役として活動だろうか

「久瑠美ちゃんしか会ってませんが優秀ですよ、素直で己の欠点に

も向き合える

まあ、私としては反抗されたり、酷ければ拳を交えてのリアルファイト位は覚悟してましたけど、そうならなくてよかったです」

「それは貴方の古巣がそういう校風だったからでしょう…神庭はそんなガーデンじゃないわよ…もう」

海瀛は素直にそう告げる

中等部で3年間過ごしたりリイならば程度に差こそあれプライド持っているはず

その中で海瀛は明確に欠点を指摘したのだ

素直に聞き入れてくれたから良かったものの、リイによっては反抗、度が過ぎれば対立なんて言う事だつてある

海瀛の古巣の場合だと拳を交えてのリアルファイトや訓練と言うなのぶつかり合いなど日常茶飯事だった

「少しやる事が多くなるけれど頼むわね

勿論、貴方のリイとしての活動に支障が出ないようにこちらも配慮はするわ」

気を取り直し彼女は海瀛に再度頼む

自身の訓練に後輩の指導、そして時折頼まれる生徒会のちよつとした手伝い1年生としては負担が大きいかもしれないが、それでも海瀛ならばという信頼があるのかもしれない

勿論、過度な負担にならないよう生徒会としてもサポートをするよ
うだ

「予想してなかった合同レギオンが始まってしまったし防衛構想会議も近い

貴方が今回だけでなく今までも生徒会や生徒会防衛隊の活動を手伝ってくれている事も考慮して、生徒会が本格的に動くのはもう少しだけ遅らせてあげる

ただ、貴方も感じているグランエプレの現状の課題に対し改善する傾向が見られない場合、生徒会はすぐに行動を開始出来るよう準備を進めているわ

そうなった時にはもしかしたら貴方にはこちら側として動いてもらうからそのつもりでいて頂戴」

「本当なら仲間を裏切るなんて絶対にしないんですけど…こればかりは私達に非がありますからね

そんな判断をさせたって言う事自体グランエプレ最大の失態ですし、むしろよくここまで待つてくれました

秋日会長や生徒会の皆だって好きでこんな事やろうってなった訳ではないでしょうし」

実をいうと合宿が始まるよりも更に前

それこそ春先のルドビコ女学院崩壊の件で生徒会に合流した後に秋日に頼まれていた事だ

やる事は生徒会の手伝い、グランエプレの観察と定期的な報告、後は気がついたグランエプレの課題に対し過度な干渉をしない事

始めは上手く隊長をやれているか、喧嘩していないかといった簡単な事だったのだが月日の経過とともに現れる課題、改善せず放置するという現状

それに対し生徒会が痺れを切らしたという形だ

秋日は二年生、課題の一つである叶星、高嶺とは同学年

思う所は多々あるのだろう

本当ならば仲間を裏切るような事はしたくない

これは事実、しかしそうなる原因をつくってしまったのも自分達

秋日だってグランエプレが憎いわけではないし、海瀆だって同じ気持ちだ

しかし、現状のグランエプレはとでもではないがちゃんとしたレギオンとして機能しているとは言えない

戦闘面でもそうだしリリーの精神面でもそうだ

グランエプレはトップレギオン、つまりはガーデンの顔となるレギオン

そんなレギオンがいつまでも問題を抱えているわけにはいかないいや、課題があったとしても一歩でもいいから改善しようという行動す

る事が大事なのにそれすらしない事を問題視された結果である

今のままでも何も問題は無いのかもしれない

実際多くの戦いを経て実力はついてきているし、人間関係も上手くやっけてきている

だが神庭の今後を考えたらグランエプレをこのままにしておくわけにはいかないのも事実

「理解してくれて助かるわ

勿論、今後少しでもいい、改善の傾向、もしくは改善しようとする努力が見られるのならはこの話は無しにします

貴方はいつも通り過ごして頂戴

ここは自主性のガーデン、誰かに言われて強制するガーデンではない。い。

この意味、わかってるわね」

暗に余計な事は言うなと言うことだろう

ここは自主性を売りにするガーデン

誰かに強制されたり、言われたから慌ててやるというようなリイは不要ということだ

「勿論。

分かってなけりや今頃グランエプレと生徒会は対立してますよ」

「それもそうね

もし、私達が本格的に行動を開始する時は貴方にも伝わるように合図を出すわ」

「合図、ですか？」

「ええ、

生徒会防衛隊のリイを一名、何らかの形でグランエプレに合流させるわ

それが生徒会が動く合図よ

その時は、さつき言ったとおり

「いいわね？」

現在の生徒会防衛隊のリリイというと隊長の秋日の他に、二年の石塚藤乃、一年の塩崎鈴夢しおぎきすずめが該当する

本来ならば四名＋状況に応じて適任者を入れるという形だ

ちなみに春先に海瀉が合流したときは先の三名＋臨時メンバーの海瀉を加えた四名で活動していた

海瀉が生徒会の手伝いをする時は四名、海瀉不在時は実力者二名を入れた5名という形をとっているそうだ

生徒会長も最低4名は固定したいそうで残り1名は現在選定している最中だという

秋日が直接来るとなると怪しまれるのは確実なので来るのは鈴夢か藤乃のどちらかだろうと予測する

「分かりました。」

まあ、そんな時が来ない事を祈りますがね」

「期待しているわ

そして、これが最後のチャンスと言う事も覚えておいて」

そうして二人はその場をあとにする

その後はという久瑠美の指導と自身の訓練に追われる日々

2週間などあつという間、そうして東京都防衛構想会議の日を迎える

新たな戦いの日々になるなどこの時はまだ知らなかったのである

第37話

二週間が経ち、今日は防衛構想会議が行われる日、この後一柳隊のリリイが来校し、グランエプレが校内を案内する事になっているのだが、海漓は少し遅れて合流した

理由としては今までの指導を纏めた報告書の提出

この二週間の中等部の久瑠美への指導でやった事の纏めのレポートの作成に時間がかかっていた

なんとか纏め上げ、教導官に提出したが時間的にもう一柳隊が来ている頃

ヒュージの出現もあったようだがそちらは既に対処したらしい

海漓は急いでメンバーの元へと向かう

時間を考えるとレギオンの控え室にいるはずだ

「ゴメン、遅れ…あれ？なんか少くない？」

海漓が控え室に入るとそこには高嶺と神琳、紅巴、二水が椅子に座っていた

灯莉、姫歌、後は一柳隊からは雨嘉がいるはずだがどこにも見当たらない

紅巴と二水は意気投合したのか随分と盛り上がっている

「雨嘉さんは姫歌さんのお部屋に遊びに行ったわ」

「定盛ちゃん達の部屋？何か珍しいものありましたっけ？」

「部屋に誘ったのは灯莉さんよ」

見せたいものがあるって言っていたわ」

高嶺はそう答える

姫歌と灯莉は同じ部屋であり彼女達の部屋は個性的をこれでもかと詰め込んだ部屋になっている

雨嘉は彼女達の部屋に向かったというがああ光景についてこれるのだろうか？

そんな風に考えていると

「海漓さん、少し聞きたいことが」

「ん？」

「貴方の戦い方は誰かを参考にしたのですか？」

そのように聞いてきたのは神琳

先の合宿ではサポートチームとして共に戦ったりリイとして戦法に興味を持ったのだろう

もしくは姉とは全く違うスタイルに疑問を感じたのか

「参考って言うか…自分に出来る事を増やしてつたらこうなったってだけ」

「できる事…ですか？」

「中等部入って適正とか色々探つてく中で、ね

後は教導官に『お前は天野天葉にはなれない』ってはっきり言われてさ」

「はつきりと言われたんですね

何か感じたりしました？」

「いや、正論だよなって

あの戦い方は恵まれた身体能力とマジ保有量が前提になってるんだし、私じゃ無理だよなって…ね

なら、自分に出来る事を増やしてそれを磨いていこうってなった結果が今の私」

神琳はそんな風に問う

だが、海漓はそれはわかっていた事だし言われた時もそれは変わらない為特に反抗などはしなかった

勿論、シヨックは受けなかったし、幼少期から間近で見えていた事で薄々解っていたことを再度言われたにすぎない

「貴方を見て来て分かったことだけど結構、割り切りが出来るタイプなのね

言われても納得できない事だっただけでしょう？」

「無理な事は無理なんで、なれない姿を追いかけて命落とすぐらいなら出来る事磨いて生き残る事が大事じゃないですか

今の私なら多少は真似できるかもしれないませんが…やっぱ劣化コピー止まりですよ」

高嶺もそのように言うが海漓のスタンスは変わらない

どう頑張ったってできない事はある

先も言ったように姉の動きなど完璧にできる訳がない

そんな事に余計な時間を使うぐらいならば自分だけのスタイルを作るほうが有意義なのだから

その結果が今の海瀉の戦闘スタイルだ

「他者を追わず己の道を突き進む、と言う事ですか：強い方なんです
ね」

「そう？まあ、ある意味上を目指すのを諦めた奴って言われそうな気がするけど：ガーデンもそんな目が出ない事をするリリイを置いてくれるほど優しい環境でも無かったし」

普通ならばそれが挫折に繋がる事もあるが海瀉は違う。それを受け入れ先に進んだのだ

神琳はそれに対し称賛するが彼女としてはそれが当たり前、いや、そうするしか無かったとも言える

百合ヶ丘のような環境ならば仮に挫折しても誰かが寄り添い立ち直れるのかもしれないが海瀉のいた所はそんな余裕は無い

『ヒュージは落ちこぼれのお前達が強くなるのを待つてはくれない』
『ヒュージと戦いたいのならば強くなれ』

校風とは別に教導官がよく口にしていた事

常に強くなる事、戦う事を求められる為、立ち止まってしまえばそれこそ戦力外通告

そうならない為にも現実を受け入れるしか無かったのだ

「いえいえ、常に己を過小評価し誰かの影に怯えるリリイも多い事を
考えたら貴方は立派ですよ

…少しは見習って欲しいです」

「ん？心当たりあるの？」

「ええ、まあ。」

神琳は誰かを思い浮かべているような発言をするが生憎海瀉ではそれは分からない

だが、発言から察するに親しい人物である事は想像出来る

「教導官は海瀛さんならそう言えば挫折せずに現実受け入れて強くなるって分かってたって事よね？」

「悩んでる暇あるなら訓練しろって言う教導官からのありがたい助言ですよ」

そう言い古巣の教導官をフォローする

確かに口は悪いし素行も決して良いとは言えないがいぎという時にはフォローはしてくれるし海瀛達は相当助けられた

優しいとは言えないが教導官として見るならば優秀な部類だ

というか彼女の古巣、リリイとしては優秀だが素行が悪いリリイが多いので教導官もそう言うタイプが多いのだ

「私と叶星は御台場だし貴方達は鎌倉で中等部時代を別々なガーデンで過ごしたのにこうして共闘するなんて、不思議な事もあるわ」

話を聞き、高嶺はそんなふうにする

確かにその通りだろう

「私にとつちや楓・J・ヌーベルと郭神琳の二人が同じレギオンにいる事自体不思議な事だけど、言わないでおくか」

ココに来なければ御台場のリリイと関わる事なんて無かったの
でその通りなのだが、海瀛にしてみれば楓と神琳が同じレギオンに
いる事自体不思議な事なのだ

人間関係は良くわからないが中等部の事を考えれば共闘するに
しても勧誘時には気を使うと思うが、わかりかし神琳も割り切っている
タイプなのだろうか？

百合ヶ丘はわりかしそういう事に敏感なりリイが多くトラブルや
ガーデン内の政治争いも絶えないと聞いた事もあるので余計に、だ。

まあ海瀛にしても楓と神琳。

後は梅と夢結という本人の知らない所で因縁があるリリイと関わる
事になるなどつい最近まで考えてすらいなかったのはここだけの
話である

第38話

それは唐突だった

萩窪各地に突如ヒュージが大量に出現

グランエプレと一柳隊の神琳、雨嘉、二水も現場に向かう

本来ならば2レギオン+かけつけた神庭のリリイでヒュージの討伐と市民の避難を手分けして行うのがセオリー…なのだが

「(自然と戦力外の私達：一応ココ、私達のホームなんだけど)」

神琳の出した指示は雨嘉と高嶺がヒュージを抑え一年生は市民の避難経路の確保

二水が情報収集を行うというものだ

百合ヶ丘のリリイの言うことだから簡単に受け入れたのかもしれないが、海瀉としては面白くない

別に百合ヶ丘のリリイが嫌いとかそう言う次元の話ではなく、自分達のホームであくまでも客人の一柳隊が我が物顔で現場を仕切り同学年の自分達を戦力外と取られても仕方のない扱いをする事だ

確かに自分達の実力は百合ヶ丘のリリイや高嶺の足元にも及ばないのは事実。

だが神庭で過ごしている分萩窪に詳しいのは自分達だという自負はある

自分達が無理なら高嶺でも良い、一言方針の確認などはするべきだと思う。

仮に、萩窪に詳しいグランエプレに住人の避難を任せると言うのならば高嶺もそこに加えるべきだし、数を削り避難が終わるまでの時間稼ぐ方針ならばレアスキルや戦闘スタイルを考慮するなら自分や姫歌の方が適任だと考える

ちなみに生徒会長の秋日は生徒会防衛隊のメンバーと共に今この瞬間も情報収集と萩窪の防衛に向けて動いてくれている

「(でも、絶対これ良くないと思うんだよなあ…あくまでも合同であつて私達、一柳隊傘下のバックアップ隊じゃ無いんだけど…)」

海瀛はそう思う

他の面々は軽く考えているかも知れないが自分達はトップレギオン

にもかかわらずこういう非常時に指示や情報収集を百合ヶ丘に全て任せて自分達は言われるがままにしか動けないとなるとグランエプレは百合ヶ丘の下部組織と思われるでも仕方がないし、今まで何をやってたのかと言う話になる

更に言うならこのままだと自分達は百合ヶ丘の下部組織となってしまうと海瀛は考える

確かにお互いのガーデンの規模とリリーの質を考えれば一柳隊が上で自分達が下になるのは仕方ないこと。

それでも思う所はあるのだ

自分達は神庭のトップレギオン

同盟を組んだらいつも以上に自分たちは戦力外扱いをされ、このままだと都合のいいバツクアツプ要因に成り下がるのだが、他の面々はどうか考えているのだろうか？

「(それとも百合ヶ丘は最初から私達とヘルヴォルを一柳隊のバツクアツプ部隊として運用するつもりだった…?)

新潟で前例は作っちゃったわけだし、一柳隊の隊長は超がつくほど政治関係には無知、一葉もこういう駆け引きや探り合いは苦手なタイプ

ウチは百合ヶ丘が声をかけたって事で姫歌ちゃん達は浮かれてるし高嶺さんや叶星さんは百合ヶ丘を持ち上げる始末…少しはこの状況疑って欲しいんだけどな)」

そうこうしている内に二水から現在の状況が伝えられる

新宿都庁での謎の爆発とそれに伴うエリアディフェンスの崩壊

今回のヒュージの大量出現もそれによるものであり各地でリリーが応戦しているとの事だ

自分達も避難誘導が終わり次第新宿へと向かう

その頃、神庭の生徒会室では秋日が出撃の準備をしている所だ
そこには残りのメンバーもおり、一人が秋日に対して問う

百合ヶ丘からの増援、それこそアールヴヘイムを筆頭とした主力レ
ギオンが来ないのか？

全員が無理でもせめて数人だけなら無理か、と

「残念ながらそれは無理ね

彼女達は百合ヶ丘、いえ、人類の切り札、この程度じゃ来ないわよ」
その答えに対し異議を唱える

百合ヶ丘の基準だと外征には基本的に3レギオンを派遣する方針
今回の一柳隊が防衛構想会議の参加だけでなく東京への外征も兼
ねているのだから残り2つのレギオンが来なければ百合ヶ丘の理論
は破綻する

仮に主力レギオンでなくとも百合ヶ丘内で一柳隊と友好関係を結
んでいるレギオンが駆けつけてこなければおかしい

すると秋日は

「条件は満たしているわ

一柳隊外征時に置ける随行レギオン2枠はエレンスゲのヘルヴオ
ル、そして神庭のグランエプレよ」

彼女はそう告げさらに

「新潟の北関で味を占めたんでしよう

百合ヶ丘が戦力を出さなくてもいざとなれば東京のガーデンから
残りの枠を用意すれば良いっていう風に、ね

一柳隊なら格下ガーデンのヘルヴオルとグランエプレで十分つて
いう判断になるわね」

このように言う

今年行われた新潟奪還戦はまさに伝説の戦いとなった

詳細はここでは語らないがその作戦に参加したのは百合ヶ丘からはアールヴヘイムのみ

外征、しかもアルトラ級が絡んでいるにも関わらず1枠
そしてその新潟に御台場トップレギオンであるヘオロットセイ
ンツ、そしてロネスネスが新潟に派遣された

新潟の奪還の成功でココの動きはあまり話題にはならなかったが
百合ヶ丘から1枠しか派遣しなかったと言う事に疑問視するリリイ
も多く御台場側は派遣はあくまでも御台場独自の判断と言っている
が秋日を筆答に近隣ガーデンの上層部は百合ヶ丘が1枠しか送らな
かった事で戦力が足りないと考えた新潟側から御台場に何らかの働
き掛けがあったと読んでいる

ちなみに、秋日は海漓に新潟の人選をどう思うか？と聞いたことが
ある

鎌倉で過ごし、百合ヶ丘を外からみたりリイとして

『アイツの立場を使えばウチやシエルリント、桜ノ杜は厳しくてもメ
ルクリウスから1・2枠は確実に引張ってくれましたよ。』

それがなくいきなり御台場からって事は多分、新潟側からの御台場
への要請です。

まあ、メルクリウスじゃないのは百合ヶ丘への配慮ですね

格付けで負けたガーデンを呼ぶってなって機嫌損ねてアールヴヘ
イムの派遣を取り下げられたり、アールヴヘイムの生え抜きがやる気
無くしても嫌でしょうし

百合ヶ丘のプライドの高さはガチですし

まあ、私がこんなひねくれてる性格を考慮しても流石に引くレベル
ですよ…

そんなことだから甲州撤退戦で…あ、いえ、今のは忘れてください』
海漓は鎌倉の事情と百合ヶ丘以外のガーデンの規模と実力を判断
更には政治的な配慮もあったと考えている

まあそんな見方をしてしまうのは自分がひねくれているからかも
知れないと自虐もしていたが

そして重要なのはそんな事情よりも百合ヶ丘が1枠しか用意しな

くても残り2枠は他所の地域から用意したという前例を作ってしまったこと

勿論北閥におけるアールヴ Heim とセインツ、ロネスネスの共闘と自分達は同等に語れないが、今後一柳隊だけでなく百合ヶ丘のレギオンが外征すると考えた時に百合ヶ丘から規定数用意しなくても東京や近隣地域から用意するという判断の理由が出来たことだ

確かに時と場合によってはそういう事があっても良いのかもしれないが、それを前提に自分達のレギオンを使わないというのは違うのではないかと考えるリリイもいる

神庭だと海瀉や秋日、ちなみに海瀉の古巣のリリイも同様の考えだったりする

「とにかく、来ないレギオンを当てにしても仕方がないわ

私達は私達に出来る事をやりましょう

」

そう言い自分達も出撃の用意をする

市民の避難も順調に進み、ヒュージの討伐を行うだけという報告を受ける

「緊急事態よ、出撃できるリリイはほぼ全員出撃させて

過去に防衛隊の増援を経験した者は私達の所

後、近隣ガーデンの被害状況もこちらに回して」

秋日は神庭の長としての確に指示をしていく

東京都内、どこも似たような状況だろう

こうして戦闘が各地で行われていくのだった

第39話

エリアディフェンス崩壊の情報を聞きつけ新宿に向かう海瀛達、その途中、幸運な事に叶星、一葉、梨璃、夢結と合流する事に成功する

が、丁度ヒュージと交戦中らしく眼の前には見慣れないヒュージが一体

手分けして戦う事になり、叶星が指揮をとる…のだが配置はいつもの事

高嶺を自分と共に行動させ一年生はあくまでも索敵さらには二水に補助してもらおうというありがたいお言葉

神琳と雨嘉に周辺のヒュージとケイブの討伐を依頼する…要は先のアタックチームとサポートチームでの運用という事だ

「いつもの事とは言え、今回もこんな序盤から高嶺さんを使って大丈夫なのか…？」

終わりが見えないのに」

そう思うのは海瀛

この事態は何をどうすれば解決するのかが見えてこない

少なくとも眼の前の特型ヒュージを倒せば終わりと言う事にはならない

最悪東京中に現れたヒュージを全て殲滅する事になるかもしれない、今日一日で終わるのかそれとも日付を跨ぐのか、それすら不明

そんな中で高嶺の事情を考えれば簡単に戦闘させる訳には行かない事は分かっているはず

まあ普段から上級生と下級生で分けて行動し、自分達は叶星達とペアで戦わない為、これしかできないと言われてもおかしくはない

海瀛は合宿前に事情を知らされているがはつきり言っただけで秘密にしている意味が分からない。

二人からはまだ三人には話すなど言われ表向きは納得したがやっける事の理解ができないというのが本音だ

さらに言うなら先程の叶星の指示も協力して戦うのではなく、まる

で戦力外な自分達のフォローを一柳隊に任せているような言い方

確かに百合ヶ丘に比べたら未熟なのは認めるが、そんなに足手まといな扱いをしなければ行けないほどに未熟と判断しているのだろうか？

仮にそうなら自分達は今すぐにでも神庭に戻る必要すらある

足手まといが生き残れるほど甘い状況で無いことは海漓が一番よくわかってる

それにこの指示は海漓からすれば文字通りグランエプレを終わりに近づける采配になりかねない

海漓以外の人間は誰も違和感を覚えないのもまた質が悪い

高嶺は分かっている何とも言わないからもう論外である

とはいえ先ずはこの状況を終わらせるのが先

海漓達は叶星の指示通りに動きケイブを搜索する…のだが、その途

中

「この編成、もろ合宿のサポートチームだけど、人数減ってるのにヒュージとケイブ削りきれれると思ってるのかな」

彼女はそう言う

この編成は確かにサポートチームなのだがあの時とは違いエレンスゲ上級生が不在

手数はともかく火力が足りなすぎる

索敵とケイブの撃破と言っていたがどう考えても火力が足りない

自分達が連戦するつもりなのだろうか？

特型を倒すつもりならばそんな余裕は無いと思っっているのだが

すると姫歌が

「叶星様達ならあつという間に倒しちゃおうよ!!」

ひめか達も頑張らないと」

「(その確信を持てれば良いんだけど

というか叶星さんの指揮で勝てるって確信持てないんだよなあ)」

彼女達は叶星を過剰に信頼している為、特に気に留めていないような事を言うが海漓はそうではない

確かに特型に対処しているリリイは梨璃を除けば強力なメンツだ
しかし不安な点もある、どうしても倒しきれるといふ確信が持てな
い

更に、言うなら隊長の叶星の指示を聞いても勝てる、上手くいく、と
思えないのも大きい

「(あの人と叶星さんじゃ性格も違うから何とも言えないけど隊長の
指示を聞いても勝てるって思えないって結構不味いんだよ)」

古巣では絶対に無かった感覚だ

まあ古巣の場合、集り癖さえ気になれば隊長を努めているリリイ
が非常に優秀だと言うのもあるのだが

彼女を見た後に叶星を見てしまうと余計に、だ

指揮、判断能力に差がありすぎるのだ

昨年まで自身は中等部、彼女は高等部で共に戦う機会は限られてい
たが彼女ならば足手まといを他所に押し付けたら戦う上で致命的な
秘密をメンバーに隠して前線に配置するなど絶対にしない、というか
そんな足を引っ張るリリイは選ばない

僅かな苛立ちを感じつつ戦闘を行う

苛立つても戦闘の判断ではミスをしないのが海瀉である

こうしている間にもケイブの索敵とヒューズの掃討を行っている
が数は多くなかなか減らない

海瀉達も途中からは神琳達に合流し戦闘を行う

あまりにも数が多いためある程度人数を分けて対処することにな
る

「また私前に出たほうがいいよね、これ。定盛ちゃん、どう思う?」

「えっ…まあ、数削るにはそれしかないわね…まあ海瀉だしよっぽど
の事がない限り大丈夫ね

ただ、無理はしないこと」

「私も鷹の目で状況が変化したら直ぐに知らせますので」

海瀉の提案に姫歌が同意する

本当ならば海瀉が提案する前に指示を出してほしかったりするの
はここだけの話

鎌倉に合宿に行った時とは違いここは東京

地区は違えど自分達のホームなのだから地形などは把握しておいてほしいものである

話を戻す。

こちらも数を削ってはいるもののそれ以上にヒュージが現れる

ケイブを破壊しようにもヒュージが邪魔になる事も多い

ならばここで海濱が前に出て削るのが一番だ

二水もレアスキルで援護すると言ってくれている

勿論無理はしないという条件付きだ

突撃しヒュージを削る

スモール級がメイン

「(このレベルならレアスキルもサブスキルも使う必要無いな)」

長期戦を覚悟し極力レアスキルやサブスキルは使わない

マギを温存しながらの戦闘だ

スモール級相手ならレアスキル無しでも平気で戦えるように訓練

はしてきた

無駄弾を使うつもりもない、一撃で仕留める

ヒュージにも急所と言うのは存在しそこを確実に撃ち抜く

個体に差こそあれ場所はほぼ同じ

一度頭に叩き込めば後は簡単

正確に撃ち抜くだけだ

仲間からの流れ弾に気をつけつつ前に

ヒュージを多く削りケイブを討伐しやすくする

そのおかげか先程よりは状況が良くなってきた

そうしていると

「あ、特型が!!海濱さん!!」

二水が例の特型ヒュージがこちらに向かって来ると言う連絡が入る

「例の特型ヒュージ!? 叶星さんたちトチったか?」

特型ヒュージも傷を追ってはいるが致命傷にはなっておらずこのまま逃がせば厄介な事になるのは明白

「足止め位はするか…そのうち追いつく…よね？」
そう判断する

単独でどこまでやれるか分からないが試して見る価値はある
そう思っていた…のだが

「海瀛！その個体は無視して!!」

追撃してきた一葉が戦闘を止させる

「え、マジ？逃すの？」

「うん。叶星様たちもケイブ討伐に向かっている」

一葉の話が事実なら叶星や高嶺、夢結、梨璃も付近のヒュージの討伐に切り替えているらしい

特型対応組が連戦になってしまった事が今後に影響かなければ良い
とこの時の海瀛は思っていた

そして戦闘が終わり、一段落すると彼女は一葉に対し

「アレ、逃して大丈夫？」

私の経験だと後々面倒くさくなるやつだよ」

彼女にそう告げる

特型ヒュージというのは逃がすと面倒くさくなるのは海瀛からしたら当たり前的事
強くなるのか、仲間を引き連れて戻ってくるのか、はたまた進化す

るのかは分からないが逃がすと面倒くさくなるのは事実
勿論こちらの状況にもよるが倒せる相手は確実に倒さなければい

けないと考えている
「まあここで一葉達を消耗させても不味いと判断したのかもしれない

けど…うーん、後々響くよなあ、コレ」
「海瀛はこの状況、長く続くと思ってる？」

「当たり前
何をどうすれば終わるのか見えてこないじゃん

現れた雑魚を殲滅して終わりならマシ、この後にギガントや考えたくないけどアルトラレベルのボス級が出てきてそれを倒さなきゃ終わらないのか全く分からない

まあ、今日が防衛構想会議のある日で一柳隊みたいに会議目的で他

所から来てるリリイも加わってくれらるだろうし、初手の展開でミスつてない分2年前の甲州よりはマシだと思っけど…」

一葉の間に海瀉は当然だと告げる

普段ならば現れたヒュージを全て倒せば終わりだが今回は違う

エリアディフェンスの崩壊というイレギュラーが発生したことによる出現

ヒュージの数も桁違いであり先程のような特型も出てきている

終わらせ方が分からないのだ

ギガント級ならば最悪人数さえ揃えばなんとかできるかも知れないが、アルトラ級など出てこられたら勝ち目がない

それこそ御台場のロネスネスやヘオロットセイイツ、百合ヶ丘のアルヴヘイムクラスを大至急派遣してもらわなければならない

幸運なのは一柳隊のように他の地域から会議のためとはいえ外征してきているレギオンが多数おり、今の所戦力と初動でミスが起きていないこと

海瀉にとっても因縁がある2年前の甲州のような事に今の所なっていないのが不幸中の幸いだ

「エレンスゲや神庭もどう動くか分からないし…他所の外征組もどれだけ戦闘準備してきてるのかも不明

結構苦しいよ」

神庭は少なくとも菘窪の対処が先だろうしそこは秋日が率いる防衛隊が上手くやってくれらるだろうが新宿への増援に関しては未定

エレンスゲの場合、こういう状況で戦果を上げるために積極的に戦闘を行わせる、とは思っけが一葉のエレンスゲでの立ち位置を考えるとヘルヴォルに積極的な支援は無いと考えていい

一葉がもう少しガーデン内で他のレギオンや上層部相手に駆け引きや交渉を上手くできていたら良かったかもしれんが生憎と一葉はそう言うのはしないタイプ

増援は期待できないだろう

そして以前クラスメイトが言っていた話が本当ならば御三家の一

角、イルマのトップレギオンは外征していて不在

ルドビコもどう動くか不明

そして御台場も動く気配がない

御台場は御台場で大変なのか、もしくは何らかの事情で増援を送れないのか…そこは分からない

「それも含めてこの後皆で話し合わない…先ずは合流だよ」

「それもそう…か」

一葉もその言葉を受けすこし考えた後、海濱に皆と合流する事を提案する

その後は残っていたメンバーと合流し、一先ずは新宿へと向うのであった

第40話

さて、例の特型ヒュージとの交戦とケイブの破壊が終わった後、海瀆達は新宿へと向かう

そこで楓達とも合流し、今は今後の話し合いをしている所だ
話を聞くと現在都内各地にケイブが発生しそれに伴いヒュージも出現

自分達は新宿に現れたケイブの破壊とヒュージの討伐が主な任務だという

エレンスゲや百合ヶ丘から詳細な情報が送られケイブの位置と付近には特型ヒュージが居ることが告げられる

その数は合計3体

一葉はガーデン単位で隊を分け各個撃破する事を提案する

時間もないし全員で順番に回っていつては効率が悪いとの判断だ

「一番マズいのはウチらだな…。高嶺さんの消耗具合。それに加えて多分特型は二人でやるから私達は戦力外。

連携無しで倒しきれるとはとても…逃した個体をどのレギオンでやるのかも分からないし」

海瀆からしても一葉の案は最適だと思う…が不安なのは自分達

今までと違い戦力外扱いの自分達を他のレギオンに任せるといふ事は出来ない

その中で特型を倒すとすると厳しい

高嶺の件や逃した個体の行き先の事もある。

自分達には不安要素がありすぎる

叶星や姫歌も賛同するがどうしても海瀆はその案に賛同する訳には行かない

とはいえ今の海瀆はレギオン内でサブリーダーや司令塔の役割では無い為意見を言った所で話は通らないだろう

「更に不味いのが定盛ちゃん達はこういう場面の経験が無い事。

一柳隊は生え抜き組を筆頭に万が一の時のブレーキ役はいそうだし、ヘルヴォルだつて良識派と言いつつもエレンスゲのリリィ。

対処法は学んでるし連携も問題無い：危ないのは私達)」

そして最大の不安要素はこういう大事に対処したことが無いリイがグランエプレには多い事

神庭だつて学んでいるがそれを発揮する機会もないし発揮しようにも基本的に叶星と高嶺で全てやってしまうから経験値がほとんど入って来ない

そんな中での今回の事件

はつきり言つてこの先不安しかない

そんな事を感じつつグランエプレも移動し当初の目的地へと到着する

「うっわ、すごい数」

付近には大量にヒュージが出現し奥には無数のケイブ

先の話が本当なら奥には特型もいるはずだ

「(ヒュージの配置が妙だな…」

これだけの数があるなら私達がここにつくまでに何体かは遭遇してるはず)」

気になる事もある

ヒュージが出現しているが、こちらに攻めてくる事も無く、その場で待機しているだけ

今までも似たような事が無かった訳ではないが、ここまで統率された動きはしてこなかったはず

この場に出現しているのはいつも見かける個体な為、特型ではないまるでリイを待っていたかのような配置

似たような光景を知っている海瀧は不安しかない

「まさか、リイを誘い込んでる…?）」

2年前とは場所と状況が違っているがリイを誘い込んでいるようにも見える

さて、叶星はどう動くのか

「この初戦は貴方達一年生に任せるわ

合宿で得た物を私達に見せて欲しいの」

「(叶星さん、正気ですか!?)」

本来ならば警戒しなければ行けない状況で経験が足りない姫歌に場を任せる采配

確かに高嶺の事を考えると一度休ませる必要はあるが、それをここでやるなど正気の沙汰ではない

先の戦闘の影響をもちに受けた形だ

「わ、分かりました

行くわよ皆、叶星様達に私達が成長した所を見せるわよ!!」

そんな事に気づかず姫歌達は戦闘を開始する

こればかりは姫歌を責める事は出来ない

実力以前に海瀉と姫歌達では乗り越えてきた戦場の数が違うし戦場での知識にも差がある

そう、姫歌達は責められない

問題は叶星達だ

この状況を軽く見ていることに違和感しかない

しかし、今は姫歌の指示を聞くのが先

「距離を取りつつ迎撃するわ

海瀉も今回は前に出るの抑えて!」

「了解」

どうやらヒュージを誘き出しながら戦う方針らしい

ヒュージを近づけさせないようにして戦う

力を温存しつつも数を減らす事を要求される

「まあ突撃しなくても倒せるけどね、私」

そう言いながら彼女は自慢の早撃ちでヒュージを素早く撃ち抜く。

2丁拳銃型である事もあり、同じ射撃の灯莉が3体倒す間に海瀉は

10体撃ち抜いている。

「改めて見るとやっぱり同じ射撃でも灯莉と海瀉ってスタイルが全然違うわよね

狙い撃つ灯莉と早撃ちを活かした乱れ撃ちする海瀉っていうか」

「基本的にも、遠距離の灯莉ちゃんと中近距離の海瀉ちゃんの違いもありますからね

ポジションも真逆ですし」

「戦闘スタイルだけなら住み分けが出来てるから指示は出しやすいわよ

まあ、灯莉がもう少し大人しくしてくれるといいんだけど」

戦闘しながら二人の差を改めて思う

同じ射撃でもここまで違うのかと

二人にとって射撃型のリリイといえれば灯莉や一柳隊の雨嘉のようなイメージ

射撃型でありながら基本的に敵陣に飛び込み、近距離でもお構い無しの射撃をする海瀉は変則タイプとも言える

そして灯莉と海瀉が共に射撃を行うとこんな事も起きる

「あ、弱ったヒュージもーらい☆

逃げたヒュージももうねー♪」

「ご自由に!!」

海瀉は乱れ撃ちをするが時折仕留めそこねたり回避したヒュージというのも勿論出てくる

それを灯莉は容赦なく仕留めていく

そして

「ッ…近付かれすぎ!!」

「おおつ、ありがとー」

灯莉が狙いをつけるのに夢中になりヒュージに接近を許せば今度は海瀉が素早く撃ち抜き灯莉に狙いをつけさせる時間を稼ぐ

弾を補給する時もタイミングをずらしながら互いに援護し合う

姫歌の指示を受け、この攻撃を行う際お互い事前に言葉を交わさずに灯莉は独自の感性、海瀉は自身の経験と技術でこれを行っているのだから大したものである

同じクラスで過ごしているというのもあるだろう

「あの二人は大丈夫そうね

でも、のんびりしてたらあの二人に軒並み倒される

…いくわよ紅巴!!」

「は、はい!!」

姫歌と紅巴も負けてられないとヒュージを討伐する
しかし数は一向に減らないしむしろ増えてきている
すると灯莉が

「なんかヒュージ変じゃない？」

僕達にやられに向かつてきてるよー？

しかもどんどん増えてるし」

「（この動き、やっぱりそうだよな…）」

そんな事を口にする

彼女は気楽な所があるが感覚がするどいのか違和感や異変には
気づくタイプ

そして海瀉も戦闘を行っている内に自身の違和感を確信に近づける
決定打にもなる

マギを温存したことが生きている

ヒュージは変わらずこちらに向かつて来るが、中には自分からやられ
に来るヒュージも現れている

勿論海瀉のレアスキルならばそのような事も可能だが海瀉はレア
スキルやサブスキルは使っていない

まるでこちらを消耗させようとしているかのような動きだ

「変…ですか？特に気にはなりません…」

「ひめかもおかしいとは思わないわ

まあ、ヒュージが増えて来てるのは同意するけど」

灯莉のような独特な感性も海瀉のような経験も無い二人には
ヒュージが増えているという事以外には気がつかない。

さて、どうしたものかと考えていると姫歌と叶星が話し合っている
すると姫歌がうなずく

「私達はフォーメーションを維持

風穴を開けて叶星様と高嶺様が前に出るための道を作るわ!!」

「（そう来るかあ）」

「ん、んー?！」

今の状況からするに叶星は姫歌に自分達も戦力として動かしてく
れとでも頼んだのだろうか

異変を察知したならば、危ないから司令塔を変わつてと言うが、姫歌の指揮下に入るといふ事は叶星と高嶺すらこの状況を普通だと判断した事になる

しかし灯莉は何かを感じ取ったのか攻撃の手を少しだけ緩め付近を観察する

「奥に何かいる？付近のヒュージが邪魔でよく見えない…」

「奥？ケイブの？」

「うん。ずーつと奥

一際強そうなマギが奥に一つ、ヒュージのマギで隠れちゃつてるけど…僕達を見てる?」

「…(やっぱり誘つてる!!奥に特型がいるのか…それでこの指示は…絶対に不味い)」

畏と分かつててあえて引つかかりに行く…という事も出来なくは無いいし、時と場合によつてはそう動く必要も有るがそれを行うならば叶星が指揮を取りグランエプレを適切に配置し動かす必要がある

畏と思われる状況にあえて引つ掛かりに行くというのはその位危険な事なのだから

適切な配置もせず経験の浅い姫歌に指示を任せその通りに動くなど海滴からしたらあり得ない行為

更に言うなら二人を突撃させるといふが突撃させ、その後どのようになり立ち回つてほしいのか、自分達はどうするのかという指示が無い

これは姫歌のミス

「灯莉ちゃん、マギは大丈夫?」

「うん。ピンピンしてる」

「無駄遣いしたら駄目だよ。ここからが本番」

「んー?分かつた☆」

近くにいる灯莉に少しだけ警告

姫歌にも話してしまつても良いかもしれないが彼女は司令塔

ここから作戦の変更となると流石に混乱する

ならば身近にいる味方に警戒させた方が万が一時に対応が可能で

あるため、良い。

不足の事態に備えさせる

上級生二人の投入と一年生の勢いもありヒュージとケイブを効率よく破壊していく

あまりにも上手く行き過ぎている状況

不安しかない

こう言う時は必ず何か起こる
すると突然

「高嶺ちゃん!!」

叶星の声が聞こえる

自分達も叶星の方に向かう

すると高嶺と対峙するような形で一体のヒュージが存在している

「ようやく姿を表したわね」

「高嶺ちゃん、大丈夫?」

叶星はすぐに彼女の心配をする

「私は大丈夫よ、それよりもあの特型ヒュージ…」

「さつき遭遇したのとは違う个体ね

体に傷が全くないわ」

彼女の言うとおり目の前の特型ヒュージには傷が一切ない

新しく現れた个体…と言う事になる

「無傷の相手と戦うということになるのね

こっちは連戦続きなのに」

「それが作戦だと思うよ

僕達がクタクタになるのを待ってたんだと思う」

高嶺は冷静に総つぶやき

灯莉は感じた事をそのまま言う

「ちよ、ちよと待って下さい!」

ヒュージにそんな知能があるなんて話…」

「…灯莉、あんたヒュージの事になると頭冴えるわね」

「ヒュージの事、よく観察してるからね♪」

ヒュージにそのような知能がある事に紅巴は驚き姫歌は灯莉に感

心する

が、海瀧だけは違った

「叶星さんの引っかかり方といい高嶺さんのあの反応といいまさか、御台場では知能のあるヒュージの存在を知らされていない？」

叶星もヒュージが陽動を仕掛けてきた事に驚き違和感を感じた灯莉を褒める

態度を見るからに嘘偽りの無い言葉であろう

しかし、それもおかしな話

高等部からリリイになった姫歌達はともかく叶星と高嶺は御台場のエリート。

ならば普通の生徒よりも高い教育を受けているはずだし、より多くの情報も得ているはず

知能のあるヒュージの事など知っていなければならぬのだ

ちなみに、紅巴も御台場出身だか中等部時代はリリイでは無かったと言っていた

ならばカリキュラムはリリイとは違うため紅巴に関しては仕方がない

そんな考えを他所に叶星は作戦を指示

いつものように上級生は接近、一年生は射撃で攻撃するという指揮になる

「(上手く行くかなあ…)」

不安しかないが戦闘を行う

そして、その不安が最悪な形で中してしまう事をこの時は気づかなかったのである

第41話

グランエプレの面々は移動しながら特型ヒュージとの戦闘を行う、
が攻撃が当たらない

ヒュージの知能の高さと素早さに翻弄される形だ

「なんだ：どうしてここにもリリイやマディック、それに防衛軍の人
達が居ないんだ：？」

移動しながら感じた事

他の面々は気づいているだろうか

東京で戦っているのは自分達だけではない

都内のガーデンのリリイやマディック、防衛構想会議の為に外征し
てきたリリイ、そして防衛軍の方々

いろんな所で戦闘が行われているのだから当然、道中で出会えなけ
ればおかしい

それなのにここに来るまでの間、誰にも出会えなかった

ここが鎌倉や他の地域ならばよくある事だが、東京という地域での
戦闘のやり方を考えれば明らかにおかしい

「(死体どころか、人間の血の痕も戦闘した形跡も全く無い：早い段階
で避難が終わってた?)」

対ヒュージとの戦闘だ

起きて欲しくはないが、そういう事も起こってしまう

今、この瞬間も他の場所ではそうなっているかもしれない
しかし、この場ではその光景がない

戦闘を行った痕跡や人間の血痕が何も残っていない

掃除などできるはずがないのだから理由は一つしかない。

「(戦闘になる前に避難が完了した?)」

だからってこの場に誰も居ない理由にはならないよな：)」

ここでは戦闘が起きなかった可能性

エリアディフェンス崩壊からヒュージの出現には時間差があつて
もおかしくない。

この辺りではヒュージが全く出なかった為避難が簡単だった…という事もあるだろう。可能性は限りなく0に近いが

しかしこの場に誰も居ない理由にはならない

新たに表れたヒュージの対処、他で戦っているリリーの支援、やる事は沢山ある

リリーも防衛軍も非常時の対処法は学んでいる筈

このレベルで誰も居ないとなるとそれこそ現場の判断ではなく上からの命令

ガーデンの上層部や都の司令部クラスの命令が必要である

リリーの判断だけで発生する状況ではない

これは後で確認する必要がある、と彼女は思う

戦闘と無関係な事を考えているが、今は戦闘中

今この瞬間も特型ヒュージとの戦闘は続いている

当たり前の事だが、本当なら余計な事など考えずに特型ヒュージの対処に全力を注ぐべきなのだろうが、ここまでおかしいと嫌でも目につく

「(熱くならず、空気に吞まれず状況を正しく把握する…)」

中等部時代からの教えを忘れず戦闘に挑む

一つの見落としが命取り

だからこそ気がついた事がある

「(あのヒュージ、確かに私達の動きを学習はしてるけど、その動きを基に次の動きを予測したするほどの知能はまだ無い

私達を舐めてるのか、そこまでの知能が無いのかカウンターしたりする気配もなし

幸いな事に私含め誰もレアスキルを使ってない…頭脳戦になるかな、これ、タイミングさえミスらなきゃ勝てる)」

確かに目の前の個体はこちらの動きを学習している

同じ手は二度通じない、それは分かる

しかし、それだけ

攻撃を予測しカウンターを仕掛けたり仕掛けられる前に攻撃する

という事が今までない

学習に専念しているのか、何か別な目的があるのか、までは海瀛には分からない

しかし、幸運な事にコチラは誰もレアスキルを使っていない

海瀛を筆頭に全員のレアスキル、戦法を適切に運用しすれば間違いないで勝てる

他のメンバーは知能を持ち学習するヒュージという未知の相手に動揺している

そうしていると叶星は

「今、あのヒュージに対抗出来るのは私と高嶺ちゃんしか居ないと思うの」

「いや、もうやるつて分かりきってたけど、ここに来てまだソレやります?」

叶星のその言葉に海瀛は呆れる

よく言うのだ

強敵が来たら対抗出来るのは私達だけ、と

それで仕留めてるならともかく必ずボロを出し取り逃がす

自分達が弱いから、と姫歌達は言うしだから強くなりたいと言っているがそうではないと海瀛は常に思っている

今いるメンツをフルに活用し、勝つための最善を尽くすのが隊長であり司令塔の役目では無いのか、と

弱いから切り捨てるのでは無く弱いリリイだからこそ、どう運用するのかが隊長の腕の見せ所ではないのか

「まあ、あの人の運用が化け物レベルつてのを考慮しても、流石に酷すぎるんだよな叶星さん：秋日会長が決断するレベル、流石に底いきない」

古巣で今もなおトップレギオンの隊長を務めるリリイと叶星を比較したくはないがここまでの扱いをされると流石に文句の一つも言いたくなる

1年生が本当に弱すぎるなら叶星や高嶺が切り捨てる前にガーデンや生徒会が個別に声を掛け脱退の指示や1年生から別なりリイを

配属させるように動く

ガーデンが主導で編成するトップレギオン制とはそういう物

秋日も海瀛に仕事を依頼をする事はあるが個別にリリイを呼び出せと言われた事は一度もないし、個人を名出しし脱退させろなどと言われた事もない

つまり表向きは問題無いという事だ

表向きは、だが

しかし今回の件も生徒会の耳には入る

そうなってしまうばもう止めになるだろう

文化祭の時に筆頭にグランエプレの様々なやらかしは海瀛が生徒会の仕事を手伝ったり、叶星達の知らない所で各所にフォローを入れて来たが合宿から始まり今現在に至るこの状況は海瀛でもフォローしきれない

「さて、作戦だけど…」

貴方達には陽動を行ってもらおう

攻撃は当てなくていい、とにかくヒュージの気を引いてほしいの

「(…は?)」

考えているうちに叶星は作戦を言う…のだがとんでもない事を言い出したのである

「えっと、定盛ちゃん達も陽動に使うんですか?」

「そうよ。」

「海瀛、話聞いてなかったの?」

高嶺は同意に姫歌は海瀛にそう尋ねる

話を聞いていなかったのか、とさえ言われる始末

「いや、聞いてたよ

私はともかくこの三人、陽動作戦やるの春先の幼稚園の時以来なんですけど…大丈夫ですかね?」

「あの時よりも私達は強くなってる。

確かに久しぶりの事をお願いするけれどあの時と違って今回は一体だけ

私達の攻撃がメインになるし問題は無いわ」

「問題は無い…ですか

…分かりました（言い争うの時間の無駄だし）」

普段から陽動を行う海瀉はともかく、姫歌達が陽動を行うのは春先以来。しかも付け焼き刃。

それ以降、陽動を行う訓練もほぼしていない

大丈夫かと聞くのは当然だ

自分達の攻撃がメインだから問題無いと自信満々にいうが…どうなのだろう

隊長の言う事だしこの非常時に言い争いになっても問題なので受け入れる、がはつきり言って納得出来る説明ではない

姫歌達は叶星と高嶺の役に立つと意気込んでいるが、訓練もほぼ無しで知能を持つ特型相手に陽動をするなどはつきり言って無理である

紅巴や灯莉は前に出て陽動を仕掛けるような戦法を取らない

後ろから支援を行うタイプだ

レアスキルを考えてもそれは明らか

姫歌も司令塔を希望しているため基本的には前に出ない

彼女の場合レアスキルや本人の性格を考えると司令塔ではなく前に入るタイプかもしれないと海瀉は考えているし一度提案した事もあるが受け入れては貰えない

叶星と高嶺もポジションのコンバートを指示する事には否定的だったりする

「海瀉が普段やるような事をみんなでするだけでしょ

簡単…じゃないんだろうけど目立つのはひめかにだって出来るんだから」

「…そんな簡単な事じゃないんだけど

まあ、いいや

あの説明じゃ誤解してそうだし一つだけ忠告してあげる」

そう言い海瀉は姫歌達の方を見る

準備も兼ねて少し離れた所にいるのでこの話は叶星達に聞かれることは無いだろう

本音で話すとトラブルになるのでオブラートに包むことも忘れずに

「やるなら本気で仕留めるつもりで撃ちな

結果として外れたなら問題はないけどはじめから手抜きは絶対にやるなよ」

「どういう事です?」

「あのヒュージ、学習するんでしょ?」

私等の攻撃が手抜きつて学習されたらアウトじゃないの? バレた瞬間叶星さん達の攻撃全部回避されるよ

陽動つて気づかれないから成立するんであつて気付かれたらアウトだよ」

「な、なるほど」

「確かに、ひめか達の行動がバレたらダメよね…」

「んー? 当てに行くけど当たらなかつたらドンマイ? で撃つの」

「そーゆーこと(攻撃の基本すら分かってない…)」

この有様である

これなら6人でフォーメーションを組んで戦った方が効率が良いと思う

…そのフォーメーションすらろくにやっていないのが問題なのだが

そして、いざ作戦開始

「それぞれ」

今回は灯莉が先陣だ

その後に姫歌と紅巴も続く

海漓は万が一を考え今回は三人を見守れるように後方に立つ
いざという時のフォロウをするためだ

灯莉が射撃を行うが特型ヒュージは速い

当てにいけ、と言われたが全然当たらない

当てに行つてコレだ当てる気がないならば早々に対応されたら
う

「は、速いです…!」

「灯莉の攻撃をみきつてるわね…

当てに行かなきや早々にココを抜かれてたわ

今度はひめか達の番よ」

「は、はいー」

姫歌と紅巴が前に出る

叶星と高嶺はまだ仕掛けてこない

タイミングを伺っているのだろう

確かにヒュージはまだ隙は見せ無い…が不慣れな陽動を行う姫歌達は別

ヒュージも反撃開始と言わんばかりに姫歌達に仕掛けてくるが、

「させるかってーのー！」

その攻撃が当たる事は無い

突然ヒュージが起動を明後日の方向に切り替え、近くの瓦礫に激突する

海漓のレアスキルによる妨害だ

「危なかった…ありがとう海漓。助かったわ」

「今回は私が援護してあげるから、攻撃を叩き込みに行きなよ」

「分かったわー！」

その後、三名は前に出る

海漓は自身のCHARMを構え射撃を開始する

「どう避けるかは視えてる!!」

自身の攻撃とサブスキルの虹の軌跡を組み合わせて使う

本家よりも深く視る事は出来ないが自身の射撃をどう回避するか、

位は分かる

ならば予めその回避先として視えた所に先回りして弾丸を放つ

その後、どうなるかなど言うまでも無い

ヒュージが自ら弾丸に当たりに来る形となる

その隙を逃す三人では無い

彼女達の攻撃は確実にヒュージを捉える

そのタイミングで叶星と高嶺が仕掛ける

見るものを魅了する、凄まじい連撃を叩き込む

相変わらずのコンビネーションだ

「す、すごい…あんな連撃…!」

紅巴は称賛を

「定盛…?」

「あたしもいつかあんな風になれるのかしら?」

姫歌は二人の実力を見て自分達もあのような動きが出来るようになるのか、と思う

「(やっぱ価値観、違うよなあ…ズレてるんだよね、私は)」

100人いれば99人は二人のコンビネーションを称賛するだろう

しかし、海瀉は違う、残りの1枠の人間だ

彼女からすればこの光景は二人の自己満足にしか見えない

レギオンとして策を練り、敵を追い詰め、その上で二人の連携で止めを刺すと決めたのならば納得出来る

しかし、実際は違う

策も何も無く、ただ自分達しか対応出来ないからと勝手に決めつけ都合のいいように自分達を使う

プライドが傷付くとかそんな下らない話ではない

レギオンというチームとしてこんなのは断じて認められないし、だからこそ海瀉は秋日の依頼に乗ったのだ

そんなふうと考えていると丁度戦闘が終わる

叶星と高嶺の所に皆が駆け寄り、姫歌はまだ息のあるヒュージをなんの警戒も無く止めを刺そうとする

「…油断するな、上!!」

「えっ?」

告
が、海瀉は上からヒュージの気配が迫っている事に気づき姫歌に忠告

後ろに引っ張る

そうして現れたヒュージはリリイに目もくれず、あろう事か倒した

個体を捕食しようとするではないか

「(ヒュージが共食い!? 確か同族は攻撃しないはず) …妙な事されたら不味い、速攻!!」

その光景に誰もが動けなくなる

捕食する光景など見たくない気持ちも分かる、がこれを見逃す事など出来ない

誰もが呆気にとられる中、海瀉一人だけ個体に攻撃を叩き込む

現れた個体への攻撃、撃破が駄目でも最悪捕食しているヒュージの体を攻撃で削り取る事を目的としたものだ

攻撃を叩き込んでいる間にもヒュージは捕食を続けてそれが終わると突然ヒュージがマジで包まれる

「…黒い…繭?」

灯莉はそう言い切る

海瀉も一旦距離を取ると

「高出力砲を搭載したCHARMかフェイストランセンデンスかAwakingを持つてるリリースさえいけば火力で強引にブチ破れるかも知れないのに…」

海瀉はそう呟く

この場にはその条件を満たすリリースは居ない

試しに数発弾丸を叩き込んで見る…が

「ダメージ無し…か」

効果は無さそうだ

その後だった

「皆、気をつけて!!」

叶星の声と同時に繭からヒュージが出現

その姿は先程とは大きく変わっている

更に

「な、なんか怒ってない?」

灯莉みたいな事は分からないけど…」

姫歌はそう言う

現れたばかりにして分かり易いほどに殺気を飛ばしている…しか

もその矛先は

「あのヒュージ、あーちゃんに怒ってる…食べる時も寝てる時も邪魔しやがってーって」

そう、海瀉である

自分の邪魔をされて怒るな…と言う方が無理な話だろう

人もヒュージもそれは同じ

普通ならば恐れるし、逃げるだろう

だが、彼女は違う

「邪魔されなくなかったら自分の住処に餌を持ち帰って食えってんだ馬鹿が

眼の前でヤバイことしてるのを邪魔しない奴なんていないってーの」

そう言いながら海瀉はCHARMを構える 機体と体の調子を確かめながら

「私、人であれリリイであれ、ヒュージであれ、売られた喧嘩は買う主義なんです」

「海瀉ちゃん、どうするつもり？」

「どうするも何も、戦う以外の選択肢ないじゃないですか

アレが私を狙うってなら好都合、その間に後退して体制立て直すなり作戦練り直すなり応援呼ぶなりしてくださいよ

こっちも見失わない程度の距離で戦いますので」

叶星の問に簡単に答える

逃げても良いが、灯莉の言うとおり怒っているならば猛攻が来る

それに全員を晒すぐらいならば自身が囷になり後退する距離と時間を稼げば良い

何処ぞのエレンスゲの隊長と違い、その為の方法も技術も身に付けている

彼女のレアスキルなど最たる例だ

「というか離れてもらわないと困ります

レアスキルの出力を上げるんで…合宿の時や合同作戦の時とは違います…巻き込まれたくはないですよね？」

「でも、この場に貴女一人を置いていくなんて…」

彼女の提案にも否定的

別に敵をここで食い止めると言っているわけではない
追うと言っているのにも関わらず、だ。

そんなに自分達以外のリリーの力を信じていないのだろうか

「いたいた。探したわよ…こんな事なら代役なんて引き受けるんじゃない
なかった…ふざけた命令出されるしもう最悪、東京都から特別ボーナスが
無きややってらんないわよ」

「そんな事言って、結構心配してたじゃないですか

やられて無いかってずーっと言っていましたよね」

「言ってたツス」

「煩いわよ、そのの二人!!」

そんな中、彼女達の前に現れたのは見慣れない制服を着た3人のリ
イ

その内二人は海瀉と同じトリグラフを手に持ち、一人は黒いモンド
ラゴンを持っている

「相模女子高等学館

生徒会特戦隊

隊長 松永遊糸

後ろが1年の石川葵と曾根舞弓

成り行きだけど助けてあげるわ」

自身の名を堂々と名乗る

現れたのは新たな敵と新たなリイ

この戦いはまだ終わる気配がない

第42話

突然現れた3人のリリイ

すると先程遊糸と名乗ったりリリイは

「私達で足止めするからアンタらはさっさと下がちなさい

…あ、海瀉は借りてくわよ」

そう言い放つと海瀉達と合流する

その直後、目の前の特型ヒュージがビームによる攻撃を仕掛けてくる

その攻撃の殆どが海瀉を目標とした攻撃

灯莉の話は本当だったようだ

「この位なら!」

だがそれを海瀉はすべて回避

技術だけでなくサブスキルも上手く使いながら的確に行う

予測し、高速で回避する

隙があれば攻撃する事も忘れず、だ

ヒュージは先程とは違い高速移動をしないため攻撃は当たる

ダメージがあるかは怪しいが

「速度を捨てて攻撃と防御を上げてきたか…あ、そうだ。」

進化した個体を見てそう呟く、そしてそのついでにヒュージの光線を何度か上空に打たせるように誘導する。

威力を見る限り攻撃力は上がっているし、それは厄介だがその分、

先程まで自分達を翻弄したスピードを捨ててしまっている

更に言うなら餌となる個体を持ち帰らずにその場で捕食した事も、

知能がある割には何処か抜けている

そのおかげで自分達は助かっている事を考えるとまだコチラに運はあるようだ

あのスピードと火力を両立されたら間違いなく自分達はやられていた

「なる程、後は向こう次第って事ね。」

1年二人は海瀉をフォロー

ソイツ取り囲んでタコ殴りよ!!」

遊糸はその光景を見た後、その意図を理解し、的確に指示を出す
遠くから見たら光の柱のようにも見えるヒュージの攻撃

土地勘のある人間ならば何処が発生源かすぐにわかるだろう

三人でヒュージを取り囲み攻撃を加えていく

取り囲むことでビームと触手による反撃を封じる形

海濱を狙ってくるらしいが取り囲む事で攻撃そのものを封じ込み
にかかると

ダメージは少ないかもしれないが攻撃の動作そのものを抑え込む
ことは可能だ

本来ならばココからノインヴェルト戦術に繋げるのがセオリー：
なのだが、行うという考えは無い

「コイツがあ有能力を持っていたとしたらここでのノインヴェルト
はリスクが高すぎる

耐久戦してヘルヴォル、一柳隊の到着を待つか?…まあ最悪逃げる
のも有りだよな」

似たような現象は二週間前にグランエプレ全員が目撃している

あの時はヘルヴォルや一柳隊がおり万が一の時のバックアップが
いたが今は違う

失敗した瞬間コチラの負けが決まる

遊糸達は高等部の戦場で実際に戦い勝利しているか、遭遇はしてい
なくとも他校からの情報を得ている筈。

ノインヴェルト戦術というのは使用者のマジとCHARMを著し
く消耗させる大技

増援や十分な補給を受けられるか分からないこの状況でノイン
ヴェルト戦術を行いマジやCHARMを失いたくはない

戦場でマジが尽きる、CHARMが壊れる事は死を意味する

ノインヴェルトを否定するというよりもこの状況で行うリスクが
高すぎるのだ

ならば援軍の到着を待つ。

来るための布石も用意した

最悪の場合はこの場を放棄し撤退する事も視野に入れなくてはいけない：のだが

後方で発砲音がする

それは援護射撃の音ではない

マギスファイアが発射された事からグランエプレはノインヴェルト戦術を行うと言う事が分かる

それを聞き海漓達は誰に言われるまでもなくグランエプレを支援

海漓も所属はグランエプレだろと言われるかもしれないがコチラに話が回ってこない所を見ると自分抜きでやるのは明白

抑え込みで消耗してる事に気を使ったのかもしれない

自分達も支援を行う：のだがどうにも嫌な予感しかない

全員万全の状態ではなく込めるマギの量も限られてくる

そんな事お構い無しに叶星と高嶺が高速でパスを回しながら接近、そのままフィンツシュヨットを叩き込む：のだが様子がおかしい

マギスファイアが当たる直前、シールドのようなものをヒューズが展開し攻撃を止めているではないか

「やっぱりマギリフレクター持ってたじゃねーか!!」

だが黙って止めるのを棒立ちで見ている海漓ではない

海漓は高速で移動しトリグラフを近接モードへと変形、そのままマギスファイアを強引に押し込む

「マギスファイア軽っ!!：大してマギ込められてないじゃんやっぱり」

CHARMでマギスファイアに触れるが案の上普段よりも軽い

通常の個体ならば仕留められた：かもしれないがマギリフレクターを突破するのは当たり前として直撃しても撃破までは行けなかったと海漓は考える

2週間前の時とは状況が違うのだから当たり前

「あー、こういう力押し、私の柄じゃないんだけどなあ!!」

自分には姉のような恵まれた才能は無い

姉ならば容易に突破できるであろうこの方法も海漓にとっては命がけ

間違いなく少しの間離脱しなければいけないレベルでマギは減る

しトリグラフも砕け散るだろう

だが、それがどうした

防がれた事に動揺し、棒立ちして敵に反撃の隙を与える位なら力押しだろうとリフレクターを突破しマギスファイアを特型に叩きこむのが最善だろう

補給を受けられるかわからない状況でこんな行動など自殺行為にも等しいが

この後のことを考えたらマギリフレクターを暫くの間使わせないようにする必要がある

リフレクターとの一騎打ち

特型もリフレクターの維持に集中してるのかそれ以外の攻撃が来ない

「こんの…!!とつととぶつ壊れろつてーの!!」

マギも全部注ぎ込みとにかく押し込む

自分にも姉のような才能があればこんな事せずともリフレクター。楽々突破出来たのかなと思ってしまう

もう技術も何もない只の力押し

暫くするとトリグラフが砕け散りその直後マギスファイアはリフレクターを突破ヒュージへと直撃する

勿論大爆発、マギが尽きた海漓も防ぐ手立てがないまま爆発に巻き込まれる…

「あつ、これヤバ…つてうわっ」

はずがない

「ま、後輩が頑張ったんだしこの位はやってやるわ」

「これダシにして何か奢らせるつもりですよね」

「当たり前でしょ、お礼はしてもらおうわ」

「相変わらずですね…まっ、いいですけど」

気に入りそうな店、ぶつ壊されてなきや連れていきます」

遊糸が海瀉の首根っこを掴み強引に救出

爆発する直前、素早く移動し彼女を離脱させたのだ

彼女の判断は適切だしあと数秒遅れていたら海瀉は間違いなく爆発に巻き込まれていただろう

特型ヒューズは大ダメージを受けたものの未だ健在

やはり仕留める事は無理だったようだ

遊糸は海瀉を引っ張りグランエプレのいる位置まで後退

葵や舞弓もそれに続く

ケイブが発生しスモール級が次々と出現する

それを確認すると遊糸が叶星達に

「で?どうすんの?」

コイツはCHARMが全損で戦力外。

あの特型はマグリフレクターの使用とノインヴェルトのダメージで暫く動けないだろうけど、その代わりにケイブからスモール級が次々と出てくる

引くならこのタイミングしか無いわよ。」

そのように告げる

自分達は助っ人、この後、何をするのかわからない以上確認するのは当然の事

状況が悪くなる為、撤退するならこのタイミングだと告げる

「引くって…この場を放棄して撤退するって事ですか!」

「嫌だよそんなの、撤退なんてしたくない」

「撤退なんてありえませんか!!」

第一ここでひめか達が逃げたら新宿はどうなると思ってるんですか!」

紅巴、灯莉、姫歌はその話を真っ先に否定する

しかし舞弓は彼女達に

「体制立て直してまた攻めればいいじゃないッスか

同盟組んでるヘルヴォルと一柳隊と合流してからでも遅くはないッスよ」

そのように告げる

自分達が逃げたら新宿は陥落するかのような言い方だがこの場にはないだけで都内には沢山のリリイがいる。

グランエプレとして考えてもヘルヴォルや一柳隊を迎えに行き再度仕掛けてもいいのだ

人数が増えればやれる事も増える

スモール級は特型ではないため普通に戦えば負ける要素のない相手なのだから、特型は逃げられてしまうかもしれないが近隣ガーデンが動きを把握しているため完全に見失うことは無いだろうとの予想もある

「(グランエプレの編成と消耗具合、1年生3人の実力と唯一の実力が全損して離脱する事を考えるなら撤退してヘルヴォルや一柳隊と合流するのがセオリー

だけど、叶星様と高嶺様の出身は…)」

「(頼むぞ…叶星さん…貴方隊長ですからね…これ以上のおかしな配は)」

葵も撤退するべきと考えるがそれと同時に上級生二人の出身を考えると撤退は無いことを悟り、海瀉はこれ以上の無様を晒すなど祈ることしかできない

「遊糸様、そして舞弓さんと葵さん。

ここまでの支援と貴重な助言、ありがとうございます。

ですが撤退はしません！

私は…この場にいる皆の…グランエプレの力を信じます。」

「信じる…ねえ、まあ、いいわ。

今の私は外征で今回もたまたま支援しただけ、グランエプレの判断を尊重するわ

ただ、海瀉はコッチが責任持つて安全圏まで退避させた後、武器持たせて戦線に復帰させる

都内に配備されてる非常用CHARMを取ってくるか他ガーデンにある余ったCHARMを借りてくるにせよ何も持たない状態で都内を一人で歩かせるのは危険すぎるし」

叶星の決断は戦闘を続ける事

遊糸は呆れながらも同意、だが海漓の後退の援護をする事には同意してもらえた

流石に何も持たずに戦闘に参加させるわけには行かないという判断は叶星でも出来たらしい

「ええ。お願いします。」

「後、葵は残していくから好きに使って

人数は一人でも多い方が良いでしょう？」

ヘルヴォル、一柳隊が来たら離脱させて頂戴」

「何から何までありがとうございます」

葵さん、よろしくね」

「お任せください。」

先輩達も気をつけて」

遊糸はその言葉を聞くと同時に海漓、曾根を引き連れその場から離脱

他の面々はヒュージと交戦する

海漓は遊糸に案内されとにかく走る

自分は何も持っていないのだ、足を止め、ヒュージ囲まれたらアウトである

勿論、スモール級は現れるがそれを舞弓が蹴散らす

「邪魔邪魔あ!!相模女子のお通りじゃ!道を開けるツス!!」

モンドラゴンを振り回しスモール級を薙ぎ払う

邪魔をするなど、言わんばかりの暴れっぷりだ

遊糸も自身のトリグラフを使いスモール級を確実に撃破していく
暫く走るとそこには都内のリリイや防衛軍が集まっていた

臨時の拠点といったところだろう

「戻ってきましたか

…あれ?もう一人は…」

出迎えたのは一人の防衛軍の隊員

遊糸はすぐに状況を報告する

「戦闘を行っているグランエプレの増援に回しました

こちらは問題ありませんが後ろのリリイが戦闘による負傷の他にCHARMが全損しています

怪我の手当と使用出来るCHARMの手配は可能でしょうか？」

「手当でしたら奥へどうぞ

CHARMは近隣ガーデンへの協力要請、もしくは所属するガーデンに依頼が必要ですネ…後ろの方、所属は神庭…ですか？」

「神庭女子です。」

「分かりました

確認が取れ次第連絡しますのでまずは手当を」

隊員は海瀉に所属を確認後、すぐに走り出す

それを見届けた遊糸は

「海瀉は少し休んでなさい

曾根も置いていくから話ぐらいは出来るでしょう」

「遊糸さんは？」

「同盟レギオンには口出せなくても都内のレギオンには口出せるからね

ちよつくら助けに行ってくるわ」

彼女の司令塔としての実力は本物だ

その力を発揮しに行くのだろう

こうして海瀉は不本意な形ではあるが戦線の離脱を余儀なくされるのであった

第43話

臨時の拠点で簡単な手当を受けた後、防衛軍の隊員からCHARMを渡される

とは言っても正式なCHARMではなく都に常時配備されているリレイであるならば誰でも使える非常用の第一世代CHARM、しかも近接専用の、だ。

これは簡易的なダミーコアと呼ばれるものが装備されており従来のCHARMのような面倒な手続きが無く使用出来る

起動時間や威力に違いがあるが、ないよりはマシ

神庭に来てからも数回だが触った事はある

本来ならば正式に使用出来るCHARMの方が良いのだが、この状況だ

何処のガーデンにも他校のリレイに渡す為の予備のCHARMは無いと言う

こればかりは仕方の無いことだ

そして、防衛軍の隊員から一枚の紙が手渡される

「それと、こちらに記されているのが非常用CHARMが配備されている建物や車両の一覧です

誰かに使用されている為全てにある…とは言いませんが…」

「場所が分かるだけでも十分ありがたいです」

海漓はそう言いありがたく受け取る

それを見ていた舞弓は

「行くツスか？」

「勿論」

そう言うと二人は防衛軍の方に挨拶を済ませ、戦線へと復帰する

幸いな事に通信は繋がっており、神庭からグランエプレが一柳隊、ヘルヴォルと合流し、特型を追跡していると教えられる

「揃いも揃って突撃突撃って…ヘルヴォルと一柳隊は消耗してないのか…」

海漓はボヤク

ヒュージを追うのは当然だ

しかし、今回は状況が違う

全員、連戦で消耗しており、さらにあの特型を相手に出来る余裕があるのだろうか

外征してきているレギオンや都内のリリイだって沢山いる

状況によっては彼女達を頼るのも手である

すると舞弓は

「まあ無理してでも倒しておきたいっていう考えはわかるツス。

人数だけ見たら十分可能：でもマギリフレクターどうやって越すツスカね?…」

「それ、私も気になってる

マギリフレクターでマジ使わせて自発までのインターバルの間にもう一撃叩き込むにしろ今の私達じゃ消耗しすぎて倒しきれない気がするんだよね：奥の手になりうるB型なんて誰も持ってないだろうし」

追跡したい気持ちも分かる

知能を持ち、進化するヒュージなどここで倒さなきゃ面倒な事になるなど分かりきっている

が、どうやって倒すのだろうか

先程目撃した通り、マギリフレクターを使えるヒュージだ

これにより一度は確実にノインヴェルト戦術が防がれる事が決まっている

次発まで時間があるためもう一度ノインヴェルト戦術を行うのがベストかもしれないが消耗している中で発動する攻撃で果たして倒し切れるのだろうか?

そんな疑問を持ち、自分達の頭では具体的な対策が浮かばないまま歩みを進める

方向的に新宿都庁がある方に自分達は向かっているらしい

すると途中で葵と合流する

付近には多くのリリイがいる

制服からして都内のガーデンに通うリリイだ

「あおいん！無事だったツスね」

「当然、海瀉さん、そのCHARM…」

「都の非常用CHARMを…ね」

流石に正式な機体はこの状況じゃどこも渡せないらしくて…」

「本当なら貴方とはゆっくりと話をしたいけれど、今はそんな状況じゃない…」

皆はこの先に向かったよ

私は一旦離脱してこの辺りでリリイの支援をしてたところ」

葵はそう言いながら付近を見る

制服はバラバラであり即席の部隊で有ることがわかる

しかし周囲にはヒューズがない事を考えると即席ながらも十分に連携がとれ実力者も揃っている事が伺える

ここは彼女達に任せて自分は都庁に向かうべきか…そんな風に考えていると通信機から司令部の指示が伝えられる

その内容は都庁に現れた特型ヒューズは一柳隊、ヘルヴォル、グランエプレの3レギオンで対処しろとの事

それを聞いた付近のリリイはざわめく

彼女達も3レギオンの消耗具合は目撃しており、あの状態で特型の討伐など無理だと悟ったのだ

しかも司令部からの指示が出たという事はあの獲物は3レギオンで相手をするという事

仮に失敗した場合自分達は手が出せ無いくことが確定したのだ

獲物の横取りなどくだらない事かもしれないしそんなの気になしてられないのだが、百合ヶ丘はこの手の命令に横槍を入れられるのを酷く嫌う

横取りしようものなら後から何を言われるか分からない

仮に横槍を入れたとして自分たちに負傷者や犠牲者が出た場合、それ見た事かと暫く言われ続ける

それは海瀉も知っている

その直後、この付近にもケイブが発生

大量のスモール級ヒュージが現れる

「さくつと片付けるか

コイツら通したら都庁で戦ってる連中がヤバそうだ」

海瀧はそう言いCHARMを構える

この群れを無視して都庁に行く事は不可能

レアスキルを使えば突破出来るがそれだとこの場にいるリリイに押し付ける事と同じ

そんな事をやるような性格ではない

舞弓、葵も同じく

「そんな間に合せて無茶して…やられてもしらないツスよ」

「スモール相手に遅れを取るかってーの」

「でも、本当に無理はしないでよ」

舞弓と葵は海瀧を心配する

「皆、来たよ!!」

誰かの声と同時に戦闘開始

作戦もフォーメーションも何もない

眼の前のヒュージを倒すだけの戦い

気をつけるのはリリイへの誤射だけである

「さて…あんまり乗り気はしないけど、これが一番確実だしな」

海瀧はそう呟くとすぐさまレアスキルを発動

そして、すぐさま高速移動

音を消し、気配を消し、殺気を消す

そしてヒュージの群れの背後に回り込むと同時に

「…まずー」

後ろから貫き、すぐさま抜く

手応えはある、

ヒュージの悲鳴に付近のヒュージもそちらを振り向く

数は3体

「2、3、4」

気づかせはしない

すぐさま踏み込み素早く仕留める

これで2体 残り2

倒れたヒュージの死体を利用し、飛び上がり一閃

3体目 残り1体

後は薙ぎ払う

この間も気配を消す

ヒュージにしてみれば姿の見えない何かにいきなり殺されたようなものだ

それはリリイも同じ

ヒュージが姿の見えない相手に突然倒される光景はある意味で恐怖を抱かせる

いまこの瞬間も海瀉は姿を消しながら相手の背後を取り、CHARMを突き刺し、切り払う

数が増えるに連れ、ヒュージも混乱する

それを周りのリリイが逃す事なく仕留めていく

海瀉はサブスキルを発動し流れ弾に当たらないように気をつけつつ一度後退

CHARMが破損したためだ

ここで一旦、ユーバーザインを解除

防衛軍の隊員から貰った資料を思い出し、CHARMを取りに行こうとする…が

「予備のCHARMだよな

はい!!」

一人のリリイがそう言いながら手渡す

そうは言うがこのリリイのCHARMも摩耗している

「これ、貴方が使うために確保したんじゃないの？」

流石に自分を優先したほうが…」

そう告げる

普段ならば有り難く受け取るが今は違う

自分の身は自分で守る事が求められる

下手な情けは自分を殺す事を意味する

すると眼の前のリリイは

「まだ他にもCHARMが配備されてるから私はそつちから持つてくるよ」

ここから近いから大丈夫」

都内のリリイだ

今年から東京に来た海瀛よりも場所には詳しい

ならば遠慮なく使わせてもらう

軽く振り、手に馴染ませたらまた先の作業の繰り返し

それはまるで、いや、暗殺者の動きそのものだ

ユーバーザインの：いや海瀛の本領発揮とも言える

更に言うならサブスキルにも覚醒している

精度はかなり向上している

これをやらす前に出て戦うのはこの動きをやる必要が今までなかっただけ

そう言う場面がきたら躊躇わずにやっただろう

ヒュージを倒し続けるが数名のリリイは違和感を覚える

「何か：手応えなさすぎッスよね」

前には出てくるけどこつちを倒すような動きをしてこないっていうか：」

「うん：ケイブから出てくるのはスモール級だけ

ミドルもラージも無し：どういう事？」

舞弓、葵は特にそう

こういう激戦を経験しているしケイブから現れたヒュージが現れるだけと言う事が無い事も熟知している

そうしていると、異変が起きる

都庁のある方向から突然咆哮が聞こえて来るではないか

「：殺気!？」

海瀛が感じるのは明確な殺気

それも確実にこちらに向かって、だ

そして、自分達の置かれた状況をすぐさま分析

ヒュージに押し込まれてはいないが逆に前に出てもない

悪く言えばこの場所にリリイが固定されている、と言うこと

「皆、散って!!なるべく広範囲に」

葵はすぐさま全員にここから散るように、それもバラバラに、だ
「急げ!!遅れたら死ぬぞ!!」

海漓もそれに賛同、付近のリリイに退避を促す

葵のレアスキルを考えればこの後に何が起きるのが視えたのだ
ろう

海漓や舞弓も置かれた状況から何が起きるのかを察し、付近のリ
リイも只事では無いと感じすぐさま散らばる

それと同時に

自分達が戦闘を行っていたまさにこの場所に都庁のある方角から
の砲撃とも言える威力のある攻撃が撃ち込まれる

それは近くにいたスモール級もお構いなし吹き飛ばしていく

リリイの悲鳴が響く

マジを使った防御が間に合った者、間に合わなかった者

間に合ったとしても飛ばされてきた瓦礫などがあつた者、様々だ
「スモール級を目印代わりに使った砲撃…味方すら巻き込むこのやり
方…

やったのはあの特型か…!!」

海漓は直撃は避けれたが飛んできた瓦礫が直撃し負傷、所々出血も
している

だが致命傷にはなっていないし体の感覚的に骨折や内臓にダメー
ジもない

戦闘続行は可能だ…だが

「いったた…都庁の本隊じゃなくてこっちにブチ込みつすか…なん
だってまた…」

「多分、丁度私達を見下ろせる位置にいるんじゃないかな

都庁で戦ってる一柳隊達はまだ視界に入っていないんだと思う」

舞弓も負傷しているが軽傷

葵は無傷…流石だと言える

だが周りは無事ではないリリイも多い

悲鳴や助けを求める声があちこちから聞こえる

「ここから撤退した方が良いと思うんだけど、どうかな？」

仮に2射目、3射目があったとしてまたここに撃ち込まれたら全滅もあり得ると思うんだ…

幸いな事にスモール級は吹きとばしてくれたしチャンスだと思っ
んだよね」

海瀧はそう二人に提案する

別に彼女が取り仕切る…なんて事をするつもりは全く無いが、現状だと何か提案しないと前に進めない

「そうツスね…流石にこの場に留まるのは危険ツス

あおいんはどうするツスか？」

「撤退しよう

それに東京のリリイがそう言う判断をしたなら私達はそれに従うべき

それがガーデンから与えられた会議に参加する条件だったし

それに、その判断は適切だと私も思うから」

「とりあえず付近のリリイにも伝えて来るツス」

舞弓、葵もそれに同意

直ぐに撤退へと移る

周囲のリリイの状態も確認しながら動ける者は率先して負傷者の回収、及び退路の確保をしながら撤退していく

途中背後から爆発音も聞こえるが無視

気にかけて動きを止めるような余裕は無い

そうして拠点まで撤退し、防衛軍は負傷者を度合いに別けて治療所へと搬送する

そこで聞かされたのは都庁での敗北と一柳隊、ヘルヴォル、グランエプレは別の所から駆けつけた松永遊糸率いる後続部隊が速やかに回収し、同じように拠点へと搬送されたとの事だ

第44話

再び拠点に戻って来た海濱達

そこで防衛軍の隊員から現状が知らされる

一柳隊の敗北と同時にヒュージの攻撃が激化しているという事と都庁に大量のケイブが出現、今は真夜中であるが、これの対処を夜通で行わなければならないという

そして、この時に初めてイルマだけでなく御台場のトップレギオンも外征で不在という事も告げられる

「(会議と外征が被るのはまあ、有り得なくは無いけど…何でこのタイミング?)」

そう、実は今回のようなケースは初めてではない

御台場もイルマも強豪ガーデン

東京だけでなく激戦区の地域に外征する事もよくある

会議と被ってしまったえば代理を立ててそつなくこなせるような体制も整備されている

が、気になるのは何故このタイミングなのかということ
御台場とイルマが不在の時など今回に限った事ではない
にも、関わらず何故このタイミングで起きたかと言う事

「(”誰がやったか”なんて正直どうでもいい…肝心なのは”どうしてやったか”だったっけ)」

古巣時代にこんな事を言っていた人物がいた

所詮自分達など下のガーデン、確信の情報などともに与えられるわけがない

ならば自分達で推理する必要がある

その時に大事な事として言っていた言葉だ

ミステリー小説などでよく用いられる手法だと言っていた

「(東京を叩き潰すだけなら今日である必要は無い

何故、今日発生させる必要があったのか…か)」

こんな事をする犯人など分かりきっているが、理由が分からない
東京の壊滅を目的とするなら今日である必要がない

それこそ会議が無く、戦力が手薄な日に起こせばそれで終わりだ。今日、起こした。その理由が分からない。そして海瀛にはそれを知るすべもない。ならばこれは一度忘れるのが最適だろう。今大事なはこの状況を乗り切る事。その為にも戦えるリリイが必要なのだが…

「たった5人…」

「少ないッスね」

そう海瀛や舞弓、葵を含めて5人

これが現在の戦力である

負傷して戦えない者、惨状を見て心が折れた者、やる気はあるが、夜戦に慣れておらず到底戦場に立たせるわけには行かない者

そうなった結果、この後戦えるのは5名のみ。

つまり新しい戦力はたった2名だけという事

御三家以外のガーデンのレギオンは5人編成だろと言われるかもしれないが、普段から訓練を積み重ねてきた5人と即席の5人では訳が違う

それでも戦うしか無いのも事実

ヒュージの討伐と臨時のエリアディフェンスの設置。そして、この後来るであろう他校からの増援や3レギオンが戦線に戻って来るまでの間、時間稼ぎをしなければならない

「二ついいか？」

どうしたものかと考えていると一人のリリイが海瀛に疑問をぶつける

「その、君は随分と相模女子のリリイと友好的に話しているが…相模は神庭とも提携しているのか？」

相模の提携先は確か…エレンスゲだろうか？」

舞弓や葵の制服を知っているのだろうか

だからこそその疑問だ

彼女達の通う相模女子高等学館は校風が似ているという理由だけ

で一葉達の所属するエレンスゲ女学園と提携を結んでいる

が、神庭とは結んでいるという話は無い

にも関わらずなぜ親しげな仲で会話しているのか気になったのだ
ろう

校風やリリイの性格を考えても共通する所など無いはず…なのだ
が

「あ、私相模の中等部卒です

神庭には今年から

その曾根さんとは中等部時代のルームメイトです」

海瀧は何事もなく告げる

そう、相模女子は彼女の古巣なのである

だからこそ舞弓や遊糸と気軽に話せるのだ

特に舞弓とはルームメイト

苦楽をともにしてきた悪友である

遊糸はある日しょーもない理由で知り合い、その後に実力を見込ま
れ特戦の予備メンバーとして活動していた

「何と…ああ、済まない

変な意味ではないのだ、その、随分と良識的だから、な

その、かなり荒れていると評判だろうか？」

「あー、いや、確かに荒れているのいますけど本当にそういう意味で不味
いリリイは転校させたり外征させません。

外征したり転校してくるリリイは比較的まともですよ、素行は、で
すけど」

それに驚く

そう、相模女子、鎌倉どころか全国的に見ても素行的な意味で荒れ
ているとして有名なガーデン

そんなリリイが目の前にいるが比較的まともそうで驚いたのだ
ろう

だが、そんなに不思議な事だろうか？

いくら荒れているとはいえ転校や外征でガーデンの外に問題児を
出せばガーデンの名前に傷が付き次年度以降の入学者に直結する

だから転校や外征の際には外にだしても問題ないのか、と言う事も判断される。

海瀛もその一人、今神庭に所属できているのも様々な理由があるにせよ、一番は他所に出しても問題なく対応出来ると判断されたからだ。ちなみに海瀛は知る由もないが、彼女の出身が相模だと言う事はこの後知らぬ間に3レギオン全員に共有される。

さて、そんな話はどうでも良く、今はヒュージの対処である。「私達はともかく貴方はCHARMどうするの？」

また非常用を使うつもり？」

そう、海瀛の一番の不安な点は実力ではなくCHARM、代わりの機体無く、非常用のCHARMを確保し使うしかないのだ。

先程までは上手く行つたが今回もうまく行くとは限らない
すると舞弓が

「あー、それなら心配要らないッス

この後の補給で何とかなるんで」

「補給？確かに補給部隊が来るらしいけど…」

「まあ見てのお楽しみッス」

そんなやり取りを行っているのと防衛軍の隊員から補給物資の到着が告げられる

そして、この場は一度解散

補給終了後に再度集まりそこから作戦開始となる

そして三人は歩きながら話す

「とりあえず今知りたいのは何で一柳隊が無警戒でノインヴェルト撃つたって事ッス

一柳梨璃が味方の警告を無視して指示を出すド無能なのかグランエプレが報告すつ飛ばしたのかの二択しかないッスよ」

「でもあの時、高嶺様と叶星様が夢結様と話してたし報告してるんじゃない…」

一年生だつて会話はしてたよ」

話題はやはり先程の戦闘での敗因

海瀉がCHARMを全損させながらもフィンツシユシヨットを何とか叩き込んだ光景を見ておきながら、次発までの時間内に止めを刺すこともせず、その後、平然とノインヴェルト戦術を使い敗北したという事実が引つかかる

こんなの無茶した海瀉が馬鹿なだけではないか

「んー、ねえ、叶星さんと高嶺さんどうだった？落ち着いてた？」

「え？まあ落ち着いてた…とは思うよ

私もファンタズムを使って支援してたし

まあ叶星様が落ち着きがないな…とは思ったかな

心ここにあらずっていうか、ずっと高嶺様の事をチラチラ見てた

高嶺様は高嶺様で随分と慌てるし

余にも酷いから聞こうとしたタイミングで一柳隊とヘルヴォル、増

援のリリイが来たから聞きそびれちゃって」

海瀉は冷静にそう尋ねると葵は当時を思い出し、伝える

なるほど、状況は理解できた

戦闘を行うにつれ慌てる高嶺と落ち着きのない叶星、もう答えが出る

ある意味想定していたがそれを相変わらずやると言う、もう救いようのない結果だ

「(クツソ、完璧にやらかしてんじゃねーか)あー…うん。

叶星様、100%報告忘れてるし高嶺様も自分の事で精一杯

一年生？マギリフレクターなんて忘れてるでしょ」

理由は直ぐに思いつく

マギリフレクターを完全に伝え忘れた

それしかないのである

「いやいや、

まあ一年生の子達はちよつと…いや、かなり怪しいけど叶星様と高嶺様はあの船田予備隊出身だよ？

そんなイージームスをやるなんて事は」

「流石にそれは有り得ないツスよ

素人じゃなくてエリートツスからね？

それに海ちゃん以外素人だとしてもヒュージの特性の報告を忘れるってそれ一番ダメなやつツス」

だがそれを二人は否定する

考えてほしい、御台場のトップレギオンの前身ともなる予備隊に所属し活躍していたリイが、駆けつけた味方にヒュージの特性の報告を忘れる…などありえなさすぎるのだ

仮に叶星や高嶺を貶めるにしてももう少しまともな嘘をつけ、と笑われるレベルの事である

「高嶺さんや皆の消耗が心配でマギリフレクターの報告とかそれ所じゃなかったんでしょ

多分早く終わらせてガーデンに帰りたいって事で一杯だったんじゃない？

叶星さん、優しいからさ

(嘘は言っていない。嘘は

多分高嶺さんの事でもう気が気じゃなかったのは事実だろうし。なら引けっと思っけど…)」

「隊員が言うって事はそう言う事…ツスカ？…いや、でも船田予備隊って相当なエリート予備隊で、そのメンバーが報告漏れ…いやいや…そんなアホな」

「確かに優しい人って言う印象はあるけど…そんな事…ある？

いや、うーん…」

確かに庇いきれないとはいえ所属するレギオンの先輩だ

友人とはいえ他校のリイにこちらの真実を話す理由も無い

まあ葵は感づくか楓に教えられるかの可能性はあるが、こちらから話す理由は無いだろう

それらしい理由を話す

叶星は心配性だと言う印象は持たれるかもしれないが、彼女の実績を考えれば曖昧な扱いになるだろう

まさに貯金である

そもそもこれの原因が叶星と高嶺のエゴにより引き起こされた最

悪の事態だ

嘘に嘘を重ねた事で起きた失態

海瀉は合宿前の面談で警告はしている

「マギリフレクターを見ても続行した判断は知らん

大方梨璃さんが続行するって言ったんでしょ

あの場で一番偉いのは百合ヶ丘の梨璃さんな訳だし

司令塔よりも隊長、副隊長の方が偉いからね…まあ、典型的な百合ヶ丘のリリイでしょ。リリイなら何でもかんでも出来るって思いがあってさ

全能の神にでもなったつもりなんじゃねーの、馬鹿クセエ」

「楓・J・ヌーベルは一柳隊だとただの司令塔止まり

せめて副隊長だったら止めてたかもしれないツスね

グランエプレやヘルヴォルは口なんて出せるわけもない」

海瀉と舞弓がそう話す

きっかけはグランエプレ

だが最後の止めとなったのは結局梨璃の判断だ

経験の浅さや今まで無理をしても他の隊員の実力で成功してきたのだから今回も上手く行くと思ったのだろう

姉となる夢結など論外

典型的な百合ヶ丘のリリイ、諦める、撤退するなど頭の中に無いだろう

「楓、自分の役割とか立ち位置に忠実で協調性もあるから…うん。多分梨璃さんの意思を尊重したんだと思う

ただ、レギオン全員の生還も頭に入れてたはずだし表情や態度には出さなくても止めるべきか続けるべきかずっと悩んでたと思う。

仮に撤退だったとしても成功する為の策は練ってたはずだよ」

葵は一柳隊で司令塔を務める楓をフォロー

確かにレギオンにおいては司令塔の役割が非常に大きい、要とも言える

だが彼女の性格を考えればレギオンの和を乱したりすることは無く、他人を思いやる事の出来る人格者

最後の最後まで梨璃の判断を尊重しその為の最善を尽くそうとしたと予想している

仮に梨璃が諦め、撤退を決めたならば速やかに撤退できる案も練っていたと言う

そうこうしているうちに自分達も補給を受ける番

予備の弾薬や夜戦用のバトルクロスなどが渡される

出所は恐らくヒビイロカネ

詳しい場所は定かではないが東京にもCHARMや弾薬の保管庫があると聞いたことがある

この時間に来るという事は恐らく進路の確保が一先ず完了したと考えていいのかもしれない

勿論片道切符の可能性もあるが、とにかくこの戦場の中無事に届けてくれた運転手には感謝しかない

「これが私の分…えっ、これって…」

そう言い海瀧は自身の機体を確認する

普通に考えてアステリオン、トリグラフは後日と考えていたのだが、それは裏切られる

「クルツジ!?!」

そう、そこにあつたのは最新式CHARMのクルツジ

アステリオンでも無ければトリグラフでもない

破格の性能を持っている機体をこのタイミングで渡してきたことに驚いたのだ。

中等部時代に試しに使ってみた事はあるからこの機体の凄さは分かっている

だが、この機体はトリグラフと違いまだ試験段階だったはずすると隊員が

「その…量産型の機体は全て出払ってしまってます…唯一残っていたのがクルツジだけとお聞きしました」

それを聞き納得

ヒビイロカネ製のCHARMは様々なリリイが扱う
そして、この事態だ

量産型のCHARMの大半が様々なリリイに手渡され、残ったのが
試験機だったというだけ

試験機を渡しても問題ないリリイという判断の為、海瀉にクルツジ
を渡したのだろう

マギクリスタルコアをクルツジに装着
起動させる

実はマギクリスタルコアは破損したとばかり思っていたのだがど
ういう訳かポケットに入っていたのである

考えられるとすればフィニッシュショットを叩き込み遊糸に回収
された時に彼女がコアを回収しその後海瀉を救助したという事にな
る

弾薬の補給を済ませた葵は海瀉を見ながら

「マギクリスタルコアの装着と初期設定、自分で出来るんだ

…もしかして整備も出来たりする？」

「ヒビイロカネ製なら。」

自分の使う武器ぐらい最低限の事は自分でやれって言われてきた
からさ」

その手際の良さに感心する

こう言うのはアーセナルの仕事なのだが海瀉達：相模の中等部経
験者は簡単な整備やコアの換装などは自分でやるように教えられて
きたのだ

そうこうしているうちに準備完了

全員補給と整備を終わらせ集合する

この後に待っているのは地獄とも言える連戦

暫く補給も受けられないだろう

急造レギオンとなる5名は最後の確認を行う

隊長や司令塔、基本的なフォーメーションを決める余裕はない
敵を倒す、その目的の為に各々が最大限の力を発揮するだけ

リリースではなく防衛軍の合図で作戦開始だ

こことは別の場所で遊糸も攻撃開始の合図を待っているだろう

「君たちにはこの後ヒュージを討伐してもらおう訳だが数が数だ

最悪通して構わん。スマール、ミドルまでは我々が何とかしよう…
だが」

「ラージは無理だからもしもラージが出たらそいつらを集中的にぶつ
潰せって事ですよね？」

分かっています」

そう、実はヒュージはリリースでなくても戦える…が、出来る事が限
られすぎている

軍の使うような兵器で倒せるのはスマール級、頑張ってもミドルま
でが背一杯

ラージから上は不可能

更にマギも使えないため一撃受ければ致命傷になる

それでも最悪通していいと言ってくれる軍の隊員には感謝しかな
い

まあ、海漓だけでなく全員それはわかっているし、いざとなればス
モールやミドルは通すだろう

「攻撃作戦は各所に通達

増援が到着次第随時向かわせる

だが補給同様の位の時間がかかるかわからないのも事実、それま
では…頼む」

「増援…私立ルドビコ女学院に要請は出していますか？」

「勿論だ。だが…どのぐらいで到着するのかは…」

葵の疑問に隊員は答える

今は真夜中で寝ている…と言うよりも今後の対策と人員の配置
等々の打ち合わせがあるのだろう

本格的な増援は明け方から順次到着することを想定していいかも
しれないが、ルドビコは来てくれれば御の字程度の認識だろう

その後もいくつか確認を行い自分達も配置につくために移動
海漓はクルツジを高出力砲モードへと変形させる

勿論ユーバーザインを発動し、姿を完璧に消した状態で、だ。

その後、防衛軍から攻撃開始の合図が行われる

それと同時に海濱は高出力砲でスモール級の群れに砲撃を御見舞
する

不意をつかれた攻撃にヒューズが混乱

そこをリリイが突いていく形だ

深夜の戦いが幕を開けたのである

第45話

時間稼ぎの為に言う深夜の戦い

即席レギオンの5名はヒュージを撃破していく…のだが

「分かっただけで凄いなこれ…」

「

「都庁のケイブを潰さないで厳しいツスカね？」

海漓、舞弓の二名はヒュージを倒しながらそう話す

全員戦えるという事や相手がスモール級主体と言う事もあり今の所はこちらが有利…のだが何分数が多い

リリイが一度撤退し、体制を整えている間にも都庁ではケイブから大量にヒュージが出現し今もなお続いているのだから無理はない

ちなみに陣形としては海漓、舞弓、葵の三名は前衛を努めとにかく削る

後衛の二名は打ち漏らしたヒュージの処理と万が一に備え退路の確保を努めている

敵陣に突撃し被弾に気をつけ、一体、一体、確実に倒す

トリグラフでは無い為いつもの早撃ちとは行かないがその分高速移動で素早く懐に踏み込み斬り伏せる、倒したらすぐに離れ次のターゲットを仕留める

「これの繰り返し…なのだが

海漓は少し違っていた

「(初めて使うのに手に馴染むし、いつもより集中出来る…深夜テンションってやつか?)」

普段と違うCHARMを使って夜戦を行っているのだ

昼間からの戦闘による体力の消耗を考えればスモール相手とはいえかなり苦戦すると海漓は考えていた

「が、今は違う

スモールとはいえヒュージを決して侮っていない

敵の数と自身のマギ、体力を考えれば数秒の判断の遅れが死につながる。

そんな中で現在の海漣は恐ろしい程に冴えていた
サブスキルによる簡易的な未来予知と高速移動
レアスキルでの攪乱、それらが全て噛み合っているのだ
攻撃のタイミング、相手の攻撃に対する反応、全てが上手くハマっ
ている

戦闘とは関係ないが夜遅くに活動する時は変なテンションになる
…というのはよく言われているが、その類なのだろうか
決して危ない薬に手を出しているとかそういう事は無い

「(油断せず確実に潰していくか…)」
海漣は油断だけはしないように、と心に誓い戦闘を行う
そうしていると、今度は上空に飛行型のヒュージが現れる
地上との連携攻撃…かに思えたのだが

「私達を素通り…?」
そう飛行型は海漣達に目もくれずひたすら前へ
「あれは私達が!!」

後衛の二名がそう告げる
確かにこの状況で飛行型を同時に相手にするのは少しばかり厳し
い

すると飛行型のヒュージは後衛のリリイに攻撃されているにも関
わらず反撃を行わない
無理矢理にでも先に進んでいこうとする
中には攻撃を掻い潜るヒュージも出る始末
そして、その直後だった

「…この声…例の特型の?…まさか!?!」
都庁の方向から聞こえる咆哮
例の特型ヒュージだろうか

ならばこの後には来るのは砲撃
「同じ手はくらわねーよ!!」
海漣すぐに付近のスモール級を斬り伏せ回避の姿勢をとる…が一
向に攻撃が来ない

それもそのはず、今度はマギスファイアのような球体が数発放たれる

…が

それは自分達の頭上を通過し先程通り過ぎた飛行型のヒュージに向かつて飛んでいく

「いや、おかしいっすよ。なんでマギスファイアが飛行型の通った軌道通りに動いて行くツスか!?!」

舞弓はそう叫ぶ

そう、放たれたマギスファイアはリリイではなくヒュージを追尾している

その直後、ヒュージの降下と共にマギスファイアが急激に落下、爆発音が響く

同じ光景が数箇所が発生

舞弓の言葉が本当ならば先のマギスファイアは飛行型を完璧に追尾したと言う事になる

そして、気になるのは爆発地点に何があったか…だ

防衛軍の拠点爆発した近辺にはなかった

もう少し離れた所に存在する。

「(私達を通ってきた道を…道…まさか!?!)」

そして、暫くした後、防衛軍より先の攻撃で人的な被害はなかったものの道路が破壊され増援や補給が不可能になってしまったと告げられる

勿論、生き残っている道を探すことも継げられた上で、だ。

当たり前の事だが海瀧…いやリリイは空を飛んで移動は出来ない

高く跳ぶ事は出来てもテレビに出てくる魔法少女のように空を自由で飛んで移動することは不可能

移動は徒歩や車両、もしくは航空機からの降下だ

道が無くなれば海瀧達は移動する事が出来ないし増援との合流も厳しくなる

「今の攻撃は…私達をここに留めておく事と補給、増援の妨害か?」

実際に攻撃箇所を見てはいないがヒュージからの攻撃だ。

無傷とはいかないだろう

多少なら問題ないがそれこそ、車両の通行や徒歩で移動する事が出

来ないほど破壊されてしまえば今後の作戦に支障がでる。

それこそ、リレイならば穴など簡単に飛び越えられるので問題は無い…が、ヒュージだつてその隙を逃す筈がない

飛び越えてる途中に狙い撃たれるのが見えている

「皆、一度下がろう」

状況を整理しようか!!」

葵の声を受け海濱達は一度戦線から離脱

可能な所まで退却する事を決める

ヒュージからの追撃があると思つたが不自然な程にない

道を潰したのだから逃げたとしても範囲は限られる、焦る必要がないと思つたのだろう

そのおかげで自分たちは後退出来たのだから文句は無いが

付近にヒュージがない事を確認したうえで、一度作戦会議を開くことにする

ちなみに遊糸も一度後退すると通信が入つた

「まさか道をぶつ壊して孤立させてくるとは…やられたツスね」

舞弓は呆れながらそう呟く

知能のあるヒュージの中でも今回ののは特別だ

常識外の行動やこちらの嫌がる事を的確に行ってくる

妨害や攻撃ではなく補給手段を的確に潰すヒュージなど今回が初めてだ

「それにしても頭良過ぎだ…いくら知能があるとはいえ、こっちがやられたら嫌がる事を確実にやってきやがる

ヒュージを的にしての砲撃と追尾するマギスファイア…固定砲台つて考えたら厄介だぞ」

「追尾…か」

「どうかしましたか?」

「ああ、いや、私の家族に通常兵器の知識が豊富な者がいてな

戦闘機のミサイルが敵を追尾する方法などを話していたんだ…

視覚に応じて使い分けるとかなんとか…なんだったかな…間違つてるかもしれない。生憎と話半分にしか聞いていなかったからな」

「視覚に忠じて…」

後衛を努めたりリイの言葉に皆が考える

軍隊の兵器の知識は乏しくこの場で答えられる者はいないが、視覚に忠じて使い分けると言う単語を考察

状況に忠じて使い分けると言う事だろう

そして先程と今回ののはその実験と言う事になる

「つまり都庁のケイブから発生してるヒュージは地上と空中で別々の能力…というか的としての役割が備えられてる

追尾の必要が無い範囲なら地上型、追尾して確実にダメージを与えたいなら空中型目掛けて放てばいいって事になるね…ヒュージの攻撃を通常兵器と同じ能力って仮定した上での話…だけど」

葵はそのように話を纏める

だが、これも仮定の話、今後の戦闘で新たな発見があるかもしれないがそうだった時はまた対処すればいい

後手に回ってしまった時は自分達に特型を討てという命令が来ない以上、向こうから仕掛けてくる以外に知る方法が無いのだ

そもそも自分達の目的は時間稼ぎ

その過程で得た情報は全て3レギオンにもたらされ、万全な状態で倒しに来るだろう

その為にこの戦闘もどこかでデータを取っているだろう

そう、時間稼ぎなど建前

本音は3レギオンに勝たせる為、特型のデータ取りを目的とした偵察部隊

この場にいるリイも、防衛軍も、その為の人員だ

下手をすれば今新宿にいるリイ全員がその為の人員の可能性もある

「まあ私達にしてみたらいつもの事なだけ…」

別におかしな事ではない

力のあるガーデンと無いガーデン

どちらのリイの生存を第一に考えるかと問われたら前者を選ぶ

のは当たり前的事

死にたく無いならヒューズを倒し生き残ればいい

今までだってそうだった。

神庭に来てからはそういう事がたまたま無かっただけ。

「(こういうの自殺覚悟とか言うけど違うんだよな…誰かがやらなきゃ行けない事をただやるだけ。)」

上層部だって何も嫌がらせやリリイ憎しでこういう事をやらせてる訳ではない…と信じたい

敵の手の内が分からないまま戦いに行くなど愚者のやる事

初見ならばともかく、姿を表し幸運にもその場に留まっている以上、能力を探る必要がある

敵が多いならばこれ以上の被害を出さない為に数だって削らなくてはいけない

遠くから機器で状況の観測はできるが奥の手を使わせる為にはやはり攻撃を仕掛けるのが一番だ。

誰かがやらなくてはわからない事

だから海瀉は参加した。

それだけである

やってられないなら自分もグランエプレの一員なのだから理由をつけて離脱すればいいだけ

それをしないのは単にこれが自分の仕事だと思っているからそれに

「(流石に特型とはいえはあれはアルトラ未満。

データさえわかれば余裕で勝てる…いや、勝てなきゃおかしい私が抜けても19人、しかも全員が強力なレアスキル持ちだしぶつちやけ要らないよね、私。)」

都庁の個体が強力な特型ではあるが、最も強力な個体と言われるアルトラ級ではない

特型とはいえあれはラーズもしくはギガント級だ。

マグリフレクター搭載を考慮しても3レギオン合わせ、海瀉を除いても後19人

全員が強力なレアスキルを保有し、使うかどうかは向こうの判断だが、この後自分達が集めたデータも渡される

実力者だつて揃っているし、回復する時間も作戦を建てる時間も与えられるのだ。

どつかの馬鹿^薬は責任感と自身のエレンスゲでの立場もあり早々に戦線に復帰しているかもしれないが、まあ良いだろう

とにかく、それだけの事をやるのだ。ヒュージを甘く見る以前に、勝て無ければおかしい

海漓一人抜けても痛くも痒くもない同盟レギオンと一人でも多くの人員が必要なこの役割

どちらを優先させるか、など聞くまでもない

自分達は特型のデータ集めと復帰するまでの時間稼ぎ

同盟レギオンは特型の撃破

与えられた仕事がちがうだけだ。

現状の纏めと簡単な休憩が終わり戦闘再開

応急的ではあるがマギも回復できた

体もまだ動く、ならば戦える

「さて、第二ラウンドと行くかあ!!」

そう言い海漓達は再び戦場へと向かうのであった。

第46話

その後も激戦となる

現れたヒュージをひたすらに倒し続ける

ヒュージの勢いは全く衰えない

相手がスモール、途中からはミドル級がメインな為無駄な被弾とマギの無駄遣いさえ避ければなんて言う事はない

とはいえ時間の経過と共にマギではなく体力面の不安は出てくる

鍛えているとはいえ不眠不休で戦うのは少しばかり厳しい

増援が来る気配もない

「御三家どころか都内のリリイはまだ来ないのかよお!!」

海瀉は怒りながらもヒュージを切り伏せる

確かに戦っているのは自分達だけではない

都内各地にもケイブやヒュージが出現している可能性は十分にあるし、そちらへの対処だつてしなければいけない事も分かっている

それでも遅すぎるのだ

都内のガーデンというのは御三家や神庭、エレンスゲだけでない

ガーデンの数だけで言うなら鎌倉よりも多い

どこの地区からも増援が来ないというのは流石におかしな話

対処に追われているのか、そもそも夜戦が出来ないから増援がむりなのか、弱すぎて増援に送れる程の力のあるリリイがいないのか

どちらにせよ最悪だ

勿論、すぐに増援が来るとは思っていなかったが、ここまで来ないのは想定外

もしかしなくても後衛を努めてくれている二名は東京ではレアケースなのではないかと思うぐらいだ

「でも撃破数稼げるからいいじゃないっすかー」

「いや、それはそうなんだけどさ…」

舞弓もモンドラゴンを起用に扱いながらそんな事を告げ、海瀉は反

リリーのヒュージの撃破数はマギクリスタルコアを通じ記録されており、撃破数や様々な情報をを基にリリーとしての評価をされるヒュージを多く倒すから偉い：という訳ではないが0よりはマシ
そもそも、この非常時にヒュージの撃破数が限りなく低いと

『貴方達はこの非常時に外征先の新宿でヒュージと戦わずに何してたの？』

とやんわりと教導官や生徒会長の秋日に尋ねられかねない

神庭はエレンスゲや古巣の相模のような環境ではない：が、何もしなくてもいいという事ではない

よく神庭は校風が緩い等と言われるが校風や規則を考えれば何重にもオブラートに包みガーデン側から出撃を強制しないが、言ってる事はエレンスゲや相模と同じなのだ

いや、求められる覚悟の度合いで言うならばエレンスゲよりも格段に上だ。

それにグランエプレは神庭のトップレギオンで彼女はそこに所属するリリー

戦闘でのヒュージの撃破数は多いほうが良いに決まってる

合同レギオンでもそれは変わらない

撃破数を稼いでおかないと、遊んでたのか？と言われかねない

ただでさえグランエプレは少々危うい立ち位置

真面目に戦い撃破数を稼ぎました、と内外にアピールする事も必要なのだ

：それをやるのが海滴だけなのが非常に問題ではあるし、秋日や同じく生徒会の藤乃や大人しい鈴夢からも心配されているのだが、それは別な話

「大物、来たッスよ」

「はっ」

舞弓がそう言い指を指す

そこにはスモール、ミドル級の群れ：なのだが奥に数体明らかに大ききさの違うヒュージが数体

「ラージ級…!!」

5人制レギオンならばボスクラス扱いのラージ級、それが複数体本来ならば逃走も視野に入れなければならぬが、ここで引いてもヒューズが都内に入り込んでくるだけ

それに先の砲撃もある

的になりうる個体を引き入れるなどできるはずもない

「ラージ級、私が相手するよ

流石に周りのスマール、ミドルは誰かに処理してもらわないと困るけど」

海瀉はそう言う

ラージ級複数体が相手だ。

策は有るし、複数相手の立ち回りも問題はない…が、流石にラージを相手しながら同時にスマール、ミドルの相手は無理、出来なくもないが万全を期すならばスマール、ミドルの対処は任せたい

そのため付近の相手を頼む

「雑魚狩りはこっちでやるツス

後は後衛の二人でなんとかなる…かな あおいんはどうするツスカ?」

「私は海瀉さんと同じ様に前に出るよ

流石に一人だと危険すぎるから」

葵は海瀉と共に行動する事を選択する

彼女のポジションは海瀉と同じA Z

まあ、レアスキルや技量を考えたら海瀉など足元に及ばないレベルの強者なのだが

「よろしく

こうして誰かとペア組んで敵陣に突撃かますの久しぶりだなー」

「え? そうなの?」

「普段は私一人だから。

上級生はあの二人でペア固定してるからは私等となんて意地でも組もうとしないし

…まあ、御台場の動きについてこれないっていう評価を覆せない私

等が悪いんだけど」

「そ、そうなんだ…」

(グランエプレ、何かおかしいような…)」

実力に差こそあれ誰かと肩を並べ敵陣に突撃するなどそれこそ中等部以来である

神庭に来てからは海瀉が単体で突撃し後ろから灯莉達に支援してもらう形が基本

叶星や高嶺と肩を並べ前に出たことなど一度もない

高嶺が前に出るときは叶星も共に前に出る形を取る

それを聞いた葵は疑問に感じる

実力の差は抜きにしても突撃するリリイを同じ様に前に出して支援しないなど聞いたことがないからだ

「二人共、ヒュージ、来るッスよ!!」

「オツケー!」

舞弓の言葉に気を引き締め二人はラージ級へと向かう

スモールやミドルは全て舞弓達に任せ自分達はラージ級を仕留めるのだ

「葵さん、私レアスキル普通に使っていいよね!」

「勿論!」

走りながら海瀉は葵に確認をする

今の言葉を聞くに彼女は海瀉のレアスキルが何なのかを知っているようだ

まあ、遊糸や舞弓、それに中等部から相模にいた生え抜き組に教えてもらったのだろう

「じゃ、遠慮なく」

あ、分身は撃ち抜いても大丈夫だからね」

そう言い彼女はレアスキルであるユーバーザインを発動し姿を消す…のではなくの自分と葵の分身を作成し、四方に配置する

ヒュージはその光景に驚き視線をそらす

ヒュージでは分身と本物を見分けるのは厳しいだろう

その隙を逃す二人ではない

手始めに目の前の個体をそれぞれ一体撃破

ラージ級相手だ、正面から戦えばこうは行かないのだが

相手の不意をついたり、死角から急所に向けて強力な一撃を叩き込めれば簡単に倒せたりする

こう言うやり方は地味や卑怯、陰湿等と批判され、馬鹿にされるがこれが確実な方法

生憎と海瀆にはラージ級を真正面から、正々堂々と戦って捻じ伏せるような実力は無い

自身のレアスキルやサブスキルで相手に隙を生じさせ、そこを確実に付く

海瀆とて、スモールやミドルならば真正面からでも行けるが、ラージを複数相手するのに真正面からやるのは流石に無理

単純作業の繰り返しになるが、こうして倒していくのだ

当然、ラージ級からの反撃も複数方向からくる…のだが

「特型じゃなきゃ攻撃パターンは全部頭に入ってる!!」

それらを全て回避

ついでに回避先に運悪くいたスモールやミドルを回避した攻撃に当たってることによって数を減らす

今この場にいるヒュージは全て普段から東京に現れてる個体

神庭に来てからの訓練や自主練で全ての攻撃方法は頭に叩き込んでいる

モーション一つたりとも見逃さない

目をつぶってでも出来…はしないが集中力を高めれば可能だ

一方の葵はレアスキルと自身の技量を使い、華麗に戦い敵を撃破していく

彼女のレアスキルはファンタズム

希少価値の高い、強力なスキルであり、海瀆の持つサブスキル、虹の軌跡の上位互換だ

それ故にファンタズムが強力である事はサブスキルとはいえ所有している海瀆が一番良くわかつている

幼少期からリリイとして育てられ、自分達の世代では最強格のリリイだ

文字通り住む世界、見えている世界が違うリリイだ

「(他所は他所、ウチはウチ)」

凄いと思えど嫉妬は無い

むしろここまでの差ならば葵を称賛するレベル

それにラージを複数相手にしているこの状況でつまらない嫉妬などしている場合ではない

とはいえ彼女も自身と同じトリグラフ使い。今度は自分もトリグラフを使った上で共に戦いたいとは思ってしまおう

そんな事を考え海漓はラージを対処する

分身を生み出し生じた隙でしとめたり、姿、気配を消した上で完璧な不意打ちを決めてみたりと倒し方は多種に渡る

：海漓も本当ならばこんなことせずにお得意の早撃ちで数を削りたいのだが、生憎と今使っているクルツジは射撃モードを早撃ち仕様に改造していない

あれはトリグラフだからこそ出来る芸当だ

中等部時代に使っていたアステリオンとも違うこのCHARMで戦果を出すとしたらこれしかないからやっている

クルツジに搭載されている高出力砲をお構いなく撃ちたい：が東京には現在百合ヶ丘がいるため、お構いなしに連打しようものならば面倒くさいことになるためそれも出来ない

なぜ、百合ヶ丘がいると面倒くさいか、というと簡単に言えばモラルや百合ヶ丘の常識、百合ヶ丘の正義を平然と振りかざすからだ
「(神庭に迷惑かけるわけにもいかないし)」

海漓一人だけならば別に百合ヶ丘と揉めようとしてもいいのだが流石にガーデンや生徒会に迷惑をかけるわけには行かない

そうなるや自然と地味な戦い方になってしまうのだ

「縛りプレイ出来る程強くないんだけどね、私」

そんな事を呟き同じ作業を繰り返す

二人がラージ級を対処している事や葵も海漓と同じ様にラージ級

の攻撃をスモール級に当たるように誘導し援護しているため、舞弓達後衛組も楽に戦えているようだ

とはいえそう簡単に行かないのもまた事実

ラージ級は目処が立つがスモールやミドルは相変わらず都庁にあるケイブから出現しこちらへと向かってくる

「次から次へと…!!」

そんな時だった

「面白い状況になっていきますわね

貴方達の夜遊び、わたくしも混ぜてもらっていいかしら？」

そういいながら目の前のスモールやミドル数体を全て一撃で粉砕し海瀉の前に現れたのは神庭のリリイ。

その人物に海瀉は心当たりがあつた

「ふ、藤乃さん!？」

「どうしてここに？」

「石塚藤乃様？生徒会防衛隊の？」

その正体は神庭の生徒会防衛隊に所属する石塚藤乃

神庭からの増援もあり得る…とは考えていたがまさか藤乃が来るとは思わなかったのだ

彼女に気づき一度こちらに合流してきた葵もその存在に驚く

「後輩達が文字通り命を掛けて戦っているのを知っている中で黙って指をくわえて見てるリリイが神庭の何処にいるのですか？」

わたくし達、そんな薄情者に見えていたのかしら？」

そう言い後ろ視線を向ける

その先には彼女以外にも神庭のリリイが数名来ており、後衛の支援を行っている

「あー、いえ、そんな事は…」

それよりも生徒会の仕事は大丈夫なんです？」

私そっちの方が心配ですよ」

海瀉としたら薄情者とは思っていない為、そこは否定する

しかし、藤乃は生徒会の人間だ

神庭でやる事も沢山あるし貴重な戦力だ。

少なくとも簡単に寄越せる訳がない

「秋日さんからの指示でここに来ているから大丈夫。

さて、海瀛ちゃん、もうひと頑張りできるかしら？」

そこにいる葵ちゃんも大丈夫よね？」

「あ、はい。」

「私も大丈夫です」

「そう。なら良かった

菘窪の戦いは少々退屈でした

ここのヒュージ達は骨のある個体だと有り難いのですが」

秋日の指示でここにいるという事は少なくともなんの計算も無し

にきていると言う事では無いらしい

彼女は海瀛と葵がまだ戦える事を確認すると、

ヒュージと対峙し突撃していく

先程、退屈などと言ったがそれは藤乃なりの嘘

状況に差こそあれ菘窪でも連戦だった

それでもそんな事を平然と言える事が彼女の實力の高さを物語っ

ている

戦いは、まだおわりそうにない

第47話

時は少し遡る

神庭の生徒会室では3名のリリイ

生徒会長の本間秋日を筆頭に生徒会の石塚藤乃、塩崎鈴夢が緊急で会議を開いていた

新宿のエリアディフェンス崩壊をきっかけとした騒動は収まる事はなく深夜になっても状況は変わらない

そんな中での合同レギオンの敗北と時間稼ぎを目的とした有志連合による攻撃作戦

萩窪に出現したヒュージは生徒会防衛隊を筆頭としたリリイの活躍により一先ずは撃退出来たが被害状況の確認も終わっていない。

そんな中での新宿の状況

そんな新宿の状況は流石の秋日でも処理できない程の情報量である

「海滴さんは有志連合に参加

グランエプレ5名は防衛軍からの報告だと無事らしいけど、音信不通：そうなるかと戦線にも復帰していないわね

藤乃、叶星か高嶺と連絡ついた？」

「駄目ですわ。反応なし

念の為一年生の持つ通信機にもガーデン側から呼びかけてみたけど応答はないそうです」

秋日の質問に藤乃は答える

報告があつた後、秋日は直ぐに藤乃に対し上級生の叶星か高嶺に連絡を取り状況の報告をするように指示を出したのだが、どういう訳か全く反応がない

神庭の教導官も一年生の持つ通信機に連絡を入れたが反応がない繋がらないのではなく応答が無い

つまり全員通信機が手元に無いことを意味している

戦闘中にそんな事になるのはあり得ないため自然とグランエプレの5名は戦線に復帰していないという事になる

海瀛は作戦中であるため、余計な連絡を入れる事になり、それは躊躇われるのであえて外した

「(私達はどうか動くべき…グランエプレを新宿から撤退させる?でも代わりは?)」

秋日は悩む

グランエプレが機能停止しているならばすぐにでも撤退させるべき

しかし、その穴を埋めようにもグランエプレと同等のレギオンなど神庭には無い

自分達を新宿に生徒会防衛隊を派遣してしまえば萩窪に穴が開くそんな事を考えていると藤乃が急に

「わたくし、今から海瀛ちゃんになります。」

「はい?」

「えっ?」

そんな訳のわからない事を言い出す

藤乃、少し、いやかなり変わっているリリイなのだが今回もまた突拍子の無い事を言い出す

『リリイとは品格では無く結果が全て』それが海瀛ちゃんの本質ですわたくしも今から新宿に行つて結果を出してきます」

「ちよつと、待ちなさい。神庭は?萩窪の防衛はどうするの!?!」

流石に秋日もそれは止める

藤乃は生徒会防衛隊の一員だ。その任務は萩窪を守る事

防衛隊の正規の人数自体藤乃含め3人とレギオンとは言えない人数であり、有事の際は有志の実力者に助っ人として入ってもらっているのだ

そんな中で藤乃が抜けければ残るのは秋日と鈴夢だけ

二人とも強いが、抜けることにより負担が増える事は流石の藤乃でも分かっている

しかし、藤乃は止まらない

「ここに引きこもって萩窪を守っていたって騒動の根本を叩かなければ意味がありません」

御三家が使い物にならない現状ではむしろジリ貧です。」

そのように告げる

そして、その考えは秋日には心当たりがあった

「それも、海瀉さんならそう考えるって事？」

「はい。」

お二人共否定するかもしれませんが、貴方達二人は似ています
違いがあるとすればここに来たタイミング、それだけです。」

その考え方は海瀉の思考ではないかと指摘し藤乃は肯定し、

さらに言葉を続ける

彼女の言葉を聞けばきつと、秋日も海瀉も否定するかもしれない
が、二人の思考は似たところがある

幼少期から神庭で学び多くのリリイを見てきた藤乃にしてみれば
二人の違いなど中等部から神庭に居たか、居ないかの違いだけであ
る。

レギオンがグランエプレと生徒会防衛隊と別なのだって秋日も内
心それに気づいているから春先の段階で彼女を生徒会に誘わず、非常
時の助っ人と言う立場にしたと藤乃は考える

「神庭の未来を考えたなら海瀉ちゃんをこんな所で失うわけには行き
ません

勿論、彼女の悪評を広める訳にも。」

さらに彼女は続ける

海瀉の実力ならば命を落とすという事は考えにくいかもしれませんが万
が一と言う事はある

それに藤乃も何だかんだ海瀉の事を気に入っている。

神庭の為にも彼女には生き残ってもらう必要があるし、仮に生き
残ったとしても黒い噂のあるリリイとして過ごさせる訳にも行かな
い

残りのグランエプレは？と思うかもしれませんが現状で最も命の危機
に晒されているのは海瀉だ。彼女を優先するのは悪い事ではない

「…分かったわ。藤乃の新宿外征を許可します。

海瀉さん達有志連合の支援を行う事。

後は過去に外征経験のある2年生数名なら連れて行って構わないわ」

それは秋日も考えていたこと

生徒会長としても一人のリリイとしても海瀉一人を悪役にする訳には行かない

それに藤乃だって素行はともかく生徒会の肩書のあるリリイだ

万が一の時には役に立つ…筈だ

「ありがとうございますー」

お土産も持って帰ってきますので」

「頭の痛くなる報告を持って帰ってくるのは止めてほしいわね」

藤乃は笑顔で生徒会室を後にする

海瀉もそうだが、藤乃が外征先でやらかさないことを秋日は切に願う

そして、出ていった藤乃を見送った秋日と鈴夢

鈴夢は秋日に尋ねる。

「良かったんですか…藤乃様を外征させて」

「本当は良くないんだけど…まあ仕方がないわ

流石にこのまま黙って指くわえて見てる事も出来なかったから」

秋日もこれが良くない事は分かっている

だが現状、外征先で海瀉以外誰も戦っていない中でガーデンとして

何もしないという判断をするほど秋日は非情ではない

「お二人は…確かに似ている…かもしれない」

「どんな所が似ているって思うの？」

「勝利を目指す事…後は…戦ってる時の雰囲気…でしょうか

他のグランエプレの皆さんとは少し…いや、かなり違います

私も海瀉さんのように…なれたなら…」

「鈴夢は鈴夢らしく振る舞えばいい。

海瀉さんになろうとする必要はないの」

鈴夢から見た海瀉の評価を秋日は受け止める

悪い評価をしていなかったのは何よりだ

レギオンは違えど仲違いなどして欲しくはない

その上で彼女らしくあれば良いと助言を行う

「これで、有志連合の方は大丈夫…の筈

夜明けと共に教導官が一人新宿へと向かう手筈になっている

そうよね？」

「はい…新宿の状況確認とグランエプレの安否確認も兼ねて…ですが
エレンスゲからもヘルヴォルを担当している教導官を派遣すると
先程神庭に対して連絡がありました…」

そんな話をした後二人はすぐに切り替える

まだまだやる事はあるのだ。

この状況を受けて神庭、エレンスゲの2校は教導官を派遣する事を
決定

状況と意思の確認が主だ。もしかしたらガーデンとしての意思を
伝える場合もあるだろう

だが、肝心の一校の名が出て来ない

「百合ヶ丘は？あそこは教導官認可制…私達以上に教導官に責任があ
るし、派遣する必要があるはずよ」

「百合ヶ丘は…何も…現場に一任と言うことでしょうか？」

「(都の司令部に百合ヶ丘の関係者がいるの？いや、それにしても無責
任すぎる…リリーの権限が他校に比べてかなり強いってのは噂で聞
いた事があるけれど…それは知識と経験が豊富なトップレギオンだ
けと思っていた。一般のレギオンもそうになっているって事？)」

百合ヶ丘は支援はするが静観の姿勢をとるようだ

秋日は不審に思う

百合ヶ丘のような強豪ガーデンのレギオンは、ガーデンが主導する
のではなくリリーが自由にメンバーを選び、それを教導官が許可する
という形を取る。

百合ヶ丘の体制は分からないが、一柳隊も例にもれず許可をした教
導官がいるはずだ

理事長や理事長代行、学年主任、クラスの担任

誰が許可をしたのかは分からないが、必ずいる

どのレギオンもそれは同じ

遠方ならば仕方がないが鎌倉から東京など戦闘を回避しながら来れる距離

今年結成されたばかりのレギオンが対処する事態と言う事も考えれば来てもおかしくはないのだ

噂だが百合ヶ丘は他のガーデンと比べリリーの権限がかなり強く、ほぼ全てリリーだけで決める事があるらしいが、それはトップレギオンだけと思っていた

今年結成された一柳隊もそれらと同じ扱いをされていると言う事はガーデンから相応の信頼を得ているという事になる

確かにメンバーを考えれば強力なのだが、それだけでトップレギオンと同等の扱いを受けるのだろうか？

一柳隊は百合ヶ丘のトップレギオンとして認められる条件をまだ満たしていない筈だ

条件が緩和されたという話も聞こえてこない

「秋日様？」

「いえ、何でもないわ。」

まだ動きが無いとはいえ戦闘はまだ続く訳だし鈴夢も気を抜かないで。」

ここで考えても仕方がない

まずは神庭として萩窪を守る事が先決なのだから

第48話

神庭でのやり取りなど知らない海瀉は葵や増援としてやってきた藤乃と共に前線で戦った

「海瀉ちゃん、ヒュージは早いもの勝ちでいいかしら？」

「え、ええ。」

「では数を稼がせてもらいます」

藤乃を筆頭とした神庭からの増援の働きは非常に大きく、最初から参加していたメンバーの負担も軽減され、効率よくヒュージが倒されていく

特に藤乃の働きは大きい

マギと体力が十分な事もあるだろうが、凄まじい速さでヒュージを倒していくのだ

しかし気になる事もある

「(藤乃さんってあんなに数多くのヒュージ倒すことに執着するタイプだったっけ?)」

藤乃はヒュージを倒すのは当たり前として、数よりも倒し方にも変なこだわりがあるタイプ

少なくとも数をひたすら稼いで行くタイプではない

何かあったのだろうか？

速攻…というよりまるで競争と言わんばかりの倒し方

誰か競う相手でもいるのかと思ってしまう

変わり者としても有名な藤乃だ

また何か突拍子もない思いつきをしたのだろうかと思ってしまう

「(まあ藤乃さん達に頼りっぱなしになるつもりは無いけど)」

救援に来た藤乃達に全て任せるつもりはない

競う…と言う訳ではないが海瀉もペースを上げていく

増援が来たから自分は手を抜くなどと言う事はしない

その後もヒュージをひたすら倒し続ける

その途中、ルドビコやエレンスゲのリリイも増援として到着し海瀉達は一度後退する

その途中気になった事が会ったとしたら

「あの紫のアステリオン：使うリリイってあんな幼かったか？

写真でみたときはもう少し大人びてた印象あったけど…」

ルドビコ女学院からの増援として現れたリリイの一人が持っていた紫のアステリオン

色だけなら珍しくはない：があの機体は量産ではなく特注品

形状が量産型とは微妙に違うのだ

中等部時代に量産型と特注品の見分け方や特徴というのは教わっていた

アステリオンに限らずヒビロカネ製は全てである

所有者とはあった事も話した事も無いが顔だけならば写真で見たことがある

大人びていた印象を持ったのだが、今合ったりリリイとは違う

卒業と同時に引き継いだのか、それともそういう事があって引き継いだのかは分からない

知るつもりも無い為此の話はここで終わり：ただ、あの機体はかなり高性能だとは聞いていた

今の所有者がCHARMを使いこなしているのか、それとも機体に救われているのか：は気になる所

増援に来たルドビコのリリイからの視線を感じるが振り返る必要もない

今は撤退する

生きていれば再び戦場で出会えるのだから

そんな事がありつつも海漓達は後退してきた

すぐにでも休憩したいがその前にやる事がある

「忙しい所、すいません。」

ここ以外の被害状況はどうなってますか？」

彼女はすぐ近くにいた防衛軍の隊員に状況を尋ねる

夜明け前の戦闘開始前に自分達と会話をした隊員だ

「都庁近郊から現れたヒューズは君達の働きのお陰で侵攻は抑えられている

…が、都内に発生した複数のケイブ…これに関しては各ガーデンで対処してもらっている。被害はかなり抑えられていると聞いているな」

それを聞き安堵

「どうやら自分達が戦った意味は少しはあつたらしい

防衛軍や司令部にやってもらったけど意味が無かった等と言われた時にはどうしようと思っていた

そんな事を言うのは名門ガーデンの連中だけで十分だ。

都内に発生したケイブや現れたヒュージに関してはもう各自対処してもらおうしかない

「ただ一つ気になる事が

特型の対処を命じられたレギオンがどのような動きをするのか：我々はまだ知らされてなく、果たしてこの場で彼女達を待っていいのか」

「海瀆ちゃん達の現在地や都庁周辺のデータは司令部を通じて伝わっているのでは？」

現に私達神庭のリリイはそれらの情報を元に増援に駆けつけましたよ？」

隊員の言葉に藤乃や神庭のリリイは疑問に思う

勘でここに来た訳ではない

萩窪を出発し新宿に到着した際、司令部から海瀆達のいる場所を教えられ、それを頼りに駆けつけたのだ

合同レギオンも同じ

周辺のヒュージは倒したし今もなおルドビコやエレンスゲのリリイが戦っている

その場所さえ教えればいいだけ

なのだが

「あー、これいつものやつかも…」

この非常時でもやっちゃった？」

「ありえるツスね…んーこれならあおいんを早めに切り上げさせて合同レギオンに合流させた方が良かったツスカね？」

彼女と舞弓だけは何が起きたのかを把握する

防衛軍の隊員や藤乃達、それに葵も良く分かつてはいなさそうだ

「どういう事？」

「この戦闘は実質的に百合ヶ丘が取り仕切ってるんでしょ？」

なら多分私らの事とか集めたデータとか無視してるよ、多分」

葵の間に海瀛は答える

舞弓がそこに補足する

「百合ヶ丘って基本的に他所のデータとか信用しないツスよ

あおいんの出身のメルクリウスとかグランの上級生の出身の御台場を経由ならともかく相女や神庭の話なんて聞くわけもないし

騒動の場所も新宿…信憑性とかルドビコのお膝下って考えたら信用はされないツスよ」

そのように伝える

これに関しては実は裏でよく言われていること

百合ヶ丘は世界的名門校なのは事実だがそのせいか、他所の集めた情報は一切信用しないという素振りをよく見せる

海瀛も中等部時代に百合ヶ丘のそういう話は聞いた事がある

名門のプライドと言うやつだろう

さらに今回の場合、場所が新宿というのも良くはない

百合ヶ丘を陥れるためと勝手な想像をされた可能性も十分ある

「私や曾根ちゃんも中等部からリリースやっつてるとはいえ、百合ヶ丘の連中に聞き入れられるほどの実績は無いから…」

私なんてグランエプレですら話聞き入れてくれない事多いし…

聞き入れるとしたら、葵さんや実績ある遊糸さんで何とかって感じじゃない？」

「あおいんが确实ツスよ…ってか海ちゃんマジでどんな扱い受けるツスか？」

中等部からの生え抜き組や上級生は皆言ってるツスよ

御台場組の上級生はともかく経験者じゃなくて素人にサブリーダーやらせたり只の便利屋みたいにさせられてたり…何かあったツスか？」

「まあ、高度な政治的理由って奴

中々に大変なんだ、ウチ」

海瀛はそんなふうにはやく

言ってる悲しくなるが結局は実績重視

確かに海瀛も中等部で実績と経験をつんだがどうしても百合ヶ丘や御台場と比較すると大きく劣る

いや、何個かは誇れるのもあるのだが中々に言いにくい事もあり知ってる者は限られている

結局力のないやつの話など誰も聞いてはくれないのだ

舞弓の話も事実

相模の面々も海瀛の事は気にかけており、グランエプレの情報も集めて入るのだが海瀛の現状は不満や疑問でしかない

最後の一言を聞く限りグランエプレも相当に大変なんだろうと魔弓は思う

そんな雑談はさておき肝心なのは自分達の行いが無駄になりかけているという事

ならばやる事は一つだ

「と、言う訳で葵さん、もし良かったら合同レギオンの連中をここまで連れてきて欲しいな、なんて

いる場所は：司令部に聞けば分かる：と、思うし」

「えっ？いや、それは：うん。大丈夫」

海瀛の話に葵は同意する

中々に信じられない部分も多いが、仮にそれが事実なら本当に自分達は無駄な事をした事になる

それは避けたいのも事実

葵は防衛軍の隊員と何かを打ち合わせその場を離脱

海瀛達は一度休憩を取ることにする

とは言っても完全に休む事は出来ず戦況を耐えず把握する何か有ればすぐに動かなければならないからだ

魔弓は一度遊糸と連絡を取りたいと言いつつその場を離れるすると海瀛の隣に藤乃がやってくる

「海瀉ちゃんは、グランエプレが嫌ですか？」

ストレートに聞いてくる

先の話を知ったらそう取られても仕方がないだろうが

「嫌…というかやり難いですよね

価値観もフォーメーションも合わないですし。まあそれでも折り

合いつけて頑張ってますけど

ちよつと厳しいかなと思う事も増えてきたり」

まあこればかりは嘘もつけない

レギオンの雰囲気は嫌いではないが、少し真剣味が足りないと思う事は多い

神庭の校風を否定するつもりもないし古巣のように軍隊形式でやれとも言わないがメリハリはつけてほしい

レギオンとしての戦い方もはつきり言って文句しかない

一度叶星、高嶺と話した時にそんな話題もなつたが何重にもオブラートに包ませてもらった

本音で言っているならばリアルファイト上等で言いたい事を言うだろう

フォーメーションやレギオンとしての作戦ならば助っ人として入った数は少ないが秋日の方がやりやすいとはつきり言える

するとそれを聞いた藤乃は何かを考える

そして、

「海瀉ちゃん、休憩が終わったら戦線に復帰すると思うんですが

その時に一つ私をお願いを聞いてもらっても？」

「お願いですか？構いませんけど」

藤乃の頼みを海瀉は受け入れる

戦いも終盤、だがこの頼みが彼女にとって大きな転機ともなるのであった。

第49話

自身の回復とCHARMの応急処置

戦況の把握など休憩中にも関わらずやる事は沢山あった

さらに近隣にヒューズが現れたら動ける者が対処する

そんな事をしてしていると時間はあつと言う間に経過した

夜もすでに明けている

合同レギオンが来る気配は未だに無い

作戦会議が長引いているのか、本当に信じてくれないのか

そんな時だった

この付近に再びケイブが発生したとの報告が入る

しかも大量に、だ

「このタイミングで…本当に嫌なタイミングで嫌な事をしてくれる」

海瀧はそんなふうと言う

休憩しているとはいえ万全とは言えず、なおかつ主力の一人であつ

た葵はいない

ここを突破されると街の奥深くまで侵入を許す事になるし、何より

前線で戦っているルドビコのリリイ達が挟まれてしまう

それだけは避けなければならない

防衛軍、リリイ共に対応に当たる

そんな時だった

「皆さん、私から提案があるのですが」

そんな風に話したのは藤乃だった

海瀧に舞弓、神庭から増援に来たリリイ

そして夜明け前から共に戦っている都内のレギオンの2名に語り

かける

「ここからはフォーメーションを組んで戦いましょう

何もなしだと流石に厳しいと想います」

確かに彼女の言うとおりだ

藤乃達が来る前までフォーメーション無しでも何とかなつたのは

あの時は全員が万全の状態だったからだ

だが今は違う

CHARMやマジの消耗、軽い怪我を全員がしており、何もなしだと危険すぎる

しかし

「藤乃、フォーメーションを組むって言うてもどうするの？」

私達はいさつき来たばかりだし神庭の天野さんや都内の子はともかく相模のリリイがどんな動きするかなんて分からないよ

その天野さんだって普段とは違ったCHARM使ってるし：藤乃がなんとかするの？」

その言葉に神庭のリリイの一人が疑問をぶつける

すると藤乃は

「フォーメーションと作戦は：海瀧ちゃんに決めてもらおうと思います

：いかがでしょう？」

そう言い海瀧を指差す

先程のお願いとは次の戦闘からは司令塔をやれと言うことだったのだろう

神庭のリリイはそれに驚く

それもそのはず彼女がグランエプレで司令塔を努めて居ない事は周知の事実

ぶつつけ本番で即席レギオンの司令塔を任せるなど自殺行為に等しいからだ

百合ヶ丘や御台場、メルクリウスなどリリイの層が厚く実力者が揃っているならば任務にもよるが司令塔が未熟でも他のリリイのスペックのゴリ押しで何とか出来る

しかし、この場は違う

実力も百合ヶ丘レベルとは言えずこの中だと藤乃が上位者だがこの場にいる他の神庭のリリイは中堅クラスだ

海瀧もスキラー数値が高く神庭だと上位だが他所と比べるとせいぜい中の上が良い所だ

都内の二人だつて中堅

舞弓もガーデンでは上位だが全体的に見たら中の上

そんな中で即席レギオンを努め司令塔も即席は厳しい

そうなるのは当たり前：なのだが

「海ちゃん、司令塔出来るツスよ」

中等部の時は次期司令塔や非常時の代理司令塔としての期待もされてたツス

ただ特戦に司令塔として選ぶのはまだ難しいから、取りあえずA Zととして選んで訓練はA ZとT Z両方やらすっていう方針だったツス

：まあ色々あつて神庭行ったからそのプランぶち壊れツスけど」

「え!? そうなの!？」

「そうツス」

高レベルの戦術を要求され、必然とやることも複雑になるから、海ちゃん本人は戦術理解苦手とか言ってたツス

でも名門以外だと普通に通用するレベルには育てられたツスよ」

この友人、余計な事を話すものである

まあ知られても不利益にはならないから構わないが、後々面倒な事にはなるだろう

とは言え不思議なことが一つ

「でも私、藤乃さんにその話した事ないですよ

レギオンも違うし一体どこで?」

「海瀧ちゃんの性格や趣味、クラスでの日頃の立ち振る舞い、学業成績、秋日さんとの秘密の逢引や本来の戦闘スタイルに戦場での状況把握の仕方：諸々見て調べて、春先と今日一緒に戦って、海瀧ちゃんになって、そう感じました

よく言われる前に出過ぎるのだって恐らくは相模の時にA Zはそうやれと教育されて来たからでしょう?」

よく観察する人物だと海瀧は感心する

確か藤乃はリリーの良い所を引き出すのが上手いと秋日が言っていたのを思い出す

お互いにレギオンが違い助っ人として生徒会と共に戦った回数も

限られている為助言する機会がなかったがずっと伝えたかったのだ
ろう

：趣味とか日頃の立ち振る舞いとか成績まで調べたとか戦うより
も怖い事をサラツと言っていた気もするが無視する

秋日のお願いを受ける為の逢引とか言っていたかも知れないが忘
れることする

「海ちゃん、ストーリーカーされてないツスカ?」

「仮にも生徒会だろう? 流石にそれは?」

「いや、藤乃なら…っていか天野さんになるって何?」

「(…ストーリーカー手前レベルでじっくり観察すればレギオンが違つて
も分かるぐらいにはTZ向きっていう仮設が建てられるって事ツス

なら普段から見てる上級生が海ちゃんにTZ薦めない理由は一体
…?)」

周りもざわつくが聞こえない

聞こえないったら聞こえないのだ

舞弓も思うところは有るみたいだが口にはしない

「お願いっていうのは、私に司令塔やれって言う事ですよね?」

「はい。その上で結果を求めていきましよう」

「(秋日さんに外征するなら結果を出せって急かされた?」

エレンスゲならともかくココは神庭だし、そんな指示を出すとは思
えないけど…)」

生憎と海瀉は生徒会とのやり取りを知らない為に藤乃が何で結果
を求めるのか分からない

とにかくヒュージが来るのだからこうしてはられない

早急に策を練る…とは言ってもこのメンバーにコンデイションだ
策と言っても限られる

「取りあえずフォーメーションは固定

私がTZですね

他は…」

その指示の元、配置に付き戦闘となる

「(後は私の次第…仲間を生かすも殺すも私の腕…か、急造でやるには

荷が重いけどやるしかないか」

グランエプレに来てからはずっとAZでやってきてこの立ち位置につくのは数ヶ月ぶりである

それでもやるしないし、何を考えてるのかは分からないが藤乃やこの場にいるリリイを生還させる為にもやるしかない

ここまで来たら出来る、出来無いじゃないやるか、やらないかだ

フォーメーションを組み、戦闘を開始する

今回は突撃ではなく、全体を見て適切に動き、指示を出さなくてはいけない

そして、大切なのは

分かりやすく、明確な指示を出す事

「AZはとにかく数を減らす！」

打ち漏らし？後続が仕留める!!

BZ組はヒューズの打ち漏らしとAZの死角をカバー

やれる事など限られている

ならばやる事はシンプルだ

派手さ華麗さなど必要ない

すると

「海ちゃん！この付近に接近するレギオン有り！」

「何処!?合同組？」

「いや、クエレブレックス!!」

その言葉に戦闘している全員が驚く

クエレブレとはエレンスゲのトップレギオンの一角を担うレギオン

隊長は一葉と同じく一年生の松村優珂が務める

しかし、彼女達のレギオンはヘルヴォルのようなお行儀の良いレギオンではない

簡単に言うならば結果を求める為には手段を選ばないレギオン

その手の悪評も多い

本来ならば来るな…と言いたいのだが

「ほつとけ!!むしろ好都合だ

戦果求めるならヒュージを削ってくれる筈だしこっちの消耗も少なくて済む」

春先の時は来るなど言っていたがアレは萩窪だから

しかしココは新宿、ルドビコ女学院の守備範囲内

暴れようが何しようが神庭には関係が無いしルドビコとエレンスゲは派閥が同じ

暴れた際の処遇で何らかの裏取引があっても不思議ではないのだ、口を出すことではない

向こうは戦果を求めに来た

ならば十分に利用させて貰う

使えるのならばなんだって使う

下手なプライドで生き残れるほど彼女は優秀ではない

それに、海瀛の古巣の相模女子だつて必要に応じて暴れるのだ、クエレブレの考えが分からないということは無

自分達の守備範囲で暴れたらそりゃ文句を言うが他所の守備範囲の事に口を出す理由はない

「各自仕留められなかったり、突破されたヒュージはクエレブレに押し付けていい

向こうは戦果を求めて来たんだ、喜んで討伐してくれる

…だけど、全員クエレブレの攻撃に巻き込まれないのだけ注意して、アイツら戦闘になつたら容赦なくぶつ放して来るぞ」

「相模の荒れた先輩方みたいなもんツスからね、クエレブレ。いや、クエレブレの方がまともか？」

…にしてもアレ、牧野美岳ツスよね

ルドビコ行つたんじゃ？帰つて来たツスか？」

通信を入れつつ舞弓も同意

相模も荒れたガーデンだしクエレブレのやり方よりも過激な事をやるリリイは多い

そんなに嫌悪感は抱かなかつたりする

そして、その中の一人牧野美岳だけは違う

確か彼女はエレンスゲからルドビコに転校したと言われていたはず

それにも関わらず再びエレンスゲに復学しているのだ

ルドビコの崩壊で呼び戻されたのか自分から帰ってきたのかは分からない

「さあ？向こうの事情にまで口を突っ込むつもりはないよ

にしてもクエレブレ、顔見知りが多い…」

「提携先ツスからね」

転校に興味の無い海漓は知ったところで、である

ただクエレブレの面々も顔見知りはかなり多い、特に一年生

普通に会話した事があるレベルだ

まあエレンスゲと相模女子は姉妹校提携しているから当たり前なのだが

舞弓と話をし、戦闘続行

無駄話をしすぎて陣形が崩れたなど笑い話にすらならない

そして到着したクエレブレはというと

「海漓ったら無視？！久しぶりの再会だし挨拶の1つぐらいあってもいいと思わない!？」

そんな事を言ったのはクエレブレ所属の賀川かがわ 蒔菜まきな、学年は一年

海漓とは顔見知りの一人だ

戦場とは言え挨拶の一つもないことに憤慨する

「しかし、意外だな

彼女はヘルヴオルとも交友があると聞く

私達は追いつ返されると思っていたが」

冷静に自分達の扱いに感心したのは牧野まきの 美岳みたけ、こちらは二年生だ

彼女の交友を聞く限り自分達は歓迎してこないと思っていた

無視とはいえ何も言っていない事自体に多少の驚きはある

「仮にも相模出身です。私達のやり方は熟知していますし、来たことに対して非難する理由もないでしょう」

今だと神庭自分達の守備範囲である菘窪。相模時代だとお気に入りのお店

のあるエリア以外は何したって文句言いません

味方への誤射さえなければ…ですが」

そう話すリレイこそクエレブレで隊長を務める松村^{まつむら} 優珂^{ふうか}

特段仲が良いとかそんな事はないが自分達のやり方というのは理解しているし、相模だつて似たような事をやるリレイは多い、自分達を非難する理由が無い事も分かっている

彼女達の管轄^{神庭の守備範囲}である萩窪や相模時代のお気に入りの店の付近で暴れるならば苦言も言うし文句も言うが、ここは新宿

神庭にも相模にも影響は無いのだから好きにしろということだろう

ただリレイへの誤射には気を付けた方が良く。どこもそうだが相模は特に誤射やそれに近い紛らわしい行為をしたときには直ぐ様報復が来る

訓練で厳しくされるなど序の口

戦場で撃ち返して来るなど平然と行う

許されるのはヒュージの横取りぐらいだろう

「ふむ。臨機応変な思考という所か

こちらとしては有り難いが」

美岳もそれには納得

どうやらヘルヴォルに比べて話の分かる人物という印象を持つ

「クエレブレはいつも通りやるわよ」

優珂の声と共にクエレブレも戦闘開始

彼女達のやり方でヒュージを倒していく

海濱の司令塔としての初戦闘にまさかの増援となるがリレイの数が増えるのは良い事

当然向こうはお構いなしに暴れるのだ

被害は想定以上になるのが普通…なのだが

「(暴れるのは想定済み

やり方は熟知してる…ならそうしても良いように味方を配置し動かせば良いだけ)」

彼女はクエレブレが暴れるのを想定した指示を出す

クエレブレに向かわせるヒュージの数を計算し、破壊するであろう障害物を確認し事前に味方を退避させる

自分達にとつて邪魔な物やヒュージをクエレブレに対処させる力を合わせる、共に戦うというより相手を利用する形に近い

「問題はクエレブレがいるこの場所を合同レギオンが通るかどうかなだけだな

私はともかく他はクエレブレのやり方なんて認めないだろうし…到着してトラブルは避けたいぞ」

とはいえ不安な事もある

それは合同レギオンとクエレブレが鉢合わせた際の反応だ

仕方無しと割り切り素通りするようなりリイではない

間違いなく揉めるし、矛先は咎める事をせず好き勝手やらしてるこちらにも向くだろう

増援にきたクエレブレのおかげかもしれないが戦闘が早く終わりは合同レギオンを待っただけそんな時だった

都庁の方からヒュージの方向が聞こえると同時に爆発音がかすかに響く

「始まった!?!」

やっぱり葵さん向かわせても信じてはくれなかったか…」

それは都庁での戦闘開始と同時に自分達の事は信じられなかった事を意味する

葵を向かわせても駄目だった事に落胆もあるが、何処かで覚悟はしていた

名門とそうでないガーデンとの差だ

葵一人いてもどうにもならなかった可能性もある

もしかしたら司令部経由で自分達が知らない別ルートを紹介もあつたのかもしれない

「頑張ったのに信じてくれないなんてかわいそ〜

どっちが酷いことしてるかわつかんないじゃん」

「おい！勝手な行動をするな!!」

そんなこと言いながらヒュージを薙ぎ倒しこちらに向かつてきた

のはクエレブレの蒔菜と追ってきた美岳

「私らを煽りに来た？」

それともこうなる事分かったのか？」

「まっさか」

私等は余裕があるなら援護に行けって命令をガーデンから下されただけ、ホントだよ？」

海漓の反応に蒔菜は何事も無く言い切る

増援を向かわせる辺りエレンスゲとしても今回の事件は予想外と
いうことだろうか？

「二葉の奴、クエレブレが居るから別ルートを要求したのか？」

お互い割り切れよ…非常時だろ

それとも百合ヶ丘側から提案…？」

そうなるよこのルートを使わない選択肢を取ったのは一葉

だが彼女の性格を考えると他者の言う事を信じないと言うのは変な話

そうなるよ百合ヶ丘側と言うことになる

この非常時にプライドを選ぶなど言いたい…まあ、無理な話だろう

「私らに何か言われても困る

どう思うかはそちらの勝手だが少なくともこれに関しては私達は無関係だ」

「終わった後に聞いたですか…」

「それが良いと思います

この扱いは流石に神庭としても我慢なりません」

そう言い自分の背後に藤乃が現れる

揉めてると思ひ様子を見てくれたのだろうか

「あ、そうだ。

私らの邪魔しなかったお礼に良い事教えてあげる」

何かを思い出したかのように蒔菜は告げる

「何？」

「連中、博打するつもりだって

発動するかも分からないレアスキルに全てを賭けるんだってさ
確実な作戦も練らず絆とか奇跡とか下らないものに都の命運を賭ける

指名手配と言いつい今年の百合ヶ丘は本当に笑わせてくれるよねえ？」
「何言ってるの？」

それにどつから仕入れたその情報」

そんな事は無いと信じたい

自分達が戦ったのだってデータを集め、リリイを十分に休ませ確実に特型を倒す為の時間を稼ぐためだ

それなのに博打をするなど自分達…いや現在新宿で事態の収集に動いている全ての者への冒涇でしかない

それが事実だとしてその話をどこから仕入れたのか

この状況で嘘や相手をからかう程空気の読めないリリイではないはず

「司令部を經由して校長から。

多分神庭にも話が行ったんじゃないの？

何なら我らの一位様はしくつたらヘルヴォルの隊長やめるなんて担当の教導官に言い切ったってさ」

「気になるならば都庁に向かうといい

…無駄話が過ぎた。私達はこの辺で失礼する」

そう言い蒔菜、美岳は海瀧達の元を離れる

その後すぐにクエレブレはその場を後にする

違う所で暴れるつもりなのだろう

この辺りにケイブもヒュージも居ない

「私は都庁に向かおうと思います

何が出来るかは分かりませんが…

藤乃さんはどうしますか？」

「海瀧ちゃんについていきます

この場は他の子に任せましょう」

その後は臨時レギオンの面々に自分達は都庁に向かう事を告げその場を後にする

残った面々も一通り現場を確認した後、移動するそうだ。

「さて、突っ走りますよ」

間に合うと良いんですけど」

藤乃にそう告げ海瀧達は都庁へと向かう

何が起きるのかを見届ける為に

第50話

海瀛と藤乃が都庁に向かって走る
ヒュージがあちこちにいるのだ

戦闘になるのは当たり前前…なのだが二人はヒュージとの戦闘を避けている

それは

「便利ですわね、ユーバーザイン」

「こう言う行動向けですからね」

まあテストメント使いがないんで二人の気配消すにはこうするしかないんですけど」

海瀛が自身のレアスキル、ユーバーザインを発動し気配そのものを消しているのだ

本来ならば自身しか対象にならないのだが藤乃の気配も消えている

その理由は、海瀛と藤乃が手を繋いでいるから

一部のレアスキルはリリィ同士の接触により範囲の拡大や合成が効率的に行える

ちなみに海瀛の場合接触しなくても藤乃の気配を消すことは可能なのだが藤乃からの謎の要求により手を繋ぐことを選んだ

手を繋いでからやたらと藤乃の機嫌がいい気もするが気にしない
それよりも気になる事もある

「希少スキルの発動による特型の撃破…百合ヶ丘、いくらなんでも無警戒すぎます…よね？」

「ええ。ここが新宿と言う事を考えるならば尚更」

海瀛ちゃんは、合宿から一柳隊と行動していましたが彼女にそのよ
うな傾向は？」

「一切無いですね」

発動する素振りすらなかったです」

先の蒔菜の話

移動中に藤乃が生徒会に問い合わせた

すると帰ってきたのは衝撃の事実

彼女の言っていた事は本当である

そのスキルの名はラプラス

所有者は一柳隊で隊長を務める梨璃である

作戦会議を見届けた教導官の話だとそのスキルの発動に全てを賭ける方向の作戦を建てたと言う

それが特型ヒュージの使うマギリフレクターを突破する唯一の手段だと結論付けた上で、だ。

勿論現場ではリスクが高すぎるとの反発を、主に会議場に着いた葵が何重にもオブラートに包みながらも言ったという。

だが最終的には楓の説得と自身も合同レギオンに助っ人として合流する事で何とか作戦実行に移すことになったという

「海瀉ちゃんは鎌倉時代にラプラスの話聞いた事は？」

「相模ですよ？情報で言うなら神庭と変わりません

御台場やメルクリウスみたいな百合ヶ丘と友好的関係を結んでる上層のガーデンならもしかしたらラプラスに関する情報や研究データの共有が有るかもしれませんね」

藤乃の間に海瀉は答える

ラプラスは未知のスキルと言われているが実際の所少しだけ違う

レアスキルの一つにカリスマと呼ばれるスキルが有るのだが、実はカリスマはサブスキル

つまり海瀉が所持するサブスキルの一つである虹の軌跡と同じ扱いであり、ラプラスがレアスキルなのではないかと言う理論だ

海瀉が知っているのはそこまで

上層のガーデンならばより深い研究や情報があるのかもしれないが彼女にはそれを知るすべは無い

「百合ヶ丘は良いかも知れないけど…ラプラスの件が本当なら今後を考えるに隠し通さなきゃいけない重要機密レベル…本当に何考えてんだ」

なぜラプラスが機密なのかと言うとそれは以前にも話題になったゲヘナが関係している

ゲヘナにも様々な派閥があり中には人体実験などを平然と行う派閥もある

ここ、新宿を守備範囲とするルドビコもそちらの派閥と呼ばれておりそんな地域でラプラスの発動を行うというのだ

百合ヶ丘は良い、反ゲヘナ派閥の筆頭でありそのような魔の手からリリイを守る手段が有るのだから

だが他所は違う、ルドビコやそういう過激な派閥に所属するガードンにもリリイはいる

過激派閥がカリスマ持ちに対し今後非道な扱いを行う可能性は十分にある。

それを考慮したら少なくとも新宿で使おうなどと言う考えは浮かばない

確かにルドビコの崩壊以降、百合ヶ丘も多くのリリイを派遣したがルドビコが百合ヶ丘を筆頭とした反ゲヘナの人員を大量に受け入れ反ゲヘナ派閥に鞍替えしたと言う話は聞こえてこない

百合ヶ丘のリリイならば徹底した反ゲヘナ教育はされる筈

さらにその場にはエレンスゲの教導官もいたならば尚更警戒しなければならぬ

自分達の行いがゲヘナに過激な行いのきっかけを生むと考えられなかったのだろうか

海濱の場合、生まれが横浜で中等部を中立派閥に属する相模女子で過ごしてきた事もありゲヘナを否定も肯定もしない

自分達にとって使えるならばゲヘナのデータも使つて来たし過激な行いから得たと思われるデータは使えないとして切り捨ててきた
そういう見分け方も様々なデータと関わることで身につけてきた
必要とあれば実験にも参加した。

相当危ない橋を渡ってきたという自覚はあるがそうしなければ自分
分は早々にモルモットだ。

神庭も中立派だ。そういうノウハウはあるだろう

特に生徒会は目を光らせている

グランエプレは見分ける以前にその手の資料は見せない方針を叶

星と高嶺は取っているし、裏側を話してすらいない

だからこそ無警戒すぎると言ったのだ

自分達は安全だという謎の確信がありその後の影響を全く考えていない

本当にゲヘナを悪の組織であり百合ヶ丘の敵として教育するならば付け入る隙など1ミリも与えてはいけない：と思うのは海漓だけだろうか

彼女にしてみれば百合ヶ丘に限らずヘルヴォルも同様だし、そんなヘルヴォル相手になんの警戒も一葉に対して忠告もせずに付き合いつつ、理解を示す所か方針を支持をする叶星達も十分間抜けなのだが

確かに海漓もヘルヴォルの面々とは交流があるがそれでもある程度の線引きをしているし一葉には忠告もして来た

馬鹿正直に付き合うほど彼女は善人ではない

「ゲヘナを甘く見てるといつか痛い目見るぞ

一柳隊もヘルヴォルも叶星さん達も…」

「神庭だからこそ知る事もありますが決して気の抜けない組織、ですからね、

」

一柳隊は本当に不味くなれば百合ヶ丘が総出で守るだろうがヘルヴォルと自分達は本当に危ない

ヘルヴォルは言わずもがなグランエプレも純粹すぎる、こちらが危険性を言った所で聞く耳すら持たないだろう

敵対しても受け入れてもいけない

本当に中立的な視点から落ち着いて見定めなければ気付かぬうちに呑み込まれる

そういう組織だ

藤乃もそれは分かっている

話はあるが、それよりも先ずは都庁だ

ラプラスで何が起ころのか

それを確かめるためにも先ずは都庁へと急ぐ

勿論道中ヒュージと遭遇するのだが

「邪魔だ…どけ!!」

「道を開けてもらいます」

二人共速攻で切り伏せ先に進む

そうして都庁に到着する頃には戦いは終盤を迎えていた

そこで見たのは

「大量のマジに髪の色の変化…あれがラプラスの効果？」

未知のスキルの割には…地味っすね」

「マジを渡すだけならレジスタやブレイブでも良かったのでは？髪の色の変化…神宿りも混ざっている？いや、でも…」

何らかの力で大量のマジの発生…あれがラプラスの効果なのだろう

そしてそれに伴いマジの発生源にいた梨璃の髪の色が桃色から薄い紫色へと変化する

そのマジの影響か、周辺の合同レギオンのリリーのマジも回復し、これからノインヴェルト戦術を行う

さて、ここで海瀉達が取った行動は援護としてあの場に駆け付ける…ではない

物陰に隠れ、付近を警戒しながら様子を伺う事、だ。

「さて、じっくり観察しましょう。」

「参加しないのですか？」

せっかくなここまで駆けつけてきたのに？」

「私達が来た事で向こうが舞い上がって陣形をぶっ壊す可能性があります

あの場に私達は必要ないです。」

藤乃の疑問に彼女は応える

これが敗北の危機ならばそんな事も言ってもらえないが、今は違う
それこそ未知数のラプラスやノインヴェルト戦術を行っている最

中

そんな中に自分達が乱入し精神状態を乱させるわけにはいかない
「それに勝ちを確信した時や勝った直後が一番危ないんです

生き残ったヒュージの騙し打ちを始めとしたイレギュラーから味方を守る必要がありますし、万が一失敗した時には離脱させる：もしくは戦闘を引き継がなきゃ溜めですから」

こちらも大きな理由

特型というボスを倒したから全て解決、皆助かってハッピーエンドとはならないのが戦場だ

ノインヴェルト直後は疲労や安心感から油断しがち

特にラプラス等という未知数のレアスキルから生まれたマジを受けた事への反動も考慮しなくてはならない

失敗した時のバックアップも当然

そこまでしろとの命令は受けて無いがそれこそリイ独自の判断に基づいての行動と言うやつである

「せっかく来てくれた藤乃さんには申し訳ないですけど今回の私達は裏方です」

私はともかくウチを代表するエースの貴方に裏方させるのもどうかと思います、百合ヶ丘絡んだ今回ばかりは諦めてください」

「突然のルート変更といい海漓ちゃん、もしかしてこういう扱いを昔から…?」

「私は、というより相模が、です」

外征とか守備範囲の戦闘ならともかく百合ヶ丘が絡んだら名門以外のガーデンは基本こんな扱いです

後は：前もって言うておきますけどこの騒動が終わった後の扱い、驚いたらだめですからね」

彼女は藤乃に忠告する

藤乃は間違いなく強い

だからこそ扱いに関して海漓が相模時代にガーデン単位でされた扱いは受けていない。

ついてきてくれた先輩に対しこの後の事も考えると見せたくはない光景、知りたくなかった扱いを受けさせるのは

、はつきり言っ申し訳ない

自分についてきた事でこの後受けるであろう扱いに怒って今後相

手にされなくなったりしてもおかしくはないレベルだ

そんな事を話している内に戦闘が終わる

最後は合同レギオン全員でパスを繋いだマギスファイアを各レギオン隊長の3名で協力する形でのフィニッシュショットを叩き込み特型を撃破した形だ

幸運な事に特型ヒュージを撃破した後、これといったイレギュラーな事は起きなかったのは幸運だ

その後は安全を確認した防衛軍によって合同レギオンメンバーは回収

都内各地に展開していたリリイも順次ガーデンへと帰還しこの騒動は幕を閉じるのであった

この騒動は新宿エリアディフェンス崩壊事変とも呼ばれ大きな話題となる

そして、その解決に大きく携わったのは特型ヒュージエヴォルブを撃破した合同レギオン

一柳隊9名

ヘルヴォル5名

そして

グランエプレ5名の計19名の活躍が大きかったと報じられることになる

それを見た海瀧は一言

「やっぱりね」

こう言い残したと言う

怒りも悲しみもナク、分かりきった事、当たり前のような、つまらなさそうな表情だったとルームメイトの薫は後に話していた

第51話

さて、事件から数日経過したが都内は慌ただしい
事件の調査などはこれから

自分達も報告書の作成等やる事は多い

海瀛も何事も無く日々を過ごしていた。この日は一年生が集まっ
て雑談：なのだが

「海瀛ちゃんはどうしてそんな冷静なんですか!？」

「何か慌てるようなことあったっけ」

「あの扱いよ、何で冷静なの？」

居なかった扱いされたのよ!!」

紅巴と姫歌の怒っている原因がわかった

どうやら事件後の扱いに憤慨しているようだ

「あー。でもそれってそんな怒る事？」

よくある事じゃないの？」

「よ、良くある事って…そんな!」

「名門ガーデンの活躍が大々的に報じられて、それ以外は無かった事
になるなんてよくある話だよ

別に今回の新宿に限った話じゃない」

彼女はそう告げる

今こうしている間にも世界ではヒュージとの戦闘が行われている
が、その全てを今回のように大々的に報じているかと言うと否になる
報じられるのは名門と呼ばれるガーデンに所属するリリイが大規
模な戦いで活躍した時だけ

他は些細な事として取り扱われる

百合ヶ丘にメルクリウス、都内だと御三家がその代表例だ

更に極端な話をするに相模女子がギガント級を倒すのと百合ヶ丘
が倒すのではギガント級が同じ強さであっても百合ヶ丘が大々的に
報じられる

そういう光景を海瀛は相模の中等部時代に嫌と言う程見てきたし
味わってきた

今更やられた所で本当に何も感じないのだ

嫌なら名門に行って活躍するか大きな戦いで名門のリリイ以上に活躍し注目されれば良いだけの話

「まあ私の場合はそれだけじゃ無い気もするけど…そっちは証拠がないから。」

ただ彼女の場合事情が少し違う気もする

確かに扱いに差こそあれここまで話題にならないのはおかしい

彼女があの日野天葉の妹と言う事を考えれば合同レギオンでなくとも注目はされるはず

そうならないのは、天野天葉の妹である事実が世間に広まる事が不味いと考える人間がいるのだろう

例えば精神的に不安定な人物の耳に自身の事が入る事への悪影響を懸念し大人達が関係各所に報道を抑えるようにお願いした可能性…とか

これに関してはこれといった証拠もなく彼女の憶測でしかない

だが中等部の時の出来事や一柳隊と初めて出会った時のリアクションを見る限り百合ヶ丘内で何らかの情報操作が行われている可能性は高い

自校の才能あるリリイと他校の才能の無いリリイなら前者を守る為に動くのは当たり前の話

別に大人達に限った事ではない

リリイ同士でも同じだ。

自校のリリイに危害を加えるなら容赦しないという姿勢は全員が持っている。特に百合ヶ丘の場合、そうなれば実力的に留まらず社会的に抹殺出来る力を持つリリイが多い。

百合ヶ丘の発言一つ、選択肢一つ間違えれば、海瀉だって即抹殺だリリイである以上ヒュージとの戦闘で命を落とすのは覚悟しているが、こんな言い掛かりみたいな理由で命は落としたくない

「海瀉は有志連合に参加した時からこうなるのが分かったのに最後までこつちに来なかったって事!？」

「まあね。有志連合だって結局は時間稼ぎ。」

東京の連中は分からないけど会議の為に外征してきて戦闘に参加したレギオン：特に遊糸さんと曾根ちゃんはこうなるって分かったと思うよ：確実にね」

姫歌の言葉にもそう言い返す

東京のリリイはともかく外征してきたリリイも扱いの差には覚悟していたはずだ

特に幼稚舎や中等部からリリイになった者は尚更

高等部からリリイになった者ならともかくそれ以前からリリイだった者が扱いの差に騒ごうものなら「何今更騒いでんの？」と言われるレベルで常識

「みんな嫌じゃなかったのかな？」

「別に世間に認められたりチャホヤされる為にリリイやってる訳じゃないからね。

勿論そう言う目的の子も中にはいる：けど結局は生き残ってガーデンから報酬貰えればいいかってなるリリイが大半だよ」

灯莉の言葉にそう言い返す

リリイが活躍すると世間は褒め称えるしそう言うのを目的にする人物もいるし心当たりがありすぎる

でもそれがメインかと言われると微妙だしそれよりもガーデンからヒュージの討伐や今回の騒動の活躍を認められて報酬を貰いたいと考えるリリイが大半だ

確かに報道での扱いは悪かったが、それはあくまでも報道の話

海漓も報酬はしっかりと受け取った

相模時代よりも貰った金額が少なかったが仕方ない

流石に大手CHARMメーカーが背後にいる相模とそうでない神庭を比較するのは酷だ

「海漓ちゃんは？」

「後者。私も英雄視とかアイドル扱いは別に。

貰えるもの貰えればそれで良いかなって

レギオンの皆でアイドルリリイやるのは楽しいけど大手の雑誌の表紙とかモデルみたいな事はしたくないよ。(まあ、人に見せられる

ような綺麗な体じゃないし…ね」

紅巴への回答。これも本音だ

活躍して英雄視されたりそれがきっかけで専門雑誌などの表紙や本職顔負けのモデル活動やりたくはないし世間で言うアイドル扱いされるのなんて嫌すぎる

姫歌達とアイドルリリイとしてガーデン主催の行事に参加するのは楽しいので構わないがそれを外に持ち出すかと言われと嫌だったりする

まあ人様に見せられるような綺麗で立派な体なんてしてないのもあるのだが

これは世間一般のリリイとズレた感性なのかもしれない。

しかし海漓はそう思っている。それだけだ

「本当に後味悪い終わり方になったわね…」

それに、海漓はその、一柳隊の皆に

「野蛮人、道を踏み外した、考えを拗らせた哀れなりリイとか言ってたんでしょ?」

「ちよ、灯莉、海漓に話したの!?!」

「何も言っていないよー」

「大丈夫、それ。エリート様がクエレブレみたいな戦法とるレギオンやガーデンによく言う言葉だから

私ら相模だつて散々言われたし

批判する時の定型文だから…もう少し洒落の聞いた言葉を身に付けてほしいよね」

そう、これらの批判は戦果至上主義のような事を行う時に言う言葉リリイに品格を求め戦いでは派手で華麗に美しくあるべきと定義している者たちしてみたらクエレブレのようなリリイなど恥

言いたい放題何でも言ってくる

口汚く罵るリリイもいる…のだが聞いてる方は怒りを通り越して呆れるし、なんなら定型文みたいな事しか行ってこない為聞き飽きる自分達を罵ったり怒らせたりしたいならもう少しセンスのある文言を使えと逆に笑つてたりリリイも居た

「洒落の聞いた言葉で批判ってどんなのよ…」

「相模の友達は今『あまり見ない斬新な戦い方』『避難場所に出来るシエルター向きの土地を用意するのが得意そうな連中』位のセンスは見せてって言ってたよ」

海瀧はそんな事をふと思い出す

舞弓以外にも相模には友人はいる。その中の一人が言っていた言葉を思い出す

口汚く人を罵るような事はしないが言葉回しが独特だった事を思い出す

出身は関西方面と記憶している

「ではその子が逆に品格を求めるリリイやガーデンには何て言っただけですか」

『リリイとモデルを兼任出来る位綺麗でスタイルの良い子が多くて羨ましい』『随分と色んな物溜め込んでるみたいだしそろそろ保管場所無いでしょ？分け前を下々に恵んでくれ』『校舎の外もゴミ一つ、シミ一つ無いなんて品格を求める所は外も中も綺麗で美しい』『ビューティは人間の品格の良し悪しを理解してくれるなんて新発見を何でいつまでも発表しないんだ』今は私が皆にも伝わるように言い直したけど、こんな感じ。」

自分達への悪口や罵倒をする人物にそんな言葉を笑顔で言っていた

言われた方は意味が分からんと混乱していた光景も思い出す

この言葉も海瀧が分かるように言い直したが実際だと方言も混ぜており初見で意味を理解するのはほぼ不可能

「ではその方の口調そのまま再現したら？」

以外にも紅巴が食いついてきた

リリイに関心を持つ人物だ、興味を持ったのかもしれない

「えーつ、と、最初だと『名門さんはリリイ以外にモデルさんやれる位にベツピンさんが多くて羨ましい限りやなあ』

どうしたらそんな風になれるんやろ？』『限られた敷地に随分と色々な物や資料溜め込んでるやろ？掃除したら要らないものあるか

もしれへんし、ウチラが安く引き取るで』『敷地の外にゴミ一つ、カベにも汚れ一つ無いなんて品格を求めはる所は校舎も綺麗ですなあ。なんか掃除する人とか宿つとるん？腕がいい人いるなら紹介してな』『ヒュージさんが何を考えてるか分からんからウチら毎日命かけて必死こいて戦ってんのや。品格の良し悪し判断して品格が良いと弱くなる特性があるって分かってんなら早よマスコミ使って発表せーや。そしたら世の中のリイみんなオタクらみたいになつたわ』だね」

「それ悪口なのー？」
「よくわかんなーい」

「何個か褒めてない？」

「私も始めは良く分からんかったけど意味が分かるとあーってなつた

友達とかガーデンの仲間に対してはそういう事を言わないけど喧嘩すると今みたいな言葉が多くなる」

灯莉、姫歌はそれを聞き、それは悪口や批判なのかと疑問を呈する。海瀧もそれが分からず聞いた時は混乱していたが意味が分かると納得した

出身地ではよくある言い回しらしい

自分もそういう言い回しを聞き、混乱したがその時はあるリイが素直に意味を教えてくれた

友人や仲間には優しい人物であったりする

先の言葉のいつくかはまさに名門と呼ばれるガーデンやリイへの非難であり皮肉だ

「海瀧ちゃんのお友達…あつてみたいです

色んな話も聞けそうですし」

「癖も個性も強いし荒くれたのも多いけど…まあいい連中ばっかだよ」

そんな事を言いながらこの日は雑談しその後久しぶりの一年生だけで自主練を行いこの日は終わる

少しずつ、ほんの少しずつだか日常を取り戻しつつあるのだった

第52話

ある日の事だった

「温泉…ですか？」

「ええ。海瀧ちゃんはあの時居なかったから知らないと思うけど…」

グランエプレ全員が揃いミーティングを行う

その時に叶星がそんな事を言う

どうやら先の新宿事変の時に戦闘が終わったたら百合ヶ丘の温泉に
来ないかと言う話になったらしい

その後百合ヶ丘側の日程の調整が済んだことやどういう訳か、百由
が神庭とエレンスゲを訪れ、東京を救った英雄への感謝等々の言葉で
誘ったそうだ

「わーい温泉！温泉！」

灯莉は喜ぶし姫歌、紅巴も同じく喜ぶ

本来なら海瀧も喜びたい…のだが

「うーん、温泉か…」

海瀧としては内心微妙な所

設備を貸し切るなど相当に優遇はしてくれるようだがガーデン内
にリリイはいる

百合ヶ丘のリリイなど正直言って合いたくも関わり合いにもなり
たくない

すると紅巴が

「海瀧ちゃんは、嫌…ですか？」

「嫌じゃないけど…うーん」

裏でとやかく言っていたとかは別に良い

慣れたことだ、腹を立てることもないしこちらから振らなければ良
いだけ

それよりも微妙なのはこの大変な時期に自分達だけそんな良い思
いをして良いのかと言う苦悩だ

何度でも言うが新宿事変では多くの人が戦ったし傷ついた。

事後処理だってまだ終わっていない。

神庭だつて教導官や生徒会の面々は忙しいし、グランエプレも同じだ

おそらくはエレンスゲも同様

そんな中で自分達だけ気分転換をするなど気が引ける

自分達が不在の間の間の穴埋めを他のリリイに任せる事になる。

「ヘルヴォルも同じだと思うけれど何か特別な任務や非常事態が発生したのならそちらが優先よ

それを分かつての誘いだから余り難しく考えなくても良いと思うの」

叶星はそう告げる

方向が違えど万が一の時の可能性は彼女も考えていたようだ

ここでゴネて下手に雰囲気悪くするぐらいなら同調しておくのが得策だろう

「まあ、そうですね。」

とりあえず何も無ければ参加しても良いと思いますよ

まあ起きて欲しくないですけどね。傷も癒えてないですし」

とりあえず全員参加で話が纏まる

そして、一段落すると

「それでもう一つ話題があつて」

「とりあえずフォーメーションは今まで通り可変式、基本ポジションも変更無しで行こうと思つてるわ」

叶星が少し間を開けるとそのように言う

先の件で海濱に司令塔の適性がある事は叶星と高嶺の耳にも入つた

それでも尚現状のままで行くと告げたのだ

「姫歌さんが立派に司令塔をこなせているし無理に変更する理由も無いわ

この時期に可変式から海濱さんの得意とする固定式に変更すると対応する為に訓練をやり直す必要になるし…負担も大きくなるのが理由よ」

「勿論、今回の時のように私達含めその場に誰も司令塔出来る子が居

ないっていう状況になったらその時は海瀉ちゃんの判断で司令塔をやって貰って構わないわ。

ただ今のグランエプレでは申し訳ないけれど海瀉ちゃんに司令塔は任せられないの」

高嶺がそれを補足し叶星が最後に補足をする

二人の言う事は全て正しい

グランエプレを考えた上での判断だ

新宿の件でグランエプレは注目されている

その中で唐突な変更の数々は混乱を招く事も分かっている

「(結局の所、私に司令塔をやらせない為の理由探しだよ…)

グランエプレの隊長は貴方です

貴方の決めた事なら不満はありませんよ」

言いたい事は沢山あるが、反抗しても議論は平行線になるだろう。

叶星に喰らいつかないのは司令塔をやりたい意志がその程度等と言われるかもしれないが、自身は一年生で叶星と高嶺は二年生

更に叶星はレギオンの隊長を務めるのだ

普段はともかく、レギオンでの意思決定の際は学年やレギオンでの立場の差など弁える所は弁えなければならぬ

言い方が悪いかもしれないが現状の海瀉にとって叶星や高嶺、サブリーダーの姫歌は上の立場だ

レギオンに関わる事ではどれだけ不満が有ろうと彼女達の方針には従わなければならない

グランエプレの方針『戦果を求めない』『御台場式のフォーメーションを導入する』に海瀉が何も文句を言わないのだから隊長である叶星がそうすると決めたからだ

ずっとおかしいと感じているが、それが方針ならば従うしかない

話を戻すが、叶星の判断の理由には様々な事情が有るのも分かっているが、結局の所自分のような人間に大切な人や後輩の背中を任せたくはないのだろう

そもそも上級生二人は自分達をレギオンの仲間や戦力として計算

しているのかすら怪しい所がある。

にも関わらず姫歌、灯莉、紅巴の三人は二人を尊敬どころか心酔するレベルで慕っている

下手な衝突はレギオンの崩壊に繋がる。

内乱でレギオンの崩壊など馬鹿らしいし神庭のようなガーデン主導でリリイを任命するトップレギオン制でそのような事が起きたらグランエプレの人選に関わった秋日達生徒会にも飛び火する

それは避けなくてはならない

秋日は約束の件がある

藤乃は不穏な発言があった気もするが先の騒動では助けられた

鈴夢は関わる機会が余り無いが同学年のリリイ

自分達の下らない争いに巻き込みたくはない

「今回の件で自分もって言う希望があったかも知れないけど叶えて上げられなくてゴメンね

フォーメーションとかポジションって全体との兼ね合いもあって簡単に変更出来ないから…」

「(変更って良くある話んだけど…御台場って違う?)」

叶星は申し訳なさそうに話すが海瀉もこの部分だけは疑問に思う

御台場がどういうカリキュラムを組んでいるかは分からないし、中等部時代のように叶星達が育てられたのかは分からない。

しかし、成長や経験を重ねる事で今よりも高い適性があると判明したポジション、役割が有るのならばそちらに変更させるのはよくある話ではないのか？

適材適所と言う言葉もある位だ。

叶星達のような才能のある者ならどうとでもなるのかもしれない

その為の環境は整備されているはずだしそれを十分に活かし努力もしているのだから

「海瀉が司令塔でやりたい作戦って…その…クエブレみたいに規律で縛って暴力的な戦いをするんでしよう流石に…それは嫌ね」

「自由に動けないと気分良く戦えないし僕もそれはやだなー

縛られるのとかもいやー」

「せっかく叶星さまが最新鋭のフォーメーションを用意してくださってここまで来てますし変える必要も無いかと…」

姫歌、灯莉、紅巴も言葉は違えど海瀉の司令塔や指示するであろう作戦には難色を示す

ここまで反対意見が出ては討論する余地すらない

自然消滅だ

その後は今後の日程を伝えられた後、解散となる

「(昨今の流れもそっちになりつつあるから…まあ中身を見る前に判断されても仕方が無いか)」

海瀉は解散後一人廊下を歩きながらそんな事を考える

叶星の判断も妥当だろう

注目されてる中で陣形を作り直すことに対するリスクも十分考慮している

合宿で百合ヶ丘の動きを見たり昨今の戦術のトレンド、レギオン全員の性格を考えた上での結論かもしれない

リリーの思想と技量、ガーデンの校風等様々な背景がある為、一概に言い切る事は出来ないが全体的な流れとして年々リリーの戦いは華麗で美しく有るべきと言う流れになりつつある

可変フォーメーションも注目を集める最新鋭の戦術だ

「(別に固定でも自由にやれるんだけど…まあ初っ端から可変やったのは不味かったか)」

固定⇄自由に出来ないとも思ってしまったのだろうか

固定を経験させずにいきなり可変フォーメーションをやってしまった弊害かもしれない

暴力的な、というのは即席レギオンでクエレブレと共闘と言う形になった際面白いぐらいに噛み合ってしまったのが影響したのだろう

あの件で自身が司令塔でやりたい戦術はリリーを縛り暴力的な戦いをやらせると思われてしまったのだ

まあ彼女としても司令塔をやるなら戦う時のルールや役割など縛る部分は縛らせて貰う為全てを否定出来ないのが辛いのだが…

「(あの二人も御台場のエリート私とは価値観が違いすぎる)」

叶星と高嶺だつて元御台場のエリートだ。

高嶺だつて海瀉が合宿前に聞いた事情を考慮しても十分に強い
もしかしたら可変フォーメーションもそんな高嶺を考慮した結果
なのかも知れない

皆が好きな事をやってるから自分も…とは行かないのが難しい所
だ

日常生活はともかく、戦闘で全員がルールも役割も無く好き放題
やってしまつては只の無法地帯。

それでも今まで上手く行つていたのは今回まで厳しい戦いが無
かつた事に加え上級生の実力のおかげだ。

舞弓から言われた便利屋と言うのは実是的を得ているのかもしれ
ない

海瀉がレギオンにとって都合のいい便利屋になる事がグランエプ
レを上手く回す為に必要な事ならそれが自身に与えられた役割と言
う事になる。

他人に役割を求めたい人間が自身のレギオンの役割に不満を言っ
てしまえば元も子もない

「(隠れてやるしかない…かな)」

隠れて司令塔としての勉強をやるしか方法はない

中等部時代に勉強のやり方や考え方は教わつていた

現状だとそれらを発揮する機会ほぼ無いし、自身の理論を語る相
手も身近にいない。

かなり厳しい事になるがやるしかない

最悪、遊糸に頼んで教えてもらおうしか手がない。戦術や指揮に関し
ては叶星よりも上だ

事情を話せば力になってくれるだろう…それに漬け込んで確実に
何か奢らさせるが必要経費だ

やらないと言う選択肢は残念ながら無い

藤乃が何を考えていたのかは分からないが、それでも自分を信じあ
の場で司令塔を任せてくれたのだ

自身が司令塔として藤乃と共に戦う機会は来ないかもしれないが

それでもTZや司令塔としての姿を見せずにこのまま過ごす訳には
いかない

中等部の時だって今年から予定通り高等部に進学していたならば
今頃は遊系や他の先輩、教導官にダメ出しされながらも司令塔として
活動していた筈

その時期が少し後になっただけでやる事は変わらないのだ

東京の戦い方や慣れない可変フォーメーションにノインヴェルト
戦術の対応

サブスキルの習得などやる事が多岐にわたり司令塔が後回しに
なったが挽回出来る筈

そんな風に考え彼女は日々を過ごす

日々の訓練に隠れての司令塔としての勉強などやる事は今まで以
上に多くなる

そうしている内に温泉へ行く日が来る

のだが

「すいません叶星さん…風邪ひきました…温泉、無理です…ゲホッ」

「えええっ!?!」

何事にも限界というのがあつた彼女の場合新宿の疲れが気付かないレベルで身体に残つていたのかもしれない

そんな中で気合い入れて頑張つたのだ

反動はある

温泉行く当日に熱を出す、という幼い子供が行事の日によくやる事をまさかの高校生になつてやらかしたので

形はどうあれ休めドアホと言うサインだろう

少し締まらないが新宿の件は一先ずは幕を閉じた

第53話

暫くの月日が流れた今日この日

グランエプレの全員が集まりミーティングをする

やれアイドルだ、何だと話が脱線する…が海瀉はすべて無視し一人資料を読み込んでいる

「(新宿相当マズいよね…これ)」

そこにはあの騒動後の新宿の状況が記されていた

安定するのではなく悪化している事

そして、自分達が倒した特型の幼体…捕食して進化する前の姿をしたヒュージが大量に出現していると言うのだ

出現しているヒュージの能力については記されていない

幼体時でさえあれだけの知能を持ったヒュージが増え続けるとなると非常にまずい

この後開かれる防衛構想会議でどのような対策を行うのかにもよるが、その後の状況次第では新宿を閉鎖という案も出るのではないかとされている

勿論その先に待っているのは東京都の陥落だ

そんな状況、普通に考えても黙ってられる訳がないし名門校は主力レギオンを総動員し都内のヒュージを文字通り殲滅しなければならぬ…のだが

「(新宿の閉鎖と最悪東京の陥落。

それを良い事に将来の主力候補を育成と保護の名目で軒並み引っこ抜こうなんて考えか?あの名門は

それと、同時に相模女子を5大ガーデンから降ろす工作もしている?」

名門校筆頭である百合ヶ丘のレギオンはルドビコ女学院の崩壊後から新宿事変前までは頻繁に外征を行っていたが、騒動を機に一切やっつこない。

事件の背後を考慮して中止したのか、それとも新宿とその後の東京の動向次第ではかつての甲州のような事をする準備を裏でしている

のか：それは分からない

東京だと御台場とイルマも事態の収集に動いているがやれる事には限りがある

自分達の守備範囲の防衛に都外への外征

そこにルドビコの支援となると負担も増えるから当然だ

今度行われる防衛構想会議の参加者のリストを見るとヘルヴォルと一柳隊は当然参加

前回はいなかった御台場とイルマも参加し御三家の足並みも揃っている

「相模は：遊糸さんと葵さんだ

事件の当事者を派遣する形か」

「海瀧さんは難しい顔をしてどうしたのかしら？」

資料を読み込んでいると高嶺がこちらに話しかけてくる

話混ぜざらず、ずっと資料を読んでいたのを見て心配したのかもしれない

「いえ、笑ってられる状況じゃないよな、と

各校のエースが来るって事はそれだけ切羽詰まってるっていう事ですし

ライブやるとか、有名人が来るって騒いでる場合じゃないですよ？

新宿だけでなく首都である東京の陥落がかかっているんですから」

姫歌や灯莉はアイドル談義を行い、紅巴は来るリリーのリストを見て有名人に会えると興奮しているが、はつきり言ってそんなお気楽に考えられている状況では無い

仮に東京が陥落などすればその影響は東京に留まらず鎌倉にもでる

鎌倉のガーデンの中でも相模女子は他人事ではない

だからこそその危機感でもある

百合ヶ丘が楽観視しているのは戦力の他に地理的な問題だろう

「海瀧は悲観しすぎだよ

ひめか達はあの新宿事変を乗り越えたのよ

今回だって大丈夫なんだから。」

姫歌はそれでも大丈夫だと言いつ切る

先の騒動で相当自信をつけたようだ

それは灯莉や紅巴も同じだろう

それを認めるかのような扱いだつてきている

初心者組にしてみれば自信になる事しか起きていない

叶星と高嶺もどこか他人事な感じがする

まあこの二人は実力があるから当然なのだろう

程度に差こそ有れ全員が乗り越えられると信じ切っている

別にグランエプレだけではない

ヘルヴォルや一柳隊、いや、東京全てのガーデンが同じだ

過去の戦いでも証明されたのだ

ならば今度も大丈夫と思うのだつて当然かもしれない

「乗り越えても解決になってないじゃん

むしろ悪化してんだけど？」

この緊急時ぐらいアイドルとか封印して真面目に話さない？状況分かってる？」

確かに乗り越えたかもしれない

それで状況が良くなるならば良い

だが今はどうか、良くなるどころか悪化している

その中で行われる会議なのにアイドルだのまるで芸能人に会えるようなノリで参加されるのは困る…それだけだ

「ひめかは何問題だよ!!」

何？ふざけてると思つてたの!？」

「真面目にやってるなら尚更問題じゃん」

「はあ!?!何が問題だつていうのよ

ひめか達はアイドルリリィよ。皆を笑顔にする為にどうすればいいか考えるのは当たり前じゃない。」

「人を笑顔にするのと笑われるのは違うからね？」

空気読めずにそんな事したら笑われるだけだから

やるなどは言わないし必要なら私もやる。だけど、本当に頼むか

ら、空気を読んで行動しよう？

リレイとかそれ以前の話だから（そもそも、勝ったときこそいつも以上に気を引き締めるって当たり前前なんだけどなあ…）」

アイドルをやるなどは言わない

笑顔にする、その志は立派だ

だが時と場合を選ばないと只の大馬鹿者だ。

それを分かってほしいだけ。やる事を否定などしない

後は勝ったからと言って調子に乗るなど、それだけなのだ

相模では良く教わったことの一つ

勝った事に自信をつけ調子に乗ると次は必ず痛い目を見る

連戦連勝なんてやると自分達は万能だと思いが上がる

才能ある者ならば調子に乗っても連戦連勝、失敗もなく勝ちっぱなしになるが大半はそうは行かない

どこかで必ず痛い目を見る

その痛い目も振り返ればいい経験だった等とふざけた事を言う連中もいるがそれは才能と力のあるリレイが五体満足で生き残ったから

大半は痛い目等と言う言葉は生ぬるく命を落とす。生き残れても五体満足とは限らない。

相模の時は戦いで大勢のリレイが命を落としたり生還しても5体満足ではなかった事など多々あったし自分も目にしてきた。

今年の神庭ではそういう事が今まで無かっただけ。

警戒するし、ありとあらゆる状況に備え、常に最悪を考え行動する。それだけこちらが警戒をしても尚ヒューズは想像を超えてくるしその度に被害が出る

新宿事変のエヴォルヴなどその筆頭ではないか

味方を捕食し進化する個体など少なくともあの時までは知らなかった

「気を引き締めるのも大切だけど…あまり一人で考えすぎないのも大切よ？」

今日は解散しましょう」

叶星がそのように締めくくりミーティングは終わる

解散となるが姫歌と灯莉はアイドル談義を行うし叶星と高嶺は二人で話し、紅巴はリストを見直して興奮している

海漓は退出し部屋へと戻る…のだが

「海漓ちゃん？」

今日はグランエプレはミーティングと聞きましたが…もう終わってたんですか」

途中で藤乃と出会う
すると

「元気が有りませんね…そうだ！」

そのまま彼女の手を引いて何処かへと素早く連れて行く
高速移動系のサブスキルを彼女は所持していないはずだ
辿り着いたのは藤乃の部屋…ではなく生徒会室だ

「石塚藤乃のお悩み相談室」

本日のゲストは天野海漓ちゃんです」

「そんな部屋は無いわ

それに貴方に相談なんて任せられるわけ無いでしょう!!

何吹き込むか分かったもんじやないわ」

生徒会室だ

当然、秋日と鈴夢がいる

藤乃の奇行を平然と受け流し秋日が相談を引き継ぐ

「で、何があつたの？」

藤乃に何かされそうになった…っていう訳ではなさそうだけど」

「あ、それは大丈夫です。

いや、その…緊張感にかけてんな、と」

「新宿の情勢を含めての話ね」

彼女の言葉に秋日は何があつたのかを察する

そして

「一応フォローを入れると気楽なのはグランエプレに限った話ではないの

イルマや御台場は従来通りの立場を

鎌倉でも百合ヶ丘は御三家と同じ方針を取るつもり

相模女子は強い危機感を持っていて事態解決のための積極的な支援を提案。シエルリント、メルクリウス、桜ノ杜は必要に応じて言う立場よ」

「ええっと…何で鎌倉のガーデンでそこまで違う立場に…？」

「守備範囲の問題です」

鈴夢ちゃん。これを見て下さい」

そう言い藤乃は地図を用意する

そして

「各校の守備範囲がこちらです

さあ問題です。新宿の閉鎖や東京が陥落しヒュージが流れ出た場合、次に攻められるのは何処の土地でしょうか？」

「さ、相模原…ここって」

藤乃の問に鈴夢は地図を見ながら答えを言う

それが分かったからこそ言葉を無くす

自分も東京の話だと思っていたが地図を見るとそんな簡単な問題では無いとすぐに分かったからだ

「正解よ。」

相模女子もそれを分かっているからこそ、ここ数ヶ月の会議では積極的な支援を名乗り出ているわ」

「他4校は思惑に差こそ有れ結局は私等を緩衝地帯にして様子を見るつもりなのが見え見え

この現状だと相模が一番ヤバイから

5大ガーデンって言ってもまだ他校に比べたら層が薄いし東京でチンタラやられると困るわけ

タダでさえ陥落した甲州とも接しているしこれ以上陥落地と接した地域になる訳には行かないんだ」

海瀉の話は全て事実

鎌倉は東京と違い府内であっても外征宣言が必要であり自由に移動が出来ない

そんな中で東京が陥落し相模女子の守備範囲である相模原にまで東京の特型が流れてきたら凄まじい被害になる

既に甲州と言う陥落地と接しているのだ

これ以上陥落地と接するような事があれば相模原の陥落も見えて来る

東京の問題は早めに解決してもらわないと困るのだ

本当ならば他のガーデンも強い危機感を感じて欲しいが

東京程ガーデン間の繋がりが無い以上有事の際の援軍なんて期待出来ないし、自分達が苦戦している事など無視されるのも覚悟している

「そ、そんな…」

「話を聞くと本当に深刻なんだけれど大丈夫なの？」

鈴夢は思っていた以上に深刻な状況である事を理解したのか言葉を失い、秋日も心配する

彼女の場合、当然都内への危機感があったがそれ以上の事態が起きる事を理解したからだ

「現状なら問題ありません。」

強いリリイ揃ってますから。だからこそ東京が本当に鍵になってるんです」

「ミーティングでも真剣に話し合ってほしかった…そういう事ですね」

「はい。都外の心配をしるとは言いませんが都内位は真剣に考えて欲しいと思っちゃいます…陥落や大規模な撤退戦になったら御三家のエース以外だと果たして何人生き残れるか…」

藤乃の問に海瀉はそう答える

自分の住んでいる所の危機の時ぐらいは真剣に話し合って欲しいただそれだけである

東京からの撤退戦にでもなろうものなら甲州の比ではない被害が出るのは確実だからだ

他所の土地の事まで考えることを要求するのは酷だ

「…1年生3人はまだまだそこまで頭が回らないのは分かるわ

叶星と高嶺は後輩の出身地の状況位は考えてフォローしてあげなさいよ」

秋日も一年生をフォローをしつつもやはり上級生には厳し目の意見だ

仲の良し悪しでは無い

仮にも後輩の出身地の状況位は把握して欲しいと思ったのだろう
百合ヶ丘が危機感を持っていないから鎌倉は大丈夫とも思っただろうか

「私、特別な事を要求したつもり無いんだけどなあ：

空気読めっというだけなのに…」

「どう読んで良いのか分からないのではないのでしょうか？」

そういう意味でも次の防衛構想会議の参加はいい経験になると思
いますよ

自分の目で見て肌で感じて、そこで初めて気を抜いたら駄目だと感
じてもらうのが一番でしょう」

「こればかりは藤乃に同意するわ

経験に関してはやっぱり差があるし、陥落への危機感に関しては相
模女子出身の貴方が一番強いと思うから

それでも変わらないなら、うん。仕方がないわ」

海漓の言葉に藤乃と秋日がフォローする

言っただけなら自分の目で見て感じてもらうしかない

それで駄目ならもう諦めると言わんばかりだ

優しいが甘くは無いのがこのガーデンである

話を聞いてもらい少し気が楽になった気もするので海漓はお礼を
良い、生徒会室を出ようとす

ると

「私達は話を聞く事しか出来ないけど何かあったらまた来なさい
今度は藤乃に拉致される前に、よ。

レギオンは違えど貴方は神庭の生徒で私は生徒会長だから

あ、藤乃に変な事されそうになったらすぐに呼んでいいからね」
「変な事をするつもりないんですけどね

「わたくしや鈴夢ちゃんもいますから、また遊びに来てください」
「…」

そんな声をかけられ部屋を後にする
それを見届けた秋日は

「少しは元気になったかしら?」

「ええ。流石秋日さんです」

「…そうだ、例の転校生、来週中にはこちらにいらっしやるんですよ?」
「ね?」

「ええ。その為の準備もしないと」

忙しい日が続くけど二人共頼むわよ」

そんな会話をしていた

そして次の週、ついに防衛構想会議が開かれるのだ。

第54話

いよいよ防衛構想会議の日がやってきた

場所はルドビコ女学院

この日の為にルドビコ女学院が中心となり近隣のヒュージを掃討したようで今の所ヒュージによる被害はないという

グランエプレ、ヘルヴォル、一柳隊

その他多くのレギオンがこの場に集まってきている

「おーい！海瀉！！」

「久しぶりー！！」

そう言いながらこっちにやってきたのは一葉と恋花
すると

「もう風邪は大丈夫なの？」

「いつの話？とつくに治ってるよ」

かなり前の温泉を風邪で欠席した事を未だに心配していたらしい
「良かった。あの時も皆心配してたから…最後まで合流出来なかったりその…扱いの事もあったから」

温泉だけでなく、新宿事変では離脱した後最後まで合流出来なかった事や彼女達とは別のルートを使う事を選択した事、そして極め付きは海瀉達の活躍が無かった事にされた事への負い目もあったようだ
「あの後私らクエレブレに相当煽られたからね…」

『勝たせる為に徹夜で戦ってた同胞を踏み台にして名声を得るってどんな気持ち？』って」

そんなこと言うのは恋花

遠い目をする辺りエレンスゲ内で色々あった事は分かる

言うとしたら蒔菜か優珂だろう

あの扱いには思う所が多々あるようだ。

「まあ、これに関しては私等に非があるから何も言えなかったけど…

後、海瀉ちゃん聞いた？その、御台場の話？」

「アイツらがエレンスゲに来たってやつですよね

何か特型やら何やらで大変だったって聞きましたよ」

恋花の問に彼女は答える

アレはいつだったか

新宿事変が解決して少し立った時、東京に姉の天野天葉と番匠谷 依奈ばんしやうや えなの2名がやってきたと言う

その際、御台場に現れた特型ヒュージをヘルヴォル、一柳隊と共に対処したと一時期話題になった

「まあ、それはそれで大変だったんだけどね…

最後は瑤と天葉さんが少し揉めたけど」

「瑤さんがアイツと？」

お互い人とトラブル起こすタイプには思えないんですけど…」

その辺りは当事者間でどうにかする事だ

海瀉が口を出すべきことではない

とは言え瑤がトラブルを起こしたことは意外だった

彼女は人と揉めるようなタイプでは無かったと思うのだが…

「海瀉ちゃんの事だよ

会いに行かなくて良いのか？って聞いたんだけど『神庭に用事は無いから』って言った事に少し怒ってさ

まあ、理由は分かるし、瑤も十分に分かってる。でも…ね」

「まあ、仕方ないですよ。

隊長は自分のレギオンの事を第一に考えなきゃいけませんし」

なる程、妹に会いに行かない事、無視するような事が彼女の琴線に触れたようだ

とはいえ、姉の考えも分かる。

姉はレギオンを率いる隊長であり百合ヶ丘では江川楠美の姉でもある

直接あった事は無いが世間の話や紅巴から聞いた話を踏まえると相当精神面に問題があり、姉に依存するタイプの人間らしい

自分と会った事が耳に入った事による悪影響を考慮するならば関わらないのが最善の策になる

隊長はレギオンメンバーの事を踏まえ行動しなければならぬし、それが自身にとって大切な人ならば尚更だ

自身の立場など様々な事情もある

うかつな行動は出来ないのだ。

百合ヶ丘における疑似姉妹契約制度はガーデン内でマンツーマンの指導をする上で便宜を図る為の制度と言う訳ではない

百合ヶ丘でシュッツエンゲルの契約をするとそれは文字通り生涯契約になると言う

姉をシュッツエンゲル、妹をシルトと呼ばれていたはずだ

天野天葉にとって江川楠美はそれ程までに大切な人と言う事だ

ちなみに姉は百合ヶ丘では妹でもある。

三年生の榎若菜というリリイと姉妹契約を結んでおり、江川楠美との契約も合わせ世間では最も美しいノルンとも言われている

エレンスゲや御台場、イルマにメルクリウスと似たような制度を導入する所は多いがそれら全てが生涯契約になるかどうかは海瀉は知らない

神庭は：どうだっただろう：今はいい

調べればいいだけかも知れないが興味が無いのだ。

海瀉を知らなければその関係は尊いのかも知れないが海瀉を知っている人物からすれば実の妹放っておいて何してんの？と思う人物もいるだろう

あの紅巴でさえ姉絡みの姉妹関係は深入りするのを避けているようにも見える

「天葉様も申し訳なさそうにはしてたから海瀉に対して思う所はきつと有ると思うよ」

一葉もそう伝える

二人で話す機会もあったのだが、海瀉の事を話すときは何処か申し訳なさそうにしていたという

海瀉からすれば何か言いたい事があるなら会いに来て直接言えと行ってやりたいが、まあ良いだろう、とりあえず。

海瀉はそんな風を周囲を見渡す

辺りには会議に参加する為に大勢のリリイがやってきており、それ

に興奮する人物もいる

その後、一葉と恋花は会議と会議後に行われる合同訓練の打ち合わせの為ルドビコの校舎へと入っていく

自分もやる事は特に無いため、先に会議の行われるラウンジへと向かうことにする

そうしている内に時間が経過しいよいよ防衛構想会議が始まる

今回の会議の議長を務めるのは藤田ふじた あさがお 権

御台場女学校のリリイであり、ロネスネスの司令塔も務める優秀なリリイだ

そんな彼女がこの会議を取り仕切る

やはり新宿の現状の説明が最初になる

先の新宿事変で討伐したはずのエヴォルヴの幼体が都内各地に出

現
いずれギガント級にまで成長する可能性を秘めた事を考えると非常に脅威である

「この状況に対し風紀委員会が関東支部が提案する方針は2つ

1つ、各ガーデンに定められた固定守備範囲外への外征許可の緩和を始めたとした連携強化

非常時における臨時司令部の設置や新宿事変において被害の縮小に大きく貢献したガーデンを問わず結成された有志連合のような連携体制の設立も検討

後者に対しては設立時の人員以外にも各ガーデン間の派閥や対立等、考慮すべき事情があるかもしれないが有事の際には適切な支援や連携を行う事とする」

「(外征許可の緩和…よく百合ヶ丘飲んだな…あそこクツソ煩いのに)」

彼女の発言に対し海漓が気になったのはこの部分

東京都内であれば自由に移動して良いため何を今更となるかもしれないが、実はこれ東京独自のルール

鎌倉は同じ府内であったとしても守備範囲から出る際には外征宣言をする必要がある

別に外征宣言しないで外征してもペナルティは無いが非難はされる

最たる例はエレンスゲ。ヘルヴォルとバシヤンドレ以外のレギオンはよく外征宣言なしの外征を行う。

これは方が一の事態際のガーデンからの増援や救助体制を維持する為と一般的に言われているが実質は自分達の獲物をよそに取られたくない為の言い分だ

特に煩いのが百合ヶ丘と桜ノ杜。

そのような行いに対しては自分達には何も影響がない時も強く非難している

そんなガーデンもあるにも関わらずこの話が出るなどどういうつもりかと疑うのも無理は無い：もしくは

「認める代わりに主力は出さないとか言った？なら一柳隊が来てるのも納得行くし新宿の時に増援が無かったのも納得出来るけど」

この話題がいつ出たのか：それは彼女の知る所ではないが成立の際に何らかの条件を突きつけた可能性は大いにある

そもそもの話だ

自分達やヘルヴォルはトップレギオン以前に東京のリリイだから会議への参加資格は有ってもおかしくはないが、一柳隊に関しては本当に謎だった

会議や事態の解決には主力や担当するレギオンを派遣するのがセオリーだし百合ヶ丘の方針を考えても外征時には他のレギオンも来なければおかしい

新宿事変だって本来は防衛構想会議の日だ。あの時既に外征の件が決まっていたのなら自分達の合同レギオンや合宿を経ての会議の参加も納得だ。

外征3レギオンの条件も満たせる

事前の会議で何らかの取り引きがあったのかもしれないし、外征条件が緩和されるならわざわざ主力を派遣しなくても良いと言う判断をしたのかもしれない

有志連合に触れたのは意外だった

本来の命令ならばともかく本当に有志で構成されたもの
マスコミ程の扱いとまでは行かなくともこの会議では無視、もしくは
触れて来ないと思っていた

適切な支援と連携を会議で提案という事は今後とも結成される事を
見越した上での判断だろう

「2つ目。実質的に崩壊に至ったルドビコ女学院

新宿を含めた西東京の防衛」

そう告げる

現状のルドビコはリリィよりも教導官の大半が死亡し機能停止状
態

それを踏まえルドビコを支援しようというのだ

途中から権の口調が砕けより分かりやすく伝えられる

こちらが彼女本来の性格のようだ

その後告げられたのはルドビコ女学院に対し3レギオンを増援と
して派遣する事

「派遣するレギオンの候補なんだけれど

神庭女子藝術高校 グランエプレ

百合ヶ丘女学院 一柳隊

エレンスゲ女学院 ヘルヴォルを考えている」

その言葉にグランエプレの面々は驚く

まさか自分達を選ばれるなんて、と

そして、ヘルヴォルが選ばれた事で会場がざわめく

騒ぎを耳に入れつつ海瀉は少し違う視点を持つ

「(当事者を送り込む事で都への協力をしつつ、ちゃっかり主力を温存
…東京の騒ぎを囿にして主力を総動員する大規模作戦でも計画し
てる？それとも百合ヶ丘は東京を重要視してない？仮にも首都なの
に…?)

面倒事は他所に押し付けるってのもあるんだろうけど)」

当事者の派遣で協力すると見せかけ、百合ヶ丘は主力の外征レギオ
ンを温存した形となる

そうする理由など一つしか思い浮かばない

百合ヶ丘にとって重要視している地域への大規模な反抗作戦の計画だ

何時、何処に仕掛けるのか、までは分からない。自分は百合ヶ丘の関係者ではないから

だがこの位の理由しか百合ヶ丘が頑なに主力レギオンの派遣を渋る理由がないのだ

「(新潟も駄目で東京もコレ：百合ヶ丘は何処を重要視してる?)

甲州、静岡：後は関西方面を?)」

新潟も百合ヶ丘出さずに御台場から派遣

東京も扱いとしては低め

百合ヶ丘はあの巨大戦力を何処に回すつもりなのか全く分からない

因縁と重要度を考えるならば甲州と静岡は確定

だがこの2つは相模女子を筆頭に鎌倉の他のガーデンも重要視している

東北方面は話を聞かないため関西方面を重要視しているのか?

全く分からない

後は考え方

誰かがやるんだから自分達は関係ないという思考だろう

「(イルマや御台場からの派遣は無し：こっちも外征を見据えて：か

雑用押し付けてくれるよ：全く)」

そして、この派遣にイルマと御台場がないあたり自分らも外征をするつもりなのだろう

自分達は名門の引き立て役や都合のいい雑用係じゃないのだが：
と思ってしまう

そんな風に考えていると会議が終わる

ヘルヴォルの参加には意見が多々あったが上手くまとめ、最後に権が皆の士気を上げるような言葉を告げ会議を終わらせる

「この後は合同訓練だったね」

「そうよーひめかが目立つチャンスなんだから」

会議が終わりそれで解散と言う訳ではない

その後には参加ガーデン全員参加の合同訓練がある

ルドビコ女学院の自己紹介を兼ねた模擬ヒュージとの戦闘

その後には全リリイ参加の訓練が控えている

全て終わったあとにはルドビコとの交流会も企画されていたはず

この日はまだ始まったばかりである

第55話

この日の訓練の目玉とも言える合同訓練

その名もタグ

やる事は鬼ごっこだ

制限時間内にチームメンバーがどれだけ捕まらなかったかで点数を競う

鬼が背中につけたタグを奪えば高得点

味方の位置情報をCHARMのマギリスタルコアに登録する事で離れていても連携が可能

チームワークが試される訓練である

：有志連合を意識した内容かもしれない
クジ引きでチームを分ける

…のだが

「これ、クジに細工とかされてないよね？」

海濱がそんな風にボヤクのも無理は無い

合同レギオンの縛りで言えば大半がその中でうまい具合に同じチームになっている

そんな中で海濱だけ知り合いが誰も居ないチームになる

高嶺もグランエプレの面々とは別だが御台場やルドビコのリリースのいるチームに振り分けられた

いくつかの組み合わせに分け先ずは予選、その後勝ち上がったチーム同士で決勝戦という流れになる

今は事前のミーティングタイムという事で自己紹介等を軽く済ませる

そして、競技開始

本来ならば連携をする競技…の筈なのだがとあるチームのとある組み合わせはその意図を全く理解していない行動を取り始めたのだ

「いやいや…あれ駄目ですよ」

海瀉達のチームは競技開始直後、様子見の為各自建物の中に隠れたのだがそこで暴挙とも言える行動を目撃する

二水、梅を筆頭としたチームなのだが何を血迷ったのか開始早々に二水と梅がレアスキルを使用し文字通り他のグループを殲滅しにかかったのだ

「いいの、あれ？」

「レアスキル禁止とは言ってないけどこんな訓練にならないよ」

「やられたガーデンの子も戸惑ってるよ…レアスキル使われるの想定してなかったんじゃない？」

そんな事を各々口にする

無理もない

二水はのレアスキルは鷹の目、梅は縮地

鷹の目の効果は空から地上を見下ろす視点が与えられる、状況を把握する

それらの把握した状況を見方に伝えられる力

縮地は簡単に言うならば高速移動だ

鷹の目で探し縮地で接近して終わり

単純な制圧作業

これを百合ヶ丘のリリイがやるのだ

知識も力も劣る他の面々では叶う訳がない…普通ならば

「流石、百合ヶ丘。期待を裏切らないね」

海瀉はそう言う

自分達が捕まっていないのは建物の中にいるからだ

「(少しでも上になろうものなら自分達は理不尽を与える側か…本当にムカつく)」

これが本当の戦場なら確かに即死だ

もしかしたら今後、このような特性を持ったヒュージが現れる可能性だって十分にある

市民、リリイ問わず弱者がそのような相手と運悪く鉢合わせたらヒュージは理不尽に命を奪っていく

被害だつて凄まじいものになるだろう

それは分かる

海瀉だつてリリーの端くれだ

だから彼女達の行動は全て正しいのかもしれない

自分達は強者で相手は弱者

弱者を理不尽に狩っていったって問題はない……とても思っているのだろう

名門には弱いやつはリリーなど辞めろという者もいるぐらいだ。おかしくはない

だけどこんな理不尽な事をされて、優越感に浸っている光景を黙って受け入れ、百合ヶ丘は強いなんて呑気に思うほど、天野海瀉はお氣楽ではない

やられたらやり返せ、理不尽を与えてくるなら理不尽に倒せ、その位の気概は相模で培った

その為の策を練るなら今しかない

「何とか出来るの?」

「当たり前。あれで二水さんの底も見えた」

そう問われ海瀉は堂々と返答する

個人的な感情を抜きにしてもあれを無警戒で堂々と行えるあたりに二水の底も見えた

こちらも遠慮なく行かせてもらおう

「策なんだけどね……」

そう言い海瀉は案を伝える

「ええっ!?!」

「声デカイ」

聞いた面々は動揺する

それはまさか、とも言える策だからだ

「作戦の鍵は貴方達だからね、頼むよ

私が最大脅威の梅さんを抑え込むから貴方達は指示通りに

敵チームに仕掛けるタイミングは貴方達に任せるから

あつそうだ。貴方は残つて」

策を説明した後、そう告げる

一人だけ自分の所に残す

この作戦、最大の障害はやはり梅だ

あれをどうにかしなければ作戦も何も無い

自分が一番強いから引き受ける…というよりも合宿の時に一度対決しこの場は自身にとつて少しだけ有利に働く事

そして何より百合ヶ丘の思考というものをわかっているからこそその提案だ

手の内を知っている相手が敵に回ったら驚異になるはずだ

「う、うん！」

「気をつけてね」

返答を確認すると海漓もレアスキルを発動し姿を消し、建物から脱出、梅を探す

狙うリリイの特徴も分かかっており見つけるのに時間はかからなかった

「私は…？」

「貴方は…」

残した一人に耳元で策を伝え、配置につかせる

「(欲張っても良いこと無いのに何やってんだが)」

海漓はそんな風に考える

この訓練、自分達以外を全滅させろというルールや全滅させるまでのタイムを競うではない

制限時間内にどれだけ多くのリリイを捕まえ点数を稼いだかを競うもの

既に二水達は参加グループの大半を撃破したのだから勝ちが決まったも同然。

残りは自分達と一葉達のグループ位だろう

もしかしたら何処かに隠れているかもしれないが、それらを自分や一葉達が倒しても二水達の点数には届かない。

本当に勝負がついたのだ

後は適当に逃げ回れば勝ち

これ以上攻めて残りを全滅させにかかった結果、下手にカウンターを仕掛けられ、タグを奪われ、失格となり稼いだ点数を全て失い負けるリスクを犯す必要は全く無い

それでも全滅させに来るといのはまあ、完璧を目指す百合ヶ丘らしいとも言える

そもそも作戦としても穴がありすぎる

攻めも守りも梅に任せ自分は指示を出すだけで高みの見物など司令塔以前にリリイとして恥ずかしく無いのだろうか？

ここが本当の戦場で対ヒュージと戦い自分が司令塔と仮定したとする。

味方に指示を出すだけで自分は戦わず、フォローも全て先輩や仲間任せなりリリイなど情けないではないか

背中に守って貰う事はあっても自分から背中に隠れに行くのは違う。

リリイになって数日ならともかくもう半年は経つのだ。

最低限自分の身は自分で守るか味方が戻ってくるまでの時間を稼いぎ逃げる位の実力を身につける。ぐらいの事は出来ていないと駄目である。

まあ、これは海瀉の価値観であり百合ヶ丘では許されるのかもしれない

それに二人しかいないならばまだしも彼女の所にだって仲間がいる

近くにいないという事は何処か安全な所に隠れてもらっているはず

作戦に参加していないところを見ると…恐らくは何処か一箇所にとまってもらっている。それも絶対に見つからない所に…それはまあいい。海瀉は既に対処するための指示は出した

話を戻そう。

例えば鷹の目の範囲外の敵を梅に任せ、範囲内はグループの仲間任せればカウンターも仕掛けられにくい

仮に攻められて厳しくなれば自分と仲間で時間を稼ぎながらタグを守り、その間に戦術の要である梅に戻ってきてもらえばいいのだ。それこそ優先して高速移動系のレアスキル持ちや視覚系のレアスキル持ちを狙えば勝率は格段に上がる。

結局の所、強いリリイを扱う事はできても自身の求める基準に満たないリリイを扱う事は出来ないのだから。

名門は何処もそうなのかも知れない。

新宿事変の時の舞弓との会話そのままである。

「百合ヶ丘は他所の情報を信じない」

更に言うなら他所、特に弱いガーデンのリリイの事など信じていない。

多かれ少なかれ名門ガーデンならば誰もが持っている思考だ。

特に生え抜きともなればそれはかなり強い。

だが気になる事もある。

「(この子、確かにリリイになったのは定盛ちゃん達と同じように高等部からだろ？それが半年でこんな思考になるって百合ヶ丘マジで怖すぎる：元々あつた思考が百合ヶ丘で開花した?)」

確か二水は自分達と同じ高等部からのリリイのように姫歌が言っていたはずだ。

百合ヶ丘に入学すれば本人の人格に余程の問題がない限りはガーデンから手厚いサポートが受けられる。

レギオンの内外問わず恵まれた指導を受けられる。

それこそ、海濱では絶対に体験出来ない事ばかりだろう。

そりゃそんな所に半年もいて得意な戦術の勉強をすれば強いリリイを己の意図するままに動かせる力を得られる。

羨ましい限りだ。

とはいえ入学してまだ1年も経っていない。

それにも関わらずここまで見事に百合ヶ丘のリリイになってしまっただけで尊敬を通り越して恐怖でしかない。

だが、今回はそれが大きな隙となる。

梅は強い。自分が真っ向勝負を挑んだ所で瞬殺されるのが目に見

えている

人として、リリイとして、出来が違いすぎるのだ

二水は優秀なリリイだ。

百合ヶ丘の門をくぐり今まで生き抜き、その中で経験を、知識を得た

百合ヶ丘に入学できた時点で自分よりも資質は上だ

そして百合ヶ丘内で出来た人脈を活かし、己の力を磨いてきた

それも既に自身を上回っているだろう

もしかしたら彼女の背後には優れた司令塔の上級生がいてエースを活かすための本格的な指導を受けているのかもしれない

同級生とは切磋琢磨し腕を磨いているだろう

だがそんなエリートだからこそ隙が出来た

誰が言ったか

【撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけ】

この状況そのものだ

レアスキルを発動し相手を殲滅するならば自分達もレアスキルを使われ殲滅させられる覚悟があるからだろう

訓練の意図も理解せずにやるなら尚更だ

【世の中自分の思い通りになると思うな】

これもよく言われるだろう

リリイの権利がとか言われるかもしれないが別に言われるのはリリイに限った話ではない。リリイでなくても子供も大人も普通に生活してれば一度は聞く言葉だ

世の中全て自分の思い通りに行くなどまず有り得ない

戦場なら尚更だ

この状況そのものだ

このまま百合ヶ丘の思い通りなどさせてたまるか

抵抗：とまではいかなくとも嫌がらせの一つでもしてやらなければ気が済まない。

この策だつて作戦というよりも単なる嫌がらせだ。

というか嫌がらせが大事だ

普段の日常生活でこんな事やったらリリイ以前に人として大問題だが戦いでは話が別

相手の嫌がることや恐れる事、致命的な弱点ををついて倒す。戦いとはその繰り返し

このような競技もヒューズとの戦いも同じだ

そんな事はせずに正々堂々と華麗で美しく戦えるのは姉を筆頭とした上層のリリイのみ

生憎自分はそちら側でないし相手の土俵に立つつもりとない自分のやり方で戦うのだ

いや、それしか出来ないのが彼女であり大半のリリイだ

その為の策は練った

後はそれぞれが役目を果たすだけ

海瀉は手元に落ちてた小石を拾い上げ梅に投げつける

姿も気配も消えた状態で

「…!?何処だ!?!」

「こつちですよ、こつち」

「そこか!!」

声の方向に梅が近づきそこに居た海瀉を捕まえる

彼女の速度に海瀉は対応出来ずに難なく捕まる…と思われた

「…消えた!?!」

梅の手は彼女の体をすり抜ける

虚空を掴んだのと同じだ

「だから」

一人

「こつちですって」

また一人

「ほら、ほら。良いんですかボケっとしてて」

?更にもう一人

「?!?!」

!?彼女を囲むように海瀉が三人出現

それだけではない

そこにあつた建物が姿を消し道ができたかと思えば、何もなかった所には建物が

地面からは大量の水が湧き出で来る

「いやー、助かりました」

「貴方達が考えなしにレアスキルをぶつ放してくれて」

「これで私達もお構いなくレアスキルを使えます（いや、本当に助かった）」

「純粋な身体能力なんて私アレだし…」

「分身した海瀉が一言ずつ話す

これはすべて本音だ

煽つてはみたが自身の想定通りに抑え込めばいい方だと思つてい

る
やはり大きいのはこちらにレアスキルを発動する大義名分をくれた二人だ。感謝してもしきれない

「純粋な身体能力の勝負に持ち込まれたら海瀉は何も出来なかった

鬼ごっこで必要な足の速さなんて海瀉にしてみれば最悪の一つ

「マジも何も使わない純粋な鬼ごっこなら足の遅い海瀉などカモラ

れる…普通の鬼ごっこなら灯莉や姫歌に捕まるし二人を捕まえられないレベルだ

「これで自分も思う存分レアスキルを発動出来る

「おいおい。忘れたのか？」

「こつちには鷹の目を持つてる二水がいるんだぞ」

「梅はそう話す

「自分達は無敵とまで言っていたのだ

「そりゃ、そう言う言葉も出るだろう

「当たり前だ

「なら、聞いてみれば良いんじゃないですか？どれが本物か」
「話している間に」

「梅さんが背中中のタグを取られても構わないなら…ですけど」

「だが海瀉はそう忠告する

「別に二水に聞かれたって海瀉は構わない

自身から意識を一瞬でも外した瞬間に背後を取りタグを取ればいいだけ

これに関しては確信がある

現に最初の投石を梅は避けられなかった　し幻覚にあっさりと引つかかった

それを踏まえての発言だ。

海漓としたらやるなら、やれ。である

「タグを取ったほうが早い…」

取ったら消してくれるんだろ？」

「ええ、勿論。」

梅としては自身が戦術の要である以上海漓の相手を諦め二水の所に戻ればそれで良い

しかし、この幻覚だ

道すべてが幻覚で二水とは逆方向に誘導された、なんて事も起こりかねない

ならば海漓のタグを取るのが先決だという判断をする

海漓としてもここまでは想定内

こっから先は未知数だ

意図しない形ではあるが、こうして海漓対梅

合宿以来の直接対決が始まったのである

第56話

さて、海瀉と梅のレアスキルを使った鬼ごっこ対決
その状況はというと

「速い…油断すると捕まるな」

海瀉は逃走一択

とはいえリリイとしての力は全てにおいて梅が上

海瀉が梅よりも優れている事など何一つもない

だが、それでも今尚戦えているのはこのフィールドと自身の幻覚が
噛み合っている事…あとは

「これは幻覚…うわわっ！」

「演技だったら不味いけどすり抜けないって事はS級じゃない？」

見た事が無いから断定は出来ないけど」

梅は幻覚を見破るがその先にあったのは壁

そう、縮地は凄まじいスピードでの高速移動だが障害物をすり抜ける事は出来ない

先殆海瀉が言ったS級というのは海瀉達が持つレアスキルを最大限まで成長させる事であり、その領域になるとレアスキル固有技と言うさらに強力な力を使うことができる

全てのレアスキルに存在するとも言われており、縮地のS級は異界の門と呼ばれワームホールを使いワープする事が出来るらしい
：生憎と海瀉はS級の固有技を見た事が無いため何ができるのか分からないが建物をすり抜けてワープしないあたりS級では無いという仮説は立てていいだろう

高速で硬い建物の壁にぶつかるのだ

当たったら痛い。当たり前の話

本能で止まるか道を変える

今は本物だが幻覚では偽物の建物も当然だが作り出している

慎重に見分けなければ激突

窓にでもぶつかろうものなら破片による怪我は免れない

もう一つの理由は

「ごつちですよ」

「そこ…!」

外れ…次!!」

海瀉は気配を飛ばし、分身を作り出し梅をとにかく騙し、スピードを抑え込む

幻覚の気配など無視しろ…となるし梅も分かっているのだ
頭では分かるが体が反応してしまうのだ

百合ヶ丘の教育は確かに世界最高峰だ

そしてそこにいる全てのリリイは才能溢れる素晴らしい面々だ
海瀉が彼女達より優れている事など何一つとして存在しない
だが、今回ばかりはその最高峰の教育と環境が仇となる

「嫌ですよね…自分達の教わってきた事を逆手に取られるの!」

「そつち!?…いや、違う!」

気配を飛ばし、視線を向け、梅を惑わす
体が反応するのだ、中々にキツイだろう

相手の気配を、視線を、動きを、捉え読んで行動する

高度なノインヴェルト戦術を行う上で必要な事だ

百合ヶ丘に限らず名門では教わる事

叶星と高嶺の誰も寄せ付けない二人だけの世界とも言える凄まじい連携の正体はこれだ

言葉を交わさずとも通じる信頼関係

それを応用すると下手なりリイ相手なら幾らでも優位に立てる

合宿の時にノインヴェルト戦術を行う為の練習試合で梅が自分達の動きを読んだのも技術を応用しこちらの動きを読んだから

自分達も叶星と高嶺から教われと言われるかもしれないがこの二人は教えていないし、そういう技術がある事すら伏せている

海瀉も相模時代は基本的なノインヴェルト戦術をやりつつガーデン独自の特殊戦法を行っていたのでその手の技術は教わっていないのだ

それを逆手に取る事もユーバーザインなら可能

百合ヶ丘のような名門でユーバーザインが嫌われるのはガーデン

での指導とレアスキルとの相性が悪いから

お得意のノインヴェルト戦術に落とし込むのが難しいと言われる理由もコレ

「幻術を見せるのは良いけど、それで良いのか？」

そうしていると不意に梅が海瀉に呼びかける

「グランエプレの皆が話してたけど、マジ保有量。

平均よりも少ないんだろ？」

このレベルの幻覚維持：長時間出来る訳がない」

「あれ？話しましたっけ私？」

神庭やエレンスゲの顔なじみはともかく貴方達に話した記憶は無いんですけど」

梅の言葉に海瀉は疑問を持つ

確かに彼女の言うとおりに海瀉のマジ保有量は全てのリリイの平均よりも少ない

名門ならば入学基準に達していないレベルかもしれない

しかし、その事は神庭やエレンスゲの親しい面々ならばともかく百合ヶ丘には話していないはず

故障ならばともかくマジ保有量と言う個人差のある事柄については打ち明ける者はほぼ居ない。

自身のマジ保有量を考慮しながら戦闘を行うなどリリイとしては当たり前な事だからだ

「エヴォルヴの作戦会議の時にそんなに話題になった

居なかったから知らないだろうけど」

「(定盛ちゃん達はともかく叶星さん達は自分の事は仲間にすら秘密にするのに他人の事情はバラすのかよ…)」

自身が居ない時にそんな話題になったのだろう

その時に有志連合に参加したのだから海瀉が知らなくとも無理はない

姫歌達はともかく肝心な事を秘密にしている上級生が自分達の事を棚に上げ他人の事を勝手に話すのはいかがなものかとは思う

「まあ、少ないですけど…秘密にして何か問題あるんですかね、それ

？」

別にバラされた所で痛くも痒くもないので普通に対応する

名門ガーデンに通うリリーのマジ保有量がおかしいのだ

隠した所で問題は無い：と彼女は考えている

「問題あるに決まってるだろう！」

何言ってる」

「マジも戦力も今自分の手元にある分を最大限に使って戦えばいい。それだけじゃないです？」

そりや多いに越した事はないですけど：別に少ないからリリー失格では無いでしょう？」

梅の言葉にも海漓は動じない

確かにマジ保有量はリリーにとって生命線

少なければ危ないと考える者も多いかもしれない：が、海漓は違う今の自分にできる事をちゃんとやり、与えられた戦力を最大限に活かして戦い、勝つ。それだけの事だ

勿論多いに越した事はないが少ないから何も出来ないという訳ではない

名門のリリーが持つような超高性能CHARMや最新のバトルクロスは要求されるスキルー数値以上にマジ保有量の観点から彼女は使用する事が出来ない

そういう意味でもヒイロカネ製のCHARMというのは海漓と相性が良い

「確かにこれだけの事を一人で全部やるなら持って数分です。」

時間切れと同時に全て消えるんで。」

そんなの彼女はとづくに分かっている

分かっただけならば中等部の時点で死んでいたし、今もこうして生きてなどいない

状況に応じて加減をするのだから

無理な使い方をしてガス欠を起こし、動けませんなど笑い話

それに、梅は勘違いをしている

「そもそも、私はいつ一人で貴方を足止めするって言いました？」

「はっ！」

そう、この戦闘が始まる前に彼女は一人で梅を倒すなど言っていない

その直後だった

「隙あり!!」

「なっ!？」

梅の不意をつく形で背後から突然タグを奪い取られる

全く意識していなかったその行動に梅は呆然とする

そしてその瞬間幻覚も全て消え去る

そこで答え合わせ

梅の背後は壁となっておりそこには海瀉の班のリリイが一人立っていたが肝心の海瀉が居ない

そして梅が気配を感じ上を見ると建物の窓の所に海瀉がいて、こちらを見下ろしていた

タグを取ったのを確認すると海瀉は建物から飛び降り地面に着地

「その子、ユーバーザイン持ちです」

途中から景色の幻覚を生み出すのを変わってもらったんです」

「作ったら後はここに自分の分身と気配を飛ばして梅様を誘うから… タイミング見てタグを奪えって言われたんです」

そう説明するのは海瀉の班のリリイ

彼女もユーバーザイン持ちだったのだ

ユーバーザインの二重掛け

流石の梅と言えども見抜けなかったようだ

それだけではない

海瀉達が梅を倒し終わったのとほぼ同時に二水を含めた残りの面々も全員捕まった事が判明する

「い、いつの間…」

「ほぼ同時進行です」

二人以外の姿が見えないのってほぼ確実にどっかに隠れてもらってるからでしょうし、隠し所に目処立てて送り込んだんですけど… 大当たりです」

そう、梅の足止めと二水達の撃破は同時進行

先の打ち合わせで出した海瀉の指示はすごく単純な事

海瀉ともう一人で梅を撃破し残りの面々はその間に二水と隠れているであろうチームメイトの撃破

梅の強さと二水のレアスキルの組み合わせで戦っているチームだ

他の面々ならばこちらの人員で十分に対処できると考えた

すると、その案は見事にハマった

実力に差こそあれこの場に呼ばれる程の力のあるリリイの集まりだ

誰を狙うのか、何をすれば良いのか指示を与えれば行動もしやすい
こう言う初めての取り組みの時の指示は分かりやすく、簡潔に。

何もしなくても勝手に連携が出来るのはそれこそ、百合ヶ丘クラス
のリリイだけだ

向こうも自分達のように作戦を練り連携していたならばこうは行
かなかつた

それに今回は海瀉が司令塔となり指示を出すと言う今に至るまで
誰も知ることのなかつた役割での行動だ

その時点で奇襲となる

梅の足止めと撃破が上手く行ったのは地形の影響が大きいし、何よ
り向こうが自分を天野天葉の妹と認識したのも大きいだろう

姉のようなキャプテンシーで皆を鼓舞し、正々堂々と正面から勝負
してくる

そんな馬鹿な事を考えていたのだろう

本当に色んな事が噛み合ったからこそその勝利だ

次は無いというのは分かっている

それに、もう一つ、この結果になった理由がある

「(こればかりは私の勝手な思い込みだけど…名門のリリイって奇襲
とか不意打ちみたいな予想外の事に弱いイメージあるんだよな…ミ
スした後の切り替えとか)」

勿論、全員がそうではないのは分かっている

奇襲されたら弱いのは当たり前前なのだが、奇襲される事を頭に入れ

ていなかったりその後の立て直しも出来ないのは流石に不味い

高い教育を受け、努力を積み重ねた自分達は完璧であるという思考の弊害だろうか

エヴォルヴでもその傾向は見えた

たまたま上手く行っただが未知の敵相手に策も練らず奇跡に頼り決戦を挑むなど海濱からしたら正気の沙汰ではない

それにガーデン側は上手く揉み消したようだがマギリフレクターの対応の件もある

少なくとも相模でそんな事をやろうものなら隊長、司令塔の解任と今後の役職への就任禁止は当たり前

状況によってはレギオンの解散もあり得るレベルだ

あくまでも憶測だが百合ヶ丘よりも御台場上層部の働きもあつたと考えている

叶星と高嶺は御台場出身

今のトップレギオン、ロネスネスとヘオロットセイנטの前身となる予備隊で中心を担っていた

そんなリリーの醜態が広まる事による御台場への悪影響を恐れたのかもしれない

「さて、残りは一葉達だけか…このまま逃げ切りたいけど」

そんな風に呟くと同時にヒュージの出現警報がなる

「あつぶな、これ以上続けてたらマジが尽きて出られなかった

…レギオンどうするんだろう」

とはいえ考えるのは後、今は出撃しヒュージを倒すのが先

そう考えながら出撃するのだった

第57話

ヒュージの出現と同時に海濱も当然出撃
レギオンは先の班を継続するという形だ

折角組んだのだからと言う流れもある、彼女が隊長と司令塔を兼任する形になる

訓練とはいえ半ば嫌がらせの策で梅と二水と言う百合ヶ丘の
リイを撃破した事が大きいだろう

「さて、じゃあ確認。…全員ラージ級までは戦え…ますよね」

彼女は班員に改めて確認

当たり前の話だが鬼ごっここと実戦は違う。遊びのノリで戦闘に
加すれば命を落とすだけ

この場にいるリイは力のあるリイ

最低限ラージ級までは戦闘経験があると思っ
ているがそれは彼女の考え

それも踏まえての確認だ

「全員ある。よし、とりあえず4人の班を2つ作ります。

陣形なんですけど…

配置は…あ、いや、説明したほうが早い
か

手を広げてください」

言われるがまま4人の班を2つ作り、手を広げる

彼女は確認すると

「親指から薬指の所にリイを配置します。説明終わり。

8人居るんで2つ出来ますよね。簡単でしょ？」

その言葉に混乱する

レギオンのフォーメーションといえばAZ、TZ、BZの3つに分
け人員を配置し連携をするのが一般的

手を広げた形の配置など聞いたことがない

「そんなフォーメーション何処にも…」

「即席メンツで陣形組むには時間が足りませんし、皆さんの普段の

陣形なんて分かりません

説明も複雑ですし：非常時は簡単な陣形を組んだ方が説明する時間省けます。

戦う時は手を内側に捻る動きをすると誤射に繋がるので捻るなら外側に。

移動の時は外側に手を捻る容量でお願いします」

疑問もも来るが、それも論破

説明事態は分かりやすく誰もが納得するためそれに関しては異論はない

「後は単独行動はしないようにお願いします

説明は以上。質問は？」

全員特に無いようだ

それを確認すると、戦う際の注意点、コツを伝える

その直後にヒュージと接敵、戦闘開始となる

「特型のスモールも出て来たか…

でも、あの時よりも遅い…！挟み込んで撃破！」

普通のスモールだけでなく特型のスモールもかなりの数が出現

だが、こちらはあの時に比べて動きが遅い

挟み込めば十分に倒せる

レアスキルを使う必要もなく、射撃でヒュージを的確に撃ち抜く

他の面々も射撃で撃ち抜き、近接戦で切り伏せる

そのの繰り返しだ

この戦闘に関してはこちらが有利

「スモールだけっていうのも有るけど…」

「この陣形…意外と使える？」

「その二人油断しないの!!戦闘中だよ！」

海滴のグループのメンバーはそんな事を漏らす

一人は注意もしてくれる。有り難いことだ。

恐らくはもう一つの班も同じ感想を持っているだろう

相手がスモールだけという事もあるが、それにしても普段よりも素早く倒せているというのは実感している

普段ならまだしも即席メンバーで戦ってこの速さはやはり不思議なのだ

間違いない陣形と海濱から言われたコツが活きている
そんな時だった

「な、あれは!!」

一人の班員が声を上げる

それは本当に唐突だった

突然ギガント級が2体現れる

一体は恐らくは地下から

もう一体は上空から

こちらに攻撃は来なかったものの付近からは火の手が上がっている

「ギガント級?」

小規模ヒュージの群れって言う報告でしょう!」

「ど、どうするの!」

ギガント級が現れた事に驚愕と同様

ラージまでは確認したがギガントの確認はしていない

とは言え動揺してはいられない

今の自分は司令塔、冷静に判断を下さなければならない

「(増援の必要が…あ、叶星さんいる

って事はあのグループか)」

彼女のトリグラフのマギクリスタルコアにはグランエプレ全員の位置情報が表示されるようになっていた

新宿事変後にはぐれてしまった反省を踏まえ登録しておいたのだ

それに加え訓練前に仲間の位置情報も登録している為、次の動きの為の指示は出しやすい

「このままヒュージの群れの相手を継続!」

ギガント級以外のヒュージを全滅させる!!」

増援に向かう…では無く今の持ち場を離れない

それが彼女の判断だ

「ギガント級は?」

「叶星さん達の班が相手をやるから私達が向かっても邪魔になるだけそれに、高嶺さんが現場に向かつてるって事は多分御台場の面々も連れて来るからギガント級はそっちに任せる！」

叶星がいるという事は紅巴もいる

更に言うなら先の班でそのまま戦っているだろう

故にギガント級に複数方向から攻撃しているような音も聞こえてくる

あの班はグランエプレ以外に一葉と瑤、梨璃と夢結、そして船田姉妹と実力者が大半を占める

更に高嶺も画面上では高速で叶星達の所に向かつており、彼女の班には御台場のリリイがいたはずだ

実力も連携も問題ない

一方の自分達は全員、叶星達と比べると実力は劣る

そんな所に増援に向かったって足手まといだと言われるに決まっている

何よりもギガント級相手に即席レギオン、即席フォーメーションで挑み勝てる程の力は残念ながら無い

ギガント級というのは下手なりリリイや不安を抱えたレギオンが挑めば全滅するほどの力を持った個体だ

そんな所に連携面で不安要素を抱える自分達が向かい、味方を危険に晒す事など出来ないし、そのような判断を下す事は出来ない

それに、自分達が増援の為に持ち場を離れてしまえばそこが穴となる事でヒュージの侵入に繋がり避難した市民に被害が出て大変だそれらを踏まえると増援に行かないのが最適な答え

あくまでも自分達の役割を果たすのだ

「私達はラージまでのヒュージの相手に専念してここを死守

ギガント級から放たれる攻撃や流れ弾には注意して」

通信でも仲間にそのように伝える

その後も戦闘は行う。ギガント級はこちらに攻撃してくる気配は

なく、叶星達が上手く立ち回っている事が分かる

全員が自身の話を聞き入れてくれたのは不幸中の幸い

勝ち気で闘志溢れるリリィならばギガント級に行く事を望むのは目に見えている

それを納得させ止めるのも司令塔の役目：ではあるのだがそういう余計な事に力はつかいたくない

戦闘中なら尚更

その後も戦闘が続き自分達は役目を果たす

そうしていると、

「ギガント級が…」

「逃げた？」

暫くするとギガント級が撤退していく

叶星と紅巴の反応はある為、最悪の事態は起きていない事は分かる

この辺りのヒュージも全滅させた為、後は撃ち漏らしが無いかを再度確認すればこちらも任務完了だ

「ギガント級ってこんなあつさり撤退するっけ？」

すっごい大暴れする印象有るけど」

「個体差ある。すっごい暴れるのもいるし被害の程度に関わらず飽きたらどっか行く個体もいる」

一人の疑問に海漓は答える

ギガント級といえど個体差がある

基本的には先の通りリリィに倒されるまで暴れ尽くし全てを破壊していくが、ごく稀に何処に行く個体も存在する

鎌倉だと基本的に多いのは前者

後者はレアケースだ

その後は撃ち漏らしの確認を終え、一度ルドビコ女学院へと戻る各々が無事に市民を守れた事に安堵

防衛構想会議中の襲撃であり今回は戦力が足りていた事も大きいだろう

「そつちも無事だったみたいね」

遊糸はそう言いながら海漓の方に向かってくる

「結構ギリギリでしたよ」

「司令塔として即席レギオンをブン回して自軍と市民の被害0やってギリギリ…まあ、妥当な自己評価って所かしら」

私が指揮したらヒュージを全滅させてギガント級まで倒したケドね」

遊糸はそんな風に言う

指揮や判断に関しては彼女は妥協しない

正当な評価だろう

「陣形と出した指揮は？」

「Fを2班に分けて各個撃破

単独行動はしない事も付け加えて」

「他は選択肢に無かったの？」

「通常ですとポジション分けや配置決めて、さて戦術教えますだ時間間が足りないです

その分Fは説明楽ですし

後ろ住宅地で広範囲に敵がいたんでFを使いましたね

敵を突破するだけなら△やDデルタダイヤモンド、Aアローヘッドも考えましたけど守るだけ

でいいんで

5型は：ゼロトップと被って浮足立ちかねないんで省きました」

遊糸の質問にも答えていく

彼女、複数の陣形を持っているがその中でも今回を選んだ理由

後ろが住宅地であり、敵が広範囲にいたためこちらも広範囲に展開し戦う手段を選ぶ

他はどちらかと言うと敵陣を突破する為に使う手法、ここでは相応しくない

最後のは別名ゼロトップ戦術とも捉えられ、それは昨年におこなわれた御台場迎撃戦の終盤にて今回の会議に参加していた月岡椛が考案した戦術とほぼ同じ

真似とかそういう理由は全く無いがやると後々面倒くさい為、東京では封印する事になったのだ

「5型は東京では封印でしょ…全く

根拠もしつかりしてるわね。説明するならもう少し詳しくして欲しいけど……まあ良いわ。結果も出てる

「欲言うなら神庭で試したいでしょう？」

遊糸は話を聞き素直に評価

彼女としてはまだまだ詳細に語って欲しいが、海瀛の事も良く分かっている為、そこは良しとしたようだ

やはり神庭でやりたい事も見抜いたようだ

「まあ、でも仕方ないんで、そこは」

「流石にトップレギオン制だと好き勝手やれないものね……普通は

生徒会は？ 仮にも役員が司令塔を薦めたって事はガーデン側はアタが司令塔を務めるべきって考えてるって事よね？」

ガーデンの校風を考えたとしても生徒会が口出せば動かざるを得ないんじゃない？ 上級生、実は生徒会も掛け持ちしてる？」

遊糸の言う事はほぼ正解

実は彼女も諸事情で様々なガーデンを渡り歩いてきた過去を持つ
教導官認可制とトップレギオン制の違いも理解している

だからこそ、今の扱いには疑問しかないのだ

ガーデンの校風に差があるのは分かる

言い方も違うだろう

しかし上層部や生徒会と言うガーデンの上層部が動いているのに未だに変わらない事への疑問はあるようだ

生徒会とグランエプレでは生徒会の方が立場が上

簡単に言うと秋日や藤乃の指示に叶星と高嶺は従う必要が有るにも関わらず何も変わらない

叶星と高嶺が皆には言っていないだけで裏で上層部と通じ人事を納得させているとしか思えないのだ

「どうですかねえ？」

私グランエプレではペーパーですから」

「名門卒のエリート様を抱えるガーデンは大変ねえ

実績と知名度あるし、ファンも多いし

生徒会長の苦勞が目に見えかわわ」

「そつちだつて葵さん居るじゃないですかー

苗陽さんだつて事情があつたとはいえ元百合ヶ丘ですよ。

エリート抱えてるのに上手く？行つてますよ？」

「葵はなんやかんや言う事聞くから

苗陽は…その、うん。私はともかくガーデンの指示は聞くから」

葵の他に彼女が言う苗陽と言うリリイ

学年は叶星や高嶺と同じ2年で今は風紀委員長の他にトップレギオンの隊長を努めている

遊系のレギオンと苗陽のレギオン

この2つが相模女子の主力となる生徒会直属のレギオンだ

遊系の方は生徒会特選隊

苗陽と読んだリリイの方は特命遊撃隊と呼ばれている

ちなみに海瀛は順当に行けば特選隊に所属する予定であつた

「さて、駄目出しもしたしそろそろ帰ろうかしら

あ、そうだ。」

「はい？」

「私達がいる以上相模は安泰だからアンタは安心して東京で戦いなさい

東京の陥落はウチも他人事じゃないから定期的にリリイを送る形になるだろうし、東京への支援はするつもり」

彼女としてもやはり海瀛が自分達を気にしていると感じていた

余計な気遣い…とはならないがまあ、考えすぎるなというメッセー
ジだろう

「後は…やっぱりエレンスゲ周りが最近きな臭いから本当に気を付けない
なさい

特に新教頭なーんか胡散臭いのよね」

「なんでエレンスゲの教頭の話になるんです？」

ウチの卒業生が赴任したんですか？」

唐突な話題

流石に海瀛も混乱する

なぜエレンスゲの新教頭が話題になる意味が分からない

そもそも、気にする理由もないはずだ

「違うわ

姉妹校提携先だし無関係とはならないからって言って少し前に挨拶に来たのよ…

なーんかわざとらしくて嫌だったけど…まあ、上層部もいつも道理の定型文で対応したわ」

「はあ。」

姉妹校提携先に挨拶に来るなど随分と律儀な人物なのだろう

そんな感想しか持たない

「で、こっからが本番

その教頭、やたらとヘルヴォルについて聞いてきたわ」

「一葉達？だってヘルヴォルの担当って教頭じゃないですよね？

確か元マディックの…」

だが、ヘルヴォルについて聞くのは以外

そとそも聞く理由も無い筈だ

ガーデンに反抗してるのに既に教導官がついているし変わったという話は神庭までは聞こえてこない

新しく来た教頭がその位置に付く必要が無いのだ

「知らないわよ

私は今のヘルヴォルとは合同訓練してないから知らんってあしらった

大半もアンタじゃないけど好きにすればって答えてたわ

葵は塩対応しすぎて言ってたけど

気になるなら聞けば良いじゃない」

「そうしてみます」

相模は良くも悪くもドライ

それにガラの悪さも有る

同盟もあり合同訓練もしていない以上気にする必要が無いのだ

塩対応した事は容易に想像できる

あの荒くれ者が大人への最低限の対応は出来るとはいえ丁寧な説明や対応などする訳がない

「じゃあね。」

へましてくたばるんじや無いわよ！」

最後にそう激励し彼女は葵を連れてルド女を後にする

こちらでも長話をしてしまった為、急いで皆と合流する

そこでは大半が一葉を労っていたし、一葉も笑みを浮かべていた

ヘルヴォルの面々も同じだ

「何かあったの?」

近くにいた楓にそう話しかける

「一葉さんの活動がようやくガーデンに認められて上層部には理解者も現れた…と言う話ですわ

これからは支援もしてくれるそうで…努力が報われつつあるって
いう話をしてた所です」

なる程、自分を待っている間そうでなくとも現状報告の中でそんな
話題になったのかもしれない

一葉からしてみれば活動が認められ教頭と言う教導官の中でも立
場が上の者が味方になってくれたのだ

喜ぶし周りも祝福するだろう

共に戦う仲間の活動が認められ、良い流れが来ている

そう感じてもおかしくはない

「ま、浮かれすぎて足元救われなきやいいけどね

上手く行ってる時こそ気を緩めてはならない…リリイの鉄則だよ
?」

百合ヶ丘は違うかい?」

「そうですが…今だけは甘く見ても良いのではなくて?

貴方個人として考えても仲間であり友でしょう?」

友の成功を祝えない程に普段から気を張り詰めてしまっただけは倒れ
てしまいますわ」

「祝えないって事は無いよ

努力が報われるならそれに越したことは無い(でも…クエレブレ筆
頭とした意見の合わない連中どうする気だ?)」

楓の言う事にも一理あるし、海滴もそこは肯定する

一葉の夢も分かっている

否定するつもりもない。成功するならばそれは素晴らしい事だ

これがガーデンが団結してるならば話は変わるが今はヘルヴォルの背後に教頭がいたただけ

例えば意見が合わないクエブレも賛同したと言うなら話は分かるが、先の新宿事変の対応を見るかぎり優珂達とは壁がある

性格考えれば合わないのは当然

今後どうするのか、分からない

教頭が背後についたのをいい事に排除しようとするものならば向こうの反発は必須。大人しく従う訳がない

そもそも、気に入らない連中を排除するような人物について行こうなどと考えるリリイはいないだろう

少なくとも海漓は嫌だ

「(一葉と一回話してみるか…浮かれてなきや良いけど)」

そんな事を思う

この日は一度解散となり準備を整えた上で数日後に再集合となる事が伝えられるのだった。

第58話

防衛構想会議から数日後

準備を終えたグランエプレの面々は駐在先であるルドビコ女学院に到着していた

勿論、一柳隊やヘルヴォルも到着済み

ルドビコ女学院の面々と挨拶を行い、今は校内へと案内され、簡単な交流会を行ってくれている

そんな中海瀧は一葉と二人で話している

開始後に少し一葉を借りる、と言って呼び出したのだ

「教頭変わったんだって?」

「西村教頭先生の事?」

うん。でも、私その話海瀧にしたっけ?」

「遊糸さんから聞いた

相模にも挨拶きたらしい」

「そうなんだ。やっぱり素晴らしい人だなあ」

一葉はそのように話す

海瀧はあつた事はないが、上手く行っているらしい

「(ここは焦らず…) そんなに?」

思う所はあるが、今は一葉のターンだ

自分は後でいい

「うん。私達の活動に理解を示してくれてるし、これからはサポートもしてくれるって」

「はえー、しかし何だってまたそんな」

随分と大盤振る舞いをする人物と思う

話を続けさせる

「教頭先生もゲヘナを内側から変えたいって言ってて

私と同じなんだなって、お互い協力者を求めてて…それで…ね。」

「で、具体的にどんなサポートしてくれるの?」

活動予算を多めに回してくれる手配?

名門御用達のメーカーから超高性能CHARMの購入？

それともヒイロカネにもっと強い機体よこせって頼む？」

一葉も中々だがその教頭も随分と無謀な事を言っているいがしてならない

エレンスゲを変えたいから赴任ならともかくゲヘナを変えたいからエレンスゲ赴任など意味が分からない

それこそゲヘナの総本山といわれている海瀉の地元である横浜にあるガーデン、シエルリントにでも赴任した方がマシな気がする

とは言え具体的に何をしてくれるのかは気になる所

予算の確保、ワンオフのユニークを筆頭とした高性能CHARMの調達、もしくは提携先であるヒイロカネに依頼し強力なCHARMを開発するように依頼してくれるのか

「教頭先生を筆頭にしたチームが活動を色々な面でサポートしてくれるんだ」

「(ん?)」

その答えに違和感を覚える

今、海瀉は件の教頭が具体的に何をしてくれるのかを聞いたのだ

「お金や装備だけじゃなくて…例えばヘルヴォル向きの任務を命じたリ…とか？(任務は言いすぎたかな?)」

ならば、と具体的な例を出してみる

ヘルヴォル向きの任務…それこそ具体例は出しにくい

聞かれたらそれっぽい任務を提案するしかない

「そうそう、そんな感じ」

「(え？任務も入るの?)でもそれ教頭一人で良いよね？他の人は?」
まさかの肯定

しかし、ヘルヴォル向きの任務とは何だろうか

それこそ、一葉のやり方で多くのヒュージを倒し人を守るとかそういう事だろうか

やり方はともかくリリイとはヒュージを倒す為の存在。教頭が新たに協力する理由はないようにも見える

「コンディション面でのスタッフ…だったかな」

戦闘後のメデイカルチェックは重点的にやってくれてる。コン
デイション管理は大切だからって…機器も最新鋭だと言ってたか
な」

「いくら何でもそれは…」

協力してくれるとはいえやり過ぎではないだろうかとも思う

専属スタッフが1レギオンをサポートなどそれこそ百合ヶ丘の
トップレギオンクラスのやる事だ

エレンスゲが百合ヶ丘と同じ派閥ならばともかくエレンスゲは親
ゲヘナ派のガーデンだ

美味い話には裏がある…親ゲヘナなら尚更気を付けなければなら
ない

理解者が現れたとはいえ浮かれすぎ

そんな風にすら思えてしまう

そんな時だった

「ちよつと海瀆…いつまで一葉さんと話してるの!？」

姫歌がそんな事を言いながらこちらへと向かってくる

「(タイミング悪っ!…まあ長話しすぎたな)ゴメンゴメン。話し込ん
じやって」

「もう!一葉さんもゴメンなさい。」

「いえ。お気になさらず」

姫歌に連れられ三人で皆のいる場所に戻る

「何の話してたのよ?」

「教頭の話、この間聞きそびれたから」

「ああ、あの優しいって言ってた教頭先生ね」

そんな事を言いながら皆の居る場所へと戻ってくる

「姫歌ちゃん!乙女の秘密の会話を遮りに行くなど人の心があるんで
すか!?!」

「あるわよ!」

「しかも秘密って訳でもないし」

紅巴は違うベクトルから抗議

まあ、彼女達の行動は誤解を招くかもしれない

「それで、一葉は二人で何の話をしてたのかな」

恋花もひかやしなから一葉に尋ねる

「西村教頭先生の事ですよ」

「この間は海瀛がいなかったのよ：松永遊系様から話は聞いてたみたいですよ」

「何で相模の特選の隊長が出てくる訳？」

「赴任するからと、ご挨拶に伺っていたそうです」

「うへえ：そこまでやる？」

律儀だねえ」

「：提携先だし無関係では無いから」

「本人の意思、と言う事ですね」

恋花、瑤、千香溜も例の教頭の行動には感心する

近くに居た一柳隊やルドビコ女学院の面々も感心する

「後は私達の支援の内容を少々：そんな所ですね」

「自分達の活動がようやく認められたって喜んでたものね」

「はい！一葉さん、とてもうれしそうに話してました」

叶星と梨璃もその光景を思い出す

一葉の夢を知っているし、応援もしている

夢が叶いつつあることに喜んでるのだ

「(流石にそうなるか：)」

「どうかしたの？」

「あえて空気を読まずに言うならそうですね：その判断、大丈夫かと」

高嶺は海瀛を気にする為率直な感想を話す

「どういう事？」

「いやー悪い大人ってどんな理由つけて騙してくるか分からないですよ」

発言一つ、選択肢一つミスったら騙されますし、あんまりハイハイとついていくのもなーと(私とか下手すりやモルモットルート一直線だったし)

勿論、その教頭がガチの善人なら全く問題無いですが：個人的に赴

任早々にかなりの大盤振る舞いはちよーつと匂うかなって」

彼女はそう話す

選択肢一つ間違えたらモルモット行き…それは海瀉もよく分かっている

いや、分かっているからこそその言葉だ

「流石に考え過ぎよ」

「そうですよ!!」

高嶺、梨璃の二人だけではない

ルドビコ女学院以外のリリイが全員呆れたような目線を向けてくる

「知ってた!!…流れもそういう方向になってるし…私は異端なんだよね…そう言う具体的な話や手口なんて百合ヶ丘や御台場なんて伏せるし

…私だって相模であの教官に出会ってなけりや良い人で鵜呑みにしたし」

これも海瀉は想定内

エレンスゲの教頭だけでない、ルドビコ女学院も表向きはゲヘナの鎖を断ち切ろうとしている

良い流れが来ている…と思いついでいるのだ

そんな中で海瀉の考え…はつきり言って異端そのものだ

相模時代、世話になった一人の教官がの出身がイルマであり、現役時はイルミンシャイネスに所属し活躍していたそうだ

指導は厳しくも的確であり今の海瀉のリリイとしての土台を築いたと言っても過言ではない

まあ、能力はともかく素行面に問題がありそのせいで現在はイルマではなく落ちこぼれで荒くれ者の集まりである相模女子で教導官を努めているのか、だが…

『何故多くのリリイに手を出す事が許され、隠れて飲酒に喫煙、ギャンブルに株取引をする事が許されないのかと再三に渡り抗議したのだが…受け入れてはもらえなかった…理不尽だろう?』

それが世の中だ』

『いや、イルマから飛ばされた理由、はつきりしてんじやないですか？何で許されると思ったんですか？』

『あの女も私もイルミンシャイネスで活躍したからだ。私だってS持ちで、更に言うなら私の方が先輩だぞ』

数多のリリイに手を出す後輩のあの女に比べたら私などまともだろう？』

『どっちもどっちですよ…』

…中等部時代の海瀉とのこんなやり取りからもわかる通りの素行の悪さだ

能力は確かなのが尚質が悪い

そんな彼女、自分達に対し訓練の他に補習の名目でゲヘナのその手の話を何度もしてくれたし資料も見せてくれたのだ

下手したらどう言う末路になるのかも分かっている

『ここは力も権力も無い中立派、私達も努力はするが名門のメルクリウスや百合ヶ丘のような力と権力でお前達を毒牙から完璧に守つてやる事も、手遅れになる前に救える事も厳しいだろう…そこは申し訳なく思っている

まあメルクリウスや百合ヶ丘は色々とあるが…今はいい。時が来たらまた話そう

だからこそ、お前たちには戦うスキルと同じぐらい、見分けるスキル叩き込むし、疑うという事を覚えていてもらいたい。

強い力を得たいのならば尚更だ。

特に甘い言葉に気をつけろ。心の隙、弱さを奴らは的確につけてくる

それでも尚、力を求めるのなら…私に相談しろ。強い覚悟と信念が感じられたのならば、苦しまず…は厳しいが望みを叶えられる場所を紹介してやる』

中等部に入学した頃の教導官の話だ

未だに心に残る程には印象的な言葉だと思っている

小学校卒業したすぐの子供になんて事を言うのだ、となるかも知れ

ないが相模女子の環境を考えると必須のスキルだったと思いきい出せる
相模女子は名門のような夢を見れる環境では無かった、それだけ
だ。

その中で今の状況

まさしく教導官の言ったとおりだ

百合ヶ丘やメルクリウス、そして御台場もガーデンの力と権力で手
厚く守られて来たし救われた者もいるだろう

救われた者がこの中に居るのなら今回の件を疑っていいのかも
知れないが、今回、場合話したのが相手が同盟相手のリリィ、つまり
仲間だ

百合ヶ丘も御台場も仲間を疑う事はならないと教育されている筈
だしこれまでの絆もある。

「二葉さん達に何かあったとしても皆で力を合わせればきつと乗り越
えられますよ!!」

梨璃はそう言うが：そんな簡単な話では無い

現実を教えてやろうにも下手な事言えば自分のクビが飛ぶ

力を合わせて乗り越える：確かに素晴らしい事ではあるが：世の
中そんなに上手くはいかないものだ

「そう：だね。（私が幾ら警告しても最終的に決めるのは一葉だし、こ
うなったら半分自己責任みたいな所もあるからなあ）」

海濱がどれだけ警告しようと、周りが支持しようと最終的にヘル
ヴォルの道を決めるのはヘルヴォルの面々だ

敢えて厳しく言うならば先にどんな光景が待ち受けていたとして
もそれは半分、自己責任となる

だからこそ、立ち止まり見直す事も必要だし、立ち止まるためにも
疑う事は必要なのだ

価値観の違い

光景の違い

これはがりは本当にどうしようも無い事を改めて自覚するのだつ
た

第59話

ルドビコ女学院に駐在してから3日程たった日の事だった。

自分達は先の戦闘で遭遇した特型ギガント級、メイルストロムと名付けられた個体を御台場女学校のトップレギオンであるヘオロットセイイツ、ロネスネスと共同で対処する事が告げられる…のだが「簡単に御台場女学校を説明するわね」

叶星がそんな風に告げる

共に戦う相手の事、通っているガーデンを知るのは大切である

「東京を守る御三家の一角

幼稚園からの一貫教育で武道を中心としたカリキュラムを組む

『成功は苦しみからこそ得られる』っていう校訓の通り厳しい訓練を行って優秀なリリイを多く排出しているガーデン

大雑把に言うとならば御台場女学校ってこんなガーデンなの」

「少し付け足すと御台場女学校ってベオウルフの世界観がガーデンの特色になっているの

厳しい訓練も強い戦士となる為

後は剣への拘りも強いわ」

叶星の説明に高嶺が軽く補足する

凄く大雑把だが御台場女学校を適切に表している…が

「いや、メルクリウスと提携の話はハブったら駄目でしょ…むしろ一番大事

…それにしても強い戦士、か。

そう言う育成、指導をされたなら私となんて合う筈が無い

今までの行為もある程度説明がつく」

海漓は少しだけ違和感を持つ。

確かに御台場は強豪だ。

自分達のように世間から落ちこぼれと呼ばれたことなど無いが、今の地位に自分達の力だけでなったかと言われると少しだけ違う。

鎌倉5大ガーデンの1つ聖メルクリウスインターナショナルと姉妹校提携をし育成にも力を入れた事で現在の地位となった。

ここ数年で急激にファンタズム覚醒者が増えたのもメルクリウスのノウハウを手に入れたおかげとも言われている

更に言うなら今の2年生世代：それこそ船田予備隊と言う将来の御台場の主力を担うために集められた面々は相当な恩恵を受けているはずだ

にも関わらずこの言い方

姉妹校提携のおかげで強くなった事をどのように考えているのだろう

後は先程の高嶺の戦士という言葉

この言葉が事実なら自分と合わないのなんて明白だし、今までの行為にも説明がつく：彼女は勘違いをしていたのだ

今まで感じていた叶星の隊長としてあるまじき行動の数々

それらが例えでは無く、正真正銘、本物の強い戦士を育てる為の環境にいたのならば説明がつく

中等部からとはいえ軍隊風の相模女子で過ごした、自分とは育ってきた環境もリリイとしての思考も何もかもが違いすぎる。

海瀉が叶星と高嶺の数々の行動に疑問や反発を抱くのも当然である。

「(そりや向こうが戦士なら私となんて考えが合う訳無いし、新宿後のミーティングで司令塔やらせないっていう判断するわ。」

戦士が例えじゃなくてガツチガチなら尚更)」
能力以前の話

自分達は戦士であるという誇りが心の中に有るならば、軍隊風のガーデンで育ったりリリイが立てる作戦など従いたくはない：戦士ならば当たり前だ

自身が戦士の思考を理解できないのと同じだ：否定はしない

叶星と高嶺が戦士ならば海瀉は兵士だ

相性は最悪と言っていい

：直近で言うならば新宿事変の際の一度目の撤退拒否など最たるものだ

ヘルヴォルの面々で勘違いされがちだがエレンスゲも軍隊風

一葉は影響を受けていない為、勘違いされがちだがアレは特異だ
まあヘルヴォルを変えたい、エレンスゲを変えたいと思っ
ているのだから当然かもしれないが

「すつごい格好いいガーデンだね☆」

「全然伝わってない!!」

御台場の話を聞いた灯莉は無邪気にそう言い姫歌は突っ込む
確かに格好いい、それは事実かもしれない。

「(うーん…)」

格好いいでガーデンを判断されても困るのだが…それは言えない
それに気になる事もある

「(駐在してもこれ…本当にお気楽というか…)」

これもいつもの雰囲気だ。変わらないらしい。

そろそろ、緊張感とかそういう言葉を頭の辞書に入れてほしい
海瀉としては呆れるしかない

暫く雑談を行った後に

「紅巴が強豪御台場出身って言うのも驚きだけど

でも、言われてみると納得よね」

「何がですか?」

「だって紅巴、努力家じゃない

そんな厳しい訓練を耐えてきたって納得感があるなーって」

「うん…納得、納得!!」

「(少し語弊は有るけど…まあ、良い)アーセナルとリリーの平行だか
らね

普通にスゴいよ」

「姫歌と灯莉は紅巴を褒める。

海瀉も同じだ。他人の成功を否定するような事はしない。少なく
とも、自分は

御台場の訓練が厳しいのは有名な話、それを乗り越えてきた事への
称賛

「アーセナルからリリーになるなんて並の努力じゃない

誇っていいと思うわ」

叶星もそのように告げる

「あ、ありがとうございますー！」

努力は必ず報われる…紅巴はまさにそれを体現した人物と言える

その後、高嶺と叶星はこれから御台場に向かう事を告げる

共同で作戦をやる以上、コミュニケーションは必要との事なのだが

…

「(御台場としては叶星さんと高嶺さんが目当てかな?…

特型ギガント級を倒す戦力も十分に揃ってるし、私達とか邪魔にし
かならないでしょ)」

海瀉としては御台場が自分達と組むメリットが無いと判断する

御台場は御三家の一角を担う強豪ガーデン。

叶星の説明にもあったがリリーの能力、層の厚さは神庭の比ではな
い

特に今回組むへオロットセイנט、ロネスネスなど御台場の中でも
上層のリリーの集まり

そして、この2つのレギオンは御三家なので当たり前の話だが9人
制のノインヴェルト戦術を導入しており、人数もセイנטツ13名、ロ
ネスネス9名と発動条件を満たしている

ロネスネスは9名で人数ギリギリ、そして特型が相手だ。

万が一の事を想定するならバックアップは確実に欲しい…そう
なると目をつけるのは叶星と高嶺だろうと海瀉は予想する

叶星と高嶺がバックアップに入るのか、それともロネスネスの中
から二名をバックアップに回し叶星と高嶺を本隊に加えるのか、ま
までは分からない

更に言うなら彼女達は今年、姉達と同様に北閥を経験したメン
バーだ。

格下レギオンの力を借りる必要も全く無い

そんな所が自分達と組む理由は何処にもない。

仮に増援を頼むとしても御台場の現トップレギオンの前身である
船田予備隊に所属していた叶星と高嶺以外は不要だろう

そんな事を大々的に言ってしまったえばいくら御台場と言えど大問題、だからグランエプレ全員に声を掛けた

自分達など御台場からしたらおまけ程度

「(いつもの如くハブられて後方待機が目に見える。

…まあ後方支援も大事だし、やるけど)」

正直自分達が必要な理由が何も無い

後方支援が主な目的だろうが、それだって立派な任務やるからには確実に、だ。

「ガーデンからの通信？」

叶星はそう言うと言おうと席を外す

ガーデンから、と言う事は神庭の上層部、もしくは秋日からの連絡だ

このタイミング：神庭に何かあったのだろうか

秋日達が居るとはいえ緊急の何かが起きたのなら自分達は戻る必要がある

「房総半島にヒュージの大群が出現！」

その中にメイルストロムの目撃情報も上がったらしいわ！」

「(房総半島：か)」

自分達のターゲットである特型ギガント級、メイルストロムの出現を教えてくれたようだ

自分達も神庭の守りで大変な中での支援…感謝である

出現した場所は房総半島

彼女自身が因縁のある土地では無いが、天野天葉の妹と言う肩書を考えると天野の血と因縁がある…とも言える

妹としたらたはた迷惑な話ではあるが

外征が決まり、各々準備に取り掛かる…

「いや、海濱さんだけ弾薬持ってくつもり？」

姫歌はそう言うってくる

CHARMの準備をする…が彼女だけは弾薬をかなり多めに準備

している光景を見たからだ

「新宿事変終わりに機体を改良してもらってね

親機、子機両方に実弾とマギのビームの切り替えを可能にして貰ったんだ

後は情報通りなら大規模かつ長時間の戦闘になるし、そうなる補給も怪しいから…」

「大変ねえ…」

姫歌は同情気味に言う

海漓にとっては補給絡みは死活問題だ

マギ保有量の視点から彼女は実弾兵器を好んで使う

海漓のトリグラフもそれを考慮し、新宿事変終了後に親機、子機共に実弾とマギのビームとの切り替えが可能なように改良してもらった

マギを節約しながら戦うという目的は果たせたがその分弾薬の消費が凄まじくなってしまったのは仕方が無い

実弾兵器を使う、マギの消費を抑えるような部品をつける

本人の努力の他にCHARMそのものにも色々改造を行って

今回の外征の場合、補給を簡単に受けられるとも限らない

最近だと新宿事変が最たる例

まさか外征先でトリグラフ使いのリリイを見つけて

『トリグラフ用の弾薬ちよーだい☆』

なんてふざけた事を言える訳がない

弾薬が尽きると相当苦しくなる為、多めに持っていくのは当たり前前の事

マギ保有量が少ない海漓ならではの問題だ

それだけは本人の努力ではどうにもならなかった

マギを気にせずに戦えるリリイが羨ましいと常に思っている
今でもそうだ

「(私のマギも不安だけど…」

最大の不安要素は)」

彼女はそう思いながら姫歌達の方を見る

言い方は悪いが叶星と高嶺はどうでもいい

御台場に合流するか、いつもの如く『私と叶星だけ』とか上手いこと言って自分達の事を放置する前提で考えさせてもらおう

グランエプレの6人で連携して戦えたらラッキーレベルだ。

「何時ものノリじゃ駄目なだけ…言ってもわからないんだろ（な）」

この状況でも緊張感のかけらもない面々

外征を行い特型ギガント級を討ちに行くということの重大性を全く持ってわかっていない

海漓も鬼や悪魔ではない

いつもの如く姫歌の指示は聞くし三人のフォローはするが…それでも戦場で気を抜かない、フザケないなど最低限の事はそろそろやって欲しいのが本音だ

現地に向かわないと分からないが状況によっては冗談抜きにフォローにも限界がある

戦場を舐めてると捉えられない事を繰り返してもここまで大きな怪我なくやってこれてるあたり、叶星と高嶺のお陰という事を抜きにしても、才能で言うなら海漓よりも上なのは確実だ

彼女が相模時代に姫歌達みたいな事をしたら教導官や上級生に怒られる…がそれはまだマシ

命を落とすか、生き残っても腕や足が吹っ飛ぶ位の事は確実にある

才能とは本当に恐ろしく、残酷である

だからこそ、海漓が下手に言っても以前のようにトラブルになるだけ

叶星と高嶺も怒らない

「…御台場に迷惑かけなきゃいいけど…」

そんな事を呟きながらもグランエプレの6名はガンシップに搭乗

し、
現地へと向かう

第60話

ガンシップにて房総半島へと向かうグランエプレの面々
房総半島の上空に差し掛かった時だった

「色んな所で煙が上がってるよ!？」

灯莉が真っ先に声を上げる

その理由は一つしかない

「現れたヒュージの群れとリリイ達が戦ってるんだわ」

「あっちにも…こっちにも戦場だらけですよ!？」

姫歌と紅巴の言うとおり現れたヒュージの群れとリリイが戦っている…それだけの事

逆に煙が上がっていなければリリイが全滅、もしくは戦わずに逃げた言う事なので大問題だ

騒ぐような事ではない、溜め息の一つも出る

「ギガント級は…いないか」

近隣に住む住民の避難は終わってると思うけど」

ギガント級程の大きさならば上空からでも見つけられる

見える範囲では確認出来ない

それでこの戦闘だ、住民の避難は完了していると考えて良い

クエレブレのようなやり方を非難しておきながら自分達は大規模戦闘をやるほど愚かでは無い…と思いたい

そんな事を思っている内に臨時の拠点へと着陸する

「ここが臨時の防衛拠点ですか？」

「ガーデンの方が設備が整ってると思うんですけど…」

姫歌と紅巴はガーデンから離れた所にある臨時の防衛拠点近郊に着陸した事に疑問を持つ

「地理的にここが一番状況を把握しやすいのね…きつと」

「(状況把握以前にガンシップの離着陸絡み…言わないけど)」

叶星の考えも間違っではない

しかし、それ以上の理由があると海濱は考える

ガーデンによってはガンシップの離着陸が可能な程の土地を持た

ない所があり、離着陸時に流れ弾の影響で住宅地にガンシップを墜落させようものならば大問題

操縦者の安全を確保し、離着陸可能な場所を考えた際にこの場が最適と判断されたと考えている

一番最適な放送は上空からリリイが降下しガンシップを速やかに退避させること

だが、神庭だとその訓練を一切行っていない為、選択肢にすらない補足すると鎌倉五大ガーデンは全員その手の訓練を行っている：恐らくは東京御三家も行っている：筈だ

ちなみにエレンスゲも相模と姉妹校提携をしている為、相模の土地を借りる形ではあるが全員経験をしている

海漓は出来るにしても一年生3人は不可能、二年生二人は分からない

いつものふざけたノリで降下すると事故や怪我に繋がるためぶっつけ本番は出来ない

高度、行うタイミング、降下時の姿勢、一つでもズレてしまえば大事故だ

そんな事を考えていると一人こちらに向かって手を降りながら歩いてくる

「叶星に高嶺

そして姫歌、海漓、灯莉、紅巴

来てくれて有り難う

丁度人手が足りなかった所なの」

「ぜ、全員の名前を…!!」

「共闘するレギオンのメンバーよ

把握して当たり前じゃない

防衛構想会議で名乗ったと思うけど

私は御台場女学校2年 ロネスネスの藤田権」

「(紅巴ちゃん、それはマナーの話だよ…)」

グランエプレの全員の名前を把握している事に紅巴は驚くが権としては普通の…いや、リリイとしては当たり前だと言いつ

この辺は海瀛も同意

形はどうあれ自分達の共闘相手、全員の名前を把握するのは最低限のマナーである

リリオオタク云々の話ではない

「メイルストロム討伐の為にココに来たけど戦況が悪化して市街地の防衛に戦力を割くしかなかった?」

「例の特型スマールの群れが思った以上に厄介でね

今ちよつと困った事になってるのよ」

「現状十分に困ったことになってるじゃない」

「(困った事も何も御台場はセインツも派遣してるんだし、生徒会長の権さんがいれば後は)」

「それに、輪をかけて…ね

あ、そうだ。海瀛は相模女子出身なのよね?」

「え?あ、はい。」

「相模出身からしたら、非常識な光景になってるから覚悟して頂戴

…叶星や高嶺から御台場の事を聞いてると思うから分かっていると
は思うけど」

「覚悟しておきます」

権に連れられ、グランエプレの6名は臨時の防衛拠点へと向かう

そこでは

「じゃあここで戦ってるリリオを見捨てろっていうの!」

「そうは言っておりません

優先順位を見誤らないように、と言っておりますの」

「その間に生じるここの被害に目を瞑れ…と?」

御台場の中で意見が割れていた

メイルストロムを優先するか、ここを守るか…と言う話なのだが

「(いや、生徒会長がギガントじゃなくてリリオを守るって言ってるんだから従わなきゃ駄目だろ…何言ってるんだこの人?)」

海瀛は素直にそう感じる

先程、権は非常識と言ったがそう言うレベルの話ではない

権だけではない、ふなだきいと船田 純、ふなだうい船田 初も口ネスネス

ちなみに隊長は純、副隊長は初だ

月岡 つきおか 権 もみじ、川村 かわむら 樫 ゆずりははへオロットセイイツ

隊長は権、副隊長は樫

それぞれレギオンが違うが、重要なのはそこでは無い

権はセイイツの隊長の他に御台場の生徒会長も務めている

ガーデンの生徒会長とは文字通り御台場の生徒の長。

簡単に言うとお台場のリリイの中で一番上の立場だ

生徒会長がそういう判断をしたのならば御台場のリリイは全員従

うのが当たり前、自分達の意見を通すとしても生徒会の意思を尊重し

つつ、行動するのが筋だ

たかだかレギオンの隊長レベルがガーデンの長である生徒会長に
対し優先順位を見誤るな、なんて言える立場ではない。

誰が見ても間違った判断をしたのならばともかく権の案は聞く限
りで間違っていないと思う

初も純の言葉が鋭い事には指摘するが、それでも権への態度への注
意は一切ない

権もそう、叶星、高嶺も特に気にしてははない

一年生三人も気にする所がズレている

途中で今後の対応意見が割れた、と樫は説明しているが割れる意味
がわからない

生徒会長の権の指示に従う、その上でロネスネスは自身の目的を果
たす

これで全て解決なのだ

何も揉める事はない

「(現場の指揮系統をロネスネスが勝手に壊してるだけなんだよな…

仮にロネスネスが生徒会直轄レギオンだとしても有事の際の方針
は事前の打ち合わせで一致させとけて話になるけど)」

ロネスネスがどのような立ち位置なのかは、分からないが仮に生徒
会直轄レギオンで隊長には権と同等の生徒会長と同等の権限を与え
ていたとしても有事の際の方針は予め決めて置かなければならない。

権に従うのか、独立して行動するのか

独立して行動するにしても権の意図は汲み取ってあげなければならぬのだが

教導官認可制の下での自主結成レギオンといえど、自分達が好き勝手に暴れて良い訳ではない。

従うべき人物、法や規則は確実に守らなければならない

相模時代に例の教導官以外にも多くの教導官が言っていた言葉だ

相模女子は百合ヶ丘や御台場の程学年の上下関係は厳しくない

余程舐めた事を言わない限りは世間一般で通用する敬語が良い

だが、役職での上下関係は絶対遵守の方針だ：特に戦場では尚更

レギオンならば隊長、副隊長、司令塔

ガーデン単位ならば生徒会長や生徒会役員

上の立場の者の指示には余程の問題がない限りは必ず従うように教育される

海瀉がレギオンの作戦や指揮で表立って叶星と姫歌に反抗しないのもこれが理由だ

叶星と姫歌は自分よりも上の立場のリリイ、指示は絶対だ

だからこそ上に立つ者には戦闘力以外にも様々な能力が求められる

リリイとしての戦闘能力を求めるのは当たり前だがその他を蔑ろにする者に資格は与えられない：そんな教育だ

高等部でも同じ事は教えているだろう

そんな事を考えている時だった

「こんな事をしていても時間の無駄ですわ

私と姉様、権：せっかくですので叶星と高嶺の5名でメイルストロムの日撃現場へと向かいますわ

他の方々はご自由にどうぞ」

「えー、バラバラに行動するの」

「（もう無茶苦茶だな：有り得なさすぎる）」

純は痺れを切らしたのか、そんな事を提案し灯莉は驚くし海瀉は呆れる

戦士のガーデンはこんな事すら許されてしまうのか、とも

「ですが、ギガント級は9人でのノインヴェルト戦術でないところだ
紅巴としてはそこも気になるところだ

5人制ではギガント級は仕留められない

「ええ、勿論。ですがメイルストロムを逃さないようその場に釘付け
にし、増援を待つ事は可能ですわ

我がロネスネスの増援を、ね。」

「…これ以上話し合っても時間の無駄って事はよく分かった

こっちはこっちで行動するよ」

樫もその提案を飲む

ヒュージも現れている以上これ以上揉めるのは確かに時間の無駄
だろう

御台場はそれでいいかも知れないが、自分達は良くない

純は連れて行く気だが叶星は何も了承してない。高嶺も、だ

出発前の時点で二人が御台場側に合流する事は覚悟していた。

しかしセインツ、ロネスネス共にフルメンバーで有ることが前提で
ある

今回のような形で抜けるとは思っても

みなかった

樫と樫への負担も考えた上で慎重な判断が求められる

戦力を分ける事はもう必然、これには逆らえない

「こうなった以上、私達も別れて行動するべきだわ

貴方達は樫さんについて行って」

「3人で特型ギガント級を相手にするのは流石に難しいもの
仕方が無いわ。」

叶星と高嶺は抜ける事が前提で話を進めてくる

自分達は樫に預ける事は確定路線らしい

まだ了承していないにも関わらず、だ。

「で、ですが……」

「姫歌ちゃんの言いたい事は分かるわ
でも今回は別れて行動しましょう」

「(今回も、だろ。」

何いつもは6人で行動してる雰囲気だしてんだ?)」

お互いに思う所はあるのかも知れないが、それでも考えを曲げはしない

今回に限らず自分達は戦場でレギオンとして連携した事など一度もない

大体は上級生が突撃する形

合同レギオンになってからは一柳隊やヘルヴォルの実力者に自分達を押し付ける形

連携するとしても学年別

そもそもの話

「(流石にコレはやバすぎる

統制とか規律とかどうなってんだ御台場：周りも怒る所がズレてるし：異世界に放り込まれた気分なだけで…)」

あり得ないことが多すぎる

自分達の長である権に対する態度や現場の指揮系統を破壊する行為

時折出る言葉や思想の強さは咎めるが、権への態度は咎めない

御台場組の全員、だ。

相模女子で考えればあり得ない態度

『何でトップレギオンの隊長如きが生徒会長の権に歯向かってるわけ?』

『生徒会がその気になればロネスネス程度、簡単に叩き潰す事が出来るの分かってる?』

相模ならばこのレベルの言葉は当たり前前に飛んできた

権への態度はこの位のことは言っても許されるレベルだ

仕方ない、いつもの事で済ませていい話ではない。

「(いや：仮にウチの生徒会長があそこまで舐めた事を言われたら黙ってる訳ないけど：その場でリアルファイト確実案件)」

：荒くれ集団のトップに立つ者があそこまでの事を言われた場合、言葉で済まず訳がないと言われればそれまでだが、それはまた別の話

いくら戦士のガーデンといえど弁えるべき所は弁えなければなら
ない

その他にも規律や集団行動の重要性

：これは入学時から座学で教え込む筈なのだが：御台場と相模で
は何もかもが違うだろう

力を付ける為の訓練はスパルタだが他は激甘なのだろう

「：よし！今回は黙ってよう！」

只のモブの一人として足を引っ張らないように己の役割に徹する
べし

そうしよう。それがいい。」

御台場のリリイとコミュニケーションを取るべきなのだろうがこ
こまで価値観が違いすぎるとそもそも会話になるのかすら怪しい

天敵である桜ノ杜のリリイ以上に厄介だ

お互いに宇宙人と話しているのかと錯覚するぐらいに噛み合わな
くなる可能性が高い

権は非常識といったがそれ以上、例えるなら一人だけ異世界転生し
たレベルの話

ならば自分は黙っておくのが最善の策

流石に価値観の違いで御三家とトラブルを起こす訳には行かない

今の自分は神庭のリリイ

今回の主役は御台場

自分は彼女達の足を引っ張らないように動けばいい

やる事はつきりしているのが不幸中の幸い

勿論、姫歌達のフォローも忘れずに

「(最悪の事も想定して：対ギガント級戦、私は戦力外。：経験不足の
定盛ちゃん達へさり気なくフォロー：私が樫さん、樫さんの負担にな
るのは論外だし：

あれ、マジと弾薬持つかな：これ：？)」

黙るなんて言っても何もしないわけではない

頭の中で今後をシミュレーションするがやる事が非常に多すぎる
ペース配分を考えて戦つてもかなりギリギリだ

不安を抱えながら、自分達も行動を開始する。

第61話

自分達は椛、樞と共に彼女の当初の考えである防衛線の立て直しを行う

それと同時に負傷したりリイの救助だ

ヒュージの群れへの対処と負傷したりリイの救助は並行して行う必要がある

リイの配置、作戦が重要だ

自分達の司令塔は姫歌が務める

グランエプレの司令塔は彼女なのだから当然だ

椛、樞は別方向への対処に向かった為この場にはいない

「えつと…先ずは周辺の怪我をしたりリイを救助…と、とりあえず海瀧！敵陣に突っ込んでヒュージの数を削って！この手の戦い得意でしよー！」

「(とりあえずで敵陣に突っ込ませるとか正気？…まあ、やるけど)はいよ!!」

姫歌の言う事も間違っではない…がそんな簡単な指示で突撃させられる身にもなって欲しい

自分がヒュージを倒している間に姫歌達で怪我人を救助するつもりなのかもしれないし、それも正解の一つだ

支援とかどうするのかと突っ込みたいがヒュージの群れも迫ってきている

被害を拡大させない為にも彼女はヒュージの群れへと突撃する

「(コイツら、新宿の個体に比べて弱体化してる…その分数は多いけど!)」

特型ヒュージは新宿事変の際に現れた個体と比較して大幅に弱体化している

移動速度も耐久力も劣化しあの時のような知能も感じられない

その分数は多いので面倒ではある

彼女はそれを射撃ではなく格闘で撃破

「(頭の中で何回もシミュレーションしたけどいつも通りに射撃を続

けたらマジも弾薬も途中で尽きる)」

戦闘に入る前に何度か頭の中でシミュレーション

いつものように射撃中心で戦うつもり…だったのだが

敵の多さと自分達の役割、万が一の可能性

様々な事を考えると普段のように射撃メインで戦うとマジと弾薬が尽きる結論になる

序盤はあえて節約し、近接戦でヒュージを倒す事にする

マジの節約も考えたらレアスキルも温存

サブスキルが中心となる

「トリグラフでこれやると荒くなるから嫌なんだけど…仕方ないよねえ!!」

ヒュージの群れに飛び込み、一体また一体と力強く確実に切り伏せていく

一人で複数を相手にする時に敵を確実に倒し数を稼ぐやり方と敵を倒しきらずに狙いを変えていくやり方の2種類があるが、海瀉は主に前者だ

味方と言えど獲物を渡したく無いという相模女子ならではの思考…あとは死にかけのヒュージからの手痛い反撃を警戒して、だ。

後者の場合後続との連携が求められるが、今回の場合後続の3名は戦闘ではなく負傷者の救助に専念している為、連携どころの話ではない。

灯莉を支援に回すという手もあるが、グランエプレの戦果を求めないという方針と彼女の性格を考えるなら戦いよりも負傷者の救助やヒュージの観察を優先してしまうため連携は望めない

そんな理由もある為、ヒュージを早々に仕留める必要があるのだから自然と戦い方も荒くなる

一連の動作を流れるような動きで人々を魅了する、美しく華麗な動きでこなすリイも多くいるが、彼女は違う。

シンプルに、かつ力強く、確実に葬る

それだけだ

この辺りの思考はガーデンによって異なる為、なんとも言えない

「海瀉は大丈夫そうね…姫歌達も頑張るわよ!!」

彼女の戦闘を見て安心だと姫歌は判断する、が

「私を信じてくれるのは良い…けど視界から完全に外すの止めてほしいんだよね…AZはそれやられるとマジでキツイ」

海瀉に限らずAZ全体に言える事だが最前線を担うという事はそれだけ危険性が高いと言う事

その為にもAZ同士の連携や後続からの的確な指示や支援が求められる

今回もその必要があるのだが後続の3名からの指示、支援は一切ない

他にAZを担うリリイも居ない…文字通り一人で戦う羽目になっている

「(支援要員を寄越せぐらい言うべきだったかな)」

敵陣に突撃する際に後方支援を頼まなかった彼女にも責任はある

そこは反省だ。…多くの戦いを経験しているのにそんな当たり前の事を未だに言われる司令塔など駄目なのだが…

「(負傷者の保護は…順調か

もう少しヒュージを引き離れた方がいいかなこれ)…って、何処行こうとしてんだ…よ!!」

姫歌からの指示が無い以上自分から彼女達の位置を確認し距離と状況を把握、場をコントロールするしかない

ヒュージから目を逸らすのは非常に危険な行為ではあるがこれをやらないと姫歌達から離れすぎて孤立したり逆に距離が近くなり姫歌達や負傷したりリリイにヒュージや放たれた攻撃が向かってしまい状況が悪化する恐れがある為だ

相手が自分に合わせてもらうのと同じ位自分が相手に合わせることも重要な事

「…って、ヤバッ抜かれた!」

気を使いながら戦っていると数体が彼女を突破し奥の姫歌達の方
向へと向かう

流石にこれだけの数を一人で押し止めるのは無理があった
色々な事に気を使いながら戦っているので尚更だ

「定盛ちゃん！そっち行った！」

「ちよつ、まだ作戦考えてる途中……！」

「何時まで考えてるの!?……って、警戒すらしてないし……！」

突破された事を姫歌に告げるが彼女はほぼ無警戒

何ならCHARMを構えてヒュージへの警戒すら行っていなかった
た

負傷者の保護に気を取られ、次の一手や万が一の事態を何も考えて
いなかったのだろう

「(完全に浮足立ってる……もう、本当にさあ……!!)」

姫歌をサブリーダーと司令塔に任命し、新宿事変後も続投させると
宣言した割に叶星がこの辺りを徹底して教えないのも問題ではある
のだが……

戦闘が始まっているにも関わらず案を出して来ない司令塔など論
外だ

AZは前衛であり、確かに時間稼ぎをしようという役目もあるが、そ
れは司令塔が作戦を考える為の時間稼ぎではない。

作戦は到着時の段階である程度は決めなければならないし、遅くて
も負傷者の保護をしながらでも策を練っていなければならない。

叶星達と別行動というイレギュラーが発生したというのが言い分
かもしれないが程度に差こそあれ戦場ではイレギュラーなどつきも
のだ

完璧は求めないが最低限の対応はして欲しい

「後ろは気にしないで、そのまま前だけ見て!!」

その声と同時に突破されたヒュージが撃破される

「アレだけの数を抑え込めるなんて流石だね！」

でも君、叶星と高嶺から聞いた限りだと戦う時は射撃がメインなん
じゃなかった？」

「弾を多めに持ってきたとは言え序盤からバカスカ撃つたらすぐに尽
きるんで……ここは温存です」

楳が自身に加勢してくれるようだ

戦闘スタイルの違いに違和感を持ったようなので理由も説明する

「そっか。こっからは私達も加わるよ！」

後ろには優秀なスナイパーもいるから安心して戦って」

「姿が見えない楳さんが支援。豪華と言うかそれ本当なら灯莉ちゃんのやる事なんだけどなあ）助かります」

攻撃の飛んできた方向を確認

ここからは見えないが姫歌達の近くに楳が居ない事から攻撃を行ったのは彼女だという事が分かる

欲を言うのならばその役目は既に灯莉が行っていないかならぬ
い事

自身のレアスキル、普段の戦法と役割を理解していないのだろうか
？

後ろからは楳の支援に加え姫歌達も加勢してくる

これなら先程よりは楽に戦えそうだ

自分と楳が前衛

残りは後衛の形で戦う事になる

「（他人と連携したり引っ張るんだこの人…叶星さんと高嶺さんみたいに『私と楳の二人でー』とか平気でやるって思ってたけど）」

意外に感じたのは楳は自分と

楳は姫歌、灯莉、紅巴との連携を重視した戦いを行うこと

自分達でやるとばかり思っていた

「右側任せます！」

「分かったよ!!」

背中を預けるような形にもなるが、海瀉と楳で分担してヒュージの
掃討

そうかと思いきや

「よし！スペース作るよ！」

突っ込んでやって」

「了解!!」

楳の合図と共に海瀉が突撃しヒュージを撃破

百合ヶ丘や御台場のリリイが使う技術を彼女は持っていない為、樫の動作の予測は出来ないが合図さえくれれば連携は完璧にこなせる

樫もそれを分かっているからこそその行動だろう

：ヒューズの動きの予測にはサブスキルを使っている為攻撃が当たる心配もない

「(やりやすい：これがトップリリイの力)」

初めて組むにも関わらず非常にやりやすい：樫がこちらに合わせ
てくれている事を考慮しても、だ

彼女の技量の高さが伺える

余談になるが樫や椀も御台場時代に同じ予備隊で戦ってた以上、叶星と高嶺みたいな事をやると思っていた

樫達の加勢と連携でこの場での戦いが終わるのに時間はかからなかった

当たり前の話だがチームとして戦った方が効率は良いに決まっている

戦闘が終わり一度全員が集まる

すると

「海漓、樫様と何か打ち合わせしたの？」

滅茶苦茶息合ってたじゃない」

「いや、何もしてないよ」

「何もしないであそこまでの連携を!？」

姫歌の問への答えは決まっている

さっきのは即席の連携

打ち合わせも何もない。そんな事をする時間がない以上当たり前だ

「即席の連携だったから不安はあったけど決まってよかったなーって」

「私も。」

事前に打ち合わせしてなかったから上手くやれるかなーって少し心配だったけれど：決まってよかった」

樫も似たような事を口にする

手の内も何も知らない中で即席で連携する事への不安はあったのだろう

叶星と高嶺の後輩とはいえ、海瀧の場合は中等部で既にリリイとしての型が出来てしまっている

百合ヶ丘やメルクリウスの出身ならともかく相模女子と言う御台場にしてみれば未知のリリイである事を考慮するならば樫としても不安はあったようだ

「天葉の妹って聞いたから少し不安だったけど…それもいらなかったね」

「不安…ですか？」

「すっごいきかん坊だったり戦闘中にテンション上がって性格変わるレベルで豹変したりしないじゃん？」

もしかして、豹変するまでもなかった？」

「私はそういうの無いですね…はい

大丈夫な…はず、です。」

不安と言う言葉から能力面かと思っただが、全く別方向の回答だった為、気が抜けてしまう。

豹変するリリイなどそこら中に居る

ルナティックトランサー持ちでもないのに、だ

特段珍しい事ではない

自分も戦い方は荒いかもしれないが豹変はしていない筈だ…もしかしたらしてるかもしれないが、相模女子の他のリリイの濃さに比べたら薄いとは思っている

「樫様が海瀧ちゃんに合わせてくださったんでしようけど…即席の連携であそこまで上手く行くんですね…」

「御台場のリリイってすごいねー」

樫と海瀧の雑談を見ながら紅巴と灯莉は即席で連携をこなせる樫の技量、即ち御台場のリリイの力を目の当たりにし、感激する

「では次に参りましょう

ヒューズに押されている防衛線がまだありますから」

権は気を引き締め自分達は次の戦場へと向うのだった

第62話

途中、紆余曲折ありながらも自分達は最後の苦戦している防衛線の立て直しに取り掛かる

「…」

海瀉は相変わらずの勢いでヒュージを撃破する

無言で、だ

敵の攻撃を回避し切り伏せる

これの繰り返し

姫歌達も戦っている…が

「姫歌ちゃんと灯莉ちゃんの信頼関係

これはもう愛ですね!!」

姫歌と灯莉への連携攻撃に対する的外れな感動

「そ、そんなんじゃ…」

「照れるなつて定盛☆」

「照れてないし!!」

彼女達三人の場合戦場に慣れてくるとすぐこれだ

「(愛とかそんなんじゃなくて味方の背中を守れない狙撃手とか解雇レベル!!)」

そもその話、信頼関係や連携を愛と解釈すること事態が論外だ

確かに愛と言えるかもしれないし、そういう捉え方をされる事もリイとしては少くないし、そう考えると紅巴の言う事も間違いでは無いと言えるのが悲しいところだが

「な、なんか緊張感のない子達の集まりだけ…」

「でも強いよ、きつとかなりの戦いをくぐり抜けてる」

そんな光景を見ればグランエプレを初めて見た現地のリイからすれば緩くても強いリイの集まりとして見られても不思議ではない
い

「(バックがアホみたいに強いから!!」

：トップレギオンが戦場で緊張感もたないって認識されるとかアウトだし)」

多くの戦いをくぐり抜け、生還したことは認めるが、それだって叶星や高嶺、合同レギオンになってからはヘルヴォルや一柳隊という強力な仲間がいたのが大きい。

合同レギオンになってからはヘルヴォルや一柳隊という強力な仲間がいたのが大きい

今回だって椀や楪というトップリイがついている

初心者3名からしたら恵まれすぎてるほどに強力なりイに囲まれ、好きに立ち振る舞えるという贅沢すぎる環境だ。

自分への認識は分らない

初心者よりは強いけど他から見たら弱い程度の認識だろうか？

だがこれだけ緩いということは別な見方だって出来る

「(緩くやつても生き残れる程の才能があるって事にもなるんだよね…)」

幾ら味方が強くても自分達が弱かったら意味がないのは当たり前前の話だ。

それだけではない。

戦場で緊張感を持たずに立ち振る舞ってもここまで生き残れる運の良さも持っている

姫歌達は死にもぐるいで訓練しなくてもここまで戦いを乗り越えられるだけの才能に加えて、運を持っている。

持っている人物だと認めるしかない

「(本当、才能の差を見せつけてくれちゃって…腹立つ!!)」

絶対にあり得ないが、もしも海濱が相模時代に似たような事をしてたらどうなっただろう

答えは簡単だ。目撃した上級生や話を聞いた教導官からの有り難いご指導やお話が有るだろうがそれで済めば運が良い、加減はあるから

大抵の場合ヒュージの餌になるか攻撃を受けて死ぬだけだ

仮に生き残れたとしても五体満足とは行かないだろう

戦場に出れば死にもぐるいで戦い、生き残ってきたのが相模女子のリリイだ

戦場の過酷さを知るからこそ荒くなったりリイだって多くいる
：元々荒い人物もいるが、それはそれだ

腹は立つが戦う時は冷静に
仮にも経験者が怒りに飲まれ、冷静さを失って戦うようではいけない
い

すぐに切り替える

ヒュージから放たれる攻撃を回避、接近し、そのまま斬り伏せる

「少し撃つておくか」

ここまで弾薬を温存出来たのは嬉しい誤算だ。

トリグラフを射撃モードに変形させ、左右同時に攻撃、放たれた弾丸はヒュージを容易く撃ち抜く

それを何度か行う

「ヒュージの動きを予測してる!?!」

「しかも全弾あたって…」

周りのリイの感想が全てである

ヒュージだって動き回る普通に撃てば数発は外れるだろう。しかし、彼女の放った弾丸はまるで移動先を呼んでいたかのような軌道で放たれ、回避される事なく直撃する。

それが1発も外れる事なく、だ。

灯莉や雨嘉の様なタイプのリイにはいらぬ技術かもしれないが、海瀉のように前衛で射撃主体で戦うリイには必要な技術である。

当たり前の話だが、ヒュージは動かない的ではない。速さに差こそあれ動き回るのだ。

予測して撃たなければ攻撃が当たらない

「今ので最後…か」

気がつくや付近のヒュージは全滅

椀と樫もヒュージの群れを倒し終えたようだ

「これで私達の仕事は終わりです

純さん達と合流しましょう」

全員が無事な事を確認すると楯はそう告げる

純達と合流、つまり特型ギガント級との戦いという事だ

想定外な事ありつつも楯のプラン通りと言う事になる

暫く歩くと、叶星達が戦っている場所に到着する

一度距離をとり再度攻撃するタイミングを伺っている所だったらしい

「場所は更地：か障害物が多い方がやりやすいんだけどな」

冷静に付近の状況を確認する。

付近に遮蔽物はなく、一見すると戦いやすいように見えるが、幻覚を生み出すユーバーザインとの相性は良くない

以前の梅達との戦闘のように遮蔽物を活かしながら戦うのが得意な彼女にしてみれば一番イヤな状況だ

この状況では奇襲も出来ない

幻覚で障害物を生み出しても露骨すぎるためヒュージへの効果も薄いだろう

逆に叶星達にしてみれば一番得意な状況ということだ

戦士らしく力と力の真つ向勝負が出来る

攻めるのは簡単だが、ヒュージから攻められた時には回避しかダメージを防ぐ手段が無いというのが非常にやりにくい

作戦も決まる

あのメイルストロムの攻略の鍵は灯莉のマギの色が見えるという力：世間で言うところの異能が握るらしい

ちなみに異能とはレアスキルやサブスキルとは違う能力であり、ごく稀にそう言う力を持つリイがいる

「海濤は私とよ」

「わかりました」

この後、ダメージを与える為、特型ギガント級への攻撃をする際の攻撃班のようだ

船田姉妹

叶星と高嶺

権と櫟

そして、権と海漓の合計4ペアで波状攻撃をするようだ

「(クリューサーオール使いの上級生とは縁があるのか、私?)」

合宿の際に一時的に組んだ瑤

新宿事変の時は藤乃

今回は権

全員がクリューサーオールを使用する上級生のリリイだ

ヒビイロカネ製の高性能機と言う事で使用者も多いのだが、それにしてもここまでペアとなると因縁に思えてくる。

何なら相模女子の現風紀委員長も使用している…こちらもやむを得ない事態で一度だけペアを組んだ

「海漓の場合はビシビシしごととか戦い方を教えるとかそういう段階じゃないし

…:そうね、使えるか使えないかで判断するわ。好きでしょ、そういうの?」

無理なら外れて貰う、良いわね!」

「はい!」

一見厳しそうにも見えるが彼女の言う事は正論だ

足手まといを抱えながら戦えるほど甘い相手では無いし、無理なら抜けるのがお互いの為だ

相模女子出身の彼女からすれば使えるか、使えないかと煽られて怯むようなタイプでもない

「全員戦闘態勢!!ケリをつけますわよ!」

戦闘時間の長さから純が指揮を取るようだ

彼女の合図とともに攻撃開始となる

「先行します!!」

「分かったわ!立ち位置はこつちから適宜指示する!」

海漓も権よりも前に出る

彼女はAZ、権はBZの立ち位置だ

「デカイから当てやすい!!」

彼女は射撃で攻撃を的確に叩き込んでいく

切り込んでくる叶星や純達の邪魔にならないようにする事も忘れない。

流れ弾が味方に当たりましたなどシャレにならない

「(この位置じゃ邪魔か、私?)」

後続との距離と同じように突撃してくる前衛との距離を確認

動きを止める事はないし、攻撃も緩めないが立ち位置をどこにすれば良いかは悩む

スペースはあるため後退も視野に入れる

「海濱は後退・TZの位置まで下がって

私も上がる!!」

察知したのか権はすぐに彼女に後退を指示する

権もTZの位置まで上がってくる

「複雑に考えすぎ!」

何も考えないのも困るけど、それ程の技術と中等部からの経験、視野の広さがあるなら自分の感性で動いても問題ない」

「わかりました!」

好き勝手に動かれるのも困るが、空いたところに入るならばポジション変更も有りということらしい

開いているということは入っていいと解釈するのもありという事…もしくはそこに入って欲しいから意図的に開けたかの二択だ

その後も権や他のペアとの連携は続く

TZの位置まで下がったお陰か特型だけでなく権や他の味方の立ち位置も把握できる為、自分のリズムで攻撃が可能

望む、望まないは別として自身の射撃が前衛で戦う純や初、叶星、高嶺への援護射撃にもなっている

「(敵には嫌がらせ、味方には心遣い)」

敵の嫌がる事をするのが戦いならば味方へは助かる事、心遣いをするのでもまた戦いだ

純と初へのタイミングが手探りだが、これで良いらしい

特に何も言われないという事は続けても良いという事だろう

最初に出会った際の権への対応を見る限り純は不要な事はつき

りと口に出す印象がある

権も時折切り込んで下がるの繰り返し

もしくは

「権、少し借りるよ！」

「分かったわ！」

海漓！続きなさい！！」

「了解です！」

樫から誘われれば樫との連携攻撃だ

「私は右から回り込むから海漓は左から

挟むよ！」

左右に分かれ近接での同時攻撃

純達もタイミングを見て加勢してくる

波状攻撃でメイルストロムも徐々にだが弱っていくのが分かる

好機とばかりにそれぞれが攻撃のペースを上げていく

「私が前に出て切り込むから後方から援護！」

「ご自慢の射撃を思う存分叩き込みなさい！！」

海漓からの支援に合わせ権がメイルストロムに接近、流れるような

動作で攻撃を叩き込んでいく

「(反撃なんてさせるわけないじゃん！

！)」

勿論、メイルストロムも権に反撃を試みるが海漓は触手や胴体に射撃を叩き込み反撃の隙など与えない

序盤に弾薬とマギを温存したおかげで思う存分に射撃が可能な事も大きい

攻撃を終え、権も下ってくる

「いい加減沈めつての…！！」

弱りはするが、倒れないメイルストロムに悪態をつく

「流石にノインヴェルトじゃないとギガント級は倒れないわよ

これだけ打ち込んだし弱ってるとは思うけど」

権もその言葉には同意する

ギガント級はノインヴェルト戦術じゃないと倒せない。

しかし、弱らせるだけならばノインヴェルト戦術じゃなくても可能
これだけ弱らせれば、と言うのは誰もが思っている
そんな時だった

ギガント級が再度攻撃の意思を見せる

「来るか…!!」

「かかってきなさいよ!!」

全員、身構えるがギガント級の狙いは自分達では無かった

「…下がれ!!狙われてる!!」

「えっ!？」

気配の先に居たのは紅巴と姫歌

海漓も急いで教える

自分達の攻撃に見とれ警戒を解いていたらしい

ヒュージは自分達ではなく二人を狙うつもりだ

あそこまで警戒を解いていては動作に遅れが出る

攻撃を逸す、もしくは中止させようと彼女は射撃を叩き込むが、び

くともせず、メイルストロムは攻撃を放つ

しかし放たれた攻撃は二人に当たる事はなかった

直撃する直前に純が二人の前に盾となるように立ち、攻撃を受けた
のだ

マギの障壁なのか、制服の機能が、はたまた防御系のサブスキルを
発動したのか

理由は定かではないが、幸いな事に大きな怪我には繋がらなかった
ようだ

「何で戦闘中に警戒解く!？」

「バカじゃねーの、特型ギガントだぞ!？」

「警戒を解かないなんて基本中の基本よ、全く…」

やはりというか何というか、不安視していた事が当たる

しかも今回は他校のリリィのフォローがなければやられていたレ
ベルの失態だ

海瀉は怒るし、権も呆れている

「トラブルはあつたけど戦闘中

切り替えるわよ!!」

「はい!!」

いつまでも引きずる訳には行かない

切り替えて再度、攻撃を行う準備をする

戦いはまだ終わらない

第63話

ヒュージの動きが鈍くなり、ここから再度攻撃を仕掛けようとしたその時だった

「叶星先輩、あのヒュージ、何かする気だよ!!」

「全員距離を取って! マギ干涉が強くなる!!」

灯莉の指摘と同時に叶星の指示

「急いで!!」

「はい!」

権の指示と同時に海瀉も下がる

後退と同時に金切り音のような音が大量で響き渡る

「これは、中々…!!」

マギへの干涉というのものもあるが、それ以上に聴覚へのダメージが大きい

距離を取れば影響が薄くなるのは不幸中の幸い

灯莉の目を頼りにすればこちらは影響を受けずにノインヴェルト戦術を行う事が可能

それを全員が理解したからこそ、このタイミングでノインヴェルト戦術を行う事を決める

「灯莉さん、貴方がこのノインヴェルト戦術を成功に導く為のキーマンです」

「なら私は灯莉ちゃんの護衛とバックアップに入ります」

「よろしいのですか?」

「ええ、どっちにしろもう一人はバックアップ要員になる訳ですし…経験を考えたら私が適切じゃないですか? (本当なら高嶺さんが引つ込めば良いけど絶対に降りないからな!)」

権への提案

ここには計11人のリリイがいるが、正式なノインヴェルトは9人で言う為二人余る

灯莉はノインヴェルト戦術を行わずメイルストロムを見張り、異変があれば通達する役割

残りは後一人だが、ここで海瀛がノインヴェルト戦術に参加した場合、姫歌か紅巴が外れる事になるのだが初心者二人に灯莉の護衛と非常時のフォローを任せるのは非常に心細い

良くも悪くも第一線の役割しか知らない為、こういう時のバックアップのやり方が分からないし、教えてもない

経験者がバックアップに回るのが最適解となる

勿論高嶺の事を考えると彼女をバックアップに回し海瀛が参加するのが最適だが、そんな事が判断できるならとつくにしているし秋日もグランエプレへの見方を改めている

「強い戦士っていう教育と名門って言う事もあるんだらうけど…後は叶星さんか」

戦士という特性を考えても自身の体調を見て後退や他人に出番讓る考えなど有る訳がない

名門のリリイ特有のプライドも有るだらう

他にも叶星が戦ってるのに自分が下がるなど有り得ないという思いも有るだろう

二人は自分達を戦力や仲間として計算していないにしろ、ここまで過ごして来たのだ。ある程度の思考は読める

そんな事もあり彼女がバックアップを務める形になるのは必然だ

御台場のリリイにバックアップをやらせる訳にもいかない、流石にそれは大問題になってしまう

「バックアップはお任せします

万が一の時はこちらの指示に従って下さい」

権もその提案には同意

バックアップの重要性を理解しているのも大きい

彼女が隊長を務めるセインツは計13人のレギオン

そう言う役割のリリイも抱えているのだから尚更だ

その後、機会を伺った後ノインヴェルト戦術が開始される

そしてそれに合わせるように再度特型のスモール級の群れが出現

「やっぱりバックアップに回って正解だったかな、私」

そんな風に呟きながらも支援を行う

弾薬もマジも十分にある

使うならばここだ

主に姫歌と紅巴を射撃で支援しながらノインヴェルト戦術を観察する

「(御台場組はともかくなんで叶星さんはなんの躊躇いもなく紅巴ちゃんを普段と違うポジションに入れるんだ?)」

ノインヴェルト戦術のフォーメーションも見ながらの支援になるが、気になったのは紅巴の立ち位置

彼女は本来ならばBZ

しかし、今はAZの近くでポジションを取っている

グランエプレも可変フォーメーションを採用している為、リリーのポジションがこまめに変わるが紅巴があ的位置につくことは今までなかった

「(本人もそんな性格じゃないしレアスキルと技量を考えたらBZで問題ないと思うけど)」

本人の性格と技量レアスキルであるテストAMENTの性質を考慮すればBZは適切だ

勿論、テストAMENT持ちでAZや前めにポジションを取るTZも居るがそれがセオリーと言う訳ではない

「(前に出す計画でも有るのかな…いや、特型ギガント相手に慣れない合同ノイヴェルトでのフォーメーションでやる事じゃないけど)」

今後紅巴をあの立ち位置で起用する計画があるのかも知れないがこのような状況でやることでは無い

先ずはグランエプレ単独での訓練で試すのが先だ
ぶつつけ本番でやらせることでは無い

「余計な事考えてる場合じゃないか…!」

とは言え考えてばかりもいられない

彼女には彼女の役割がある

支援射撃と言わんばかりに特型ヒュージを確実に撃ち抜いていく
狙うのは主にノインヴェルトを行っているリリーに向かおうとし

ているヒュージ

特に姫歌と紅巴に向かおうとするヒュージを最優先で狙う

相手の移動先を予測し攻撃を放つ

「灯莉ちゃん、ヒュージに異変は？」

「ないよー」

時折、灯莉に声を掛けることも忘れずに

流星にこの状況でヒュージに気を取られ自分の仕事を忘れるような事は無いと思うが念には念を…だ

「あつ、とつきーが!!」

「…ありや不味い」

ノインヴェルトも終盤、問題の紅巴にパスが回ったのだがヒュージに囲まれてしまいパスを放てない

残るは権と純

純はメイルストロムの近くに、権は少し離れた位置に陣取っている

「(どっちへのパスをアシストすれば良い?)」

誰にパスを渡すのか

それが分からないと援護が出来ない

ヒュージの群れを蹴散らしパスコースを作る事は可能だ

後はどちらがパスを要求するか、だ

「海滴さん」

すると、権がこちらに目配せをする

恐らくは自分へのパスコースを作って欲しいと言うことだろう

「だったら…!」

包囲が薄いのは紅巴の後方

射撃で周辺のヒュージを素早く撃ち抜くと

「紅巴ちゃん！権さんにパス！」

「えっ!?で、でもせっかく詰めた距離が…」

ここで権にパスをしてしまえば距離が開いてしまう

そんな風に考えたのだろうか

「問題ありません。私を信じてください」

権は心配いらないと告げる

「で、でも…」

「でもじゃない、良いから早く投げなって!!」

権さんの言う事を信じる!!」

「わ、分かりました!!」

一分一秒を争う時に素早い切り替えと即座の対応が出来ないなど問題外だ

本来とは違う立ち位置にいるから仕方の無い部分もあるが、味方にパスを放つという基本的な事を躊躇っては駄目だ

紅巴の性格が内気であったとしても強めに言う

そもそも、権にパスを放てば詰めた距離が開くなど言われなくても分かっている

自分達以上に多くの戦いを生き残ったりリイダ、知識も経験もあるパスを要求したという事は策や何らかの手段があるという事

少ない間とはいえ共闘し、世話になった者の言葉を信じないなど海濱からしたら有り得ない

パスを投げ終え権が受け取ったのを確認すると

「包囲網を作り直される前に離脱するよ!!」

急いで!!」

「は、はい…」

「(なんであの場面で叶星さんと高嶺さんは『権を信じて』の一言が言えないんだ…)」

紅巴を連れ、ヒュージを蹴散らしながら急いで包囲網を突破

そもそもの話、先の権を信じろという言葉は自分よりも先に叶星と高嶺が言わなければならぬ言葉

苦楽を共にした自分達の仲間なら尚更ではないのかとすら思ってしまう

「気を付けて、あのでっかい音が来るよ!!」

灯莉の指摘とほぼ同時に権は純へとマギスフィアをロングパス

そのまま純がフィニッシュショットをメイルストロムに放ち、勝負が決まる

エヴォルヴのようにマギリフレクターで弾く…と言うことが無

かったのは幸いだ

特型スモールの群れもマイルストロムの撃破と同時に消滅する
親玉であるマイルストロムが撃破されると連鎖して消えるタイプ
だったようだ

各々が勝利の余韻に浸る中、彼女は冷静に振り返る

「危なっ…後少し紅巴ちゃんのパスが遅れてたらフィニッシュ
ショットよりも妨害が先で詰んでたじゃん」

やはり鍵はあの場面だった

紅巴のパスが後数秒遅れていたらマイルストロムの妨害が先に決
まりノインヴェルト戦術が失敗していた可能性が大いにある

あくまでも可能性だ、パスが遅れていても成功していた可能性だっ
て十分に有る

いや、御台場の二人ならば強引にでも成功に持っていったかもしれ
ない

付近に撃ち漏らしが居ない事を確認した後、臨時の司令部まで歩い
て戻る

戦闘は終わるが、多少の後味の悪さが残った形となってしまう

第64話

「メイルストロムを撃破し、後は帰るだけ…」

ガンシップに乗り込み、全員が一度御台場まで戻る

御台場到着後は全員がガンシップから降り、船田姉妹はそのまま校舎内へ

権はガンシップの整備士と打ち合わせ

姫歌達は樫から権の話の間かされている

「取り返しても油断したらまた奪われる…か」

そんな中海瀨は別の事を考える

実はあの地域は少し前まで陥落地域となっていた

そこを解放したのが姉達が所属していたレギオン

世間で言うところの初代アールヴヘイムだ、ちなみに今のアールヴヘイムは二代目

初代アールヴヘイムは姉以外にも夢結や梅も所属していた

その活躍は伝説レベルであり数々の逸話がある

房総半島解放作戦もその中の一つであり、そのせいもあり現地の住民、リリイは彼女達を神格化している

ここまでであれば良い話…なのだが、問題はその後
本当ならば二度と奪われないようにしないとイケなかったのにこの有様

特型とスモール級の群れに対応しきれず、外征がなければ再びヒュージに奪われかねない状況になった

「優雅さよりもやる事が有るだろうに…全く」

羽衣女学園、百合ヶ丘と同様にリリイに優雅さを求めるガーデンらしいが

優雅さ求めた結果ヒュージから守れないのでは意味がないと言うのは彼女の考え

まあ、こんな事考えるから野蛮とか言われるのだろうが、そう言う校風で育ったのだから仕方がない

「樫さんの話も参考にはなるんだけど…あの三人は真に受けるから

なあ)」

他に気になると言えば御台場到着後に三人に対し樫が話す権の話
題

何も間違つて居ないのだ、おかしな所は何もない

努力は報われるから君達も頑張つてという趣旨の話だ

問題なのは三人がそれを全て真に受ける事

勿論努力も大切だ、だが彼女達の場合努力以前に戦場ではふざけない、ヒュージ相手に油断しないという初歩的な事からやらなければならないのだ

「…努力する前に戦場で舐めた事しない事から始める必要があると思う
んだよなあ、私…」

「なら言えば良いじゃない。」

眩きに対して権は反応する

分かっているならやれと言わんばかりの言葉だ

だが、海瀧まで今の今まで大人しくしてたのも理由はある

「優しくしても効果ないなら相模式でやった方が良いですかね…?」

でもアレって入学前からウチはこういう風にやるぞって分かった上でやるから効果ある訳で

あのレベルだと最悪体に叩き込んででも駄目なことだって分からせる必要がある訳で…」

別に思う所が無かった訳ではない

だが神庭の出撃するからには覚悟を問う方針と相模の方式では相性が良くない

今の自分は神庭のリリイだ、相模女子のリリイではない

ならば神庭のやり方で接するのが筋だ

「海瀧が思うやり方で体に叩き込む以外に方法無い訳?」

「うーん…有りますけど」

それはそれで揉めそうなの…」

代案を求めろ、それはそれで微妙なやり方

「何よ」

「あの三人を無罪放免にした上で、叶星さんを徹底的に締め上げる所

を見せて、ペナルティも全部叶星さんにやらせるんです

…でもこれやるなら生徒会と教導官の協力も必要ですし…」

「それ高嶺が黙ってないし下手したらグランエプレ崩壊案件でしょ、却下

…そんな風になる前に何とかならなかったの?」

こちらも却下

この場合後輩がやっても全く意味は無いし、むしろ叶星への無礼になるのでやるならば生徒会長の秋日、もしくは教導官の協力が必要不可欠

頼めばやってくれそうな気はするが自分達の問題解決に巻き込むのは気が引ける

叶星を締め上げたら高嶺が反発しそうな気もするが高嶺だって主犯の一人だ

ついでに責任を感じてもらおう

「だって難易度に差があっても多くの戦い乗り越えて

合同レギオン後は新宿事変ですよ

戦場で遊ぶな、ヒュージ相手に油断するなって言われなくても分かんなきや駄目じゃないですか

「ここまでアホだとは思ってないですよ。」

「ま、まあ…そうね」

戦場で遊ぶな、手を抜くな等本来ならば言われなくても自覚しなければならぬ事

入学から今に至るまで様々な戦いを経験したのだからリイとして日々を過ごす中で自覚しなければならぬ事だ

実力とか精神面以前の話である

ガーデンは関係ないし言い訳にもならない

そんな風に思っていたからこそ今まで大人しくしていたが一向に改善されない今となっては失態だと認めるしかない

「先の方法だって意図はあります

前者は殴られたら痛いけどヒュージの攻撃はもっと痛いのでふざ

けた事するなと言う事を分からせる

後者は自分達の馬鹿な行動のせいで迷惑を被る人がいるつていうのを分からせる為ですわね」

勿論意図だつてある

殴られたら当然痛いけど精々痣が出来る程度だがヒューズの攻撃などとともに喰らえば痣では済まない

マジや制服の機能があるとはいえ万能ではなのだから殴られた時とは非ではない痛みが襲ってくる

自分達が馬鹿な行動をしたせいで迷惑を被る者がいるし、そのせいで余計な被害が出る可能性も十分にある

後者は他者への被害を自覚させる為の行為だ

「御台場はしないんですか？」

強い戦士を目指すつて聞いてますし相模よりエッグい事してる気がするんですけど」

気になる事もある

御台場はリリイを戦士として育成している

強い戦士を育てる為という理由で相模よりも過激な事をしてる事は十分に想像できる

言葉にはしないが椀、櫂、槩が異端で純みたいなタイプが大多数を占める事も十分ありえる

今思えば叶星と高嶺も戦士だ…思い違いかもしれないが感覚的には純に近い所があるとさえ感じた

「御台場はスパルタ指導するけどその手の肉体的、精神的な苦痛は与えないわよ

相模女子、そんな指導ばつかなの？」

「いや、これはもう劇薬ですよ

どうしようもなくなつたときの最終手段です、特に前者は

後者は…まあたまーにありましたよ」

どうやら違うようだ

だがこれも日常的ではない

何度も言うが相模女子でそんな事をする馬鹿なりリイなどいない

ペナルティの前には教導官や上級生からのお話だつてあるのだ
それらの段階を経た上での行為という事は忘れてはならない

後者はそれこそ兵士を育てる相模独自かもしれない

集団行動の重要性以外に上に立つ者の自覚を促すと言う面もある

『弱いから』『ふざけた事する奴の責任を負わなきゃいけないんだ』

と言う無責任極まりない思考を持たせない為

上に立つものにだつて自覚は必要だ

「…今回は黙つてたけど、私の前でふざけたことしたら…御台場式で
やつてあげるわ

相模式が成立してるのつて姉妹契約や似た制度が無いつてのも大
きいんじゃない？」

權も思う所はあつたのだろう

次があるかは分からないが權の前でふざけたら相応の対応はされ
そうだ

相模女子方式の背景には百合ヶ丘のような特定リレイとの間で結
ぶ姉妹関係制度やそれに似た制度が無い事もある、と指摘するが
「別にあつたとしても変わりませんよ

上級生を姉様とか姐さんとか呼び合つてたり同期間で深い仲のリ
レイだつていましたけど、やらかしたら素直に指導不足受け入れてま
したよ、裏ではキレてましたけど」

そこは関係無いと言い切る

中等部の時点で上下や同期でその手の仲は居たがやらかした時の
ペナルティは差別なく行うし受け入れていた

『ちゃんとやつてるつてのあの教官め!!』

上級生がペナルティ受けたときの反応の一例

『あの上級生、自分に相手いないからつて妬んでんじゃねーよ、バカが
!!』

同期間の時は上級生に言われた時のリアクションの一例だ

「呼び方もなんか引つかかるけど…まあ良いわ

權も戻つて来たしそろそろお開きね」

今の発言に引つかかる所もあつたようたまが權が戻つて来た為、お

開き

つまり自分達も駐在先であるルドビコ女学院に帰る事になる

「そうみたいですわね」

…後は気になったことが一つ」

そう言いながら校舎の方を指さす

その先には二人のリリイ

「さっきからこっちをガン見してる子、無視してよかったんすかね」

そのうちの茶髪で小柄なりリイが明らかにこちらをガン見している

横のショートヘアの子は恐る恐るという様子だ

『いつまで仲良く話してるの!?!ねえ!?!』

『お、抑えて…』

「気にしないで。」

今度紹介するわ」

気にするなと言うのだから、問題は無いのだろう

その後、ガンシップに乗り込みグランエプレの面々はルドビコ女学院に戻る

ガンシップから全員が降りるのを確認すると叶星は

「皆、今日はお疲れ様

疲れたと思うし解散しましょう

ゆっくり休んでね」

「(何も無いのか…)」

そう告げ解散させる

別行動をさせた事の説明も無ければ、油断し純へのフォローを招いた姫歌と紅巴への注意も何も無い

説教とはいかずとも一言二言はあっても良いはずだ

確かに疲労回復も大切だが簡単なミーティングすらも行わないの
はどうか、とも思うが

「(やっぱり高嶺さん無茶してたんだろ)」

高嶺の回復が優先だろう

分からなくもないが、それでも、思う所はある

そうして数日が経過したある日の事

世田谷区域へのヒュージの対応に一柳隊と合同で行うことが告げられる

ヘルヴォルは別のヒュージ対応の為不在

ルドビコ女学院の他のリリイもその他のヒュージへの対応で忙しいらしい

だが

「すみません、その出撃拒否させてもらいます」

「えっ」

海瀧はその出撃は拒否する事を伝える

御台場の時のように悩む素振りなど一切見せずに即答だ

「ど、どうしたのよ海瀧、出撃拒否なんて」

姫歌も当然驚く

彼女が出撃拒否を選択する所を見た事が無いのだから当り前だ

なんだかんだ出撃し、戦場に出れば凄まじい勢いでヒュージを倒す人物がこのタイミングで出撃拒否などするわけが無いと思っていた

「別に。この戦場には命をかける価値なんて無いって判断したから、選択した

それだけ」

「それだけって…そんなの理由に」

姫歌は尚も食い下がってくるが

「分かったわ。

出撃選択制は神庭のリリイ全員に与えられた権利

それが海瀧ちゃんの意味なら止める事はできないわ」

それは叶星が止める

選択制を否定する事は誰にも出来ない

普段からサボってるならばそんなの認められないと一喝出来るかもしれないが、彼女は出れば凄まじい勢いでヒュージを倒し続けてきた

普段から真面目にやる人物の要求ならば飲むしかない

ただでさえ望んでいると思われるTZへの転向や司令塔の希望を

自分達の都合で我慢させているのだ

一つぐらい本人の要求を聞いたってバチは当たらない

ましてやソレはガーデンによって認められた正当な権利でもあるなら尚更

…上級生の隠し事を把握されている以上ここで彼女の選択を却下すれば今後自分達が出撃拒否をした際に揉めることにも繋がりがねないという判断もあったのかもしれない

「二柳隊の皆にはコンディション不良で出られないって伝えておくから…」

命をかけられるって思ったら出撃してね」

叶星はそう伝えると他の面々を連れて出撃していく

「部屋で寝てるなんて選択肢も無いし

…パトロールでも行くか」

海瀛が拒否したのはあくまでも一柳隊との戦場だけ

やる気が無いなんてことはあり得ない

準備をすると周辺地域へのパトロールには向かうのだった

第65話

さて、出撃拒否をした上でのパトロール
何もグランエプレや一柳隊との行動が嫌だったというだけが理由
では無い

「(念には念を：ってね)」

それは今までのヒュージの行動

ここ最近は特にその傾向が強いのだが主力となるリリイの不在を
ついたかのようなヒュージの大規模な攻勢

新宿事変の際は御三家

先の外征では羽衣女学園、主力部隊が不在だった

ヒュージがこちらの行動を完全に把握したかのような襲撃を何度
も仕掛けているのだ

状況は違えど防衛構想会議の際はリリイが一箇所に集まっている
最中の襲撃

程度に差こそあれ知能があるヒュージは今まで戦ってきた

陽動を仕掛けたなんて例は多くある

今回も形だけ見ればヒュージの大群を対処する為に多くのリリイ
が出払った形になる

万が一の可能性は考えるべきだ

学習するのはヒュージに与えられた特権ではない

人間だって学習する

何度も同じ手に引つかかる訳には行かないと考えるのは普通…の
筈だ

そして、この手の悪い予感というのはわりかし当たる

「…ヒュージ出現…場所は…近いな」

案の定と言うか何というか、ヒュージが出現

場所はルドビコ女学院近郊の住宅地だ

海濱は手早く準備を整えすぐに出撃、ルドビコ女学院のリリイも同
様…なのだが

「(怪我やら疲労で万全には程遠い…こりや苦戦するぞ)」

ルドビコ女学院のトップレギオンや選出経験のある実力者は軒並み別地域に現れたヒュージへの対応で不在

この場にいるのは万全ではない者ばかり

御三家のリリイだ。万全ならばスモール級相手に遅れなど取る訳無いが今回ばかりは厳しい

戦闘だけでなく市民の避難も同時に行わなければならない以上、当然だ

市民の避難が最優先なのは当たり前

だがその市民めがけてヒュージが接近しているのならば倒すしかない

「私達が市民を避難させるから…貴方達はヒュージを！」

「分かりました」

あくまでもルドビコ女学院のサポートに徹する

ここは彼女達の庭だ、避難場所や通じる道は全て頭に叩き込まれているに違いない

下手に出しやばらず与えられた任務を確実にこなすだけ

だが、彼女は一つ気をつけなければならぬことがあった

「(流石に派手にぶっ壊すわけに行かないか)」

このような状況だ。

本来ならば人命最優先、状況見て建造物等は最悪破壊してでも市民を守れの相模方式で行きたいが…やると後で面倒くさくなるので自重する事にする

ヒュージと戦いつつも市民の避難を滞りなく行わせ建物の被害を出さない。

その為にもルドビコ女学院のリリイとの共闘は必要不可欠

指示を聞きながら住宅街を移動し、ヒュージを見かけたら連携し撃破する

付近のヒュージからの反撃を許さず速やかに、だ

今回は全員が近接戦で戦っている

それは海濱も例外ではない

彼女は本来射撃を得意とするリリイ

態々近づかなくとも撃てばいい、と思うかもしれないが
海瀉程の腕ならば外す事はほぼ無い。

しかし、万が一外れた弾丸によって住宅の壁や塀を破壊した場合
『リリイが人々の営みを破壊して良いのか!?』

『ルドビコ女学院は無傷なのに!』

なんてクレームが入りかねない

「待って!なんで人がいるの!?!逃げ遅れた!?!」

「保護してきます!」

ヒューズを倒しながら住宅地を進んでいると、逃げ遅れた住民らし
き人物を発見

しかしこの辺りはもう避難が完了したと伝えられていた場所

にも関わらず逃げ遅れた市民がいたら同様する

ルドビコ女学院といえど例外ではない

「(やっぱり居たか…この手の馬鹿市民)」

しかし海瀉は少し違っていた

本当に逃げ遅れたのならば焦りと助かった事への安堵、走って逃げ
たのならば疲労があつて然るべき…だがこの市民にはそれらが見受
けられない

疑われる事はただ一つ

戦場で戦うリリイ見たさによる避難の遅れ

そんな事あるのか?と思うかもしれないが実際に有る

神庭では幸運な事に遭遇していないが鎌倉では近著だった

百合ヶ丘やメルクリウス、桜ノ杜といった強豪ガーデンのリリイは
リリイで有ると同時にお嬢様

そんな彼女達は戦場でも華麗で美しい立ち振る舞いを行い、戦闘外
でも芸能人のような活動を行っているリリイも多数存在する

最も身近な所だと姉や郭神琳が該当する

そんな事を繰り返していれば市民はリリイを芸能人か何かと勘違
いし、戦場で戦う姿見たさで避難が遅れたなんて事例が多数報告され
ている

勿論、市民も貴方達見たくて避難が遅れましたなんて言う訳がない

し、リリイもそんな事考えるわけがない

まあ、お嬢様が善良な一般市民を疑う訳もないし当たり前だ
ゲヘナさえ絡まなければ、の話だが

だが相模女子のようなガーデンに所属するリリイは違う

仕草とか諸々で分かるのだ

本当に逃げ遅れたのか、リリイ見たさに故意に逃げ遅れたのか、が
言い方を悪くすればヒュージを舐めた一般市民だ

リリイが来るから逃げ遅れても大丈夫というふざけた考えもあつ
たのだろう

「(流石に罵倒するわけにも行かないしな…)」

ヒュージを舐めたリリイならば腹も立つし怒りたくなるが市民と
なると話は少しだけ変わる

老若男女問わず罵倒する事も出来ず、かと言って見捨てれば大問題
見つければ保護するのが当たり前だがそれでは結局変わらない

「(スモールなんて大したことないーって言うのが変に伝わってるの
が悪いんだよね…)」

根幹にあるのはヒュージの中でもスモールやミドル級は弱い、と言
う事が伝わりすぎていることだろ

確かに弱いし油断しても問題は無い。たがそれは武器を持った才
能のあるリリイから見た場合の話だ

大半の人間はスモール相手でも普通に命を落とす。軍人もリリイ
も関係なしに

：そこを理解していない馬鹿が多すぎるのだ

市民もリリイも

逃げ遅れた市民を保護、数名が避難先まで連れていくため離脱
残りは海濱入れて4名だ

「まだいるかも知れないから気をつけていこう」

ルドビコ女学院のリリイに領くと再び歩みを進める
助けられてよかったと安堵している

どうやらルドビコ女学院も市民は疑わないタイプらしい
暫くするとヒュージはすべて撃破されたと告げられ、残党がない

か再度確認を終えた後ガーデンに帰還せよと言う命令が下される
「手伝ってくれてありがとう」

「いえいえ」

ルドビコ女学院に帰還後、その場は解散となる

帰還後も時間差で出撃するヒュージの群れの対処となり何度も出撃する、丁度夕方に差し掛かった時だった

「…何だ?」

校舎内が騒がしい

ふと様子を確認すると怪我をした梨璃が医務室に運ばれていき、一柳隊、グランエプレ両者共に命に別状は無いもののボロボロ

通りかかったリリィに確認するとどうやら対処した特型ギガント級、イビルアイに敗れ退却してきたらしい

「(出てない私には関係無いや

首を突っ込むのも野暮)」

心配ではあるが出撃拒否したのも事実

そんな人間が心配した所で余計な反感を集めるだけ

ここは無関係を貫くのが正しい対応だ

その日の夜は臨時のミーティング

治療中の梨璃を除いた一柳隊、グランエプレ合同で行う形だ

どういう訳か海漓まで呼び出された

すると叶星が

「海漓ちゃん、住宅地への襲撃

貴方知ってたの?」

「どうしてです?」

「本当なら貴方はグランエプレとして出撃する義務がある

出撃拒否して待機したと思ったなら住宅地への襲撃には対応したなんて襲撃を事前に知ってたとしか思えない対応よ」

「夢結がこちらを警戒するように見ながらそう告げる

数名も似た形だ

「何を疑ってたのか知りませんが、私が襲撃を予知出来るわけ無いでしょう」

恐らくだがゲヘナとの内通を疑ってきたのだろう。相模女子、神庭。派閥は共に中立派。警戒はしていただろう

理由も告げずに拒否したのは悪手だったかもしれない。

だがいきなり失礼極まりない事を聞いて叶星や高嶺が止めないあたり事前に打ち合わせた可能性がある

「じゃあなぜ？」

「ヒュージが陽動を仕掛けたなんて实例は多数あります

2度有ることは3度ある、3度ある事は4度ある。

今回も特型ギガントやスマールの群れが陽動かもって思ってたんですけど

ヒュージに何処までの知能が有るかなんて私には分かりませんが、住宅地狙うなら警備が薄くなったタイミングなんで」

「そこまで考えてたの!?!」

「そりゃ考えるって…」

ましてや今のルドビコのリリースは度重なる出撃による疲労と損傷でパンク寸前

そっちへのフォローだって必要だろ(権さんの働き忘れてるぞこれ…)」

何故か姫歌が驚く

戦場に出て大物を狩るだけがリリースの任務ではない

何度もいうが市民を守るのだからリリースの大切な任務だ

その為のフォローも大切な事だ

ルドビコ女学院が完全にパンクしてしまえばそっちの仕事まで自分達がやる事になり益々大変になる

海濱一人で状況が好転するとは思っていないが出る事で普段よりも早く終わればその分消耗だって少なくなるのだ

塵も積もれば山となる、ほんの小さな負担の軽減の積み重ねが立て直しに繋がることだってある

と言うか似たことをこの間の外征で権が行っているのを見た筈なのにもう忘れたのだろうか？

これでは被害よりも大物を優先した船田純や叶星達と何も変わら

ないではないか

勿論向こうにも言い分が有るし間違いでは無いのは十分理解でき
るが、それでも思うところはあ

「…分かったわ。その言葉を信じる事にする

疑ってごめんなさい」

「色々と誤解与えちやったみたいですね

申し訳ないです。」

その後は被害状況の確認や今後の方針を確認しミーティングは終
わりとなる

第66話

イビルアイに敗れた翌日

梨璃の回復待ちということも有り、各々自由行動…なのだが空気は重い

それもそうだ、まだ何も解決していない
グランエプレも同じいや、一人だけ違った

「異常なし…まだ仕掛けてこないか」

海漓は一人早朝から休憩を挟みつつ何度もパトロールに出ている
何度も言うか敵は特型ギガント級だけではない

ケイブから出てくるスモール級も立派な敵だ
昨日のあのミーティング後だ

海漓は叶星に二人で話がしたいと声をかける

「で、私はどうすれば良いです?」

ギガント級に出ますか?」

改めて問う

リリーの自主性を尊重しガーデンの制度を利用しての行動でスパイ疑惑をかけられたのだ

勿論真意を伝えなかつた事は悪いが、自分で考えて行動して責められたならば隊長の命令で動くしかない

「このレギオンの隊長は貴方です。」

ギガント級に出るでも引き続きルドビコ女学院の手助けを続ける
でも私は貴方の命令に従います

どうすれば良いですか?」

グランエプレの隊長は叶星

海漓からすれば叶星の命令は絶対だ

どちらでも大人しく従うだけ

先程のミーティングで黙って謝り引き下がったのだから所詮夢結は部外者だからだ

神庭に通い、グランエプレに所属してる彼女からすれば一柳隊に口を挟まれる筋合いは無い

いくら自身の判断とはいえ作戦中にその場を放り投げたりしたのならば責められても仕方がないが、彼女の場合その場にすらいなかったのだ

疑うなんてお門違いだし、同盟先ではあるが、他校のリリイを自分達の戦力として当たり前前に計算されても困る

話を戻すが、

ルドビコの戦力はパンク寸前と言う先程の彼女の言葉を信じるのか

それともルドビコ女学院の力を信じるのか

「海漓ちゃんに任せるっていうのが私からの命令じゃ駄目かしら？」

「決めたくないのか、決められないのかどっちだよ……」なら私はルドビコ女学院のサポートを継続させてもらいます。」

どちらでも指示に従うと言ったにも関わらず任せると言う事を言うのは流石にどうかと思う

「考えさせる事と何もしない事は違うって分かってるよね、この人？」

叶星の指示が無ければ何も出来ないというのも問題かもしれないが、何度も説明するが彼女はグランエプレの隊長だ

自身の発言や行動には責任がついて来る。戦闘に限ったことでは無い

考えて行動するのが駄目ならば命令という形で行動する理由を周囲に示す必要がある

それが海漓の行動の正当性を説明する理由になるからだ

真意は、「自分はどうすれば良い？ガーデンに認められた権利を行使した私の判断は正当性に欠けるっていう百合ヶ丘に解釈されたんですけど？」だ

流石にこれぐらいは読み取って貰わなければ困る。

それへの回答が「任せる」は余りにも酷い

指示に従うとまで言ったのに、だ

高嶺の事や勉強目的とは言えかなりの確率で自分達を他校のリリイに任せる事もあり、高嶺の事で精一杯、他なんて気にしたくない

と言う風に捉えられてもおかしくはない

：高嶺の件に関しては自分達のエゴで事情を隠し、結果苦しんでいるのだから自業自得と言う見方も出来るのだが

どっちにせよ、任せるというのなら当初の予定通りルドビコ女学院のサポートを行うだけだ

一度やると決めた仕事は最後までやり通す：彼女のポリシーの一つだ

そして、その選択は悪くなかったと思う
なぜなら

「ういーお疲れーツス」

「乙やでー」

「なんで外征先で我が物顔で過ごしてんですかね…」

相模時代の友人である舞弓が一人のリリイを引き連れ相模女子から外征して来ていたのだ

その名は九條くじょう 魅夢みゆ

海漓と同じく一年生、ポジションはAZだ

「こつちも長旅だったんや

許してーな」

「この距離なんで陸路で来たツスよ」

外征にはガンシツプと言うイメージが強いが普通に陸路も使う

近隣ならば基本的に陸路だ

ちなみに相模原から新宿までは長旅と言えるほど遠くない

大げさに言っているだけだ

「で、どうしたの急に？相模の任務は？」

「…まあ、本題入った方がええわな

話しましよ」

海漓の問に素直に答える

はぐらかすだけ時間の無駄である事はお互いに分かっているからだ

「ルドビコ女学院の現状確認と負担軽減の為の支援

これが目的や…まあ町田方面をこつちで引き受けるつちゅー事や

ね」

「町田方面から相模原にヒューズが流れ込んできて結構笑えない事になってるツス

ルドビコ女学院も中途半端な戦力しか回して来ないから正直な事言うと邪魔ツス」

東京都町田市、ここは本来ルドビコ女学院の守備範囲なのだが相模原とも接しており相模女子も準守備範囲と言う形で対応している

その為、ルドビコ女学院ともエレンスゲ程ではないが関係は良好外征の際も便宜を図ってもらっている

とは言え御三家の守備範囲だ

そこへの外征は高等部が担当し中等部は担当から外されている

中等部は自分達の守備範囲の防衛の他に外征してくるエレンスゲ中等部の対応が主だ

…高等部は高等部で対応する。当たり前の話だ

一葉や瑤、恋花と知り合ったのもその関連だ

ルドビコと良好な関係を築きエレンスゲと姉妹校提携

イルマから人員を迎え入れる

相模女子は中立と言えどゲヘナ寄りと言われてる背景だ

見分け方のノウハウも手に入る

「町田方面を相模で引き受け、ルドビコからの出撃をやめさせれば少しは回復と近隣の守備に人員を割ける、か。」

ルドビコから町田までは距離がある

町田方面の負担を相模女子で引き受ければその分近隣に人員を割ける

回復にだって回せる

パンクしかけている現状では使える戦力は一人でも多い方がいいし備えるべきだ

ここで気になる事がある

「それ、ルドビコ女学院からの依頼…じゃないよね

相模女子

私らは依頼があれば受けるとは思うけど…」

そう、それはルドビコ女学院が依頼したとは思えない

こんな状況になったとはいえ御三家

海濱が知る名門ならば出来ませんなんて言わない筈だ

まあ、相模女子は正式な依頼（と欲を言うなら見返り）撃破報酬が有れば間違いない（と言うか確実に）動く

勿論依頼内容を生徒会や特務レギオン、教導官が綿密に精査した上での判断にはなる

相模女子…というよりヒイロカネの設立の背景を考えればそうではないかと言う彼女の勝手な思い込みだ。

これが国や都からの依頼ならば確実に動く事はつけ加えておこう
「当然。」

今までのデータを全部送りつけて『お前らが万全じゃないリリイばかり派遣するから被害が増えている

万全になるまで相模が町田守ってやる』って」

「キャパオーバーだって気づかへんのやろうなあ」

「こんな状況でもプライド捨てられないか…」

機能を失つても名門としてもプライドは持つてるらしい

本当ならば増援の受け入れだけでなく、守備範囲の縮小

それこそ相模女子のような形で近隣校と打ち合わせを行い、自分達では出来ない所を任せるのが一番なのだが、他校

それも自分達より格下相手に頭を下げる事を嫌がるのはもう分かりきっている

「あの鬼教官の話だとイルマってルドビコに何度も助けられた言うてたし恩を返しに来るぐらいの事せーへんのかいな？」

「今日はたまたまいないだけ、って訳じゃ無いツスよね？」

中等部時代の事を思い出す

イルマとルドビコはライバル関係であると同時に危機を助けてもらった間柄だったと聞いていた

かつてのライバルの危機

恩を返す事も加わればイルマが率先して駆けつけてきてもおかしくはないと思っていたが

「ずっとだね

勿論、派閥の違いやイルマの任務もあるから厳しいのは分かってるけど」

今日に至るまでイルマのリリイはルドビコ女学院に顔を出してすらいない

ルドビコは過激派

イルマは穏健派

派閥の違い、向かわせるリスク

自分達の本来の任務だつてある。

簡単な事ではないのは分かりきっている

そして時間が過ぎれば人も変わる。

彼女が相模女子に赴任してきたのは今の高2世代が中等部に入学するのと同時期

教えを受けているのはイルマの中等部を経験した生え抜きかつ高3世代が最後になる

例の教導官が情に厚く義理堅い人物で相模時代は日頃から「戦果を上げる事は大切だが、それと同じ位人との縁や繋がりを大切にしろ」と言っていたし、イルマ時代も同じ事を教えていたと仮定しても当時を知る者は数少ない

今のイルマは没落したライバルとは関わり合いたくないとでも思ったのだろうか

だとすると随分と薄情な連中だと思ってしまう

だがこれも全て彼女達の根柢の薄い憶測に過ぎない

一つ気になるとすれば今のイルマには彼女のようない

「何かあったときの責任は大人が取れば良いだけ。お前達はルドビコの危機を救いに行け」と背中を押す（と言うかノロノロしてたらぶっ叩く）タイプの教導官がいなくても知れない

…もしくは彼女が異端だったかのどちらかだ。

そんな風に考えてると

「おーいー」

昨日供に行動したルドビコ女学院のリリイがこちらに向かって来る

「あれ？相模女子のリリイもいる…」

まあ、いつか。

この後こっちも警備の会議したいんだけど参加してもらっていいかな？」

「良いですよ。」

案内され、会議室に連れてこられるが気になる事がある

「リリイの数少ないツスね」

この場にいるリリイの数が明らかに少ない
すると

「イビルアイが引き連れてきた特型スモール級に対応するからって人員を持って行かれちゃって」

「この人数でルドビコ女学院近郊を守り切れ…と？」

「そう。」

イビルアイは一柳隊とグランエプレが対応する事で確定しているが、引き連れられるように現れている特型スモール級は広範囲に渡って出現

かなりの数が現れ激戦になる事が予想され、そちらへの対処に重点を向けるようだ

町田地区は相模女子がいるがルドビコ女学院守備範囲は相当広く、そちらに人員を回すことにしたらしい

…その為に近郊の守備担当の人数を減らすというのはいかなるものかと思うが

「ガーデンを留守にするわけにもいかないから本当に大変で…」

ガーデンにもリリイはいる

しかし、全員がコンディション面に不安を抱える者ばかり

そんな中でガーデンを留守にし、万が一にでもヒュージの襲撃を受ければ文字通り壊滅してしまう恐れがある

ガーデンへのヒュージの襲撃だって警戒しなければならぬ

「(ふーむ。)」

「あの…一つ、良いですか？」

「どうしたの？」

「初手の出撃、この近隣ならば私達三人で行きましようか？」

海漓はそのように提案する

三人とは海漓、舞弓、魅夢の事だ

「昨日出撃したエリアなら地形は頭に叩き込んだんで…新たなギガン
ト級やラーズ級の群れでも来ない限りは…三人いれば十分です

ルドビコ女学院の皆さんはガーデンで増援や緊急時の際のバック
アップとして待機…どうでしょう？」

「えっ、いや…でもそんな事までやってもらう訳には」

「…私達は外征組。いずれはガーデンに帰る身です。そうなる
と貴方達の守備範囲コは貴方達だけで守る事になります

まあ、リリーの消耗が激しいと私達も帰れないんで休める時には休
んどいて欲しいんですね」

これは本音だ

自分も舞弓達も町田にいる相模女子の本隊もいずれは所属する
ガーデンに帰らなければならぬ。

動けるリリーが増えなければいつまでも帰れず、今度は所属先に影
響が出る

戦力が整っている百合ヶ丘や相模女子…ヘルヴォル以外にもクエ
レブレを筆頭とした複数のトップレギオンを抱えているエレンスゲ
はともかく神庭は生徒会防衛隊とグランエプレの2つしかトップレ
ギオンが無い

秋日達ならば大丈夫とはいえ負担が増しているのは事実

いつまでもルドビコにいる訳には行かないのだ

自分達が居る間は休める時はしっかり休み戦線に復帰する準備を
整えてほしいのだ

勿論、急な出撃が多々ある為なかなか難しいのも分かっている

「こっちは外征、海ちゃん達もルドビコへの編入じゃなくてあくまで
も駐在

いずれ帰る事になるのは事実ツスからねー」

「後は…外征してる以上はある程度の戦果も求められるんで…今回は
この二人に花（と報酬）を持たせてやって欲しいってのもありますね

流石に外征して撃破0は不味いんで…怒られます」

「なら…お願いしようかな?」

ルドビコ女学院のリリイだ

ガーデン毎の事情はある程度認識しているらしい。

まあ本当にヤバくなったら来てほしいと予め伝えたのも大きいだろう

スモール級相手ならばこちらは最少の出撃で敵を殲滅したい

それが本音だっただろう

提案は願ったり叶ったりだった筈だ

そんな中、ヒュージ出現の警報が鳴る

イビルアイが出現

更には近隣にも特型のスモール級が出現、イビルアイに合流するかのような動きを見せている為、自分達以外の戦力を総動員し対応に当たるとるそう

「先ずは主力を引き離す…昨日と同じか

曾根ちゃん、魅夢ちゃん。こつちも準備」

「私達も準備!!」

ルドビコ組と神庭相模の連合組で準備を進める

そして、会議室を後にすると

「本隊は町田方面に出現したヒュージと戦闘になつてるらしいツス」

どうやら町田にもヒュージが現れたらしい

そちらは相模の本隊に任せるとしよう

誰が来ているかは分からないが、来ているのは相応の実力者ばかりの筈。余程の事が無い限り負けることは無い

まさか支援初日に大群の相手をする羽目になるとは思っていないだろうからそればかりは気の毒に思う…が相模のリリイだ。ここぞとばかりに戦果と報酬の為に張り切るだろう

…話を聞きつけて遊糸あたりも向かいそうな気もするが…それはそれだ

だが気になるとするならば

「このタイミングで町田にも？」

「らしいツスよ」

あのギガント級の影響だろうか？

ギガント級やアルトラ級ならば遠方のヒュージに影響を与える事は確認済みだ。おかしくはない

「出撃してつた連中やギガント級は？」

「順調にココから離れてつてるツスね」

イビルアイがそんな動き見せてるツス」

全員、見事に誘い出されていつてるようだ

ここまで見事に引つかかるとむしろ清々しい

出撃した面々がルドビコ女学院近隣との距離が開いた丁度その時だった

「警報!!」

やっぱり出たヒュージは陽動ツスね」

再度警報、近隣に大量のケイブが発生

スモールとミドルの大群が出現したという

「弱った戦力ならミドルまでで十分なんて随分舐め腐った事する個体やねえ…」

「何度も同じ手が通用するって考えてる時点で舐めてるだろ

こつちとしてもラーズ級やギガント級の群れなんて来られても困るけど」

そう。ヒュージは明らかに舐めている

同じ手が通用すると思ひ込み何度も何度も仕掛けてくる

勿論、ヒュージは対処しなければならずそれがギガント級と言うならば尚更

しかしそれらの事情を考慮しても敵の陽動を一切疑わずに追撃し何度も引つかかっているリリイ側(特に名門と呼ばれるガーデンに通うリリイ)にも問題はある為、一概に言い切れないが

もう少し慎重にはなるべきだと思ふ

「(陽動疑って慎重な考え見せたら臆病者とか抜かすからなあ連中：コツチからすりや何も考えずに突つ込むとか馬鹿かつつーの)」

かつての戦いで光景を思い出し少しばかり苛立つがすぐに切り替える

とはいえスモールとミドルだけなのは幸運かもしれない
数は相手が多いがこれから向かう戦場は遮蔽物の多い住宅地、平地ではない

少しばかりこちらが有利だ

遮蔽物など知らんとばかりに踏み潰し高火力の攻撃を叩き込んでくるラージやギガントよりはよっぽどマシ

と言うかそんなのが来たら流石に無理である

ラージ級は頑張ればどうにか出来るがギガント級の群れをこの戦力で対応はどう頑張っても無理だ

出撃していった連中に走って帰ってきてもらうか御台場やイルマ、近隣校に救援を求めるしかない…その位の判断は出来ると信じたいたい所だ

「じゃ、こっちも行きますか」

「はいよー」

「来たからには働かんとなあ

サボったら後で大目玉や」

とはいえ自分達も残ったからには役目を果たす

何も出来ずに醜態晒しました、は無様すぎるのだから

第67話

現れたヒュージを撃破する為に出撃した三人

「先ずは数を減らす!!」

頼んだよ二人共」

「了解」

先ずはヒュージの数を減さなければならない

陣形や配置など細かい事を決めている間にもヒュージはこちらに向かってきている

この際、手段は選んでいられない

故意に壊すつもりは無いがある程度の建物への被害は覚悟だ

戦闘状況に比例して近隣の建物の被害に差が出るがその位は許してほしい

ヒュージの攻撃から全ての建物を無傷で守りましたなどこの状況では不可能

「うちらを舐めた事、後悔させたるわ!!」

魅夢はそう言いながら切り込んでいく

彼女の使用するCHARMはグングニル・カービンだ

ヒュージが視界に現れると同時に切り込んでいく

「挨拶代わりに切り刻んだる!!」

シンプルにかつ力強い動きでヒュージを切り裂き撃破する

ヒュージからの攻撃も難なく回避する

海濱と舞弓も後方から援護射撃を行う

隙となっている所や倒しそこねたヒュージ、死角から現れるヒュージへの対処

やる事は様々だ

「ペース配分考えなよ!第二、第三波が来るかもしれないんだからね!!」

「わかつとる!!」

これで終わりならば良いが、ヒュージの増援が現れることを考える

なら後先考えずに全力で戦い途中でマギが尽きましたなど笑い話に
すらならない

「曾根ちゃんも前に出て魅夢ちゃんのカバー」

「了解ッス」

ああは言ったが念には念を入れ舞弓を前に出しフォローに回す

二人のフォローならば一人でも十分だ

「ソーレっ!!」

「その機体そういう事想定されてないって!!」

そう言いながらモンドラゴンをヒュージに投げつける

高速で放たれたソレは一体のヒュージを貫く

その間、舞弓は素手だ

モンドラゴンも周辺のヒュージからの攻撃で破壊されるリスクも
あるが彼女は高速で移動し自身の機体を回収

その間もヒュージは現れるが海瀧の支援も有り無事に機体を回収

その直後、新たに現れたヒュージが攻撃を放つが

「モンドラゴンはこう使うッス!!」

側面で攻撃を防ぐ

CHARMを盾のように使ったのだ

「盾代わりに使っても良いけど投げるのは違う気が…まあ、良いけど
…」

モンドラゴン、設計上は盾としても使える為、この使い方は間違い
ではない

が、投擲は想定されていないはずだ

勿論投擲する事を想定された機体も存在するがそう言うのは大体
超がつくほどの高性能CHARMだ

身近な例だと姉の使う機体や秋日の使用する機体が該当する

「海瀧、そつちに落とすで!!」

「はいよ!!」

建物に張り付いたヒュージを魅夢は壁を駆け上りながら接近、
ヒュージの足のみを切り裂きそのまま海瀧のいる方向に蹴っ飛ばす
成すすべも無く落ちてくる個体を自慢の射撃で撃ち抜くだけだ

「司令部、主力部隊は?…通信障害

またあ…!!」

海濱は戦闘を行いなから司令部と通信を行う

こんな状況だ、主力メンバーが早めに戻ってきてくれれば良いのだがいつも通りの通信障害で主力や一柳隊、グランエプレと通信は繋がらないという

戦闘の影響か、はたまた通信障害を引き起こす個体が向こうに居るのか

それは分からない

だが絶望はしない

他校や出撃していった面々の増援は来てくれたらラッキーレベル

今ある戦力で戦い抜けばいい…それだけの事だ

そんな風に考えていたのだが

自分達が戦闘を行っているこの場だけでなくガーデンを取り囲むように残り3方面、同時にヒュージの群れが出現したと伝えられる

こちらにもスモール級がメインのようだ

「(攻め方を変えてきた?)」

戦いの中でヒュージがリィやレギオンを包囲することは有れ拠点を襲撃する際に包囲して攻める事は無かったはずだ

基本的には正面から大群で押し寄せ、飲み込むように制圧する。もしくは定期的に襲撃を繰り返し相手を弱らせ、最終的に制圧するがヒュージの襲撃パターンだ

ヒュージは量と質で人類に戦いを挑んでくる

これが世間一般的な常識となっている

集団を複数に分け、最終的に拠点を包囲するやり方は今回が初めてのはずだ

これが常套手段ならば人類はここまで戦えていない

ルドビコ女学院は都会のど真ん中に建てられており、建物に囲まれている

陽動で主力を引き離し手薄になったところを攻めるなら一方面ではなく多方面から包囲し倒すのだから立派な作戦

このタイミングは恐らくヒュージ側が痺れを切らしたか、自分達が最後だと思いきそれはガラ空きと舐めてかかっているかのどちらかだ

包囲されてしまった以上こちらでも動ける戦力を全て出撃させる必要がある

出し惜しみしてしまえばヒュージが自分達の拠点まで何の妨害も受けずに辿り着き、大きな被害をもたらす事は明白

ここ最近の襲撃と今回の行動

思うところは多々あるがそれは後だ

ヒュージ出現と対処の為の配置を行う為、残念な事に自分達への増援は送れないと伝えられるが仕方の無いことだ

「とにかく守りに徹して生き残る事を最優先とした立ち回りさえしてくれば」

こういう危機的な状況や追い詰められた状況に直面した際、耐性のない者、戦闘経験の薄い者は緊張感や極度のストレスから無謀な特攻じみた行動をする者が多い傾向がある

相模女子では対策としてその手の耐性をつける訓練はかなり重視して行う

中等部、高等部問わず、だ

春先に発生したガーデン崩壊の時と違い今回は精神的支柱となるリイが軒並み不在。彼女達の不在がどのような影響をもたらすかも分からない

殲滅が出来ればそれがベスト、無理ならば主力が戻ってくるまでの間とにかく耐え忍ぶしかないのだ

こちらでも戦闘が続いてる為、一度通信を切る

ヒュージから少し離れた所で物陰に隠れ現状の確認

魅夢と舞弓の2名も一度後退してきた

「3人だけ出撃して他は温存の方針でよかったツスね

総動員かけてたら配置が間に合わずにガーデンがドカーン!! ツスよ」

「…投げやりになって特攻とかしないよね？」

「…状況判断出来ない死にたがり3流リリイならともかく御三家やぞ？」

流石に大丈夫やろ」

特攻したってヒュージは止まらないしむしろ被害を増やすだけ

その位の判断と理性、立ち回りは出来ると思ってる

それこそ一葉も特攻癖があつたが高等部で隊長を努めているのだ

改善されたと思いたい

「まだ行ける？」

「問題無し！」

「同じく」

マギ保有量は自分よりも上、CHARMにも大きな消耗は見られない

「こつちも耐久戦、マギとCHARMの消耗には注意してよ」

二人は頷くと同時に建物から飛び出し、なるべく気づかれないように移動していく

彼女も攻勢に出る

移動し、ヒュージの群れを見つけると先制攻撃を行い、直ぐに建物の影に隠れる

当然、ヒュージからの反撃が来るが遮蔽物に阻まれ当たることはない

そこからはカウンター

身を隠しヒュージの攻撃をやり過ぎし攻撃が止む一瞬の間を逃さぬように弾丸を叩き込み確実に全滅させる

その他にもユーバーザインで姿を消しヒュージを待ち伏せ、自身を通過した後、CHARMを近接モードに切り替え背後から切り伏せる
それか幻覚を生み出し混乱している所を射撃で撃ち抜くか

やる事は単純かもしれないが、正面からの戦闘を避け奇襲に専念するならば仕方のないことかもしれない

余計なマギと体力を使わない為と言うのも理由だが

正々堂々、力と力の真つ向勝負など体力の無駄

耐久戦でやることでは無い

魅夢と舞弓も最初こそ時折派手な事をする者の基本的には奇襲に特化した動きを行っている

モンドラゴンはともかくグングニルカービンはCHARMとして見るならば小型の部類で単純な動作で敵を倒し、離脱も簡単にできる
ちなみに舞弓のレアスキルはブレイブ

魅夢はゼノンパラドキサダ

高嶺と同じレアスキルのだがスピードだけで比較すると高嶺の方が上

本人曰く配分7：3だそうだ

7がこの世の理で3が縮地

「ん?」

戦闘を行っている途中、数名のリリイの気配を察知し、辺りを見渡すと

「いた!!」

そんな事を言いながらこちらに向かってくるリリイ

一葉である

「ずっと三人で戦ってたの!」

ルド女や他の皆は?」

恋花としても前線に三人しか居ないこの状況は異様に見えている
ようだ

彼女達が出撃していった時はまだ自分達や一柳隊の他、多くのリリイが残っていた状態なのだから仕方がない

「全員特型ギガント級やスモール討伐の為に出撃した」

「:..どうして海滴は出てないの?」

「まあ、色々と思う所もあったし

結果的に残って正解だったよ」

自分達の内部事情に他校のリリイを巻き込むわけにもいかない。
特に都内のガーデンなら尚更

言葉を濁す

「他のヘルヴォルの面々は?」

「もう少ししたら来るよ」

その言葉通り、残りのヘルヴォルの面々も遅れて到着
計8人のリリイがこの場にいることになる

「あの時と同じだね」

私と海瀉でダブル司令塔やった時」

「言われてみれば…まあ状況は違うけど」

「ちよつと、二人で司令塔やったことあるの!？」

「合同訓練の時に襲撃受けちゃって乗り切るためにやむを得ずツス
ね」

自分達が中等部の時

相模女子の守備範囲内で行われたエレンスゲとの合同訓練中に
ヒュージの襲撃があり、自分達が対処した時のことだ

その時はメインの司令塔を海瀉、サブ司令塔を一葉が努めた

土地勘のある海瀉がメインを務め一葉はサポートする形で戦った

「あの時と同じ体制で行くなら私がメインになるけどどうする?」

一葉がメイン張る?」

どちらがメインを務めるのかは確認しなければならない

しかし今の一葉は自分のレギオンを率いてこの場にいる。それを
考慮するならば一葉がメインの司令塔を務めるのも一つの手である

「海瀉がメインで良いよ

…だけど作戦が余りにも複雑すぎると藍が混乱するから」

「分かってるよ

一葉、藍ちゃん、曾根ちゃん、瑤さん、千香瑠さんが先陣を切って

下さい

私、魅夢ちゃん、恋花さんは5人は撃ち漏らし、路地裏や建物内に
逃げ込んだヒュージの掃討です」

一葉の要求を踏まえた上での作戦と配置を伝える

本来ならば8人でのレギオン…だがそれは避け、二組に分けて行動
させる事を選ぶ

「海瀉、これ、なんの基準?」

戦力偏ってない?」

「CHARMの大きさを振り分けた

私達3名は小回りが効く機体なんで狭い所へ逃げ込まれても対処出来るけど：他はデカすぎる」

簡単に言うならば戦型と使う機体の大きさだ

今回のような住宅地での戦闘ならば小さめの機体を使うリリイが重要

大半のCHARMに言えることなのだが機体が大きすぎる

更地や広い所であれば何も問題ではないが住宅地や木々の生い茂る山中など狭い所で使うには余りにも不向きな形状が多すぎる

振り回せば建物や木々に引っかけりそれこそ大半のリリイの忌み嫌う余計な破壊に直結する

その為、基本的には逃げ込まれないように注意し広い所に誘い込んで倒すのがセオリーとされている

逆に小回りの効く機体であれば人がようやく通れるような狭い所や万が一建物に逃げ込まれた時に素早い対処が可能

追撃し射撃、近接、好きな方でやれば良いのだ

「つーわけでこっからは掃討戦

ギガント級組が帰ってくる前までにケリつけるよ!!」

その言葉と同時に行動再開

一葉達が先陣を切ったのを確認すると

「じゃ私達も行きますか」

「おっしや!!」

この三人では魅夢が一番槍を務める

一葉達の攻撃からの逃れ、逃げこんだヒュージを見つけ次第追跡し撃破する

勿論ヒュージも逃げようとはするが左右を建物に挟まれ、前に進むうにも魅夢が追い詰めるから逃げられるわけがない

「恋花さん、ユーバーザインで逃げ道塞ぐんで後はサクツとやつちやっってください」

「悪役になってない？大丈夫だよな？」

「別にリリイは正義の味方って訳じゃないと思いますけどね…」

ユーバーザインで幻覚を作成、偽りの壁を作り出しヒュージを追い

込み逃げ場のなくなった所で恋花が射撃で一方的に倒す

ヘルヴォルや一葉の信念や性格を考えるとこういう戦い方はもしかしたら反するのかもしれないが別にリリイはヒーローではない

彼女達も嫌うであろう余計な破壊さえしなければ問題にはならないであろう

余談だが神庭の文化祭とある事件が発生し、校舎内にヒュージの侵入を許した際もこれで対処した

その時はそこに至るまでの経緯もあり我慢ならず行動

校舎内に居たりリリイに指示を出し人の居ない訓練場に追い込み八つ当たりも兼ねて追い詰められ逃げ場を無くした大量のヒュージを一人で殲滅しようと思ったのだが

「わたくしも混ぜてください」と藤乃が協力を申し出てきた為二人で殲滅した

その結果、殲滅には成功したが制服がヒュージの体液まみれの凄惨な姿になりお互い笑っていたのだが遅れて駆けつけて来た鈴夢は本気でビビって気絶し秋日に怒られた事もあった

ヒュージ追いつめ戦法、海漓一人でも十分可能だ

気が付かれないように建物の入口や周囲を塞ぎ、動きを止めたところを仕留めることも十分に可能

だが見せるのはあくまでも実体がない幻覚、強引に突破されることも有るが突破した先に一葉たちがいるならば通信をいけば対処してもらおうだけ

「あつ、コンビニに入った!!」

「こつちもダイナミック入店や!!」

「足元に気をつけて」

建物（今回はコンビニ）に入られる事も有るが、すぐに追撃しこれ以上荒らされる前に最短で対処

撃破したらそれで終わり。至極当然だ店内の物を勝手に持つていく等の法に触れる事をするリリイなど居ない。そんな事をする者は最早リリイですらない、只の犯罪者だ

今回は店内での話

これが民家の場合はかなり複雑な対応になる事も多い為説明は割愛する

だが撃破の最、どうしてもヒュージの体液で汚れてしまおうがそればかりは見逃してほしい

ヘルヴォルの合流と特性に応じた班分けによるヒュージの対応

上手くハマった事もあり早々にヒュージをすべて倒し終える

通信を聞く限り他のエリアでも大きな被害が生じる前に撃破できた事

ギガント級も倒し終え、こちらに帰還している事が告げられる

町田方面も相模女子が殲滅したそうだ

「何とかなってよかった…」

「拠点に帰るまでが出撃ですよ…まあ無理はさせちゃいましたよね。帰ったらゆっくり休んでください」

恋花は安堵し、座り込む

よくよく考えてみればヘルヴォルも連戦だ

彼女達にもかなり無理をさせた形になる

ヒュージを倒したとはいえここは戦場。ヒュージサーチャーに反応は無いが万が一と言う事も有るため気は抜けない

「…」

「海滴？」

「あ、ああ。どうかした？」

気を張りながらも色々と考えた事を不審に思ったのか魅夢が声をかけてくる

「どうかしたん？浮かない顔して

そら疲れたのは有るけど」

「いや、今回の襲撃で思う事もあってね…」

「後で話聞いたるわ」

思う所がありすぎる

この場に遊糸や秋日などその手の話のできる信頼できる人物がいれば良いのだが生憎と不在

ならばグランエプレ…とも思うが話しても抱え込み余計に現状を

悪くされるか、警戒よりも好奇心で対応されるかの2択

一葉には申し訳ないが背後のエレンスゲやゲヘナを完全に信用していない為話すなど論外

百合ヶ丘の場合、まともに取り合わないか話をして自分達の手柄として研究を進め情報を独占されるだけだ

もしかして情報を掴んでおり名門だけで情報独占されている可能性も大いにありえる

こちらから話す必要は無いだろう

そもそも百合ヶ丘から見たら姉に大きく劣る落ちこぼれの自分ですら考えつくことだ

高い頭脳を持つものならば気づいても不思議ではないし、仮に誰も気づかなければ脳内お花畑軍団である

「とりあえず守れて良かったよ…」

「せやね」

これは紛れもない本音だ

駐在先とはいえ自分達の拠点が陥落した、は流石に不味い

暫くして一柳隊とグランエプレの面々も帰ってくるのだった

第68話

ギガント級の討伐を終え帰還してきた一柳隊とグランエプレの面々

「海漓ちゃん！」

叶星がこちらに向かって歩いてくる

ヒュージの襲撃を受けているとの連絡があったのだ。無事を確かめたかったのだろう

「ヒュージの攻撃を受けてるって聞いたけど、大丈夫だった？」

「ええ、まあ。一人なら無理ゲーでしたけど、幸運な事に心強いリリイが二人も居ましたから」

舞弓や魅夢が来ていたことを知らなければ一人で大群相手に向かっていったと勘違いされても仕方が無い

流石に単独で大群相手に戦っていたら無事では済まなかった。

死ぬつもりは全く無いが長期離脱レベルの大怪我は免れなかっただろう

「あの子達が来る事は…」

「知りませんよ。私も驚きました」

高嶺も確認するが、答えは変わらない

知ってたら助っ人が来るから大丈夫の一言は告げていた。

現場で再度パトロールを終えた後、ルドビコ女学院へと帰還

「おかえりー!!」

「良かった、無事だったんだね」

ガーデン残留組も自分達を出迎えてくれる

その後は互いに健闘を称え合い、解散

メデイカルチェック等々、必要な事を済ます

本来ならば自室に戻るのだが、彼女は一人外のベンチに腰掛けていた

外から見ると灯りの消えている部屋の方が多い

戦闘後と言う事もあり早めに休んだ者も多いのだろう

「いたいた」

「なんや、まだ出る気かいな？」

「まさか」

舞弓、魅夢がこちらに寄ってくる

流石にこの後出撃などする訳もない

いくら何でもそれは無謀だ

「町田の本隊には明日？」

「明日の朝一で帰還ツスね」

流石に戦闘後にすぐ帰ってこいとはならないらしい

相模女子にしては珍しい事だ

「で、思いつめてどうしたんや？」

「今回の襲撃か？」

「うん…今回に限らず何か、ね」

ヒュージの知能が作戦を立てるレベルまで進歩してないかって感じてさ」

「あー、それ遊系はんも言っとったわ」

『『最近のヒュージ、小賢しいわね！けど、そのレベルでこの私の作戦を破ろうなんて100年早いわ！』って言ってたツス』

どうやら遊系も同じ事を感じているらしい

素行はともかく頭脳、采配に関しては間違いなくトップクラス

自分でも感じる事を遊系が感じない訳がない。恐らくヒュージの立てる作戦を読み切ったような采配もしているだろう

「遊系さん、未だに出撃してるんだ…もう三年なのに」

「後釜候補がおらんからなあ」

「その一人が神庭に行くからツスよ」

そう、遊系は三年生

学年を考えても戦力として引退、もしくは出撃を控え後釜探しや後輩指導に専念しなければならぬ時期に差し掛かっている

しかし彼女程の優秀なリリイだ、後釜など簡単には見つからない

特に戦闘力ではなく頭脳面で力のあるリリイとなると尚更だ

戦闘力ならば遊系よりも強力な下級生は多くいるが、頭脳、采配面

では不安のあるリリイが多い

勿論、葵という優秀なリリイがおり遊糸が指導に当たっているが彼女は非常に転校の多いリリイ

仮に葵を遊糸の後釜として隊長にしたとして、直ぐに転校されてしまつては元も子もない

遊糸の卒業後に百合ヶ丘を含めた名門校に転校するのでは？と噂もある

そこを踏まえると葵を後釜にする事への不安がガーデンにはある

海漓は彼女と学年が2つ離れているとはいえ頭脳、采配面を評価され一部では後釜候補の一人とも噂されていた

教導官は彼女に「体動かないんだからその分頭動かせ」なんてよく言われてきたがその結果とも言えよう

マジや身体能力での才能で大きく劣る以上頭を動かして立ち回らなければ死んでしまう

その結果、以前糧に指摘された通り考えすぎて動きが鈍くなってしまふ所もあるのだが：

勿論リリイとしても司令塔としてもまだまだ未熟で高等部で活躍するに辺り覚えなければならぬ事も多いため今後の成長次第という条件付きではあつた

隊長に戦闘力を求めるのか戦闘力よりも頭脳、采配を求めるのか

大きな議論を呼びそうな所ではある

「まあ、ヒュージに関しては分からない事が多いツス

常識として公開されてる情報を踏まえるならあり得なくも無いツスね」

今更だがヒュージに関しては様々な考察や見解が有りどれが正解なのかすら分からない

世間一般的な話をすると

ヒュージ細胞という巨大化細胞の暴走により生み出された生き物と言う見解やマジにより地球上の生物が変質、そのDNAには人間含め地球上の全ての生物の遺伝子情報が保存されている：と言う見解が一般的

ヒュージ出現時には異星人やロボット、生物兵器の暴走等も言われていたそうだ

「知能を持つ個体もいるんや…人類を学習し作戦を建てられる程に頭のエエ個体が出てきてもおかしくはないな」

「でも何で他は気づかないッスかね？」

「それこそ名門が気づけば大ニュースだし武勲にも」

「エリートのご思考でしょ」

自分達は常に上って言うアレ

だから相手が自分達の想定外の進化、成長してるなんて思いつかない

実際、持ち前の才能と超高性能CHARMで何とか出来てるんだし」

別にエリートに限ったことではないのかもしれない

リリイはヒュージという下等生物には負けないという覚悟やプライド、積み上げた実績

人類が上と言う認識と名門に通っているという自信とプライドの噛み合わせ

現に名門ガーデンは数多の強力なヒュージと戦い勝利している

負けた奴、弱い奴は罵倒する

そんな光景を嫌と言うほど見てきた

名門の戦術と言うのは常に自分達が上で攻める事、勝つ事を前提とした作戦を立てるし教育される

相模女子だと攻めつつも守りと逃げも求めるプラグマティズム思考

場合によっては撤退もしなければならぬと教育されるがそれすら落ちこぼれ、弱者と言われる始末だ

「海滴は何で気づけたん？」

「私がヒュージの親玉なら陽動に対してリリイはアホみたいに引つかかるっていう知識があるならこの手の絶対に作戦やるから

手薄になった拠点なんて格好の獲物でしょ」

勿論これは知能を持ち、作戦を立てられるベルまで成長した…とい

うのが前提ではある

戦いは嫌がらせ、それを応用しただけの事だ：特別な事は何もして
いない

質と量はヒュージの方が上

恐れるのはヒュージの知能が進歩し自分達の利点を生かし組織的
に運用してくる事

ヒュージが作戦を立て、個体を組織的に運用してきたら人類など簡
単に負けるだろう

「自力で学習したのか、教えてもらったのか：は分からないけどね」

ここまでの話は全て彼女の妄想、憶測にすぎない

作戦を立てる、と言うのは分かった所で作戦の立て方をどうやって
取得しどのように伝えたのか

知能が進歩した所で「作戦を立てる」行為を取得しなければならな
い

そして、それをどのように他の個体に通達し、実行させたのか

どれだけ有効な作戦を立てようと他の個体が理解し行動しなければ
意味がない

そこを見つけないければ妄想で悲観的に語る痛い奴で終わってしま
う：相模以外のリリイに話した所でそう言う扱いになりかねないの
が現状だ

圧倒的な格上が格下の話を素直に聞くとと思えないのもあるが

「海ちゃんのにはどうやってるって思うツスカ？」

「ヒュージから見たら力のあるリリイがネストって言う自分達の拠点
を攻めてくるわけだし：真似する可能性は高いけど陽動とか拠点を
包囲したりするのは本当に分からない…」

拠点への攻撃だけならば簡単だ

リリイのやり方を真似れば良い

集まりが拠点と分かれば攻めればいいのだから簡単、アホでもでき
る

だが戦力を減らすために陽動を仕掛けたりやネストをレギオン単
位で包囲と言うネストを攻めるリリイがやらない方法で攻めてくる

方法をどうしてヒュージが行ったかは本当に分からないのだ

リリイも基本的には正面からの襲撃でネストを攻める

複数のレギオンでネストを包囲し倒すと言うやり方ではない

そして、陽動も行わない

文字通り正面から突撃しての真つ向勝負だ

：それで勝ち続けるのだから名門も相当な怪物だしヒュージとやってる事が変わらんとはいたくもなる

複雑なフォーメーションなどヒュージはやらないが拠点への攻め方だけ見たら全く同じだ

ヒュージの方が賢くなってる説まである

「海濱で分からんなら戦い専門のウチらは無理や

知れる情報も限られとる」

「ヒュージが作戦を立てて来るなら相模はそれこそ海ちゃんや遊糸先輩クラスを用意しないと戦闘職の集まりじゃ今後辛いッスよ」

魅夢、舞弓共に今後への不安はある

名門にも頭脳に優れこの手の情報を持つリリイもいるとは思うが公開していかない以上知る術は限られる

そして、才能やCHARMで敵を押し切れない以上相手の動きを見て動かなければならない

それも全体の動きを、だ

名門が行う高度な戦術はあくまでも現れたヒュージや大物を倒すためのもの。ヒュージの作戦を打ち破るものではない

戦う力と才能のある者は多数いても頭脳面で優れたリリイの数が少ないのが相模女子の現状だ

神庭やエレンスゲも同じような状況だろう

「現れたヒュージは必ず殲滅する。これしかないんだけどね」

「まっ、ヒュージと戦うのが任務ッスからねえ」

「単純やけどな」

いつも通り戦うしか現状打つ手はないのだ

欲を言うならば百合ヶ丘を筆頭に行っている昨今のヒュージに対する大規模攻勢を中止し徹底的に守りを固め分析と対策にも時間を

回すべきかも知れないが落ちこぼれの自分にそんな発言力はない

：恐れるのはヒュージがリリーの攻め方を学んだ上で次に攻めて来るであろう所を察知し戦力を用意、待ち伏せ等の罠を仕掛けられる事

近郊で言うならば最大の目標は甲州と静岡だ。それを見抜かれたら終わり

そもそも7大アルトラの中で最も凶暴と云われるファブールを姉達が撃破したのにヒュージの勢いが全く落ちないのも気になる所

ヒュージにとっては大将格に等しい個体が破れたのだ

下火になってもおかしくはない

「あくまでも凶暴ってだけだからなあ：そら凡人の私は怖いけど」

単に力任せに暴れるだけの戦いから知能を活かす戦いにヒュージが切り替えていくのならば暴れるだけのファブールなぞヒュージからしたら捨て駒に等しい扱いだっただろう

残り6体：その中に人類並いやそれ以上の知能とアルトラ級に相應しい強さを持った個体がある事を考えるべきかもしれない

「一難去るところか増えとるやん…」

余計に疲れたわ、流石に眠いで」

「そうッスね…」

「あ、ゴメン。」

長々と話をしてしまった

同期との再会で浮かれてしまったのもある

その後は各々部屋に戻り、眠りにつく

流石に色々とありすぎたため直ぐに眠れたのだった。

第69話

翌日の早朝、ルドビコ女学院の外には舞弓と魅夢

そして見送るために海瀉が来ていた

「寝てても良かったのに律儀やねえ」

「全くツス」

戦闘後ということもあり付近には彼女達と迎えに来た車両以外誰もいない

大半のリリイはまだ眠っているか早朝のパトロールだ

「そういう訳にはいかないって」

同期の見送りを寝坊で逃すような事はしない

流石にそんな事をやる者は居ないだろう

「海ちゃんが指揮するグランエプレは見れなさそうツスカね？」

自身の現状の事だ

離れても気にかけてくれているらしい

確かに今からでも姫歌や叶星から強引に奪い取れば可能だがそんな事するタイプでは無い

戦果と同じ位チームの輪、トップレギオンの看板を背負う意味を理解していれば出来るはずもないことだ

「多分無理。ウチは我が強いのも多くて指揮するのが難しい…絶対に揉める」

彼女が得意とするのは陣形を固定し各々のポジション事に与えた役割を確実にこなしつつも、状況に合わせて臨機応変に対応するやり方。物凄く簡単に言い表すならば

「黙って私の言う事を聞きなさい」をやるだけだ。それこそ遊糸はそれを究極に突き詰めた形

メンバーを自身の駒と考え、各々の能力を最大限に発揮させるように動かして勝つ

仮にこれをグランエプレでやると想定した場合、言う事を聞かずに暴走の連発でまともな作戦にならない光景が目に見えかぶ

積極的に奪い取りに行かない理由の一つでもある

グランエプレは物凄く乱暴に言い表すと自由のレギオン

そこから海瀛のやり方に変更など抵抗と反発を生むだけだ

相模も我は強いが普段からの教育のおかげで統率の取れた行動は出来る

隊長や司令塔の指示通りに動いてくれるという意味では凄まじくやりやすい

：その分求められる能力や責任は凄まじいが、それぐらい背負えなくて何が隊長かと言う位の責任と覚悟は担う物は皆持っている

「リリーの戦いとは自由で華麗で美しくが近年のトレンドになるつつあるからのお」

「統率の取れた動きも美さだと私は思うんだけどなあ…」

規律、規則を重視し統率の取れた動きで戦う

規則的な動きにも美しさはあるが：世間とリリーが求めるのはそういうものではない

ヒュージとの戦いにおいては非常に不謹慎な説明かも知れないが分かりやすく説明すると海瀛が求めるのは統率の取れたマーチングバンドのよう戦い

逆に近年のトレンドになりつつあるのはリリーそれぞれが動きの一つ一つが舞踊やダンスのように見るものを魅了するような動きをしながら戦う

束縛、拘束を嫌い自由を求め、個の力と美しさをとにかく追求し、その先にレギオンの戦いにも美しさを求めるのだ

冗談でも例えでもなくリリーとは自由を求め、華麗で美しく戦うべき：そんな風潮が出て来ている

儂くも美しいのがリリー：海瀛からしたら馬鹿げた思考だ

ヒュージが人間の感性を理解しているならばともかくそんな感性が無いのに戦いに美しさなんて求める場合かと相模時代は言っていたし舞弓や魅夢も同意していた

話を戻し、彼女の専門は絵画、美術だが戦闘で求める形は教官の受け売りを彼女なりに解釈した形でもある、音楽分野を学ぶ姫歌や紅巴

ならば言わなくとも辿り着くはずなのだが、あの有様だ

音楽は兵器では無く、学んだ事も戦いに取り入れたくないのかもしれないが、それならばリリイなどやらずに芸能事務所でレッスンを受け、その道のプロとして活動すれば？とも思ってしまう

そんなこと言ったら喧嘩になるため口には出さないが

話したい事はまだまだあるが、出発の時間が来てしまう

「暫くは町田にいると思うから何かあったら連絡するツス」

「ほなー」

車両に乗り込み彼女達はガーデンを後にする

解散後は自室に戻り、暫くゆっくりした後に朝食

その後は自由時間となる

駐在している3レギオンを含め大勢のリリイが話をしている

「そういえば海漓の友達みかけなかったけどどうしたの？」

「朝早くに帰ったよ」

その事を告げると姫歌が真っ先に驚く

自分達が寝ている間に帰っていたとは思っていなかったのだろう

「ガンシップじゃなくて車両で相模まで？」

「相模じゃなくて町田ですね」

あの言い方だとそれなりの人数を配置してると思いますよ」

瑤の問にも淡々と返す

ガンシップではなく車両で移動することに疑問を感じたのかも知れないが、同じ都内ならばその必要はない

これは勝手な予感だが別れ際の言葉を聞く限りそれなりの人員を配置している事が伺える

「防衛構想会議ではそんな話は無かったけれど…勝手にやって大丈夫なの？」

風紀委員だつて黙ってないと思うわ」

「町田に関しては相模女子も準守備範囲と言う形で関わってますし、2校の話し合いでどうにでもできるかと

自分達の守備範囲でもある訳ですし、状況に応じて増員することに對してそれこそ外部にとやかく言われる筋合いは無いつて言うと思

います」

先の会議の内容を覚えている高嶺から見てもおかしい所はあるよ
うだ

確かにこの行いだけ見れば相模女子は風紀委員の決定に従わな
かった、と捉えられるかもしれない

しかし、忘れてはならないのは町田はルドビコの守備範囲であると
同時に相模女子の準守備範囲になっている事

管轄地域の状況が悪化しているならば手を打つのは当たり前だ

「あー、そっか、準と言えど自分達の守備範囲だから外征扱いにはなら
ない。手薄だった守りを固めただけっていう説明が出来るんだ」

「守備範囲内の増員であって無宣言外征じゃないですからね

恐らく、防衛構想会議の決定を遊糸さんが持ち戻った後に上層部で
協議して決めたことだと思います

まあ、体制立て直したらすぐにでも帰ると思いますよ」

恋花も納得する

今回の行動は外征に当たらない、あくまでも守備範囲内での行動
エレンスゲがよくやらかして叩かれる無宣言での外征ではないの
だ

後はルドビコと相模女子の2校での話し合いだ

急な決定ではなく防衛構想会議後に相模女子内で話し合いを行い、
町田方面の様子を見て行動に移したのと考えている

「守備範囲が密接してる所だと今回みたいな事はよくある事なの？」

「無いと思います。本当に境界線通り

特に相模とシエルリントは他からの当りが強いですしこんな事し
ようもんならボロカスに言ってくるよ（下手すりゃCHARM向け
てくる…）

百合ヶ丘とメルクリウス、桜ノ杜、アルケミラ、城ヶ島だったら多
めに見るらしいですけど」

「噂以上に厳格なのね…」

叶星は東京で過ごしてきたリリイ

この辺りの事情に疎くても仕方がない

勿論外征時に宣言が必要な事にも正当な理由がある為、そこへの不満はない

しかし、派閥や校風によって扱いを変えてくるのは違和感しかない
自身も中等部時代には頭も胃も痛くなる思いをしてきた

先の扱いだって要はゲヘナに対し中立や親密なガーデンは叩くが百合ヶ丘のような主義は叩かないのだ

鎌倉は百合ヶ丘とメルクリウスがある為反ゲヘナ主義、もしくは神庭のように中立を掲げつつも反対が多い印象がある

相模入学後に知ったのだが横浜近隣は親ゲヘナ主義が多かった
「その分け方って何なの？」

近いかかそういう事？」

「姫歌さんは知らなくて良いわ

かなり込み入った話になるから」

やはり高嶺も叶星も姫歌達にはゲヘナに対する説明や教育を避けている節がある

合宿の時もそうであった

汚れの無い、きれいなリイであって欲しいのだろう

神庭も中立といえスタンス的には反ゲヘナ寄りだ…そこまでの事は教えなくていいと言う判断なのだろう

「(ここの言うのが騙されるんだよなあ…)」

必要な知識を与えず温室のように育てる

今はいいかも知れないが悪意を持って近づいてきた時の耐性が全く無い

相手だって大人だ、あの手この手で付け入ってくる

馬鹿ではない、自身がそういう事をするなど告げる訳が無いのだ

知識が乏しく弱みや正義感に漬け込みリイを騙す…常套手段の一つだ

正義感が強いなど格好の餌だ

自分達の場合、知識を身に着けた上で使えるなら使いますと、ある種のビジネスのような立ち回りしないと本当に危険

姫歌達への扱いは反ゲヘナ主義のやり方だ

グランエプレ、大丈夫だろうかと心配になる

海漓だつて万能ではない、いくら警戒をしても自身が知らない所で
他がやらかした結果潰け込まれましたなんて事になったら笑えない

「今日は夕方から簡単な打ち上げがある以外は自由時間、体を休めた
り訓練したり自由にしていいわ」

少しした後、叶星はグランエプレの面々にそんな話をする

朝食時にルドビコ側から提案があったらしい

色んな事はあつたが3体の特型ギガント級を討伐した事に対する
感謝の気持ちを示したいということだつた

話を聞くと姫歌は灯莉を連れ何処かに行くし紅巴は二水と何かを
話している

「海漓、この後つて暇？」

「暇と言えば暇だけど…」

「この後だけど久しぶりに模擬戦しない？」

「いよ」

一葉からそんな提案が

中等部時代の合同訓練時に行つていたがそれ以来だ

彼女自身この後は時間が来るまで自主練かパトロール位しかやる
事が思い浮かばないため、断る理由は無い

とはいえ、だ

「ジュースの奢りでも賭ける？」

「ええっ!？」

単に模擬戦しました、ではエレンスゲ、神庭でも出来る

賞品の一つでも賭けるのも乙だろう

訓練は遊びではない。が、相模の場合賞品や報酬で気合を入れさせ
るやり方も取られていた

…組み合わせによつては、知らない所で見学者同士で景品の類を賭
けていた時もあったのだが

「流石に賭博は…」

「金じゃないからセーフだつて」

リリイといえど年頃の女子高生、ジュースやお菓子を賭けたくなつ

ても仕方がない

教導官や上級生もこれだけは目を瞑ってくれた事も多かつた

ヘルヴォル対グランエブレ

ジュースを賭けた模擬戦が行われるのだった

第70話

訓練場の一つを借りて行う海瀉と一葉の模擬戦。
やる事はお互いにCHARMを使つての対決だ

勿論CHARMを模擬戦モードに切り替えて、だ

相模やエレンスゲ、噂ではあるが百合ヶ丘や御台場でもこの手の訓練は定期的に行っている

神庭だとグランエプレをはじめとする多くのレギオンでは滅多に行われない。自身のサブスキル覚醒時にデータ収集を兼ねて軽く叶星と打ち合ったぐらいだ。

後は藤乃や秋日がたまにやっていると聞く

目的としてはやはりお互いの技術向上

ヒュージとは違うが互いの技術を直接目で見て、体で体験して学ぶ為。機体は違えど学べる事はあるし、レアスキルや立ち回りも参考になる部分は多く有る

後は何も知らぬ調子に乗った連中に戦場に立つリイとはどう事かを体に叩き込むためか

弱くて下手くそなのは仕方がない（ココに来る者は皆そう、初めは皆弱くて下手くそだったから）、だがやる気の無いやつ、ふざける奴は許さん：そんな風潮はあった

「分かつてると思うけど、レアスキル無しな!!」

「分かつてる!」

そんな事は分かりきつてることでは有るが、念には念を、だ
相手もよく知る一葉と言う事で猫を被る必要もない

「それじゃ、行くよ!!」

一葉の掛け声と共に戦闘開始

海瀉もパルチザンモードへと変形させる正面で攻撃を受け止める

互いに衝突、拮抗状態となる

「正面から受けるんだ…ね!」

「模擬戦で射撃ばっかしても意味無い…!」

そう、これは模擬戦。好きな事、得意な事ばっかして戦っても意味がない。苦手な事を改善、克服するための機会でもあるのだ。実戦では戦果を上げ、生き残る為にも得意な事、出来る事しか行えない

訓練や模擬戦はある種の縛りで戦うのがセオリーでもある

正面から数度打ち合い、拮抗した後距離を取る

「この動き…」

打ち合う中で海瀉は多少の違和感を覚える

「聞いた話だと今のエレンスゲの校長は元御台場の人間…動きに御台場らしきがあつたつておかしくない」

相模女子時代に聞いてはいた。今のエレンスゲの校長は御台場女学校の卒業生。つまり叶星達の大先輩になる。校長赴任後にカリキュラムが変わっていても不思議ではない

自分達だって元イルマの人間から教えを受けていた、影響は出る。それだけならば良い、だが問題は

「流石に簡単には勝てない…!!」

「…当たり前（ステップとタイミング…これは…叶星さんに似てる？）」

息遣い、踏み込むタイミング

所々に叶星と似たものを感じる

推測に過ぎないが動きを真似をした…というよりも叶星の助言や手解きを受けながら己の中に落とし込んで行ったのだろう

それも一度二度ではない…いつ知り合つたかは分からないがその時からの積み重ねだ

一葉も身体能力は高いが姉のように一度見たものを完璧にコピーしたり即興で完璧に動けるタイプの天才ではない

努力を積み重ね力をつけるタイプだ

「(何で火種ばっか抱えてんだグラランエプ^ッレ?)」

別に他校の後輩にアドバイスする事は悪い事ではない…レギオンが違えど隊長として、同じレアスキル持ちとして通じるものがあったのだろう

大切な人と仲良くしてたつていい。プライベートに口を出すものではない

だがそれらは全てレギオンの隊長としてふさわしい行動を行えていたらの話だ。

経験者の自分は後回しになったとしても、初心者の3人に対してリイとしての心構え、戦い方をしっかりと教えているのなら

高嶺と仲良くしたつていい。

公私をキチンと分け、レギオンでは上級生として手本を示しているのなら。

実際は何も出来ていない。神庭を代表するトップレギオンとしては余りにも問題だらけで改善の傾向が全く見られないからガーデンや秋日が動くし自分も協力しているのだ。

叶星と高嶺上級生の事を余り悪くも思いたくは無いのだが：なぜこうも話題が尽きないのだろうか

しかも一葉の事など秋日達は知る由もない。海瀉も模擬戦して初めて気づいたのだ

何度目かの衝突と拮抗

「流石に厳しい……」

模擬戦だからと真つ向勝負で行っているが、厳しいものがある。

不意打ち抜きで押し切るとなると流石に辛い……

「そんな事言つて……全く押しきれないんだけど!？」

だが厳しいだけで負ける訳ではない。攻撃を防ぎ、受け流す。互いに拮抗するが耐え、押し切らせない

一葉も先に進めない……つまり決定打を与える機会を得られていないのだ

力と力の真つ向勝負では海瀉は勝てない。が、勝てないだけで簡単には負けないのだ。削られている事には変わらないが焦りはない

「(そろそろかな……)」

自身の攻撃を何度も防がれ続けていれば一葉と言えど流石に焦りも出てくる

海瀉からは仕掛けないのだから一度引き、呼吸を整えたり、攻めさ

せたりすれば良いだけの話なのだが……どういふ訳か自分から攻めたる。攻める時はとにかく攻める。

そうになると、攻撃のパターンも徐々に単調化、雑になってくる落ち着き、呼吸と体制を立て直し、力技で攻め落とすのでは無く消耗させるように仕掛け直せば充分に勝機はあるし、落ち着いて攻めれば押し切れる

「(少しはまともになってるけど……)」

中等部時代からあつた事だが、一葉の場合焦りだすと落ち着きを失い行動が投げやりになる傾向があつた。高等部になり、ヘルヴォルの隊長を努め多くの戦いを乗り越えた事で多少改善されているが……それでも化けの皮は剥がれる

パルチザンモードを解除

右手に親機、左手に子機をそれぞれブレイドモードの状態で構える

「(パルチザンモードを解いた?)」

自身の使う機体と打ち合うならばパルチザンモードでなければ厳しい

流石に片手でブルトガングと真つ向から打ち合うなど正気の沙汰ではない

何かの罠か? そう思いつつも一葉としては仕掛けるしかない

パルチザンモードを解除した今がチャンス

「(なーんて考えてるんだろ?)」

言葉には出さずとも彼女には一葉の考えている事がなんとなく分かる。良くも悪くも純粹。染み付いた思考は中々抜けないものだ

一葉が突撃し、海瀉は迎え討つ

振りかざされるブルトガングに対し

「それっ!!」

左手に持った子機で薙ぎ払う

普通ならば拮抗するだけ、もしくは一葉にねじ伏せられる

しかし、そうはならない

彼女の一撃はブルトガングを横に弾き、一葉もそれに流され体制を

崩す

普通に薙ぎ払うのではなく機体同士が衝突する一瞬にマギと己の力を込める。そして動作も小さく、鋭く振り払うイメージ

一点に特化すればブルトガングと言えど押し切れるし使用者の体制も崩せる

体制さえ崩せば後は簡単だ

そのまま、懐に入り込み右手に持った親機をシューティングモードに切り替え、一葉の顔に銃口を突きつける

「これでゲームセット、私の勝ち」

「私の…負け…だね」

自分に勝ち目はない

体制を立て直すよりも先に海瀉の攻撃を受けるのが早い。それが分からない彼女ではない

負けを認め、模擬戦終わり

その後は片付けをした後に約束を果たしてもらおう

負けたらジュースを奢るといふ例のアレだ

「はい。相模時代からよく飲んでたジュースでいいんでしょう？」

「サンキュー」

一葉は呆れながらもオレンジジュースを彼女に手渡す

軽く口をつけて飲む

体を動かした後と言う事もあり体に染みる

「他人に奢らせた飲食すると普段よりも美味いって言うの…本当かもしれない」

「ちよつと!?!遊糸様のそんな所なんて似ないですよ!?!」

合同訓練終わりに自身に奢らせた遊糸がよく言っていた

『他人に奢らせた時の味は格別』だと。その後話を聞きつけた他の面々からお仕置きされるまでがテンプレなのだが

特別味が変わったたりしている訳ではないが、確かに美味しいかも知れない

これが俗に言う勝利の美酒と言うものなのだろうか？

教導官も現役時代は戦い終わりに当時のイルマの生徒会室で

ジュースやお菓子を飲み食いしてたと言っていた

「最後のあれ、どうやったの?」

「振り抜く一瞬に力とマギを込めただけ…片手で持てる機体限定だけどね」

一葉としてはやり方が気になったようだ

別に難しい事は何もしていない。欠点としては片手で持てる機体限定という所だろう

両手だとモーシヨンそのものが変わってくるし、大きめの機体では力の入れ方も変わってくる

近いやり方としてはアステリオンの乱舞システムだ。形状は違いますが応用出来る部分はある

「この後ももう少し自主練するけど…海漓はどうするの?」

一息つく和一葉はそんな事を言う

打ち上げはまだ時間がある、恐らくギリギリまで自主練するつもりだろう。

自分も暇ではある…一葉程長くやるつもりはないが途中まで付き合うのもいいだろうと思いい共に訓練を行う

「訓練終わりに直でパーティー出るつもり!? シャワー浴びて身なりを整えて来る事!!」

お説教を受け早めに切り上げる

い 勿論その手の時間は考慮していたが、恋花の基準では短かったらしい

その後は特に何もおこらず簡単な打ち上げの時間となる

司会を務めるとはルドビコ女学院のリリイ

名は福山・ジャンヌ・幸恵…だった筈

防衛構想会議後の模擬ヒュージ戦にて俗に言う華麗で美しい戦いを行っていた者だ

幸恵から今回の特型ギガント級討伐で活躍したレギオンの紹介がある

討伐したギガント級は

自分達が撃破したマギ干渉を行うメイリストロム

ヘルヴォルと共に撃破したのは分裂と融合を繰り返し最終的にギガント級、名はスプリットと言うらしい

新宿事変で撃破したエヴォルヴに近い個体だったのかもしれない

そして、一柳隊とグランエプレで討伐したイビルアイ

マギリフレクターとノインヴェルト戦術さえ己の物とし攻撃してくる個体だったという

「(人類の対策練ってきてる…か)」

形は違えど人類、そしてヒュージから見ても最大脅威であるノインヴェルト戦術への対策が進んでいる印象だ

相模女子や天敵の桜ノ杜ならば別の手がある為なんとか出来るが他は厳しくなる事が予想される

ノインヴェルトを主戦術にしないなんていう理由でとある行事から2校をハブった事を考えると自業自得かもしれないが

「それと、最後に…」

私達を含めた戦力の大半が不在にしている中でのヒュージの襲撃に対応してくれた皆。

そして中心となってくれた海濤さんとその場にはいない2名の相模女子のリリイにも改めて感謝を」

彼女はこちらに頭を下げる

「ああ、いえ、そんな…出てきたヒュージを倒しただけですから」
別に特別な事はしてない

自分達を舐めたヒュージを返り討ちにしただけ

しかも最後は戻ってきたヘルヴォルや彼女達の力もあつたからだ
「同じガーデンの子達はともかく他校のリリイにも気を使える人なんだ)」

ガーデンに残っていた同胞はともかく神庭と相模女子というルドピコからと、幸恵個人から見ても格下の者相手に感謝と頭を下げる事には少しばかり驚かされた

鎌倉だと格下を平然と見下し罵倒する。助けても感謝の言葉すら出ない名門やそこに所属するリリイに比べたら彼女は超が付く良識

派に見える

その後は紹介を終え、各々雑談等に入る

周りを見ると各々会話しているが、その中で際立つ集団がある

幸恵を筆頭にヘルヴォル、一柳隊、セインツ、ロネスネスの隊長陣が集まっていたのだ

グランエプレは、というと

「(なんで高嶺さんが?)」

今に始まったことでは無いが、叶星の隣は自分だと言わんばかりに高嶺が陣取っている。だがおかしな話だ。何度でも言うがグランエプレのサブリーダーは姫歌だ、高嶺ではない

ヘルヴォルは恋花だった気がするが、彼女は出されるラーメンに夢中で糧に呆れられている。

それを見て瑤が代わったのだろう。実力も知識もある代理としては十分だ。

そんな時、グランエプレの1年生が歌を披露するという突拍子もない事が伝えられる

「えっ?・ちよ、聞いてない!」

「そうですよ!!」

「え?・言っていないもん

言ったら逃げるか反対されそうだし」

自分と紅巴は抗議するが姫歌は知らずと言わんばかりの対応だ

：打ち上げだ。空気読めなんてそんな事は言わない。が、どうしても聞かなければならない事はある

「定盛ちゃん、向こうに行かなくていいの?」

レギオンの隊長陣の集まりじゃないのアレ?」

出し物として歌っても良いが隊長陣の集まりがあるならばそちらを優先させなければならぬ。本来ならば叶星か高嶺が姫歌を呼びに来るのが筋

お飾りのサブリーダーでは困るのだ

「え?・高嶺様いるしいいと思うけど?」

「ええ…」

どうしてこんな時に私の強さを見せたり、おかしい事に気づかないのか

自分達を強引にステージに上げるノリでアノ場に行き『サブリーダーは私です！』の一言を言えないのか、とも思うが姫歌にサブリーダーとしての教育をしてこなかった二人にも責任はある

本当ならば叶星が姫歌をマンツーマンで戦闘以外の所まで指導しなければならぬし、集まりに連れていき、場数を踏ませなければならぬ。

叶星の補佐として横に立たせ、空気になれさせる。

姫歌を一人前のサブリーダーにするなら高嶺にかまつてる余裕なんて無いのだ

それが嫌なら高嶺にサブリーダーをやらせればいい

「ほらー、皆待つてるよ

はやく、はやく」

灯莉の声に引つ張られるように自分達もステージに上がる

とりあえずと言った形で数曲歌う

「海濱、歌上手いのね…」

「だよねー」

権と恋花はグランエプレの歌を聞きながらそんな感想を漏らす

「で、恋花、それ何杯目？」

「え？5杯目。食べる？美味しいよ？」

「…遠慮しておくわ」

それよりも気になるのは彼女のラーメンを食べる量だ

ラーメン、嫌いではないが流石に何杯食べても平気というタイプではない

打ち上げの時間は過ぎていく

ヘルヴォルへの帰還命令が出るのは終わりに差し掛かる頃だった。

第71話

打ち上げの翌日、

ヘルヴォルが受けた帰還命令

その理由というのもエレンスゲのラボがヒュージでは無く人間に襲撃された可能性が高いと判明しヘルヴォルもガーデンに戻る必要がある為だという

ヘルヴォルの見送りを終えた後、海濱には疑問に思う事があった

「(『どうして襲撃したのか』理由によっちゃ)」

誰が襲撃したのか、どうやってやったのか。その二つに意味はない。簡単に隠蔽出来る。だが『どうしてその施設を襲撃したのか』これだけは隠す事が出来ない

どれだけ嘘をついても証拠を集め突き詰めていけば必ず真実にたどり着ける

彼女からすれば犯人も、方法も興味はない。気になるのは動機だけ知識と照らし合わせて候補はいくつかあるが証拠がない。憶測で話すことだけは避けなければならぬからだ

「(黙っておくのが利口なだけど：)」

ここは静観だ。自分達が今回の件に下手に介入した結果として生じる最悪のケースは神庭が現在の立ち位置(反ゲヘナ寄りの中立)から親ゲヘナ派への鞍替えを行ったかのような扱いを受ければどのような事が起こるか予想つかない。穏健派と呼ばれるイルマならばともかくエレンスゲは危険すぎる

自分達は神庭を代表するトップレギオン。外征時の発言、行動は神庭の意志と受け取られる事もある。慎重な行動だつて必要だ

必要なのだが

「(警戒してるの私だけ?)」

差こそあれ皆もある程度の警戒はする…と考えていたのだが一葉達を見送ったものは皆、応援や励ましの言葉をかけていた

「気になることでもあるの?」

「(気になる事しかねーよ…) まあ、色々」と

一人、考えを纏めていると叶星から声をかけられる

「楓さんも犯人や襲撃のタイミングについて考えていたわ」

そこに高嶺も加わる

前回、叶星に噛み付いた事でまた何かするつもりかと警戒しているのかもしれない。その警戒や気配りを味方にも向けてほしいものだと、思ってしまう

「(なんて言おう…)」

御台場上がりの頭で少しは考えろ…なんて言える訳もなし。なるべくオブラートに包むのが最善だろう。ここには他のリリイも多にいる。下手な事を言うのも危険だ

「私もそんな感じですね。」

言葉を濁し、切り抜けるのが最善だろう。崩壊したとは言えここは親ゲヘナ派のガーデンだ。付近には多くのリリイがいる。思う所や考えは多々有るが、自分達の所属する派閥やガーデンを悪く言われていい気持ちはしないだろう。自分だつてそうだ。神庭や相模、仲間達の事を非難されたら良い気持ちはしない…がグランエプレも相模も場合によっては自分達にも落ち度は有る為それらの非難は受け入れなければならぬ。

名門の場合、自分達は平然と言うくせに言われた時は怒る連中もいるが、それは別の話

そう考えていたのだが

「何か知っている事が有るの?」

叶星が珍しく食いついてくる。同盟先の心配か、一葉を心配しているのかは分からない。

「犯人はエレンスゲ内部かゲヘナを嫌う第三者以外にあるとは思えませんけど。そこらの建物ならともかくヒュージ研究機関の施設を襲撃なんてマジも何も無い普通の民間人じゃまず無理だと思いますけど?」

暗にマジを使っていると告げる。普通の建物ならばともかくエレンスゲラボと言うヒュージ研究機関の施設などそこらの民間人が何

となくで襲撃できる場所では無い。

エレンスゲの内情を知る物による何らかの裏切りもしくは、ゲヘナやエレンスゲを憎む第三者しか無理だ

「…犯人はリリイだって言う事かしら？」

「さあ？それは分かりません。少なくとも計画を立て、訓練を受け、相応の装備を与えられたプロの作業なのは間違いないと思いますよ。単独じゃないです。何らかの組織が背後にいると思っただけでしよう」

叶星は信じられないような感想を持つが、海瀉としてもそこは分からない。だがリリイの有無に限らずその道のプロ、つまり相応の教育と訓練を受けた者の犯行である事だけは確かだ

作戦の計画と実行、後は襲撃に必要な装備の用意。個人の犯行ではなくそれをバックアップする何らかの組織があると考えるのは普通な事

「姿なんて私みたいにスキル持ちを用意するか、身に纏う装備に細工すりゃいくらでも消せますしね」

仮にリリイならば彼女のようにユーバーザインやそのサブスキルであるステルスを使えば姿や気配など簡単に消せる。リリイで無いならば纏う装備に細工をすればいいだけだ。

「これは相当複雑だわ。犯人がわからないんじゃないやどうする事も…」
「まあ、無理でしょうね（このままなら、の話だけど）」

叶星はお手上げと言う表情。だが海瀉は違う。伏せはしたが襲撃された施設に法則性が無いのかを見つけ、有るならば狙われる場所に目処をつけ対処する。仮に犯人が人ならば使える物資には限りがある。無差別、無計画ではない。

だからこそ知るべきは犯人では無くその施設が何を行っていたか、だ。ヒュージ研究の施設では理由が薄いしエレンスゲである必要はない。ゲヘナの研究は基本的には全て対ヒュージの為の研究に繋がる。まともな研究者や施設なら、の話だが

「外からとやかく言っても結局はエレンスゲがどうにかするしか無いですねー。」

「相模女子はエレンスゲと提携していて、海濱さんだってエレンスゲには知り合いが多いんでしょう？冷たくないかしら？」

現状ではエレンスゲがなんとかするしかない。そんな気楽な言葉に高嶺は怪訝な表情をする。縁のあるガーデンの施設が襲撃され、友が対処に向かったにしては冷たすぎると思ったのだろう

「確かにエレンスゲと縁はありますが私には神庭のリリイですし：他所よりも自分達の方が心配ですよ。」

エレンスゲと縁はあるが今の彼女は神庭の制服に袖を通しトップレギオンであるグランエプレに所属するリリイだ、エレンスゲのリリイでは無い。

施設の襲撃よりも萩窪で戦っている生徒会防衛隊やルームメイトの薫や同じ学科のクラスメイト、中等部の後輩達の方が心配だ。実力者もいるがルトレココ女学院ココ同様消耗している事は間違いない。冗談抜きでそろそろ帰りたいし帰らないとマズいのでは？と思っている。

「町田にきた相模女子の子達は？お友達もいるんでしょう？」

「仮にも鎌倉5大ガーデンですよ？心配してないですね。出来ない事をするような連中じゃないです。マズくなったら今までの支援を理由に私等を助けに来いの一言ぐらいは言って来ますから」

叶星は相模女子の事を聞いてくるが、そっちは何も心配していないと告げる。本当に無理ならば無理と言うし新宿事変から時折行つた支援を餌に手伝いに来い位は言いそうだと確信しているからだ。

楽観視ではない。中等部から過ごしてきたからこそ分かるのだ。

なぜ相模女子の話題が出たのか彼女には分からない。今の自分は神庭のリリイだという発言から過去に在籍した相模女子だつて自分には無関係だと言う解釈をしてしまったのだろうか？

「叶星さんと高嶺さんだつて御台場の強さは分かっているだろうし：自分達の事をちゃんとするのが先だとおもうんだけど：違うのかな？）」

二人だつてガーデンは違えど同じではないのかと思ってしまう

そもそも他校の心配をしている場合ではない。レギオンの運営や高嶺のコンディション面などやるべき事は多々ある。二人は上手くや

れているつもりかもしれないが、問題だらけ。だから彼女や秋日が動いているのだ

そして、数日たったある日の事。エレンスゲ近郊で大規模なヒューズの襲撃が発生、それに対応する為に複数のガーデンで合同司令部を結成、作戦の立案と応急の指示が行われている

勿論、海瀛達もその作戦の中に含まれており、配置等の話し合いが行われている…のだが

「えっ、ヘルヴォルの救援に？」

「ええ。エレンスゲの教頭先生が私達を向かわせるように司令部に掛け合ってみてくれたみたい」

グランエプレだけでない、一柳隊や御台場、ルドビコ女学院の面々、つまり今回の駐留でヘルヴォルと共闘経験のあるレギオンを軒並み救援として向かわせるようにエレンスゲの教頭が手配したというのだ

「ああ、例の…」

以前一葉が話していた新しく来た教頭だ。この短期間でそこまでの影響力を持つていたことにも驚く。まあ今のヘルヴォルを支持、支援と言う事で他所からすれば良識のある人間として積極的に受け入れてくれるのだろう。校長の名前が聞こえないのが気掛かりな所だ

「目的は市民の避難とヒューズの撃破、ですね？」

「研究施設の防衛も、よ

その付近にはエレンスゲの研究施設もある。ヒューズに破壊される訳には行かないわ」

「そつちも…」

どうやら嫌でも施設の防衛はしなければならいらしい。

住んでいる人々を守る為に戦うのがリリーの仕事だ、何も躊躇うことは無いが、施設の防衛と聞いたことで彼女の表情は暗くなる

「施設の防衛は嫌、理由はあるにせよギガント級は出撃拒否、一体何なの!？」

ここ最近の海瀛の態度に姫歌は思う所がかなりあったようで食ってかかってくる。確かに端から見たら急にやる気無くした奴として

見えてしまおうし、悪い印象を持たれても仕方がない。それ以外にも新宿からグランエプレと別れての行動も多かった、何を考えてるか分からないのだ。会議前のアイドルの件で空気読めと言った前科も彼女にはある

「嫌とは言っていないじゃん」

「顔に出てるわよ、そんな事やりたくありませんって」

「（いや、施設の正体分からない中でやりたくないし…）」

彼女とすれば実際やりたくない。特に防衛対象の施設が何をやっているのか分からない現状では尚更だ

その施設が考えうる限り最悪の可能性だった場合、神庭にも悪い意味で影響が出る。

「あーちゃんは心配しすぎてるんだよね、もつと楽に行こうよ」

「二人共、喧嘩しないで下さい…！」

「生憎、そう言うの苦手で、さ」

「最近の海濱、何考えてるかさっぱりわからないわ…」

楽観視出来る状況ではない。だがこれ以上揉めるのも時間の無駄

一柳隊を含め他のレギオンを待たせる訳にも行かない

準備を整え指定された地域に向かうのだった

第72話

指定された地域に向かうグランエプレを含めたりリイ達

ヒュージの数は多く、既にあちこちから火の手が上がっている

「(敵の数が多し。ペース配分考えないと...)」

ヒュージの数はこちらよりも圧倒的に上、海瀉の場合、マジ保有量を考えながらの戦闘になる：マジ保有量が一番少ないのは彼女、後先考えずに戦い途中でガス欠なんて事にならない為にも慎重に戦わなくてはならない。房総半島での戦い以上にペース配分が大切。トリグラフから放たれる弾丸は一発も外れる事なく、確実にヒュージを撃ち抜き絶命、近接戦でも無駄な動作なく確実に切り伏せ敵を蹴散らしながらひたすらに前に進む

「...いた!!」

ヒュージを蹴散らしながら進んでいくと、ヘルヴォルの面々を見、各レギオンの隊長陣は一葉を助けに来た事を告げる：が海瀉には一つ気になる事があった

「海瀉も来てくれたんだね!」

「呼び出したのそっちだろ...」

で、どうしたの、それ?」

来てくれたも何も自分達に来て欲しいと頼んだのはエレンスゲ側だ。そうじゃ無ければ来ていない。それよりも気になるのは一葉、恋花、瑤が身にまとっている服だ。恐らくは対ヒュージ用スーツの一種ではあるが念の為の確認だ。エレンスゲの新しい制服、なんてふざけたものでは無いだろう。制服として見るにはデザインが、微妙だと思ってしまった。ダサイのはネーミングセンスだけにしたいと思っただけの話

「これ? 西村教頭先生が渡してくれた新スーツなんだ。CHARMとリイのマジシンク口を高めて、それを防御と機動力に回したって言ってたよ」

「全く...そんなのが有るなら勿体ぶらずに駐留の時から使えばよかつ

たじゃん」

以前の話を思い出すにルドビコ女学院駐留時には既に就任していたはず。CHARMに限らず使える物は使うべき。戦闘時に着用するスーツならば持ち込んだって何もおかしくはない。

「いや、これ貰ったの今日なんだけど」

「はあ!？」

驚くのも無理はない。例えばこの戦場が普段の襲撃で被害も抑えられる単純な戦闘ならば動作テストを兼ねた出撃をしてもおかしくはない。だがこの戦場は違う。大規模な襲撃とそれによって生じている被害。

「ど、どうしたの?そんなに驚いて」

「ぶっつけ本番の新装備を使っつていい戦場じゃないだろ:しかも三人っつて:」

少なくともレギオンの隊長ならばその位の判断は出来て当たり前と考えていた。自分一人ならまだしも瑤と恋花まで身に着けさせている。何らかのアクシデントが発生し戦えなくなった場合、千香溜と藍が三人をフォローしなければならぬ事を考えると、かなり不味いというのが彼女の考えだ

「いつまで話してますの!？」

言いたい事は山程あるがこうしている間も他の面々は戦っている。話すよりも手を動かさなければならぬ。楓が呼ぶのも無理はない

一葉と別れ、戦線に復帰。スモール級を蹴散らしていく。その後暫くした後ヘルヴォルは戦線を離脱。戦闘中に防衛対象だった研究施設が襲撃を受け彼女達は取り残された研究員を救助しに向かった。

「(ラボの事を考えなくていいなら楽かな)」

襲撃を受けたラボに勤める者やエレンスゲのリリイからすれば気の毒かもしれないが現時点で与えられた情報ではやる気の無かったラボの防衛やその手伝いを行わなくていいと考えると少しは気が楽になる。現れたヒュージを蹴散らせばいいだけだ

戦っている途中、近くで大きな爆発音。そして近づいてくる一際大きな影。見覚えのある者も多い

「あれは…もしかして…」

紅巴だけではない。新宿事変で実際に遭遇したことのある一柳隊とグランエプレの面々ならば見覚えのある個体、エヴォルヴと名付けられたヒュージだ。

マグリフレクターを使用することが出来る個体だ

「(一柳隊で9人、御台場とルドビコの二年生組と叶星さんと高嶺さん合わせて10人。

こりゃ私の出番は無いかな…足引つ張らないように引つ込んでよつと)」

強力なギガント級、決して油断できる相手ではない。だがこの場にはそれ以上に強力なりリイが揃っている。余計な事をして足を引つ張らない限り負ける事は無い。

海漓は頭の中でシミュレーションを行う。ノインヴェルト戦術の波状攻撃を軸に人員を割り振ってみるがどう考えても自分達に出番はない。周りのスモール級を倒し他の仕事で彼女達を支援するのが最適だと言う結論になる。

「(まあ、私の力不足が招いてる事でもあるから納得はするけど)」

出番に関しては仕方の無い事だ、彼女自身の力不足でこうなってしまうている。あそこに強引に割って入りたいならば冗談抜きで姉と同等の力と才能が必須条件だ。新宿事変で有志連合に参加し長時間戦ったり防衛構想会議後の模擬戦や戦闘で力を示したり直近の舞弓や魅夢、残存戦力と合同でルドビコ女学院防衛と結果は残していると思っていたがそれでも無理なのだからやはり中等部からリイだった海漓に求められたのは姉やセインツ、ロネスネスの1年生クラスの才能と実力がなのだろう

梨璃のレアスキル、ラプラスの使用に関しては考えなかった。発動と出力の安定性への懸念は当然としてここはエレンスゲの守備範囲内、つまりゲヘナのお膝元だ。誰かがドサクサに紛れて梨璃とラプラスのデータを取り、それを元に今後良からぬことを企まれても困る

エヴォルヴとの戦闘が開始され、各々攻撃を叩き込んでいく…が海漓だけは少々違っていた

「(退路：問題無し)」

周囲に現れた特型スモールを撃破しつつ万が一に備え退路を確保する。その為自身は集団から少し離れた所で戦闘を行っている。他の面々は全員がエヴォルヴへの対処及び支援だ

ヒュージが作戦を立てている：と仮定した時、このエヴォルヴで終わらない可能性も十分にある。良くも悪くもギガント級と言うのは目立つ。意識をエヴォルヴに向けている間に増援として現れた他のヒュージに包囲されました：となったらお笑いだ

ノインヴェルト戦術というのはマジとCHARMを大きく消耗する諸刃の剣。マジリフレクター対策の為に波状攻撃を行った場合、多くの主力となるリリイが消耗する。そこをつくように数で包囲し自分達をすり潰しにかかって来るような事も考えなければならぬ。そうならないように周囲の警戒と退路の確保は必須だ

大物への対処に集中している間や消耗した所でヒュージの増援に包囲され被害が出る：これ自体はよくある事だ。大物との戦闘に意識が向き視野が狭くなった結果いつの間にか：なんてことだって良くある事だ。

相模時代に自校や他校で起こった過去の事例は全て把握している：知識が無ければ自分もあの輪に入っていただろう。

「海瀉は何やってる訳？マジ切れで離脱？いつもより早くない？」

「余り休めてなかったのでしょうか？」

本来ならば逃げた臆病者と罵られたり呼ばれたりしてもおかしくはないが、彼女のマジ保有量に関しては周知の事実。離れたのはマジの消耗が激しくギガント級との戦闘についていけないと判断したから：という解釈になる。

「叶星様、海瀉さんのマジ保有量、そんなに少ないのですか？」

「マジが少ない分、実弾でカバーしてるからまだ戦えると思っていたけれど：回復が間に合ってなかったのかしら？」

離脱が早い事には驚くがそこも休めてなかったと思ひ込んでしまえば周りも不思議には思わ無い

「(本当なら手伝えて言いたいけど...)」

それだけの大仕事、本来ならば彼女一人の仕事ではない。だが彼女以外、その必要性を分かっているのではないのだ、何ならその手の思考は悲観的と言われ否定されるのがオチ。経験者は当然として強者側の思考になりつつある姫歌達も難しいだろう。それは新宿事変でも証明されている

そもそも、万が一の事を考えておかないと実際にコトが起きた時に何も出来ないなんて事になりかねない為、保険を書けるのは当たり前といえは当たり前前の話、最悪の事態を考え行動するのはリリイは兵士であると教育されて来た彼女の思考だ

退路の確保に務める裏でノインヴェルト戦術の波状攻撃が行われエヴォルヴが撃破される。他のスモール級に妙な動きはない、片付けるだけとなる

その後は研究所から戻ってきたヘルヴォルと合流、互いに状況を報告し合う

そんな中、海瀉は近くにいた瑤に話しかける

「瑤さん、さつき一葉から軽くは聞いたんですけど…そのスーツって何処のメーカー製です？」

「えっ、メーカー？どこだろう…分からないな。…教頭先生に聞いておこうか？」

「いえ。そこまでしなくていいですよ」

自分の興味で他校を振り回すわけにも行かない。ましてやこの後、エレンスゲは事後処理もあるのだ。余計な仕事を増やされるのも嫌だろう

「にしてもぶっつけ本番で新装備使わせるなんてその教頭も無茶な要求しますね」

「相模女子だって似たような事してなかった？私達との訓練の時だった」

「アレは裏で何回も性能テスト重ねた上での投入ですよ。テスト無しぶっつけ本番は流石に…」

エレンスゲとの合同訓練で新装備を突入したことを指しているのかもしれないがアレは相模女子やヒイロカネ社で何度もテスト運

転を重ねた上での投入だ。テストも行わずいきなり実戦投入なんて事はしていない

「教頭先生やラボのスタッフの方々も私達に協力してくれてるし、そこはお互い様かな」

その教頭が協力してくれるならば自分達も要求には応えなければ、持ちつ持たれつつ、そういう事なのだろう。協力者の依頼を無下には出来ないと言う事だ

「…協力…か…」

「どうしたの？」

「あー、いえ。その教頭エレンスゲ内だと孤立とかしてないんですかね？」

ヘルヴォルをサポートするという事は自然とガーデンの方針に反発するという事だ、教頭とはいえ新任がそんな事をやれば風当たりが強くなって当たり前

「そんな事はないよ…むしろ教頭先生が来てからヘルヴォルへの支援が手厚くなってる」

「ええ？手厚く？」

「うん。CHARMのカスタムも今まで以上に私達の要求を飲んでくれてるし…装備品とかの予算も増えてるって一葉が言ってた

教導官からの風あたりの強さも弱くなってる感じはあるよ」

「(日が浅いのにエレンスゲ内で自由に動ける力と権力を?)」

何度もいうがその教頭は新任。日が浅いにしては出来ることが多いすぎるし権限が強すぎると彼女は感じる

勿論、百合ヶ丘クラスの強豪ガーデンから引き抜かれた優秀なスタッフならば話は別だが、そうでもない限りは与えすぎ、そう思えてしまう。下手な入れ込みはそれこそ他のレギオンからの反発に繋がりにかねないからだ。

エレンスゲを変えたは良いがエレンスゲ内に味方が居なくなつた…では意味がない。当たり前前の話だがエレンスゲ内のヘルヴォルへの信頼を高めていかなければならないし、仲が悪くとも最低限の共闘は可能なレベルの信用の構築は必須と考えている

その後は軽く雑談を行い、自分達はルドビコ女学院、ヘルヴォルはエレンスゲへと戻っていく

それから数日後、一柳隊、ヘルヴォル共に駐留任務を終え百合ヶ丘、神庭へと帰還

それぞれのガーデンでの日々が始まるのだった

第73話

ルドビコ女学院の駐留任務を終え神庭に帰還してきたグランエプ
レの面々。全員がそれぞれの部屋に戻る

「ただいまー」

「…おかえり…無事でよかった…」

ルームメイトの薫もこの時ばかりは読んで本から顔を上げこち
らを出迎える。激戦だった事が彼女の耳にも入っており、ルームメイ
トが無事に帰ってきた事に安堵しているのだろう。それは海瀉も同
じ。帰ってきたらルームメイトが居なくなっていた…なんて事にな
っていなかったのだから。そうして荷物の片付けをしていると、校
内にヒュージが出現した事を知らせる警報が鳴り響く

「そっちの出迎えはいらないんだけど…仕方ない」

片付けを途中で切り上げ出撃準備をする。そうしていると薫が

「…最近多い…」

「本当に？」

「うん。多分この後も何回か来る…気をつけて」

神庭に残っていた薫が言うのだ。嘘ではないのだろう。連戦も覚
悟しておいた方が良さのだろう。マジの保有量に不安がある海瀉と
しては対策を練るに越した事は無い

実弾を多めに用意し出撃する。

その時だった

「ねえ、貴方があの天野海瀉さんでいいんだよね？」

「そうだけど…誰？」

一人のリリイに呼び止められる

神庭の制服を着ては居るが見慣れない…というより初めて見る人
物だ

「あ、ごめん！先に名乗るべきだったね。私、横田悠夏。」

ボストンブレイヴァーズガーデンから編入してきて今は生徒会防
衛隊に所属してるんだ」

「(ポストンブレイヴァーズ：穏健の立ち位置を取る親ゲヘナガーデン)」

彼女の前の所属先はアメリカの名門ガーデンでイルマと同じ立ち位置と中等部時代の教導官が言っていた事を思い出す。そしてかなりの強豪ガーデンとも。神庭は中立である以上元の所属先の派閥に関わらず試験で条件を満たせば入学出来るし実力があればこうしてガーデンの中枢にだって入れる。海外の強豪ガーデンからの編入と言う事で戦力の補強という面でも問題無しだ。生徒会防衛隊もようやく基準に達するリリイが来て大助かりだろう

「私もグランエプレに用があるの

良かったら一緒に行かない？」

「それは…構わないけど

防衛隊は？」

「秋日様の許可は取ったから大丈夫!!ほら、早く!!」

彼女はそう急かし、海瀉を連れて出撃する

校舎を後にし現場に向かうが道中、大量のヒュージが彼女達の前に現れる

「萩窪にしては多くない？」

「だよねー!悠夏もビックリ!萩窪ってそんな激戦区じゃないって秋日様から聞いてたのに」

スマール級ではあるが萩窪ではありえないような数が出現、相模女子を経験した海瀉からすれば大した数ではないが、萩窪しか知らないリリイから見れば異常に見えるかもしれない

そう、萩窪しか知らないリリイからしてみれば、の話だ

「先行くね!!」

悠夏はそう言うと一目散にヒュージの群れに突っ込んでいく

「あ、ちよつと…仕方無い。後ろから援護するか…」

自分も、と行きたいがお互いにどういう動きをするのか分からない以上、自分も前に出て連射すれば悠夏への誤射に繋がりがねない、リスクを抱えるよりは自分が後方から彼女の支援を行った方が効率よく倒せると判断する

力強くヒューズを薙ぎ倒す悠夏を射撃でサポートする海瀛

彼女の進む道を作る、倒し漏らしを仕留め、逆にダメージを与え怯ませた個体は彼女に最後の1撃を叩き込ませる

後は見落としているであろう個体を先に撃破し彼女へのダメージを抑えてもいる

彼女の動きを観察し何をして欲しいのかを予想し、適切な支援を行う

先へ先へと進む悠夏との適切な距離を保ちつつ、だ。

動きや癖を初見で見抜くことは出来なくても、相模女子にはあの手のタイプのリリイは多かった。人は違えどやる事や求められる事は大体同じ：それを助かると受け取るか余計な事と受け取るかは彼女次第だ

「(何処が落ちこぼれ!?聞いてた話と全然違う!!)」

海瀛の支援を受けている悠夏としては内心穏やかではない。仕方の無いことではあるが彼女の認識では相模女子など鎌倉の落ちこぼれ集団、穴が空いた事とヒヒイロカネのおかげで5大ガーデンになれただけ。アメリカでの生活が長く昨年に一度帰国した際に巻き込まれたとある戦いにも相模女子のリリイはいなかったのだから無理もない。どうしてもマイナスなイメージが先行してしまう。伝統と格式のある他の5大ガーデンと比較しても新進気鋭で異質であるのも影響しているだろう

国内ならいざ知らず海外のガーデン事情まで詳細に把握するのは厳しい為、仮に口に出しても海瀛は怒らなかつただろう

そして訓練や戦闘も当たり前にあるのだ、偏った知識でも仕方がない

秋日や藤乃、クラスメイトからは海瀛を甘く見るなどは言われていたが半信半疑だった

神庭で指導を受け成長している事を考慮しても大したことはない。経験者では最弱程度の認識をしていた

戦闘になってからも自身についてくるので精一杯なんてことは無く自身の背後に付き、適切なポジションを保ちながら正確な援護射撃

を行ってくる。

「(あの天葉様とも違って前に出てくるタイプでもないんだ…)」
姉のように後方から追い抜き前に出てくる素振りを見せない。良
くも悪くも背中を追いかけ、押してくる立ち回りをしている。

そのおかげもあり前へ前へと順調に進んでいく

その時だった

「見つけた!!」

その言葉と同時にグランエプレの面々のいる所へと辿り着く

「高嶺姉様!!」

「(ん? 高嶺さんの身内なのか?)」

悠夏は高嶺を高嶺姉様と呼んだ。そう言う関係でない限りは身内
と考えるのが適切だろう。

「海瀉! 遅いわよ!!」

「これでも急いできたんだけど…数が多くてさ」

「ここに来るまでの間に戦闘を?」

「まあね。とはいえスモールだけだし簡単だったよ

あの子もいたからね」

そう言いながらも海瀉は周りを見渡す戦闘中ではあるものの、まだ
まだヒュージは残っている。そして気になる事が一つ

「あれ? 叶星さんは?」

「離れた所のヒュージをやっつけてる

よ」

「一人で?」

「うん」

「へえ…(珍しい)」

いつもなら高嶺を連れて行く所を今回は一人で向かったという。
姫歌がいる事や強い事を踏まえても隊長が単独で敵の群れを倒しに
行く事は大問題なのだがもうその程度の事を問題と捉えると頭が痛
くなるためあえて無視する。

自分達の通ってきた道はそのまま退路としても使えるため、後はこ
の群れを殲滅すればいいだけだ

「ヒュージ、来ます！」

そうしてヒュージは向かってくる。

海濱はすぐさま銃口をヒュージへと向ける

「そのヒュージ、はや……」

灯莉は特徴を告げようとする……が

「避けた所で……!!」

確かにヒュージは最初の一撃を回避した……だが回避先を予測し事前に子機側から弾丸を放つ事でヒュージが自分から当たりに行つた形となり撃ち抜かれる

「前出て削るけど……いいよね？」

「……」

初手を決めた所で今後の動きを姫歌に確認する。姫歌の言う事は分かっているが念のため……だが彼女からの返答がない

何処か上の空のようにも見える

「駄目なの？」

「……えつ、ああ、そうね。……いつも通り頼むわ」

「疲れてるなら下がらなよ」

自分達が来るまでの間も戦っていたし、もしかしたら連戦の疲れがあるのかもしれない。灯莉や紅巴にだってその可能性はある

一言だけ言い残し彼女はいつも通り敵陣へと突っ込んでいく

先とは違い今度は敵に狙いを定めとにかく撃ち抜く……弱らせた個体は後ろにいる三人がなんとかしてくれる……筈だ。

横目で高嶺と悠夏を見るが向こうは上手くやっているようだ。途中悠夏はこつちを見てくるが今は無視だ

「確かに上手いけど……貴方が前に出てやる必要あるの?」

そんな感想を悠夏は抱いていた

AZの役割もこなせるのは分かった……だがそれをやる必要があるのか?と迷ってしまった

叶星がこの場におらず、自分が高嶺と組んでしまっている以上、前に出れるリリイが他にいないから仕方無いのかもしれないが勿体無いとも思ってしまう。

「(後続は窮屈そうにしてるし…指示も迷ってる…)」

後続も見るが一人は何処か窮屈そうにしているし指示も迷ったりテンポがずれてしまっている。それでも上手く回っているように見えるのは海瀉が彼女達にテンポを合わせ、見えないように流れをコントロールしているからだ。

彼女は「自分に合わせろ」ではなく「自分が合わせる」タイプだ。そんな風に思われているとも知らず海瀉はひたすらヒューズを撃破し続ける。

そうして戦闘が終わると

「高嶺姉様ア!!」

「…ウツ…」

悠夏は高嶺に抱きつく

これだけならば見る人が見たら感動の光景だろう。付近に百合の花が咲く光景だ

「(鳩尾入ったな…)」

だが、実際はそんな儂い光景ではない

抱きつくというよりタツクルレベルの勢いで突っ込んだのだ。事に鳩尾に入る勢いで

いくら高嶺といえどそんなのを叩き込まれば流石にダメージを受ける

「(グランエプレへの用事って高嶺さんに会いたかったって事?)」

じゃれ合う微笑ましい? 光景を見ながら彼女はそんな風に思う

自分がかもしも姉と再会したら…抱きつくよりも一発ぶん殴る方が先になるかもしれない

そんな事したら自分の首が飛ぶため絶対にやらないが

「(…でも身内同士仲が良いのは良い事)」

グランエプレとしての高嶺に思う事は多々あるが、悠夏の行為を咎めず何やかんや受け入れるあたり身内への愛情も有るらしい

少なくとも自分と姉のような関係ではない。

間違つて海瀉が姉に抱きつくこうとしても首が飛ぶとは思っている
両者ともに本人よりも義シユツツエンゲル 姉と義妹、シルト 周アールヴヘイム りが黙ってないだろう

関係ない、無関心貫いていても時折思うのだ

「^{姉さん}アイツ、何してんだろう。」と

知るすべもないし容易に近づく事もままならない程の立ち位置と人間関係を姉は構築した為、現状維持が最善なのだ

その後、叶星も合流

やはりというか彼女も悠夏を知っておりこの後紹介するという事を告げる

その後は周辺を確認しガーデンへと引き上げるのだった

第74話

「海瀉さんにはさつき自己紹介したけど…改めて自己紹介

あたしは横田悠夏

一年生、生徒会防衛隊所属よ」

ガーデンに帰還し、グランエプレ控室に戻って少し休憩した後悠夏は自己紹介する

「高嶺ちゃんの従姉妹でもあるの」

「へー、親戚なんだ」

彼女の自己紹介の後に叶星は情報を追加。海瀉の予想通り高嶺の親戚であった

「暫く会えていなかったけどね」

高嶺も懐かしむように言うが仕方の無い事。流石に国を跨いでしまうと簡単に合う事は出来ないし時差も考慮すると中々連絡も取れないだろう。ましてや互いにリリイ。日々の訓練や戦闘もあれば尚更連絡や合う事は困難だ

「あれ？生徒会に横田さんなんて方は…」

「つい最近神庭に編入してきたし貴方達が知らないのも無理ないわ

貴方達がルドビコに派遣された位にボストンから編入してきたし」

「そ、そうだったんですね…」

ボストンって事はアメリカのボストンブレイヴァーズガーデンから!?」

「うわー、インターナショナル!」

経歴に紅巴や灯莉も驚く。そして暫く雑談をすると

「でも凄いわね。転校早々生徒会なんて」

「本当はグランエプレに入りたかったんですよ?今年は枠を増やしてゐるって事は事前に聞いてたんで悠夏もーって思ったんですけど」

「許可されなかった?」

「ええ。流石に二枠は増やせないって…」

やはりというか彼女はグランエプレへの加入を希望していたよう

だ。身内と戦いたい事やグランエプレは例年と違って枠を増やしての運用を行っている。自分も特例で加入出来ると思っていたがガーデンは許可しなかったようだ

「(身内采配する懸念だろうなあ…)」

レギオンの人数が増える事は良い事だ。強いリリイなら尚更。人が増える事で作戦の幅も広がるし運用が楽になる場面も有るだろう。だが今の状態で人を増やす。ましてやそれが高嶺の身内で叶星とも交流がある者となると話が別だ。更に拗らせた事をやるという可能性をガーデン側は懸念したのだろう。

「でも秋日様と戦えるならそれはそれで嬉しいなって思ったんで、生徒会に決めました

それに生徒会なら間接的にサポートも出来るって思ったんで！」

「ねえ、秋日様って誰？」

「神庭の生徒会長…自分達のトップの名前位は覚えようね…」

流石に生徒会長の名前すら知らない灯莉に呆れるしかない…神庭の顔という意味なら叶星かもしれないがガーデンの長という意味だと秋日だ。話した事は無くとも名前位は知っていなければおかしい。海濱は呆れながらに告げる

「流石に正規メンバー3人じゃ苦しかっただろうし秋日さんも大助かりじゃない？テストとかあったの」

「まあねー。生徒会入りの時に校長先生と秋日様相手に面談して合格って感じだったよ。テストは無かったかな」

「(実力だけじゃ無いつて事か…当たり前だけど)」

そこらのレギオンではなくガーデンに所属するリリイの取りまとめを行う生徒会に入るのだ。藤乃が見せるような奇行的な問題であれば笑い話や秋日の頭痛で済むことだが、他者や他校を見下したりするような発言でトラブルを引き起こしたり生徒会に近寄れないような空気を作り出すような者なら当たり前だが入れる訳には行かない。名門からの編入と言う事でその辺りは警戒して当然。人格、素行面に問題がない事で生徒会への加入を認めただろう

悲しい事に名門ガーデンの人間には必ずと言っていいほど格下を

見下すような発言を当たり前に行う者が多く、強ければ許される理論でまかり通ってしまっているのが現状だ。悠夏にその手の価値観が無い事を確かめたかったのだろう

「どうして海瀧ちゃんと一緒に？」

生徒会の防衛エリアと違うわよね」

「高嶺姉様の後を追おうとしてたら出遅れた海瀧さんを見かけたんでついでに声かけて…と言いたいところなんですけど」

「けど？」

「今回、生徒会役員として【神庭展示会】^{コレクシヨン}の【展示会警備係】の管理を担当する事になったんです」

「(そういえばクラスでも話題になったりポスターも貼られてたっけ)」

神庭展示会^{コレクシヨン}簡単に説明するならばガーデン主催の展示会だ。

参加も自由でやる事も自由。とはいえこのイベントを目的に外部から大勢の人が来校し優秀なリリイをスカウトする場でもある。在校生も卒業後の進路に影響することもあり参加するリリイは非常に張り切っている

リリイとして卒業したが行き先もなく途方に暮れました…と言う訳には行かない。

卒業後もリリイに関われる職につけるのは極僅かな優秀な人物のみ。だからこそ卒業後の進路に関わる行事はとても大切だ。

「グランエプレにもスカウトに行く途中だったんですけど」

「途中でヒュージ出現警報がなった…と」

「はい！後はグランエプレの戦いを見ておきたいな…ってのもあったんで」

「それで、見た感想は？」

姫歌は評価が気になるようだ

「叶星様と高嶺姉さまは元船田予備隊出身だけあって流石の実力だし、海瀧さんも新進気鋭の鎌倉5大ガーデン出身だけあって流石の実力だわ！」

「(私にも触れるか…てつきり二人だけだと思ってたけど)」

先の感想など知る由もない海瀉からすればここで自分も挙げられるのは予想外だった。二人はともかく、高い評価をするような行動をした自覚はない。

秋日や藤乃からなにか言ってくれたのかと思ってしまう

「隊長が叶星様って事を考えたらサブリーダーは高嶺姉様よね!!」

それとも高嶺姉様と海瀉さんの二人体制?」

現状を知らない者からすれば至極当然の予想だ。中等部からの経験者でレギオンの重役を固めるといいうのは何処のガーデンでも共通の認識らしい。

「グランエプレのサブリーダーは私や海瀉さんじゃなくてそこにいる定盛姫歌さんよ」

「え? えええ!」

うそ?! なんですですか!」

「(そんな反応するよね)」

高嶺が告げる事実には悠夏は驚くし海瀉は同情する。経験者がいるのにわざわざ初心者でレギオンの重役に配置する理由が無いのだ。一柳隊の場合初心者で梨璃の隊長が成立するのは隊内に隊長業務の知識と経験のある者を複数抱え大半を実力者で固めているから出来ることだ

レギオンの半分の3名が経験者ではあるが、一人は事情持ちのグランエプレで同じ事をするにはリスクが高すぎる

「定盛はよくやってるよ!!」

「はい。姫歌ちゃんも凄いいりりイです」

「私や叶星も姫歌さんが相応しいと思ったから任せているのよ」
灯莉や紅巴は姫歌の事を肯定するし高嶺もフォローを入れる
頑張りを見たり同じ学年の姫歌の努力を見ているからだろう

「え? いや:でも:まあ、そっちはレギオンから支持されてるなら
いっか」

「(私の方を見た?)」

何故か海瀉の方をみる悠夏
すると

「姫歌さん…だっけ？」

今の戦い方、やりにくくない？窮屈そうに見えるけど…

戦闘スタイル、見直した方が良いと思うの」

「な、何ですって!？」

「あれ？定盛ちゃん、その段階に来た？…訓練よりも他校との合同作戦や大規模戦闘、別行動が多かったからよく見れてなかったけど)」

悠夏の言葉に海瀉は意図に気づく

本来ならばレギオン内で気づかなければならない事だが、今までの経緯を考えたら合同レギオン結成以降、自分や仲間と向き合い訓練する時間が無く、海瀉に至っては別行動も多くその手の傾向に気づけなかった。彼女の場合レギオンでは叶星の方針もありAZを継続し、背中を預ける事が多くそもそも戦闘時の姫歌を見れないと言うのも大きい

海瀉や高嶺はともかく姫歌と立ち位置の近い叶星は何を見てんだと突っ込みたいのは我慢だ

「いきなり現れて私の戦い方に文句つけるなんて失礼じゃない!!」

「定盛、落ち着いてー」

「良いわ！私の戦い方の何処が悪いか教えて頂戴よ!!」

グランエプレのサブリーダーは無理だっというなら教えて頂戴!!」

「いや、そこまでは言っていないんだけど…」

「(しゃーないな) そういう所だよ」

悠夏は姫歌の反応に戸惑いを見せる。ここで揉めて余計な火種を生み出すわけには行かないと海瀉は判断し助け舟を出すことにした

「何?!肩を持つの!？」

「気性が荒すぎる。なんでそんな言い方する訳?」

「じゃあ何よ！言われっぱなしでいろっって事!？」

「言われっぱなしも何も、サブリーダー云々はともかく悠夏ちゃん、別に定盛ちゃんを悪く言ったり煽ったりしてないでしょ？」

少し落ち着いた対応しない?」

「十分落ち着いてるわよ!!」

「悠夏が好きで言ったことだから…ここで海瀉さんが揉める事じやな

いよ」

不味いと思っただのか悠夏は海瀉を止める

彼女からすれば善意の発言から、まさかの対応の連続になる。これ以上続ければ今度はグランエプレ内で衝突が置きかねない。それは悠夏としても避けたいのだろう

そんな時悠夏の端末がなる

何処かと会話しているのだろう。

「あーちゃんも酷いよー」

定盛、頑張ってるんだよ」

「そ、そうですよ。火に油を注いでどうするんですか!？」

途中、灯莉と紅巴は先の行動を非難する。二人としてもまさか海瀉が悠夏側に立つとは思わなかったのだろう

「頑張っては居るけど、それとこれとは話が別でしょ？今はコミュニケーションとかそのレベルの話だからね？」

転入して間もない同期にブチギレた対応する奴が何処にいるのさ」
これまでの姫歌の頑張りを否定するつもりはない。だがそれと今の対応は話が別

確かに些細な事かもしれない。しかし性格というのは戦闘時にも表れる、サブリーダーとして相応の立ち振舞は求めたいのだ。

そもそもあの言い方に対して一方的に怒った対応をすれば悠夏だって良い印象を持たないだろう。レギオンとしても同期としてもそんな対応をするのは良くないのだ。彼女の性格が比較的温厚だったから何も起きなかったが相模ならば姫歌の発言と同時に衝突になり収集がつかない可能性が大いにあった

「秋日様から戻って来いって言われたので悠夏、戻りますね

後、海瀉さん借りていきまーす」

「(タイミング!!)」

この騒動を知らない秋日に否はないがそれでもこのタイミングで自分が呼び出されるのはなんとも言えない。

「じゃあ皆さん、また!!」

「…とりあえず要件済ませたら戻って来ます」

とりあえず先に秋日からの呼び出しを済ませるのが先決
手を引かれる形で二人は控室を後にする

廊下を歩いていると

「もしかして、庇ってくれた？」

「別に。」

先の対応、もしかして自分を庇ってくれたのかと思ひ尋ねたが海瀧は否定する。彼女も思うところがあつたから口を挟んだだけ

「アレが戦闘に出る兆候があるならちよつと今の戦い方はあつてないかもね

元々目立ちたいって言うタイプだしそこにあの荒さが噛み合わせつつくるなら…」

「ちよつとびつくりした。あんなに怒るなんて思わなかつたから

でも、姫歌さん、今のままなのは良くないと思う」

リリーの性格は戦闘スタイルに反映される…と言うのは学説には無くともリリーをやっている者ならば暗黙の認識としてあるものだ。以前の空気を読めと言う発言の時の対応そうだが、姫歌は目立ちたがりに加え不意な状況で潜在的な気性の荒さが時折出てくるのだ

今のままでTZや司令塔に置くのはどう見ても不味い…それが二人の認識だ

海瀧としては姫歌の立ち回りを後ろから確認したい所でもある

それに戦闘スタイル云々の下りもリリー同士ならばなんの変哲もない話題の一つだ。合う合わないや助言など何処でも行う事

そのやり取りで怒られるのは悠夏としても予想外だったのだろう。

「定盛ちゃんからしたらプライド傷つけられたってのもあるかもね

ぽつと出の同学年が自分のやる事にケチつけたって思ったら腹立つでしょ？」

「だって窮屈に見えたから…」

「別に悠夏ちゃんを責めてるわけじゃないよ

そもそも同等なんて考えてる時点でおかしいんだから

学年は同じかもしれないけどリリーとしてのキャリアなら圧倒的に上でしょ？」

私にも言えるけど」

あくまでも彼女の仮設だ。証拠はない。たが姫歌の反応を見る限りほぼ当たりだと思っっている

入学早々にトップレギオンに指名され、サブリーダーに就任。多くの戦いを乗り越え強くなつた矢先、転入生に戦闘スタイルに否定的な意見を言われたのだ。

自信とプライドを傷つけられたと思つても不思議ではない。

海漓のように中等部からリリイとなり教導官や先輩からドヤされる事なく自由に過ごしてきたのだ：悠夏に悪意が無くともあの発言に怒つたとしても不思議ではない

「別にキャリアの上下とかは考えた事なかったかな：海漓、結構気にする？」

「キャリアにしる年齢にしる上の者の言葉には耳を傾けるべき：とは思つてるよ。考えなしに依存して何でもかんでも受け入れるのも問題だけど全く聞かないっていうのもどうかと思うよ」

別にリリイに限つた話ではないだろう

他人の言葉に耳を傾けずに我が道を突き進み成功する人物など極わずか、そちら側ならばともかく、そうでないならば取捨選択をしつつも傾けるぐらいの事はするべきだ

「使えるものは使う」を実現する為にも必要な事でもあるのだから

「このタイミングで呼び出しながら何かやらかしたかな私？」

「悪い話じゃないと思うよ

寧ろ適任つていうか：神庭を代表するリリイつて判断されないと思せられないかも…」

秋日との話を知つていての発言と捉えると白々しいが、ここは敢えて、だ

だが返答を考えるに違う方面での呼び出しのようだ

「神庭を代表つて：それこそ叶星さんや高嶺さん。防衛隊の面々や他のリリイで良くない？なんで私？」

「海漓か藤乃様しか候補になつてなかったの

「こればかりは悠夏筆頭に無理な案件だから。」

「何それ？」

益々意味が分からなくなる

その二択になる意味も他では無理だと言う事も、だ。

そんな事を話していると生徒会室に到着する

「遅いわよ…全く何してたの？」

「すいません、遅くなっちゃいました」

中に入ると秋日を筆頭とした生徒会の面々が出迎える

「海瀧ちゃんも、おかえりなさい

駐留任務、お疲れ様でした。」

藤乃もそう言い彼女を出迎える

「いえ、任務なので」

「硬い返事ですネー」

半年ぶりの再会ですよ？」

「いや、そんなにたつて無いですつて」

半年なんて経過して無い。それだけ不在にしていたら大問題だ。

何の事を言っているのかと思ってしまう

「誰かを抱きしめない寂しくて死んじゃう病が蔓延しかけたり大変

だったんですからねー」

「誰がそうしたと思ってるの!？」

色々あったようだ

鈴夢の方を見ると目をそらされた

どうやら色んな意味で大変だったらしい

「その件は、ごめんなさい…」

悠夏も申し訳なさそうにしている

本当に何があったのか、海瀧は純粹に気になってしまう

「とりあえず座って。席は…藤乃の横でいいわ。鈴夢は正面に」

「海瀧ちゃん、どうぞー」

秋日に勧められ藤乃の右隣に用意された席につく

鈴夢と悠夏は海瀧、藤乃の正面に位置する席に座る

「先ずは呼び出した用件なんだけれど

海漓さん。貴方、他社のCHARMを使ってみない？」

秋日から告げられたのは海漓からしても全く予想外の言葉だった

第75話

「別メーカーのCHARM…ですか？」

秋日の言葉に戸惑う海瀉。基本的にその手の話はリリイからガーデンやメーカーに要請する。ガーデン側からの推薦というのは余り聞かない。

「ええ、メーカーからテストリリース募集の依頼を引受けて神庭の上層部と生徒会で審査した結果、海瀉さんと藤乃が候補に上がって…ね。」
「どう言う候補です、それ？」

「二刀流の有無ですよー」

私はレアスキルで、海瀉ちゃんはマジクラウドシステムを使つての擬似的な二刀流で戦うでしょう？」

「そうなる…テストするのはマジクラウド搭載機つて事ですか？」
「そういう事。」

話が見えてきた。確かに神庭にも力のあるリリイはいるが二刀流として戦っているのは藤乃と海瀉だけ

「私としてはレポートを出したり技術者と話し合いがあったりと非常に面倒くさいので、海瀉ちゃんが引き受けてくれると非常に嬉しいんですが」

候補の藤乃はやる気が皆無。引き受けると定期的な打ち合わせなどが面倒事が増えるのも事実。実質、海瀉しかいないのが現状のようだ

「先行試作機だけど、神庭で使用する事を考慮して、多少のスペックダウンの可能性もあるけれど…どうかしら？」

こればかりは仕方の無い事。維持、運用する為にお金がかかるのは事実。そして神庭の規模と財政面を考えると部品の調達で高級品を用意するのも難しい。機体によってはネジ一本取っても調達難易度が高いとかいう海瀉からすれば頭のおかしい機体が多数存在する事を考えると今回は非常に良識的だ

「…確かに他社の機体は興味あります。ずっとヒヒイロカネばっか

使ってきましたから」

彼女自身、他社の機体にも興味はある。舞弓や魅夢がモンドラゴンやグングニルカービンを使っているようにヒヒイロカネが経営しているとはいえ相模女子でも他社のCHARMを使う事を禁じてはいない。だが、ヒヒイロカネ製の機体は非常に強力な物が揃っており整備が容易で壊れにくい物が多い。態々他社の製品を使うぐらいならば自社の機体を使えばいいのだ。海瀉のようにヒヒイロカネ限定で全ての機体を扱えたり整備が出来るというリリースも珍しくはない。

「それで…どう？引き受けてくれる？」

「構いませんよ。外征とか任務で神庭には負担かけてしまいましたし…そのお返しにもなれば」

自身の興味に加え外征の連続でガーデンにも負担をかけてしまった。お返し、と言う訳ではないが何らかの形でガーデンに貢献しておくのにも必要だと判断する。それに先行試作とはいえ最新鋭の機体を使わせてもらえる分、海瀉の方が得をしたのかもしれない

「そこは自分の興味だけでいいのよ…全く。」

この後、手続きしておくわね」

「これが、そのテスト機体の情報ですよー」

「メーカーはユグドラシル」

CHARMは…グラシーザ？」

ユグドラシル社、CHARM開発関連としては非常に有名な企業と言っても過言ではない。百合ヶ丘を筆頭に多くのガーデンがユグドラシル社のCHARMを導入している。中でもグングニルを筆頭に強力な量産機を製造している事でも有名だ

この会社のCHARMならば安心して使用できるのも事実。

ただグラシーザと言う機体は聞いた事が無い。詳細なスペックを確認する

「マジクラウド搭載型…親機側は完全に近接特化か」

マジクラウドコントロールシステムを搭載した第三世代機。擬似的な二刀流で戦う事を想定した機体でもある

問題なのは親機側。2丁拳銃をモチーフとしたトリグラフと違い、

親機側に射撃機能は一切なく近接オンリー

射撃を主として戦う海漓にとっては少々扱いにくさが出る事が予想される

「後は実際に使ってみて…か慣れれば簡単そうかも」

「え、本当に？難しくない？」

「トリグラフ使ってたからさ。機体は初見だけどマギクラウドで戦うって所は同じだから。」

CHARMの使用に限った話ではない。状況、機体は初めてかもしれない。しかし積み上げた知識、経験、技術の引き出しを次に活かす事が出来る。

今回の場合、グラシーザは初めて。しかし彼女にはトリグラフで戦ってきた経験があり、共通する部分は必ずある。その上で機体のスベックを引き出すだけだ

今までの行動もそれに当てはまる。状況をピンポイントで当てる事など彼女には不可能。しかし過去に似たような事が起きたという知識があれば次も、と考え備える。ただそれだけの事だ。

「今までの行動も？」

「まあ、そう…ですね。後は誰かがやらなきゃならなかったってのもありますけど」

今の言葉で秋日も彼女の今までの行動の理由が分かったのだろう

「後は…暫くの間悠夏をグランエプレに助っ人として合流させようとおもうんだけど…上手くやれそう？」

「まあ、問題無いかなど。(そっか。秋日さん、決めたんだけ)」

一呼吸置くと、秋日はそのように告げる。だがその意図を海漓は正確に捉える。『防衛隊のリリイを合流させる』事が動く事の合図、意味どおり生徒会は動くという事、つまり時間切れだ。情勢の悪化等予想外の事が多かつたとはいえ我慢の限界なのだろう

「秋日様、どうして海漓に？」

叶星様やサブ…リーダー…の姫歌さんに聞くべきなんじゃ？」

「同学年の経験者ならではの意見に興味があったから。海漓さんだけでしょっしょ。」

「確かに…グランエプレの一年生で経験者は海瀉しかいないから」

納得したように頷く。グランエプレ内で中等部からリリイとして前線で戦ってきた一年生は海瀉のみ。鼻目無し、一人の経験者としての意見を求めたのだろう

「機体に慣れるまでの間、最低限のフォローはしてあげなきゃいけませんからね。これ以上介護者を増やすのは酷でしょうし」

「藤乃！」

普段とは違う機体を使って出撃する事は当然リリイにとっても負担になる。慣れない機体を使う事で動きが鈍くなる事や万が一の事が起きる可能性だって多いにある。ガーデンとして要請した以上当面の間フォローを入れるのが義務本来ならば慣熟訓練を終えた後に実戦で使用だが、ヒュージの出現頻度を考慮し訓練時間や人数的な余裕が無くなることも考慮したのかもしれない。

当然これらは生徒会が動かなくともこの後に事情を知る事になる。叶星が考えて対応すればいいだけの話。

藤乃もそれを分かった上での発言だ

「とりあえず、引き受けるって事で報告してくるわ。必要な書類を受け取ってくるから少し待ってて頂戴。鈴夢、ついてきて」

「…はい。」

秋日は鈴夢を連れて生徒会室を後にする。今の話を聞く限り必要な書類も既にガーデンにあるのだろう。

生徒会室には海瀉と悠夏、藤乃の3名のみ。すると悠夏が不意に

「一応、書類上の報告で知ってはいるけど…ほら、エレンスゲラボの戦闘あつたじゃない？」

「あ、うん。」

恐らくはあの襲撃の件を言っているのだろう。とは言っても自分達はヒュージとの戦闘でラボの対処はヘルヴォルが行ってたのだが「戦列から離れて何してたの？」

提出された報告書だとマジの回復不足含めたコンディション不良の疑いありとは書かれてたけど」

「どれ、ちよいい見せて」

「どこだったかなー…あった。はい。これ」

彼女はそう言い生徒会室の本棚から報告書がしまわれているファイルを取り出し海濱に渡す

「(えっ、マジでやってる事理解できなかったの？本当に御台場卒のエリアートだよな、あの二人?)」

記入者は叶星の名前。例の戦闘の報告が詳細に書かれている。その中で海濱の行動も記されているが、『コンディション面の事情により戦線から離脱』と記載されており、彼女の行動の真意を読み取れなかった事が伺える

確かにエヴォルヴを相手にしており、中々目を向けられなかった：と言う事を考慮しても『退路の確保』と言う当たり前の事をせずに関し確保に努めた彼女の行動を読み取れなかったのは流石にシヨックだ

東京御三家出身のエリートがそんな当たり前の行為すら気づけないなど彼女からすれば信じられない。

「いや、万が一に備えて退路作ってただけ」

「ふむふむ。退路。」

「叶星様が決めた方針を守ってただけ?…忘れるなんてらしくないなあ」

藤乃は考え込むし悠夏はらしくないという。幼少期からの知り合いという事もあり叶星が物忘れなどらしくないと思ったからだ。

「…いや、退路の確保なんて決めてないよ。私が自発的にやっただけ」

「自発的…ですか?」

退路を確保しなさいなど叶星は教えていない。あれは海濱が自分で考えて行ったことだ

「まあ相模の時に退路の確保は言われ続けて来た事ってのもありますけど」

「言われ続けてきた?」

色々と教わった事があるがその中でも退路の確保の重要性は常に言われてきた

「入学から中等部3年の間ずーっと

教導官、先輩問わず。」

「ほうほう。」

「私達って落ちこぼれって言われてたじゃないですか？」

トチった時の対応や予防策を日常的に叩き込んでおかないといざという時動けなくなるんで」

当時の相模女子はエリートでは無く落ちこぼれの集まり。名門ではありえないようなミスが平然と起き、危機的な状況に追い込まれるなんてザラ

訓練も対策もなく突発的な状況でも軽々と突破できるような才能の集まりでないならば日常的にしつこいレベルで叩き込ませるしかないのだ。要は反復学習だ

そして一息吐く、

「そりゃ、才能あるリリイなら多少トチろうが何しようが強引に切り抜けられますけど、落ちこぼれの私等、同じ事しようとしたって出来るわけ無いし普通に死にます」

根本はこれだ。才落ちこぼれ無き者が才エリート有る者と同じ事など出来るわけ無い。バカにされ蔑まれる事でもやらなければヒュージ相手に勝てないし死ぬだけだ。

「だから相模女子はプラグマティズム思考を推奨しているんですね」

「そういう事です」

相模のプラグマティズム思考自体は例の教導官が来る前から行われてきたもの。遊糸を筆頭とした3年生やその前からもそれは顕著だった。

品格では無く、結果が全てと言いながらプラグマティズム思考を求めぬる姿勢

中立と言う事もあり矛盾を抱えたガーデンとも言われてきたこともあったが、それこそが相模女子でもある

「プラグマティズム…？」

「ものすごく噛み砕いて分かりやすい例えると結果を求める事も無理なら諦めて逃げる事も正解だと教えることです」

藤乃の回答は模範解答として見るとほぼ100点に近い。結果を

求めすぎて深入りして余計な被害を出したり引きどころを間違えて自軍に損出を出せば怒られるし、逆に露骨に結果を出さないとそれはそれで怒られる。

「まあ、初代アールヴヘイムとか東京だと船田予備隊クラス？ならそんなの必要なかったんだろうから凄いなもんだよ…私らそんな事したら速攻お陀仏の間違いなし（…そのお陰で甲州の時に私らがとばっちり受けたんだけど…新宿の時も危うく死にかけたし）」

海瀛が例えたレギオンならば正直必要な事も分かっている

そのせいで二年前の甲州でやらかしてみたり、自身も新宿事変の際、CHARMを失っているのに叶星が戦闘続行の指示を出し遊糸達がいなければ危うく死にかけていたのでなんとも言えくなる

もしかしたら船田予備隊には素手でヒュージを殴り倒せるようなリイがおり、彼女も経験者なのだからそれを要求されたのかもしれない。真相は闇の中だ

「必要無いなんて…そんな事…」

「あれ、ボストンでもやってた？」

ゴメンゴメン。私の知る範囲での話ね」

発言を聞いた悠夏は何故か落ち込んだ表情を見せる。ボストンでもそれらは必要と教育されていたのならばそれはかつての母校を否定したも同じ。

自身のリサーチ不足を認め謝罪する。

「あ、いや…そうじゃなくて

海瀛はよくやってたの？そう言う事？」

「退路の確保は確実に指示出したし出されたよ。すっぱかしたら普通に怒られるし…」

自身が司令塔を務めた時、司令塔では無く指示を受ける側だった時共に退路の確保は確実に行ってた

特に数で押してくるスマール、ミドルの出現となれば尚更

『スマール1体見つけたら付近に最低10体はいると思え』と言われるぐらい数が出てくるのだ

例えば『ヒュージの大群が出現』という事ならば想定以上の数がい

る事は頭に入れるし、退路の確保や長期戦を覚悟した戦いをする必要がある。

明確なゴールが無いのが戦いだ。『ヒューズを倒せ』という指示一つ取ってもどの位の時間がかかるか分からないのが現実だ

『リリーの能力とCHARMの性能の暴力行為』で勝てるのはごく一部、自分達はそちら側^{エリート}ではないと日頃から教わってきたのも大きい
「教官や上級生から受け継いだ…と言う事ですね。海瀧ちゃん達を主に担当した教導官はどんな方だったのですか？」

「どんな…まあ、指導は鬼でしたよ。」

クツソ厳しいし、怒られる事、駄目出しされる事は多かったです。入学してから中等部3年間の日々を思い出す。女子中学生向けのカリキュラムとはいえその教官はこと戦闘に関しての指導は滅茶苦茶厳しかった。中途半端な事をしたら怒号が飛ぶのは当たり前。体力錬成一つ取っても楽だった記憶がない。落ちこぼれと呼ばれていた自分達の代は相模女子の中でも入学時点の能力は歴代最低に近かった。

そんな世代を鍛え上げ戦場に出さなければならなかったのだから自然と指導も厳しくなる。

後に遊糸を含めた上級生から聞いた話だが「アレだけへボいの揃ってたら指導も厳しくなる」との評価だったらしい

「やらなければならぬ事」と「やってはいけない事」をとにかく叩き込まれた

「でも実技離れたら普通ですし面倒見も良かったですよ…熱血とも違いますし…まあ、現場を知り中等部でも命かけて戦わなきゃダメないことを知り尽くしてた故の厳しさでもありますよね」

「恐怖で支配って事では無さそうですね」

「まあ『訓練時の怒号が怖くてリリー辞めたい。怒られたく無いからちゃんとやるって考えなら悪いこと言わない。今すぐここから去って普通の生活に戻るか、周りが優しく教えてくれる他のガーデン受け直せ』ってのはよく言っていましたね」

CHARMを持って初めて戦場に出た時の事は今でも覚えている。

逃げ惑う市民の悲鳴と崩壊する街並み、必死に戦っている上級生。あの時は上級生にドヤされ、震えながら必死に戦ったのを覚えている。自分達が担当した所はまだまともで負傷した上級生やヒュージに捕食されヒトだった何かをみた同期もいたのだから

その時の恐怖や肉体的、精神的な負担に比べたら教官の指導など言いは悪いがマシだったのだ

『本番ではこれ以上の負荷がかかるぞ』と言っていた理由もこの時に分からされた

「うーわ、言うねえその教官。ガーデンから怒られなかったの？」

「後から聞いたけど『そのやり方で優秀なリリイを育てられるなら良い。その為にあなたを雇った』ってさ。」

実力なくてもやる気ある奴へはフォローしてたし必要に応じて助言もしてたから、怖いけど優秀な教官って印象だなー」

『弱いのは良い。訓練すれば幾らでも上手くなる事ができる。』そう言っていたのも確かだ。その後『伸びしろや素質で差は有るが今よりも前に進めるのは皆同じ。』とも付け足していたが

「いや、そつちもだけど…教官がそういう事して怒られないのって？」

「そう言うのってリリイ同士でやる事でしよう？」

「落ちこぼれは先ずは指導よりも自分達の事を優先しろってのもあるんじゃない？」

神庭に限らず技術や精神面の指導は教導官では無くリリイ同士でやる事と言うのが一般的な認識。教導官は座学専門で他はリリイが務めるやり方が基本。何なら訓練メニューすらリリイ主導の所も多数ある。

それを考えると確かに異端かもしれないが、そもそも落ちこぼれと呼ばれたガーデンで上級生が教えた所で落ちこぼれを量産するだけ。強くなる者もいるが極僅かだ。

ならば御三家のイルマ出身かつ教導官時も指導実績を残していた彼女に任せると考えるのは上層部としても当たり前の話。上級生も自分達の訓練をする為の時間を作らせる、そんな狙いもあったかもしれない

「(素行よりもコッチがイルマ出された理由じゃないかって噂はあったけど)」

酒や煙草と言った素行面など言いがかり。大人としてリリーの成長を真剣に考え行動を起こしすぎた事がイルマ放出の原因だったのではないかと言われている

手を出すと言う意味ではなく「教え導く者」としてリリーに近すぎた彼女にも教導官としての義務、信念があったのだろがそれを面白くないと捉える者が教導官、リリーで多数を占め追い出されたのではないかと噂になっていた。

「中等部といえど上級生との関係とか無かったの？」

海瀧含め皆そう言う相手がいなかっただけ？」

「んー。私の場合、本当に生き残る術を身につけて戦うのに必死で誰かと関係持ちたいとか考えた事すらなかったなあ：そもそも命を落とす同期や上級生も多かったし：」

リリーなら誰もが夢見る光景だ。同期、上級生と姉妹契約や特別な関係を持ち共に戦い抜く事を誓う。だが彼女の場合は毎日が必死でそんな夢すら見た事が無かった。同期や上級生が死んでいく、次は自分かも知れないと思う日々もあった：それでも仲の良い同期や後輩、上級生と戦い抜く日々だったのだ。流石にそんな中で普通のリリーなら当たり前に見る夢を追う余裕は残念ながら無かったのだ。

「そ、そうなんだ：」

「まあねー。教導官の指導で見きれない細かい助言とかは上級生もやってたけど：名門みたく座学や体力錬成以外は全部リリーが主導して教導官は不在：なんて事はなかったね」

ガーデン毎のやり方があるためこの辺はそれぞれの考え方も在る。

指導の合う合わないもリリー毎に異なる為一概に言える問題ではないのだ

「つまり海瀧ちゃんはお相手のいなかった一人様と？」

「なーんか言い方引つかかるけど：そうなりますね：仲いい上級生もいたんですけど先輩や上官的な感じですし：俗に言う『姉御やお姉様』はいないですね」

海瀛とてぼっちではない。同期、後輩、上級生問わず友人は多数いる。だがどれもがそこ止まり。尊い関係とかそんなのは無かった

あり得た可能性としては遊糸が最も近いかもしれないが結ばば何にかこつけて集めてくるのは必須。まあ、なればなつたでウザかつたら妹の立場を使って蹴り飛ばすか引っぱたく位はしたのかなと思う

「遊糸さんは上級生としては頼れるし隊長としては理想的なんだけどなあ…」

叶星と遊糸。どっちの率いるレギオンに入りたいかと聞かれたら遊糸一択。その位の信用と信頼は相模を離れた今尚持っている

「藤乃様、何考えてるんだろう?」

「考えるような回答してないんだけどなあ」

生憎と彼女に人の心の奥底を読み取る能力など無い。まあ、不愉快な回答でなかった事は分かるが、その位だ

中等部を経験したりリイによるこの手の話だと大体は同情や哀れみ、希望を持つように伝える者が多い中で考え込むのは初めて見たリアクションだからだ

そんなやり取りをしている後に秋日と鈴夢が戻ってくる

「藤乃様が考え込んでる…どうして?」

鈴夢も入室早々にそんな光景を目にしたら混乱するだろう

「海瀛が相手のいないお一人様な事を悩んでるんだ!」

「悠夏は何を訳分からぬ事を言っているの?…まあ、良いわ。」

秋日は聞き流すと海瀛に対し

「明日、担当者が来るみたいだから話はその時に…今日はもう戻っていいわ」

ユグドラシルからの担当者が明日来る事を伝える

この後生徒会で会議もあるだろうし彼女としても資料を受け取ると生徒会室を後にする

ガーデン帰還してやるが増えた

そんな事を考えるのであった

第76話

CHARMのテストを引き受けた翌日、ユグドラシル社の担当者やグランエプレ、生徒会から合流した悠夏と共に訓練場に来た海瀉は担当者から機体を手渡される

「これが…グラーシーザ？」

「はい。量産型を目的としたタイプの機体です」

手渡されたCHARMにマジクリスタルコアを装着。起動させる

「感触は違う…それで使いにくいとかは無いですけど…」

「ヒビロカネと当社の違いの一つとなります」

それはメーカーによって生じる差の一つなのだろう。ユグドラシル社を愛用しているリイがヒビロカネ社の機体を初めて使えばそう言う感想を持つだろう

個人向けに調整された俗に言うワンオフの機体は手にあつたものを一から作るので何処の会社であっても自分の手と感覚にあつたものが与えられる為そのような違和感を感じる事は無いが、これは量産を目的とした機体。そのような贅沢は出来る訳がない

親機、子機ともに軽く振る。多少の違和感はあるがこの程度ならば想定内。すぐに馴染むだろう

「射撃は…おつ、いい感じで早撃ちと連射が出来る。マジと実弾の切り替えが可能!?これ、標準装備なんですか？」

「はい。子機の射撃は連射による弾幕生成による制圧射撃を重視していますので。切り替えにも対応させてもらっています…早撃ちは重視して無いのですが…やってみてどうでした？」

「引くときに少し重さがありましたね…このあたりは部品と調整で可能なんじゃないかと思えます」

射撃モードが搭載されている子機側で試し打ち。海瀉の得意とする早撃ちと連射にも対応。更にはマジと実弾の切り替えも標準装備となつている。彼女の場合、戦闘で頻繁に使用するため重要視しているが、恐らく権はノインヴェルト弾の射出でしか実弾を使わず基本的

にはマギの射出だろう。

「むー」

「どうしたの、定盛?」

「納得いかないわ!!どうして海濱には権様が使っているのと同じ新型が与えられるのよ!!」

「全く同じ、という訳では無いと思いますよ?」

後ろではそんなやり取りが行われている。この機体、実は以前共闘した御台場の権が使うCHARMと同型。量産を目的に再調整した機体が今回彼女に与えられた機体

だが詳しい事情を把握しないと一人だけ特別扱いされた、と思ってしまうのかもしれない

「つまり、この機体は先行量産型でもある…と言うことでしょうか?」

「そうですね…貴方達が用いるような一般的な先行量産型ではありません」

叶星の問を担当者は否定する

自身や高嶺も俗に言う先行量産型の機体を使用している。それと同じだと思っていたようだ

「ガーデンで用いられる先行量産型のような調整は施しておらず…この機体に関しては親機側に搭載されていたサイズモードの他に分離させた刀身を子機側に装備可能な機能をオミットしています

後は御台場の藤田権さんの使う機体よりも多少大き目に作っているのが特徴です。」

親機側の刃は射出が可能。機体内部に搭載されたワイヤーの長さの範囲内で飛ばした刃を自在に操り攻撃する事ができる他に、ワイヤーを取り外した状態で刃を子機側に搭載する事が出来たようだが、その部分を取り外した形となる。子機も射撃と近接格闘モードで切り替えが可能なので態々刃をつける必要もないと言えないこともない

後は親機側は機体が鎌のように変形する事もできたようだがそれも取り外したようだ

「えっ?!弱くしたって事?!大きさも違う!?!」

「性能に問題が生じるのでは？」

悠夏や高嶺は聞いて驚く。今聞かされた話だけ聞くと弱体化した機体を渡してきた。そうとしか捉えられかねない内容だからだ

「どういう事？」

「機体の機体に搭載されている機能の一部を取り外した：ということですね。部品諸々も一般的な物を使用し、本当に量産化する事を前提に作り上げた機体：ということでしょうね」

「し、新型…なのよね？」

「当然です。でもこんな改良は聞いた事が…」

姫歌達にも聞こえているがこちらも混乱する。紅巴の解説からあたえられたのは新型ではあるが内容を聞いてもピンと来ない：彼女達からすれば新型Ⅱ高級な強い機体と言うイメージをもっているのも有るだろう。

世間一般的…というより叶星や高嶺に限らず先行量産型CHARRMと呼ばれる機体は量産型を謳いつつも製作時に想定よりも高価な部品を使い、使用者に特化した調整を行った結果個人にとつては最適でも量産化し、大勢に使用してもらえない機体ではなく本来の目的である量産化に？けたデータが取れないと言う事態が続出。海濱からすればワンオフも先行量産型もどちらも個人専用機という印象だ

だがこの機体の場合はそれまでの反省から個人に特化した特別な調整等は一切行わず一部の変形機構も取り払う徹底ぶり

先の話からするに機体そのものが身長の高い機向けに合わせ、高価な部品を用いた特注品。しかしこの機体は平均的、もしくは長身なりリイでも違和感なく使えるように再調整をかけたのだろう。

「その代わり量産向けの案として新モードを搭載しました。親機側と子機側を操作して貰ってよろしいですか？」

「あ、はい。…こうか」

言われた通りの操作する。

すると合体モードへと以降、親機側のグリップパーツを外側に開き空いたところに子機側のグリップパーツを接合。すると接合部を通じ親機側から子機側へマジが供給され子機側の銃口からマジの刃が

放出

親機側は実体剣、子機側はマジで精製された刃が現れる

トリグラフのバルチザンモードとはまた違った形の双刃剣となる

「ご覧の通り双刃剣モードになります」

「マジの使用量はどの位です？」

「他社との比較ではありませんがトリグラフよりは多くなってしまいましたね。しかし、出力の調整は後でも出来ますし改良の余地もあります」

確かに便利だが彼女のマジ保有量を考えると余りにも多いと満足に使えない。その確認もあるが、説明を聞く限り使用時間に極端な制限は無さそう。後の調整でなんとか出来る

双刃モードを考慮し機体の大きさを変えた形でもあるのだろう

「大きいみたいだけれど…分かる？」

「オリジナルを見てないので何とも…トリグラフより少し大きいかな？って意識してようやく…ですね。」

言われてみて違うかも？となるレベル

オリジナルを見ていないため余計な先入観が無かった事も大きい。大きさなど機種によって差があるのは当然。面倒な連中（リリオタク）は見た目も中身も違う偽物と言うかもしれないが彼女からすれば眼の前にあるこの機体が本物のグラーシーザだ。

「（それにしてもよく制作に必要な物がメーカーに残ってたな…）」

今の説明、昨日秋日から受けた話を踏まえてなお、その考えが彼女にある

機体サイズの変更や代替となる新モードの搭載など改良点はあるがそもそもグラーシーザを作るための設計図がユグドラシル社に残っていた事に感心する

彼女にその手の専門知識は無く、人聞きやヒイロカネの工場を見学した際の話になるが俗に言うワンオフの機体には設計図を筆頭とした機体を作る為に必要な物がメーカーに無くガーデンが管理、保管する…と言う事が基本で先行量産型が一点物になってしまうのもその為だという

生産元はメーカーだが必要な物は全てガーデンや所属するリリイに都度回収されメーカーが独自に改良した機体を作れない事が大半だという

相模女子やエレンスゲのように運営元がCHARMメーカーならばそんな事は無いが百合ヶ丘やメルクリウスではそれが近著らしく、工場でデータや図面の複製などが出来なく、工具諸々も都度ガーデンに回収されるらしい。詳しくは聞いていない。それがワンオフの機体ばかりが生産されそれらの量産化や用いられた技術の流用が進まない理由の一つとも言われている。

もっと詳細な話もあるが生憎と彼女はヒュージと戦う事が専門。それ以外の知識は年相応、分野によっては乏しくなってしまう。

これらの話も相模時代にアーセナルの友人がボヤいていたのをふと思い出したに過ぎない。

「先程、疑問に上げられたような性能の変化：特に戦闘面でオリジナリティと大差有りません。そこを維持しつつ量産化に向けての改良だったので変形機能をオミットする必要がありました…」

スモールすらまともに倒せなくなりました。使ったらすぐ壊れます。では意味がない。神庭クラスのガーデンでも安定して整備、運用し戦える能力を持たせるならばいくつかの機能の取り外しは仕方の無いことだ

代替となる機能もトリグラフの亜種と考えるならば悪くない

「慣れればいけますよ、全然。大丈夫です」

「今後は定期的な報告等色々とお願ひする事がありますが…よろしくお願ひします」

担当者はその後、書類の手続き等の為訓練場を後にする

「海瀧ちゃん。神庭展示会の準備に加え警備の仕事もあるけれど大丈夫？」

「展示会は…作品含めてまあ、なんとかなるでしょう」

警備だって機体に慣れる為の訓練と考えたら負担にはなりませんね」

昨日話をした神庭展示会への出展と警備係の参加。グランエプ

として両方行う事が機体を受け取る前に告げられている

1年生4名はドレスの作成を行う…というより姫歌の計画を自分が手伝う形だ。

自分と灯莉は絵画。衣装のデザインぐらいは出来るが他はからつきし。作成諸々はアイドル絡みで得意な姫歌の指示通りに動くのが得策だ

「でも今日は感覚を身につけたいんで、このまま少し自主トレしたいんですけど…」

「いいわよ。私達は控室で準備を進めてるわね」

初日位は機体に馴染ませる時間が欲しいのも事実で叶星にお願いし、許可を取る。

その後、面々と分かれ彼女は一人自主トレを行う。体に負荷をかける事よりも機体を体に馴染ませ、感覚を掴むことを優先したトレーニング。簡単な素振りや対ヒュージ戦を想定した攻撃動作シミュレーション、機体に搭載された機能の確認。子機よりも親機の運用は慎重になる。

そんな時だ。ヒュージ出現の連絡が入る。スモール級がメインで現時点でミドルやラージ級の反応は無いということだ

初陣としては丁度良い。そう判断し彼女はグラシーザで出撃しようとする…が

「雨？…さっきまで晴れてたのに？…しかも冷え込んできた？」

快晴だったはずなのに小雨がふり始め窓を開けると心なしか少々肌寒い風が入り込んでくる

「(私は大丈夫だけど…)」

この程度ならば相模時代に訓練や実戦で何度も経験して来たが、1年生の3名はこれが初。どうなるか、分からない部分が多い。

そんな事を考えながら出撃準備をしていると

「良かった…まだいた…」

そう言いながらルームメイトの薫がこちらに向かってくる

「どうしたの？」

「これ…必要でしょうか？」

彼女は雨衣を手渡す。それは自室にあるはずの物だ

「わざわざ持ってきてくれたの？」

「…うん。間に合ってよかった」

自分が出撃すると思いきや、神庭に限らず雨衣を着ずに出撃するリリイも多い中、持ってきた彼女は更に続ける

「…今まで通りならこの後雨脚が強くなる筈…雨衣無しは…危険」

「今まで通り？」

「うん。最近、ヒュージの出現は多いけどそれと同じぐらい雨が降ることも多い…だから…必要」

「え？…そうなの？」

「…そう。…ゲリラ豪雨って奴なのかな…？」

薫の話す内容に海瀉は内心穏やかでは無くなる。継続的なヒュージの出現と異常気象…とある出来事が頭のなかによぎるのだ

「(雨とヒュージ…まさか…東京で?)」

偶然と言い切る事は出来ない

自分達の外征中の状況含め調べる必要がある。そのように判断しながらも受け取った雨衣を制服の上から着て準備を終える

「ありがとう。助かったよ」

「…ん。私も校舎周辺の警戒で出るから守りは任せて」

彼女も雨天用の装備を身に纏っている

途中まで一緒に行動し、薫は警戒へ海瀉は現場へと向かう

途中、グランエプレの面々に追いついたのだが

「あれ？海瀉も雨衣なんて着てきたの？」

雨衣を着た海瀉に対し姫歌は告げる。他の面々も悠夏以外誰も着ていない。

「そりや着るでしょ。雨降ってるんだから」

「神庭に限らず雨衣なんて着ないリリイの方が多いの…珍しい」

「悠夏ちゃんだって着てるじゃん」

「悠夏も本当は着たくないけど生徒会のリリイが着ないのは不味いでしょう？…って秋日様の指示があるから」

暑い、制服で十分、そんな理由で雨衣を着ないリリイが大半だ。ガーデンによつては義務な所もあるが大半は任意。鎌倉だと相模は義務だが他は任意だ：制服の機能で賄えるという話も有るようだが実際の所は分からない

生徒会とは生徒の模範となるべき組織でもある。雨衣があるならば着ろという指示が出るのも分かる

「雨脚が強くなる前に終わらせるわ！」

そう言い叶星と高嶺が先陣を切る

先陣を合図とし戦闘開始。

「(また指示も出さずに突っ込む…)で、定盛ちゃん。どうすんの私？」
悪天候の中での戦闘。誰をどのよう配置しどうするのか、それを伝えずに向かう光景に呆れしか出ない

自分で考えろという事かもしれないが普段とは違う状況でも要求する辺り本当に経験豊富な司令塔かと疑いたくなる

「いつも通りよ。海漓が前に出て姫歌達が後方」

「：海漓は新型機での初陣だけど普段の布陣って奴で良いの？下げたほうが良くない？」

「何：ケチつけるつもり？」

「いつもと同じ布陣ねオツケーオツケー、ほら行くよ悠夏ちゃん!!」

戦闘中にしようもない事で揉めるなど馬鹿すぎる。海漓は悠夏を引き連れ早々に二人を引き離す。姫歌は昨日の件もあり悠夏に対する印象は最悪に等しい。現状、下手な言葉は逆鱗に触れるだけだ。

「戦闘前から揉めるのやめてよね

：背中から撃たれたいの？」

前に出ながらそう告げる

これに関しては悠夏への苦言だ。相模上がりゆえの性質か言い合いや喧嘩なんて日常茶飯事。やるなら好きにしろというスタンスだ。だがそれは戦闘が絡まない時だけ。

命をかけなければならぬ状況で下手に揉め判断を鈍らせた結果、戦闘に影響が出るなど以ての外だ

ましてやりリイが手に持つのはCHARMという兵器。戦闘前に

喧嘩し怒りに任せそのままの勢いで悠夏を：なんて事も起こりかねない

「え？そんな事する子なの？」

「しないよ。」

でも兵器持った人間がキレたら何するかなんて予想出来ないじゃん：命かけて戦わなきゃいけないんだから不確定要素は排除しなきゃ」

姫歌がそんな事をする人間では無いのは一緒に過ごしてきた海瀛も良く分かっていているからこそ断言出来る：だが現時点で悪印象を持っている悠夏に対しどのような行動に出るのか予想が出来ないのもまた事実だ

前に出て戦わなければならぬ以上、海瀛と悠夏は自然と姫歌達に背中を預ける形を取らざるを得ない。ただでさえ前衛という危険なポジションで戦うのに狙いをつけて背後から撃たれる可能性まで考慮しながら戦うとなると流石に気が散りかねない。

「とりあえず前同様に悠夏ちゃんそのまま切り込みなよ。私後ろからフォローするから」

「分かった」

そのまま並び立つと危ない可能性はあるので自分が悠夏の背中を守る。自分が悠夏と姫歌達の間に入る形だ

懸念や不安点を残しながらも雨天時の戦闘が本格的に始まるのだった。

第77話

小雨の中の戦闘。自身と悠夏は先陣を切る：その中でも悠夏の戦いは目を見張るものがある

「うおりゃあああ!!」

叫びながら機体を地面に叩きつけその衝撃で地中から出てきたヒュージを斬撃で仕留める。典型的なパワータイプの戦い方だ。

「(力技だなあ：勿論技術もあるけど)」

何も考えていない：という訳では無い、己の持つ技量で出来る事をやっているのだろう。見ている海瀉はあのような力押し of 戦いは出来ない。

「まっ、力が無いからって何も出来ない訳じゃないけど：！」

ヒュージが地中から出現すると同時に自身に飛びかかってくるが彼女はそれを素早く回避、側面に周りこむとそのまま親機で切断し撃破

「後は…っと！」

左手に持った子機は射撃モードのまま。得意の射撃で迫りくる3体のヒュージを同時に撃破。

新型だろうが、雨が降っていようが全く関係ないと言わんばかりの精度を見せつける

距離があるならば射撃、距離を詰められ近接戦に移行する必要があるならば回避、防御で相手の体制を崩しそこからのカウンターで素早く仕留める

本当ならばこんな事をする必要など無い。リリーの戦いは基本的には防御、回避を軽視し積極的に攻めるのが一般的。それこそ叶星や高嶺、悠夏がセオリーだ。積極的に攻めてこそリリーなんて言葉も有るぐらいだ。

だが海瀉の場合、レアスキルやサブスキルの特性を考えるとこのやり方が一番ハマるのも事実。

動きの予測や攪乱で相手を翻弄し鋭い一撃を叩き込む：これの繰

り返し

派手に振る舞うよりも地味だが確実に仕留める。それこそ彼女の性格が戦闘に出る形だ。普段から敵陣に突っ込み一人で複数相手にしてるから派手という風に捉えられるかもしれないがそれはあくまでも結果的にそうなっただけで目的ではない。普段と違い明確に攻めの役割を担う悠夏がいるのも大きい。それこそ相模時代は魅夢を筆頭とした典型的なA Z軍団が大立ち回りをしてくるため自身は徹底的に地味に徹していた

「後は・コイツ結構自由に動くのか」

親機側の刃を射出、機体と射出された刃はワイヤーで繋がっており自由に動かせる：がその動きは自由度が高い。直線的な軌道だけでなく変則的な軌道を描きながらヒュージを追尾し切り刻む事も可能なのだ。しかもその軌道は自身のイメージした通りになっている。

それを応用すると、

「悠夏ちゃん！テイルフィングを射撃モードに」

「えっ？」

「ヒュージ集めるから纏めてふつとばしちやって」

「いや・集めるって・」

戸惑いながらも指示に従う。悪天候の為、いつも以上に狙いは慎重になる。

その間に海瀉は射出した刃と子機の射撃で付近のヒュージを上手い具合に射線上に集めていく。

「もう・これで外したら悠夏が戦犯じゃん!!」

ここまでお膳立てしてもらい外すようなリイではない

放たれた砲撃は集まったヒュージを跡形も無く吹き飛ばす

「うわ、すつご。跡形もないじゃん」

「まあねー・でもまだまだいるよ!」

それでもヒュージはまだまだいる

ここからは手分けして対処に当たる

連携しなければ海瀉の戦い方とはかく地味、分かれた後も力強く積極的に攻める悠夏の方が目立っている。この悪天候の中で力強く

戦う様はCHARMを地面に叩きつける事によって生じる衝撃によって生じる水しぶきすら彼女を引き立てる形となりより一層の注目となる

銃声とCHARMによって切り裂かれる際に生じるヒュージの声のみが響く戦闘とは大違いだ

「あつちは悠夏ちゃんが担当してくれてるしここも問題無い：問題は：」

突撃した悠夏も問題無い。問題なのはこの悪天候と言う事もあり普段以上にミスが目立つ姫歌達

「あつ、倒し損ねました：!!」

「任せて：止め：ってあー、滑る!!」

悪天候の中での影響など考慮せずに戦うのだ。攻撃は外れるミスも増える。何よりも

「3人いるんだからちゃんと陣形組むなり呼吸合わせたりしなよ：）」

最大の原因はちゃんとした連携をしない事。悪天候とはいえ相手はスモール級だ。声掛けや合図などできちんと連携すればミスも少なく倒せる

灯莉も出鱈目ではあるが持ち前の転生の勘で二人と比較したら比較的ミスは無くヒュージを倒しているが負担が少なく暇を持て余している状態だ

「(もう少し全体見た采配してくれないかなあ：)」

高嶺につきつきりでの状態を立て直す事をせず傍観している叶星。自分達に任せるつもりかもしれないが、彼女からすればここまで来ると職務怠慢レベルだ

自分達の仕事が終わったらとつとと下がり前線は自分と悠夏に任せつきり、支援の方針や増員もない：勿論高嶺にいい所を見せたい悠夏としてはこれ以上のない機会だが何度もこの手の放任をされている海瀆としては面白くない。

「これで：ラスト!!」

最後のヒュージも斬り伏せて戦闘終了。付近にヒュージの面影も

ない：雨脚は強いままだ。ガーデンに帰還し着替えたいと思っ
てる

付近の安全を確認し、ガーデンに帰還する時だった

「うーん・やっぱり戦い方も役割もあってない気がする

窮屈っていうか：そもそも相性が悪いとか向いてないって感じ？」

戦闘が終わり、後は帰るだけ。ヒュージの全滅とともに雨も上
がる。道中で悠夏はそんな事を姫歌に告げる

彼女にしたら今の姫歌の立ち回りは相当気になるようだ

「はあ!？」

2日連続で言われた姫歌としてはやはり面白くない、自然と反発す
る

「ポジションの変更と、役割をちゃんと出来る子に譲った方が良
いんじゃない？」

「本当にすぐ喧嘩を売ってくるわね!!何なの一体!？」

彼女にしてみれば2日続けての発言でプライドを傷つけられ自
身を否定されたのだ、喧嘩を売られた：と思ってしまうても不思議では
ない：が

「いや、別に喧嘩を売ってるつもりないんだけど」

「昨日からずっとズケズケ言ってきたんで喧嘩を売ってないって
えるのよ!？」

悠夏に悪気は一切ない。口調や言い方を聞いても明らかだ。だが
姫歌からすれば自身を否定する言い方が気に障ったのだろう：良
くも悪くも叶星や高嶺。一柳隊やヘルヴォル、房総半島では主に楯や櫓
と関わり自身の周りにはそういった優しく肯定的なリイが多かつ
た事もあるだろう。精々被弾から庇われた時に純からチクツと言わ
れた位だ。

彼女に限った話ではないが自身に肯定的な事を言う者と物凄く優
しい言い方をしたとしても否定的な事を言う者ならば前者のほうが
印象がいいし受け入れるに決まっている。それが同学年ならば尚更。

「そ、そんなに怒る？」

戸惑いの方が大きい：誤解された事への疑問もあるのかもしれない

い

風邪を引かないためにも着替えをする為に早く帰りたいと思いがら海瀧は呆れたように息を吐き出す

「とりあえず落ち着きなよ・戦闘終わり気分が高ぶってる所に気に障る事言われて腹立ったんだろぅけどさ」

この状態ならば先ずは落ち着かせることが一番だと判断し、宥める。注意や否定は火に油を注ぐ事になるのは分かりきっている。

「姫歌は冷静よ!!何?海瀧はそっちの肩を持つつもり?」

「肩を持つって・いや、そう思いたいならそれで良いけどさ。自分の立ち位置とかやった事の影響力とか・そういうの全部分かった上で喧嘩したいならご自由に。殴り合いでも言い合いでも好きにしま」

肩を持つたつもりなど無い。ただ落ち着くと、そう言ってるだけだ。それすらも理解できないことに最早呆れるしかない。

悠夏に味方するのならば敵とでも言いたげな反応。自分を敵扱いするのは勝手だが彼女は転入生とはいえ同じガーデンに通う同期で生徒会役員、敵認定する理由も敵対するメリットも無い。

戦闘が終わった後ならば喧嘩になろうが別に構わないが悠夏は生徒会所属。

そんな人物にレギオンのN02が喧嘩をふっかけるといふ彼女からすれば非常識な行為のオンパレード。それが意味する事と影響を正しく理解し、それでもするならご自由にという結論だ。

生徒会が動くのは決定事項。それをバラすつもりも妨害するつもりもない。ありのままの姿を見た上でなければ意味がない。

「な、殴り合いなんて・そんなのいけません!!」

「そっだよー喧嘩は駄目だよ!!」

だが喧嘩するなら好きにしろはあくまでも海瀧のスタンス。相模女子では日常茶飯事だけで他では非常識。まさかの発言に紅巴や灯莉は驚く。

「そっ?まあ、いいや。・さっさと着替えたいから先行くね」

最低限伝えるべき事は伝えた。後は姫歌達次第だろう。一足先にガーデンへと帰還する

すれ違いざまに

「あらあら。ヒューズとの戦いが終わったと思つたら別な戦いが勃発しそうね」

「あはは・悠夏ちゃんも悪気が有るわけじゃないんだけどね」

「(悪気云々の話じゃねえ・本当ならアンタらがやらなきや駄目なことでしようが・)」

叶星と高嶺の会話が耳に入るが、検討違い甚だしい内容に呆れるしかない。

昨日の件があつた以上、二人も戦闘中の姫歌の動きを見て、その上で戦闘後に助言なり今後の提案を行い、必要なら指導を行う。そのぐらいはやるべきなのだ。手を出さず考えさせる・とは言うが考え方の分からない人間に対してそれは逆効果。真正銘何もしないで勝手に育つのは姉のような凄まじい才能を持つ者だけだ。

ガーデンに帰還した後は着替えとシャワーを済ませ気になる事があつた為、生徒会室に向かう

軽くドアをノックすると

「どうぞー」

「入りまーす」

中から秋日の声が聞こえた為そのまま入る

「あれ？他の皆は？」

「会議と打ち合わせが終つて解散したから後は自由に・悠夏は高嶺の所で藤乃と鈴夢は自室に戻つたわ」

「秋日さんは？」

「私も片付けて部屋に戻るところ」

「聞きたいことや何やらあつたんですけど・後日にします？」

「・構わないわ。せっかく来てくれたんだし」

座るように進められソファに腰掛ける

いつもは他の面々もいる為、レギオンの異なる秋日と生徒会室で二人と言うは珍しい形となる。

「それで、何の用かしら？防音対策もされてるから、何でもいいわよ」
生徒会室は会議の内容の盗み聞き防止の為それなりの物が用意さ

れている。

どんな事でも話せるし相談も自由ということだ。

「あー、そのグランエプレの事なんですけど…どうするつもりですか？」
「どうする…って言うのは？」

「春先ならともかく時期も時期です。積み重ねた実績も人脈もあります。介入のやり方次第ではグランエプレ内外からの反発と秋日さん達生徒会の立場にも影響が出るのでは？」

これが結成直後なら何も問題は無かった。だが半年以上も経ち多くの戦いで積み上げた実績と同盟レギオンや防衛構想会議後の共闘や叶星と高嶺の二人のおかげもあり築けた多くの人脈。校内の支持者に加え校外でも有力なガーデンやリリイが味方にいる中での介入。神庭の中の問題とはいえ仲間が不利益な事になった時、守る為と言い秋日達に牙を向く可能性は十分にあると考えている

「私達の心配をしてくれるの？」

「個人的な恨みや嫉妬での解散ならともかく大義はそちらにありますから…何やかんや世話にもなってますし」

秋日の個人的な理由で動くならば協力などしなかった。だがそうではない。神庭の為、リリイの為に動くからこそ自身も協力した。動いた結果秋日達が不利益を被るのだけは避けたいというのが本心だ。
「詳細が決まったら一足先に教えるけど…まあ、悪いようにはしないわ。私としても、ガーデンとしても影響は最少限度に留めておきたいっていう方針で一致してるから…」

その辺りはもう考えているようだ。話を聞くに数人の入れ替えで済ますつもりかもしれない：影響を少なくということは叶星と高嶺の残留は既定路線だろう。ここを引き離すと凄まじい影響が出るのは目に見えている。二人を残すだけなら動いた意味は無いと思うが何か考えがあるのだろうか

「そうですか…あっ、私は情け無用でやっちゃって良いですからね？
仮に外されても恨み有りませんから」

「…残りたくないの？」

「それを決めるのは私じゃ無くて貴方達です。」

トップレギオン制とはそういう物だ。リリイが自由に組むのではなく、ガーデン、生徒会が何らかの意図や目的が有り集めた集団。相応しくないと判断したら外されるのは当たり前だ

下手に泣き落としてねじ込んで貰うなんて事は出来ないし、選ばれたいなら努力して認められれば良いだけ。マジ不足とか才能不足みたいな曖昧で努力ではどうしようもない理由やレギオンメンバーや出る戦場との相性の問題で無ければ何とでもなるのだ。

「私達が決めたら切り捨てられるのすら受け入れるの？」

「今回外されたって生きてりゃ機会は有ります。這い上がるだけですよ。」

生きてさえいればまた機会は有るのだ。トップレギオンから外された事でどうなるのかの予想はつかない。見向きされなくなるのか、チャンスとばかりに他のリリイから引つ張りだこになるのか。それがきっかけで生まれる縁もあるだろう。強くなり返り咲けばいいだけなのだから

「周りは知りませんが……たかだか一回程度トップレギオンから外された位で折れると思っちゃった私？」

「……」

躊躇いも無く秋日に聞くが彼女は目を点にしたまま。

「……えっ、マジで思ってたんです？」

メンタル弱いとでも思われていたのだろうか。荒くれ者が集まる落ちこぼれガーデンかつ軍隊式の校風で生き残ったのだからその程度の耐性はあると思っちゃって欲しかった

「い、いえ。そんな事無いわ。ただ貴方みたいな事を言う子始めてみたから……」

我に返ったのか一呼吸置くとそのように告げる

「鎌倉は分からないけど……御三家でもそれ以外でもトップレギオンから……いえ高い地位から落ちたり失敗したらそれがきっかけで絶望して不調に陥る……なんてリリイが大半なのよ？あなたみたいに生きてりゃ良いし這い上がるなんて言う子……初めて見たから」

「持つてる側じゃないから私……上手く行かない事が当たり前で失敗

も多かったんで：その度に教導官や上級生から怒られてましたし：」
生憎と彼女は高い地位の人物ではないし持つてはいない。落ちた時の気持ちは分かるとはいえ絶望する意味が分からないのだ：海瀛に限らず相模のリリイもとはそういう集まりなのも大きい。

「と、とにかく！編成は決まったら一足先に伝えるからそれまではグランエプレとして活動する事！他は?!」

この話はこれで終わりと云わんばかりの言い方、ならば次へと移行する

「ここ最近：：そうですね：私達がルドビコ女学院に駐留してから帰還するまでのヒュージの出現頻度とその際の気象データって有ります？」

「：ええ、ええ：あるけど：：どうして?」

「いえ、こっちは気になることがあるんで：憶測で物事は：トツプレギオンと言えど機密情報です?」

秋日が言葉を詰まらせた事に疑問を覚えつつもこちらも曖昧な答えしか返せない。あくまでも薫の言葉と自身の記憶による憶測だ。だがガーデントップレベルの機密であるならば伏せられるのも納得だ。

「：明後日、校長室に来て頂戴：話はそこで。」

「え?校長室：ですか?」

「ええ。申し訳ないけど貴方にはもう一仕事担ってもらおうわ」

「(あ、厄ネタだこれ：)」

秋日は覚悟を決めたのか海瀛に校長室に来るように告げる。普段ならば行かないような所への呼び出しはとんでもない案件という証拠だ。余計な事を言わずに独自調査をすれば良かったかと思ってしまう

「で、それで終わりかしら?」

「あー、後最後にもう一つだけ：すっごい個人的な思いもあるんですけど：：良いです?」

「時間も時間だしこれで終わりよ」

日もくれてきている、秋日を引き止めるのも申し訳ないためこれが

最後だ

「その：エレンスゲの新しくきた教頭について：どう思います？」

「新しく来た？良識的な先生って評判じゃない」

何をとやわんばかりの回答だ。

「私もヘルヴォルの面々から聞いてますし：他のウケも良いんでしようけど：なーんか胡散臭いなって」

「今のヘルヴォルが良識的なのは誰もが知ってる事よ？ガーデン内に理解者が増えるのだって良いことじゃない」

「いや、本当に良識なら教頭が来る前に校長が付いてるはずなんですよね：」

秋日だからこそ言える話だ。ヘルヴォルや教頭を信じ切っているグランエプレや一柳隊には言えない内容

「校長先生？どうして？」

「いや、今のエレンスゲの校長って：」

秋日の反応に戸惑ったのは海瀧だ。自分達は教導官経由や提携先の責任者と言う事で知った話だし相模内では常識の事。東京内では更に有名な話だと思っていた。勿論時が進むに連れ忘れられた、姉を筆頭とした数多くのリリイの出現で埋もれた：となったとしても近隣の校長の経歴を知らない理由にはならない。過去のエレンスゲ最大のやらかし後に新しく赴任した校長の名前と知っている限りの経歴を秋日に話す

「なんですって!?!それは本当なの？」

「ええ。まあ、元が元なので母校から名前を抹消されてる：もしくは伏せられてる可能性は高いですけど：事実ですよ」

「名前自体は知っているけれど経歴は：初めて知ったわ：海瀧さんは何処でそれを？」

「いえ、姉妹校提携してるんで普通に：」

「そうだったわね：」

提携先の校長の名前や経歴など簡単に知る事が出来る。まあ、イルマ出身の教導官がいたというのも大きい。ガーデンは違えど教導官から見て後輩の代にあたり普通に面識もあるそうだ。

「つて事を考えると態々教頭を新しく担当させる必要ないんですよ。表立って動けないならそれこそ校長の息のかかった教導官を担当させて春先から影でサポートすりゃいいだけなんで…」

「その話が本当なら校長先生が表立ってサポートは出来なくとも影でサポートすればいいだけの話：新しく赴任してきた教頭先生に担当させる必要も無いわね…」

表立っての行動が無理でもサポートの仕方などいくらでも。新しく来た人物に担当させる必要はない。そんな露骨な事をすれば経営元から校長が怪しいとアホでも気がつく。：良識的で優しく、頼れる大人：だが随所に不審な点が目立つ、それが海濱から見たエレンスゲ教頭だ。ガーデン改革を口にする一葉の口から出てくるのは常に新しく来た教頭。一度も校長の名前が出てこないのも引つかかる。

「で、そんな怪しい教頭が背後にいるヘルヴォルと同盟関係そのままに友好的に行っているいいですかね？襲撃されたラボも何の研究やっていたか分からず仕舞いですし…」

校長ならば教頭の経歴を知っていたとしてもおかしくはない。担当させるということは信頼に足る人物ということ：もしくは自身ではなく経営元からの指示でそうせざるを得なかった等の理由はあるがどちらにせよエレンスゲの内情を知る術も無い神庭がこのままでいいのかという懸念だ。先の襲撃を受けたラボがなんの研究をしていたのか：それさえ分かれば良いがそれも分からない

「現状、エレンスゲやその背後が神庭に何かしてきた訳では無いわ：今の話も決定的な証拠がない以上こちらから動く事は出来ない」

「ですよ…」

疑わしきは罰せずという言葉も有るぐらいだ。今の情報だけで同盟解消やエレンスゲのリリイとの接触禁止など出来るはずがない：

「でも、警戒する事なら出来る。展示会に限らず普段からの警備の見直しを含めた対策をするわ」

「仕事、増やしちゃいました？」

「いいえ。寧ろ知れて良かった：私達は基本的に萩窪内での活動だけ

ら外の状況は報告や人聞きに頼るしか無いから：それにこの話も海瀧さんだから聞けたのよ」

叶星や高嶺に限らずグランエプレの面々に一柳隊、下手すればあの場にいた全員が完全に教頭を信じ切っている。御台場や百合ヶ丘、崩壊したルドビコ女学院ならばともかくガーデンの規模も立ち位置も違う神庭は一緒な事など出来ない

出来る限りの事や対策を地道にしていくなか無いのだ。本当ならば海瀧よりも先に動くのは知識もある叶星と高嶺だがヘルヴォルや教頭を疑いもしない。何も知らないまま交流し、知らぬうちに道を踏み外した、なんて事を想像したら恐ろしくもなる

彼女がこの話を持ってこなければ本当に知る術が無かったのだ

「でも：良いの？ エレンスゲは相模の提携先だし顔見知りも多いんですよ？」

「二葉含め同期、上級生に顔見知りはいますけど今の私は神庭のリリースです。：それに相模もエレンスゲは胡散臭いって裏じゃ言ってますから」

知りあいがいれどそれとこれは話が別、自分達の所属先の為に動くのは当たり前：相模女子としてもそこまでエレンスゲを信じてはいない。個人的に信じるに値する者はいるが組織としては：というのが大半、次ふざけた事して自分達の立ち位置脅かすなら解消なんて事を言うリリースや派閥もあるぐらいだ。

「じゃあ私はそろそろ戻ります

色々とありがとうございました」

席を立ち、一礼。そのまま生徒会室を後にする

残ったのは秋日一人、

「私と鈴夢の事：話すべきだったかしら：」

話せばきつと彼女は力になってくれるし己の能力で出来る限り動いてくれるだろうと秋日は思う。それこそ相模女子のルートから動向だって仕入れると思ってしまうし自身が頼めばそれ以上の危ない橋も仕事と割り切り渡る。春先からの協力だって本当なら拒否をしてもいいのに受け容れ、仕事をしてくれた。そしてこの後にも大仕事

を任せる事を考えたならこれ以上ガーデンにとって都合の良い駒として扱う事を秋日は望まない

本人としては上等だとしても、だ

「年下の信頼できる部下って彼女みたいな事を言うのかしら：」

心さえ開いてくれればこれ程頼れる人物はいないのかもしれないし、それすら出来ていない叶星と高嶺に呆れもする。持つものと持たざるものの認識と意識の差を差し引いても、だ

そんな事を思いながら秋日も生徒会室を後にする

第78話

あの日から2日が経過しこの日は秋日との約束の日。この間もヒュージとの戦闘と悪天候が続く。天気予報では今日は1日快晴と言われているが、この後どうなるかの予想はつかない

そんな中で海瀉は校長室に向かう。流石に怪しまれると思いきやそんな事は無かった

「(テストしてらつて事がカモフラージュになった?)」

自身が新型機のテストをしている事があつという間に広まり、教官や生徒会に呼び出されてもその後の報告やユグドラシル社へ報告する日程の打ち合わせ程度の認識になっているのだろう

校長室に入るとそこには

校長と教官数名に秋日、そして藤乃がいた。

「秋日さん?この件の取り扱いは慎重に、限られた人数で対応を考える方針と言ったはずですが?」

「彼女は私達が任命したトップレギオンの一員です。資格は十分に満たしています」

どうやらかなりの重要案件。ガーデン内でもごく一部の人物にしか知らない案件のようだ。リレイでは秋日と藤乃が該当した事を海瀉は初めて知る。自分は1年生なので該当者していなかったのは十分承知していた。

自分が来たことは大人達としては想定外だったのだろうか

「藤乃さんも同意見ですか?」

「ええ。トップレギオンの中では一番信用の置けるリレイだと思います」

「(いや、本当に何の案件??)」

相当な重要案件だと海瀉は身構える。信用されて嬉しくない訳では無いがそこまでの案件を抱えている事に警戒する。

二人の意見を聞いた後に校長が海瀉に対し

「ここ最近の異常気象に比例したヒュージ出現頻度の爆発的な増加:

私達はこれをヒュージネストの発生ではないかと疑っています」

その言葉にやはり、といった表情になる。多少の驚きや動揺はあるが想定範囲無いだ

ヒュージネスト、言わばヒュージの拠点。ボスとなるヒュージが存在しその格付けはギガント級かその上のアルトラ級のみ。ネストの規模もボスとなるヒュージの強さも差があれば何処も桁違いの強さと攻略の難易度を誇る

「驚かないのですか？」

「聞かない話じゃないです。気象データと現地の話をかけ合わせたら兆候があった：なんてケースも有りますから。」

相模時代に習った事の一つだ。あくまでも一例だがヒュージネスト発生の兆候として季節外れの大雨や降雪といった異常気象、ヒュージ出現頻度の急激な増加が上げられる

「まあ、^{萩窪}ココで言うのはネスト発生の条件を考えると驚きますが：無ければ作るか自分達に対応できるように進化しちやえばいいだけですよ。」

一般的に言われているのはヒュージネストは海や湖、池など水辺に作られるとなっており萩窪ではその条件は満たしてない：が、無ければ何らかの手段で水辺を作るか水辺でなくてもネストを作れるように自分達が進化、成長すれば良いというのが海漓の考えだ。

「あくまでも可能性の、話ですよ」

「(楽観視してるなあ...)」

あくまでも可能性でこの後もデータ集めは継続していくのは分かっている。が随分と楽観視して居るような気配が有るのだ。

「(落ち着け、私)」

言いたいことは沢山ある。だがその言葉使いには気をつけなければならぬ。相手は大人、リリイとして見たとしてもトッププレギオンとはえ末端に過ぎない自分達に対し相手はガーデンよ上層部だ。相応の立ち振舞いというのがある

「可能性という事は分かりました。それで神庭としてはどのような対応をするおつもりですか？」

秋日との話は間違いなく生徒会と上層部だけのトップシークレット、知らない振りをしなければならぬ。知っていると言う立ち振舞は第三者への情報漏洩となり秋日達、生徒会室の信用が落ちてしまう「引き続き情報収集を行っていきます」

：その上で生徒会と対応を協議していく形となります。天野さんにも本間さん、石塚さんと協力し情報収集を行って貰いますがこの話はトップシークレット。くれぐれも外部に漏れないようお願いいたします」

日常生活と並行しながら本格的に情報を集めていくのだろう。情報収集の要員と手段は多い事に越した事はない

本当ならばこの後に控えている展示会も来校者の安全を第一に考えるならば今からでも中止するのが最善なのだろうが、急な中止は余計な動揺と憶測を呼び、上級生の進路も考えると簡単に中止する訳にもいかないのだろう。

「・ネストが発生したとしてどのような方針で戦い勝つもりですが？」

これは彼女が一番知りたい事。百合ヶ丘やメルクリウスのように持ち前の才能と勢いで都合よく攻略できるほどネストの撃破は甘くない。神庭のリリーの質の格差を考えてもそれは明白。

どういう作戦を立て、どのようにリリーを運用し戦い勝つのが非常に重要となる。

「それは…」

「(えっ、何も考えてない？嘘だろ!?)」

勿論现阶段で未確定とはいえ万が一に備えた仮の案は練っていないければならない段階だ。

にも関わらず校長や教導官、秋日さえも言葉に詰まってしまっている

方針で戦う・最終的に攻略し勝つ事が目的ならば、現時点でどのように戦い攻略するのかを決めて置かなければならないのだ

「攻略が容易でない事は十分わかっています。ですがネストを潰す事を前提とした時に、成長仕切る前に潰すとか、他校からの増援である

程度の頭数揃えて潰す、ヒュージからの攻勢に対しカウンターで潰す、ネストを包囲してすり潰すとか大雑把で良いんですけど…」

今のだって彼女が大雑把に思いついた一例に過ぎない。具体的にどうして行くのかは集められた情報を基に詰めていく必要がある：が、それすらも考えていないと言う事はガーデンとしてはネストが発生しヒュージの攻勢が本格的に始まってようやく方針を決めるつもりだったのだろうか。規模によっては撤退しなければならぬ事を考えてもある程度の方針は決めていなければならない筈だ

彼女も校風が違う事は分かっているが組織の上層部としてやる事はやって欲しいというのが本音だ

「最低限、どう戦うかの方針は私達で立てて欲しいし…」と

「はい。勿論協力は惜しみません。ですが私に出来るのはあくまでも手助けです」

当たり前の話だ。生徒会や大人達はその為にいる。自分は末端として正確な情報を集め渡すまでが役目。方針を決め、指示を出すのは生徒会や上層部だ

「方針を立てる為にも、私達の働きは大事ですよ」
「分かっています」

起きたことを責めるつもりなど彼女にはない。むしろ知れてよかったと前向きに捉えるだろう。

作戦の他にも備えるべき事、考えなければならない事は多い。

ある程度話しを終えた事も有りこの場は解散、各々校長室をでる

「(ネスト：か。)」

相模女子出身の彼女としても因縁のある言葉。勝てるかどうかの不安もあるがそれ以上に不安な事が彼女にはある

「(暴走するリリイがどれ位出るのか全く予想出来ない…)」

上が作戦を練り、指示を出そうとも肝心のリリイがその通りに動いてくれないければ意味がない。そして、神庭に限らずストレスに耐える為の訓練を日頃からしていないガーデンではこの手の有事の際に正義感から指示を聞かずに暴走するリリイが確実に出る。その後始末の為にまともな判断を出来る者が負傷するなんて事もあるぐらいだ

特に最悪なのは方針をガーデンの方針を無視し勝手にネストを刺激するような攻撃を行う事。

「シヨックでした?」

「おっと・藤乃さんですか」

背中を軽く叩かれ、振り向くと藤乃が立っていた。こちらを追いかけてきたのだろう

「都内も物騒ですからね・まあ、そう言うことかなと」

「あり得ない話では有りませぬね」

今年に入って都内で発生する異変の数々。一つ一つも去ることながら、その全てがヒュージにとって有利に働いてしまっているのは確か。天敵リライの数と質が落ちた事で活動範囲が広がればドサクサに紛れ萩窪に強力な個体が現れても不思議ではない

「こうして二人つきりになった訳なので、海漓ちゃんに一つ聞いてみたいことがありますて」
「?」

廊下で歩くのを二人つきりと言って良いのかは疑問だが、あえて黙り彼女の話聞く。

「海漓ちゃんって夢とか目標ってあります?」

「夢や目標……そうですね」

一呼吸置く、海漓の場合、この質問に関してどう答えるかなど決まりきっている。躊躇うことなど何も無い

「生きる事、死なない事……ですね」

彼女に限らず10代の少女が武器を持ち戦う以上持っていないければならない夢であり、目標だ。だが自分の常識は他者の非常識となってしまうのも世の中だ。理解して貰おうとは思っていない

名門のエリートはともかく彼女にとってヒュージとの戦いは文字通り命がけだ。生きたいと、死にたくないを掲げるのは当然だろう。悲しい事にこれを言うと大半は臆病者と罵って来るのは分かりきっている為めつたに口に出すことは無い

藤乃に話したのは、単に聞かれたのと、性格からして罵倒はして来ないだろうという予想だ。これが百合ヶ丘や叶星達なら絶対に言わ

なかった

「もつと女の子らしい夢を持てれば良かったんですけどね：それだつて結局生きなきゃ叶えられませんし」

お金持ちになる事やお花屋さんにケーキ屋さん。素敵なお嫁さんになる事や大切な人と一緒に過ごす。そんな誰も見るとたり前の夢も生きなければ叶える事など出来やしない。苦笑いし、頭を掻きながらそんな風に告げる

「死んでしまつたら終わり。海瀧ちゃんの言う通りですよ」

「まあ、色々と矛盾もしてるんですけどね：」

生きたいと言いなから武器を取つて戦い危険な任務や負担の多い仕事を引き受ける。今までの行動も含めて何処かでは矛盾している所があるかもしれないのは十分承知している。死にたくないならリイを辞めて守つて貰う立場になれば良い。程々にこなし危険な任務から遠ざかり。それこそ神庭ならば出撃拒否をして逃げる事だつて出来るが彼女はしない。トップレギオンとして前線で戦い続け、それでも尚、生きる事、死なない事を掲げるのだ

『リイにとつての強さとは力じゃなくて生きようとする意志』なんという風に教わつて来ましたし」

リイとして活動する以上、生きたいならば強くならなければならぬし戦わなければならぬのだから当然といえば当然の事だ。

死ぬ為に戦うよりも生きる為に戦つたほうが良いに決まっている。そして

『他人に己の意志や夢を委ねるな』なんてのも言われましたね」

これも焼き付いている言葉。意志も夢も自分自身が抱くからこそ意味のある物で誰かに手助けをしてもらう事はあつたとしても守つてもらふ事や委ねたりしては意味の無いガラクタだと。

「相模時代の先生ですか？」

「ええ。中々に強烈ですよね？」

言う事も指導も中々に強烈だった。訓練が終われば面倒見の良さもある為、彼女達としては良い恩師のだが、世間一般のリイからすれば悪魔や鬼と言われるかもしれない。落ちこぼれの荒くれ者を

教えるのだからあの位は必要なのだろう。本人曰く『イルマ時代との違いは訓練時の言葉遣いだけ』だそうだ

「ある意味、今の私を形作ったと言うか：まあ、言葉の影響は受けたんだろうなあつてのは：」

中等部に入学し3年間、揉まれ、しごかれここまで来たのだ。本質は変わらなくとも行動の根本にあるのは相模時代の出来事であり指導だ。これが他のガーデンならばまた違っていたのだろう。生きていたかは別として

「夢には触れないで欲しいって思ってたりします？」

「いや、誰かと協力して叶えたり、叶える為の手助けは全然有りです。守らないでくれただけです。一人で出来ることなんて限られてますし」

彼女の場合では一人でヒュージと戦い生き抜くなんてまず無理な話。仲間と協力して戦い、知恵を出し合い、指示に従わせながらヒュージを殲滅し生還するしか生きる術は無い。

勝手に戦いから遠ざけて守った気にならないでくれ、と言うことだ「そもそも自分の描いた夢すら他人に守って貰わなきゃ叶えられない、描け無いなんてダサいですよ」

笑いながら藤乃に語りかける。いつ死ぬか分からないのはリリイに限った話ではない。事故や病などヒュージ以外で命を落す可能性だってあるのだ。

「そんな事を言うのは海瀉ちゃんが始めてですよ」

「あつ、引きました？」

「いえ・驚いただけです。」

藤乃に不快な思いをさせたかもしれないと感じたが、それはなかったようだ。彼女としては本当に驚いただけ。こう言う話をして少しだけ海瀉の事をしれたのは収穫という思いもあるだろう。夢を聞いて死にたくないと言われた時点で驚かされたが、その後の話にも驚かされっぱなしだ

「あつ、一年生の寮はこっち側なんでここでお開きですね、じゃあまた！」

「はい。」

歩いていくうちに分かれ道へと到着

寮も学年別に分かれており、海濱は一年生の寮へと帰っていく

明日から戦いと任務の日々が始まる前のほんの少しの時間はあつ
という間に過ぎていく

第79話

ネストの調査を行いつつ展示会の準備と出現するヒュージへの対応に追われている日々、この日も朝から展示会の準備を行っていたのだが

「高嶺さん、日に日に顔色悪くなってない？」

途中、紅巴の提案で自分達も叶星と高嶺の作品の制作を手伝う事になりレギオンとして展示会に挑む事になったが負担は減らない。それもそのはず、いくら負担を減らしてもヒュージの出現で叶星と高嶺はそれ以上の負担を進んでかけていつているのだ。回復が間に合わない影響は当然出ている。経験者ならば誰もが気づくレベルだ

本来ならば適度に休養を挟む必要があるのだがそんなの知らんと言わんばかりの根性運用だ

「気付かないわけ無いんだけどなあ：本当に高嶺さんのこと大切なのか？」

今の海瀆には何の権限も無いとは言えこのままの運用では死人が出ても可笑しくないレベル。無視という訳にはいかない

そして、高嶺の異変を見て見ぬふりをしている叶星にも疑惑の目が向けられる。

あくまでも天野海瀆という人間の価値観の話になってしまうが、無理な起用をし、過度な負担をかけ、身と心をすり潰させる行為を大切な人に向けるという考えそのものが理解できないのだ。無論、才能あるエリート達からすれば叶星がそんな事をしているのは自分達が弱いからと言われてしまえばそこでお終い、反論も出来ない。

言えたとしても『そんな事言うなら他の強いガーデン行くか御台場残れ』位だ

「叶星さん、少しの間メンバーを順番に休ませませんか？」

「急にどうしたの？」

展示会に向けた作業中に話すことではないのも十分理解している。

相模では受け入れられたが神庭で、更に言うなら御台場上がり of 叶星がどう言うリアクションをするのかも分からない中で海漓は声を上げる

威圧、命令ではなく下の者が上の者に提案するように落ち着いて語りかける

「最近ずーっと出ずっぱり。ヒュージの出現が落ち着く気配も無し：私含め皆肉体的にも、精神的にも疲れてると思うんですよ、自覚あるかは分からないですけど」

連戦で消耗するのは肉体だけでは無い。心も消耗する。戦闘で発生する緊張感や戦わなければならぬ事への苛立ちや不安。肉体はごまかせる事もあるが、精神面のごまかしは効かない。

トップレギオンである為、出撃しなければならぬ機会が多いのは彼女も十分理解している。しかし、当面の間はフルメンバーではなく本来の5名で出撃し残り2名は完全オフ。例えヒュージが現れたとしても呼ばない形にしたいのが彼女の本音だ。

「姫歌は全然戦えるわよ!!」

「僕も!!」

「わ、私もです!」

話を聞いた姫歌達は何言ってるんだと言わんばかりの非難の声。

そんな声は知らんとはばかりに彼女は無視、叶星の反応を待つ

海漓も根性そのものは大切だという考えはある。この状況が体力、精神面の強化を目的とした訓練期間内での発言ならば彼女が悪い。だがこれは訓練ではなく実戦。対策が遅れたら取り返しのつかない事になる。

根性も必要ではあるが、あくまでも奥の手であり始めからそれを前提とした無茶な運用は避けるべきと教わってきた。

ちなみに相模で根性前提の運用したら『私等疲れ知らずのロボットじゃねえ!』と批判される

「必要無いと思うわ」

「(ですよねー)」

ここまでは想定内。御台場時代に『成功は苦しみからこそ得られ

る』という校風の元強い戦士、優秀なりリイとして育てられた叶星と高嶺からすれば今回の件や苦しみも成功の為と解釈するだろう

「もう苦しませる事が目的になってんじゃない？」

リイとしての思考以外は比較的まとも、分野によっては年相応の海瀉から見た御台場の校風の解釈は単に日頃の訓練サボるな、だ。ヒュージとの戦いに生き残るための訓練で厳しいのは当然、楽して勝てる程戦いは甘くない。だが今回のような消耗やその先に起こり得る結末と生まれるであろう悲しみと苦しみなど避けなければならぬ事。

「海瀉ちゃんが、休みたいって言うなら止めはしないわ。でも、それを皆に強制する事は違うんじゃないかしら？」

叶星の考えとして、神庭では出撃選択性が認められているのだから以前のように理由をつけて出撃拒否をする事は可能であり止める権限は持たない。休みたいなら一人で休め、私達を巻き込むなど言いたくなる気持ちがあるのだろうか

「流石に他の子達を言い訳に使うのは良くないわ」

高嶺からも非難の声が上がる。先の海瀉の言い方では休みたい言い訳として姫歌達を利用したと見られたとしても不思議ではない。まさか自分^{高嶺}が対象など考えても居ないだろう

「言い訳って…いや、まあ、そう捉えられても仕方が無い…ですよね」
強い戦士として、妥協を許さず、なんて教育を受けてきたとしたら海瀉の言ったことは悪だ。

彼女は単に現状の起用が招く損害を防ぐための策の提案のつもりだったが全く響かない。

「海瀉は休まなきゃいけないぐらい疲れてるわけ？」

なら無理に止めはしないけど、戦えるなら戦いなさいよ！」

言い訳に使われたと思っている姫歌としては面白くないだろう。

海瀉には姫歌達の体の事など分からない。本当に疲れていないのかもしれないし無理しているのかもしれない。

「私が休んだら定盛ちゃん達も順番に休む？」

「だからなんで姫歌達を引き合いに出すの!？」

「姫歌はまだ戦えるの!!」

「それは分かったって…」

一人が休みコンディションを整えても他が休まずに消耗すればその分の穴埋めは海瀉が、一人でやる羽目になるのだ。他も順番に休んでくれないければ意味がないのだ

「(平行線だな…) だったら先に私休んで良い?」

話は平行線、どちらかが折れないと終わらない話だが姫歌が折れない以上、海瀉が折れるしか無い。妥協点を見出そうにも根性論全開の相手に対し落とし所が見当たらないのだ。

方やレギオンのN.O. 2で方や下っ端、どちらの方針を優先するかなど馬鹿でもわかる事であり、立場の差を理解できない海瀉ではない。

叶星か高嶺が間に入り妥協点を提案するのが最善ではあるがこの二人も根性論者なのだからそれも不可能。妥協という言葉自体が強い戦士として育てられた叶星達とすれば海瀉の価値観は受け入れられないのもある

「そもそも海瀉さん、そんなに疲れていたの?」

「疲れは有りますよ今すぐぶっ倒れる事は無いでしょうし、出る言うなら出ますけど?」

連戦と極秘の調査続きの日々だ。疲れないわけがない。中等部から鍛えられた為、今にも倒れそうなんて事はない。

「だったら、出るべきだと思うわ」

神庭が今どんな状況か分からない訳じゃ無いでしょう? 少しかれたからって休んでられる状況じゃ無い事ぐらい分かるわよね?」

「(何を焦ってるんだこの人?)」

高嶺の言う事も分かっている: だがおかしな点もある。今のグランエプレは特例だが御三家以外は基本的にレギオンは5名で運用し、ラージ級までのヒュージに対応するのが任務だ。ギガント級以上では9人ないし8人でのノインヴェルト戦術やそれに準ずる連携技でしか倒す事が出来ず仮に出撃したら神庭や御三家からの増援を待つしか無い

悠夏の助っ人がある現状を踏まえると2人までなら休ませる事が可能だ。

皆が言うように数多の戦いを乗り越え強くなったと言いながら5人編成に変えたらラージ級までのヒュージを余裕で倒せないなど海漓からすれば笑い話。

例の件ネストを抜きにしても最近のペースも神庭にしては多いが鎌倉では普通なのだ。恐らく、御三家も。

叶星と高嶺がこの程度で取り乱したり慌てる意味が彼女には分からない。

「強くなったって言いながら御三家以外の基準である5人編成に戻したら満足にヒュージ倒せないとか思ってるんです?」

疲れが溜まって普段通りの動きや判断が出来ないリイなんて邪魔でしか無いですよ?」

AZで突っ込んでく高嶺さんならこの位の事は分かりますよね?」
「そんな事は分かってるわ。

でも苦しい今だからこそ頑張るべきよ。ここで音を上げる様なリイやレギオンに成長や未来なんて無いわ」

「(待って、これ私がおかしいの?)」

単に疲れ溜まってから休ませようって話だよね?」

ヒュージ相手に負けを認めたかのような言いぶりだが海漓は間を開けようと提案しただけだ。ヒュージとの戦いを諦める、音を上げたつもりなど微塵もない。ここまで否定されたり、非難され叱責されると自分がすべて間違っていると錯覚して、彼女達への怒りよりも先に自身への疑念が湧いてくる

神庭は疲労を考慮し休ませるような運用をしたら成長と未来が消える恐ろしいガーデンなんて思ってしまう

結局の所、この衝突の根本的な原因は価値観の違いに加え才能と実績の有無だ。それこそ海漓がアールヴヘイムに所属し通用するような才能と実績があれば聞き入れたかもしれないがそんな才能はない。自分達に劣る雑魚が何偉そうにしてんだと思われても仕方がないのだ。姫歌達からしても中等部経験者の中では最弱と見られている可

能性すらある。エリート出身とエリートに囲まれて育てばそうなくても仕方が無い。

「分かりました。そこまで言うならば仕方ありません。成長や未来が消えてほしく無いですし前言撤回。出ます出ます」

「苦しくて逃げ出したくなる気持ちも分かるけど、得られるものも沢山有る：だから皆と一緒に乗り越えましょう？」

「そうですね、そうします。(私逃げたいって言ってないんだけど!?)」

叶星は海瀛がこんな事を言ったのは先の見えない戦いに心が折れそうになつてゐるような判断をしたのだろうが、彼女の心は折れていない。疲れが溜まつてゐるから順番に休ませようと言っただけ。

「皆、少し休憩しましょうか。」

一旦仕切り直したい狙いも有るのだろう。叶星の提案に異議を唱える者はおらず、作業を中断する

中断と同時に海瀛は控室を後にする。この場においてもまた再燃する可能性が十分にあり、距離を取り頭を冷やす目的も彼女にはある
「(こりやどうにもならないな...)」

先の会話で十分に分からされた事だ。価値観の違い。生きる為に策を練り、リスク管理を行い、リリイを正しく運用する必要性を分かっている海瀛とそれら全てを必要ないと切り捨て、才能と根性で乗り越えられると考えている叶星達。

共に戦うチームとして考えるならば価値観の違う人間など不穏分子でしかない。彼女自身裏で生徒会と仲良くしている為、不穏分子というのも叶星達の視線で考えるならば強ち嘘でもないのも辛いところだ

リリイに限った話ではないが初心者と言うのは何も知らない雛鳥と同じで良くも悪くも影響を受けやすい。それは海瀛も良く分かっている。彼女だって相模女子でリリイになり様々な事を経験した結果として今現在に至ったのであって、他のガーデンに通っていたならまた違う価値観を持っていたに違いない

姫歌達にしてみれば何も知らない状態で神庭に入学しトッププレギオンに選ばれ叶星と高嶺と出会い、一柳隊、ヘルヴォルとの同盟結成

から新宿事変を経てルドビコ女学院への駐留、御台場との共闘で多くの出会いと戦いを経験し培われた価値観と言うのはどうしても名門寄りになってしまう。彼女達の才能は海瀉とは比べ物にならない程に恵まれ、経験者ならば実力と実績も十分にある。姫歌達に思うことは多く有れど責める気にはならないのだ。

「(無いのは：私だけ：なんだよな)」

才能無い奴が才能あるエリートのような立ち振る舞いしたら死ぬだけだと伝えようにもエリートの立ち振舞で成功している現状では意味がない。失敗と言つても戦場での失敗は良くて負傷、悪ければ命を落とすのだから海瀉は一人になったとしても最悪を避ける為の行動をしなければならぬのも事実。

憧れの先輩から諭されない限り聞かないタイプというのも何となくだが分かる。問題なのは肝心の先輩が世代を代表する正真正銘のエリートで、そのやり方が正しいと思っっている事。

だが、そんな悩みなど関係なしに起こる事もある

「ん？」

突然窓ガラスが音を鳴らしながら揺れ始める。何事かと思いい視線を向けると、外は暗く、外では様々なものが宙を待っていることから突風が吹き荒れている事が分かる。先程までは快晴だったにも関わらず：だ

そしてこの後に起きる事などここ最近の傾向からしてと一つしか無い

「ヒュージ出現：ー！」

ヒュージの出現情報。当然自分達も出撃する事になる。

途中雨が降ることを想定し雨衣を来て出撃、靴も雨天用に履き替える。

現場に向かう途中、悠夏も合流。7名で対処に当たる

「スモールばっか？」

「ガーデンからの情報だね。：数はかなり多いみたいだけど」

「どの位？1万とかじゃないでしょ？」

万を超すような数が突然出てきたらそれこそネストが完成したレ

ベル。現時点ではありてない事は調査している彼女が良く分かっている。

「そんな数出てくる訳無いでしょ!? ガーデンからの情報だと50位かな?」

「どうせケイブもある事考えたら多く見積もっても70は覚悟しておかなきゃ駄目・か。」

数だけなら多いがこちらは7名。1人10体倒す事をノルマにすればすぐに終わる。実際は体力やマジ、CHARMの消耗やヒュージの強さもあるため簡単な事ではない。ヒュージ側の増援や想定外の事態にも備えなければならぬため10体をゴールと決めつけフルパワーで戦えないのは言うまでもない。

「あー、そうだケイブも有るんだよね・早めに潰さないと厄介かも・」
「スモールしか居ない内に潰しておかないとね」

ケイブから追加のミドル級やラージ級が出現したらかなり厄介な事になるのは理解している。理想としてはヒュージ発生源のケイブを早々に潰したい所だ。

こちらは疲労も溜まっている。今まで以上に厳しい戦いになると思いながらも戦場へと向かうのだった。

第80話

ヒュージ出現の現場に到着したグランエプレの面々と悠夏。視界に飛び込んで来たのはヒュージの多さだ

「この多さ・皆気を引き締めていきましよう」

叶星はそう告げるといつもの様に高嶺と共に前に出ていく。

「いや、気を引き締める前に陣形とか方針を…」

スモール相手ならば隊長が指示を出さずとも自分達で考えて戦えと言うことだろう。

「姫歌達も行くわよー」

「張り切ってんな：空回りしないと良いけど…」

基本的な陣形を組まない以上各自で判断し対応するしか術は無い。ここまでの疲労も考慮するならば早々にバテる者が出て来てもおかしくはない。

不安を持ちつつも彼女は自分の持ち場へと向かい、ヒュージを相手取る

「(余り近づかないように…)」

近接特化の機体を使いながらもヒュージに近づくの嫌う理由。余計な攻撃を受けないようにする為だ。ヒュージと言うのは現状では生き物として認識されており、その攻撃方法も爪や触手で相手を貫く。もしくは切り裂く。強固な体を使った体当たりと接近戦を仕掛けてくるパターンが大半。これがレーザー級以上ならば熱線なども含まれるが大半は近接戦だ。相手の土俵に立って戦うのではなくあくまでも自分の土俵で戦いたい彼女にしてみれば近接特化の機体だとしても子機の射撃を行いながら相手と距離を取って戦うことを選ぶ。そして射撃機能の搭載されていない親機でもそれが可能：その理由は

「行けっ…!!」

親機から射出された刃。ワイヤーで繋がっているこの刃は本人の意志で自由に動かせるのだ。

縦横無尽に動く刃は変則的な動きでヒュージを攪乱し死角に回り込ませた上で切り裂いていく。そして他の個体が刃の動きに気を取られ、生じた隙を見逃す彼女ではない

左手に握った子機の射撃で隙を見せたヒュージを素早く仕留める

この一連の流れで一度に10体は撃破している。一見すると物凄く強力な武装に見えるが彼女としては手応えがない

「うーん：狭い所だと使えないな…」

あくまでもワイヤーで繋がっているから出来る事。これが木々の生い茂る山奥ではワイヤーが絡んでしまうし、萩窪のような地域での戦闘も電線や付近の住宅に注意しながらの動きになってしまい、調子に乗って使いすぎると痛い目を見る。もっと狭い路地裏ならさらに出来る事が狭まってしまう。

奇襲、不意打ちを得意とする彼女としては掴んだ感触がない。勿論便利ではあるし、手札が増えたと考える事も出来る。

「(使い所は考えなきゃな…)」

何も無い更地の様な所ならば遮るものが何もないため有効な手段となる。意図的に隙を生み出し、不意をつくことや死角に刃を飛ばし切り刻むと言った攻撃が可能だ。だが狭い所で刃に直線的な動きをさせるならばわざわざ刃を飛ばさずとも射撃で十分。勿論、弾とマジの節約を考えると便利ではあるが、それならばユーバーザインで攪乱しながら切り込めば済む話

「(応用してこれとか出来る…？本来は一人でやる物じゃ無いんだけど…)」

今度は別の使い方。本来ならば一人でやる動きではなく複数人で行う連携攻撃。スモールからラージ級までならば有効なのは相模女子時代に証明済み。

まず初めに横に広がったヒュージの群に対し刃を再度射出する：が

「(いや、駄目だ!)」

途中で刃を戻す。親機を持っているのは右手、この状態ではこの後の動きに支障が出てしまう。

「(ここは持ち替えて：！)」

ここで彼女はCHARMを持ち変える。今までは右手に親機、左手で子機だったが今度は右手に子機、左手に親機へと。

そして、同じ動作を再会

左手に持った親機から刃を接近するヒュージの群れに対し射出。それと同時に彼女は子機で射撃しながら右側に移動。走るというよりもマジを用いて地面を滑るように

「ヒュージを中心に集め、その場に固定！」

親機の刃繋がっているワイヤーでヒュージを切り裂くのではなくその場に押し止める為の楔として使用。円を描く形で移動しながらの攻撃でヒュージを中心に集める。

「火力を集中させつつ同時並行で刃を回収：！！」

子機での射撃と並行しながら刃を親機本体へと収納。集まったヒュージに対し弾丸を打ち込む。

次の動作を素早く、流れ作業のようにやる必要がある為、忙しいなんてレベルではない。本来は複数人で行う連携技。それを一人でやるのだから当たり前と言えばそれでおしまい。

「こっから止めの：！！と行きたいんだけど」

ここからは締めとなる最後の動作。一気に駆け出す：のだが彼女はそこから動かない

「スモールだし、これで終わり！！」

この一連の動作でスモール級の群れは簡単に殲滅。スモール以上であったりスモールの中でもしぶとい個体ならばこの後にもう一動作。止めとなる攻撃を加えるまでが一連の流れとなるが今回は行う前に決着がついてしまった

「それ、誰かに教わったの？叶星様じゃないよね？」

一連の動きを見ていた悠夏はヒュージを倒しつつ彼女に近づき尋ねる。叶星や高嶺ではやらないような戦い方。ならば誰か、と気になるのは当たり前

「相模時代に、ね。」

今のは消化不良だし、完全版はまた今度」

「何？続きが有るの？」

「当たり前。まあ、お楽しみに」

相模時代に教官から教わった動き。当時のイルミンシャイネスの代名詞とも言える連携技だったと言う。本来ならば現在に至るまで継承されてもおかしくはない程に協力的な連携技だが色々あつて継承されなかったと語っていた。イルマ赴任後も教え子に継承したかつたみたいだが厳しかったと語っていた

複数人での連携が基本的な運用だが教官含め当時のトップエースは単独でもこなしていたという

『当時と比べて今はCHARMの性能が格段に上がっている。コツさえ掴めば単独でこなせる』などと言っていた。

「それにしても減らないしケイブの反応も無い：どっから湧いてきた？」

「さあ…ねっ!!」

雑談は終わりとばかりに互いにヒュージを蹴散らす。

一人対複数を得意とする彼女とパワーが自慢の悠夏の倒すペースは他の者と比べても凄まじく早い。それでいて二人共マジ、スタミナのペース配分を考えながら戦っている為、まだまだ戦える…が

「(他はキツそう…かな。)」

連戦の疲れとペース配分をせずに全力で戦ってきたツケ払わされる形。そして動作にも無駄が多い。一体相手に手数を無駄に使いつ力をしよう

「流星に疲れて来ましたね」

「ヒュージいっぱいだもんね」

後衛を務める紅巴と灯莉はそんな事を漏らす。この二人に限らず誰もが感じた事…なのだが

「あーちゃん達、疲れないのかな？」

僕達よりもヒュージ沢山倒してるのに」

灯莉は今現在も変わらないペースでヒュージを倒し続けている海滴を見る

射撃と格闘を使い分ける形になってはいるがヒュージを倒すペー

スは一向に変わらず淡々と倒している。

自分達が1体倒している間に彼女は複数体を平然と倒す。疲れているはずなのだ、先の発言でも疲れたと言っていたのだから。

「疲れてもあの精度を維持できる・と言う事ですよね」

疲れの中で戦えば当然技の精度や行動そのものが鈍くなる。だが彼女達は普段通りに戦い普段通りに倒しているのだ

他は消耗し多少なりとも動きに翳りが出てきている。その中でも消耗が酷く顕著なのは高嶺と姫歌。元々ペース配分や適度に手を抜くなど知らぬと言わんばかりに常に全力で戦う高嶺と最近の気の荒さが戦いに出始めている姫歌だ、無理もない

「もう・一体・!!」

力任せにCHARMを振りかざしヒューズを斬り伏せる。常に全力で戦ってきたことで息も上がっている

「ちよ、ちよっと、無理し過ぎ!何やってるの!」

姫歌が目に入った悠夏は一度海瀧から離れ姫歌の元へと向かう。無理矢理戦っている所を見かけた以上、注意は必要だと判断したのだ
「だ、黙っててよ・」

「ここは、無理のしどころなんだから」

「それで戦場で倒れたり、やられちゃったら不味いでしょ!!」

「無理なら下がらなよ!」

悠夏の言う通りだ、先の見えない状況でペース配分を考えない戦い方をすれば必ず反動が来る。疲れて倒れ込む、無理をした結果判断が鈍りヒューズの攻撃で負傷する可能性を考えれば止めるのは至極当然だ

「海瀧みたいな生ぬるい事言ってるんじゃないわよ!」

「これ以上、叶星様と高嶺様に頼るわけには行かないのよ!!」

そう言いながら力任せ、八つ当たりのようにヒューズを叩き潰す姫歌

彼女からしたら休め、下がれと同期の経験者はこの状況でどうして生温い事しか言えないのかという怒りだ

その光景を見て驚き、何処か納得する悠夏。海瀧が何を言ったのか

は彼女は分からない。だが、分かる事もある

「(悠夏、言い方が間違ってたんだ：)」

今までの姫歌への発言に悪意など一欠片も無い。彼女としては善意の助言だ。反発されたとしてもどうにかしてあげたいと言う思いがあつた。それは彼女の為だと言う思いがあつたから

彼女の動き、海瀉の言う気性の荒さ、それらを踏まえてどう伝えれば良いのか、どうすれば届くのかそれが分からない悠夏ではない。

「あのさー！」

「何よ!!」

「叶星様と高嶺様の為になりたいならそんな所で戦ってちや駄目

貴方の魅力を最大限に発揮して輝ける場所があるわ!!」

「え?」

迂回せずに伝えたかった事をストレートに伝える。彼女が望む事とそれを叶える為の手段を

「(大分減ってきた：?)」

悠夏と分かれた海瀉は一人、大群を相手に健闘。倒した数ならば叶星と高嶺を追い越さんとする勢いだ

増援を始めとするイレギュラーを頭に入れつつも終わりが見えてきた：そう思ったのだが

「はあ?!何してんだ!」

周りを見渡す為に一度高く飛び上がり電柱の上に立つ。高い所から戦場を見渡すと高嶺が突如ラストパートと言わんばかりにペースを上げる光景が目に入る。

「(さっさと終わらせろって指示が出た?それとも高嶺さんの暴走?)」

高嶺に指示を出せる人物、その指示を素直に聞く人物など叶星しかない。消耗の激しい高嶺にサポートをかけさせる理由がない。この行動が叶星の指示ならば彼女のミス。高嶺の暴走ならば静止させる義務が彼女にはある。

「(これ不味いやつ?)」

確かに彼女のサポートとそれに煽られるようにギアを上げるグラ

ンエプレの活躍でヒュージは急激にその数を減らしていく

その中で高嶺が一瞬、ふらついたのを見逃す彼女ではない。過度な負担の反動で意識を失う典型的な兆候だ。ここまでの連戦で心身共に疲労が蓄積されている中で更に過度な負担。体が悲鳴を上げても不思議ではない

電柱から飛び降り、合流を急ぐ。だが時既に遅し。ヒュージの全滅とほぼ同時に高嶺がその場に倒れ込む

「高嶺ちゃん!!」

「高嶺姉様!!」

その中でも酷く同様するのは叶星と悠夏。

「た、高嶺様!!」

他の1年生も皆同じだ

「(呼吸はしてる・)」

海漓は冷静に近づき高嶺を観察。気を失い倒れ込んでいるが呼吸はしている。恐らくは連戦による疲労の影響だろう

「・そんな所でボサツと突っ立ってないで早くガーデンに帰りなよ。

周囲の警戒は私やっておくから」

「そんな事務的な言い方・高嶺様が心配じゃないんですか!？」

眉一つ動かさず、事務的に、言い捨てるように伝える彼女に対し流石の紅巴も否定的な事を言う。先輩が倒れたにしてはあまりにも酷いと感じたのだろう

「私が泣いて、心配して、動揺して。この状況が収まるならいくらでもやるけど?」

泣くなどは言わない。心配するなとも言っていない。だがこの場でそんな事をしても事態は何も好転しない。そもその原因は根性論や戦場で謎の暴走行為をした高嶺と静止せずに黙認した叶星だ。海漓からするならば悲しんだりするほうが難しい

現時点で必要な事は悲しみ、動揺することでは無い。戦闘が本当に終わったのかと確認する事と高嶺をガーデンの医務室に運び込み適切な処置を受けさせる事で、その為の行動をしなければならぬ。本来ならば指示を出すのは隊長の叶星、次点でサブリーダーの姫歌だ。

だが二人共動揺しまともな指示を出す気配がない

この場で黙っていたって事態は何も変わらないのだ

「人の心がない残酷な奴って思いたいならそれで結構

私からすれば現場で倒れた人間を放置して何もせず突っ立ってる連中の方がよっぽど残酷な事してると思うけどね」

出撃前に休みを入れるという提案に対しあそこまで非難した上で起こした事なのだから自業自得と言う思いもあるが言葉に出さないだけ。悠夏には無関係で、尚且つ人の身内を皆の前で馬鹿にする程彼女は腐っていない。

どのみちこうなってしまうてはグランエプレは戦闘不能。速やかにガーデンに帰還する必要がある。倒し漏らしが居ないかの再確認や急な増援への警戒を行う必要があるが現状では高嶺と叶星をガーデンへと帰還させる事が最優先。動けない者、戦意を喪失した者がいても邪魔なだけだ。

「・そうね。悠夏が高嶺姉様を背負っていくわ」

彼女の言う事が正しい事は悠夏だって分かっている。包み込むような優しさで諭すよりも背中を蹴るような言い方をしてでも人を動かし状況を打開しなければならぬという思いもある事だって理解できる

その後の動きは早かった

「高嶺姉様、すぐにガーデンに付きますからね！」

「叶星様、いきましよう。大丈夫ですよ」

悠夏が高嶺を背負い、姫歌達は泣き崩れている叶星を慎重に立ち上がらせその場を後にする。残ったのは彼女一人だけ

「さて、お仕事しますか」

ここに残ったのは事後処理の他にもう一つ。ネストの調査だ。

今回の戦闘において自分達はケイブを一切破壊していない。大群が出現した以上、必ず有ると思っていたがその予想は外れてしまった。

ならば、ヒューズはどこから来たのか。事情を知らされている海瀆からすれば答えは簡単

「(アイツら全員ネストから出撃してき个体…でもどうやって?)」

ケイブを使わず、あれだけの数の个体が出現したとなると何処かに有るネストから直接出撃してきた、と考えるのが自然だ。だが、分からない事もある

それはネストの場所とヒュージの移動方法

「(出てきたヒュージは全て歩行型、移動方法としてのケイブが無し…)」

例えば今回現れたヒュージが浮遊していたり鳥のように空を飛べる个体ならば菘窪からかなり離れた場所、もしくはネストそのものが空中にあるという事になるが、その説はない。付け足すならば先程現れたヒュージの出現時に地表に激突するような衝撃音も響かなかつた事も裏付けとなる。

「(ボスによって何らかの手段でネストを地上の何処かに隠してると考えるのが正解なんだろうけど…)」

ボスとなる个体によってネストそのものを何らかの手段で隠していると考えた場合、ヒュージがどのように現れるかが分かっている。ネストから生み出されたヒュージをケイブも使わず大量に送り込み、自分達の本拠地ネストの場所を特定させないなど至難の技…のだがヒント自体はある

「(確か悠夏ちゃんが始めて来た時に現れた个体は…確か…)」

悠夏が始めて神庭に来た時に対処した个体。その个体は地中を掘って現れていた。そうならばヒュージが現れた方向を辿っていけば移動した際に生じた痕跡がある…と思っていたのだが

「何も無い…ん?」

付近をくまなく搜索してもそのような痕跡は一切ない。移動によって抉れた地面や大穴の類が何も無い。…かに思えた

「何だこれ…?」

少し進んだ先にある小さな公園。一部の遊具が奇妙な壊れしていた。ヒュージによって破壊された…というよりも遊具の一部分が地面に沈んでいるのだ

「遊具だけじゃない…花壇も崩れてる」

小さな花壇も崩れてしまっている。その崩れ方も上から強い力をかけられた、というよりも下から崩れたと言う風に。その証拠として花壇の土や上部にヒュージの足跡の類が一切ない

「もしかして・!?!」

付近をくまなく調査。不自然な壊れ方をした塀、膝位の高さしか無い電柱、不自然に地面にめり込んでいる車両などおかしな光景が次々と目に入ってくる。

そしてそこから離れた場所からはヒュージの足跡や破壊した痕跡が次々と見つかるのだ

「(ヒュージが出てきたのはここだ・)」

公園やその近隣がヒュージが最初に出現した場所で、今回はここから各地に散らばり襲撃を仕掛けたとみて間違いないだろう

その際、地下から何らかの方法で現れた。だから不自然な沈み方や崩れ方をしたという予想も出来る

だが分からない事はある

「(仮に地下から出てきたとして：何で大穴みたいなのが出来ず、私がこの場に平然と立っていられるの?)」

地下から現れたとして、その痕跡は必ず残るはず。大穴のような視覚的、物理的に分かりやすいものが何故無いのか

そして、もう一つ、そんなものが生み出されていたとして何故彼女はここに立っていられるのか

試しに地面を足で強く踏みつけてみてもその反動で足が痛くなるだけで崩れたりすることは無い

「(とりあえず帰って秋日さんに報告するか・)」

時間的にも今回はここまで

ガーデンに戻り、秋日への報告等を行わなければならない為ガーデンへと戻る。